

今の所、世界の命運は俺にかかっている

流石ユユシタ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

旧題。美人な魔装少女がエグい目に合う、最悪な世界に生まれていたり前世のラノベ知識で彼女達を救わないと、世界滅亡？

中学三年生の時、前世に記憶を取り戻し、『魔装少女』が『魔族』と戦う『魔装少女』シリーズ『トファイブ』の世界に転生していた。『モブ』黒田十六夜。

『魔装少女』の英雄譚の様な物語なのだが『魔装少女』がエグい目に遭い、さらに世界滅亡と言う『ifストーリー』が存在している。そして、彼が転生した世界は最悪の『ifストーリー』の世界で……？
——これは彼女達の救済するべくひた走る主人公の英雄譚??

カクコム <https://kakyomu.jp/works/1177354054898450665>

小説家になろう<https://ncode.syosetu.com/n6157gh/>

目次

銀白の少女

一話	ラノベの世界	1
二話	入学式	7
三話	最悪の入り口	12
四話	とある少女の過去	18
五話	激辛	24
六話	最悪の出来た訳	34
七話	早起き	41
八話	病院	49
九話	バスケ	55
十話	守護	61
十一話	恋!	70
十二話	恋!?	75
紅蓮の少女		
十三話	オタク	80
十四話	本心?	87
十五話	こ、恋!?	96
十六話	恋進!!	106
十七話	空想	116
十八話	会議	124
十九話	怨念	131
二十話	厨二	138
二十一話	逃亡	144
二十二話	解決	151

二十三話 オーバーレイ

二十四話 強引!!

二十五話 粹

二十六話 難聴

紅白の体育祭

二十七話 修羅場

二十八話 嵐の前

二十九話 胃痛

三十話 アジフライ

三十一話 アジフライ!!!

三十二話 占い師

三十三話 お弁当

三十四話 稲妻

三十五話 終幕

稲妻の少女

三十六話 過去

三十七話 最悪

三十八話 集結!!

三十九話 善人おっさん

四十話 新生

四十一話 蜂

四十二話 三対一

四十三話 繋がり

四十四話 お泊まり

四十五話 お泊まり2

158

167

180

190

199

207

215

223

232

242

250

258

269

278

285

293

304

312

321

331

341

352

358

四十六話 深夜

375

四十七話 最速

383

大海の少女

四十八話 海原町

397

四十九話 伝承

406

五十話 伝承2

415

五十一話 遭遇

424

五十二話 観光

433

五十三話 観光2

449

五十四話 最恐

462

五十五話 その後

472

五十六話 閉幕1

491

五十七話 閉幕2

502

魔装一步前

五十八話 両親

513

五十九話 親

523

六十話 ゆっくり

532

六十一話 女子力向上委員会

537

六十二話 猫生活

545

六十三話 もう一人

556

六十四話 夏前

563

六十五話 欲望の盃

570

魔装降臨

六十六話 プロローグ

582

六十七話 あと少し

588

六十八話	メル	599
六十九話	掟破り	606
七十話	説明	616
七十一話	新生	625
七十二話	スタート	630
七十三話	七不思議探検隊	640
七十四話	side?	647
パラレル時空ラブコメ編		
銀ノ章1		653
銀ノ章2		662
銀ノ章3		668
紅蓮革命編		
七十五話	予兆	676
七十六話	ナデポ	683
七十七話	私と彼の距離	693
七十八話	答え合わせ	706
七十九話	タブー	712
八十話	壁	721
八十一話	ヤンデレ、数歩手前	735
八十二話	人生ゲーム	748
異世界編		
八十三話	走者	758
ダブルヒロイン編		
八十四話	銀と赤	764
八十五話	二人はチヨロインではない	774

八十六話	デート	788
八十七話	お熱ボンボン	800
八十八話	中学時代あるある	810
八十九話	元ゲーマー	820
九十話	転校生	828
九十一話	マグロ対アジフライ兼キスの天ぷら	841
九十二話	マグロ対アジフライ兼キスの天ぷら	851
九十三話	マグロ対アジフライ兼キスの天ぷら	864
九十四話	マグロ対アジフライ兼キスの天ぷら	878
	後編	
大海の自覚編		
九十五話	元ボツチ	888
九十六話	美女は幼女になっても可愛い	896
九十七話	ライフはゼロよ	906
九十八話	焼肉は悪い文明	912
九十九話	卵は何個あってもいい	922
百話	それが運命	936
百一話	ヒロインは突然に	945
百二話	あざとい対天然	955
百三話	開幕	963
百四話	え？　そこで言う？	970

稲妻の想い

百五話	三つ巴	978
百六話	それぞれの変化	993
百七話	サンタさんは居るって言うけど其れは心の中に限る	1005

百八話 眠れない夜

百九話 ともだち

百十話 幸せ

百十一話 天使が来る

百十二話 癒し

異世界旅行編

百十三話 再び異世界へ

百十四話 冬だけど水着

百十五話 火蓮ちゃんやらかす

百十六話 ヤンデレ

百十七話 十六夜君消失

百十八話 正解か不正解か

百十九話 黒い彼女

クロの銀編

百二十話 ハーレム

百二十一話 ハーレムになっても

終幕編

百二十二話 とある作者との邂逅

百二十三話 君が居ない未来

百二十四話 三十路

百二十五話 今と未来

1182117111611153

11421129

1122111511051092108010731063

10521042103510241015

銀白の少女

一話 ラノベの世界

問い、美少女たちがエグい目に合うのを知っていたら君はどうする？

見過ごす？ 見て見ぬふりをする？

それも正しい判断かもしれない。自身が危険な目に合うかもしれないなら、スルーするのも一つの手だろう。だが、それによって世界が滅んでしまうなら？ 話は変わってくる。何としても救わないといけない。そう思わないだろうか？

俺はそう思う。世界が滅びたら俺も死ぬ。そして、家族や友達も……

そうなたら大変どころではない。

だからこそ、決めたのだ。美少女であり、『魔装少女』たちを何としても救うと……



俺の名前は、黒田十六夜。ごく普通の高校生のはずだった。

中学三年生の時に、何日も高熱を出し治った時に前世の記憶がよみがえった。

最初は、混乱も少しあったが前世とほぼ同じ世界観。現代日本に近いのですぐに適応し、普通に生活していた。しかし、ある時新聞を見ていると『七色町』という言葉を目にする。この町の名前には、聞き覚えしかなかった。前世であった大人気ライトノベルに存在した町だった。その後その街について色々調べ、ほぼ同じ設定であることに気づく。

俺は焦った。このラノベの世界は、

『魔装少女〜シークレットファイブ〜』

といつて魔装少女達が活躍し世界を救うという王道的な物語だった。

これだけなら焦る必要はないが問題はこの物語は世界滅亡を前提とした

ifストーリーが存在するのだ。

このストーリーはとにかく酷い。先ずこのストーリーはifとしてスピンオフ作品として発売されたものだった。

魔装少女達のあり得たかもしれない物語。キャッチコピーはこんな感じだ。俺も気になり読んでみたのだが、胸糞が悪い話のてんこ盛りだった。

少女たちが殺され、男に弄ばれ、自我が崩壊、自殺。その他もろもろ。

そんな話だった。これには、ファンも激怒。作者に非難殺到。

ネット炎上まで事態は大きくなった。

しかも、酷い目に遭った後世界を守る者がいなくなり世界も滅亡という最悪以外の何物でもないのだ。本来のストーリーもifストーリーも『魔族』と呼ばれる侵略者が現れる。バッドエンドのほうでは既に彼女達は死んでしまっているので守護できるものも居ずに世界滅亡。どちらの世界もほぼ全く同じ設定であるが、『魔族』が侵略を始めるまでのストーリーだけが違う。

もしかしたら純粋なストーリーの世界線という希望もあつたのだが、もし違う場合どうなるのだろうか。

そう考え始めたら、動かないわけには行かない。ただの凡人に何が出来るのかという不安と自身の身に何か起こるかもしれないという恐怖や不安でメンタルがズタボロである。

幸いだったのが、主人公と学年が一緒と言う事だろうか。自身が持っている知識と年齢を比較して割り出すことが出来た。多少は動きやすい気もする。

ストーリーもifストーリーも始まるのは、彼女達が魔装少女になる前であり力も何も持っていないただの女子高生の時。入学してから始まり本来の『ストーリー』なら大したイベントもなく『魔装少女』へと至る。だが、『ifストーリー』の場合は違う。入学式から、立て続けに最悪の事態が起き全員が死亡する。そのまま、世界滅亡。

もしifストーリーの場合、最悪の部分を俺は回避すればいい。本来の世界とほぼ同じ世界のため、そうすれば元の『ストーリー』の世界になりハッピーエンド。『魔族』が攻めてくる時に至るまでのイベントだけが二つのストーリーの相違点である。

世界と、彼女たちの運命を何とかして変えないといけない。そう思い俺は、この『皆ノ色高校』に足を踏み入れる。もしかしたら、世界の命運は俺にかかっているかもしれない。

——桜、綺麗だな。

俺はそんな事を考えていた。世界の未来何て大層な物が掛かっているかもしれないという事に対して現実逃避をしたのかもしれない。

入学式と言う事もあり、桜が咲き乱れ綺麗な花弁も舞っている。

制服は赤を基調とした物だ。二度目の人生面白おかしく、楽しく充実していて、何処か気楽な学園生活を送りたい所なのだが、この世界の安全を確保するまでそれは無理だろう。

頼むから世界滅亡ストーリーの方ではありませんように。ただひたすらに祈りつつ校舎内を歩く。大きな外観で清潔感もあり、設備も整っているいい学校だ。まあ、知っていたのだが。

取りあえず、一年の教室に向かう。誰もかれもが希望に満ちた顔をしていた。俺はそんな顔とは正反対だろうな。鏡を見なくてもすぐに分かってしまった。校内に入り新品の上履きに履き替え、廊下を歩み自身のクラスを見つける。

『1年Aクラス』

教室のドアを開けると、中には既に何人もの生徒が楽しそうに話していた。教室の席の数と、今教室内の人数を比べると、俺はどうやらかなり遅めの到着らしい。しかし、そんなことはどうでもいい。俺は教室内を観察するうちに、人だかりの中にとある少女を見つける

——居た。主人公。

腰位まである銀髪、宝石のような青い目。顔面偏差値が余裕の満点。この世界の主人公であり、世界の希望。

“ 銀堂コハク ”

既に彼女の周りには沢山の人っていて、入学初日にもかかわらず親しみが凄いい感じられる。

「可愛い」

「女神だ」

「このクラスになれて、俺幸せだ」

俺は自身の席に着く。周りの男子たちが目をハートにしていた。気持ちは凄いい分かる、確かにかわいい。それでいて上品。男子の憧れを、ぶち込んだ完璧な女性とも言えるだろう。

俺が座ると、席の前に居た男子生徒が俺に話しかけてくる。

「なあ」

「どうした？」

俺は返事をしながら、男子生徒の顔を見る。あちらは俺を誰かは知らないだろうが俺は彼を知っている。

「特に用はないけど、これから席も近いわけだし挨拶しておこうと思っつてな。」

佐々本太郎よろしくな」

「俺は黒田十六夜。よろしくな」

見た目は普通の男子高校生と言った感じの青年。

“ 佐々本太郎 ”

別名エロ本博士。エロ本を常に持ち歩き、所有数は四桁に届くとも言われる。普通に考えれば引くが意外と人気投票でも上位であるのだ。

「俺たちこのクラスで、幸せだよな？」

「いきなりだな。否定はしないけど……」

佐々本はコハクを見ながら鼻を下を伸ばしていた。俺もつられて再び、銀堂コハクを見るが少し頬が熱くなる。確かにかわいい。何度見てもかわいい

「あの子可愛いよな。彼氏とか居るかな？」

「どうだろうな。ただ彼女が彼氏を作るとしたら、とんでもないイケメンじゃないとな」

「俺やお前じゃ厳しいな」

——こいつ、ぶっ飛ばしていいだろうか？

物語キャラだろうが関係ない。ほぼ初対面で失礼な事を言う彼をぶっ飛ばしたい。

確かに俺はイケメンではないがここまでドストレートに言われるとメンタルにダメージが来る。

「そうだな」

机の下で左手で右手の疼きを抑える。俺は器がそこまで大きくない。器から怒りの水が零れそう。

「あーあ。何で俺達はフツメンなんだろうな」

「さあな」

『達』は余計だな。そう言えば原作でもかなり馴れ馴れしく、思ったことを言うタイプだったな。

そんな事を考えていると教室の前のドアが開き教師が入ってきた。筋肉質の少し強面の教師。

“ 六道哲郎 ”

見た目通りただの教師ではない。彼の兄弟がこの町にある『血列団』と言うとんでもなく大きなヤクザの頭領であるのだ。

「お前たち席に着け」

中々強面の六道哲郎が言うのと、皆ビビりながら素早く席に戻る。それを確認すると彼は話の続きを始める

「今日から、お前たちの担任となる六道哲郎だ。よろしく頼む。早速だが、今から今日の入学式の説明を行う。しっかり聞いておくように」

その後、淡々と入学式についての説明を受け俺達Aクラスは、入学式が行われる体育館へと向って行く。この学校は各学年CからAクラスまでの3つで構成されている。全校生徒約300人ほどの高校だ。

物語では5人の魔装少女がおり、現段階で魔装少女になる可能性を秘めているのはこの高校に三人。残りの二人は、現在はいない。

酷い目に合うのは、この高校に居る三人だ。

一年 “ 銀堂コハク ”

二年 “ 火原火蓮 ”

二年 “ 黄川萌黄 ”

残りの二人については i f ストーリーが発売しなかった。炎上などの問題などもあったからだろうが……。

取りあえず注意を払うべきは、この三人。特に一番初めに酷くエグい目に合う。

銀堂コハク。彼女が酷い目に合わなければ、普通の原作と言う事でハッピーエンド。そのまま俺は傍観に徹することが出来る。

しかし、違うならばどうなるのか思い出したくもない……まあ、今考えても仕方ない。

取りあえず今は入学式に集中しよう。

二話 入学式

今俺達新一年生は、入学式を行っている。並べられたパイプ椅子に座り黙って校長先生の話を聞き流しながら。話が長すぎて誰一人真面目に聞く者はいないのでと錯覚するほどだ。周りには寝ている生徒もチラホラ。隣の佐々本は女子生徒を見てニヤニヤしていた。

彼は物語のラノベでもこういう奇抜な行動が目立っていたのを思い出す。俺も気持ちはわかるのだが……ガン見する勇氣はない。

しばらくして、ようやく校長先生の話が終わった。生徒達がやっと終わったと僅かに嬉しそうだ。校長先生が去るときなんて皆拍手が超適當。

「ようやく終わったよ」

「時計の針一周するかと思った」

「こんなに長いのかよ。入る高校間違えたかも」

コソコソと校長先生の悪口のな事を言っている一年生数人。いきなり初日から嫌われる校長先生が少し可哀想だ。

「続きまして、新入生総代。一年Aクラス銀堂コハク」

「はい」

可愛らしい声が響いた。彼女は呼ばれると立ち上がり、壇上に上がって行く。新入生、在校生共に彼女に見惚れてしまった。それほど美しいのだ、彼女は。

彼女は壇上に上がり、マイクに口を近づけ言葉を話し始めた。

「暖かな春の日差しが……」

彼女の声を聴きながら他の生徒、特に男子は鼻の下を伸ばす。

「何だあの子は?」

「この高校にして正解だった」

「っていうか乳デカくね?」

どうやら校長先生の話のヘイトはこれでチャラになったようだ。ひそひそ声で彼女には聞こえないが身体の事を言うのはどうなのだ

ろう。確かに……大きいが。

「なあなあ、コハクちゃん。マジで可愛くね？ 乳もデカいし」

隣の佐々本が俺に小声で話してきた。

「確かにそう思うけど、先生に目をつけられないか？」

「大丈夫だって。皆話してるし」

確かに周りには、そういう生徒が多い。先生にも一部見惚れてる奴も居る。

——おい、教師としてどうなんだよ！ それは何？

「何食べんでんだろ。高校一年だろあれで？」

「確かに年齢以上の魅力を感じるな」

「これから、彼女の争奪戦が始まるんだろうな」

そう言えば、物語では彼女は総勢100人に告白されたと記述されていたな。ちよつと、そこまで行くのは無いな。って昔読んでいた時は思ったが実際見ると納得する。

彼女の挨拶が終わる。一礼をしてその場から離れると、拍手がとんでもなく鳴り響いた。感動した演劇を見たくらい拍手が響く。口笛を吹く生徒多数。校長先生が可哀想に思えなくもない。



銀堂コハクのあいさつで式は大体終わりだったので新入生は会場を退場し教室に戻って行った。

帰りの生徒達の話は彼女の事ばかりで全員が彼女の顔と名前と、スタイルを覚えてただろう。

教室に戻り席に着く。

さて、俺のやるべきことを一旦整理しよう。まずは銀堂コハクの監視、とまでは行かないが注意を払う事。

もし、『ifストーリー』の場合、世界が滅亡、彼女達がエグい目に合うのを避けなければならぬ。

最初は銀堂コハクが被害にあうので、まずは彼女と話せるくらいに

は……なっっておきたいが、囲まれすぎだ。

たまたまお忍びで来ていたマスク被った芸能人の正体が分かった位群がってる。男女問わずだ。

「コハクちゃん、連絡先交換しよう」

「いいですね。是非お願いします」

「今彼氏っているの？」

「私は今はいませんね」

言葉遣いも丁寧で愛想もよくお嬢様のような気品を兼ね備えている彼女は、すぐに人気者になる。

このことは知っていた。

既に全員、彼女に好意や好感を抱いているだろう。同時に彼女からの印象も悪くないと思っっているだろう。あれだけの笑顔を向けてくれているのだから。だが、実際は彼女は何とも思っていない。

これは、彼女の過去が由来しているのだが、彼女はある出来事で他人と言う存在を一切信用しなくなってしまった。このトラウマと言うか、傷跡は魔装少女として戦う中で仲間との絆を実感していくうちに良くなるのだが現時点では彼女は他人を信用しない。

「熱烈な視線を注いでるな」

「深い意味は無いぞ」

佐々本が余計な事を言ってくるので思考が中断される。

「そうか？ 意味深な視線だと思っただけど？」

「お前と一緒にすんな」

もうこいつには遠慮しなくてもいいだろう。こいつも結構失礼な事を言うからな。あまり親しくはないが関係ない。

「急に対応が変わってないか？」

「当たり前だろ。ずけずけ来るお前に気を使うのは馬鹿らしいと思っただんだ」

「確かに、俺に気を使うのは馬鹿らしいかもなって、やかましい！ ほぼ初対面で失礼だな。お前」

「そっくりそのまま返してやるよ」

他愛もない会話をしているうちに、担任の六道哲郎が戻ってきてこれからの事を話す。勉強を頑張れ、部活をする者は文武両道を大事に、など。

教師としての素晴らしいアドバイスをしてくれるのだが、俺は聞き流していた。

理由は先ほど中断してしまった、思考の再開の為だ。

まず、コハクが少女たちのなかで最初に酷い目に遭う。手始めに不良に絡まれる。これくらいなら大丈夫なのだが、この不良が何度もコハクに絡む。最初は大丈夫なのだが、その内、仲間達で彼女を無理やりとらえて女性としての屈辱を与えるのだ。写真などで彼女の証拠を残し、屈辱の事を誰かに話せばこの写真をネットにばらすという脅し付きで。

最初この内容をラノベで読んだとき俺は違う本を買ってしまったのかと表紙を確認してしまった。

それくらい衝撃だったのだ。その後も、彼女は屈辱を何度も受け、その後ストーリーカーに遭いその人物にも屈辱を受けた後、ナイフで刺され殺されてしまうのだ。

刺された理由はストーリーカーの精神が常軌を逸していたということ描写されていたが、これ『魔装少女』？ 全然ファンタジーもクソもないな、と疑いしか残らなかった。

救いもない、絶望しかない最悪のストーリー。

だからこそ、炎上したのだが……。

取りあえずは、遠目で見守って行こう。胸糞悪くて世界滅亡何て嫌すぎる。

「と言うわけだ。これから高校生活を充実した物に出来るように各自、励むように。今日は初日なのでこれで終わりだ。明日からは、もっと長い一日になるぞ。しっかりと心の準備をしておけ。では解散」

六道哲郎の話が終わった。皆も帰る準備を始めているから俺も、準

備を始めた。

「じゃあな。十六夜」

「また、明日」

佐々本がすぐに帰って行った。本屋にでも行ったのだろう。

「コハクちゃん。一緒に帰らない？」

「ごめんなさい。この後用事があつて……」

「だったらしょうがないね」

「そういうわけだから、また明日ね」

女子生徒からの誘いを断り彼女は帰って行ってしまった。予定を理由につけたが、確か彼女に予定なんてなかったはずだ。と言うか、ない。彼女は直ぐに教室を出て帰って行く。俺は荷物を纏め彼女を追うように教室を出た。

もし、ここが最悪な世界線だとすると今日が不良に絡まれる日だ。入学初日に絡まれる、そこからドンドンエスカレートしていく話だった。

もし、普通の『ストーリー』世界線なら何事もなく彼女は、帰宅するだろう。そうであつてほしいと願う。

しかし、不良に絡まれた瞬間にこの世界は……最悪な方の世界であることになる。頼む普通であつてくれと、願いながら俺は彼女の後を追う。

三話 最悪の入り口

今俺は、この世界の『主人公』銀堂コハクを尾行している。この状況は俺がストーリーカーをしているように見えるかもしれないが気にしない。

世界の命運がかかっているんだ。そんなことは気にすることではない。

例え近所の子供たちに指を差されその子の母親が見て見ぬ振りしなさいと言つていようと、止めるわけには行かない。

それにしても、彼女はホントに美人なんだな。すれ違う人みんな振り返っている。

まあ、そんなことは置いておこう。今は気にすることではない。このまま彼女が帰宅してくれるまで、何事もない事をただ祈った。

約十分後、問題なし。このままいけば彼女は不良に絡まれず家に帰宅する。

そうすれば、この世界の未来は安泰。俺も危ない目に遭わず、余計な事を考える必要なく高校生ライフをエンジョイできる。

「ねえくちゃん。可愛いね。」

「その制服皆ノ色高校でしょ？ これから俺たちと遊ばない？」

——ああ、世界は破滅を望むのか。

俺は、ただ目の前の事実から目を背けたかった。間違ひなく最悪のストーリーの入り口である。不良の二人組が銀堂コハクに絡んでいった。

「申し訳ありません。この後用事がありますので」

銀堂コハクは用事があると笑顔で告げるとそのまま通り過ぎようとした。しかし、不良は彼女の腕をつかむ。

「そんなこと言わないでよ」

「そうそう、用事なんてほっとこうよ」

「離してください。用事があると言ってるではありませんか！」

不良二人組は見た目通り乱暴で強引な男の様だ。

ここは、確か彼女は上手く切り抜けるのだが流石に見て見ぬふりは出来ない。

それに、もしかしたらイレギュラーで、もしかしたらこのまま彼女は連れていかれるかもしれない。

……正直怖い。危ない事は好きではないし、記憶を取り戻してから鍛えてみたがさほど強いわけでもない。

でも、行かないと。何かを変えないと。よし。……行くぞ！

「ま、まてー」

少し声が上がってしまいが不良に向って行く。三人がこちらを見た。不良は目つきを鋭くしてにらみ、銀堂コハクは僅かな驚きを含んでいるようだった。

「何だ？ お前？」

「彼女のクラスメイト……です」

カッコよく行くつもりだったが少し失敗してしまった。

「その人は、これから大事な用事があるので手を離してください。じゃないと、警察呼ぶぞ……です」

「警察なんて怖くねえぞ」

「来る前に、お前ぶつ殺せるしな」

野蛮な人たちだ。そう思わざるを得ない。警察怖くないって、頭もイカレテいるらしい。

「……あつ！ 警察！」

俺は、不良たちの後ろを指さした。後ろには誰も居ないがそこそこの大きな音量で。

いくら怖くないと言っても実際に居たら多少動きにくいだろ。と
うか動けないはずだ。

警察が怖くないというのは、ハツタリだと俺は見破った。

しかし、不良も銀堂コハクですら誰も後ろを見なかった。

「そんな、古臭い手に引つかかるかよ」

「今時、そんなことやるやつがいたなんてな」

「……」

三者三様だが、かなり驚いているようだ。俺の作戦があほ過ぎて。俺はいったん切り替える。

「取りあえず、彼女から手を離してください」

「悪いが彼女はこれから、俺達と遊ぶんだよ」

「そう、そうぶあぁー！」

——不良の片方の頬に、彼女の正拳がめり込んだ。

殴られ不良は思わず手を離す。そのまま彼女は、逃げ出した。

「貴方も逃げるんですよ」

彼女は俺の手を取って、走り出した。……何か立場が逆の様な気が。

「つち！ 追うぞー！」

「クソが、舐めやがってー！」

不良は彼女と俺の方に向かって走ってくる。しかし、彼女と俺の足はそこそこ速いので何とかまくことが出来た。

「助かりました。ありがとうございます」

「俺何にもしてないですよ」

結局彼女が殆ど全部やったというくらいの結末だ。俺のしたこと
は、あつ！警察！くらいだ。

「いえ、本当に助かりました。ええくと貴方は同じクラスの方ですよ
ね？」

「はい、黒田十六夜と言います」

「私は銀堂コハクと言います。これからよろしく願いますね。十
六夜君」

彼女は手を差し出した。これは握手を求めているのだろう。折角
だからしておこう。俺は彼女の手を握った。

「こちらこそ、よろしく願います」

彼女の手は何か柔らかい。何だドキドキする。先ほども手をつな
いだが意識してなかったのであまり感想がなかったが、今は変な感想
しか出てこない。

手を離した後、彼女は俺に聞いた。

「十六夜君。一つ聞いて良いですか？」

「はい。何ですか？」

「貴方は、何故私を助けようとしたのですか？　もしかしたら貴方が傷ついたりあの不良に目を付けられる事になるかも知れなかったのですよ？」

この質問は複雑な質問だな。普通の質問にも聞こえるが……。彼女だから気になってしまっ、聞いてしまっても言えるだろう。

「……クラスメイトが、不良に絡まれたら何とかしないといけないと思いました」

この答えは嘘ではない。世界の為と言う理由がほとんどだが、

この答えも僅かに含んでいる。様な気がする……かな？

「……そうですか。素晴らしいですね」

「ありがとうございます」

笑顔で褒めてくれた。しかし、その後、彼女から笑顔が消えた。

——でも、あんまり他者に入れ込み過ぎると自分が不幸になりますよ。

ポツリと彼女から、発せられた一言。その時の彼女の表情は冷たくて悲しそうだった。俺と彼女の場の雰囲気は凍り付いたようにも感じた。

しかし、すぐに彼女は笑顔に戻った。それと同時に二人の場が平穏に戻った気がした。

「それでは、私は予定がありますから。失礼しますね」

「送って行きます」

「大丈夫ですよ」

「いえ、念のため」

此処だけは譲れない。あの不良がまた来るかもしれない。ストーリーではそんな描写は無かったが、こちら辺にまだ居る。僅かなイレギュラーもあるかもしれない。

もしあつたら、俺の責任かもしれないのだが……。

俺が変に動いたせいでいきなりバッドエンドの可能性もありうる。

ここは俺が彼女のボディガード兼、もしもの時の身代わり人形として行かなくてはな。

「いえ、本当に大丈夫ですよ」

「念のためです。お願いします」

俺は頭を下げた。彼女を何としても守りたいからだ。例えばどんな感情を抱かれようと。

「変わってますね。十六夜君は」

「普通ですよ。」

銀堂コハクの後ろを俺は着いて行った。男女二人が一緒に歩くと大抵は特別な関係とも思われるかもしれないが、そんなことを気にする余裕は俺にはない。

彼女の隣を歩きながら、常に東西南北、前後左右、を見渡しながら彼女を送った。

子供に指を差されたりしたが気にする余裕はなかった。



変な男の人だ。そう私は思った。

いきなり不良に絡まれた私を助けるくらいなのだから、喧嘩自慢なのかと思ったらそうでもない。むしろ不得意という印象を受けた。

足も少し震えてたし、声も上ずっていた。

意味が分からない。

怖いなら出てこなければいい。見て見ぬふりをすればいい。

なのにどうして出てきた？なぜ、恐怖と向かいあった？

その後も変だった。私を家まで送ると言った後、最初は私と仲良くなりたいたのかなと思っただが彼は常に周囲を気にしていた。

あの不良がいつ来てもいいように備えていた。その結果、会話なんてほとんどない。

本当に私を守る為だけに付いてきた。

ああいう事をされると思い出したくない事を思い出す。

誰かの為に勇気を出して行動したのに裏切られた馬鹿を。

変な正義感で一人になった馬鹿の事を。

——私は彼を見て、どうしても思い出したくない事を思い出してしまっ
た

四話 とある少女の過去

昨日は特に何事もなく彼女は帰宅することが出来た。送った後は直ぐに別れ俺も帰宅した。

現在は授業中だ。カリカリと板書をする音が響く。眠そうにして
いる生徒や寝てしまっている生徒もいる。

「え〜こゝは」

教師は授業を説明していく。その途中で、キーンコーンコーン

授業終了の合図が鳴る。

「今日はこゝまで、復習をしとくように」

教師が教室を出て行くと一気に開放感が広がる。この後は昼休み
なので浮足立っていた。

「十六夜。昼どうするんだ？」

「学食に、行こうと思ってる」

「俺も行っ方がいいか？」

「いいぞ」

佐々本と一緒に教室を出て行く。学食は物語でも描写があつたの
を覚えている。

カレーが絶品で美味しそうに食べるキャラたちが描かれていた。

食堂に着くと既に生徒達が多く見受けられた。俺たちは食券を買
い受付に提出した。

「この学校美人多いな！」

「声が大きいぞ」

少し視線が集まる、俺は気まずいので視線を逸らした。カレーを貰
うと、佐々本と席を探す。彼もカレーを頼んでいた。席はチラホラと
空いているので適当に席に着く。

「頂きます」

「いただきます」

カレーを二人して、食べ続ける。

……美味しい。星三つくらいの美味しさ。

物語で美味しそうに食べていたので気になっていたが、ここまでとは。

折角幸せな気持ちで食べているのに佐々本が水を差す。

「なあ、あそこにいる人超可愛くね？」

「カレー食えよ」

そう言いつつも、超が付くと気になってしまふ。後ろを指していたので振り返る。

目を向けた場所に居たのは、炎のような少女だった。

——火原火蓮、か

この世界の運命を背負った、魔装少女の一人。紅蓮のような長髪をツインテールにしている。瞳も綺麗な紅い色。確かに、超が付くほどの美人という名が似合う。

「お！ お前も見惚れたか」

「見惚れたって訳じゃないけど」

「嘘つくなよ！ あんなに見てたのに！」

かなりの大声で言うので、再び視線が集まる。

「おい、声がデカイ」

「そうか？」

多分周りにはガツツリ聞こえていたであろう。二回も大声で変な事を発したのでいきなり変なイメージが絶対ついたと確信した。二人で話していると、バンッと誰かが机に手を置いた。かなり大きめの音なのでびっくりして、手の主を見る。

綺麗な黄金とも呼べる、シヨートヘアと瞳。顔立ちもとんでもなく整っている。

そして、身長が凄く高い。180センチ近くあるだろう。

彼女はただ不快そうにこちらを見ていた。ごみを見るような目で……。

「ねえ、さつきからうるさいんだけど」

「あ、ええーと」

「……」

佐々本は彼女に言われたことにびっくりしているようで上手く言

葉が出てこない。

俺はうるさくしてないので黙って知らないふりをした。彼女は、火蓮同様、超が付くほどの美人だ。

それもそのはず、彼女も魔装少女の一人。

“黄川萌黄”

彼女は、男嫌い女好きという性格。理由は、過去に色々あるのだが……。

彼女は、佐々本がうるさいと言うだけでなく、不快な男が馬鹿みたいに大好きな女の子の容姿だけを語っていることに苛立ちを覚えたのだろう。

「皆、君たちのせいで不快になってるんだよ。まわりの迷惑を考えたら？」

たち？俺も入っているのか？

とんだとぼっちりだな。それにしても、美人が怒るとこんなに怖いんだな。

迫力がとんでもない……。

「すいません」

佐々本が項垂れながら、謝罪を口にする。佐々本が謝罪すると、黄川萌黄は今度は俺単体を睨みつける。

「君は？」

「すいませんでした……」

「気を付けてね。ほんつとうに、不快しかないから」

顔を不快に染めたまま、彼女はその場を去って行った。彼女の友達と思われる女子生徒の元に戻り、俺たちの事を愚痴っているように見える。佐々本と俺はカレーを食べた後、黙って食堂を逃げるように出て行った。

超が付くほどの美人である、黄川萌黄にあそこまで言われた佐々本はそこから大分元気がなかった。

授業も心ここにあらずと言った感じだった。まあ、どうでもいいの

だが。



放課後になると銀堂コハクは真つ先に用事を理由に帰って行く。俺は急いで彼女を追う。

佐々本は落ち込んだままだが、明日には元に戻るだろう。

『ifストーリー』二日目。彼女は昨日とは違う道で帰っている。これなら普通は大丈夫と思うかもしれないが、実は不良どもは彼女の家を既に把握しているため自宅近辺で待ち伏せているのだ。

ここからエグイ話になって行く。先ずは不良二人組に無理やり路地裏に連れていかれ屈辱を受ける。心身に多大な影響を受けた彼女は、誰にもこんなことは話せない。

その次の日の朝。噂を聞いた不良仲間達十人ほどにも、集団でエグイ目に合う。

ここから、ドンドン人数が増えたり写真にとられたりするが、彼女は誰にも相談しない。

親には、迷惑をかけられない、という理由。年頃であるという理由もあるだろう。

なら、学校の友達、教師には？　と思うが……教師にこんなことを相談はしにくい。

そして学校の友達には彼女は絶対に相談しない。

——友達という存在を彼女は信用しない。

その理由は、彼女の中学二年生にある経験だ。彼女には、中学の時ある親友がいた。

仲が良く、毎日話したり、一緒に登下校したり、絆を深めていた。

だが、ある時転機が訪れる。

彼女の親友がいじめられていたのだ。同学年のスクールカースト
トップに。

彼女はそれを知り、立ち向かった。誰かの為に、自分の為ではなく。
勇気を振り絞って、恐怖にぶつかって行つた……。

それによりいじめはなくなった。ゼロになったのだ。

だが、今度は彼女が標的になった。前から気に食わないのも理由に
合つたのだが、

生意気な銀堂コハクに、非難が集まる。スクールカーストトップ達
が徹底的に

彼女に嫌がらせを始めた。

必然的に周りも、いじめつ子たちの味方をする。彼女を庇つたら今
度は……。

その風潮が広がり、誰も彼女を庇わない。いじめはエスカレート
し、根も葉もない噂もたつ。

彼女は、男好きで誰でも簡単に股を開く、援交をしているなど。

彼女は苦しくて、親友に救いの手を伸ばした。

助けてほしい、と。

だが、手は握られなかった。苛めつ子達は彼女の親友も取り込ん
だ。

彼女の味方は誰一人いなくなった。助けたのに、手を取ってもらえ
なかった。

あの時、私は勇気を出したのに親友を助けたのに。
見返りが欲しかったわけじゃない。

でも、親友ではなかったのか？

なんで一緒になつて私をいじめるのか？

その葛藤の末、彼女はある考えに至る。

親友なんて、友達なんてあてにならない。信用できない。

自分が不利な時だけ都合よく、助けを求める信用できない存在。私
が、馬鹿だった。

変な正義感を出すべきではなかった。

誰かの為に行動すると自分が傷つく。あの時は、無意味な事をした。

もうあんなことはしない。打算で生きていこう。

私は友達なんて、親友なんて二度と信用しない。

その心境のままいじめをきっかけに彼女は転校した。転校先の中学ではいじめはなかったが、大きな傷のせいで彼女は心の扉を閉ざしてしまい、あくまで外面だけで行動するようになった。

笑顔を振りまくが誰にも心は許さない。

このことが解決するのは、大分先。

彼女を取り巻く現状と過去が最悪エンドに向かってしまう。

誰かに助けを求めない、求められない。

彼女の悲しい結末。

俺は何とかしてこの物語を変えないといけない。その為には……。

俺は作戦を考えた。

五話 激辛

俺は銀堂コハクと一緒に帰ることにした。少し緊張するが彼女と一緒に帰るのが一番だろう。

「銀堂さん」

俺が話しかけると帰宅途中だった彼女はこちらに振り返る。

「何か御用ですか？」

「いや、その、一緒に帰らない？」

凄く恥ずかしい。こんなこと言ったことがない。

というか一緒に帰ろうなんて、俺が銀堂コハクを狙っているみたいじゃないか？

「……用事があるのでまたの機会に、」

そう言うのと彼女は帰って行く。そうか用事があるなら仕方ないって……。

ならないな。俺は用事なんてない事を知ってるし、このままほっとけないし。

「途中まででいいですから！」

少し強めにいうと彼女は一步引いた。その後僅かに考える素振りをして……。

「私は、家に帰った後すぐに用事で出かけないといけないので、大分早歩きになりますが、それでもよければ……」

「是非！」

何とか着いて行く許可を貰い、彼女の隣を歩く。完全に勘違いされているだろう。

俺が彼女に気があると。確かにかわいいし、スタイルもいい最高の女性だが手は出せないな。

流石に、うん。

彼女は少し早歩きで帰って行く。俺も合わせながら周囲を警戒する。右を見た後、後ろを見る。確かここでは絡まれないが、念のためだ。

「あの、十六夜君」

「はい？」

「昨日も思ったのですが、周りから凄いい見られてますが、恥ずかしくな
いんですか？」

「恥ずかしくないとさえ言えましょうになりますけど、今はそれより大事な
ことがありますから」

「そうですか」

かなり奇抜な行動で、彼女からすれば一緒に居ること自体恥ずかし
いだろうが、ここは耐えてもらうしかない。その後、急に後ろを向い
たりしながら帰って行く。

『if ストーリー』では、不良に会わない為に、道を変えたことで彼
女は酷い目に遭うのでここは敢えて、いつも通りの道で行くことにし
よう。しばらく歩くと分かれ道がある。昨日は彼女は左に行ったが
今日は右に行こうとする。

「銀堂さん。こちらの道で帰りましょう」

「どうしてですか？」

「えーと、ですね。最近こっちの道は不良が多いらしいんですよ」

「そうですか。では、そうしましょう」

昨日の事がまだ頭にあるようなので、あっさりと承諾してくれた。

これで今日は安心だ。っと思っていたのだが。

「昨日の、可愛いこじやん」

「借りはしっかり、返させてもらうからな」

まさかの“イレギュラー”

本来はこちらの道にいないはずなのにまさかの不良がこちらに居
た。俺のせいかな？俺が余計な事をしたからか？しかし、反省は後
ですればいい。先ずは何とかして切り抜けないと。不良たちは、指を
ほきほきと鳴らしている。

——超怖い

不良はやっぱり怖い。逃げよう。しかし、後ろにも。

「おー！ そいつが噂のかわいい子ちゃんか」

後ろにさらに一人、囲まれてしまった。もしかして、つけられてた
のか？

「ここのも、本来と違う。この場面は二人のはずなのに、三人。」

「そうだよ。良い女だろ?」

「スタイルも良いし、最高じゃん」

「佐々本のようなキャラだが実際は彼より数段下種の男だ。銀堂コハクも少し怖がっている。」

不良三人に囲まれたら、怖いに決まっている。

「先ずは、邪魔な男を蹴散らすか」

「賛成!」

三人がこちらに迫ってくる。このままでは、俺も彼女も酷い目に遭う。

仕方ない。

——あの手で行くか

俺は、制服の胸ポケットに手を伸ばす。

「……………」

何か、凄いものを出すのかと警戒する不良達。俺はゆっくりと片側の一人の不良の方に向かう。

「なんだよ」

「十六夜君?」

「大丈夫。こんなこともあるかと、準備はしてたんだ」

彼女の手を取って、ゆっくりと近づく。後ろにも気を配りつつ。一人の方に近づき、胸ポケットから手を出す。その手にはピストル、型の水鉄砲。

「……は?」

全員が意味不明そうに、声を発した。俺は気にせず、水を発射。一人の不良の顔に当たる。

「馬鹿か!」

「水鉄砲って、子供かよ」

二人はゲラゲラ笑っているが、

「あああああ!」

水が当たった不良は顔を抑えてうずくまる。その様子に不良二人はギョツとする。

「え、どうして?」

銀堂コハクも何が起こっているのか分からないようだ。ただの水鉄砲に入っている水に当たっただけなのに、何でこうなるのだろうか? 俺はすぐに彼女の手を取り走る。

何が起こったのか、分からないままの銀堂コハクを連れてその場を後にした。



「ああ、怖かった。マジで怖い」

逃げた後、思わず声を出してしまった。不良に水鉄砲を向けて立ち向かうなんて、世界探しても俺くらいだろう。

「十六夜君」

「どうしたのですか?」

「あの、どうしてただの水鉄砲が?」

彼女の疑問はもつともだろう。俺が持っているのは、ただの水鉄砲。

しかし、中身は

「この水鉄砲。中の水は、唐辛子とか色んな物をブレンドした喰らうと結構ヤバイ奴なんですよ」

「ええ!?! どうして、そんな物持ち歩いてるんですか!?!」

「不良に絡まれた時の奥の手として、持ち歩いてるんです」

『ifストーリー』の対策の一つ。

“ 激辛水入り水鉄砲。 ”

簡単に持ち歩いて、即効性と破壊力を併せ持つ物を模索した結果こうなった。因みに電動ガンも持ち歩いている。

「本当が変わってますね。そのおかげで助かったのでお礼を言いたいのですが……でも、このままだと貴方も目を付けられますよ?」

彼女は心配そうに言葉を発した。確かに完全に、俺も目をつけられたが。一応……大丈夫だろう。

「多分、ダイジョブですかね?」

「聞いているのはこっちなのですが」

「まあ大丈夫でしょう。取りあえず帰りましょう」

俺は彼女と一緒に、先ほどとは別ルートで帰る。再び、前後左右を警戒して。

「あの、やっぱり、それ恥ずかしいのですが」

「耐えてください」

念のため、あの不良が来るかもしれないから警戒しないと。俺が特別な力とかあればなんとかなるんだけどな……。

何とか再び無事、彼女の自宅に着く。彼女はマンションの十階に住んでいる。

だったはずだ。このマンションは凄く高い。三十階建てくらいだ。此処までくれば安心なので、マンションの前で俺は別れようとする。

「じゃあ、銀堂さん。また明日」

「……少し待ってください。」

「え？」

「お礼もしたいので、上がって行きませんか？」

「用事があるんじゃない？」

「先ほど私の携帯に連絡が来てキャンセルになりました」

元々予定など無かったのだろうが、よくこんなNaturalに嘘をつけるとは流石だ。普通は見抜けないだろう。

しかし、どうしよう。ここは行くべきか？

女の子、しかもこんな美人の部屋に入るのはモブの俺にはきつくないだろうか？

前世も彼女なんてできたことなかったし。

止めておこう。挙動不審になって気まづくなるのがおちだ。

「えーと、今日は、その……」

俺がやんわりと断ると彼女は少し上目遣いでこちらを見た。超かわいい顔が上目遣いを使うと可愛さの限界を超える。

「嫌、なんですか？」

「折角なので上がります！」

勢いでお邪魔することになった。

「くつろいでください。今お茶入れますから」

「は、はい……」

ピンク色が基本となつている部屋、いい匂いもして凄いドキドキする。陰キヤの俺には、大分キツイ。取りあえずソファアに座る。

彼女は紅茶を入れて持ってきてくれる。

「どうぞ、ロシアンティーです」

「ありがとうございます……」

ロシアンティーとか俺なんかとは無縁だな。いつもココアとか子供っぽいのしか飲まないし。

まあ、折角なので一口。お、意外とうまい。

「美味しいですね」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

彼女は笑顔で答えてくれた。やはり主人公と言う事もあり、素晴らしくかわいいな。何というかオーラが凄いというか、そんな感じ。彼女は俺の隣に座った。

「十六夜君。改めてありがとうございます」

「気にしないでください。勝手にやった事ですから」

彼女は笑顔でお礼を言ってくれるが、本心はどう思っているのだろうか？怪しい、等と思っているのかもしれない。

「十六夜君は、どうして助けるんですか？先ほども言いましたがあの不良達は貴方の顔を完全に覚えてしまったと思います。そうなればこれから酷い目に合うかもしれないんですよ？」

「まあ、何とかありますよ」

「……変な正義感を持つと、自身が傷つきますよ」

彼女は過去のトラウマを思い出してしまうのだろう。今の俺が過去の自分と重なるのかもしれない。

何かに向かって行く姿勢が。彼女と違い、俺はそんな大したことじゃない。銀堂コハクが酷い目に遭ってほしくないという気持ちも

なくはないが、世界の未来を一番に考えているしな。

「お気になさらず」

「……そうですか」

ロシアンティーを再び飲む。少し時間が経過し、俺と彼女の間は沈黙。なんか落ち着かない。

ロシアンティーを急いで飲み干した。

「そろそろ、帰ります」

まだ来てから五分くらいしかたっていないが、気まずいので早く帰りたい。

「まだ五分しかたってませんよ。もう少しゆっくりしてってください」

「あ、はい」

もう少ししたら帰ろう。

「十六夜君は、部活に入るつもりはありますか？」

「いえ、今のところは無いですね」

「お茶のおかわりありますよ」

「頂きます」

他愛もない話をして、気づけば十分が経過していた。……全然経過してない。

つまらなくはないが、気まずいから早く帰りたい。

「じゃあ、そろそろ」

俺は立ち上がり、帰るとアピールをする。さきほどから五分しかたっていないが帰ろう。

こんな美人と、一対一はキツイ。

「……そんなに、私と話すのはつまらないですか？」

「いや、そうじゃなくて、俺この後用事があった」

「……用事ですか」

「はい」

彼女と同じ用事があるから帰ります手段を使う。今まで時間なん

て気にする素振りもなく、散々一緒に行動して用事があるって白々しいにもほどあるが、彼女も用事なんて無いのにあるというのだから、別にいいだろう。

「まあ、それなら仕方ありませんね。本当にあればの話ですが」「ありますよ……そういうわけで」

俺はジト目で見られ少し複雑な気持ちになるが急いで帰ろうとする。彼女も嘘だと分かってはいるが、自分もしてるので追及はできないだろう。彼女も、見送る為に席を立つ。ジト目が凄い。

彼女は、俺を気にするあまり足がもつれてしまう。

「あっ」

彼女が転びそうになったので咄嗟に支える。本来なら支えられるのだが、俺もいきなりなので上手く支えられず彼女に押し倒される形になる。手に何やら柔らかい感触が、これはいったい？ 等と分からない俺ではない。

顔を真っ赤にした彼女がこちらを見ている。ラブコメのような展開だ。

「あ、あ、ああああ!!」

その後思いつきり、正拳を顔面に喰らった。

「あの、何かすいません」

俺は正座してソファアに座っている銀堂コハクに謝る。彼女は未だ顔を赤くして少しこちらを睨む。

「私が転んだのが悪いかもしれませんがだからって、どさくさに紛れて、その、大事な所を触るなんて最低です」

「あの、本当に誤解なんです」

「嘘です。あんな偶然あり得ません」

彼女に先ほどから、弁解をしているのだが一向に信じてくれない。

「十六夜君。もしかして、貴方最初からこれが目的だったんじゃないんですか!？」

「そんなことないですよ」

「今考えれば、おかしかったんです。不良に昨日絡まれた時も、狙いすましたかのように出てきて、今日も貴方について行ったらまたあの不

良に会うし。あの人たちと、グルなんじゃないですか!」

「ち、違いますよ」

彼女からの信用は一切なくなってしまった。元からあるかどうかは分からないが。

マイナスになったのは分かった。

「どうでしょうね。貴方があの人たちを雇って、私にちよっかいを出すように命令した」

探偵のように、彼女は俺の行動を推理していく。

「その後。私に取り入って、如何わしい行為に及ぼうとしたと考えれば全部納得できます。あの水鉄砲も本当は、ただの水が入っているんじゃないんですか?」

「いやいや、違いますよ! 本当に!」

自身の体を抱きしめるのようにして、俺に疑惑の目を向ける。ここで信用を失うのは不味い。

「誤解を一つ一つ解きます! まずこの水鉄砲味わってみてください!」

俺は懐から水鉄砲を出す。

「良いですよ。味わってあげます。ただし、もし辛くなかったら、その時点で警察に通報します」

「分かりました。では、口を開けてください」

彼女は言われるがまま口を開けた。しかし、これ結構辛いが大丈夫だろうか?

「一応言つときますけど、本当に辛いですよ。俺も味見しながら作っただけですけどかなりヤバいですよ?」

「そういう演技はいいです。早く私の口に出してください」

俺が不良の仲間と一芝居打ったと思っていたのだろう。仕方ない証明の為には彼女の口の中に入れるしかない。

……なんか、いけない事をしている気分だがそんなことは一切ない。

俺は、彼女の口に水鉄砲を放つだけなのだから。
なんか、言葉が悪いな……。

「じゃあ、行きますよ」

「いつでもどうぞ」

俺は彼女の口の中に、軽く水を放った。彼女は、水を舌で味わって。

——かあああああ！辛い！

「ゲホゲホッ。え？辛い！ゲホッ。のどが、熱い！」

口元を抑え、せき込んでしまう。顔も再び赤くなる。大分辛いだろう。作った俺も良く知っている。

「水、水！」

彼女は慌てて水道に向かって行く。

よし！ 誤解が少し解けたなど、素直に俺は喜べなかった。

六話 最悪の出来た訳

「あの、落ち着きました?」

「女性の口にあんなものを……不良並みに最低ですね」

「出していいって言うから」

えっ? 何の会話? と思うかもしれないが、普通に如何わしいものではない。彼女は水鉄砲を口に入れた後、水をがぶ飲みしてようやく落ち着いた。その後、二人してもう一度ソファアームに座る

「確かにそう言いましたが、こんなに辛いなら止めるべきではないのですか?」

「本当に出していいか、やる前に聞きましたよね?」

「……そうでしたね」

今回の事は彼女に責任があるだろう。彼女もそう言えばと渋々納得したようだ。

さて、彼女の誤解を完全に解くでしょう。このままでは世界滅亡であり、バッドエンドの『ifストーリー』から逃れるために動いているのに彼女の信用がないと動いてもうまくいかない。

「あの、さっきの事は本当に誤解です。」

「どうでしょうね? 口では何とでもいえると思いますが」

彼女の過去があるからこんな風に深読みしてしまう理由も分かるが、でも、今回は彼女に責任があるのではないか?

「こんなことは言いたくないんですけど、逆とも取れませんか?」

「逆?」

「銀堂さんが俺を押し倒した、みたいな……」

「な、何で私が、貴方を押し倒すんですか!?!」

僅かな怒り、羞恥が入り混じったように声を少し荒げた。

ここは彼女を論破して納得してもらおう。

「だって、先に転んだの銀堂さんだし……」

「あ、あれは、偶然です!」

「普通何もないところで転びますか?」

「あの時は……足元がお留守で何故か分からないのですが、足がもつれて……」

彼女はそこを責められると結構痛いはずだ。俺の言っていることが案外筋が通っているからこそ、なかなか言い返せない。

「へえ。何もないところで転んだんですか？」

「なんですか!?! 悪いですか!?! 言いたいことがあるなら言ってくださいー!」

「いや……別にないですよ」

「嘘を隠す努力を少しはしたらどうなんですか!?!」

わざとらしく嘘をつく。誰でもわかる嘘だ。逆上とも取れるが、俺が徐々に追いつめている証だ。

よし!! このまま突っ切る!

「おふぎはこれ位にして、こんな感じに何でもかんでも怪しい行動に結びつけられるって事を言いたかったんだけなんですよ」

「……私が貴方と不良がグルではないかと言った事も、考え過ぎだと思いませんか?」

「そうです。それが言いたいんです」

「確かに深読みしすぎたかもしれない」

フツ、勝ったな。何とか彼女とのトークバトルに勝利することができ信頼を回復できたのかな?

「ですよ? 俺は悪い奴ではないんですよ」

「確かに不良とグルという点は私の考えすぎかもしれませんが、助けてもらったのにすいません。失礼な事を言っ……」

「いえいえ、気にしないでください」

ああ、良かった。これで何とか彼女の信頼を勝ち取れた。彼女は中々人を信じないけど、俺の熱意が伝わったんだろうな。

「でも、女性の体に触っておいて開き直っている貴方は人として信頼できません」

まあ、こんな簡単に彼女の心の扉が開くわけ無いか。分かってたけどね。

「開き直ってないですよ!」

「開き直ってるじゃないですか！」

「あれは、不可抗力って何度も言ってるじゃないですか！」

「どうでしょうね？ 倒れる時に、あ、これチャンスだ！って思ったんじゃないですか？」

無限ループしてる！ この会話さつきもやっただろ！ もう埒が明かない。不良の仲間と思われなかっただけでも良しとするか。これ以上は意味ないだろうし。

「もう、それでいいですよ」

「やっぱりそうだったんですね！ 不潔です！」

「今日はもう帰りますね……」

俺はため息をつきながらソファアールから腰を上げて玄関に向かう。

「ちよつと、話はまだ終わってないですよ！」

「今度聞きますね」

スタスタと玄関に向かって行き、すぐに靴に履き替える。彼女も一応見送りをしてくれるらしい。

「では、失礼します」

「……本当なら、警察に連絡したいのですが今回だけ許してあげます」

「はい、ありがとうございます」

どうやら許してくれるようだ。俺が悪いわけではないのだが、これ以上火に油を注ぐのはやめておこう。警察だけは勘弁だからな。

「あつ、銀堂さん」

「なんですか？」

「明日、朝五時に一緒に学校に行きませんか？」

「朝五時!? 何考えてるんですか!？」

これはバッドエンド回避の俺の作戦なのだが、分かるわけ無いだろう。

「ここには俺が迎えに来ます」

「朝五時に私を呼び出して何をする気ですか？」

「学校に送るだけです」

「だったら、そんな時間でなくてもいいのでは？」

「不良どもがうろろうろしていますから」

彼女は再び怪しそうに俺を見た。何を考えているのか分からない俺がいまいち信用できないのだろうか。

「これから、毎日不良を避けるために朝五時ですか？　入学して、まだ二日目なのに体持ちますかね？」

「それなら、大丈夫です。……多分」

「どっちなんですか。まあ、いいですよ。私も不良とはできれば会いたくないですし」

「じゃ、明日五時に来ますね。それでは、失礼します」

「気をつけて、帰ってくださいね」

「はい」

俺はそのままドアを開け、彼女の自宅から去って行った。

帰り道、周囲を警戒しつつ今後と現在の確認。

まずはこの世界が滅亡する世界。『ifストーリー』の世界線と言う事は確認した。初日の不良に絡まれた事で確認した。世界には普通の『ストーリー』であつてほしかった。

本来の『ストーリー』は夏休の後半まで、特に面白いイベントなどはない。そこまで彼女は美人であり普通の高校生として生活していた。『魔装少女』同士の絆とかはなくプロローグのようなものだ。

『ifストーリー』は入学初日から不運、最悪続きの胸糞悪い話のてんこ盛りである。

何故こんなクソな話が発売されたのか？　作者は何を考えているのか？　疑問に思った俺は調べてみた。これは色々諸説あつたのだが一番有力だつたのは……。

編集者の無茶ぶりと過剰な指示。

まずこの世界の『魔装少女〜シークレットファイブ〜』は、既に完結していた作品なのだ。とんでもない大ヒットした面白ライトノベル。

超絶人気があつたのだが、完結した作品がいつまでもトップというわけではない。

これは当たり前のことだ。古い物から新しい物、これは普通の事。

しかし、出版社の経営は悪化。『魔装少女』以外の大ヒットがなかなか出ない。

他の社の人気作品がどんどん売れる。これに徐々に焦り出した編集者は完結した『魔装少女』を無理やり刊行。

作者に無理を言って描かせたのだ。最初は普通の短編の詰め合わせ。しかし、ブームが少し過ぎた作品は売れるのは売れるのだが伸びが悪い。その間に他社はドンドン名作が出てくる。

あっちの会社より、こっちの会社で書いた方が売れるという噂も出始めた。

他社の方が売れるので、あっちの会社に小説を持っていこう。そんな作者が多くなった。

それにより爆発的な作品は出ない。その編集社に作品持つていく作者が減る。会社の経済事情は悪化し倒産の可能性も出始める。そこで、大ヒットだった作品を無理やり『ifストーリー』として刊行しようと言う考えが出た。

それこそが最悪しかない『ifストーリー』なのだ。

しかし、ただ売っても伸びは悪い。そこで過度な演出、過激でギリギリの描写。それによって流れを再び呼び込むことが追加で決まった。作者はそれは流石にと難色を示したが渋々書き上げた。

そこに編集でかなり無理なアドバイスを無理やり詰め込み出来上がったのが、

『最悪の誰も救われない。バッドエンドif』

最悪な作品だがかなり売れたのだ。表紙にはただのあり得たかもしれない未来と書いておく。元々のファンは気になって買うのは当然。しかし、そのファンが激怒しネットが炎上。

それにより、昔は買ったけどもう買わないと言う人も気になって手に取る。

過激すぎる演出などが話題性を呼び、ファンでない人も手に取る。一種の炎上商法の様なやり方で、売り上げはかなり上がった。

そこから二巻、三巻と話が出るのだが話がエグすぎる、と話題は収

まらない。『ifストーリー』は嘗ての売り上げに匹敵する位にまで上り詰めた。

しかし、コアなファン。嘗ての魔装少女を見ていた人たちは怒りが収まらない。

ファンたちによるガチ目の炎上。これにより、三巻までで打ち切りという形になった。

これが最悪の作品の全容。勘弁してほしい。だが、やるしかない。

これから動きの為に、一応最悪のルートも読んでいた俺なのだがここで一卷の内容を確認しておこう。

まずは入学初日の帰り道、不良に絡まれる。ここは大したことはない。回避した。

二日目

無理やり連れられ、凌辱を受ける。此処も回避した。しかし、本来いない場所に不良がいたのは予想外だった。イレギュラーというやつだ。俺のせいかもしれないが、本来よりはいい結果になったのでよしとする。

そして明日、三日目。

朝から連れられた銀堂コハクが、十人ほどから凌辱を受ける。写メなどを取られ、そこから色んな所に拡散する。噂を聞いた更に遠くの不良達も詰め寄ってくる。

どんどん人数は増えていく。それでも彼女は耐える。そして、四月の中旬ストーリーカー被害にあう。精神が不安定で虚ろな彼女は、それに気づかない。急に襲われ抵抗するがそのまま、凌辱を受けナイフで殺される。

場所は近くの公園。時刻は6時15分。泣きながら絶望し、死んでいくのだ。『ifストーリー』の特徴は、この時点では彼女達は何の力もないただの女子高生と言う事。彼女達、魔装少女のつながりは殆どないと言う事、力も何もない、故にあらがえない。

『ストーリー』とは、正反対の物語ともいえる。

力があつて仲間達と共に頑張り、ハッピーエンド。
力もなく最高の仲間などいなく、バッドエンド。

最悪だと思わないだろうか、変えたいとは思わないだろうか。

俺は世界を救いたい。保身のためという下らない理由だ。

——でも、彼女達を救いたいというのは嘘じゃない。

俺にしか分からないのだ、この世界は。ならやるしかない。ただ、

俺は凡人。武道なんて習ったが、毎日投げられボコボコにされた。

俺にできることはなんだ。ハッピーエンドにはどうすればできる。

自問自答し、悩みに悩んだ。その結果が明日出る。

七話 早起き

早朝五時。四時半で起き銀堂コハクの住むマンションの一階の入り口付近で待つ。少しすると、ほぼ時間通りに彼女は来た。不機嫌そうにしながらも彼女は挨拶はしっかりしてくれた

「おはようございます」

「おはようございます。早速行きましょう」

俺は彼女が隣に来るとすぐに歩き出す。彼女は疑惑の目を向けっぱなし。

「説明してくれますよね?」

「何をですか?」

「なぜ、こんな時間に登校するのか聞いてるんです!!」

「不良に遭遇しないようにするためですよ」

スタスタ歩きながら事情を説明する。しかし、まだ納得していないようで

「早すぎます!」

「そうですかね? これくらいが一番安全だと思いますが?」

「五時ですよ!! 馬鹿なんですか!! 見てくださいよ、人なんてほとんどいませんよ!!」

ぐるりと周りを見回す。確かに、いつもほどの人はいない。まあ、気にすることではない。

「お気になさらず」

「気にしますよ!!」

彼女との会話をのらりくらりと流しながら、俺達そのまま学校に着いた。彼女は不機嫌のままだったが……。

「一番乗りですね」

「でしようね!!」

学校は開いていない。大体開くとしても六時くらいだろう。現在の時刻は五時十五分。スマホで確認。

「開くまで少し時間がありますね。しかし、いくら何でも流石に早すぎましたね」

「さっき私が言いましたよね!! いくら何でも早いつて!!」

彼女をなだめつつ、とりあえず近くのベンチに座る。爽やかな朝だ。早起きも悪くないかもしれない。こんなことは二度としないがな。

「これから、毎日早起きしなくてははいけませんか?」

「どうですかね?」

「質問してるのはこちらなのですが?」

彼女は、呆れてもう質問する気はないようだ。特にお互いに話すことなく時間が過ぎていく。少しくらいは会話した方がいいのかな? 女性と二人というのはほんのわずかだが緊張する。昨日も二人だったが結構心臓が高鳴っていた。

「早起きも悪くないですね」

「そうですね、貴方に言われると腹立ちますね」

入学三日目。随分と嫌われたものだ。色々あったのは確かだが、一応彼女の為にやっているだけだな。お礼が欲しいわけではないから別にいいんだけど……。

会話なんて無い。俺も目を閉じ、彼女も小説を読む。そして、時間が経過し六時になる。

「では、行きましようか」

「そうですね。ずっとここにいるのも嫌ですから」

校内は生徒は誰も居ない。教師が数人いるくらいだろう。シンと静まり返り、二人が廊下を歩く音が良く聞こえる。教室に入りお互いに席に着く。俺たちの席は結構離れている。彼女は廊下側の一番前。俺は、校庭が見える窓側の一番後ろ。どうでもいいことだが俺の前が佐々本。

この席順はクラス分けをして入試の成績順になっている。窓側の

前から良い順で並んでいる。クラスは、入試成績の結果をバランスよく分けている。つまりクラスで校庭側の後ろというのは俺の成績はほぼ最下位という証だ。

これには訳がある。自身を鍛える為にひたすらに訓練をしてきたため、勉強があまりできなかったという点。とは言え前世の経験もあり多少はできるのだが、入試の日は体調が悪く、まさかの解答欄が何か所ずれていたのだ。

テスト終了一分前に気づいたが時すでに遅し。全部間違ったわけではないが、そのせいで佐々本の後ろという不名誉な席になったのだ。佐々本は頭が悪い。本来なら彼が校庭側の一番後ろだ。しかし、俺が後ろになっている。バッドエンドを回避できればそれでいいので特に気にしないし、これは裏設定で書いてあったので教師くらいしか知らないから馬鹿にされることもない。

まあ、こんなこと今考えても仕方ないし、どうでもいいんだけどな。バッドエンドを回避できればそれでいい。

さて、こんな事を考えてるうちに大分時間がたったな。現在七時過ぎ。

彼女はずっと小説。そろそろ、だな。俺は席を立ち教室を出て行く。彼女は特に何も言わない。

トイレに行くとも思っているのかもしれないが、そうじゃない。そのまま学校からも出て行く。学校に登校してから全く授業を受けずに出て行くなど普通じゃないが。

俺はバッドエンドを回避しなくちゃいけない。この後、ストーリーカーも控えているのだ。

——とりあえず、不良だけでも完璧に対処しないとな。
そのまま不良に初日会った場所に向かった。



時刻はもう八時過ぎ。教室にはAクラスの生徒が既に大分そろつ

ている。私はクラスメイト達と親しげに話す。

「見て！ スマホカバー新しくしたんだ」

「まあ、凄く可愛いですね！」

「私はネイルしてみたんだ」

「まあ、とつてもキュートですね！」

余り楽しくはないですね。適当に言葉を返しているが楽しくない。少し言葉を言い換えて話すだけだ。

本当につまらない。こいつらも何かあれば裏切るといふ考えが、私から離れない。そんな負の心でクラスメイト達と接している私は校庭の一番後ろの席を見た。

そう言えば彼はどうしたのだろうか？ 朝一緒に来て、急に教室から出て行ったと思えば一向に戻ってこない。お花摘みには随分長い。一時間位たつかもしれない。

もうすぐホームルームが始まるのに何をしているんだろう？ 行動が読めない。昨日も散々私に色々やって、今日は朝五時に集合しろ等と言ってくる。

正直断つてやろうと思ったが、不良から絡まれたところを助けてくれた恩がある。

……ムカつく。私は、彼が嫌いだ。入学三日目で嫌いになった。

彼と一緒に居るとイライラする。誰かの為に自分を投げ捨てた姿勢。

そんな人は存在しない。私はもう騙されない。彼にも何か下種な思惑があるはずだ。

だからこそ、彼の目的を知るために二人きりの空間を作った。私は自分で言うのも何だが、かなりの美人だ。そしてスタイルもいい。もしかしたら私に取り入ろうとしているのかもしれない。それを見極めたかった。

結果、分からなかった。一緒に時間を過ごしたが分からなかった。

すぐに襲ってくる下種か。それともすぐに襲うのが不味いと、もつと親密になつてと頭が回る下種か。

そのどちらかと思つたがどうにも違う気がする。前者ではないなら後者と考えたが、それにしても何か引つかかる。

私に好意を持たれたたいようにはあまり見えない。イライラする。それがどんだん膨らんでくる。

もう思い出したくはない。あの時は私が馬鹿で、失敗して、無駄になつたということを学んで。

そこから、納得して、自分をだまして、今の自分を作つた。これからはこの打算の私で生きていこうと誓つたのに……。

彼を見ると、過去の自分を見ているような気がする。何度も何度もその姿を見る。

『こんなにきれいで、カッコいいのかと、理想を見る』
——それがイライラする。どうしようもなく。

もう彼と関わるのは止めよう。これ以上彼と一緒に居ると、私の心が……。これ以上は関わる必要はない。不良の件は今朝の登校で借りを返した。

友達と話しながらそんな事を考えていたら、教師である六道先生が教室に入ってくる。

それを合図にしたように皆が私から離れていく。

「諸君、おはよう。今日も欠席は……黒田が来てないのか」

先生が彼の席が空席であることに気づく。仕方ない。登校はしたということを書いておくかと思つた時だった。

「六道先生!! 大変です!!」

他の女先生が慌てながら教室に入ってきた。

「何か、あつたんですか!」

その慌てように先生は動揺した表情をした。生徒達も何かあつたのかと少し騒がしい。

「黒田十六夜君が、あの素行が悪い生徒が多いことで有名な天之川高校の生徒達に暴行されて、病院に搬送されました!! 意識はあるようなのですが……」

「っ!!! 分かりました。すぐに向かいます!!!」

慌てて六道先生は出て行った。生徒達にも動揺が広がる。

それは私にも。

——何が起こっているのか理解できなかった。



「いつてえくくく。全身が痛い」

「不良に友達にもう関わるなど言ったらボコボコにされたなんて、今時あるんだね」

病室のベッドの上で、顔の顔面以外に包帯が巻かれている。一応点滴もしている。俺と話しているのは、医者。かなりのベテランで名医っぽい感じがする。しかし、まだまだ若そうだ。

そして優しそうでイケメン。

「体の至る所が打撲。骨折はないけど、まあまあ重症だよ」

「あの不良ども少しは手加減しろよ!!」

「不良の方は警察で取り調べを受けてるみたいだけど、懲りないだろうね。素行が悪くて有名なんだ。天之川はね……」

「そこは考えてますから」

「?? 良く分からないけど、安静にね」

俺の現在の事情を説明すると、そのまま先生は病室を出て行った。四人一組の部屋だが、俺はカーテンで区切っているので実質一人のようなもの。

それにしても痛い。そして怖かった。

教室を出た後、学校を出た俺は不良がいる場所、人が少ない場所に自ら乗り込んだ。

その後、いったん逃げた。

その後、人通りの多いところでわざと捕まり、ボコボコにされた。うずくまって、じっと耐えたが涙が出てしまうほどに痛かった。

人通りが多いことで、すぐに誰かが警察や病院に通報してくれたので幸いだが、これも計画の内。人通りの多いところで通報されれば、いくら不良でも逃げる。警察が怖くないと言っても少しは何かを感じるだろう。それは計算していた。

一応、誰も通報しない場合も考え、俺も、念のため逃げながら警察に不良に追われていると連絡を入れた。

そして、先ず人通りの多いところに逃げた理由は、人がいない所ではマジで死ぬからだ。バッドエンドでは三日目。銀堂は無理やり陵辱を受けるが、それは人がいない場所。

二日目で運悪く捕まり行為をされ、三日目では不良仲間が総出になって朝から銀堂をつけ狙う。通学途中の道のりの少し人通りがないところで無理やり捕まえるという筋書きだ。

だからこそ、彼女をまず学校に行かせた。流石に早すぎたかもしれないが鉢合わせするよりましだ。

そして、俺は何の抵抗もせずボコボコにされたが、それにも理由はある。

……そろそろじゃないか？

学校にも連絡は言っている。そして、俺のクラスの担任と言えば？

六道哲郎。彼の兄弟は、『血列団』というマジでヤバイ、ヤクザグループの頭領。

自分の生徒がボコボコにされたとなれば、兄弟の力を借りて無理やり不良を統制するだろう。

『血列団』は、まじでヤバイ。その辺の不良が構成員に会えば、無言で頭を下げるくらいだ。

これについては、六道哲郎は生徒達に隠している。だからこそ、表立って力を貸してとは言えない。

『血列団』の力を使って不良をどうにかしてください」等と。

もし言えば、俺が怪しまれてしまう。

六道哲郎に直接言わず、彼の兄弟に『血列団』の力を使ってもらうには俺がボコボコにされたという筋書きが必要だった……と思う。

もしかしたら直接言っても大丈夫な可能性もあったが、そうでない可能性もあった。

そうなたら、残りの二人が救えない。

普通に一般生徒として相談する手もあったが、今この現状の方が親身になってくれる。少し嫌な考えだが、同情も誘える。まだ入学三日目。彼はいい教師というのは知っているが、すぐに兄弟パワーを使うとは限らない。彼も人間、誰かれ構わず兄弟パワーを使うとは限らない。

六道哲郎という人物に確実に彼から兄弟パワーを使ってもらうには、この手が一番であり、そして、

全てのリスクを考え行動した結果、打撲という結末になったのだ。

これくらいで済んでよかった。亀のようにうずくまり必死に攻撃を耐えながら、どうか骨は折れませぬようにと、涙ながらにそう祈った甲斐があつた。祈りは届いたようだ。

何やらドンドンと、誰かが走ってくる音が聞こえる。

「大丈夫か!! 黒田!!」

どうやら、六道哲郎が来てくれたようだ。さて、凄く痛い振りでもしようかな?

ここまでやったんだ。彼には存分に兄弟パワーを使ってもらわな
いと……。

八話 病院

「なるほど、最近天之川の不良に難癖をつけられたのか……」

「はい、特に銀堂さんが狙われた感じで、痛たたたた!!」

俺は六道に事情を説明しながら、わざとらしく肩を抑える。目を閉じ、沢山のしわが出来る。確かに重症だが、彼女がひどい目に遭うバッドエンドに比べたら大したことはない。彼女は十人ほどから酷い目に遭うが、俺は昨日の不良を入れて五人ほど。

人通りの少ないところで、昨日の不良達とわざと会った時は十人ほどいた。しかし、逃げているうちに五人ほどしか追って来なくなつた。手分けしたのか体力が尽きたのかは、分からないが。

少し焦つたことと言えば、一か所に固まっていたことだ。

『ifストーリー』と違い、彼女をつけ狙い至る所で待ち伏せしていなかった。二人くらいで組んで潜んでいるはずなのだが少し本来とは変わっていた

しかし、よく考えて見れば、この行動には納得だ。本来は二日目で凌辱を受けて、そこから噂が広まって行く。それに興味を持った下種が集まり捕まえようとす。

だが、二日目は俺が上手くかわした。今の所、凄い美人がいるくらい噂なのだろう。確かに興味は湧くが、前者ほどではないだろう。だからこそ、朝から張り込んで捕まえるようなことはしなかったのだろう。これくらいのイレギュラーは想定するべきだったと少し反省している。

だからこそ、逃げているうちにバラけてくれたのが、こちらとしては本当に助かった。確かにまあまあ重症だが、この程度で収まったのは、祈りだけでなく不良の人数もあるだろう。十人ほどでボコボコにされたら、人通りの多いところでも打撲で済まなかったかもしれない。

「大丈夫か!!」

「大丈夫、で、す、痛」

「なんて奴らだ！　ここまで乱暴にするとはい！」

六道は、苛立ちを隠せないように拳を握る。生徒がここまで大げがをさせられたら、こうなるのは当然。一応、狙い通りだ。

「これから、どうすればいいのでしょうか？　大分不良に目をつけられてしまいました……」

「……先生が、何とかしよう」

「どうやってですか？」

「詳しく言えんが、何とかしよう」

「あ、ありがとうございます」

何とかしてくれるようだ。良かったら、上手く行って。先生はこの後用事があると言って出て行った。

『血列団』の力を行使するのはかなり俺自身にもリスクがあり、危険な賭けだった。だが一応ひと段落だ。

Aクラスだったのが本当に運が良かった。俺に何かあった場合、すぐに六道哲郎に連絡が行き彼が一番に対応をしてくれる。

そこに関しては、運が本当に良かった。もし、俺がAクラスでなかった場合

しかし、その場合でも怪我をすれば同情心を誘うことができたのではと考えていた。

退院後、校内で不良にやられたと彼の前でアピールをする。具体的には怪我の状態でわざと彼の前を通ったり、彼の前で痛がるふりをしたり、独り言のように何かを呟き、彼が心配したところでさりげなく相談する。

自然に彼に兄弟パワーを使わせるために、こういう策も考えていたが……。

もう終わった事なのでどうでもいいんだけどな。情けないが、俺には不良達を完ペきに退けることはできない。だからこそ、六道哲郎に頼るという方法を選択した。

今のところ順調だし、取りあえず点滴が終わるまで大人しくするか。

俺は一息つきベッドに横になった。その日は適当に過ごした。一応、一日だけ入院なので本などを読んでいると

「大丈夫か？」

「大丈夫だけど、お前が来るとは……」

放課後の時間になると、まさかの佐々本が見舞いに来てくれたのだ。

彼は悪い人ではない。しかし、知り合ってまだ三日。見舞いに来るのは予想外だった。

「後ろの席の奴が、ボコボコにされたって聞いたら気にするさ」

「そういうえば、お前はそういう奴だったな」

物語でも彼の人柄の良さは書いてあった。いつもの言動で勘違いされがちだが、根は悪い奴ではない。俺も佐々本太郎という人物は嫌いではなかった。

「なんだよ、その言い方。俺のこと知ってるみたいな言い方だな？」

「言葉の綾だ、気にするな」

「ふーん。あー。そう言えば、見舞い品も持ってきたんだ」

「悪いな。そこまで気を使わせて……」

彼は茶色の袋を俺に手渡した。中を開けると

「エロ本かよ」

「男は好きだろ？　そういうの？」

「嫌いじゃないけど、見舞いの品なのか？　これ？」

「大分心が病んでると思ったからな。それで色々満たしてくれ！」

表紙には肌を多めに出した女性の写真が堂々と映されている。確かに美人で、嬉しいか嬉しくないかどちらかと言われたら嬉しい……こういうのは購入するのが恥ずかしい。更に一冊も持って居ないの
で少しありがたい。

「一応、貰っておく」

「大事にしろよ！」

俺は袋に再び入れて近くのテーブルに置いておく。

「じゃ、俺はこの後本屋行くから！ お大事に！」

「わざわざ、ありがとうな」

佐々本は、見舞い品を渡してすぐに帰った。それにしても良い奴だ。流石人気投票でちよくちよくトップ十に入るのも納得だな。せつかく彼が見舞いとして持ってきてくれたものだ。これはしつかりと見なければ彼に失礼だろう。

俺は茶色の袋の中から本を出そうとして手を伸ばすが、誰かが室内に入ってくる音が聞こえた。俺に用がある人かどうかわかるまでは本は見れないので、一旦聖書は放置。

読んでいるときに人が来たら気まずいどころじゃない。

足音が聞こえ、カーテンの前で足音が止まる。シルエツトで僅かに女性と言う事が分かった。と言うかすごい見覚えがある。

「十六夜君、私です。入っていいですか？」

銀堂コハクまで来るとはな。ちよつと意外。

「どうぞ」

彼女は許可が出るとカーテンを開けた。笑顔だが何処か恐怖を感じる。

「失礼します」

「わざわざ来てくれてありがとうございます」

「お気になさらず。一緒に朝五時登校したのに気付いたら入院されていると言われたら、来ないわけにはいきませんよ」

嫌味っぽく彼女は告げてきた。顔はいい笑顔だ。あら可愛い、とはならないな。

「いやゝ。忘れ物を思い出して家まで取りに行ったら不良に絡まれちゃって」

「あら、それは災難でしたね」

「ええ」

「で？ 本当は？」

笑顔のまま首をわずかに傾げて再び質問を投げかける。どうやら騙されてはくれないようだ。

「私がここに来る前学校の校門から出ると、昨日の不良が私に謝罪を
してきました。ここ最近では迷惑をかけてすまなかつたと貴方にも
謝っておいて欲しいと」

「何が起こっているのか分かりませんが、ただ一つ言えることは貴方
が色々裏で手を回していたということ。そこは何となく分かりまし
た。説明していただけますか？」

説明しろと言われても無理だ。本来なら知りえない情報の中で、俺
は策を凝らし行つた。もし説明すれば、不自然さが浮き立つ。言う必
要は無いだろう。

「本当に忘れ物をしたんですよ。ただ先生が色々やってくれたみたい
ですよ」

「先生と言うと六道先生ですか？」

俺は笑顔で肯定するように頷いた。しかし、彼女は未だに納得が出
来ないよう

「でも、何かしつくりいきません」

「そう言われてもそれしかないよ」

適当にとぼけて誤魔化す。これ以上は彼女も聞けないだろう、聞い
たとしてもこれ以上何かを話すようなことはしていないことは分か
るはずだ。

「もういいです。私は帰ります」

「わざわざ来てくれてありがとうね」

不機嫌そうに帰ることを宣言した。彼女の中では魚の小骨が突つ
かかつるような不快感が支配しているのだろう。

「……十六夜君。その生き方楽しいですか？ 辛くないですか？」

背を向けて帰ろうとしていた彼女は、こちらに向かい合うことなく
聞いてきた。

「うーん、どうでしょうね。楽しいかと聞かれたらノーで、辛いと聞か
れたらイエスですね」

「ですよね……」

「ただ、俺が信じてやってきたことは無駄じゃないと思いますから、嫌
な事だけではないですよ」

「……お大事になさってください」

彼女はそのままカーテンを開けて出て行った。心を読むと言うことは俺にはできないが、彼女の困惑は感じ取れた。



『ただ、俺がやってきたことは無駄じゃないと思いますから、嫌な事だけじゃないですよ』

……そんな言葉どうして言えるんだ？

やっぱり、あそこには行くべきでなかった。ますます心が乱された。

私も、あんな風になりたか……

——違う、今の私が正しいんだ！

あの生き方は自身が苦しんで何一つ得はない。彼なんて最たる例だ。彼は私の為に不良を退けたんだ。どうやったかは分からないが。でも、それを褒めることは誰もしない。報われず、ただ自身が傷つ

くだけ。

……ダメだ。考えないようにしてもまた考えている。

本当にこれつきりだ。もう関わらない。

私は自身の考えを取っ払い自宅に帰って行った

九話 バスケ

昨日は点滴が終わると家に帰った。基本的に家では一人なので気にしない。怪我したことは親にも連絡が行っていたが親は現在出張に行っているのを見舞いには来られなかった。

しかし、見舞いに来なかったからと言って悪い親じゃない。俺が体調に問題ないと連絡したので来なかっただけである。

母と父は、両者共にエリートだ。父は有名企業の社員。母は弁護士で何処かの法律事務所に勤務してららしい。

現在は昨日の怪我を庇いつつ、学校に向かっている。銀堂と一緒に登校しようかと思ったが既に彼女は出かけていた。ストーカーはまだ先のはずだが、念のため彼女を学校まで送ろうと思ったんだができなかった。連絡先も知らないので仕方ない。

「痛、クソ、打撲って結構痛いんだよな……」

右足、右腕、左足、左腕それぞれが所々痛い。痛みに顔を歪めながら校内に入って行く。不良に絡まれたという噂は広まっているようで、ちよくちよく見られる。

教室のドアを開けて中に入る。クラスメイト達はぎわめきだした。一番最初に俺に話しかけてきたのは佐々本だ。席に座りながら

「十六夜。大丈夫か？」

「大丈夫だ」

自身の席に向かいながら返事をする。佐々本は俺の前の席なので、自然と会話を続けられる。クラスメイト達は俺と話したことがないからどう話していいか分からないようだが、何やら心配してもらっているように感じる。

「昨日はわざわざありがとうな」

「大したことじゃないから別にいいよ」

ある程度の事情は昨日話したので特にいまさら言う事はない。その後は他愛もない世間話的な事をして過ごした。

「ホームルームを始める。席に着け」

六道哲郎が入ってくると全員が席に着く。色んな意味でこの人は影響力が凄い。これには脱帽だ。

「黒田、大丈夫か？」

「はい。おかげさまで」

「そうか。皆知ってると思うが黒田は怪我をしている。何かあれば手を貸すように」

六道哲郎。いや、六道先生が素晴らしい神対応をしてくれる。強面フェイスだが彼はいい人以外の何者でもないと再認識した。

「大丈夫か？」

「大丈夫十六夜君？」

「ありがとう。でも大丈夫だから気にしなくて大丈夫ですよ」

ホームルームの後はクラスメイト達の心配の嵐だった。本当に六道先生の影響力は凄いな。元から心配はしてくれていたのだろうか、いきなりこんな口に出して気を使ってくれるとは。

やはりあの人には人を動かす才能があるんだな。流石『血列団』の頭候補だった人だ。

六道哲郎。本名、龍島哲郎。次期『血列団』の頭を務めるはずだった。彼についての話は『原作』丸々一巻で紹介されたのだが、六道哲郎は教師になりたいという夢があり、その為に次期頭を断ったのだ。彼の兄弟にその座を譲って。

『血列団』はヤクザ。ヤクザと聞くと悪いイメージばかりだが、そんなことはない。彼らは怖いがいい人たちの集まりだ。全員龍の入れ墨が入っていて怖いが……。

『ストーリー』では六道哲郎について描かれた物語の内容は今の俺と似た境遇の子が関わってくる。

確か、Bクラスの男の子の話だ。不良に目を付けられ金品などを取られ、暴力を振るわれるのだがそれを閃光の如く六道哲郎が解決。

そこで彼の正体が明らかになった。今まで少し強面教師だと思っ

ていたが、実は最強ヤクザ関係者という俺 t u e e 的な展開に読者は胸を熱くしたことだろう。

ずっと作者は、六道哲郎と言う人物をブラックボックスの如く隠していた。

彼が不良をぼこぼこにするシーンは、カツコよかった。最後に彼の背中に入っている龍の入れ墨を披露。それで、相手に『血列団』の関係者ということに分からせて。

二度とうちの生徒に関わるなど背中で語り、不良を逃がす。

いじめられていた男の子だけが、その正体に気づくという王道的な展開で物語を締めた。

これ『魔装少女』だよね？　と思わず表紙を確認した俺は正常だろう。だって、普通に主人公の如くカッコいいことをしてたのだから。でも、マジカル感一切なし。

主人公である銀堂コハクなんてほとんど出なかった。まあ、今思えば『魔装少女』ってタイトルに書いてあって、ラノベの表紙に六道哲郎が描いてあったのだから、その時点でこの巻は普通ではないと気づくべきだった。

つまり、六道哲郎は幼き時から尋常でない場所で育った裏の世界の主人公と言える存在なのだ。そんな彼の人気投票は高いに決まっているが……。

佐々本より下だ。何故か分からないが佐々本には絶対勝てない。順位一つ違いの時もあるが、結局勝てないのだ。

まあ、佐々本が人気の理由も分かるがな。

「おい、十六夜。体育どうすんだ？」

「残念だが見学だな」

「まあ、そうだよな」

佐々本が俺に気を使ってくれる中、俺達Aクラスは体操服に着替え体育館に居た。一時間目は体育だ。木曜日の一時間目は体育なのだ。意外に、体育ができないというのが残念だったりする。特にこの一年Aクラスで出来ない事が……。

普通体育ができないくらい大したことない。と思うかもしれないが、このクラスは例外である。このクラス体育がガチなのだ。そこまですてきな本気である。

体育教師の指示で準備運動。その後チーム分け。俺はできないが今日はバスケである。体育は男女別れて行い、体育館を半分に分けて両者行う。

体育教師の名前は、七星拓也。ノリが良く、熱い教師だ。この人がいることで余計に体育が楽しくなる。『ストーリー』でも書かれていたが凄く楽しそうだった。だからこそ、できないのが悔やまれる。

「いいか！ 楽しむのは構わないが勝ち負けにも拘れ！ 勝った方にはジューズを奢ってやる！」

「「「うおおおおお！」」」」

このクラス、ノリが凄くいい。

その後チーム分けをし、試合が始まる。このクラス男子は大体十六人なので八人チームを二つ作り、交代しながら試合を行う。七星が審判だ。

試合が始まり、片方のチームにゴールが入る。俺は一応応援だけではあるが、今ゴールが入ったチームに所属している。

「ヒューー」。良い流れだよ！」

「まだまだ、こっからだ!!!」

ドリブルしてる生徒が、過度なディフェンスでゴール前で転ぶ。七星が笛を鳴らすと猛抗議。今のは違う。両手を上げ無実を訴える。しかし、七星は首を振る。

それで両チーム騒ぐ。片方は喜び、もう片方はマジかと空を見上げる。

俺も参加はしているがプレーできないと、何処か疎外感が……。

俺もやりたかったな……。



「うわ。男子熱いな」

「学校の授業であそこまで熱くなるのって難しいですよね」

体育館のもう半分の方で、私は同じクラスメイトであり後ろの席に座っている

体育館のもう半分の方で、私は同じクラスメイトであり後ろの席に座っている野口夏子さんと話していた。私達女子の体育はあちらほど熱いものではなく、試合はしているが白熱はしていない。

交代で試合には出るのと同じチームになった夏子さんと応援をしながら男子の試合を眺めていた。信用はしていないが、席が近いこともあり、クラス内では一番話すことが多い。

「そう言えばさ、黒田君って、天之川高校の不良にボコボコにされたって言ってたけどなんでやられたんだらうね?」

「さあ? 私には分かりかねますね」

「でもさ、昨日天之川高校の不良が校門で銀堂さんに謝ってたよね?」

黒田君の事何か言ってたかった?」

その話ではできればしてほしくなかった。気分が悪くなるから。

「いえ、何も」

「そうなんだ、うーん、気になる!」

「そうですか? 気にする価値も無いように思いますが?」

「なんか、急に毒舌になったね……」

思わず本音が出てしまったようだ。自然と不機嫌顔になるのを感じた。夏子さんが少し苦笑いをしている。

「そんなことないですよ」

「うーん、確かにそんなことないかも!」

チョロい夏子さんは話を戻すように十六夜君を見た。バスケットに参加できずに少し残念そうにしているのが見える。

「黒田君ってさ、一見普通の塊って感じなんだけど何か普通とは違う感じしない?」

「……それは、何となく感じました」

彼女はチョロいのかそうでないのか良く分からないが、いったん置いておいて私は十六夜君の事を考えた。

普通、激辛水鉄砲を持ち歩く高校生はいない。そして、不可思議な

行動。言われなくても分かっただけはいたが、改めて言われると再認識する。

——彼は普通ではない

「だよね！ 雰囲気と言うか、何と言うか良く分からないけど感じるよね？」

「頭がおかしい狂人に近いと思います」

「わお、凄い辛辣。もしかして、黒田君の事嫌い？」

「大嫌いです。彼を見てるだけでイライラしますから」

本音をぶちまけてしまった後、思わず言ってしまったと後悔した。こういう事はあまり言って良い事ではないが抑えられない。

「アハハ！ 銀堂さんがそこまで感情を出したの初めて見た。まだ入学4日目だけど、この4日間で一番感情が変化したよ！」

「そうですか？ なら、それは私がそれだけ彼を嫌っているという事ですよ」

「そうかな？ 私にはなんか違う気がするよ？」

……何やら変な勘違いを彼女はしてるように感じた。嫌い。それ以外の感情はない。

「そろそろ、交代の時間ですよ」

「おっ、そうだね！ じゃ、男子に負けないくらいに頑張ろうか！」

「それは無理ですよ」

私達は同じバスケットチームの生徒と交代して、試合に挑む。勿論ほどほどにだが。

十話 守護

「ついでこないでください」

冷たく彼女から発せられたその言葉から、本当に嫌がっていることがヒシヒシと伝わってきた。

「そんなこと言わないでください。ただ一緒に帰るだけじゃないですか」

学校時間が終わり部活をしたりする者、友達と一緒に遊びに行く者たちがいる中、俺たちはただ下校する。

かなり嫌がられているが、そんなことを気にしている余裕はない。まだ、ストーカーが来ないとはいえ念には念を入れておくことが重要。不良の時も多少なりともイレギュラーはあった。

どれも大したものではなかったがイレギュラーがあるという事実に変わりない。故にバッドエンドを完全回避までは付きまとわなければならぬ。

「それすら嫌なんです。お願いですからついでこないでください」
彼女は俺とは目すら合わせずにスタスタ歩いて行く。

……そんなに嫌なのか。少し傷つく……。

少し後ろを歩くか。それしか方法がないな。隣は凄く嫌な顔をされるしな。

一定の間隔を保ちながら彼女の後をつける。しばらく歩き人通りが少なかったところで彼女の足が止めこちらに顔を向けた。その表情は怒気を含んでいた。

「だから！ ついでこないでと言ってるではないですか!!」

「いや、ほら、帰り道がたまたま同じで……」

「そんなウソは通用しません!! はつきり言います。私はあなたの事が嫌いです!!!」

何となく察しはついていたけど、面と向かって言われるのは結構つらいな。彼女が美人なだけ余計につらい。可愛い子から嫌いって言

われるとメンタルに凄いダメージ。

「ですので近寄らないでください」

彼女はハッキリと嫌い宣言をした後再び歩いて行った。ここまで言われたら帰るしかないな。……とはならないな。

その後も気にせず一定の位置を開けながら歩き続けた。しばらくすると、彼女は再び振り返り

「だから!!! ついてこないでください!!!」

「気にしないでください」

「無理です!!」

「俺の事はジャガイモでも思ってください」

「無理です!!」



なんやかんやで彼女のマンションまでは付いて行った。彼女はさようならも言わず怒ってマンションに入って行った。これ以上嫌われたら警察にお世話になるかもしれない。それだけは回避しないとな。何としても。

そんなことを呑気に考えていると……。

——急に視線を感じた。

後ろを振り返ると物陰に誰かが居たように感じた。いや、居た。隠れてハッキリ見えなかっただけで。恐らく彼女にとって最悪であるストーカークソ野郎だな。女性の後をつける最低最悪な男だろう。

まったく……女性の後をつけるなんて男としてゴミだな。同じ男として恥ずかしい! 女性が一緒に居ていいと許可を出せば良いかもしれないが、無許可でストーカーするのは絶対やってはいけないだろう。

なぜ、そんな簡単な事も分からないんだ?? こんな小学生でも

やってはいけないことだと理解しているだろう。

しかし、既に目をつけていたのか。もう少し後だと思っていたが……。

『ifストーリー』では彼女を見かけてから一目惚れし、その後彼女に付きまとう。ストーカーの特徴。

分かっていることは、ナイフを持っている頭おかしい男。確か果物ナイフだったような気がする。職業無職で二十代後半のはずだ。

純粹戦闘力なら俺が上だと思うが、刃物持たれると少し怖い。刺されたら絶対死ぬ。できれば早めに解決したいところだが、簡単にはいかないだろう。

だが、ストーカーがすでにいるという事実が分かったのだから、これからは更に彼女を守らなければいけないだろう。

その日から俺のストーカー対策が始まった。なるべく彼女を距離でストーキング……ではなく護衛した。

途中、何度も彼女から怒鳴られ睨まれ、それでも続けた。買い物では荷物持ちとして彼女の傍にいた。

「荷物持たせてください」

「いません」

「家まで送らせてください」

「警察呼びますよ」

「偶々家の方向が一緒で……」

「では、私は遠回りして帰ります」

その日々が一週間くらい続いた……。



「なあ、十六夜」

「どうした？」

ある日、帰りの準備をしていると前の席の佐々本が話しかけてきた。

「最近お前、コハクちゃんにストーキングしてるって本当か？」

「誰が言ってたんだ？ そんなこと？」

「いや、結構噂になってるぞ。最近お前が付きまとってるって」

流石に有名になってるようだ。少し複雑だが、もう少しだから耐えるしかないな。

「……まあ、否定はしないな」

「ええ？ マジかよ。ストーカーは流石に引くぞ……」

「ストーカーじゃないんだが……」

「ストーカーは皆そう言うんだよ。気をつけろよ。後ろの席の奴が警察に捕まるニユースなんて見たくないからな」

その後、俺は銀堂コハクの後を追った。気持ちはかなり沈んでいた。



「最近、貴方が私をストーカーしてるという噂が立ってるそうですよ」「らしいですね」

「……そんなに落ち込むなら止めればいいじゃないですか？」

俺が落ち込んでいるのが顔に大分出ていたようで、怪訝そうに彼女が告げた。噂は彼女本人にも届いているようだ。もしかして、学校全体に広まっているのか？

だとしたら、結構きつい。もしかしなくても噂がある時点でキツイがな。

事態が解決した後大変かもな。俺はこれからを想像して頭が痛くなった。とりあえず、今は置いておこう。

「このままだと、貴方の学校生活に支障が出ますよ。まだ入学して一か月も経っていないのに既に変人扱いされてるんですから」

「ああ、そうですね……」

「何がしたいんですか？ 貴方は？」

落ち込みながらも、彼女の近くで歩く。足取りは重いが。そんな俺に彼女は呆れているようだ。

「!!」

俺は再び後ろを振り返った。最近かなり増えてきてる。この一週間で二十回近く誰かがつけている。銀堂コハクは全く気付いていないようだが、俺には全て分かっている。

「いつもの奇行ですか」

俺がいきなり後ろを振り返ったので、変人の奇行と判断したようだ。彼女はため息をつき歩き続ける。

やっぱりバッドエンドは近づいている。だが、計画通りだ。彼女を送った後、この最悪の『ifストーリー』に決着をつける。その為の準備はしてきた。

この最悪の『ifストーリー』に決着をつける。その為の準備はしてきた。

彼女の住むマンション近くに到着した。ようやく到着したと彼女は疲れたような表情でこちらを見た。

「全然ありがたくないですけどご苦労様でした」

「はい……」

「?? では、さようなら」

「はい」

俺は手短かに返し、彼女がマンションに入って行くのを確認した。その後、後ろを意識して一度深呼吸をし再び歩き出す。

横断歩道で青になるのを待つ。ただ待つて居るだけだが緊張と恐怖で汗が出てくる。心臓が高鳴る。だが、ここでやらなければならぬ。

横断歩道の信号が青になる。覚悟を決め俺は歩き出した。



何か変だ。いつもと違う彼の雰囲気を私は見破った。いつも通り私がマンションに入って彼が帰るのだが、今日の私は自分の住む階には上がらずこっそりマンションの外に出て彼を見ていた。

……気になるわけではない。ただ、これは、その、犯罪者予備軍の監視だ!! 彼は激辛水鉄砲を常に持ち歩き、私をストーカーする男。異常の塊のような男。何をするか分からない。監視しておいて損は無いだろう。

最近の彼は異常だ。元から変だが登下校だけでなく、お買い物荷物持ちをしたいと言って無理やり付いてくる。四六時中、私に付きまといっている。普通におかしい。

横断歩道でジツと待つて居るが何処か落ち着き無いように見える。非常に不本意だが、彼の事は何となく分かった。

奇人、変人、ストーカー。狂人と言えるだろう。しかし、毎日一緒に居ると流石に多少の顔の違いが分かる。先ほどの顔は非常に不本意だが何か思いつめた顔だった。

物陰から確認していると、彼が歩いて行く。すると少し後ろをフードをかぶった男が彼をつけているように感じた。偶然、単なる思い過ごしに考えることもできたが、そうではないと私の直感が言っていた。

見に行くか……。

彼をつけるフード男を尾行する私。かなりシニールではないだろうか。特に彼も振り返ることなく淡々と歩く。しかし、やっぱりどこか変なような気がする。あのフード男は彼をつけてるのは確定事項だろう。

それを彼が気付かないのはどうしてだ? 毎日恥ずかしいからや

めろと言つても、東西南北、前後左右、病気がよつてくらい確認するのに。違和感しかない。

しばらく歩くと彼は公園に入つて行く。この公園は大分錆びれている古い公園なので人は誰も居ない。彼は公園の真ん中で振り返つた。フード男も公園に入つて行く。草むらに隠れている私には両者気付かないようだ。

「最近ずっと銀堂さんをつけてたな」

彼がフード男に向かつて言葉を発する。両者向かい合うと、フード男は懐から果物ナイフを出す。

え？ 刃物？ 何どういう事？

ずつとつけてた？ あのフード男が？

「どうした殺気が凄いで」

「お前が僕の女神に付きまとうからいつも殺してやろうと思っていたんだよ!!」

私は隠れて話を聞いていたが、今、全てがつかつた。彼は気付いていたんだ。本物のストーカーが居たことに。だからこそ私の傍にずつといたんだ。

「お前を殺すために人気のない場所に来るのを待ってたんだ!!!」

ナイフを向けながら怒鳴りつける。あの男ヤバい人だ。比喻とか冗談ではなく本物の狂人。

普通なら恐怖で何もできなくなりそうだが、彼は鼻でフツと笑つた。

「俺を嵌めたような言い回しだが逆だ。わざと人気のない場所に来ることによって俺がお前をおびき寄せたんだ」

なんか、かつこいい……かも。足が凄い震えてるけど……。

怖いんだ、本当は。でも私を巻き込まないために一人でここに来た。誰にも言わず、私を守るために。

校内で変な噂をされても、私に酷いことを言われても。それでも、私を守る為だけに、今戦つてる。

彼は懐から水鉄砲を出し、さらにもう一つ銃を出した。水鉄砲では

ない、本格的な銃のように見えるがそうではないだろう。

「おもちゃで何ができる!!」

ナイフを持ったまま突進。彼が二丁拳銃スタイルで応戦。水鉄砲とおもちゃの銃を発砲。相手の体にBB弾が当たるがほぼダメージなし。相手は長そでなのでほぼ効かない。しかし、水鉄砲の水が顔に当たると

「ぐああああ!! 目がああああ!!」

あの水鉄砲……強過ぎではないだろうか？

「こっちの銃はいらなかったな……」

本格的な銃を見ながらぼつりつつぶやいた。私も同感だ。激辛水鉄砲強過ぎる。

彼は男を警戒しながら携帯で警察に連絡をしている。ストーカーにちよくちよく水鉄砲を発射しながら。

目を抑えながらストーカーはうずくまっている。草むらに隠れていた私も事が終わったと油断して足元にある枝を踏んでしまった。

「誰かいるのか？」

彼は私が隠れている草むらを向いた。ばれても問題は無いので草むらから出る。

「私です」

「何で居るんですか？」

「いや、偶々、こっちに用事があつて……」

「ああ、そうですか」

草むらから出てきた後にこの言い訳は大分厳しいと思う。嘘をついていると一瞬でばれた。彼は呆れたような表情で私を見た。何だろう、彼にそんな風に見られるとムカつく。

「馬鹿が!! 油断しやがつて!!」

ストーカー男が私と話して油断している十六夜君に向かって刃物を再び向ける。目が完全に回復したわけではないだろうが声のする方向で大体判断したのだろう。

「!!」

「十六夜君!!」

私に気を取られていたので、反応が遅れてナイフが腹部に刺さった。

十一話 恋!

「十六夜君大丈夫ですか!!」

私は腹部を刺された彼の元に走る。彼はうずくまって倒れる。ナイフで刺されたら重症のはずだ。早く病院に連絡しなきゃ。

「今、病院に」

「いや、大丈夫だ……」

「何言ってるんですか!!」

うずくまったまま病院への連絡を止める十六夜君。どう考えても大丈夫なわけがない。

「ああ、女神ですか!! お美しい!!」

ストーカー男は狂ったような目を私に向ける。その目で見られるだけで拒絶感と怒りが私を支配した。

「貴方に付きまとう男は俺が倒しました」

「貴方は何なんですか!?!」

怒りの表情を私は向けた。拳に自然と力が入る。このままだと彼は死んでしまうかもしれない。

私が……守る。そう覚悟を決めた次の瞬間……。

「僕はあなたを愛する者でぶわああ!」

——男の顔に十六夜君の正拳がめり込んだ。

「ええ!?! 十六夜君大丈夫なんですか!?!」

「はい」

「でも、ナイフが刺さって……」

「大丈夫です。服の下に国語辞典四冊入れてますから」

「えええええ!?!?!」

彼は制服の中シャツの中から国語辞典が四冊零れ落ちる。その内一冊にはナイフによって傷ついた跡。あれが身代わりになって結果的には良かったのだろうか、だとしても普通服の下に入れるだろうか?

「咄嗟に殴っちゃたよ……初めて人殴ったよ……正当防衛だからいいか……」

何かオロオロしてる。凄いか、凄くないのか。強いのか強くないのか、良く分からない。だが、ストーカーは気絶しているようで、その後の展開はあっさりしたものだった。

警察到着後、ストーカーは逮捕。私たちは事情を説明。警察の人は大分怪訝な顔をしていた。理由は彼の持ち物だ。激辛水鉄砲、電動ガン、国語辞典四冊。彼はあたふたしながらも事情を説明。

色々してるうちに時刻は八時を回っていた。帰り道は二人で歩く。

「十六夜君」

「なんですか?」

「私を守るためにずっとそばにいたんですね」

「まあ、そう言えなくてもいいですかね」

一歩間違えば死んでいたかもしれない。それなのに大したことはないように彼は告げた。それを聞いていると何かが込み上げてくる。「どうして!?! 私たちはまだ会ったばかりで、私はあなたに酷いことを言ってる、学校では変な噂までたってるんですよ!?!」

「貴方が損してるだけじゃないですか!! 不良の時も一人傷ついて!!」

私が声を荒げると彼は困ったように苦笑いを浮かべる。

「落ち着いてください。そんな声を荒げる事でもないですよ」

「荒げますよ!?!」

ずっと心の底にあったものが出てこようとしていた。もう考えたくもないこと。

失敗した、裏切られた過去。こんなこと人に言うことではないのに自然と口からポツポツと零れ落ちる。

「私は……以前友達を庇って裏切られました」

その話を始めると彼の顔から笑顔が消えた。

「親友だった人をいじめから庇って、私が今度はいじめの標的にされたんです」

『銀堂って援行してるらしいぜ』

『マジ!? ワンチャンヤれるか?』

『ヤリマン説もあるからいけんじゃね?』

男子の会話が聞こえてきた。根も葉もないことで性的に変な視線を向けられ傷ついた。

『可愛いからって調子乗ってるよね』

『前からウザイと思ってたんだよね』

女子からも疎まれ、聞こえるように悪口を言われた。

でも、それなら何とか耐えられた。一番傷ついたのは……。

『親友じゃなかったの?』

『コハクちゃんって前からウザイと思ってて』

『親友にも嫌われてウケル』

『それな!!』

庇った一番の親友が一緒になって、私の悪口を言ってる時だった。

「だから、もう誰も信用せず打算で生きていくと決めたんです!! 友情とか善意とかそんなものを信用しないと決めたんです!!」

「なのに、貴方を見てると、またそれに手を伸ばしたくなる。もしかしてこの人ならって思ってしまうんです」

「昔それを信じて勇気を持って戦って、無駄になって失敗したのに……」

私は全てを吐き出した。目からは涙が零れ落ちて肩は震えていた。こんな私を見て彼は何て言うだろう? 中々返答に難しいことを言ってしまったと思っただが……。

——彼は直ぐに返してきた

「無駄じゃないし、失敗もしてないと思いますよ」

私は目を見開いた。

「確かにいじめられていた親友を庇って裏切られて辛い目に遭ったかもしれない。でも、無駄でも失敗でもないと思います」

「どう、して? そんなこと言えるんですか?」

「銀堂さんが誰かを救おうとして動く姿に憧れを持った人がいる、心震わされて勇気づけられた人がいる、どれだけ傷ついても誰かの為に手を伸ばしたあの時の銀堂コハクは誰かに希望を与えたはずだ。貴方のあの時の姿は何よりも眩しくて、美しくて、誰よりも優しくて、カッコよかったのだと思います」

知っているのか？ 私の事を、過去を。そう思ってしまうほど彼の言葉には何か力があつた。彼は真つすぐ私の目を見て言葉を続けた。「確かに、裏切られて傷ついたのかもしれない。でも、銀堂コハクのしてきたことは無駄じゃない、失敗でもない。誰が何と言おうとその事実だけは絶対です。色々胡散臭い俺だけどここだけは信じてください」

その言葉だけで私の心の扉が強引にこじ開けられ、崩壊したダムのように涙があふれる。彼の胸板に抱き着いて私はしばらく子供のように泣き続けた。なぜ抱き着いてしまったかは分からない。でも、勝手に体が動いてしまった。



「いいですか!! このことは絶対内緒ですよ!!」
「泣き止んだ後、俺の制服から離れた時に鼻水がびよーんと伸びたのは誰にも言わないので安心してください……」

「馬鹿にしてるでしょう!! 口元が凄いにやけてますよ!!」
私が泣き止んだ後再び歩き出した。いつものように彼は家まで送ってくれると言ってくれたのだが離れた時に、鼻水が付いていたのは死ぬほど恥ずかしかった。彼はクスクスと笑い私は顔が真つ赤になった。

でも、大声で泣いて洗いざらいぶちまけたらスッキリした。信じてみよう、もう一度。彼の言葉と行動。信じる理由はそれで十分だ。私は微笑みながら彼と一緒に歩いて行く。

……彼を見ていると、何だか心臓が高鳴る。今まで感じたことのない何かを感じて顔が熱い。

鼻水の事が恥ずかしいのだろうか？ いや、それ以上に何か？

——何かが私の中で芽吹いた、そんな気がする。



まさか、銀堂コハクも俺をつけていたとは……。

ストーカーをつけるとは大胆なことをする。感心と言うか驚きと言うか……。

彼女の傍にずっといた理由は、ストーカーが常に一緒に居る俺を疎ましく思うのは容易に想像がついたから、彼女を守るだけでなく俺にヘイトを向かせるためだったが。

やっぱり全ての物事がうまくはいかない。本来は俺一人で挑むつもりだった。そして、そのまま警察に突き出すつもりだった。びっくりして油断してしまったのは俺の落ち度だ。もつと臨機応変に対応するべきだった。

でも、国語辞典を服の下に入れていたのは正解だった。相手がナイフを使ってくることは分かってたから準備してたが、本当に助かった。その後警察の人に説明するのは何気に恥ずかしかった。こいつ、思春期特有の厨二病か？ 的な視線を向けられ結構きつかった。

その後さらに予想外だったのは、彼女が自身の過去を話してきたことだ。彼女は自身の事を話すようなタイプじゃないし。ハッピーエンドで気持ちよく終わりみたいな感じで終わろうと思ってたので、急にシリアスになったのには何を言おうか一瞬迷ったが、普通にラノベの感想的な事を言ったのもかなり恥ずかしかった。

俺何歳だよ？ 前世合わせたら結構年いってるのに臭いセリフを言うのは後になって恥ずかしくなる。

まあ、銀堂コハクが何か元気出たっぽいから良かったのかな？

十二話 恋!?

さて、不良、ストーカー両方を退け無事『ifストーリー』であるバッドエンド一卷分を回避してから一週間が経過した。

俺の変な噂は、銀堂コハクが色々説明してくれたおかげで無事無くなった。校内からは偶に尊敬の眼差しを向けられた。

しかし、二丁拳銃で倒したということまで広まり一部では厨二の疑いがかけられた。

「あ！ 二丁拳銃！」

「懐には、国語辞典入れてるらしいぜ！」

「ダブルデストラクションっていう二つ名があるらしいぜ！」

「絶対に拗らせてるな」

色々あり恥ずかしくはあったが……まあ良しとしよう。

しかし、今回の俺の活躍は中々だったのではないだろうか？ もっとうまくできたかもしれないが、ベストは尽くせたと思う。俺は凡人だがそれ故の準備をしてきた甲斐があったという物。だが、電動ガンはいらないという事実を発見した。激辛水鉄砲で無双できるので、これからは激辛水鉄砲二丁拳銃スタイルを確立していきたいと思っている。

因みに、あれから、彼女に付きまとうのは止めた。色々理由はあるが、一番はバッドエンドを回避したこと。次に他のヒロインをバッドエンドから回避させなければならぬということが挙げられる。

胸糞悪い『ifストーリー』は繋がっている。二巻は、銀堂コハクが殺されてしまったところから始まるのだ。だからこそ次に何かが起こることは必至と言える。色々考えてはいるが、まずは彼女と仲良くならなければならぬだろう。

“ 火原火蓮 ”と……。

その為に『魔術学院の出来損ない』というラノベの知識は必須とも言えるだろう。

彼女が最も愛する作品であり、この世界では超がつくほどの人気作品。アニメ化もしている。

『魔術学院の出来損ない』が一番好きな彼女だが、これだけと言うわけではない彼女は重度のオタクだ。彼女と仲良くなるにはラノベ、アニメ、漫画等をよく知らなければならぬ。幸い俺はこういつたジャンルは嫌いではないし、前世でも好きだったためサクサク読むことができた。

今俺が通っている皆ノ色高校に入学する前から、必要なオタク知識は蓄えていた。彼女と仲良くなる準備は完璧と言ってもいいだろう。後は……俺の勇気しだいといったところだ。

俺は女子と会話するのが得意じゃない。銀堂コハクとは何だかんだ話せたが慣れるまで時間がかかったし、最初は当然だが緊張しかしていなかったんだが、そうも言っていられない。だからこそ、今日の昼休み食堂で食事をしてるだろう彼女に、俺は火原火蓮に話しかける!!

ホームルームが始まる前の時間に『魔術学院の出来損ない』第一巻を読んで知識を復習しながら俺は決意を固めた。

「おっ！ それって『魔術学院の出来損ない』だろ？ 好きなのか？」
「まあな。佐々本も知ってるのか？」

朝から復習していると前の席から興味深そうに佐々本が話しかけてきた。

「アニメ少し見たくらいけどな」

「そうなのか。面白いよなこれ」

これは嘘ではない。確かに火原火蓮と仲良くなるために読み始めたが予想以上に面白かったので、販売されている単行本全部買って即読みしたくらいだ。

「ああー、確かに結構面白かったけど……」

「けど？ なんだよ？」

「俺はエロ本を眺めたほうが楽しいからな!!」

「だと思った」

「エロ本もアニメ化しないかな？」

「それは、無い」

下らない事を考えている佐々本は放っておいて俺は読書の続きを始めた。

読みながら、やっぱり面白いなどと改めて感じた。



あの日、私が子供のように泣いてから一週間が経過した。彼に対するお礼も兼ねて学校の変な噂を解決するために色々話したのだが一部笑いを堪える生徒がいたのは謎だ。

あれから、一切彼は近付かなくなった。話しかけても来ない。登下校は一人でするようになり、少し寂しい……わけではない、ないっただけ。もしかして、また近くにいるかと後ろを振り返ってみたりするが、居ない……。彼との接点が全く無くなってしまったことを気にしているわけでもない。

だって、別にどうでもいいから。彼には感謝している。嫌いという感情はないがそれ以上の感情はない、はずなのだが……。

最近気付いたら目で彼を追っているような気がする。特に意味はないが追ってしまう自分がある。今は小説を楽しそうに読んでいる。顔にはあまり出ていないが気分がいいのが分かる。

「銀堂さん」

「は、はい!？」

彼を見ていたらいきなり後ろの夏子さんが話しかけてきたので、少々大きな声を出してしまう。

「あ、ごめん。びっくりした?」

「いえ、大丈夫です」

野口夏子さん。私の後ろの席で天然な感じだが、何処か鋭い感覚を持っており、勉学に対する知識はかなりのものだと言うことは入学してから短い期間でも分かった。

「そう? ならいいんだけど。実は銀堂さんに聞きたいことがあった」

私が過剰に驚いたことで彼女に気を遣わせてしまったようだ。最近、彼女とは今まで以上に接する機会が増え、友達とも言える関係に近いかもしれない。

彼の言葉で私は、もう一回信頼とか友情を信じてみようと思い始めたこともあり、夏子さんとはこの一週間で今まで以上に話した。まだ、完全に信用したわけではないが、悪い人ではないことは分かった。「なんですか?」

「銀堂さん、黒田君の事好きでしょ?」

「え? ええええええ!!」

彼女はいきなり何を言ってるのだろうか!? 何を言ってるんだろうか!?

そんなわけない。勝手に勘違いしている!!

「やっぱり」

「ち、違います!」

「だって、この一週間事ある毎に十六夜君を見てるんだもん。分かるよ」

「勝手に決めつけないください!!」

からかうように夏子さんは視線を向ける。確かに彼を見てたかもしれないが、それだけで好きとか、そんなのは……ない!

「またまた、好きなくせに」

「好きじゃないです!」

「じゃあ、嫌いな?」

「嫌いでもないですけど……」

あれだけ色々してもらって嫌いなはずはない。救ってもらって庇ってもらって感謝している。だけど、それだけ……。

『銀堂さんが誰かを救おうとして動く姿に憧れを持った人がいる、心震わされて勇気づけられた人がいる、どれだけ傷ついても誰かの為に手を伸ばしたあの時の銀堂コハクは誰かに希望を与えたはずだ。貴方のその時の姿は何よりも眩しくて、美しく、誰よりも優しく、カッコよかったはずです』

まるで見て来たかのように、私の一番欲しかった言葉をくれた。そ

の時を思い出すと胸がドキドキする。

「好きでもないです……」

「私、こんな分かりやすい人初めて見た。銀堂さん、顔真っ赤だよ」「え?」

思わず手で頬を抑える。確かに少し熱い……。

「これは、違うんです! 朝から熱っぽくって!」

「あ、はい。もうそれでいいです」

何とか誤解が解けて一安心。なんだか生暖かい目で見られているような気がするが、気のせいだろう。

再び彼に視線を向ける。この時特に意識はしていなかった。自然と向いてしまったのだ。彼を眺めていると、隣から再び生暖かい目が。気づいたときには遅い。顔がさらに熱を持つ。

「ほら、やっぱり見てる。つい見ちやうほど好きなんですよ?」

「ち、ちが。これは、あつちに可愛い鳥がいて」

「言い訳下手糞すぎ」

「本当ですよ! 本当になっていたんです!」

ニヤニヤされながら見られると恥ずかしい。ああ、まだ誤解が解けていないようだ……。私は恥ずかしくて俯きながらも、また小説を読んでいる彼に目を向けた。

紅蓮の少女

十三話 オタク

昼休み。ついに来たのだ。彼女が好きな『魔術学院の出来損ない』の単行本を持って食堂に向かう。

「十六夜。一緒に飯行こうぜ」

「悪い。用があるんだ……」

「無駄に貫禄があるな。分かった、また今度な」

「ああ……」

今の俺はいつも以上に集中している。重要なのだ、最初の掴み。彼女と親しい関係になるためには最初の印象を良くしなければならぬ。

ああー、緊張するよ。だけど、行かないとな。

教室を出て食堂に向かう。歩きながら彼女について考える。

火原火蓮は基本的に一人で過ごす。彼女は人と接することや気持ちを上手く伝えることが苦手なツンデレタイプだった。

さて、そんな彼女にどうやって接触するかと言うと、目の前でラノベを読むといういたってシンプルな手段だ。彼女の大好きな『魔術学院の出来損ない』を目の前で読まれたらウズウズするだろう、語りたくて。

そして、話しかけてくるだろう。最悪話しかけてこなくても、気になっただけなら俺から話せばいい。違和感一切なしで関係を持つ。

フッフ、俺って策士だな。なんて、ふざけてる場合じゃないな。

食堂に無事到着。辺りをぐるりと見まわすと早速発見。

紅蓮のような瞳と髪。髪はツインテールでスタイルは……まあ、女性の魅力は体じゃないので特に語ることはない。それにしても、やはり1人で座っているな。

「すみません。カレーください」

「はいよ」

代金を支払ってカレーを渡してもらうまで少し待つ。しかし、ここであることに気づく。いきなり向かいに座ったら変だということを考えてなかった。周りの席結構空いてるし、不自然かもしれない。まあ、良いかな？

「はい、カレーね」

「どうも」

緊張してきた。やっぱり凄く可愛いからドキドキして腕も震えてきた。

今日はやっぱりいいかな？ まだバッドエンドまで時間あるし。いや、今やらないでいつやるんだ。先延ばしは良くない。

——俺は行く。

ゆっくり彼女の下に近づいていく。ちなみに彼女もカレーを食べている。近づくと俺に気づいてようで顔を向けた。心を落ち着かせて勇気を出して食事を共にしようと言わなければならぬ。

「あの、ぐっ一緒してもいいですか？」

「……周り大分空いてるけど」

それを言うなよ！ ちょっとの違和感は放っておけよ！ いきなり出鼻を挫かれ心が折れかける。だが、この程度で引き下がるわけにはいかない。

「ぐっ一緒してもいいですか！」

「ええ？ まあ、良いけど……」

強めに言えばこんなものだな。前世を合わせれば俺の方が大分年上だから、熟年の貫禄に押されたのだろうか。

「失礼します」

「……」

周りからはどう見えてるんだろう？ 俺が彼女に気があるように見えてるのではないだろうか？ そうとしか見えないうらな。

「おい、あれって二丁拳銃じゃないか？」

「ダブルデストラクシヨンの？」

「厨二の奴だろ」

「火原さんに気があるんじゃないかね？」

「聞こえない。何も聞こえない。二丁拳銃とか、ダブルデストラクシヨンとか全く聞こえない。」

「周りは置いておいて目の前の事に集中する。彼女はこちらに目を向けずにカレーを食べておりこちらに興味など微塵もない。まあ、これくらい予想内だ。」

「俺は彼女に本のタイトルがわざと見えるようにして読み始めた。……そしたらすぐに彼女は反応した。」

「!!」

「分かりやすい彼女の反応に内心ほくそえみながら何食わぬ顔で本のページをめくる。すっごいウズウズしてる、しかし若干の対人スキルの欠如のせいで、あちらからは簡単にはこない。」

「この本面白いな。ああー、誰かと語りたい」

「わざとらしく彼女に聞こえるように独り言のように呟く。その言葉に彼女はハツとする。俺がこの『魔術学院の出来損ない』のファンということを認識した。」

「そ、その『魔術学院の出来損ない』好きなの？」

「はい、大好きなんです。これ名作なんですよ」

「そうよね!! 名作よね!!」

「イエス!! いきなりヒットだ!! イエス!! イエス!!」

「上手くいったな。確かに彼女は人と接することが苦手だが、一度心を開くことができれば、その後は凄くフレンドリーなのだ。」

「先輩も好きなんですか？」

「もう、大大大好きよ!!!」

「急にテンションが百上がったくらいの勢いで椅子から立ち上がる。ガタンと大きな音を立て周りの視線が集まるが、彼女は気にしない。同志に巡り会えて嬉しいんだろう。物語ではオタク友達がいなくて

寂しそうだったし……。

「誰、誰が好きなの!!!」

「テル君ですかね?」

「そうよね!! 私もテル君大好きなの!!! 彼氏にしたいなら誰って聞かれたらテル君みたいな人って答えるくらい好きなの!!」

目がキラキラして圧が凄い。分かってはいたが、ここまで押しが凄いとこっちが一步後ずさってしまうな。そう言えば、彼氏にしたいくらいテル君好きって『ストーリー』の何処かで言ってたな。

彼女が好きなテル君とは『魔術学院の出来損ない』の主人公である。性別は男。魔術の才能は殆どなく劣等生なのだが、持ち前のガッツと勇気、様々な策で戦う超人気キャラクター。

この物語の世界観は、中世で魔術が存在するといういたってシンプルな物。学院があり、そこにテル君が入学するところからストーリーが始まるのだ。ちなみにハーレムもの。

「確かにテル君カッコいいですよ。特にセリフとか」

「そうよね!! テル君名言が凄く多いの!! 私全部覚えてるんだけど一番はね……『俺の背中に居ろ。あとは全部俺を信じて待っててくれ』よね!!」

「それって、第一巻の終盤ですよ?」

「そう!! 分かっているじゃない!!」

ああ、凄い好印象。今まで口下手の事もあり語れなかった分、一気に開放したんだな。こんなに騒ぐのは物語でもあまり見たことない……ような気もしなくはない。

「一巻は終盤が凄い良いわよね!! アニメだと第三話!!」

「私、興奮しすぎて大声出しちゃって、ご近所さんから苦情が来るくらいだったんだから!!」

ご近所さんから苦情って……アニメでそこまで騒ぐって、普通はどう考えてもあり得ないが彼女のオタク具合ならあり得ることである。俺は全然驚かない。

「物凄く好きなんです」

「当然よ!! ラノベ単行本、漫画化した単行本、DVDも全部、観賞用に買って、さらに保存用にもう一回全部買ったんだから!!」

さらに保存用にもう一回全部買ったんだから!!」

彼女がかなりの音量で話すので、今までの会話が全部他の食事している生徒に聞こえる。

「え? 火原さんってオタクだったの?」

「知らなかった……」

「マニアだな」

「クール系美女かと思ってた」

周りは凄く驚いているが、俺は火原火蓮という人物がラノベとか漫画とか合わせて五千冊所有してることを知ってるから、これくらいじゃ驚かない。

「凄いですね。俺アニメ見返したいと思ってたので、DVDあるの凄くうらやましいです」

「今度私の家に来なさい!! サードシーズン見終わるまで寝れません、やるから!!」

「是非お願いします」

凄い順調だ。前回の銀堂コハクに比べるとかなり良い展開だな。話して僅か十分で家に呼んでもらえるとは……俺からしたら凄くないんだが彼女のセキュリティも甘すぎではないだろうか? チョロインの印象がするな。

その後も彼女の語りは収まらず昼休みはずっと『魔術学院の出来損ない』について話していた。



私の名前は野口夏子。皆ノ色高校一年Aクラス生徒であり普通的女子高生だ。私は普通なのだが、私が所属するAクラスはかなり個人的なメンツの集まりだ。

その中でも特に個性が強いのは銀堂コハクという才色兼備、頭脳明晰、等を全部持った完璧超人だと思っていた。私は銀堂さんと呼んで

いるのだが、彼女には最近気になる人がいるようなのである。

黒田十六夜。何処か異色を感じさせるフツメンの生徒だ。銀堂さんはこの男子生徒をとにかく気にかけている。

最近は何事あるごとに見てるし偶にポツリと『今日は何で送ってくれなかつたんでしょう？』等と呟き、自問している。

銀堂さんは分かりやすい。本人は認めないが黒田君が好きなんだろう。別に何か言いたいことはないが、この彼女が彼を好きになるまでの過程に二つだけ違和感がある。まず一つ目それは、どうして彼を好きになったのだろうかということだ。

彼女は入学時他者との壁を作っていたように見えた。笑顔で誰とも接してはいたが、心から何かを言ったり信頼したりすることはなく硬い扉で自身を守っているようだった。

しかし、頑丈な扉が短時間で引きちぎられたかのように彼女の態度が変わった。まだ完全に心からと言わけではないが彼女は他者と接するようになった。何かがあつたのだと私は考える。

彼女の在り方を変えた何かが。ストーカーから黒田君が守ってくれたという噂は聞いたが本当にそれだけだろうか？ いや、違うだろう。それ以外もあるだろう。

不良に黒田君がボコボコにされた時も彼女は動揺していた。

彼がしてきたそれまでの言動、そしてストーカー事件の日に決定的な何かがあり、それら全てが合わさり化学変化的な事が起こった。そう推測した。

まあ、これ以上は考えても仕方ないが、ちよつと気になる。聞いても絶対答えてくれないだろうし、自分から話すこともないだろう。

そして、違和感二つ目。これは銀堂さんではなく、黒田君の方だ。彼はいったい何がしたかったのだろう。銀堂さんの事が好きなのではと考えたが、それはなさそうだ。しかし、好きでもない相手に命を懸けるだろうか？

物凄くいい人という可能性もある。と言うか私はこの線で考えている。

が、他にも何かある。善意が九割、殆どであるが残りの一割。隠れて見えないが何かあるように見える。勘だけどね。

それと九割の善意の中にも何かありそう。これも勘だけど……。

こんな感じで特別な人が多いんだよな。全く私の周りには個性的な人がいて困っちゃうな。

——普通の私が劣等感を覚えちゃうよ。

「お昼一緒にどうですか？ お昼一緒に食べてあげてもいいですよ？

うーん、どういえばいいんでしょう？」

まだ四時間目の途中なのに、この後昼休みの食事を誘う練習をしている銀堂さんを見ながら私は微笑んだ。

十四話 本心？

私の名前は野口夏子。普通の女子高生である。実は今私は重大な危機に直面している。折角の食事なのに気まずいのだ。

「……」

「あの、銀堂さん」

「なんですか？」

「食べないの？ 一口も定食に手つけてないけど」

「お構いなく」

場所は食堂。私達は向かい合って食べていると言えるかどうかは分からないが、食べている。銀堂さんはずっととある一点を凝視している。

「マリちゃんもいいわよね!!」

「そうですね」

黒田君と二年の火原火蓮先輩が仲良く食事を共にしているのをこれでもかと見ている。今の彼女の心境は嫉妬からくる怒り。

「……どうしてこうなったんでしょう？」

と思つたら今度は下を向いて落ち込み始めた。自分の好きな人が他の女の子と仲良くしてたらいい感情は湧かないだろう。彼女の都合それがもろに出てしまう。

あんなに食事を誘う練習をしたのに、黒田君は既に食堂に向かっており、火原先輩と食事をしていた。

「と云うかあれは誰ですか!!」

落ち込んだり怒ったり、かなり忙しい。折角の食事も食べない。まさにのども通らない現状。

「あれは二年の火原火蓮先輩だよ」

「そう言えばいましたね。そんな人」

そんな人って……言い方悪くない？ それにしても黒田君今度は火原先輩に手を出すつもりなのかな？

良く分からないな。彼の行動は。気になるが今は目の前の彼女を

何とかしなくてはならない。

「まあまあ落ち着いて」

「落ち着いてますよ」

嘘つけ。返答しながら私を見ずにあちらの二人ばかり見ている彼女を見てそう思う。だが、それを見せられると彼女の恋愛をサポートしてあげたいという気持ちも出てくる。

「銀堂さんは今まで彼氏いたことある?」

「いえ、一度もないです」

少し暗い顔をしたかも。あんまり過去とかは聞かない方がいいのかな?

「そっか。なら恋愛についてあんまり知らないよね?」

「そうですね」

「どうすれば黒田君の気を引けるか、教えてあげよっか?」

「!!!」

——乙女! ここに乙女がいる!

顔が急に希望に溢れてるよ。このご時世にここまでピュアな子がいるなんて……。

「聞きたい?」

「は、い、いえ」

彼女はパイッとそっぽを向く。ああー。意地を張ったな。こんな聞いたら自分が黒田君を好きだと言ってるようなものだから、彼女からしたらそこは認めたくないんだろうな。仕方ない。ここは私が一肌脱ぐか。

「そっか。聞きたくないなら話さないよ」

「……」

「でも、今から私が言うのは独り言だから聞きただければ勝手に聞けばいいんじゃない?」

「!?!」

何なのこの子。ピュアすぎる。

「男の子は単純だから女性にちよつと思わせぶりな態度を取られると気になっちゃうらしいよ」

「??」

ピンとこないのか首を傾げた。可愛いよ。私女なのにドキドキするよ。

「例えば連絡先交換してとか、今好きな人いるの? とか聞くだけでドキドキするんだよ」

「……」

あ、凄い考え込んで。眉間にしわ凄いやせて腕まで組んで悩んでいる。なんて健気で可愛いんだよ。黒田君もうコハクルート突入して。それでハッピーエンドだよ。そう思ってしまうほど彼女を応援しなくなった。

「あと、普通に気持ちを言っちゃうのもオススメかな? さつきも言っただけど、男は単純だから直球で言われると……」

「……」

私が言葉をすぐに言わず溜めると、彼女も興味深そうに視線を私に固定した。

「即落とせる事がある」

「!!」

顔が満面の笑みで満たされる。良いことを聞いたと内心心躍っているようだ。

でも、こんなの大体みんな知ってるんだけど、彼女は知らないから言っただけだね!

「後は、そうだね……品のある女性が好まれる場合が多いから清潔感とか気を付けたほうがいいね。でも、銀堂さんはそこらへん完璧だから心配はいらないかな」

「……」

嗚呼、夢く美しい。男子にモテるのも納得の笑顔だ。こんな子を放っておくわけがない。男子がこぞって告白するのも無理はない。

「銀堂さんは容姿は完璧と言ってもいいよ。だからと言って油断はダメだよ。例えばだけど間違っても鼻水を垂れ流すなんてことはしちゃダメ。いくら銀堂さんでも鼻水垂れ流してたらちよつと引かれ

るよ」

ドーンと彼女は机に頭をぶつけた。ええ?? どうした??

頭を机に着けたまま起き上がってこない。なに? もしかして垂れ流したちゃったの? フォローしないと……。

「鼻水垂れ流しても銀堂さんはセーフだよ」

「……」

ちよつと、起き上がった。

「鼻水の事くらい秒で好感度は取り返せるよ!」

「……」

更に起き上がる。顔はちよつと複雑そうだ。

「これから好感度なんていくらでもあげられるから元気出して!! 銀堂さんは可愛いから黒田君なんてちよちよいでメロメロに出来るよ!!」

「!!」

すごい。本当に純心。ここまでだと、ちよつと遊びたくなっちゃうな……。

「まあ、鼻水で好感度が下がったという事実はどうしようもないけど……」

——再び頭が急降下した。

頭が机に打ち付けられる。

あはははは!!! おおつと失礼だよ。彼女の純粋な気持ちを弄ぶなんて言語道断。

「銀堂さん本当に大丈夫だよ。銀堂さんなら黒田君をメロメロにできるって私確信してるから」

「……」

「ほら、取りあえずご飯食べて。その後もつといろいろ教えてあげるから」

「頂きます」

彼女は顔を上げ黙々と食べ始めた。とある二人組を見ながら……。

そんな彼女を見て本当に恋の応援をしてあげようと私は決めた。



昼休みに火原火蓮と交流を持つことができ、さらに一定の好感度を手に入れることができた。これは今後のバッドエンド回避において順調な滑り出しだろう。

火原火蓮のバッドエンドはまだ先だが、早めに動くことに悪いことは無いだろう。最初の難関は突破したとして今日は帰ろう。逆にいきなり関わり過ぎても良くない気がするしな。

帰りのホームルームが終わったなら、喫茶店でも寄ってパフエでも食べようかな。意外と好きなんだよなスイーツ。六道先生が帰りの連絡事項を伝えてくれているのを聞きながらそんな事を考える。

「連絡は以上だ。気を付けて帰るように」

六道先生が立ち去り生徒達の緊張感が解ける。そしてみんな次の予定に動き出す。俺も行くか。

「ダブルデスクトラクションさんは、コハクちゃんを送って行かないのか？」

「その馬鹿にした視線を今すぐ止めろ」

前の席の佐々本が馬鹿にしたように俺を見てくる。こういう風に二丁拳銃を持っていることを馬鹿にしてくる奴がいることは、もうどうしようもない。聞こえないようにしているが、かなり恥ずかしいのだ。そのあだ名は本当に止めて欲しい。

はぁーとため息を吐く。早く帰ろうと席を離れようとする、教室のドアが勢いよく開く。

——十六夜!! 一緒に帰りましょう!!

先輩の火原火蓮が現れた!!

一緒に帰ろうと言われたら、行かないわけにはいかないな。大方ラノベとか漫画とか語りたいたんだろうが、どっだけ語りたいた。今回はパフエは諦めるか。彼女から来てくれるのなら問題は一切ない。

「あ、はい」

なんか、周りの反応がヤバいな。佐々本俺に中指立ててるし。と言うか男子生徒殆ど立ててないか？

「嘘だろ」

「あの火原先輩と一緒に帰るだなんて」

「島流しにするか?」

「あ、銀堂さん気絶しちゃった」

一年Aクラスの反応なんてお構いなしに火原火蓮は俺に寄ってくる。

「本屋行きましょう! 私のおすすめ紹介したいし!!」

「はい、行きましょうか……」

彼女は俺の手を取り子供みたいに走り出した。明日クラスでなんて呼ばれるんだろう。様々な視線に曝されながら俺達は教室を後にする。



「これが私の一押しで、こっちが最近はやりの奴」

本屋に入ると早速ラノベコーナーで演説が始まった。ここに来るまでもずつと話しっぱなしだったが放っておいたら永遠に話してそうな雰囲気を感じる。

やっぱり彼女の知識は俺とは比べ物にならないな。歩く二次元図鑑とも言えるだろう。

「私ばかり紹介するのは不公平だからアンタも何かオススメ紹介してよ」

「分かりました。そうですね……」

俺が知ってて彼女が知らないラノベなんてあるか? 取りあえず俺が知ってて面白いやつ紹介するか。

「これなんてどうですか? 『異世界に機関銃持つてくのはありですか?』これ結構面白いですよ」

『銃太郎』の奴よね? 確かに面白かったけど他にない?」

「ええと、『最強賢者の無双過ぎる生活譚』はどうですか?」

『ドヤ顔次郎』も見たわ。他にない?」

「……じゃあ、『一万年後の魔王』はどうですか?」

『いキリ三郎』も見ちゃったわね」

やっぱり俺が知ってて彼女が知らないのは存在しないのではないだろうか？

しかも彼女作品をネットでつけられてる主人公のあだ名で呼んでるし、知識が深すぎる。

全部面白くてお薦めなのだが、彼女には既知なのだろう。

「先輩が知らない作品なんて無いんじゃないですか？」

「流石にそれはないわよ。神じゃないんだから」

彼女はラノベ本棚を見ながら笑った。冗談に聞こえないのは俺だけだろうか……。

「あっ！ これもおススメよ！」

何かを見つけ手に取り俺の目の前に突き付ける。結局彼女が紹介している点についてはスルーしておこう。

『影の英雄』ですか？」

知らないな。初めて見た作品だ。表紙の絵に描かれているヒロインと思われる子が結構かわいい。

「これはね、本当は英雄になりたかった主人公の物語なの。でも、主人公は凡人で夢を諦めるんだけど何処か諦めきれない感じがあるのよね。これを読んで自身の心は自分でも案外分らないってことを学んだわ」

「……自身の心は自分でも案外分らないですか」

何か疑問が浮かび引っかかる感じがした。俺は何で目の前のこの子を救おうと頑張っているのだろうか？

知ってるから？ 最悪の未来を？

そういう義務的な理由が行動のほとんどを占めると思っていた。例えるなら義務が九割、善意が一割。でも、もしかして逆の可能性もあるのか？

善意が九割で、義務一割。そして、善意九割の中には……。

純粋な善意と、利己的な善意が混じっていたのでは？

「気に入らなかつた？」

彼女の心配そうな顔と声でハッとす。思考の中から強制的に脱

出し、急いで平静を保つ。こんなこと今考えてもしようがない。

「い、いえ。興味持ったので全巻一気に買おうと思います・・・」

「そう！面白いから買って損はないと思うわ!!」

『影の英雄』は既刊五冊なので一気に購入しても問題は無いだろう。それに純粹に興味も持ったのも確かだ。

レジで購入し店の外に出る。辺りは夕日で赤く照らされており、長いこと本屋にいたことが分かる。

「送って行きますよ」

「いいわよ。帰るくらい一人で出来るから」

「そうですか。では、また明日」

「そうね、あつ！連絡先交換しましょ！」

「は、はい。是非お願いします」

お互いにスマホを出して連絡先を交換する。女の子の連絡先は母くらいしか持ってなかったから結構嬉しい。こんな美人なら尚更だ。

「何かあったら連絡するからね！」

「は、はい」

軽くウインクされ心臓がどきどきし始める。クソ可愛い。慣れるまで相当掛かるな、これは。可愛いじゃん。もう、とんでもなく可愛いじゃん。

「それじゃあね。十六夜！」

「は、はい」

軽く手を振って彼女は帰って行った。クソ、最後に挙動不審になっちゃった。何とかずっと平常心でやってきたのに最後にやらかした。これが前世の弊害か……。

でも、特に違和感を持たれなかったから結果オーライと言えるだろう。俺も今日は帰ろう。

片手にラノベが入ったビニール袋を持ちながら帰宅の道を歩み始めた。すると足に何か当たる。大きな段ボール。

さっきまでこんなのがあったか？違和感があるが、気にすることでもないか。俺は再び帰り道を歩き始める。

「……」

この時段ボールが少し動いたことに俺は気付かなかった。

十五話　こ、恋!?

私の名前は野口夏子。普通の女子高生である。今気絶した銀堂さんを起こしています。

「銀堂さん！　大丈夫！」

「……」

た、魂が抜けてる！　口をポカーンと開けて目も焦点が合っていない。黒田君と火原先輩と一緒に帰る所を見てからこんな感じだ。

「銀堂さん!!」

「っは!!」

そこそこの大声を出すと彼女はようやくやく意識を取り戻す。意識を戻すと彼女は直ぐに荷物を纏め始めた。

「銀堂さん何処に行くの？」

「……野暮用が出来ました」

「2人を追うの？」

「……ええ、まあ」

意外だ。彼への好意は認めないが、ここはあつさり認めるらしい。いや、今は気にする余裕もないのか。彼女は急ぎながら席を立つとそのまま教室を出て行った。

さて……私も追うか。私も荷物を纏めて彼女の後を追った。



彼女は黒田君と火原先輩から十メートルくらい離れたところの物陰に隠れて二人を追っている。頭をひよっこり出し、じーっと一点集中に視線を向ける。そんな彼女を二重尾行のように追っているわけだ。

黒田君たちは楽し気に話しているのも見える。それを見て彼女が歯がゆい思いをしているのはこちらにもヒシヒシと伝わってくる。

火原先輩ってあんな感じではなかったんだけどな。もっと静かなイメージだったんだけど、あんなに話すなんて黒田君とよっぽど話が合うんだろな。何話してるのか良く分からないけど。

このままでは、急に出てきた火原先輩に良いところ取りをされる。銀堂さんもずつとやられっぱなしではない。

「あの、この段ボール頂けませんか？」

「はあー。良いですけど……」

彼女は斜め上の行動をとる。もつと近づいて二人の会話を盗み聞きでもしたいのだろう。八百屋さんの大きい段ボールを貰うとそれに入って一気に近づいた。

十メートルほどの距離は一気に半分の五メートル程に。段ボールに入った彼女とすれ違う人全員が振り返る。素の姿でも振り返られ、隠れても振り返られるとは色んな意味で凄い。

段ボールに入って尾行されたら普通は気付きそうなものだが、あの二人は会話に夢中で気付かない。銀堂さんも会話が聞こえるくらいに近付き、ずつと二人の傍をウロチョロしてたのだが、ここで予想もしない事態が起きる。

「なんだこれ!!」

「スゲーー!!」

「段ボールが動いてる!!」

小さい子供たちに目をつけられたのだ。小学生かな？ 学校も終わりの時間だし、みんなで遊んでいる最中なのだろう。

「オラオラ!!!」

「スーパーキック!!」

「イタ、痛い!! や、ヤメテ~~~~!!!」

い、いじめられてるー!!! キックとかパンチとかされてるよ!!!
ここは私が行かないと!!

「ごらごら、君たちそんなことをしちやダメだぞ!!」

「ええー。こっからが面白いのに」

「そうだ、そうだ」

かなりの喧嘩腰で私に言ってくる。最近の小学生は生意気なんだなあ。

「ううう。痛いです……」

段ボールに入ったままで姿が見えなくても、涙目で痛がっている彼女の姿が容易に想像できた。ふふふ。私が何とかしてあげよう!!

「ほら、飴玉あげるから。見逃してあげて」

普段から携帯している飴玉を子供たちに差し出す。

「っち、仕方ねえ」

「見逃してやるよ」

「感謝しろよ。段ボール魔人」

飴玉を上げると子供たちは去って行った。

「大丈夫? 銀堂さん?」

「夏子さん!? どうして此処に? と言うかなんで私だと分かったんですか?」

「色々偶然が重なってね……」

「そうなんですか。助けていただきありがとうございます」

「気にしないで。それより二人行っちゃったけど良いの?」

子供のラツシュにあい、私と話してらうちに黒田君たちは先に行ってしまった。まだ見える範囲にいるが先ほどよりだいぶ遠い。

「あ!! じゃあ、失礼しますね!」

彼女は再び動き出した。しばらくすると黒田君たちが本屋に入ったので、銀堂さんはいったん段ボールを脱いで本屋に入って行った。

「これとか、良いわね」

「そう言えば面白いって聞いたことがあります」

「……」

なるほど、何となく察しは着いてたけど二人は二次元好きか。しかも、結構踏み込んでそう。これは銀堂さんは踏み込めないだろうな……。

銀堂さん小説呼んでる所は見たことあるけど真面目そうな本でラ

ノベではなかったからね。

話したくても話せないんだろうな。なんか寂しそう……。

今までずっと隣にいた人が急にいなくなったら悲しくなるよね。色々衝突はあったかもしれないけど銀堂さんにとっては一番の大事な人だから、隣に居たいんだろうな。寂しさが彼女から溢れる。少しでも寄り添いたい私は声を掛けることにした。

「銀堂さん」

「夏子さん！ 私をつけてたんですか!?!」

「まあね……」

「何か御用ですか?」

「えーとね。銀堂さんのお手伝いしようと思って」

「何のですか?」

私と会話しているのに視線はあちらの二人に向かう。そして、何処か羨みと悲しみを帯びる。普段の彼女からは想像できない程、今の彼女は心が動いていた。以前は誰にでも平均的な対応で氷のような人だった。

でも、今の彼女は不器用だけど健気で一生懸命。

でも、これが彼女の本質

「恋のだよ」

「ふええ!?!」

彼女の白い肌がきれいな赤に染まる。綺麗な肌の分、変化が分かりやすい。

「私が手伝うよ。銀堂さんの恋が実るまで」

「いや、別に私は……」

私は彼女の手を取る。彼女は過敏に反応する。

「……………」

彼女は少しびびくりしたような表情をして、同時に少し恐怖を持っていた。ここで一気に彼女に踏み込んでいいか分からない。でも、純粹で真っ直ぐの彼女と本当の意味で友達になりたいと思った。

「約束する。銀堂さんの恋は叶うまでずっと協力する。だから、信じて」

「……」

銀堂さんの手は少し震えていた。目を彼女は一瞬逸らす。しかし、その後私に向けた。完璧な信頼はない。彼女の目は何処か疑惑も混じっているけど、少しだけ期待があった。

「あの、私は、いきなり夏子さんの全部を信じることはできないんですけど、でも、そんな私でも協力してくれますか？」

笑顔は何処かたどたどしい。信頼は百パーセントじゃない、三十パーセントもないかもしれない、もしかしたら十パーセントも無いかもしれない。

「うん、もちろん」

—— だけど、今から私たちは友達と言える関係になったのかもしれない。

「よし、それじゃ早速観察しよう」

「観察ですか？」

未だラノベの前で盛り上がる二人を見ながら私は最初にすべきことを告げた。

「うん。黒田君を観察してどういう事が彼の心に響くかチェックするんだよ」

「なるほど」

「そこから彼に効果的な恋愛手段を考察する」

「ほえ〜。なるほどです」

彼女は凄いい感心したような声を上げる。彼女は恋愛を知らないからここは私が引っ張っていこう。

「見てわかるように黒田君はラノベが好きなき感じがするから銀堂さんもラノベ読んでみればいいんじゃないかな？　まずは黒田君との話題を作るのがいいと思うよ」

「ラノベですか……」

「多分だけど銀堂さんは全く知識ないよね？」

「少しは知ってます。ラノベとはライトノベルの略称で、普通の小説より簡単に手に取りやすく若い年代の方々が好んで読むジャンルで

すよね?」

「まあ、そうなんだけどね」

ラノベをこんな丁寧の説明する人初めて会ったかも。ラノベ読んだことないんだろうな、真面目でアニメとかゲームとかやらなそうだし。

「銀堂さんは読んだある?」

「いえ、一度も・・・」

やっぱりそうだね。いつも読んでるの凄い真面目で小難しそう
なやつだからね。

何だっけ? いつも銀堂さんが呼んでる本のタイトル。あ! 思い出した。

『一から始める憲法改革』だった。うん、ラノベとは無縁。

「取りあえず『魔術学院の出来損ない』をお勧めするよ」

「いつも十六夜君が読んでるやつですか?」

「その通り。流石いつも見てるだけあるね」

「あ、いや、その……はい……」

もう協力関係だから隠す必要はないと言うのは分かるが、彼女が秘密にしていることを話してくれたのは嬉しくて私は少し頬が緩んだ。そして、恥ずかしそうにしてる彼女に説明を続ける。

『魔術学院の出来損ない』は凄い人気なんだよ。私は見たことないけど面白いって話はよく聞くんだ」

「そうなんですか」

「全体のプランとしては『魔術学院の出来損ない』を買って読む。その後黒田君に共通の話題を持って話しかける。以上」

「分かりました。『魔術学院の出来損ない』買ってみます」

彼女が購入の決意を固めていると銀堂さんの目の色が変わる。理由は黒田君だ。

何か一冊の本を持って考え事をしている。結構深いところまで考え込んでるね。

「十六夜君。何か考えてますね」

「うーん。葛藤かな? 何かあの本に思う事でもあるのかな?」

暫くすると火原先輩に声を掛けられ意識を戻す。そのまま二人はレジに向かう

「先回りしましょう」

「うん、いいんだけど。もしかして……」

私達は段ボールに入った。まあ、予想はしてたけどね。これ実際にやると結構恥ずかしいな。

そんな事を考えていると二人が出てきた。会話を聞くためにこっそり近づく。

二人は本屋から出てきた後も会話は止まらない。

そして、

『そうね、あつ！ 連絡先交換しましょ！』

『は、はい。是非お願いします』

「れ、連絡先？」

「落ち着いて。後で銀堂さんも貰えばいいんだから」

自分が持っていない事に対する嫉妬からか彼女は乱れ始めた。私がお話も言っても落ち着きは中々取り戻せない。

『何かあったら連絡するからね！』

『は、はい』

あら、黒田君照れちゃってる。確かに火原先輩は可愛い。でも、これは。

見つけちゃったかもしれない。黒田君を簡単に落とす方法。

その後黒田君は近付きすぎた私達の段ボールにぶつかり一瞬怪しむが、すぐに帰って行った。彼が離れたと同時に段ボールから出る。

「連絡先……？」

「大丈夫だって。明日聞けばいいから」

「私は一か月ほど、一緒に居たのにあの人は一日で……」

「ほら元気出して。私、黒田君を落とす方法一つ分かったかもしれないから」

「ほ、本当ですか♪」

切り替えが早い！　それが彼女の良いところ!!

「取りあえず『魔術学院の出来損ない』を買いに行こう。買いながら話すから」

「はい!!」

私達は再び店内に戻り黒田君たちが居たラノベコーナーに向かった。ラノベコーナーはありとあらゆる作品が出版社ごとに並べられていた。

『魔術学院の出来損ない』は、どれかなあー？　あ、あつた。

「ほら、これ！」

「ありがとうございます。ちょっとあらすじ読んでみますね」

彼女に渡すとすぐにあらすじを読み始めた。少しでも早く共通の何かが見たいと言う彼女の願いが透けて見えた。

彼女は読みながら眉を顰めた。

「どうかした？」

「この本って、魔術がある世界のお話が載ってるんですね……」

「タイトルに魔術って書いてあるくらいだからね」

「よく考えたらこのお話は異世界のお話ということですよ？」

「よく考えなくてもそうだね」

真面目な彼女にはこういう異世界系のお話は合わないのだろうか？　だとするなら現代をモチーフにしたラノベでも……まあ、私もほとんど知らないけど

彼女は異世界が合わないと思っていたが、次の言葉で、やはり彼女は斜め上の考えを持つことが分かった。

「異世界で魔術がある。ということとは現代とは全く違う文化によって発展した世界のお話ということになります。しかも、そこに科学では説明されていない未知の法則によって現象が起こる魔術……私の理解力でこのお話を話題にすることは不可能に近いかもしれません……」

「……」

そこまで深く考えるな!!!!
ラノベは気軽に読めるんだよ。さつき自分で気軽に読めるって

言ってたじゃん。

確かに原理とかは良く分からないけど何となくでいいんだよ。

「そこまで深く考える必要はないと思うよ。もっと気を楽しんで読んでみたら?」

「そうですね。あまり考え過ぎずに読んでみます」

彼女は難しい顔をしながらも『魔術学院の出来損ない』の一卷を購入した。その後店を出て帰り道を歩く。段ボールを持ちながら。

「それで、さっき言った黒田君を落とす方法だけ」

「はい!」

「黒田君女性への免疫がまるでないね」

「??」

彼女は私の次の言葉を待つように首を傾げる。

「ちよつと、銀堂さんがあざとい行動をすればあつという間に操り人形みたいになんか黒田君を支配できるよ」

「あざとい行動ですか?」

「男性を強制的にドキドキさせることだよ」

「それをすればいいんですか?」

「うーんとね、例えば近くで見つめ合うとか。付き合ってる人がいるの? って過剰に照れながら聞くとか。思わせぶりの態度でここを騒めかせかせればいいんだよ」

彼は全く免疫がない。うまく隠していたのだろうが、今日の行動で完璧に見破った。火原先輩は確かに可愛いから、そのせいで照れたという事もあるかもしれないが、それだけではない。私の勘だが。

まあ、銀堂さんなら免疫あるなし関係ないけどね。彼女が本気出したら落ちない男なんていないだろう。やり方を彼女は知らないだけ。

「分かりました。ちよつと恥ずかしいですがやってみようと思います……」

「うん。何かあったら言うてうまく立ち回るから」

「ありがとうございます!」

「一つ聞いて良い?」

「なんですか?」

「黒田君を操り人形みたいにベタぼれにさせたらどうするの?」

もしそうになったら彼女はとうするのだろうか。

普通に付き合うのか。それともべたべたラブラブカップルになるのか。そうなったら末永くお幸せにといった感じだ。

「そうですね……フヒヒ」

え? 何する気??

「十六夜君を操り人形みたいに出来たら、今まで構って貰えなかった分

暫くは思わせぶりな態度でからかいつくしてあげたいかもしれない
せんね」

ん?……ちよつと怖いかも。あれ? 育成ミスったかな?

彼女の美貌ならできるかもしれないけど、もしそうになったら黒田君
はどうにもできず犬みたいに彼女の尻を追いかけるんだろうな。
ちよつと可哀そうかもね。

まあ、彼女の性格上簡単に全部事が運ぶとは思わないけど。

十六話 恋進!!

朝から大変だ。こんなことになるとは……。

俺は朝から男子たちから苛立ちのこもった視線を向けられ、ため息をこぼしたくなる。昨日の火原先輩に帰宅に誘われたのが滅茶苦茶嫌だったようだ。気持ちは分かる。もし知り合いが可愛い子と一緒に居たら、俺も中指を立てるだろう。

だって、俺前世から彼女なんていたことないし……。そんなの見たら普通にムカつくし……。

だから、こういう視線を向けられるのは仕方ないのかもしれない。異性と二人でいれば嫌でも恋愛事に持っていきたくなくなるのが高校生だ。

でも、俺には恋愛感情は無い……と思う。

だって、あんな可愛い子と一緒に居れば、嫌でも異性として意識はしてしまう。

前世の年齢とトータルすると明らかに犯罪のにおいがするからなるべく意識はしないようにはしているが、相手が魅力的すぎる。

ちなみに、このクラスの男子達も殆どが俺と同じ非リア充だ。一名だけ例外はいるが、それ以外は非リアである。

「おうおうおう、十六夜君はご機嫌良さそうでござんすね」

「佐々本昨日のは誤解だ。ちよつと趣味が合って本屋で話したただけだ」

三下の不良のような言い回しで俺に寄ってくる佐々本。言っても無駄だろうが、一応誤解は解いておかないとな。俺のためにも火原火蓮のためにもな。

「かああ。流石つすわ、十六夜君。異性と二人で歩いても何もないと

? おいてめえら聞いたか!? 何もないとよ!!!」

「嘘つくな!!」

「このフツメンが!!!」

「鈍感系装いやがって!!!」

「厨二拗らせ国語辞典野郎が!!!」

かなり憎しみが凄い。と言うか最後から数えて二つは本当に止めてほしい。男子達からは憎しみがあふれていた。

「罰金だ!!!」

「リア充税を取れ!!!」

「そうだ、そうだ」

リア充税か。懐かしいな。『ストーリー』にもそう言う展開があったな。ちよつとしたネタ的な物だったな。まあ、このクラスで取られたのはたった一人だったが……。

確か他にもイケメン税、スマート税、女子からキヤーキヤー言われ税、等等など多数取り揃えていた。すべて当てはまるのは彼しかないがな。

「ちよつと君たちその辺にしたまえ。はしたないよ。」

この騒ぎには必ず入ってくると思っていた。『魔装少女』の中でも圧倒的に女性人気が高いキャラクター。その分男性読者からは票がほぼ入らないという偉業を達成した。

金親元次

彼は金親会社という彼の父が経営する会社の息子であり、幼いころからそれはそれは大層よい環境で育ってきたエリート様だ。身長は百九十越え。イケメン、金持ち、清潔感あり、言うことは無駄にカッコいい。イケメンの要素をこれでもかとぶち込んでいる。

何だこいつ? は? 何だこいつ?!

「元次!!! お前は関係ないだろ!!!」

「そうだ! そうだ!!!」

「逆にもつとうるさくなるわ!!!」

「すっこんでろ!!!」

男子からもヘイトが凄い。金親元次はどの世界でも同性からは疎まれるのだ。それほどのカリスマ性も持つ。

「静かに。この教室のレディたちがびっくりしてしまう」

「か、かつこいい」

「朝から幸せ」

殆どの女子が目をハートにする。こんちくしょうが、一度でいいから俺もそんなセリフ言ってみたいよ！

「あああああ!!」

「またキザなセリフ言いやがって!!」

「こっちはそのセリフにびっくりだよ!!」

お！ なんかあつちにヘイトが向いたぞ。このままアイツが全部請け負ってくれば全部解決だな。俺もムカつくし、よし男子達もつと言つてやれ!!

「こいつからも税を取れ!!」

「そうだ！ イケメン税、スマート税、女子からキヤーキヤー言われ税諸々合わせて五万だ!!」

高いな。普通だったらこんな調子で税を取られたら破産するだろうが、こいつは次元が違う。

金親元次は懐から財布を出しあつさり五万、いや十万を出しそれを税の徴収箱に入れた。

「十六夜。君の分も払っておいた」

「あ、はい。ありがとうございます……」

気前がいいな、おい。アイツからしたらちり紙程度なんだろうけど。男子達が敗北したように全員が膝をついた。女子たちはキヤーキヤー言っている。

「気にするな。十万くらいポケットティッシュの様な物だ」

俺は感謝するべきなんだろうけど普通にムカつくな。金親元次の一人勝ちで朝の優雅な時間はすべて潰れた。



朝から色々大変だった俺だが、無事昼休みを迎えることができる。

食堂にとりあえず向かおうとすると、携帯が振動する。ポケットからスマホを取り出す。

確認すると、火原火蓮からだ。内容を読む。

『昼休み暇？ 一緒に食べない？』

交流を持ちある程度の好感を持たれるという目的は、ほぼ達成されたと言っているだろう。もうこれ以上好感度を上げる必要はないのかもしれないが、誘いは別に断る必要もない。

普通に可愛い女子と食事ができるという時点で俺は喜ばしい事の上ない。しかもあちらから誘ってくれた。俺は一度でも異性から食事に誘われたことはあつただろうか？

無いな。全くないな。

よし、行こう。

そう思い食事を共にしたいという内容を返信しようとしたその時、声をかけられる。

「黒田君。ちよつといい？」

視線を向けると、野口夏子がそこに居た。『ストーリー』ではこれと言った活躍の場は無かったが銀堂コハクとはそこそこ仲が良かったキャラクターだったな。ビジュアルも結構いい感じ。黒髪ショートで普通の可愛い系少女の位置づけだ。

ただ、彼女色々鋭いのだ。勘が途轍もなく……。一種の『超能力者』でもある。

この世界にはファンタジー要素として、『魔装少女』と『魔族』以外にもさまざま存在するが、その一つが『超能力者』である。しかし、『超能力者』と言っても大したことはない。『魔装』と比べたら天と地の差があり、直接的な能力は存在しない。

『ストーリー』では正体を明かさずに銀堂コハクたちは戦うが、野口夏子だけは正体に気づいていたようだった。

正体がバレそうになりあたふたする銀堂コハクをよく覚えている。そんな野口夏子が俺に何の用だ？

「どうしたの？ 野口さん？」

「うんとね。お昼暇？」

女子から同じ日に二度も誘われるだと？ モテ期か？

転生して二度目の人生で遂に俺にも念願のモテ期が到来したのか？

いや、落ち着け。ここで取り乱してどうする。草食系男子を演じて、ここは上手く乗り切ろう。

多分、恐らく、いや絶対彼女も俺を食事に誘いたがっている。どうすべきだ？

火原火蓮に折角誘ってもらった。ここで断って関係にひびが入るのは避けたい。

よし、ここは火原火蓮を優先しよう。

「えーと、これから火原先輩と食事……」

「良かった！ 暇なんだね！」

「え？」

良く聞こえなかったのか？ いや聞こえてるはずだ。この距離だし聞き間違えるようなこともないはずだ。

「それじゃあ、銀堂さんもつれて三人で食堂に行こう！」

「え、いや」

「いいよね……？」

「あ、はい」

何か一瞬寒気がしたような気がする。まあ火原火蓮も食事断られたくらいじゃ何とも思わないだろうし、別にいいか。親密度も上がっている。

彼女に断りの連絡を入れておくか。

『すいません。先約があるのでまたの機会にお願いします』

送るとすぐに返信が来た。

『そっか。それじゃあ仕方ない。また明日ね！』

意外と心を騒めかせるメールを送ってくれるじゃないか。また明日も誘ってくれるとは……こういう積極的な感じに俺弱いんだよな。昨日誘ってくれた時も結構ドキドキしてたんだが、上手く隠せていただろうか。

最後でメツキが少し剥がれてしまったが、それより前はどうかだろうか。俺はなるべく落ち着いた雰囲気で行きたいのだが、それがいつまでもつかない。一応前世合わせたら結構の年なので大人感を出したい。

俺は一喜一憂しながら携帯をしまい、廊下に出た。野口夏子と銀堂コハクは既に俺を待っているようだった。

食堂に向かって三人で歩く。俺の隣に銀堂コハク、その更に隣に野口夏子。

銀堂コハクを挟むようにして、足を揃えて歩く。そう言えば、以前のストーカー事件から本当に全く接してないな。同じクラスだから一応毎日会ってるようなもんだが。

「そ、そう言えばお久しぶりです。十六夜君」

「あの、同じクラスですよね？」

「そ、そうでしたね……アハハ……」

まさか、忘れられていたのか？ 同じクラスだからさすがにそれは無いよな？ まあ、印象に残りそうな顔はしていないが……。

「あー！ ごめん！ 私お弁当だったの忘れてた！ 悪いけど二人で食べて。それじゃ」

いきなり野口夏子は弁当を理由に離脱した。ここでいきなり銀堂コハクと二人きり。最近のことなのに何処か懐かしい感じがする。

「それじゃあ、行きますか」

「そ、そうですね」

二人で取りあえず食堂に向かった。食堂に着くと嫌でも視線が集まる。昨日は火原火蓮と一緒に居て、今日は銀堂コハクとくれば色々な所でひそひそ話されるだろう。

二人とも校内指折りの美人女子生徒。また、変な噂が立つだろう。これ以上、どんな噂がたつか楽しみだぜ！ ヤバい、混乱してるな……。

「十六夜君は何を食べますか？」

「えーと、カレーですかね」

「じゃ、じゃあ私もそれで……」

二人してカレーを注文した後、席に座り向かい合う。正面から見るとやっぱり可愛いな。以前の登下校の送り迎えで慣れたはずだったが、やっぱり正面から向かい合うと少し緊張するな。

「頂きます」

「い、いただきます」

特に会話はなくお互いカレーを口に運ぶ。ここは俺から少し気まぐずい空気を何とかしようじゃないか。精神的には俺の方が年上だしな。

「カレー好きなんですか？」

「は、はい。人並みには」

「そうですか」

「はい」

……気まずい。会話を拒絶されたと取っていいのか？

「あの、十六夜君の好きな食べ物は何ですか？」

拒絶と言うわけじゃないらしいな。あちらからも会話を続けてくれるということはそういう事だろう。

「そうですね。カレーとハヤシライスとシチューと唐揚げとかが好きですね」

「そうですか。美味しいですよね……」

「銀堂さんは何が好きなんですか？」

「えっと、パフェとか、好きです」

ああ、そう言えばスイーツ好きだったな。結構スイーツを食べてた記憶がある。

昔の『ストーリー』の内容を思いだしていると、彼女からドンドン話を振ってくれた。

「十六夜君はどうして、この学校に進学したのですか？」

「えーと、何となくですかね……」

もしかしたら、この世界が貴方達『魔装少女』がエグイ目に遭って殺される最悪の世界と言う可能性があったから。そうだった時の事を考え、バッドエンドを回避させるために皆ノ色高校に来ました。な

んて言ったら頭おかし奴認定されるだけだろうな。

「そうですか。じゃ、じゃ好きな教科は何ですか？」

「え？ ああ、体育ですかね？」

「そ、そうですか。逆に嫌いな教科はなんですか？」

「英語と数学ですかね？」

面接か？ 入学の面接なのか？

次から次へと質問が来るがどれもなんか高校の入試で聞かれそうな内容ばかり。皆ノ色高校の入試の時、熱がめっちゃあり、苦しみなから面接をした記憶が蘇る。

「それじゃあ、次は、その、何と言うか……」

「何ですか？」

「今十六夜君は付き合ってる異性の方はいらつしやいますか!？」

こ、これはどういうことだ。普通に答えれば、そんな人いないという回答になる。

だが、問題はなぜこの質問を俺にしたのかということだ。

あ、あれか？ 前回の俺の行動で俺が気になっているのか？

いや、でも、これで違ったら恥ずかしい。そんなレベルじゃない、むしろ死ぬ。でも、銀堂フラグ説あるか？

いや、待て！ 野口夏子と一緒に居たじゃないか!!

つまり、彼女が俺に惚れていて銀堂コハクに頼んで俺について聞いたという説もあるかもしれない。

それなら納得もできる。恥ずかしいから銀堂に頼んで俺に特定の異性がいるか聞いたとか？ ああ、どれだ？ どれなんだ？

銀堂ルート？ 野口ルート？ それともただの勘違い？ 考えすぎ？

もし、どちらかにフラグが立ってたら、高校生と精神年齢三十歳越えが一緒になるのは少し抵抗があるけど……ワンチャン……いや、ダメだろ。

でも……一度くらい彼女を……いや、ダメだろ。

普通に世間話的な感じで聞いてきた説もあるわけだから、ここは無難にまず答えよう。

「いないですね」

「そ、そうですか♪」

ああああ!! その態度やめてくれ!!

なんか思わせぶりな態度っぼいだろ!! 迷わせないでくれ!

落ち着け。いったん整理しよう

銀堂ルートなら俺に特定の人が居なくて嬉しいという解釈で良いかもしれない。

野口ルートなら銀堂コハクが野口夏子に良い報告ができるということで嬉しいという可能性もある。

もしただの勘違いなら、俺が勝手に彼女のちよつとした態度に過剰に反応してるということになる。普通にへえーそうなんだ。的な感じで笑っただけということもありうる。

……………今はいいか。取りあえず無難な俺の勘違いということにしておこう。うん、そうしよう。

これ以上このことは気にしないことにした。



「どうだった? 銀堂さん?」

「はい♪ 本命の質問をするまで少し緊張して遠回りをしましたが、今の所特定の異性はいないようです♪」

「それは良かったね」

「はい♪」

嬉しそうな銀堂の姿を見たら、協力してよかったと思う。まず食事に誘うのが難しいと言うので私が誘った。

昨日あんなに気合満々でからかい尽くす等と言っていたのに、いざ黒田君を目の前になると何も彼女はできなくなつた。顔を真っ赤にして無理無理を連呼。

『ごめんなさい……………調子に乗ってました……………どうか上手く手を回してください』

その後は私が離脱。二人で自然な形で食事に持っていく。

銀堂さんは二人になったら勇気を出して何とか意味深な質問するように言った。さらに、遠回りしてもいいから気持ちを落ち着かせて準備ができたなら実行することが大事ということも口添えした。

「十六夜君も結構動揺してくれました♪」

「それは良かったよ。まずは相手への意識付けからね」

「はい♪」

まずは上手くいつて良かったね。案外、あっさり付き合ったりしてね？ 銀堂さんの美貌ならどんな男子も瞬殺だろうしな……恋の手伝いも直ぐに終わりを迎えそう。だって、銀堂さんだし……。

でも、意外に一筋縄ではないかかないという予感が一瞬したが私は気にしないことにした。

十七話 空想

俺が凡人ということは直ぐに分かった。昔からヒーローとか、勇者とか、英雄とかそんなすごい感じの存在に憧れがあったが、そんな夢は無くなった。

本当に小さい時は自作のヒーローを作っただけでずっと演じていたが、そんなのも所詮空想だ。馬鹿みたいに設定を考え、物凄い頑張っただけで作ったあのヒーローは、何故か未だに記憶に残っている。だが、所詮、空想。何の意味もない。

小学生の時は何となくで適当に過ごした。凡人ということが分かかってしまったが故に、何かに打ち込むということができなかった。やっても無駄だと思ってしまったのだ。

何かが変わったのは、中学生の時だ。ある日一冊の本を見つけた。その本は少女たちが傷つきながらも真つ直ぐ進んでいく英雄譚だった。

その本を読んでいるときは自然と夢を見れた。凡人だった俺が何か特別な思いをしているような気がして楽しかった。

だけど、その夢と楽しい時間も高校生の時に終わりを告げた。その物語が完結してしまったのだ。そこからは以前と同じ普通の生活がスタートすることになり、高校を卒業して大学に通うことになった。

そんな、ある日だ。昔好きだった作品が再び発売されると聞いたのは……。

気になって既刊分三冊全部を読んだ。結果不機嫌に俺はなることになる。胸糞悪い以外の何物でもないその作品は発売が中止になった。まあ、当然だな。スツキリした気分になった。

それからしばらくしたある日、大学に通う道を歩いていると一人の子供がボールを追って道路に飛び出した。そしてそこに車が……このままでは死ぬかもしれない。

何故か咄嗟に体が動いた。その時、脳裏には家族の顔。そして、その後、あの少女たちの顔が……。

そのまま……ああ、最後の最後に浮かぶのが彼女達の顔かよ。
——やっぱり俺は彼女達に……。

久しぶりに見たな。車に轢かれて死ぬ夢。こんな変な夢を見たのは『影の英雄』というラノベを読んだせいだな。変な考えが頭に残っていたのだろう。

俺はベッドから起き学校に行くための準備を開始する。今日は結構重要な日とも言えなくもない。

始まるはずだ。火原火蓮のバッドエンドであり『ifストーリー』二巻の内容である。合同体育祭イベントが……。

このイベントは正直前回よりも楽とは言わないが前回のように二つのバッドエンドが重なり合わない。銀堂コハクの場合、多数の不良とストーカーだったが、今回は一つだけであり一点集中で行動できる。

合同体育祭の実行委員で行われる合同会議にバッドエンドが関わってくる。『ifストーリー』では火原火蓮は実行委員になる運命だった。だからと言って実行委員にならないければどうにかなるというわけでもない可能性がある。

どちらにせよ、俺は実行委員になるつもりだ。火原火蓮はじゃんけんで負けて実行委員になるはずだが、もしかしたらならない可能性も無くはないのかもしれないが関係ない。

なるかもしれないという可能性で動く……それだけだ。俺がすることは。



朝登校すると既に体育祭の話題が出始めていた。教室内では期待

に胸を膨らませる生徒達が多い。

「ここで女子に良いところを見せて……」

「他校に下剤を盛るか？」

「なるほど、急に俺達が運動神経が良くなることはない。ということ
は？」

「そう！俺達上がるのではなく。他を下げるということだ!!」

「天才か……」

男子達は自分たちの良いところを見せたいのか、結構エグイ事を考
えている。佐々本も混じって陰湿な作戦を立てているのだが、こうい
う少し楽しい気な雰囲気になってるのは喜ばしい。

バッドエンドである『ifストーリー』は繋がっている。この時間
軸は銀堂コハクは殺されているので、もつと体育祭どころの雰囲気では
なかったのだ。かなり殺意が芽生えてる男子生徒がいるが、こうい
うのも茶番ができるのがなんか心地いい。頑張って良かったと心か
ら思う。

「金親元次にも盛るか？」

「いや、アイツは見破る」

「クソが、何とか陥れられないのか……」

「なにやら面白い話をしているな。男子諸君」

あ、金親が来た。男子達の殺意がピークを迎える。佐々本が代表
して金親と向かい合いメンチを切る。しかし、身長差が凄いので佐々
本が見上げて金親が見下ろす形になる。

「あ？ 何見下ろしてんだ？ 自分の方が上でも思ってたんのか？」

「僕が他者を見下ろしたことなどないさ。なぜなら常に高みを目指し
上を向いて行くからね。だが、君がそう感じたのならそれは、君が勝
手に僕を見上げてるだけさ」

「「「きやー、かつこいいいい!!!」」」

「ぐあっはは!!」

女子の声援で佐々本が完全敗北し吐血をするイメージが浮かぶ。
佐々本が金親に絡んで勝てることなど無いだろう。あちらはイケメ
ン、金持ち、高身長、清潔感の塊、言う事なんかカッコいい。

それに比べて佐々本は、フツメン、平均身長、エロ本好き。
勝てる要素無いな。

「佐々本おおお!!!」

「畜生！　これが顔面偏差値の差か……」

「俺たちを軽く踏み台にしやがった……」

朝から楽しいクラスで何よりだな。ちなみに金親の席は野口夏子の後ろである。つまり結構頭がいい。クソが!!

さて、ホームルームの時間に六道先生から連絡が入る。恐らく実行委員のことだろう。俺がやるしかないな。

「二週間後、一単色高校との合同体育祭が控えているのは知っていると
思うが、それに伴い各クラスから一人実行委員を選出することになっ
ている。誰かやりたい人はいるか?」

「先生具体的には何をしますか?」

野口夏子が手を挙げて六道先生に問う。内容は結構面倒な物だっ
た気がする。

「一単色高校の実行委員との体育祭のプランについてたり会議、クラス
内での個人競技、団体競技の説明、出場競技決定、後本番である体育
祭の運営も行う」

「うわ、面倒」

「誰得やねん」

「なぜに関西弁?」

「こんな面倒な役職をやりたい生徒なんているだろうか?　いない
だろうな。皆難色を示してるしな。」

「あの、俺がやります」

俺が拳手をして役員になることを宣言。皆が驚きの目線を向けて
くる。DMとか思われてないよね?」

「ほう、黒田。お前がやるのか?」

「はい、やります」

「え、黒田君が?」

「へえー。やるじゃん」

「皆が嫌な事を進んでやるなんて」

あ、ちよつと女子の評価が上がった。

「十六夜。懸賞金賭けるか？」

「畜生、とんだ策士だったか」

「まあ、フツメンだから情状酌量の余地はまだ有りじゃないか？」

「十六夜。君も僕と同じ高みを目指す人間か」

男子の評価は下がった。若干一名上がっても嬉しくない奴の評価が上がったな。

「では、黒田頼むぞ。放課後実行委員で最初の会議があるから忘れないようにな」

「はい、分かりました」

恐らくだが、火原火蓮も実行委員のはずだ。昼休みに確認を取るが……。男子達の嫉妬、ほんのりとある女子からの尊敬の視線に曝されながらも今後のことを考えた。



「え!?! 十六夜も実行委員なの!?!」

「はい。先輩も実行委員とは奇遇ですね」

バッドエンドの『ifストーリー』ならそうなって当たり前であり、勿論知っているが白々しく奇遇などと嘘をつく。こちらは合わせに行ったようなものだが、本当のことを言っても仕方がない。

「私はじゃんけんで負けちゃったのよね……」

「俺は自分から立候補しました」

「嘘!?! こんな面倒な役職に自分から!?!」

彼女は信じられない物を見るような目でこちらを見てきた。まあ、結構大変だから自分からやる人は少ないかもな。

「内申書が良くなるかと思って……」

「あー。そういう事か。確かに悪い事だけじゃないかもね」

彼女は納得したような表情を浮かべた。これくらいの嘘は容易い

な。俺の適応力も上がってるな。

「でも、めんどくさいわよ。めんどくさいわよ!!!」

あー、そんなにやりたくないのか……。ヒシヒシと伝わってくるぞ。二回も言うくらいだからな。

「仕方ないですよ。諦めてください」

「そうよね。本当に、どうしようもなくめんどくさいけど私がじゃんけん負けたのが悪いから……。納得するわ」

本当に納得してるのか？ 言葉と表情が全く合っていないんだが。納得はしてないだろうが彼女は責任感強いからしつかりと実行委員はこなすだろう。

とりあえずは放課後の会議だな。



そして、放課後。各クラスから一名ずつ集まった生徒九人で集まり、会議が始まる。場所は多目的室。机と椅子が用意しており、教師は立ち会わない。生徒の自主性のため俺達だけで会議は行われる。

火原火蓮は自然と俺の隣に座った。ちよつと嬉しい……。

おっと。会議に集中。

「それでは、実行委員による会議を始めます。今日は簡単な説明、競技の確認、実行委員の仕事説明、等を行って行きます。よろしくお願ひします。今年から体育祭は大分変わるのでクラス内で説明できるようによく聞いておいてください」

三年の如何にもリーダーっぽい人が説明を始めた。男子生徒で眼鏡を掛けている。この人『ifストーリー』の方にしか出てない人なんだよな。しかも、あんまり印象強くない……。

『ストーリー』の方にも合同体育祭はあったが、本当にあっさりとした終わりだったんだよな。この合同体育祭はもう大したことのないイベントだった。パパッと終わって次々と進んでいく感じである。それが『ifストーリー』であんな感じになるとはな。

「体育祭は一単色高校と合同で行います。同時に高校での対抗戦でもあります。午前八時半から六時ほどまでで計画を立てています。昼休みは十二時から一時までの一時間です」

配られた資料に目を通しながら説明を聞く。同時に自身の覚えている限りの知識と比べる。大体、俺が知っているのと同じだ。

「競技は各クラスで出場する団体競技。校内で限られた人のみが出る個人競技があります。団体は各クラスごとで出る競技が決まってますから自身のクラスで後は確認してください」

うちのクラスの団体競技は綱引きか。知ってるけど。

「すべての競技が終わった後フォークダンスも予定に組み込まれています。これは自身の組みたい相手と組んで踊ります。男女ペアでも構いません」

うちのクラスの男子が聞いたなら泣いて喜ぶだろうな。合法的に女子の手を握れるからな。ペアを組めたらの話だけど。

「個人競技については各クラス男女一人ずつ二人選出してください。借り物競争とパン食い競争そして二人で一緒に出る二人三脚があります」

うちのクラスだったら金親と野口か銀堂かな？　ここら辺は運動神経もいいし容姿もいいしで人気もあり皆納得するだろう。ああ、でも二人三脚あるなら出たがる奴らが多そうだな。

「明日の六時間目は体育祭準備の時間として与えられているので体育祭の説明、そして選手選出を行ってください」

クラスで司会進行上手くできるかな？　グダらないようにしっかりとやらないとな。だがそれより大事な事がある。

「そして、明後日の一単色高校との合同会議ですが……」

——これだよ。問題なのは。

一番の難所と言えるものだ。ただどこかでしっかり脅して釘を刺

し、ヘイトを俺に向け、豚箱にぶち込めばいいという流れは俺の中で出来ている。

「放課後に実行委員全員で一単色高校に向かい行うことになっていきます」

「本番は実行委員は運営としても働いてもらいます。点数カウント、けが人や体調不良者の対応など、ここに関しては先生方も協力してくれるようですよ」

「だいたい説明しましたが何か質問があればお願いします」

誰も手を上げない。眼鏡先輩はぐるりと見回し質問者がいないことを確認する。

「では、短いですがこれで終了とします。明日の時間にクラスでしっかりと説明、選出ができるように資料をよく読み返しておいてください」



そこまで時間はかからず会議は終了した。俺と火原火蓮は一緒に室内を後にして帰路につく。

「明日はめんどくさいわね」

「そうですね」

道を歩きながら彼女は仏頂面で告げた。めんどくさい今日で何回言っただろうか？

「私あんまり人の前に出るの得意じゃないのよね」

「大丈夫ですよ」

「もう、本当にめんどくさい……」

「お互い頑張りましょう」

明日は大丈夫だが、問題は明後日の合同会議。できるならRTAくらい速攻でバッドエンドを回避したいところだな。

十八話 会議

時刻は六時間目が始まる少し前。五時間目が終わり休み時間として皆の気が緩んでいる。しかし、俺は次の時間司会進行をしなくてはならないので若干の緊張を持っていた。昨日の資料を家で読み込み円滑に進めるようイメトレをしっかりしてきた。

先生手伝つてくれるか？ いや、自主性を伸ばしたり生徒同士で問題を解決させたりするために一年Aクラスに全部任せるだろうな。このクラス俺の言う事聞いてくれるかな？

「お前たち席に着け」

先生の号令で皆席に着き授業開始のムードが出来始める。しかし六道先生は前に立たず椅子に座った。今日は俺が教師的な感じか。

「今日は黒田が進行だ。黒田任せるぞ」

「はい」

「それでは、体育祭の説明を開始します」

簡単に説明を始める。合同競技である綱引きの説明からするが、説明するほどでもない。ざっくりいうと皆で力比べする子供でも知ってるルールなのですぐに終わった。

「それですね。個人競技については男女一人ずつ選出します。借り物競争とパン食い競争、そして二人三脚が個人競技の内容です」

ざわざわし始める。男子が特に反応を示す。佐々本が手をぴんと挙げて疑問を俺に発した。

「先生!! それはつまり男女で二人三脚するということでしょうか!? 手と体を密着させていいのでしょうか!」

俺は先生じゃない。欲望に本当に真つすぐでちよつと引かれるかもしれないが、思春期だから気になるのは仕方ないともいえるな。それに俺も二人三脚が男女でできると言われたら、意識しないのは無理

だしな。

「俺は先生ではありませんが、佐々本の言い方悪いけどそういうことになります。ただ、嫌な場合は二人三脚だけ不参加ということもできます」

此処に関しては一応処置がないわけじゃない。異性とかなり距離が近すぎるのは嫌だと言う生徒がいる可能性はある中で無理にこれはできないという当たり前の判断。

「つち！ そうですか！」

「参加自由か……」

「俺絶対断られるな……」

男子が途端に落胆したな。出ても断られると判断したのだろうか。「では、個人競技出たい人いますか？ いるなら手を挙げて貰えますか？」

誰かやりたい人いるかな。目立ちたくない人とか運動が苦手な人は自分からは立候補しないだろうが、この二つが両方当てはまらない人は意外と少ないから決まるまで時間かかるか。

皆顔を互いに見合わせてどうするか迷っているようだが、ここでいきなり予想もしない人物が手を上げる。

「あの、私がやります」

銀堂コハクが手を挙げた。結構予想外だが文句のある生徒はいないだろう。現に周りも彼女ならいいかと納得している。

そして、美人の彼女は立候補したとすれば二人三脚ができる可能性が生まれるわけであり、可能性が低くてもそれに賭けてみたくなるのが男の性というものである。

「はい!!! 俺もやります！」

「馬鹿！ 俺だ!!」

「じゃんけんだ!!」

金親以外皆立候補したな。銀堂コハクはこつちをジッと見ている。

スツと目線を逸らす。野口夏子が俺に話しかける。

「黒田君もやったらいいじゃん」

「え？ いや俺実行委員だし、当日は忙しいから」

「いや、関係ないでしょ」

「いや、関係あると思うが」

「いや、ないよ」

「皆、黒田君も立候補するって!!」

夏子がじゃんけんをしようとしている男子達に向かって大声で勝手に俺の立候補を告げた。

「ほら、行って」

「あ、はい」

俺は男子たちのじゃんけんの間に入る。そこは何か空気が重いと言うか煩しく同時にむき苦しい。

「俺はパーを出す」

「ほう、なら俺はチョキだ」

「僕はグーを出しますよ」

なんか心理戦始まった。お前らそう言うのをよく知らないだろう。

「それじゃあ、じゃんけん……」

俺が掛け声をしてじゃんけんを始める。全員拳に大分力が入っているようだが、じゃんけんあんまりそういうの関係ないだろ。

「」「」「」「」「」

男子全員がまさかのグー、そして俺はパー。俺の一人勝ちと言う結果で男子の選出は終わりを告げた。

「えーと、俺が選出でいいですか？」

「いいよ」

「いいんじゃない？」

「正直無難だし。可もなく不可もなしだし」

最後の人が言った事が結構傷つくんだが……。

「異議はありません♪ じゃんけんなら仕方ないですよ♪」

「そうですか……。ではこれで終わりにして次の説明に移ります」
銀堂コハクは嬉しそうに笑っていた。これは俺と一緒だから嬉しいと言う解釈でいいのか？ いや、でも……。ヤバい、最近俺が彼女を意識してる。

今は司会に集中にしよう。これを終わらせなければいけないからな。

「えーと後は競技全部終わった後にフォークダンスもあります。これは自由参加であり踊る相手は自分で見つけてください」

男子が再び盛り上がり、女子が引いた眼で男子を見る。これじゃあペアも出来ないだろうな。と言うかフォークダンスのやり方知ってる？ 俺知らないんだが。まあ、やる気もないが。

熱気が収まらぬまま授業終了の時間が過ぎ、なんとか仕事はこなすことができた。



授業終了のチャイムが鳴って黒板の前で一息吐きながら背伸びをする。一気に緊張感が解けて、どっと疲れが体に乗った気分だ。教師には死んでも成れんな。肩を落としていると誰かに肩を叩かれる。

「よくやったな。不器用だが一生懸命さは伝わった。フツ、お前は意外と教師に向いてるのかもな」

六道先生は肩を叩くとそのまま教室を出て行く。六道先生マジばねえっす！

俺は無言で頭を下げた。

「十六夜君」

今度は銀堂コハクに呼ばれたので頭を上げ顔を合わせる。少し照れながら目を合わせてきた。

「えっと、その……。お疲れさまでした」

そのまま彼女は教室から出て行った。ええええ!? 思わせぶりだな

！ おい！！

あ、なんか疲れた。席に戻って一息吐こう。

今日はかなり疲れた。帰りに会った火原火蓮も、人の前に出るのが苦手なので大分疲れがたまっているようだった。お互い疲れているので、すぐに今日は帰宅した。この日は直ぐに睡眠については言うまでもない。



『魔装少女』とは俺にとってどんな存在だ？ ただの物語に出てくるキャラクター？ それは違う。じゃあ、どんな感情を持っている？ それは……。何で救おうとする？ 世界の為と何となく偽善。本当に？

——違うだろ。本当は……。

また変な夢見た。最近こういうのが多いということはラノベのせいだけじゃなく俺の中に引かかる何かがあるということかもしれないな。

昨日の疲れが良く取れてはいないため少し体がだるい。しかし、そんな体に鞭打ってベッドから起きる。そして、学校の準備をして家を出た。

今日はかなり重要だ。昨日より全然重要性のレベルが違う。合同会議で全部終わらせて、この火原火蓮のバッドエンドは終わらせる。



一気にその日は放課後を迎えた。実行委員の達で集まって電車に乗り徒歩で一単色高校に向かう。電車に乗っていると、前に席に小さい子供を連れた親子が見えた。

「ママ！ ガタンゴトン電車揺れてる!!」

「そうね。でも座って。立つと危ないから座ろうね」

優しく母親は子供を座らせた。その後頭を撫でる。

「今度はパパとも一緒に乗りたい!!」

「今日はお仕事だから行けるなら今度の土曜日かな?」

「やった!」

何とも心和む光景だな。実行委員の方々もにこやかになってる。ただ、彼女だけは違う。

「……」

火原火蓮だけは何か思うところがあるようだが、これに関しては俺にどうにかできることではなく、バッドエンドとは関係ないから、深くは考えなくていいかな……。

……それでいいのか? 本当に?

いや、今は『ifストーリー』のバッドエンドに集中しよう。俺は軽く首を振り、思考を切り替えた。

◆◆

電車で最寄り駅に着いた後歩いて一単色高校に向かう。実行委員長の眼鏡先輩を先頭にそこについて行く。

五分くらいで一単色高校に到着した。皆ノ色高校より大きくて綺麗だな。

校門の前では青を基調とした制服を着た女子生徒さんが出迎えてくれる。この人は確か一単色高校の体育祭実行委員長だったかな?

「皆ノ色高校の皆さん、わざわざご足労ありがとうございます。早速ですが、会議する多目的室にご案内いたしますので、挨拶はそちらで」
堅苦しい女の人が俺達を案内してくれる。校内に入り俺達はスリッパに履き替えた。多目的室に着くと、ドアを開け中に入って行く。それにつられて俺達も一言挨拶をして入って行く。堅苦しい女生徒を入れると、俺達と同じ九人がすでに待機していた。
そして、一人の男子教師がにこやかに笑っていた……。

ここまで導てくれた女子生徒は実行委員長らしく、こちらに向き合

い挨拶をしながら軽く頭を下げる。

「改めまして、皆ノ色高校の皆さん、わざわざありがとうございます。私は体育祭実行委員長、福本成美です。本日はよろしくお願ひします」

彼女に合わせるように、後ろの実行委員と思われる生徒達も頭を下げる。それに答えるように

「皆ノ色高校実行委員長、金子太一です。よろしくお願ひします。」

こちらにも彼に合わせて頭を下げる。実行委員長同士が軽く握手を交わすと、ここにいる生徒が席に着き合同会議が始まる。

「では、まずは自己紹介から」

「そうですね。本番では協力する立場ですから」

「こちらから構いませんか？」

「よろしくお願ひします」

一単色高校から自己紹介が始まる。拍手を交えながら次々として行く。

あちらの自己紹介が終わりこちらの番になる。こちらにも拍手を交えながら挨拶を行っていく。

「二年、火原火蓮です。よろしくお願ひします」

そして、俺の番がくる。普通の感じでいいか……。

「二年、黒田十六夜です。よろしくお願ひします」

これから合同会議がスタートする。俺は一度深呼吸をした。

十九話 怨念

今度はあちら側、一単色高校の自己紹介。淡々と自己紹介する中、一人の教師の番になる。生徒だけでやるはずの自己紹介だが、合同会議であると言う事でもしかしたら中々意見の食い違いなどから会議が円滑に進まない場合、教師が手を貸すと言う事で配置されているのだが……。

この教師、名前を坂本典礼。かなりのイケメンであり、この一単色高校では物凄い人気のある教師だ。年は結構取っているがイケメンであるので女子人気高め、男子からもノリがいいので人気がある科学を専門にする教師。

ただ、過去に少し火原火蓮の両親と因縁ともいえる物がある。嘗て高校時代を同じクラスメイトとして二人と過ごしていたのだ。そして、火蓮の母である火原孤火奈。旧姓赤井孤火奈に好意を持っていた。高校時代の赤井孤火奈は物凄いモテた。

誰もが彼女に見とれてしまうのだ。そして坂本典礼もその内の一人だった。他の者と違う点は彼は自身に物凄い自信があった、プライドがあったと言うところだろう。

生まれた時から何でもうまくいって、欲しいものは何でも手に入れて、欲望というものに見境がなかった。その彼が唯一手に入れられなかった物ともいえるのが、赤井孤火奈。自信満々で告白したら玉砕して、その告白した場所で無理やり自分のものにしようとしたところを火原炎羅によって阻止された。

孤火奈はこの時に炎羅に好意を持っており、炎羅も元から孤火奈の事は気になっていたので付き合うことになったのだ。

これが坂本典礼には許せない。火原炎羅は勉強もできない、運動もできない、ドジでマヌケでよく馬鹿にされていた、自身でもしており完全に下に見ていた生徒でもあった。だからなんとか仕返しをしようとするが、それが成功しない。

二人は常に二人でおり、ほとんど一人でいない。そして、ダメダメ

だった炎羅が付き合う事をきっかけに今まで以上に様々な事を頑張るのだ。

それにより、周りが徐々に認め始める。そして、今まで自分と一緒に馬鹿にしてきた連中も、彼と仲良くし始めた。しかし坂本典礼はプライドと屈辱でそんなことはしない。そのうち、孤立して高校を卒業をした。

恨みを抱えながらも復讐する機会など無く、恨みは彼の中で残り続けた。だが、もう昔の事だからと気にしないことにしたが、教師となり一単色高校で教師をしているときに合同体育祭が行われ、そこで火原火蓮を見つける。

彼は一目で確信する。嘗ての赤井孤火奈そっくりなのだから。そして火原と言う苗字で結婚してできた子供という事も簡単に予測ができる。

ここで昔の恨みが沸々と彼に湧いてきた。まずは合同会議が終了した後学校の見学を勧め、その中で彼は火原火蓮に話しかける。昔、君の両親とクラスメイトだったと……。

話に興味を持った彼女は、見学をしながら聞くことにした。最初は普通に見学をするのだが、理科準備室を見学するときに鍵を閉め急に彼女に襲い掛かる。

そこには人などいないし、男の力に勝てるはずもなく、なされるがまま……。写真を撮られ彼女は脅される。最初は娘に多少の汚点を残せばこれくらいいいかと思っていた。しかし、彼の恨みと何かがここで枷が外れてしまう。

写真による脅しはかなり彼女にとって有効手段で、何度も行為に及ぶうちに倫理観が壊れ、火原火蓮を殺してしまう。もちろん坂本典礼は警察に捕まったが、火原火蓮の命はそこで終わりを告げる。

坂本典礼と言う人物は元から狂気的な何かを持っており、それが火

原火蓮を好き勝手しているうちに完全に表に出てしまった。

『ifストーリー』の小説では特に坂本典礼の恨みと嫉妬が書かれていた。恐らくだが、彼女を実行委員にしなくても、合同体育祭で彼女の顔を見たら恨みを思い出すだろう。

火原火蓮という人物を見つけたら、彼の中にある狂氣的な物が出てきて行為に及ぼうとする。それなら今すぐにでも解決した方がいい。

合同会議は実行委員長である福本成美と金子太一が適当に進めるので、他の実行委員は何もしなくてもいいとまではいかないが、殆ど聞き流し状態。そんな中、坂本典礼は何度も火原火蓮へと視線を向けていた。これはもう今すぐにでも豚箱にぶち込みたいが……流石にそれはできない。

銀堂コハクの時と同じようにヘイトを俺に持つていくか……。ちよつと煽ればすぐに手を出してきそうな奴だ。煽つて俺に敵意を向けさせ、そして……ぶつ飛ばす。警察に連行。これで完璧だ。

「それでは以上で会議は終了と言う事で何か質問や意見がある方はいらっしやいますか？」

あちらの実行委員長である福本成美がぐるりと周囲を見回す。特に誰も言う事も聞くこともないようだ。さて、普通ならここで解散になるはずだが……。

「では、これにて合同会議は終了と言う事でよろしいでしょうか？」

確認して会議を終了という形とする。皆ノ色高校の実行委員はここで帰るのだが……。

「ちよつとまってもらえるかな？」

全員が坂本典礼に視線を注ぐ。ここで適当な理由をつけて学校見学を進めるんだよな。この時火原火蓮を陥れようと考えているが、一対一を作る為なんだよな。そして、できなくても皆ノ色高校を尾行で

もすればいいと思っっている。

「せっかくだから皆ノ色高校の皆さんに校内を見学してもらいたいんだよ。自分たちの校内と見比べてここが良いとか、改善した方が良いとか意見を聞きたいんだけどどうだろう」

「確かにいいかもしれませんがね。大分予定より早く会議も終わっていただきますから。皆はどう思う?」

金子太一が実行委員たちに質問を投げかけた。他の実行委員も特に異論はなく、全員が軽く頷くことで見学が決まることになる。

やっぱりこうなるか。坂本は火原火蓮に目線を向けている俺が知っているということによる錯覚かもしれないが何処か狂気的な目線に見える。

俺はとりあえず火原火蓮と一緒にずっと周ることで牽制と同時に挑発にもなるだろう。過去の中で一番恨んでいるのは、俺の予想だが赤井孤火奈より火原炎羅だと俺は思っている。

火原炎羅という人物は下に見ていた男で、それなのに自分より最後は友達に囲まれ自身の好きな彼女を奪ったという意識があつた。赤井孤火奈にも恨みはあるのかもしれないが、本命は火原炎羅。

ここで俺のすることは火原火蓮を坂本から守るようにならなくて、嘗ての彼が最も嫌う火原炎羅の影を俺に見る可能性があるということ。

もちろん火原炎羅はイケメンであり顔は全く似ていない。身長も俺の方が低い。

あくまで影である。

嘗ての赤井孤火奈を守った姿を俺に見れば、ヘイトは俺に向く可能性はある。そうすれば銀堂コハクのストーカーの時みたいに、一対一で激辛水鉄砲をぶっぱしてその後警察に通報。これで解決。

「それじゃあ、自由に見ていつて」

坂本の言葉をスタートに実行委員は動き出す。俺は火原火蓮と一緒に、とりあえず図書室に行くことにした。校内ではあまり多くないが多少の生徒とすれ違い、珍しい他校の生徒がいるのでちらちら見られる。

「何か見られるわね」

「珍しいんでしょうね。他校の生徒が校内にいるなんて普通はありませんから」

なんてことない話ながらも後ろに意識を向ける。坂本は校内だから堂々と俺たちの後をつけてる。俺と言うより火原火蓮の方なのだが、俺がいることで手は出せないだろう。後は俺に火原炎羅の影でも見てくれればいいんだが。

図書室に入ると、そこには当たり前だが途轍もない数の本が置いてあった。彼女は最初にぐるりと全体と見まわしてあるものを見つける。

「あ!! 『魔術学院の出来損ない』置いてある!!」

嬉しそうに彼女が寄って行った場所は、ラノベが置いてあるラノベコーナー。図書室にラノベを置くとは結構斬新だな。だが、こういうのには俺は賛成だ。

「こういうの嫌いじゃないわ!!」

「そうですね」

二人で話していると、坂本が俺たち二人に近づいている足音が聞こえる。

「なにか気になることありましたか?」

「え? あ、いえ、特には……」

急に引っ込みの彼女が出たな。ほぼ初対面の相手には中々心の開かないのが彼女の特徴だが、この相手にはそれでいい。

俺は彼女を庇うように前に出た。僅かに坂本が反応をする。俺の

行動が何か刺激したようだ。

「えーと、確か坂本先生でしたよね？」

「……覚えていてくれたんですね。黒田君」

お前も覚えてるのか。別に覚えられても嬉しくもないし、得も一切ないから覚えなくていいんだが。

「君は火原火蓮さんだね」

「はい……」

火原火蓮は軽く一礼すると目を逸らした。彼女を背中に坂本と向かい合う。相手笑顔だが何処か冷めていて狂気的に見えた。

「どうだい？　うちの高校は？」

「綺麗で大きくてラノベの図書室に置いてあり良いと思います」

「……私も同じです」

少し控えめに彼女は返事をする。相手は笑って接しているが俺は特に無表情で接し続けた。

「そろそろ次の場所に行きましょうか。先輩、先に行ってください。俺は先生に少し話があるので……」

「あ、うん」

火原火蓮を先に行かした。坂本典礼と一対一になる。

「黒田君は話ってなんだい？」

「一言だけ単刀直入に言いますね……火原火蓮に手出したらぶっ飛ばす」

「!!」

僅かに坂本典礼の笑顔が崩れて後退きった。

「例え手を出すにしても俺を倒してからにしないと……上手くいきませんよ」

俺はそのまま通り過ぎて図書室から出て行った。後ろから強い視線を感じたが、特に気にしないことにした。

「何話してたの？」

「あの人科学の教師らしいので科学的な質問をしたんです」

「どんな？」

「……シユレディンガーの猫について」

いや、恥ずかしい。坂本典礼に言ったセリフも結構厨二っぽいし、今ついた嘘も質問がシユレディンガーって……。

「あ、そう……」

何とも言えない気まずい感じを出したその後小さく呟いた。

「やっぱり厨二病って本当だったんだ……」

シユレディンガーの猫を厨二野郎が好きっていうのは、なんかジーンクスがあるように感じるから勘違いされて仕方ないのかもしれない。

二十話 厨二

「今日はありがとうございました」

「こちらこそ」

実行委員長同士が握手を交わす二人。あちらの実行委員が全員で見送りに来てくれたが坂本典礼はここにはいない。流石に俺の前にはそう簡単には出てこれないだろう。

ようやく帰れるのだが、これから勝負といったところでもある。相手がどう動くかは完全に予想することができないが大体は分かる。

今日から動いてくるとは考えにくいな……。明日から皆ノ色高校付近を張り付いて、俺と火原火蓮を狙うだろう。

俺の方にヘイトは向きつつはあると思うのだが、火原火蓮を先に見つければ先にそつちに手を出すかもしれない。だとするなら、また送り迎え作戦を発動するしかない。変な噂がさらに加速する可能性があるが、気にしない。

皆ノ色高校の実行員たちは頭を下げ校門に背を向ける。しかし、俺は直ぐには帰らなかった。

「すいません。誰か俺と連絡先を交換してくれませんか？」

両校の実行員が俺に視線を向ける。何故という疑問をこちらに向けていることは簡単に予想がつく。

「あの、ほら、何と言うか……。この高校素晴らしいから色々もつと知りたいんです」

一単色高校の実行委員は互いに顔を見合わせる。断る理由はないが、だからと言って断らない理由もないといった感じだ。

しかし、そこで福本成美は笑顔で携帯を出してくれた。

「私が交換しますよ。わが校の事を知りたい方に断る理由はありません」

「ありがとうございます」

電話番号を交換した。これにはそこまで凄い意味があるというわ

けではないが、念のためと言うか、確認のためだ。

交換が終わるとお互いに番号を確認して顔を合わせる。

「ありがとうございます」

「いえいえ、いつでも連絡していただいて構いませんから」

「……ええ子や。と言うか結構かわいいかもしれない。この子も

『ifストーリー』にしか出てこなくあまりぱつとしない子だったが

……って馬鹿か俺は！ そんなことを考えている暇は無いだろう！！

って馬鹿か俺は！ そんなことを考えている暇は無いだろう！！

まず、精神年齢的にこんなこと考えるのはダメだろう。転生しても

倫理観は壊さないようにしないと。携帯をしまい再び頭を下げる。

「本当に今日はありがとうございます」

「こちらこそ」



何とか合同会議は無事に終わり、帰りの道を実行委員は適度に並びながら歩く。隣に火原火蓮が来て、興味深そうに聞いた。

「そんなにあの高校が気に入ったの？ 確かに図書室にラノベが置いてあったのは良かったと思うけど……」

「ええ、とですね。……まあ雰囲気はどことなく気に入りました。はい……」

「ふーん。確かに雰囲気は良かったわね」

適度に誤魔化しながら、疑問にスラスラと答えていく。普通はこんなことしないだろうと思われるかもしれないが、それで少しでも有利になれるなら別にいいと思う。

あ、相手の女子実行委員長の連絡先を聞いたの、うちのクラスにバレたらめんどくさそうだな。特に佐々本を筆頭にシャーペンがダーツの矢のように飛んでくる可能性がある。死にはしないだろうが、あまり痛いのは勘弁だな。

駅に着いた後電車に乗り、再び電車に揺られながら学校に到着するまでひたすら待つ。携帯をいじる者、ラノベを読む者、睡眠をとる者様々だが、俺はなんとなく気を張っていた。

どう考えても居ないとは思うが、坂本典礼がここに居たらいつでも水鉄砲を出せるように準備をしているのである。正直、タイマンなら勝てる可能性が大いにある。だがしかし、不意打ちを喰らえば、それがひっくり返る可能性も無きにしも非ず。ここは……ジツと辺りを警戒する。

ん!?! あそこにいるフード被った男、坂本か？ ジツと見つめてしまふ。

すると、肩が軽くポンと叩かれる。

「ちよつと、人をジロジロ見るのやめなさい」

「すみません。何か怪しくて……」

「ダイジョブよ。あの人貴方を狙うエージェントでも何でもないので……」

完全に厨二病認定されてるな。そう言うと再び彼女はラノベに目を移した。その時ちよつと駅に着きフードを被った男が降りた。

どうやら、ただの人間の様だな。紛らわしい。

ん？ 今度はあそこに帽子を深くかぶった男がいるな。アイツはただの人間か？

再び肩がパシツと叩かれる。

「だから、人をジロジロ見るの禁止!」

「ちよつと待ってください。一応危険がないか確かめないと」

「……重症ね」

これくらいの勘違いなど痛くも痒くもない。ないっただけなのだ。

結局あの人も危険な人ではなかった。学校付近の最寄り駅に着いた後、全員で降りてそこで解散となった。



「先輩送って行きますよ」

「え？ いいわよ。家くらい一人で帰れるわ」

「いえ、折角ですから！」

「結構遠いわよ」

「大丈夫です！」

そこまで言うならと、彼女は再び駅の中に入って行った。一単色高校の方向とは逆の方向に家があるらしい。住んでる家までは完璧に把握はしていないからな。

明日からは再びストーカー……ではなく護衛を開始しないといけない。その為に家を把握することは必要条件。

再び電車に揺られること四十分ほど。とある駅に降りる。電車に乗ってる間も気を張って色んな人を見ていたら、火原火蓮に何度も注意された。それでも俺が止めないので、最終的にしびれを切らして頭を結構な強さで一発バシーンといかれた。

「先輩怒らないでくださいよ」

「怒るわよ。何度言っても止めないんだから」

「あれは嫌な予感がしたから仕方ないんですよ」

そう言うのと彼女は頭を抱えて一旦歩みを止めた。そして俺としっかり目を合わせて呆れた表情をする。

「あのね、十六夜。厨二病は卒業しなさい。アニメとかでもそういうキャラはよく見たし、本でもよく読んだ。だから私はそういうの嫌いじゃない。でも社会的に見た時に貴方はすごく痛いわ。そして普通にヤバい人に見える。」

「……」

「いい？ 現実と妄想の区別はつけなさい。そうじゃないと将来苦労するわ。人生の先輩としてアドバイスしとく」

後にファンタジーのような力を使って戦う人にそんなこと言われなくても、あんまり心に来ないな。それに俺の方が先輩だし。前世持ちだし。

「俺別に厨二病ではないんですよ」

「いいえ。貴方は厨二病よ。妄想が区別できてないわ。」

俺の行動が不気味だったのが悪いから、仕方はない。もう彼女の表情が犯人を追い詰めた探偵くらい自信を持つてるから、これ以上否定しても無意味だろう。

「取りあえず家まで送りますから歩き出しましょう」

「そうね。歩きながらでも話は出来るからそうしましょう」

その後も、彼女の家に着くまで永遠と厨二病から卒業するようにとアドバイスを承った。

夕暮れに照らされながら、彼女はとある一軒家の前で足を止めた。二階建ての立派な家だ。

「ここが私の家。一応ありがとう。送ってくれて。でも私が言った事忘れちゃダメよ」

「はい。分かりました」

明日の朝迎えに来るのは後で連絡でも取ればいいのかと思い、今は言わないことにした。彼女を送った事だし、帰ろうと後ろに足を向けた。

「それでは、また明日」

「気を付けて帰りなさいよ」

もう一度一礼してその場を後にした。彼女の言った通り家までは多少距離有ったので、自宅に帰る頃には辺りは真っ暗になっていた。



「ただいま」

私は十六夜に送ってもらった後、彼の姿を少し見送り家に入った。ただいまと言っても返ってこないのは分かってはいるが、何となくそう言った。もう少ししたらパパが帰ってくるだろう。その後はママ。今日はみんなで食べれるだろうか？ それともいつも通りパパと

二人で食べるのだろうか？

ママは忙しいから九時ごろじゃないと帰ってこない。パパは忙しいわけではないけど家で仕事の残りをする。

最近二人が話すところをあまり見ない。二人は同じ職場で働いているし、そこで沢山話しているから家で話す必要がないと思いたいが、違う気がする。

忙しいから中々皆で一緒に居る時間が出来ないと言う二人に、本当は意図的に時間をずらしているんじゃないのと言えたらどれだけいいか。そんなことを言える勇気が私にあれば……。

私は言い出せない。本当はずっと前から気付いていた。何かがい違って、そして二人がすれ違い始めていることに。でも、ずっと見て見ぬふりをして、気付かないふりをしてそこから逃げていた。そして、今もそう。

もしかしたら、このままじゃ……。家族はバラバラになっちゃおうんじゃないか？ そう思うたびに、その考えを誤魔化す。そうじゃないと、そんなわけないと。

私が誤魔化して逃げてるうちに、二人はドンドンすれ違う。私は気付いていても何もできない。

お願い、勇気をください。誰か、誰でもいいから。

また、皆で仲良く……。

二十一話 逃亡

俺は家に帰った後、電話を火原火蓮にかける。まだ時間的には起きているはずなので、何回か振動して彼女につながる。

「もしもし」

「どうしたの？」

彼女は特になんともないように、いきなりこちらに要件を聞いてきた。明日朝向かいに行きますと言ったら、どんな反応をするだろう？

また、厨二病的行動ととられる可能性もあるが、そこは考えない。

「明日なんですけど先輩を迎えに行つていいですか？」

「え？　なんで？」

「最近物騒なので……」

「大丈夫よ。登校するくらい」

まあ、こういう風に返されるよな。別に登校くらい一人で行けると考えるのが普通だし、高校生だもんな。だが、引き下がらん。

「いえいえ、物騒ですから」

「いや、だから大じよう……」

「物騒ですから」

「本当に大丈夫」

「万が一がありますから」

「分かった……。何考えてるか分からないけど分かった。明日家に七時半くらいに来て」

ふうー、なんとかオーケーを貰ったぞ。貰えなくても行くつもりだったが、流石にそれはホラーだから何としても避けたかったのが本音。

「はい。それじゃあおやすみなさい」

「おやすみ」

プツンと携帯の通話が切れた。手のかかる後輩だとも思われた可能性が十二分にあり得る。と言うか、そういう口調だった。

彼女は今何をしていたのだろうか？ 考えても仕方ないが、恐らく父親と食事でもしてたんだろうな。

……母親の方はまだ帰っていない時間だな。夫婦仲は確か……。俺の考える事じゃなかったな。明日の準備をして早く寝るか。火原火蓮の家に寄るから、いつもより早起きしないと間に合わないしな。



目覚まし時計が鳴り響く。私は重い瞼を開けて、耳に響く爆音をどうにかするべく手探りで時計の音を止めるボタンを押す。まだ完全に起きていない体が少し重く感じられるが、鞭打ってベッドから起き上がる。二階にある自室から出て下に向かう。

下では既にパパとママが起きていて、パパは朝ごはんを作って、ママはもう仕事へ行く準備を殆ど終えているだろう。

リビングのドアを開けて中に入る。

「おはよう。火蓮」

「おはよう」

パパとママが私に挨拶をし照れた。二人とも笑顔だが私がここに入るまではどうだったのだろうか……。

「おはよう。パパそれにママ」

テーブルに用意されている朝ごはんを座って食べ始める。パパは洗い物をして、ママは私に向かい合う場所に座っている。

「……」

会話が無い。忙しい朝だから話す暇もないのかもしれない。

「私もう行くわ」

「あ、うん。いってらっしゃいママ」

「……先に行くわ」

「……分かった」

これくらいしか話すことがない程、二人の溝が広がってしまったのだろうか。それに対して何も言えない私はなんだろうか。臆病な私は怖くて言えない。

もし、二人の仲が悪いことを私が指摘して、それが肯定で返ってきた時は一気に家族の仲が崩れだしてしまうのではないかと思うと動けない。

そのまま離婚なんかになって、バラバラになってしまるのが一番怖い。それなら今のままでもいい。こんな形でも家族でいられるのなら……。



「おはようございます」

「おはよう、本当に来たのね……」

髪型をいつものツインテールにして制服に着替えた後外に出ると、最近仲が良く、体育祭の実行委員も一緒にやっている後輩の黒田十六夜が待つて居た。

昨日朝学校まで送って行くと言っていたが、本当に来るとは思わなかった。この後輩は最初は趣味が合って凄く話しやすく良かったのだが、まさかの厨二病という精神病を持っていたことが発覚した。

もちろんそういうのは嫌いではない。だが将来彼が苦労すると思った私は、何とか直してあげたいと思いつつ何度か注意をしたのだが、効果なし。一日でどうにかなる問題ではないとは思いつつ、やり続けることで良くなるだろう。これから毎日ビシバシ注意していくつもりだ。

「それ、止めなさい」

「それは無理です」

朝からいきなり突っ込むべきポイントを見つけてしまった。前後左右警戒しながら私をボディガードするように立ち回るのだ。恥

ずかしいんだけど……。どう考えてもおかしい。

普通に周りできわがわ騒がれてるし、子供に指差されるし、何と戦っている想定をしているのだろう。異世界から来た魔人とか？ デスゲームに参加している設定なのか？

何度も何度も注意しても、それを止める事はなかった。途中で聞き分けのできない子にはお仕置きをしようと思って頭を叩いたが、全くなにしない。こいつを私は止めることができないと思い、恥ずかしさでどうにかかなりそうな気持を抑えて、電車に乗り学校までの道のりを歩いた。

学校に着くと、私はここに来るまでの羞恥心の恨みをぶつけるように十六夜を睨みつけた。

「次あれやったら承知しないわよ……」

「覚えておきます」

「はあく。急になんか疲れるわね」

前までは気楽に話せる友達くらいに思っていたが、今では何をするか分からない手のかかる後輩がいるような気分だ。

その後、学校に入って私たちは別れた。



一年Aクラスの連中に朝から時情聴取をされた。話題は二つ。昨日の単色高校の実行委員長の電話番号の件と朝から火原火蓮と一緒に登校してきた件だ。

適当に理由をつけて弁明をしたが、なかなか納得する連中でもなく朝から散々な目に遭った。銀堂コハクもチラチラこつちを見て何かを訴えるような目線を送ってきたため、一日中落ち着ける時間が無かった。

今日は実行委員が無いためすぐに帰れるが、火原火蓮を守る為護衛を再びしなくてはならない。色々言われてはいるが、諦めてもらおう。多少の恥なんて溝にでも捨てておいてほしい。

俺は念のため、ある人に昼休みに電話をかけていた。

『もしもし、昨日お世話になった黒田です』

『昨日はごちらくそお世話になりました。それで何か聞きたいことがあるんですか？』

学校の事が聞きたいということとで連絡先を交換したので、俺に何か質問があるという前提であちらは対応する。

『あの、今日って坂本は……じゃなかった坂本先生は学校に来てますか？』

『え？ ああ、えーと今日はお休みだったと思いますよ。確か体調不良だったと聞いてはいたのですが、それが聞きたいことですか？』

『はい。それだけなので失礼します』

『ええ？ それだけ……ですか。学校の事……いえ、分かりました。失礼します』

俺の聞きたいことは学校の事だが、少しずれたことを聞いたかもしれない。一応学校に居ないということは確認できた。これにより何処かで俺達を見ているのは確定事項。すぐに動き出すのは分かっているが、気持ち的にいるのが確定してる方が俺としてもやりやすく、集中力もさらに上がる。

朝もそれっぽい奴は見たのだが、直ぐに隠れたのでよく見えずに見逃してしまった。すぐに来たらその場で相對したのだが。仕方ないが、やっぱりあれがそうなのだろう。

アイツの事だ。すぐにでも俺達を襲いに来るだろう。男の俺が居るから、武器を持って人通りのないところでこちらに来るのは想定できる。俺もやるべきことは完璧だ。辞書は四冊服の下に入れたし、激辛水鉄砲も満タンで用意している。しかも、四個!!

火原火蓮に持たせて万が一の事を考えたからだ。前回は銀堂コハクがまさかの現場に居たのでストーカーに刺された。まあ、辞典のおかげで無事だったのだが、今回もすべて俺の思い通りに行かない事も考え……彼女にこれを預けて逃げてもらう。

俺がやられた場合。彼女には逃げてもらわないといけない。勿論、負けるつもりなんて微塵もない。しかし、世の中なんでもかんでも俺の筋書き通りにはならないということを前回学んだ。

念を入れても何も不利益な事は無いだろう。

学校の玄関で私の後輩である黒田十六夜が待つて居た。先ほどメールが届き、今日も家まで送って行くと言うのだ。別に厨二行動をしなければ嫌でも何でもないので、厨二行動をしないことを条件に承諾した。

「待たせたわね」

「いえ、待つてませんからお気になさらず」

私たちは二人で並びながら校門を出て帰りの道を歩き始めた。そこでだ。再び厨二行動が目立つ。

「や・く・そ・く!!!」

結構強めの口調で私が彼に指を差しながら告げた。なんだかんだ言つて私も厨二が嫌いではない為、どこか注意が甘くなってしまうから彼はこれを止めないのかもしれない。

「しましたっけ???

覚えてるくせに白々しく嘘をつく。本当に手のかかる後輩だ。

ここ最近はずっと一緒に居て十六夜にこんな一面があることは昨日初めて知った。ただの私と一緒にのオタクでごく普通かと思つていたらそうでもない。

何か不思議のやつだ。今まで会ったことあるようで無い。何処に

でも居そうで居ない。

どこか他者とは違う独特なオーラを持っている気さえする……。私も厨二っぽい事思ってるわね。やめにしましように、これを考えるのは。

しばらく歩いていっていると、十六夜は前後左右を見るのを止めた。顔が緊張感を持ったというか何というか。額にも汗をかき手も震えていた。

どうしたの？ と聞き返そうと思ったが、その必要はなかった。理由が分かったからだ。

後ろから誰かがつけてきている。気のせいかもしれないが、さつきも同じようなフードを被った人を見た気がする。

ストーカー？ 一体なぜ？ 目的は私？ それとも十六夜？

しばらく歩いていたが、やっぱりついてきている。

「ねえ。誰かつけてない？」

「……つけてますね……先輩はこのまま駅に向かって家に帰ってください」

「え？」

「俺が何とか引き付けますからお先に帰ってください」

「それと、これ」

「水鉄砲？」

「激辛水入りです。もしの時は使ってください」

「で、でも、十六夜が……」

「早く行ってください」

そういうと十六夜は足を止めた。私も止めようとしたが、十六夜が首を振ったのでそのまま走り出した。

あのストーカーは十六夜が目的？ 本当に誰かに狙われていた？

此処で逃げていいのか？ ずっと逃げてばかり……。

家族からも、大事な後輩が何かに巻き込まれてるかもしれない時も……。

私は卑怯者で意気地なしだ。それがどうしようもなく嫌になる。

二十二話 解決

火原火蓮が去った後俺は後ろを振り返り、すぐに隠れている坂本に話しかける。

怖いと言う感情を押し殺して……。

「居るのは分かっている。出てこい」

そう言うのと曲がり角からフードを被った坂本が出てきた。フードのままなので顔は良く見えない。

「せっかくだ。フードを取ったらどうだ？ まあ、顔を出せない位俺が怖いなら無理には言わないが……」

坂本はゆっくり手をフードに伸ばし顔を見せる。彼の顔は怒りであり、既に理性をなくしているように見受けられる。フードを取ると坂本が歯をぎしぎしと歪めながら懐からナイフを取り出した。それに応えるように俺も水鉄砲を両手に構える。

本当にこんなもので勝てるのだろうか？ もし、刺された場所が国語辞典がない場所だったらという不安が湧いてくる。しかし、俺がここで立ち向かわないといけない。

ここでバッドエンドに終止符を打つ!!! そして、火原火蓮をここで救う!!!

「お前は昔のアイツに被り俺の屈辱を思い出させる……それが許せん。いつか、いつかと思いつながらもずっと果たせずにいた恨みがようやく叶う……」

「とんでもない迷惑だな。逆恨みもここまで来るとキモイな」

「殺す!!」

「別にいつ来ても構わんがせっかくだ。その過去について話してみろ。どうせ大したことはないんだろうがな」

挑発するように俺が言うのと体を怒りで震わせながら坂本は語り始めた。ナイフをこちらに向けていつでも殺せるとアピールしながら。自身が有利な立場と確信しているな。油断大敵だぜ。

「いいだろう!! 話してやる! 僕が高校生の時だ。クラスに赤井孤火奈という人物が……ああああ!」

話の途中で俺は水鉄砲を発射した。こんな奴の話に付き合う必要は一切ない。そもそも知ってるし、こんな油断しているときを逃す手はない。

「目がああああ!!!」

前回よりさらに強化した激辛唐辛子入り水鉄砲。コチユジャンをブレンドしている。普通より目に染みて、そして痛い。

すかさず警察に連絡。恐らく火原火蓮も連絡をしているとは思わが、念押しの為。

「あ、警察ですか? 七色町の駄菓子屋の近くの所にナイフを持った男が暴れてるのですぐ来てください。大分ヤバい人です。すぐにお願ひします」

目を開けられない坂本は手当たり次第に俺に突進してきた。大体声のする方に来たのだが、俺はしゃがんでいた。

それに躓き、奴は転ぶ。転んで大の字になった坂本の股間を蹴り上げる。

「め、めがああああああ」

前回は傷害罪にならなかったので、安心して今回はこいつをぶっ飛ばせる。とは言っても股間しか狙わないが……。

何度も蹴り偶に顔と痛さで口を開けたら水鉄砲を発射して、警察が来るまでの時間を稼いだ。恐怖はもちろんあったので、途中でアイツが手から離れたナイフは真っ先に蹴飛ばした。



アイツは普通に捕まった。俺も連行され……またお前か!!! と言う顔をされたが、普通に今回もある程度で解放された。

こいつもヤバい奴か？　みたいな顔されたのが少し傷ついたが……。
それにしても恨みで色々見えなくなっていたおかげで色々助かった。

作戦が大体成功したな。昔話をしてくれと言って油断したところを水鉄砲で攻撃。その後何とかして警察が来るまでの時間を稼ぐために股間を蹴りまくったのは、やっぱり正解だったな。股間はどうやっても鍛えられないし、男の最強の弱点だからな。

これがすべてうまく行ったのは、勿論アイツの精神がおかしい状態であり、冷静な判断ができていなかったからだ。

アイツはどこか元からおかしい人間だったのが、火原火蓮という人物に会うことで、因縁を思い出し壊れていった。元々の壊れていた性格を利用してタイムマンに持ち込んだが、やっぱり怖かった。

死の恐怖とはそう簡単に慣れる物じゃない。ストーリーカー、サイコパス、この刃物を持った二人と戦い、それが良く分かった。

こんなに準備しても怖いものは怖い。物凄い才能がある奴なら話は違うのかもしれないが、俺はやっぱり普通の凡人だな。少し劣等感が生まれるが、坂本は豚箱にぶち込んだわけだし、これで暫くは悩む必要ないか。彼女が死ぬことはないしな。

いや、一つ心に引つかるな。火原一家の事になるが……

だが、これはバッドエンドには何の関係もない。本来の『ストーリー』の話でも起こりうるから、俺は何かをする必要はないし、そしてすることもできない。火原夫妻の離婚は俺には止められない。

あくまで家族の問題であり、そこまで俺が介入する必要はないだろう。そして、したとしても何ができると言うのか？

離婚はしても、しなくても世界は滅びないし、本来の『ストーリー』では別れても世界は救われた。ならば別に首を突っ込むことはしな

くていい。だけど……。

電車に乗っていた時、仲のいい親子を見る時の彼女の羨みと悲しみの顔を思い出した。

『ストーリー』では彼女の両親は離婚する。彼女は両親が仲が悪いことに前から気が付いていた。でも、それを認められなくて、勇気が出なくて何もできずに離婚を迎えてしまう。

彼女の両親である、火原孤火奈と火原炎羅は高校時代からのクラスメイトらしい。『ストーリー』でも坂本典礼は出てきたが、それは両親の過去にだけだ。それっきり『ストーリー』には出てこない。

いわゆる両親のかませ的な位置付けだったのだが、『ifストーリー』では一単色高校の教師になり、最悪そのものになっていた。両方のストーリーでも坂本に絡まれたのを助けた事をきっかけに両親は結婚。

『ifストーリー』では二人の仲に溝があるのは少し書かれた程度だが、かなり深いものだというのは感じ取れるものだった。火原火蓮が死んでしまった後、結局二人は離婚したらしい。お互いに一切反対はしなかった。

『ストーリー』との多少の差異はあるが、やっぱり彼女の両親は離婚をしてしまうと俺は考えている。どちらの世界でも二人の中には何年も前から溝があったことは否定できないからだ。

なぜ溝が出来てしまったか？ それは二人の一緒に働いている勤務先が関わってくる。二人は最初は仲が良くオシドリ夫婦だったが一緒に職場というのがまずかった。

火原火蓮の母、旧姓赤井孤火奈はとんでもないスペックと美貌を持っていた。会社ではドンドン出世してエリートと言われた。

火原炎羅は努力家だが、それだけではどうしようもない。彼女との差がはつきりと出てしまった。同じ職場ということもあり、それがさ

らにもろに出てしまった。

会社内では二人が夫婦ということもあり比べるなど言うのが難しい。火原炎羅に劣等感が生まれ始めた。自分よりはるかに優れている彼女が自分と一緒に居ていいのかという疑問。

火原孤火奈は気付いていた。自分の夫が何か悩んでいて、そして会社内では自分と比べられていることに。だが、彼女は何と断言していいか分からなかった。上から目線の同情と思われるかもしれない。

これが何年も前からずっと続いてきた。最初はほんの少しだけの違和感だった。だがそれが徐々に大きくなっていき、自分たちでもいつからか分からなくなるほど話さなくなってしまった。子供にはあまりそういうのを見せない様には誤魔化していたが、それすらできなくなりつつあった。

いつからだろう。そしてこのままでいいのだろうか？ その思いは両者にあつたがすれ違い続け……彼女が魔装少女になった年の冬に離婚することになる。

お互いに嫌いではない。愛していたのだが、それ故のすれ違い。何処かもどかしくある火原一家の崩壊。これにより火原火蓮は母親に引き取られて……。

『赤井火蓮』という名に代わる。父親は実家に戻ったそうなのだが、そこからはあまり触れられてはいない。

火原火蓮は、いや赤井火蓮は物凄く後悔が残った。自分が何かを変えべきだったのではないか。気付いていたのに勇気が出なくて何もできなかった、しなかつた自分を嫌悪してしまう。しかし、そこは仲間である魔装少女が何度も慰め、何度も泣いて前に進むと言う決意をする。

今の彼女には両親には何も言えず、離婚は止められない。かと言って俺がどうこうする問題でもない。彼女の家族問題まで俺は解決す

るために動かなくてもいい。

何かが引つかかりながらも俺は自宅に向かって歩いて行った。



十六夜と別れた後、しばらくしてサイコパスを倒して警察に引き渡したという連絡が来た。ホツとしたが同時に自身を嫌悪した。

——逃げてばかりだ

何もかもから逃げてばかり。二次元にのめり込んだのも、現実からの隠れ蓑にするためだったのかもしれない。両親の不仲から目を背ける為の……。

その日の夜、少し遅い時間に警察が私の家を訪ねて来た。何でも今日捕まったのはこの間会った一単色高校の教師である。坂本典礼であつたらしい。

そして、その名前を聞いたときパパとママが驚いた顔をしていた。警察の人からの話を聞くと嘗てのパパとママへの恨みが私に向いて、私を襲おうしたと供述しており、それで詳しい話を聞く為に訪ねて来たと言う。

坂 本典礼が言っていることは偶に支離滅裂だが、纏めると十六夜が嘗てのママを庇ったパパに似ていたことで殺意がそつちに向いたらしい。

一単色高校の校内で十六夜が坂本に何やら釘を刺すような言動を取ったことが原因であり、そのためまず目障りな十六夜を排除するために私と十六夜をストーキングしていた。

パパとママは高校時代の話を刑事さんにしていた。私もその場にしたのだが初耳の内容だった。昔そんなことがあつたのかという驚

きと、その因縁が今になって目覚めていたという恐怖。

もし、十六夜が居なかつたらどうなっていた？ 下手したら一単色高校内で既に何かされていたらかもしれない。されなくても、ストーリーされ酷い目に遭っていたかもしれない。

そうか……。だから十六夜はあんなに警戒をしていたんだ……。何故か分からないが、坂本典礼が危険ということに誰よりも早く気付いて、それで動いていた。

本当に凄い……。そして辛い。羨ましい。

私にもそんな勇気があれば、家族が変わることもあるかもしれないのに。それが私には無い。もし、彼みたいな勇気があれば……。

警察の人には私は何もされていないことを伝えて帰ってもらった。

「火蓮大丈夫だったの？」

「うん、私はなんともないよ」

ママが私を抱き寄せた。心配してくれているのが伝わってくる。パパも心配と安堵の視線を私に向けていた。

ここでパパも私に抱き着いて欲しかった。三人で心を通わせたかった。

「本当に良かったよ。火蓮、十六夜君とはどんな子なんだい？」

「えっと、私の後輩でオタク仲間見たいな感じ……」

「そうか。お礼を言いたいから今度家に呼びなさい」

「うん、わかったよ、パパ」

どこか心に違和感が残りながらも私は自室に戻った。もう、後戻りはできないのかな……。

二十三話 オーバーレイ

坂本典礼を豚箱にぶち込んだので、今日は安心して一人登校。昨日の夜に火原火蓮から色々ありがとうという内容のメールが届いた。

なぜ坂本が危険と分かったの？ という質問には勘と言っておい
た。

これで厨二疑いは晴れたかな……。

すたすたと歩きながら昨日の出来事を思い出す。合同会議を合わせてわずか二日という怒涛の展開だが、大体計画通りで確かにバツドエンドは回避された。それによって坂本は捕まったので学校同士どうするの？

自身と同じ制服を着た生徒達も周りに沢山いて、坂本が捕まったという話をしている者もすでにいる。今日の朝のニュースでも俺の名は出てなかったけど坂本は出てたからな。体育祭自体がどうなるかは分からないが結局誰も何ともないんだからやるだろう……やるよな？

皆だつて楽しみにしてるはずだ。こういう学校行事はワクワクするし、俺だつて楽しくやりたい。

——みんな楽しいか……

火原火蓮は『ifストーリー』では全く楽しくなかったんだよな。このころには坂本の毒牙にかかっていたし、家族の仲についての悩みもあつたりで、一切笑いが無かった。今はどうだ？ 坂本はもういいし、本来よりは絶対に楽しいはずだが、心の底から楽しめるか？

皆で楽しく体育祭できるか？

……一回話を聞いてみるか。何ができるは分からないし、何が変わるかもわからない。でも、彼女が楽しく体育祭ができるようになってほしい。『ストーリー』の内容には関わりすぎるのも良くない。だけ

ど、彼女には笑ってほしい。幸せになってほしい。

今日の実行委員が終わった後、彼女から話を聞こう。俺は学校の校門をくぐり、下駄箱で上履きと履き替える。すると、隣の下駄箱からなにやら生徒同士の声が。

「おい、見たか朝のニュース？」

「合同体育祭をする一単色高校の教師がうちの生徒を襲ったけど返り討ちに遭って捕まったやつだろ？」

「そうそう、一体だれが捕まえたんだらうな。」

「またアイツじゃね？」

「ダブルデイストラクション・オーバーレイ？」

「そう、銀堂さんも守ってストーカー捕まえたって前も言ってただろ」

「厨二も捨てたもんじゃないな」

さて、今日も一日頑張るか……。

教室のドアを開けると、大体揃っているクラスメイト達が疑惑の目で俺を見ていた。席に着くと前に座っていた佐々本が俺に話しかける。

「朝のニュースで一単色高校の教師を撃退したのお前だろ」

そこまで決めつけるか？ 俺なただけだよ。

「いや、違うぞ」

「嘘つくなよ。もう学校中お前だって決めつけられてるぞ」

「……知ってる」

ニュースで俺を匿名にしてるのに意味が全くない。

「坂本典礼だっけ？ なんか昔の恨みがどうかかニュースで言ってたけど色々濁ってたから良く分からなかったんだけどお前ならよく知ってるんじゃないか？」

「いや、全然わからん」

「流石に知らないか。知り合いが巻き込まれると何となく気になっちゃうんだが」

「気にするな」

何処となく心配をしてくれているのだろう。偶にこういう良いところがあるから人気なんだよな、こいつは。

「まあ、無事って事実だけでいいか」

「その通りだ。結果良ければ全てよし」

「だけど、その心遣いありがたい。」



ホームルームは六道先生からニュースの件についてと今後の体育祭について報告があった。

「本日、体育祭を行うか議論が行われる。どのような結果になるかはまだ分からないが明日か少なくとも明後日までには最終決定がなされる」

Aクラスにはやりたいと思う生徒が多いため、自然と顔が暗くなる。ある程度の説明を受けた後、佐々本がここで手を挙げた。

「もし、中止ならその日はどうなるんですか？」

「……通常授業だ」

「そ、そんな……」

「じゃあ、いつ俺達は彼女を……」

「作ればいいんだ？」

「普通に授業したくねえ……」

打ち合わせしたかのように言葉が繋がっているな。最後に関してはちよつと違うが。ちなみに俺達がやるのは綱引きなんだが。綱引きでどうやって女子に良いところを見せるつもりなんだ？

「では、これにてホームルームは終了だ。それと黒田少しいいか？」

「はい」

このタイミングで呼ばれると、やっぱりと言う声がチラホラと聞こえる。もう諦めました。



廊下を六道先生と歩く。校長室に向かっているらしい。

「すまん。あの場で言うとは色々勘ぐる者が出てくると思ったのだが……既にお前だと言うのが学校中に広がっててな。何故か分かんが校内新聞も出来上がりつつあるらしい」

校内新聞は知らなかった!! と言うか誤魔化す意味もなかったから生徒の前で堂々と俺を呼んだのね。この学校の情報網どうなってるんだよ。

校長室に入ると、うちの校長先生ともう一人知らない爺さんが居た。もしかして一単色高校校長先生かな？

「失礼します。一年Aクラスの黒田十六夜を連れてきました」

「おお！ 君が黒田君か!!」

「あ、はい」

初見ではなく初対面のおじさんは、俺の名を聞くと慌てて立ち上がった。

「一単色高校の校長先生だよ」

うちの校長先生が紹介してくれる。やっぱりそうか。もう見た感じ校長先生といった感じだもんな。

「いや、本当に申し訳ない。まさか我が校の教師がこんな不祥事を………するとは……」

頭を下げる校長。どうしようか。別に謝ってほしいわけじゃないけど、もしかして賠償金とかとれる？ 欲しいゲームがあったんだよな。本とか。

漫画にラノベ、ゲーム。いやいやいや、流石にそれはダメだろう。でも三万せびるくらい良くね？

俺は一単色高校の校長先生に疑問を告げる。

「あの、体育祭はどうなりますか？」

「そうだね……中止の可能性もあるだろうね」

「それ、何とかありませんか？ 皆楽しみにしてるんです」

「……どうだろうね。私個人では何とも」

「当事者の俺が何ともなかったんですから良くないですか？」

「うーん……それは」

「お願いします!!!」

「……出来る限り開催の意見は出していくけど、絶対の保証はないよ」

「それでもいいですから!! 取りあえずやってください」

何とかして体育祭は開催したい。皆が楽しみにしてるんだ……それに俺だって授業はしたくない。

「分かったよ。やるだけはやってみるよ」

「ありがとうございます」

「何度も言うけど絶対ではないよ」

「分かっています。例え開催できなかつたら俺が直接テレビに出てあることない事言うだけですから、心配しないでください」

「凄い心配なんだけど!!!」

と言うわけで校長室を後にした。合同体育祭はやってほしい。両校の生徒はやりたい奴も多いだろうしな。

教室に戻るときには結構暗い意見を持つてる生徒が多かった。体育祭を何気に楽しみにしてたため、心にはどこか影のようなものが差している。



その日は俺が興味深い目で見られたり、体育祭についての不安が校内に残っていたりして全体的に空気が悪かった。実行委員も今日は休みでいらしいので、余計に中止の方向に話が進みつつあった。

放課後は火原火蓮に用事があるので携帯でメールを送り呼び出し

た。

「あ、先輩」

俺は校門の前で火原火蓮を待つて居て、彼女が来ると軽く手を挙げた。彼女は来るといつもより硬い笑顔。

「ごめん。待った？」

「いえ、特には」

彼氏彼女のやり取りに聞こえるが、全くそんなことはない。並んで歩き始めるが、彼女は何時もより元気がない。

「昨日はありがとうね。十六夜が居なかつたらどうなつてたか分からない……」

「いえ、大したことでは」

「ううん。すごいよ。ちよつと羨ましい……。あんなに勇気があつて……」

なんかあつたな。坂本が捕まつた事で何か心境に大きな変化があつたのか？ とりあえずどこかで話を聞こう。俺だつて全部分かつているわけじゃない。

「そうですかね。それで……その、何と言うか」

畜生!! 女の子を誘つてどこかの店に入るつてどうやるんだよ!!
わからんねええよ!! 手汗が出てきた。緊張感が俺を支配する。

「どうかしたの？」

「えーと、今日はあのですね。何処か寄つて来ませんか？」

「そんな気分じゃないから遠慮しとく」

振られてしまった。どうしようか、今日は止めとくか？ それとも無理にでも誘おうかな。迷惑かな？

——でも、なんか悲しい顔をしている彼女をほっとけない。

「その喫茶店に行きましょう!!」

「話聞いてた？ 今日はそんな気分じゃ……」

「とりま、入りましょう。それでもだめなら帰っていいですから!!」
「ええ? ちよつとだけなら……」

「よし!! 行きましよう!!」
「本当にちよつとだけだからね」

近くの喫茶店を適当に指名してそこに入って行く。中にはあまり人が居ない店だが、落ち着いた雰囲気の良い店。木目が見える店内で向かい合う席に座る。何か注文をしないと店の人に失礼なのでメニューを眺める。

「俺が奢るので何でも頼んでください」

「そう、じゃあ遠慮なく選ばせてもらおうわ」

互いにメニューを眺める。一度でいいから女の人にここは俺が奢ると言ってみたかったという俺の願望が軽く叶ったことに少し喜んでいたのは俺だけの秘密だ。

「私は決めたわ」

「じゃあ、呼びますね。すいませーん!!」

俺が呼ぶと店員の人俺たちの席に来てくれた。

「ご注文ですか?」

「はい。俺はブラックコーヒーで……」

「私はオレンジジュースで」

「ブラックコーヒーとオレンジジュースですね。少々お待ちください」

店員が去って行くと俺は話を持ち出す。

「あの、先輩」

「どうしたの?」

「なにか悩みはありませんか?」

「どうしたの急に」

「なんか悩みを持った顔をしていたので、相談に乗ればと」

「……無いわ。なにも」

嘘つけ。チョット溜めがあった。それに俺には悩みがあることは分かっているんだ。この時点でここまで彼女が表にそれを出しているのはなぜか良く分からないが。

「何でもいいので話してください」

「だから、無いっていつてるでしょ」

「いや、無いような顔じゃ……」

「無い！」

ビクツと体が震えてしまった。強い瞳が俺を射抜く。だが何処かに寂しさを抱いていた。

「……そうですか」

彼女が問題が無いと言うなら別にいいかと思ってしまうそうになるが……彼女はそれを認められないんだ。家族が仲が悪いのを認めて、それを相談したらもう引き戻せない。成功したらいいが、失敗したら一気にこの先に待つのは破滅。

それならば、この多少に違和感があるこの現状でいい。崩れていても、多少のひびが入っていても、このまま家族の形が保てるなら。

でも、それじゃあこの先に待つのは結局破滅だ。それじゃあダメなんだと言う気持ち俺が俺に湧いた。

「あの、本当に何も無いんですか？ なんでも相談に乗ります。例えば家族の問題とか……」

「っ!! だから悩みなんて無いって言ってるでしょ!!」

彼女が大声を発することで、店内の僅かな客の視線が俺たちに向いた。一気に踏み込み過ぎたか……もつとゆっくり行くべきだったか。

「すいません。でも、俺先輩の事が心配で」

「うるさい。何も無いって言ってるでしょ。……もう帰る」

彼女は懐から千円札を出して机に置いた。

「(馳走様)」

そのまま彼女は出て行った。

「やっちゃまった……」

俺が後悔していると、店員さんが少し気を遣ってくれながらコーヒーとオレンジジュースを持ってきてくれた。

「えっと、ご注文の品になります……あの、元気出してください。女なんて星の数いますから」

「はい、ありがとうございます」

店員さんが去った後、コーヒーを一口。苦い。目の前には誰も居ないがオレンジジュースが置いてあるのが少し寂しい。

「カッコつけてブラックコーヒー頼んでる場合じゃなかったな」

これからどうしましょう。俺は頭を悩ませて考えるが、特にいい案は浮かばず。頼んだコーヒーは物凄く苦かった。

二十四話 強引!!

やってしまった。つい言いすぎた……。十六夜は私を心配してくれていたのに冷たく突き放してしまった。

でも、そこには触れてほしくない。絶対のテリトリーともいえる私の核。そこに入られた瞬間、強烈な焦りと不安が私を包んだ。

あまり考えないようにしていた。考えるのが怖くてずっと見て見ぬふりをしたものを自覚させられて、急に自身でも気持ちを抑えられなかった。

夕日が浮かぶ中電車で揺られながら一人思い返し、家に帰る。家に帰ってもいつも通り。パパが少し後に帰ってきて、その後ママが帰ってくる。

ママとパパが一緒にリビングに居る中、私は

「今日はね、後輩と喫茶店に行ったの……」

「そう、お礼はしつかりいったの？」

「あ、うん」

突き放してしまつたなんて言えない。ここでは話題として利用して本当は冷たくするなんてずるいな私。

「お礼が言いたいんだけどいつ家に呼ぶの？」

「あ、えっと、来週くらいには」

「なにかお礼の品でも買っておいた方がいいかしら？」

「そうだね……それよりさ、ママとパパは昔一緒に出掛けたことあるの？」

二人とも複雑な顔をする。どちらから話せばいいか迷っている。

「……どうだったかしら。出かけたのは覚えているけど、場所までは覚えてないわね」

「僕もだ」

「む、昔だからね。しょうがないよね……」

何もできない。話を振って小さな輪を作ろうとするが、それすらうまくできない。本当の家族ならもつと言いたいことを言って、もつと笑いあう物なのに。

私だけじゃない。二人も……私たち三人は皆本音が言えない。そのせいで距離がどんどん離れていく。何か変えないと、そう思ってもそこで止まる。

私は……どうすれば。



俺は寢室のベッドで横になり考えていた。あそこまではつきり言われたんだ。話すことすら気まずい関係になってしまっただろう。

そもそもなんで俺がここまでするんだ？ バッドエンドは回避されているんだから、もう良いだろう。世界が破滅しないようにする使命感が殆どで俺は動いていたんだ。なら、これ以上動く必要はない。

そのはずなのに、どうすればいいかとずっと考えている。もう動く必要は無いのに、動こうとする気持ちが抑えられない。

俺も自身を見つめ直さないといけないのか。いや、俺も本当は気付いていたんじゃないか？ 見て見ぬふりをしただけで。

……きつとそうなんだろうな。はあー。認めたくないな。

寝よう。うん。思考を放棄し、俺は瞳を閉じた。

『おい、またそれ読んでるのかよ！』

こいつは生前のクラスメイトだったな。中学時代によく話したので覚えている。違う高校にお互い進学したから付き合いは中学まで

だが……。

『これ、めっちゃ面白いんだよ!!!』

『魔装少女？ 表紙にガッツリコスプレした女の子載ってるな』

『コスプレじゃない。魔装だ!!!』

『細かいな。そんなにハマったのか？』

『ああ、この一生懸命で辛いことがあっても前に進む姿がカッコいいんだよ!!!』

ああ、恥ずかしい。こんな時期があったな。マジでどっぷりはまっていた時期。教室でもずつとラノベ読んで女の子の友達から若干引かれたのもいい思い出だ。

『ふーん。まあ俺は興味なし』

『ええ!? 一回読んでみるよ!! マジでパネエ。最高だよ。夢があつて、友情があつて勇気があつてカッコいいんだ。こんな風に俺も成りてえ』

『怖い怖い。魔装少女に憧れる中学男子とか引くわ』

こんなふうに俺も成りたいか……。あああああああ!!!
恥ずかしい、ただただ恥ずかしい。こんな時期があつたなんて。

『これでもう終わりか……。今までありがとう。魔装少女』

今度は高校生の時、最終巻を読んで本を置いたときの記憶か。悲しかったな、この時は。

『本当にありがとう。夢をくれて、勇気をくれて、これを読んだときは本当に楽しかったよ。憧れだったよ。本当にありがとう。魔装少女、そして作者さん』

まあ、作者にも感謝はしてたな。うん。これは良いんだが……

夢をくれて、勇気をくれて、憧憬をくれて、本当に楽しかった時期

をくれたのは本の中の彼女達だったんだ……。

だから、この世界に転生したのを自覚したとき、まず思っただのは世界の為の義務感とかじゃなくて、純粹な善意でもなくて。

ただ、恩返しがしたいってことなんだよな……。夢を与えてくれた彼女達も少し酷い目に遭うならそんなのは許せない。もしそうなら変えてあげたい。

だって、俺はたくさんさんの大事なものを彼女達から貰ったから。少しでも恩返しをしたい。どんな風になっても……。

でも……

でも、こんな感情を認めたくはなかった。普通に恥ずかしいから。精神年齢が三十超えて、四十に片足突っ込んでるおっさんが、未成年の魔装少女に感謝を抱いて憧憬も持ってる、何か恩返しがしたいとかなんか危ないにおいがしてくる。

勝手に俺がそういう風に思っている場合もあるが、一般的に見た時普通にヤバいと思う。と言うかヤバい。

大した事のない思い、そして記憶。何処まで言っても俺は凡人でモブだということを俺は知っている。

俺 には凄い悲しい過去もないし、才能もない。精神が三十路というだけであり凡人。

でも、そんな大した事のない人生と記憶に鮮やかなものを与えてくれたのは彼女達だから。

認めたくない。でも、それが本心。

——だから、俺は

目覚ましが鳴り俺は起きる。目が覚めたばかりなのに何処かスツ

キリとしていた。恥ずかしいという気持ちが胸に残っているがそんなことはどうでもいい。

もう決めた。火原火蓮を悲しい思いにはさせない。絶対にだ。

俺は準備を整え、学校に向かう。今日の放課後もう一回彼女と話そう。そして、何かを変えよう。上手くできるか分からない。上手くいか分からない。だけど、やってやる。俺も自分を見て見ぬふりしない。恩返しすると決めたのだからやりきる。それくらいはやってやる。



「おい、何か凄い顔してるぞ。お前……」

「当然だ。俺は覚醒したからな」

「厨二過ぎる……」

教室では佐々本が少し引いた眼で俺を見ていた。

「なあ」

「どうした？」

「好き同士なんだがすれ違いによって夫婦関係がこじれたらどうすればいいと思う？」

「本当にどうした？ まあ、お互いに好き同士なら一度場を整えて話し合いをだな」

「俺もそう思う。だが今回はそれすら出来ないほどこじれている」

「そうになると、難しいかもな」

「ああ、だが愛しているんだ。こじれているだけだな。ならば……古典的なあの手でこじれを解く」

「??? 何言ってるの？」

俺は覚悟決めた。こんな手を通じるか分からない。でも、俺にできる事はやりたい。真つすぐ勝負。

多少強引でもご都合でもいい。それで何かが変わるなら……。

「良く分からないけど頑張れよ」

「ああ」



昼休み。俺は食堂でニラたつぷりの餃子を注文した。それを二定食分平らげ、午後の授業に臨んだ。俺の貫禄に全員ビビッてるな。

周りも体育祭やらなんやらでガヤガヤしているが、どうでもいい訳ではないが今は別にいい。後で悩めばいい。大事なのは放課後……。

午後の授業間の休み時間俺の席に銀堂コハクが足を向けた。

「あの、十六夜君何かありましたか？」

「お気になさらず。わざわざ心配して頂きありがとうございます」

「は、はい。どういたしまして」

最近、彼女とはちよくちよく話す。ラノベに興味があるようで色々話を聞きに来る。そのまますぐに彼女が自身の席に戻る。

彼女を助けた時は自覚していなかったが、今思えばやっぱり、特別な感情を持っていた。銀堂コハクは俺にとって凄い特別な人だ。変な意味じゃなくて。

野口夏子と笑いながら話している彼女を見て思う。彼女には恩を返せたのだろうか？俺が勝手にやっていることだが、俺はもつと大きなものを貰ったから、それが少しでも返せていればいいと思った。



放課後になる。よし！まずは火原火蓮に連絡だ。

『昨日はすいませんでした。放課後一緒に帰りましょう。』

すぐに彼女からの返信が返ってくる。

『私も言いすぎた。ごめんなさい。校門で待ち合わせね』

すぐに支度を整えて校門に向かう。俺の方が先に着き、少し待つとすぐに彼女は来てくれた。

「昨日はすみませんでした」

「私もごめん。言い過ぎた」

互いに軽く頭を下げる。すこし気まずいが、お互いに歩幅を合わせて歩き出す。

「あの、ちょっと寄りたいたいところあるんですけどいいですか？」

「うん、いいけど……」

しばらく歩いてとある公園に彼女を連れて行く。銀堂コハクのスニーカーをぶっ飛ばした時の寂びれた公園だ。まだ明るいが人が居ない。

古い木のベンチに座る。僅かな沈黙のあと俺から話を切り出す。

「あの先輩、昨日は本当にすみませんでした」

「もう良いつて私も悪かったわけだから……」

「でも、俺はやっぱ先輩の悩みを解決したい」

「だから、悩みなんてないって」

「お願いします。俺に話してください!!」

真つすぐ彼女を見据えた。建前無しの真つ向勝負。それが俺の選んだ選択。下手な作戦よりもド真ん中ストレートで行った方がいいと考えた。

「昨日も言ったけど本当に何もなかった……しつこいよ」

彼女は少し不快感を出し始めるが、そんなことは関係ない。彼女の肩をガツと掴みもう一度聞く。

「しつこくても何でもいい!! 先輩が話すまで俺もこの手を離しません!!」

「ふあ、だ、だから無いって!! そ、それとこの手離して警察呼ぶわよ!!」

彼女は少し驚いた反応をした後、少しずつヒートアップしてきた。警察を呼ぶと脅しをしてバックから携帯を出そうとする。

「こんなものこうだ!!」

「ああ！ 私のスマホ!!」

取り上げて草むらに投げ飛ばす。その後再び肩を掴む。

「こんなことしてタダで済むと思ってるの!!」

「思っていないです。でも貴方の悩みを俺は解決したい、その為なら何でもします。例え警察に捕まってもいい!!」

「そ、そこまで?」

「はい。もしこれでも話さないと言うなら……この場でキスします!!」

「ええええ!!? き、キス!?!」

ラノベで様々なキスシーンを見てきた彼女も、現実で自身がするとすると初めての感覚らしく赤面する。

「はい、します」

「します、じゃないでしょ!?! 馬鹿なの!?! それやったら本当に捕まるわよ!!」

「はい!!」

「はい!! じゃない!! いいの!?! こんなところで人生棒に振って!?!」

「先輩が悩みを話してくれないなら、キスして棒に振ります」

彼女はここまで言われるとどうしていいか分からずに、目線をキョロキョロさせる。

「残念です。キスして棒に振ります」

「ちよつと待って!! 流石にキスは……私ファーストキスは大事にしたい派だから……」

「待ちません」

「待ってよ!!」

「待ちません。ちなみに俺の昼はニラがたっぷり入った餃子定食を二つ食べました」

「もっと待ってよ!! いやよ!!」

「このまま話さないと先輩のファーストキスは昼に餃子を食べたフツメンの後輩になりますよ?? それでもいいんですか?」

「流石にそれは……いや」

……ちよつと傷ついた。まあ、こうなるように仕向けたの俺なんだけど、やっぱり真つすぐ拒否されるときついものがある。

「だったら話してください」

「お願い。少し時間を……」

「キスに移ります」

「分かった、話すから!! お願いヤメテ!!」

「では、どうぞ」

ここまで強引にされたら、どうしても話してしまうな。俺は大分傷ついたが、そこら辺は別に気にするポイントではない。

「あの、その、ね……」

言い出しづらい事なんだろう。ここはある程度俺が話を持っていくか。

「両親の仲が悪くて離婚するか心配なんですか？」

「!! どうしてそう思ったの!?!」

「簡単な推理ですよ。前に電車乗った時子連れ親の話が物凄い気にしていましたから。それに両親をつれた子供を見る時先輩はいつも羨ましそうにしていたので。」

嘘だけど。筋は通っているよな？

「嘘……十六夜って探偵なの?」

「まさか、ただの高校生ですよ」

完璧にバレていると思った彼女は、諦めた様にポツリポツリと話し始めた。

「その通りよ。私の両親の仲が悪いの。本当は認めるのも、口に出すのも嫌だったんだけど、もう認めるしかないわね。十六夜にすら見抜かれてしまったのだから……」

「……」

悲しそうに目線を落とし、話を続ける。

「いつから家族の間に溝ができたか分からないの。気付いたら出来て、最初は気のせいと思って気にも留めなかった。その後ドンドン違

和感が増えたけどそんなはずないと見て見ぬふりをした。」

自身に対する嫌悪を抱き彼女は語り続ける。

「そこからはずっと逃げた。認めるのが怖くて、家族がバラバラになるとは思いたくなくて。でも、ずっと逃げ続けたらいつしか無視できない程、パパとママの溝が深くなって」

「だから、何とかしようと思ったんだけど何もできなくて。だからまた逃げて、逃げて、逃げ続けたの。そして今。もう取り返しがつかないところまで来てる。……もうわかるの。家族がバラバラになっちゃうって」

彼女は瞳に少し涙を浮かべた。静寂がこの場を支配した後、彼女は再び話し出す。

「ごめんね。昨日は。十六夜が言ったのは全部正しかったけど、それを認められない私が悪かった」

彼女は自嘲気味に笑った。諦めを含んだその表情を俺は見たくない。

「これからどうするんですか?」

「どうしようね……もう諦めようかな。その方が楽で良いかもしれないし」

「……もう一回頑張りませんか?」

「無理よ。だって何度も言おうとしたんだもん。その度に体がすくんで本当に言いたいことが言えないの。これ言って失敗したら一気に壊れるような気がして、それなら今のままでっていつもなる。だから無理」

「じゃあこのままでいいんですか? このまま家族がバラバラになっていつかあの時言っておけばよかったって後悔していいんですか?」
「いい訳ないよ。でも、私には無理なの……臆病で勇気がない私には」
「俺が背中を押します。何かあっても支えます。だからもう一回挑んでください!! 後悔する貴方を俺は見たくない!!」

彼女は今度は目線を逸らさなかった。涙で揺れる瞳から俺は絶対

に逸らさない。

「建前はいらぬ。どうしたいか、どうありたいか、それを伝えましょう」

「それでも、ダメだったら？」

「伝わるまで言い続けます。大丈夫。先輩の両親は先輩の言葉にきつと動かされる。信じましょう。家族と自分を」

「信じる、家族の絆を……」

彼女は自身に問いかけ軽く目を瞑って考える。しばらくして目を開き俺をもう一度視線を合わせた。

「うん、信じるわ。私の家族を。家族に私の思いを伝えたい」

「良し!! そうと決まれば早速行動しましょう!」

「今日?」

「思い立ったが吉日。今日やりましょう」

彼女の手を取ってベンチから立つ。

「一つ聞かせて。どうして私の為にここまでするの?」

「俺がしたいからです」

「……本当に愛、でも、ありがとう」

「いえ、お気になさらず」

——本当に礼を言うのは俺の方……。

「何か言った?」

「いえ、それより先輩のスマホ探しましょう」

「そうね。早く見つけて私の家に行きましょう」

俺達は先ほど俺が投げた草むらでスマホを探し始めた。すぐに見つかるかと思ったが、なかなか見つからない。

「あれ、おかしいな。こっちに投げたはず……」

「ねえ、投げる必要はあったの?」

「だってあそこで警察は勘弁してほしくて……」

「没収でよかったじゃない。投げるとしてももっと近くとか」

「すいません。なんか勢い余って……」

お互いに腰を落として彼女のスマホを探す。やばい見つからない。

ここまでカツコよく来たのに、ここでダサイのはいぜ。

「うお、虫!!」

早く探して彼女の両親を何とかしたいのに、俺はひたすらに探す。本当は虫とか苦手だが探す。

「……」

彼女が目線を向けていたのだが、それにも気付かないくらい熱中して探す。

「あ！俺が電話すればいいんだ！」

「私もうつかりしてたわ。なんで思いつかなかったんだろう」

「そういうときもありますよ」

彼女のスマホに電話をかける。何処からか彼女のスマホの音が鳴りだした。

「ここら辺かしら？ えーっと、あつた！」

音が鳴る近くの草むらに彼女は近寄り探す。俺も電話をかけるのを止めた。これで終わりと思ったが、そこで一匹のバッタが彼女の顔に跳んだ。

「はあわあ!!!」

彼女はビククリして一回転して頭と足が逆転する。そのせいでスカートの下赤いパンツが露わになる。慌てて彼女はスカートで隠し、俺に顔を赤くしながら目線を向ける。

「み、見た？」

彼女は恥ずかしさでどうしようもない。ちなみに俺も恥ずかしい。顔に自然と熱が帯びる。しかし、それを隠して、ここは紳士として見えないと言うべきだろう。

「いえ、見ていま……」

ちよつと待て。ここで俺が嘘をついて良いのか？ 彼女はこれから家族と本音で話そうとしている。建前一切なしだ。

それを勧めた俺が嘘をついて良いのか？ いや、ダメだろう。こういうところから素直になるのが大事じゃないのか？ そもそも見たのに見てないと言うのは逆にどうなんだ？

俺がすべきは見てしまった。すみませんでしたと言うべきなん

じゃないのか？

「すいません。先輩の赤くてちよつとエツちなパンツを見てしまいました」

俺は深々を頭を下げる。しばらくして先輩の足が見えた。近くに
来たのが分かり、顔を上げると

「ごめん。一発ビンタさせて」

パチーンといい音が寂びれた公園に鳴り響いた。

二十五話 粹

頬がピリピリとして紅葉後が残る中、再びベンチに座り火原火蓮と向かい合う。

「あの、色々すいませんでした……。何とか誠にすいません」
「もういいわよ。ビンタで無しにしたから」

何故か堅苦しくなってしまうのは女性免疫の無さの悲しい性。先ほどは勢いで手を握ったり肩を掴んだりしていたが、今となって恥ずかしさが湧いてくる。

「それですね。先輩がどうすればストレートに気持ちを伝えられるかなのですが……」

「そうですね……口で言うしかないわよね」

中々言いづらいのだろう。だがしかし、そんな時はこれだあああああー!!!

「手紙を使って言うのはどうですか？」

「手紙……いいわね。それ」

「はい。古典的ですが気持ちの塊って感じがしませんか？」

「するわ。それに今言葉を纏めておけば言うときにも混乱しにくい！」

「では、早速これをどうぞ」

俺は懐からお手紙セットを出した。朝学校に来る前にコンビニで買ったものだ。

「準備いいわね……」

「はい。前買ったんですが使う機会が無くて偶々手元に新品があつて助かりました」

流石に準備が良すぎたのか、若干不思議そうに見てきた。少し怪しいか？ いや、今時高校男子がお手紙セット持つてるくらい……普通ではないな。いや、常備しているもんだな!! 男子高校生だもんな!!
だから、問題なし。

「ほらほらさっさと書きましょう。はい！ 下敷き!!!」

「あ、うん」

勢い任せに彼女にお手紙セットと下敷き、ペンを渡す。

「うーん。書き出しは……」

「最初はインパクトが強い方が良いのでは？ 例えですけどウェブ小説でも一話が良くないとその後見てもらえないって聞きますし」

「そうね。最初はパパとママを私に引き寄せたいわ。えーと、私はパパとママが大好き……」

書いている途中で彼女はペンを止めた。

「どうしたんですか？」

「あの、その、恥ずかしいんだけど。見られてると……」

あー、そう言うことね。年頃だからパパとママ大好きって内容の手紙は俺に見られたくないと……ホく、なるほど、なるほど。

「先輩甘えないで下さい!!」

「え?」

「これから今まで言いたいことを言えなかった両親にストレートに気持ちを伝えるんでしょう!! それなのにこんなことで手を止めてどうするんですか!?!」

「そ、そうね」

「ほら、ガンガン書く!!」

「は、はい」

これくらい気合を入れないとな。今までにない初チャレンジをするときは、怠けた気持ではいけない。強気で行かないとな。

まずは昔を振り返って思い出を書き留めていく。お漏らししたこと、車に石で落書きをして傷をつけたこと、マヨネーズで寝ているお父さんの顔に落書きしたこと、ケチャップで寝ているお母さんの顔に落書きしたこと、中農ソースで大事な真っ白な高級スーツを汚したこと、等等など。

ヤンチャだった子供時代を書いていく。俺も偶にアドバイスしたり、意見を求められたりしながら

「ふー。思い出の振り返りはこれくらいでいいわね。ここからは私が

どうしたいか書いて……」

「行けそうですか？」

「うん、何か今回は行けそうな気がする!!」

やる気満々といった感じだろうか。ドンドン書き進めて、彼女は遂に手紙を完成させた。

「やった!! できた!!」

「おめでとうございます。後は本番で緊張しないように練習ですね」

「出来る限りやってやるわ!!」

彼女はベンチから立った。もう家に帰るのだろう。ただいまの時刻、四時過ぎである。

「それじゃあ、私帰るから!! ありがとう十六夜、私頑張ってみる!!」
彼女は走って帰って行った。この後、家に帰って自室で練習する事だろう。これくらいか、俺にできることは……。

でもさ。やっぱりさ。ここまで来たら『粹』な事したくなるよね。

とりあえず、火原炎羅に会いに行くか。

その為には彼女と同じ電車に乗って、俺も火原家に行かなくては!!



再びストーカーのようなことをして、彼女を付けたわけではない。ただ単に行先が同じだけだ。

火原家宅。時刻は六時過ぎ。彼女が入って行くのを見届けると、俺はインターホンを押す。彼女は二階の自室で練習してるから出てこない。

そして、車が置いてあるということとは？

「はい? どちら様ですか?」

出てくるのは火原炎羅である。おお、普通にイケメンだな。そして

高身長。

「あの、私は火原火蓮先輩の後輩で黒田十六夜と言います」

「おおお!! 君が!! 娘が世話になったね。本当にありがとう」

「いえ、大したことでは」

「いや、君が居なかつたらどうなっていたか……。本当にありがとう」
火原炎羅は深々と頭を下げた。やっぱり、いい人なのは変わりないんだらうな。

「頭を上げてください。いつも先輩にはお世話になっているのでお互い様です」

「そうかい。これからも娘と仲良くしてやってくれ」

「はい。こちらこそよろしくお願いします」

「ここに来たって事は火蓮に用があるんだらう? ちよつと待ってくれ今呼ぶから。おー……」

「待ってください!! お父さんに用があつて!!」

「え? 僕に?」

なんとか呼ぶのを止めることができた。ばれても問題は無いのだが、サプライズ的な事が俺が好きなのだ。

「あの、ちよつと聞かれたくないのでこっちに」

手で招き猫のように引き寄せ、家のドアを閉めさせる。二人きりで話ができ、尚且つ聞かれないように。

「実は先輩から相談を受けてまして」

「どんなだい?」

「それは先輩の両親の夫婦仲が悪くてそれをどうにかしたいと言う事でした」

「!!……あの子がそんなことを」

「はい、凄く悩んでました。目に涙を浮かべて深刻な顔つきで……」

「そうか。あの子にもばれてしまったか……。当然か……。もう取り繕うことも満足にできないのだからね」

炎羅は己の無力さを噛みしめ、悔やむように眉を顰めた。

「君だから言うよ。僕と妻の間は既に溝が取り返しのつかない位開いてしまった。もう後戻りはできないと言う事を私たち夫婦は悟ってしまった。」

「……」

「僕のせいなんだ。僕が妻より劣っているから……。色々それでこじれさせてしまった。最近はまだ職場でも家でも話なんか殆どしない。劣った僕に愛想が尽きてしまったんだと思う」

「……それが別れる理由ですか？」

「そうだね。近いうちにそれが理由で別れるかもしれないね。本当に妻にそして、あの子にも申し訳ない気持ちでいっばいだ」

この人に足りないこと、この家族に足りないことは、一歩踏み出すことだ。全員がそれから逃げている。

だけど、火原火蓮は今踏み出そうとしている。

「それを言ったんですか？ 貴方の妻に子供に」

「いや、言っていないよ。言い出せなくてね」

「なら言った方が良い。貴方の娘が今自身の本当の気持ちを言うために必死になってる。別れてほしくないって、もう一回一からやり直したいって」

「……」

「貴方の娘は信じてるんだ。ここまで家族の中がこじれても、それでもやり直せるって。何年も前から両親の仲が悪いのを見て見ぬふりをしてきた劣等感に打ち勝って、前に進もうとしている」

「……そんなに前から気付いてたのか」

「貴方が思ってる以上に火原火蓮は成長してるんですよ。夫婦の中に取り返しのつかない溝が出来たから別れても仕方ない？ 舐めたこと言わないでください。自身の両親がどこかおかしくて、どうしようもないのも分かって、それでも信じてるんだよ」

俺は自然とこぶしを握った。口調が荒くなるのも気づかない。

「あんた達がやり直せるって信じてるんだよ。なら、貴方も信じてやれよ。貴方が貴方達が一番信じなきやいけないのは火原火蓮じゃないよ。」

いのか？ 彼女がやり直せるって信じてるだけでもう一度やり直して、一から家族を作る理由になるんじゃないのか？」

「それは……」

「お願いだ。彼女に悲しい顔だけはさせないでくれ。貴方達はまだやり直せる。その為に貴方も一歩踏み出してくれ」

俺は頭を下げた。

「君はどうしてそこまでするんだい？」

当然の疑問。ここまでするのは、常軌を逸しているのかもしれない。だけど、ここまでする理由はただ一つ。

「火原火蓮の悲しい顔は見たくない。それだけです」

「……」

火原炎羅と視線が交差する。驚嘆という感情が彼からは出ていた。

「そうか……火蓮は良い彼氏を持ったんだね」

「いえ、友達です」

「そうか、まだだったのか。火蓮は引つ込み思案で誰でも簡単に仲良くなれない。そして、僕の妻に似て偶に思ってる事と行動にする事が逆になることがある」

「そうですね。それは感じています」

「フフ、そうかい。ずっと引つ込み思案で、ずっと小さいと思っていたけどいつの間にか僕たちが思っていたよりも大きくなっていったんだね」

「はい。でもまだまだ貴方達が必要です」

「そうなのかな」

僅かに視線を落として遠い目をする彼に、お手紙セットを手渡す。

「はい。そうじゃなきや、今彼女は悩んでません。必要でずっと一緒に居たいから行動してるんです。貴方も本当の気持ちを言ってください」

「これは手紙？」

「火原先輩にも渡しました。自身の気持ちを纏めてそして直接気持ちを伝える手段としてこれいいかと」

「手紙で気持ちを伝えるか……」

「伝えてください。そうすれば絶対何か変わりますから」

「……そうだね。書いてみるよ」

「そうですか!! じゃあ俺はこの後行くところがあるので!!」

俺はすぐに、次行くべき場所に走った。

「娘がそれを望んで、信じているならそれだけで十分か……。ありがとう黒田君。僕も踏み出すよ」



俺は走った。と言うよりタクシーに乗った。現在時刻は七時。

今の俺は、早く、少しでも早く。彼女を救いたいという気持ちに動かされていた。

着いた。現在時刻八時。

彼女の母親と父親が務めている会社に。俺は急いで中に入って、受付の人の下に行く。

「すいません。火原孤火奈さんいますよね? 呼んでください。貴方の大事な娘を救って恩がある黒田十六夜が呼んでるって言うってください」

「エエ? あ、はい。わかりました……何だこの子???」

受付の人は怪しきマックスの俺に警戒しながらも、電話をしている。その後

「はい、なんか変な子が……高校生ですかね? 皆ノ色高校の制服を着てるんですけど、もしかしたらコスプレしてる変態かもしれません」

そこそこの音量で言ってくれるじゃないか。もっと聞こえないように努力はできないのだろうか?

「黒田十六夜っていうらしいんですけど。あの、フツメンですね。でもちよつと悪い意味で普通じゃない気がします。はい。え? 知り

合い？ 本当に？ 嘘？ またまたく ガチですか!? はい。分かりました」

大分失礼だな。ここの受付は替えた方が良いな。でも結構美人だから仕方ないのかもしれない。

「少し待って居てください。すぐに火原孤火奈さんが来るらしいです」

「はい」

待つこと数分。エレベーターから赤い髪の火原火蓮とそつくりの美人で仕事ができそうな人が出てきた。俺を見つけると、こちらに歩いてくる。

制服で、俺が黒田十六夜と思ったのだろう。

「貴方が黒田十六夜君でいいのかしら？」

「はい。貴方が滅茶苦茶恩返しのにきやいけない黒田十六夜です」

「そ、そう。何か思ってイメージと少し違うわね……。あの、この度は娘を助けていただきあり……」

「そういうのいいんで、さっそくですけど。恩を返してください」

「あ、うん。……ちよつと待って貰っていい？ もうすぐで仕事終わるから」

「はい。分かりました」

彼女は一旦エレベーターに戻って行った。首を傾げて。そして、待つこと十数分。再び彼女は出てきた。

「ごめんなさいね。わざわざ待って貰って」

「いえ、仕事なら仕方ないですよ」

「それで用ってなにかしら？」

「それはここでは言えないので」

俺は親指で外にクイクイとして、場所を変えようとしていることを示す。

「分かったわ……。本当にイメージと違うわね」

一旦外に出て人に聞かれないところに来た。駐車場だ。

「単刀直入に言います。火原先輩から貴方達ご両親の仲が悪くて離婚するのを止めたいと言う相談を請け負いました」

「……!!」

「話を進めます。火原先輩は何年も前から気付いていました。夫婦仲が悪いことに、でも見て見ぬふりをしていたのです」

「そんなに前から……」

「お二人の仲をどうにかしたくて今一生懸命手紙の読み聞かせの練習をしています。凄いですよね。家族みんなでまた笑いあえる、笑いあいたいと思っっているんですよ。そして、火原炎羅さんも娘の思いに応えて、娘の信じたものを自分も信じる為に家族に手紙を書いていきます」

「あの人が……」

まさかの展開に彼女も驚きを隠せないようだ。いきなりこんなこと言われたら、当然の反応だ。

「火原火蓮と火原炎羅は一步踏み出しました。あとは貴方だけです。一步踏み出してください」

「……」

彼女は迷っている。何と言っているかわからないのだ。ずっと悩んでも分からなかったのだから、当然なのかもしれない。

「家族なんだからそんなに言葉を選ぶ必要はないんじゃないんですか？」

「！……」

「一言、貴方にどう言っているかわからなかったけど心配はしてたって言えればいいんじゃないですか？ いつもご飯ありがとうって、それだけで十分支えられてるって言えればいいんじゃないんですか？」

「でも」

まだ踏ん切りがつかないようだ。

「貴方の選んだ人はそんなに器の小さい人なんですか？」

「違うわ！」

「なら少し失敗しても大丈夫ですよ。貴方の大好きな夫と娘は手を伸

ばし始めてる。ならそれを掴んでください」

懐から手紙セットを取り出す。

「手紙をここで書いて家に持ち帰ってください。そして伝えてください。今までの思いをこれに記して」

手紙セットを手渡す。下敷きとペンも。

彼女は地面に下敷きを敷いて書きなぐり、数分で書き終え、手紙を懐にしまった。

「ありがとう。私家に帰らないといけないから失礼するわ」

「はい。頑張ってください」

彼女は車に乗って家に帰って行った。そして俺も家に帰る為に駅に向かった。

二十六話 難聴

夜九時過ぎ、家のドアが開く音がする。多分ママが帰ってきた。手紙を持って私は下に降りる。

ゆっくりと階段を下りてリビングに向かう。また足が震え始めて心臓の鼓動も落ち着かないものになってくる。

でも、踏み出すつて、家族を信じるつて決めたから。

リビングに入ると、パパとママはソファに並んで座っていた。

「……ママお帰り」

「ただいま」

「あのね、パパとママに話したいことがあるから聞いて欲しいの」

「分かったわ」

「聞かせてくれ」

深呼吸をして手紙を開く。言おう、一步踏み出そう。もし、ここで踏み出せなかったら、ここまでしてくれてくれた十六夜に申し訳ない。

パパとママの目を見る。届いて……私の思い。

「……私はずつと言えなかったこと、言いたかったことを言います」

「私はパパとママが大好きです。ずっと一緒に居てたくさんの思い出が私の心に残っています。小さい時に、車に石で五芒星を書いて怒られた事、寝ているパパにマヨネーズでお星さまを書いて怒られた事、寝ているママにケチャップでアットマークを書いて怒られた事。そして、中農ソースで大事なスーツに海賊のマークを書いて怒られた事。全て未だ色あせることなく覚えています」

「いたずらする度に怒られて、泣いて、謝って許してもらって、そうやって私は成長してきました。恩返しなんて殆どできなくて、いつもわがままな私をここまで育ててもらって感謝しています。……でも、まだわがままを言わせてください。私はパパとママと一緒に居たい……いつかは二人から旅立たなければならぬ時がくるのはわかつ

ています。でも、その時が来るまで一緒に居たい」

初めて言った。私の本音。そして昔を思い出すと、気持ちが高ぶって涙が零れ落ちそうになり、口調も強くなる。

「もつと楽しく笑いあつて、昔みたいに面白い物とかピクニックとかにも行きたいです!! 二人の仲が昔と変わってしまったことは分かっています! 互いに言いづらい事があるのも分かっています!! もう遅いつて思ってるかもしれないけど、でも、一緒に居たいんです! お願いします!!」

私は頭を下げる。抑えようと思っていた涙も次々と零れ落ちて、視界がゆがむ。二人の返答が怖い。

「真つすぐ気持ちを伝えてくれてありがとう。火蓮の気持ちは伝わったよ」

「お母さんにも火蓮の気持ちが伝わったわ。本当に成長したわね」

二人が微笑みながら優しい声で話してくれる。気持ちが伝わっていると言われると、嬉しくなる。もしかしたら、このまま解決するかもしれない!!

「火蓮がこんな立派な姿を見せてくれたんだ。僕も少しでもカッコいい姿を見せないとね」

パパはそう言うと言紙を出した。手紙……私と同じ封筒。偶然かな?

いや、今はどうでもいい。パパが手紙を書いてくれて、家族と向き合おうとしてくれた事に喜ばなければ。

「火蓮と孤火奈へ。僕は二人が何よりも大事です。孤火奈と出会って結婚して火蓮が生まれてずっと幸せでした。だけど孤火奈が優秀で僕はそうでないから孤火奈には劣等感からずっと一歩引いた立場から接していました」

「それが周りにも伝わって劣等感がもつと強くなり、僕より良いひと

が居るんじゃないか？ 孤火奈にはもう愛想つかされてるんじゃないか？ そう考えることが増えていきました」

「火蓮には負担をかけまいとしていたけど、結局火蓮を深く悩ませて苦しませてしまったことを謝らせてくれ。済まなかった。でも、もう火蓮が悩むことはないよ。僕も同じ気持ちだから」

「パパ……」

「あなた……」

パパ、今、凄くカッコいい。

「火蓮、孤火奈、僕にはダメな所も多いけどそれでも一緒に居てください」

パパも同じ気持ちだったんだ。それが凄く嬉しい。

「パパはダメじゃないよ。私もいつも支えられてるから」

「そうよ。いつも、支えられてるわ」

ママも本当の事を言い始めてる。少しずつ家族の中が変わりつつあることに、希望と期待がさらに大きくなる。

「私も言うわ。本心を」

ママも……？ あれ？ また手紙。家族全員が手紙を用意するなんて、これ偶然にしては流石にちよっとおかしいような。しかも、同じ封筒……。

「火蓮色々心配をかけてごめんさい。私ももう一回昔みたいに戻りたいと思っています。そして、あなた。ずっと前から私は気付いていたんです。貴方が悩んでいたことに。でもどう言うべきか分からなかった。だから気持ちが悪れ違いつつあった。だけど、今言います。いつもありがとう。私には貴方が必要です。もちろん火蓮も。だから私とずっと一緒に居てください」

「うん。一緒に居よう!!」

「僕でよければこれからもよろしく頼むよ」

私達家族は、ようやく本音を言いあえた。どこか順調すぎて違和感

が残るが、それでもいい。

その後、ご飯を久しぶりに一緒に食べて、三人で会話をした。何処かたどたどしさがあつたけど、これからまた笑いあえると思うと、それも心地よい。

三人で話している途中で、十六夜が行動力の鬼という事実を知ることになった。



俺は火原孤火奈と話した後、時間もかなり遅いので家に帰る途中にあるファミレスでご飯を食べることにした。

結構空いていたので、すぐに席に着くことができた。店員にハンバーグとサラダを注文して一息つく。ただのハンバーグではない。期間限定24種のチーズが入っている特別なチーズハンバーグである。メニューを眺めた時に押しが凄かったという理由と、普通に食べたいという思いが凄かった。

火原家は大丈夫だろうか……。いや、大丈夫だろう。絆はある。そして火蓮も吹っ切って、一歩踏み出すことを決めた。元から愛があつたのだから。考えていると電話が掛かってくる。火原火蓮から。

「もしもし」

「もしもし」

「どうでした?」

「上手くいったわ、だけど色々初耳な事があつた……」

「フフフフ。粋な計らいだったでしょう?」

「ええ、最高だった。ありがとう」

「そ、そうですか。それは良かったです……」

直球に褒められと、ちよつと恥ずかしさが出てくるな。

「おかげで私たち家族の蟠りが大分解消したわ。全部十六夜のおかげよ。本当にありがとう」

「先輩たちが一步踏み出したからですよ。俺は背中を押したただけですから全部俺のおかげではないです」

「フフ、本当に面白いわね……それでさ、その、なんていうか」

「はい？」

「あの、パパから聞いたんだけど私の悲しい顔が見たくないって本当？」

「ああ、言いましたね」

今思い出すと普通に恥ずかしいな。

「それと結構熱い言葉も言ってたってパパもママも言ってた」

「あー。その、ちよつとカツコつけて見たくなった感じと言いますか……」

恥ずかしい。確かに結構熱い言葉言っただけど、今となってじわじわ恥ずかしいが湧いてくるな。

「そうなんだ……。えつと、でもさ、そこまでしてくれるって事は、その、えつと、普通じゃないわよね？」

「まあ、普通ではないですね」

流石にやりすぎたか。いや、今更か。人気のない公園に呼んでキス迫ったのだからな。

話してる途中で、店員さんが恐らく俺の最初にサラダを持ってこっちに来る。

「十六夜がその私にと、特別な……」

彼女の言葉を聞きとる前に店員さんが転んで、俺のサラダを溢してしまう。俺の服と肌にも少しソースが付いて汚れた。女性だが、ドジっ子か？

「大丈夫ですか!？」

「はい。大丈夫です」

「申し訳ありません!! すぐに拭きます!!」

店員さんがハンカチで服や肌を拭いてくれる。顔と服を優しく撫でるように。こそばゆい感じだ。

結構かわいい店員さん。プラマイゼロだな。うん。

「すぐに代えを持ってきますから!! それと服も……ど、どうしよう!!」

「これくらい大丈夫ですよ。気にしないでください」

「はい！ありがとうございます!!」

彼女は急いで厨房に戻る。若いつて良いな。華があつて。あ、電話忘れてた。

「それで、どうするの？ 十六夜は……私は、その、別にいいわよ……」

全然話が分からん。正直に告白しよう。

「あの、すみません。聞いてませんでした」

「はあああ!? ふざけてるの!? そんなの通じるのは二次元だけよ!!!」

「す、すみません」

「もう、いい!! 最低!!」

プツン!! と音が響き、通話を切られた……。結構重要な話を話していたんだな。

「お先にハンバーグお持ちしました。本当に申し訳ありません」

「気にしないでください。若いんですから失敗しても仕方ないですよ」

「はい、ありがとうございます」

彼女は再び頭を下げて厨房に戻る。凄くいい匂いがして食欲がそそられる。

——ハンバーグ、頂きます。



私は自室で迷っていた。電話をするか、否か。

パパとママから色々聞いて、十六夜が私の為に色々動いてくれたことが分かった。しかも、私の悲しい顔は見たくないって。そこまで言うって事は……。

絶対、私の事が好き。

これは確定事項だと思う。私的には、結構、ありかなという思いがある。

パパとママの好感度がとんでもなく高くて、最初どうした？　と思っただが、話を聞いて納得した。と言うか私の十六夜に対する好感度も上がった……。

すっかり忘れていたが、坂本典礼の時も私を守ってくれて、家族問題にも向き合ってくれた。一回拒絶しても、それでも私の為にあそこまでしてくれた。私に嫌われても、拒絶されても。

——何処までも、真つすぐ私を見てくれた。

十六夜は物凄い何かを持っているわけではない。でも、それでも私の為に動いてくれた。守ってくれた。

それを自覚してしまった時……。心がトキめいた……。ドキドキする……。

ま、まあ、私の事がす、好きなら付き合っただけなくもない。仕方ないから、恩もあるわけだし、まずは電話しよう。

ちよつと、緊張する。今までとは違う。こ、こんな、ドキドキする？

勇気を持って電話をかけると、すぐに繋がった。

「もしもし」

「もしもし」

「どうでした？」

直球で聞きに来た。心配してくれているのか。嬉しい。ポイント高い。

「上手くいったわ、だけど色々初耳な事があった……」

「フフフフ。粋な計らいだったでしょう？」

粋な計らいとか、そんなレベルじゃないけどね。

「ええ、最高だった。ありがとう」

「そ、そうですか。それは良かったです……」

照れてるのかな？ 可愛いところもあるのね。

「おかげで私たち家族の蟠りが大分解消したわ。全部十六夜のおかげよ。本当にありがとう」

「先輩たちが一歩踏み出したからですよ。俺は背中を押しただけですから全部俺のおかげではないです」

そういう風に言ってくれるんだ。嬉しさが込み上げる。

「フフ、本当に面白いわね……それでさ、その、なんていうか」

「はい？」

「あの、パパから聞いたんだけど私の悲しい顔が見たくないって本当？」

「ああ、言いましたね」

ふふえええ!! や、やっぱり。と、言う事は他に言ったことも？

「それと結構熱い言葉も言ってたってパパもママも言ってた」

「あー。その、ちよつとカツコつけて見たくなった感じと言いますか……」

い、言ったんだ。パパとママ全部聞いたけど……。けど、張本人が言うよと また違った恥ずかしさが。

「そうなんだ。えっと、でもさ、そこまでしてくれるって事は、その、えっと、普通じゃないわよね？」

「まあ、普通ではないですね」

私に特別な感情向けてるってことよね？ 分かってたけど、一応確認しないと……。

「十六夜がその私にと、特別な感情を向けてるのは、わ、分かったわ。だ、だから、その、お礼って言うか、そういうわけでも無くはないんだけど……」

「私も十六夜の事をあり、なしで言えば……その、ありなの。勿論あり、なしの二択でね!!」

「だから、仕方ないから、付き合っても、い、いいよ」

返答がない。緊張してるのだろう。好きな相手が付き合っただけ
ると言えば、思考が一時停止するだろう。少し待つてあげよう。

……遅いわね。返信しづらいのは仕方ないけど、男ならパツと決断
してほしいところなんだけど……。

「それで、どうするの？ 十六夜は……私は、その、別にいいわよ……」
遅いから催促のような形になるが、遅いのが悪い。どう返信して
くるか。

「あの、すみません。聞いてませんでした」

「はあああ!? ふざけてるの!? そんなの通じるのは二次元だけよ
!!!」

そんなわけないでしょ!!! 電話でどうやったら難聴が発動するの
よ!!!

「す、すみません」

「もう、いい!! 最低!!」

思わず通話を切ってしまったのは悪くないだろう。折角私が……。
もやもやしなから私は携帯を置いて、自室のベッドに横になった。

ありえない。あそこで聞いてないとか。

そういえば『魔術学院の出来損ない』のテル君も難聴だっけ……。
ヒロインが偶に可哀そうだけど、でも、すごい優しくてカッコいいの
よね。

十六夜って意外とテル君に似てる？ 似てるかもしれない。力は
ないけど工夫とか努力とか優しさで立ち向かうところとか。

……だとしても難聴は似てなくていいのよ!!!

紅白の体育祭 二十七話 修羅場

「気付いたら白い空間にいた。」

「……えっ？ 何処？」

「真っ白で、ずっと先も真っ白。静かで誰も居ない、と思っていた。」

「十六夜君……」

後ろから聞き覚えのある声が出て、振り返る。銀堂コハクということは分かっていたのに、振り返った瞬間俺は息を呑んだ。

銀色のドレスとティアラ。所々紫の部分もあるが、それでも彼女の綺麗な肌とドレスで真っ白という印象を受ける。

——魔装……!!

魔装を纏った銀堂コハク。手には、光の聖剣《ライト・キャリバー》輝かしい、そしてカッコいい彼女が扱う剣。一回でいいから見せて触らせて欲しい一品である。ちよつと興奮していると、彼女は冷たい声で俺に問う。

「どうしてですか？」

「えっ？」

「何がだ？ 胸を揉んでしまったことか？ それとも口に辛い水を出したことか？ ストーカー……じゃなくて護衛したこと？」

「……もしかして、話をするとき視線を下げたことじゃないか？ ありすぎて分からない。」

「下手に言うのと逆に怒らせるかもしれない。黙っておこう。」

「どうして、貴方は私をほったらかしにするんですか？ 勝手に付きまとって、その後はポイって捨てて……」

「彼女は剣を俺に向けた。おいおい、それはヤバいだろ!!」

「ちよつと、落ち着いて!! 刃物は人に向けちゃ……」

「もういい。ここで永遠に私のモノにするから!!!」

「話を通じない彼女は俺に近付き……剣を突く。」

死ぬ。いや、でも俺は国語辞典が……。そう思っていたが。グサリ、と俺の腹部を聖剣が貫いた。

あ、流石に聖剣には国語辞典じゃ勝てねえわ。

彼女が俺から聖剣を抜くと、俺は血に染まる腹部を見ながら倒れる。彼女は倒れた俺の頬に手を当てて、目線を合わせる。

「貴方が悪いんですよ。ほったらかしにするから。でも、これですつと一緒です。すぐに私も後を追いますから……ね」

目にハイライトが無いとは正にこの事だ、ということを知った。ハイライトが消えた彼女は微笑んでいる。

え？ えええええ？ これで死亡？ 嘘でしょう!!!

こんな幕切れってありかよおおお!!!

「うおうおおお!!!」

……夢か。目が覚めるといつもの自室。

腹部は大丈夫だろうか!? すぐに触るが、特に大丈夫だ。血は出ていないし、穴も開いていない。一安心だが完璧に目が覚めてしまった。物凄いリアルな夢だった。

辺りはもう明るく、カーテンから日が差し込んでいる。もう起きるか。

俺はベッドから起きて、リビングに向かう。向かいながら、先ほどの夢を思い出す。

しかし、何という夢だろう。火原火蓮を救った次の日に見る夢とは、とても思えないのだが……。

あれは、ヤンデレか……? 間違ってもあんな未来にならない事を祈るばかりなのだが、それにしてもめっちゃ怖かったよ。

だって、剣で腹をぶつ刺されるんだよ!!! 血がドバドバ出て、刺したほうが笑ってるし!!

まあ、何だかんだ可愛いかったのは事実だが。でも、怖い。恐怖と幸福が入り混じる複雑な気持ちのまま、俺は身支度を整え学校に向か

う。



登校していると、自身以外の生徒達から話し声が聞こえてくる。

「体育祭出来るかな？」

「開催してほしいよね……」

「体育祭……」

「もし、開催しなかったら学校さぼってメイド喫茶にでも行くか？」

「そうだな……」

皆暗い。火原家の事ですっかり忘れてたが、体育祭があった。結局どうなるんだろうな？ 一単色高校の校長先生に一応頼んでは見たが、現実がそんなに思い通りに行くかは分からない。

もし開催しなかったら、その日の教室は重力が三倍くらい重くなるだろうな。俺だって折角の体育祭なのだから、是非参加したいところ。

楽しくなることは間違いはなさそうだし、実行委員としても結構頑張ったのだから、それが無下になるのもちよつと嫌だ。

「ちよつと」

思考していると、後から声が聞こえる。声で火原火蓮ということは分かっているのだが、まさか彼女も魔装纏っていないよな???

恐る恐る振り返る。

制服だ!! 良かった!!

「おはようございます。火原先輩」

「……おはよう」

彼女の顔はどこか不機嫌だった。昨日はすみませんと言うべきか？ 俺は悪くないわけだし、詳しく話せば分かってくれるだろう。

「昨日はすみません。ちよつと間が悪くて、先輩のお話が聞けなかったんですよ」

「そう。で？……何があったの？」

「電話してるときファミレスに居たんですけど、店員さんがサラダを

溢してしまいました」

「それで？」

「それが俺にかかったり散らばったりでごたごたしてたら、話聞きそびれてしまいました。すみません」

「……とんでもない店員ね。クレームの電話を入れようかしら？」

怒ってるな。物凄く怒ってる。でもな、あの店員さんも一生懸命に働いてたわけだし、大目に見てあげてほしい。

「店員さんも悪気があったわけではないんですから、そこまでしなくても……」

「……そうね。流石に止めとくわ」

結構悩んでたな。あの店員さんが無事仕事ができて良かった。

「聞こえてなかったのね？ 昨日の私の話は？」

「すみません。聞こえてませんでした」

「……分かった。もう一回言ってあげる」

「お願いします」

彼女は目を逸らして恥ずかしがるようにモジモジし始める。

「昨日私が言ったのは、仕方ないから、私が十六夜の……」

……おいおいおい。何だこれは？ どういう事だ？ なにやら甘酸っぱい波動を感じる……。

昨日の事でフラグ的な、何かが立ったのか？ 恋愛のれの文字を知らない俺だが、もしかしたら。いや、でもな……。

「は、はい」

お、落ち着け。過度な考えはするな。もしかしたら、朝麦茶を飲み過ぎてトイレに行きいのかもれない。

「あれよ」

「ど、どれですか？」

「ここまで言えば分かるでしょ!!!」

びくっと俺の体が跳ねる。何となく、いや完璧に察しがつかなくもないのだが……ここまで言われてもどうしようもない。だって、倫理的にヤバい気もするし、もし、予想が間違ってたらクソキモイ奴確定だし。

あああ!! 俺が鈍感系主人公のような何かを持っていればな。

「で、ど、どうなの? 私がい、言いたいこと分からないとは言わせないわ、わよ」

これが分からない俺でいたかった。認めよう。最近認めてばかりだが、彼女にフラグが立ってしまったと。

どう答えるべきか。勿論、付き合いたいという感情も三割、いや、四割、五割ほど……六割かな?

あるにはあるが、ここで下手に付き合うのは良くない気がする。

「……」

「もし、かして、嫌なの?」

「そ、そういうわけじゃ……」

彼女が悲しそうに俺を見る。そんな顔しないでくれ!! ううううう。どうしよう!!

「十六夜君?」

また後ろから声が。この声いつも教室でも、夢の中で聞いたんだが……。

「お、おはよう。銀堂さん」

「おはようございます。あの、よろしければ、一緒に学校行きませんか?」

こっちでも、もじもじしてる!! 銀堂コハクもフラグ説あったんだったああ!!

「誰? そいつ?」

「お、同じクラスの銀堂さんです」

「こいつが前に十六夜が守った銀堂コハクなんだ」

あつ、そこも知ってたんですね。学校中で意外と噂が立ってたから当然か。

「どうも初めまして……」

「どうも……」

何気に初めてだな、この二人が顔を合わせて話すのは。『ストー

りー』では夏休みまで繋がりは殆ど無いんだが、ここで遭遇するか。お互いに顔と名前知ってるくらいの関係なんだよね。

二人は目を合わせると、お互いに最初は遠慮していた感じだったのだが、合わせているうちに何かに気付いたように。

徐々に目がお互いに細くなつていく。そして、遂に睨み合いに……。

「……………」

この二人、本来ならかなり仲良くなるはずなんだが……。一緒にシヨツピングに行ったり、火原火蓮がラノベを紹介したり、漫画を紹介したり、女友達のイメージが強いと記憶していたのだが。

「……………」

いつまで睨み合ってるんだ。これ、俺のせい……。なのか？

暫くするとようやく視線を互いに逸らし、重い空気が少し霧散する。

「十六夜君、さつきも言ったのですが、ひ、久しぶりに一緒に行きませんか？ 折角ここで出会ったわけですし……」

「あ、えっと」

「悪いけど、今取り込んでからあっちに行つて貰える？」

「私は十六夜君に聞いているのであって、貴方に聞いているわけじゃないのでお断りします」

「……十六夜こいつをあっちに行くように言つて」

「ええつとそうですね……。三人で行きませんか？」

ヘタレだな俺は……。どっち付かずで両方をキープをしているよなものじゃないか。最低だな。

でも、ここで二人の仲を拗らせるのも良くない。『魔装少女』になった時に不仲だと大分ヤバいからだ。

「無理」

「私も無理です」

初対面なのに、ここまで悪くなるか。ヤバい、ヤバい、何とかして戻さないと!!

「でもさ、これも何かの縁かもしれないよ。人の縁は大事にしないと」
「とんだ腐った縁ね」

「あら、お口が悪いんですね。こわーい」

「は？ 何？ 文句ある？」

「いえいえ、ただ女性としてもっと気品を持ったほうがよろしいかと」
銀堂コハクってこんな人を煽るキャラだっけ？ 会って数分で、ここまで悪くなるものなのか？

この時、俺は徐々に物語の人物の関係が変わっていることに気づいた。そして、焦りが生まれ始めた。

バッドエンドを回避しても、それで終わりなのか？

銀堂コハクに煽られ、青筋が浮かぶ火原火蓮。

「ふーん。アンタも気品を持った方がいいんじゃない？ 十六夜にもう相手にされてないのに元カノ面で迫るなんて、フツ、見つともないわね」

今度は銀堂コハクも青筋が浮かぶ。

「このアマ……」

ええ？ 今このアマって言った？ 嘘だろ。穏やかで優しくて男の夢のようなお嬢様キャラだったよね？

「あら、お口が悪いんですね。こわーい」

畳みかけるように火原火蓮が煽る。銀堂コハク拳握り始めたよ!!
「落ち着いてください!!」 周りから凄いい見られていますよ!!」

周りの事を言うと言石にお互い一歩引いた。学生に見られた……。学校中に広まるのも時間の問題。何処まで落ちるか見物だな!! (錯乱状態)

「とりあえず三人で行きましょう……」

「仕方ないわね」

「非常に不本意ですね」

俺の真ん中にしてずっと睨み合いながらも、何とか学校に着いた。
もう広まってるかな。この修羅場……。

二十八話 嵐の前

朝から胃がキリキリ痛くて、教室でもジロジロ見られて居たたまれない中、さらに体育祭を心配する生徒の不安によりカオスな空間が出来上がっている。

俺はとりあえず寝たふりをして場を凌いでいる。流石に寝たふりをすれば、過度な干渉はできないと考えたからだ。案の定、消しゴムと鉛筆が数回体に当てられる程度で済んだ。

「席に着け。ホームルームを始める」

六道先生が教室に入ること、先ほどより落ち着いた雰囲気に戻る。教壇に立つと、そのまま連絡事項に移る。

「お前たちの気になっていいる体育祭だが未だに開催するかどうか議論が決まっていない」

生徒達の顔がジェットコースターの急降下の如く暗くなる。

「しかし、生徒の意見を大事にすべきという意見もあってな。そこで両校の生徒達から開催したいかしたくないかの意見を取り両校で九割の開催の意があれば開催ということになった」

「開催の場合だが、心配で出たくないものも居るだろう。そこで今回の場合自由参加という形になる。それにより競技に若干のずれが出る場合は他のクラスから助っ人を参加させる事でバランスを取る」

「今からアンケートの紙を配るが開催に賛成か反対か好きに選んでもらいたい。不参加だからと言って成績には関係ないし、欠席扱いにもならない。あんな事件があった後だ。慎重な選択を取ることも大事だろう。どちらを選んでも生徒の自由決して他の者の真似をしたり、選択を強制させるようなことだけはさせないように」

おお。これなら開催できるんじゃないか？ Aクラスの連中もかなり喜んでいいるだろう。

女子は普通に喜んでいいるな。男子は……。

「逆に休んでゲーセン行く？」

「馬鹿フオークダンスがあるだろう」

「はッ!!」

いつも通りの感じだ。

その後アンケートを書いて提出して、ホームルームは終わった。昼休みに結果発表はあるらしい。

六道先生が去った後はどんちゃん騒ぎだ。まだ開催が決まったわけじゃないんだがな。一筋の光でも嬉しいものは嬉しいよな。これで開催されなかったらどうしよう……。



私の名前は野口夏子。皆ノ色高校一年Aクラスの普通の女子生徒だ。

今日は朝からとんでもないニュースが入ってきた。

なんと銀堂さんと二年Aクラス火原火蓮先輩が、黒田君を取り合って修羅場が出来上がっていたらしい。いつの間に火原火蓮先輩まで手を出していたのだろうか。

前はどう見てもそんな感じではなかったのに、この短い期間に落としたということになるが、だとすればとんでもない。

火原火蓮先輩はずっとクール系美女という肩書を持っていた。それが黒田君と出会ったことでかなり活発なことが分かり、それすら驚きの出来事だったのに……今度は即落ちだなんて……校内新聞が大変なことになる。

そして、銀堂さんも暴走する。銀堂さんは心の奥に、束縛と言うか何というか結構深い感情を持っている気がする。もし、ヤンデレになっただけなら包丁でぶっ刺すなんてことになったら……いや、考え過ぎか。彼女に急激な変化がない事を祈る。

変化と言えば黒田君もどこか変わった。吹っ切れたと言うか、何と
言うか……詳しくは分からないが、何か今までとは違う。彼の行動理
念は分からないが、悪い人ではない事が分かる。

そう考えていると教室の前のドアが開き前から、銀堂さん。後ろの
ドアから黒田君が同時に入ってきた。

黒田君はそのまま胃をさすりながら席に着く。銀堂さんは嬉しそ
うに席に着く。

何があつた!? という感情しか出てこない。

「おはよう。銀堂さん」

「おはようございます。夏子さん」

「気分良さそうだね? 何かあつたの?」

ここまで一緒に来れたからという理由で気分がいいんだと言うの
は分かり切っているが、一応聞いておかないと。

「久しぶりに十六夜君とここまで一緒に来れたんですよ♪」

「それは良かったね」

「はい!! ……ちよつと邪魔が入ったんですけどね……」

……あら、やだ。こわーい。目からハイライトが消えてるんだけ
ど。このまま行ったら、ヤンデレになっちゃうんじゃないか。

「えーと、大変だったね……」

「はい、結構邪魔でした」

「そ、そう」

「あー! そうだ! 夏子さん、二年の火原火蓮先輩について何か知り
ませんか?」

「え? ああ、そうだね……運動神経抜群で頭も良くて……」

「いえ、そう言う事では無くてですね。悪いところを聞きたいんです。
例えば家事ができないとか、咀嚼音が大きいとか」

「あー、えーと聞いたことないかな。何で聞きたいの?」

「特に深い意味はないですよ。そういうの知ってたら好感度操作が

楽にできそうとかこれっぽちも考えてないですよ」

「あ、そうなんだ……」

好感度操作しようとしてたんだ。多分だけど黒田君に火原先輩の悪いところ直接言つて……。

「ごめんね。知らないや……」

「そうですか」

「ごめんね」

「いえ、夏子さんが気にする事ではないですよ。これからボロを出したら見逃さなければいいだけですから」

「あ、そうですか」

……黒田君大変だろうなあ。私も銀堂さんに付くつて決めちゃつたから、もしもの時のストッパーにもならないといけないんだな……。



あー!!! 朝からムカつく!!!

私は教室の廊下側の一番前の席で、不機嫌さ全開で朝の出来事を思い出していた。十六夜と一緒に居たら、急に割り込んできた銀堂コハク。

一年生で男子人気が超がつくほど高い女子生徒。そして、噂で聞いた十六夜が以前助けたという女。

十六夜厨二病疑惑は、彼女が十六夜がどんな活躍をしたか周りに言つた事から始まった。

それは良い。厨二病疑惑はそこまで問題じゃない。

問題は彼女が十六夜に好意を持っているということだ。最初はそんなことなど知らないから、私もアイツも遠慮がちだった。しかし、互いに徐々に何かを感じ取つた。

——あ、こいつ敵だ

恐らくだが彼女も同じように思つた事だろう。だからこそ張り合

いが始まった。正直な話、敵にしてはかなりめんどくさい。勿論、私の方が十六夜の好感度が高いのは明白だが、あのスタイルと美貌。正直引く。

美貌は私も負けてないが……スタイルは……。紙一重で負ける。

ああいう女は淫らな手で誘惑をしてくるかもしれない。その前に私が一步も二歩も先に行き、そんな手が通じないくらいにしないと……。

まあ、私の勝ちとは確定だと思っただけ。あんなに私の為に色々動いてくれる十六夜が、他の女の所に行くとは考えづらいし。

どうしようか？ そんな事を考えていると……

「なーに考え込んでるの？ 火蓮ちゃん？」

「ひ!!」

後ろから耳元で囁くように声が聞こえる。思わず変な声を上げてしまう。また来たのか……。私がこのクラスで苦手な生徒。

——黄川萌黄

「耳元で囁くなって何回言えば分かるの!？」

「だって、火蓮ちゃんの耳が囁いて欲しいっていうから」

「秒でわかる嘘をつくな」

「てへぺろ」

彼女はぶりっ子のように舌を出して、可愛い感じで誤魔化そうとする。なまじ可愛いからムカつく。

スタイルも良く、百八十を超える高身長。

可愛いくて足が長い。スタイルは私と紙一重ね。うん。

この黄川萌黄。まさかの女好きで、逆に男子が大嫌いという性格。しかし、男子からは何だかんだ人気がある。

悪い人ではないというのは分かってはいるのだが、どうにも苦手だ……

これに関しては仕方ない。彼女は私の後ろの席なのだが、いきなり抱き着いたり、耳に息を吹きかけたり、抱き着いたり繰り返す。

それは流石にヤバい。毎回変な声を上げてしまい恥ずかしい。だからこれ以上するなど、何度も、何度も、何度も言ってるのだが止めない。だからこそ苦手だ。私は基本的に一人だが、後の席ということもあつてか異常に絡まれる。

ラノベを読んでいる時にされるとマジでムカつく。私は本の中に入り世界を楽しんでいるときなのだ。いきなり私の独自の世界をぶち壊される。

主人公と中ボスの熱い戦闘。

おお、ここからどうなるんだ!? 抱き着かれる……雰囲気壊し!! や、やばい、ピンチだ。耳に息。『ひゃう』という声を上げてしまう。思わず殴らなかつたのは、私の器量の大きいからだと思う。そんなわけで、彼女に対して私は何処か苦手と言うか複雑な気持ちを持っている。

「うぎ」

「もおー。つれないな」

そんなことを言いながら、私の頬をツンツンする。こんな感じのノリが軽いと言うか、良く言えばフレンドリー、悪く言えばただウザイ。誰に対しても女子限定だがこんな感じなので友達が多い。

「火蓮ちゃんがか複雑な顔で考え込んでるから心配して話しかけたのに」

「そう思うならほつといて」

「そういうツンツンした態度も可愛いね!!」

彼 女は私に抱き着く。胸がぐりぐりと私の顔に押し付けられる。

……柔らかい。私とか、み、紙一重……。

「離して」

「えへへへ。いい匂い」

クンクン私のおいを嗅ぐ。恥ずかしい、ムカつく。私にとつても得がない。

「そろそろ私の拳が火を噴くわよ」

「ぷつ、拳が火を噴くわけじゃないじゃん。そういう子供っぽさも可愛い

よ。よーし、よーし」

子ども扱いしながら私の頭をなでなでする。た、確かに拳が火を噴くなんてありえない……いや、今のは詩的表現だ。

私の詩的表現も馬鹿にされた。そろそろ本気で行かないといけな
い。

私は彼女のお尻を強めにつまんだ。

「痛!!」

彼女はお尻を抑える。そのまま彼女から脱出した。

「もおー。酷いよ」

「酷いのはあんたのほうよ。あんなもの押し付けて」

「あんなもの？ ああ、胸の事かな？ はっ！ ごめんね。僕そう言うつもりじゃなくて」

何かを察したように目線を下に移す。

「火蓮ちゃんが小さい胸だからそれで優越感に浸ろうとかこれっぽちも思っていないから。そこは誤解しないで。だって、僕は火蓮ちゃんが大好きだから」

「そう、私はこの瞬間からアンタが大嫌いになったけどね」

「ご、ごめんね。えっと、胸なんて焼肉の脂身みたいなものだから、あんまり気にしなくていいと思う……あつ、焼肉って脂身が美味しいんだった」

「二度と話しかけるな」

「本当にごめんなさい。何でもするから許して」

まるで神頼みするように、私に手を合わせて懇願する。許したくないんだけど……。

何でもか……そう言えば萌黄は結構女子に詳しかったわね。

「何でもするの？」

「うん。僕に出来る事なら何でも」

「じゃあ萌黄、アンタ銀堂コハクって知ってる？」

「もちろんだよ！ あんな可愛い子なんだから!! 綺麗な銀髪と碧眼。そして、あの美貌と胸。胸なんて僕より大きくてびっくりしちゃったよ。Fくらいはあるかな？」

「つち。そうなんだ。まあ、私が聞きたいのはそこじゃなくて悪いところなんだけど」

「うーん、あんまり聞いたことないな。完璧美女って感じだね」

「完璧な人間なんて存在しない。何処かに綻びは必ずあるわ」

「え？ 急に探偵みたいなこと言っただうしたの？」

「私はそこを逃しはしない」

「あ、そうなんだ」

萌黄が知らないなら仕方ない。自分で見つけよう。綻びを見つけて好感度下げれば十六夜も幻滅するだろうし。悪くない策かも。情報収集の為にいったん仲良くなった振りをしてみようかしら？

フフフと私はほくそ笑み

「本当にどうしたの？」

萌黄の心配そうな声が後から響いた。

二十九話 胃痛

キーンコーンカーンコーン。授業が終わり昼休みを告げるチャイムが鳴る。

「授業はここまで。復習忘れるなよ」

さて、ここで体育祭の開催が決定するわけだが、一単色高校の生徒も賛成が九割以上あればいいんだが。

ピンポンパーンポーン。放送のチャイムが鳴る。

「体育教師の七星です。体育祭の開催アンケートの結果を発表します。早速ですが皆ノ色高校賛成九割。……超えました!!」

パチパチ無言で男子生徒が拍手。女子はハイタッチ。

「そして、一単色高校のアンケート結果……九割超えました!!!!
ヒヤッハーハー」

「!!」うおおおお!!」

男子達がついに喜びを露わにしたな。女子は普通に喜ぶ。

「やるからには勝利以外ありえない。一単色高校をぼこぼこにする気で体育祭には望みましよう。以上七星でした」

教師としてそれはどうなんだと思う。ボコボコって……。開催ができるのは素直に嬉しい。

「が やがやと教室が祝福ムードになる中、俺の前に銀堂コハクが来た。正直考えないようにしてたのだが、どう反応すればいいのか困る。」

「お、俺の事好きなんじゃ?」と思っていた時とは違い、確定してしまうと、ちよつとこちらとしてもやりづらい。

「十六夜君。お、お昼、い、一緒にどうですか?」

火原火蓮と一緒に居た時とはえらい違いだが、こういう風に言ってくれるのは嬉しい。でも、このまま火原火蓮との仲を拗れさせたままでは危険なのではないか?

「どうにかして元に戻せないものか? どうすればいいんだ。一緒に食事なんてしてもお昼が味しくなくなり、重力が十倍になるだけ。でも、やらないよりはいいかもしれない。」

最初は悪くても話すうちに仲良くなる可能性も……。あるかもしれない。

「そうですね。一緒に食べますか……。あの、火原先輩も誘いませんか？」

「……私では不満ですか？」

「あ、いや、二人が仲良くなつて欲しいなつて思いました……」

「……仲良くですか？」

「ほら、意外とそりが合うかもしれないし……」

「……そうですね。私も一回見極めておこうと思つていましたので誘いましようか」

「う、うん。そうと決まれば早速行こう」

良かった!! ここからちよつとずつ親睦を深めていこう!! 千里の道も一歩からと言う。お互いの良さを知れば本来の『ストーリー』に近い関係に戻るかもしれない!!

『ストーリー』では黄川萌黄が結構暴走をして、銀堂コハクを色々エロいことをして、それを火原火蓮が止めるという関係だ。

三人時代の話だが。まあ、残り二人が来てもあまり変わりなかったが……。

おつと、脱線した。今はこのことは考えなくていい。

彼女と共に火原火蓮を呼びに行くために席を立つと、教室のドアが開く。誰か来たか察しはつく。

「十六夜、お昼いくわよ」

男子達の嫉妬の視線は今には気にするまでもない。彼女にも三人でお昼を一緒に取ることを伝えなければ。

ちなみに、銀堂コハクは普通に冷たい目を火原火蓮に向けている。

「あの、火原先輩、銀堂さんも誘つていいですか？」

断られるか？ だとしても彼女も説得するだけと思つていたので、俺の予想の斜め上の行動をとった。

「うん！ いいわよ!! 人の縁は大事にしないといけないし、コハク

も一緒に行きましょう。ね？」

銀堂コハクに向かって笑顔で確認を取る。

「……ええ。構いませんが」

おおー。何だこの展開は!! 激熱だな!! おい!!

物凄い良い笑顔で彼女は告げた。これはどういう事だろう。

火原火蓮が銀堂コハクに対して柔らかい態度を取ってくれるのは良いと思うんだが。何で急に? やっぱり未来の魔装少女同士なのか感じ取ったのか?

分からんが、この手を逃す気がない。

「よし、食堂行きましょう!!」

「うん。三人で行きましょう」

「……」

俺達が食堂に向かって歩き出す。俺を二人が挟む感じになるが、今回は火原火蓮が笑顔という展開。

銀堂コハクも何やら困惑している。

「コハクは趣味は何なの?」

「なぜ? そんなことを聞きたいのですか?」

「いいじゃん! 聞かせてよ! 十六夜も知りたいでしょ?」

「まあ、はい。知りたいです」

今更と言った感じだが、火原火蓮と銀堂コハクがお互いの事を知る機会を逃さない方が良さな。

「十六夜君がそういうなら……そうですね。趣味は読書と料理でしようか」

「そう、得意な事はある?」

「趣味と被ってしまいますが料理でしょうか。後は……特にこれと言っていないですね」

歩きながら二人はずっと話し続ける。と言っても火原火蓮がずっと質問しっぱなしだが。勉強はどのくらいできるのか? 運動はどうなのか?

ずっと、質問をしていた。食堂で料理を頼み席に着いても続けるの

で、ちよつとおかしく思えてきた。

会話って感じじゃないような……。質問し過ぎじゃないか？

そして、火原火蓮ほとんど不機嫌になって行く。質問の回答が面白くないのか分からないが……。銀堂コハクは弱点と言うか欠点というものは殆どないから、何処か悔しいのかもしいないな。得意な事は特に無いと言ったが、勉強も運動もバリバリ彼女はできる。才色兼備の最強ヒロインというのが彼女なのだ。それに対して火原火蓮は絶望的に苦手な事がある。

例えば、銀堂コハクは料理が得意だが、火原火蓮は全くできない。

『ストーリー』でも料理ができないことを少し恥ずかしがっていた時がある。料理だけは彼女はできないという性質を持っていたため、銀堂コハクに教わるというほっこりする場面があつたが、そんな展開になるだろうか？　なんか嫌な予感がするんだが。

料理できないから教えてよ!!　みたいな感じになってくれれば一番いいんだがな。

「えつと、それじゃあ次に」

「ちよつと、待つてください」

「な、なに？」

「先ほどから質問が多すぎます。何が目的ですか？」

銀堂コハクが疑惑の視線を向ける。確かに質問が多すぎたような気はするが、そんな怖い顔しなくても……。

「べ、別に大した目的は無いわよ……」

「そうですか。でしたら今度はこちらからもよろしいですよね？」

「も、もちろんよ」

徐々に雲行きが怪しくなってきたような気がする。気のせいだね？

「先輩の苦手な事は何ですか？」

「と、特に無いわね。基本的に何でもできるから……」

見栄を張ったな。目逸らしてるし。料理が苦手のはずなんだが。と言うか家事全般苦手だ。

「ふーん。家事は得意ですか？」

「も、もちろんよ……毎日やってる……」

「……ふーん」

ニヤリと銀堂コハクが笑った。彼女はそのまま質問を続ける。

「毎日と言う事は昨日の夜食も先輩がお作りに？」

「ええ、から揚げ……つくったわ」

「使った部位は何処ですか？」

「ブ、部位？ えええつと確か、もも肉だった気がする……」

「味付けは？」

「……マヨネーズ」

「それだけですか？」

「……」

「答えられないって事は、もしかして料理できないんですか？」

「……」

小馬鹿にするように彼女は笑う。そんな煽らなくてもいいんじゃないか？ これは拗れるかも……。

「料理できないんだ……。私は基本的に何でも作れますけど、先輩はできないんだあ……」

煽りすぎじゃないか。めっちゃくちや煽っていくスタイルだな、折角話し合う機会なんだから、何とかして止めないといけない。

「ちよつと、銀堂さん流石にその……」

「出来るわよ!!!」

俺が止めようとする彼女が大声を上げた。

「出来るから!! やったことないだけで出来るから!!!」

「まあ、やった事がない？ そんなんで美味しいものが本当に出来るんですか?」

「出来るから。美味しい料理なんて朝飯前よ!!!」

「でしたら、今度食べてみたいですよ♪ 先輩のお・い・し・い・りよ・う・り♪」

「この!!! クソ女!!!」

「目がキツネさんみたいになってますよ♪」

「五月蠅い。もう、私教室戻る!!!」

彼女は料理を口に無理やり入れて、怒った足取りで帰って行った。これが嫌な予感の正体か……。

「フフ。滑稽ですね」

「え?」

「あの人が最初から私の苦手だったり、嫌いな事を探ろうとしてたんですよ」

「え? そうなの?」

あの大量の質問にそんな意図があったのか? 銀堂コハクがそう思っているだけかもしれないが、そう考えると納得できるかもしれない。急に仲良くなったし。

何度も質問しても返信が長所ばかりということでも若干不機嫌だった。そう考えることもできるな。

「そうですね。でも、結局自分で墓穴を掘った。こんな面白いことがあるでしょうか?」

「どうですかね……俺にはちよつと何とも言えません……」

「そうですね。まあ、もうどうでもいいですよ。あの人は忘れて二人で楽しく昼食を楽しみましょう?」

「あ、うん」

帰り道のスーパーに胃の薬売ってたっけ? 結局この二人が仲良くななんてすることなく解散してしまったことに軽くショックを受けた。

何とかしなければ。体育祭で挽回するしかない。具体的な策は全く浮かばないが、俺は思考を巡らせる。

「あの、十六夜君……」

「どうしました?」

急に優しい声で若干の恥ずかしさを顔に浮かべながら、彼女が話しかける。その感じで火原火蓮とも話してほしかった。

「体育祭ってお、お昼持参で、ですよ?」

「そう言えばそうでしたね」

「あの、もしよかったら私が作ってくるので一緒に食べませんか？

一人も二人も大して作る手間は、変わりませんから……」

顔を真っ赤にして言われると、こちらも照れ臭い。正直に言えば、美少女の手作り弁当とか幸運以外の何物でもないのだが。これで火原火蓮と更に仲が拗れたらどうしよう……。

「もしかして、嫌なんですか？」

そんな涙目の上目遣いはずるいだろ。許可する以外に道はなくなってしまう……。

「嫌じゃないです」

「そうですか!! それじゃあ、十六夜君の好きなから揚げ作ってきますね♪」

「あ、ありがとうございます」

俺の好きな物覚えててくれたのか。可愛い過ぎるんだが……この子。

彼女とその後昼食をともにして、昼休みが終わり授業をして放課後になる。

体育祭の開催が決まり、実行委員も再び活動することが決定し、委員同士で競技の確認などを兼ねて会議が行われる。

眼鏡実行委員長の金子太一がペラペラと説明をしており、皆真面目に聞いてはいるのだが、一名例外が居る。

机の下で本を読む火原火蓮。隣なのでこっそり見てみると

『三歳から始める料理の基本』

見返すつもりなんだな。銀堂コハクを。

「卵焼きって難しいわね……」

小声でぼそつと彼女が呟く。結局彼女は会議中本から目を離すことはなかった。

「それではこれで確認を兼ねて会議を終了します。明日からは本格的な準備に取り掛かりますのでよろしくお願いします」

今日は会議だけ、明日からが実行委員が大変になるようだ。金子太

一の言葉で他の委員も解散し帰っていく。それは俺達も一緒。

会議が終わり部屋を出ると

「ねえ、十六夜」

「どうしました?」

少し彼女は気まずそうに話しかけてきた。……もしかして。

「体育祭って、お、お昼持参だから私が作ってきてあげ、あげるわ。感謝してよ、よね」

嬉しい。素直に嬉しい。だけど、お弁当勝負みたいになると、もつととんでもないことになる。

これ以上拗らせるわけには。でも、銀堂コハクのお弁当だけ食べるのも胃が痛い。

「私のお弁当は食べたくないの?」

そんな顔で言われたら……断るなんてできないだろうが此畜生!!

「いえ、食べたいと言う感情しかありません」

「やった!! じゃなくて……ふーん。仕方ないから作ってきてあげるわよ」

「お願いします……」

即答してしまったが、あんな顔で言われたら肯定以外の答えはない。だけど、どうしよう……。

体育祭がとんでもないことになるという感情を抱えながら、そして胃を抑えながら俺は肩を落とした。

そして、火原火蓮と途中でまで帰ろうと思ったら、まさかの銀堂コハクが待って居てくれたので、そこからさらに胃が痛くなったのは俺だけの秘密だ。

三十話 アジフライ

胃の痛い毎日が続いた。銀堂コハクと火原火蓮は毎日のように威嚇しい、体育祭の前日まで心休まる日など無かった。

体育祭の日にお弁当を作ることに両者気付いたようで、お弁当対決となり、更に険悪な感じになった。少し休もうぜ……。

心休まらないりゆうは、もう一つある。それは次なる被害者、黄川萌黄である。

彼女のバッドエンドまでには、時間にだいぶ余裕がある。だが、仲良くなって損はないと思い、偶々廊下ですれ違ったとき声をかけようとしたが……。

『あの……』

汚物でも眺めるような目で見られ、会話を拒否するオーラを出しまくっていた。体育祭の実行委員、修羅場、学校の噂により黄川萌黄の好感度メーター氷点下。多少の親密度さえ許されない。

胃が痛い。ただひたすらに……。

まだ黄川萌黄に関わる必要はないだが、今後接触することを考えると胃が痛い。どう接すればいいか分からない。

まあ、彼女が嫌がっても、いつも通り無理やり付いて行くのだが……。

その場合、学校内の噂、校内新聞でまたしても炎上する。バッドエンドを回避するためなら、俺は多少の批評を許容できる。

だけど……

『噂の厨二、美女二人を侍らせてご満悦!!』

『ストーリーカー、美女二人の弱みを握ったか!!』

『二つ名、ダブルディストラクションオーバーレイから、ただのクソに変更』

勘弁してくれ。胃、胃、胃が痛い。これ以上どうなるんだ？
悩み、悩み、悩みによって
俺は押し潰されかけた。

しかし、ここで止まるわけにいかない。恩返しという目標がある以上、思考をここで止めてはいけない。

思考を開始。

——バッドエンドを回避したら普通の学校生活に戻りたいのに、クソ男の汚名が一生付いて回るんじゃないか？

こんなことは考えない。今は彼女達の事を考えよう。

——黄川萌黄と多少なりとも関わりを持ち、その上で修羅場を緩和。

これだ。具体的な方法は全く思い浮かばないが、やるしかない。体育祭はなんとなく生徒の気持ちが高まるイメージがあるから、何とかなるだろう。多分。

さあ、行くぞ!!!

覚悟を決め、ベッドに潜る。体育祭の為に早めの睡眠をとる。しかし、そこで携帯が鳴った。

確認すると

『十六夜。仕事が急になくなったから、明日の体育祭見に行くわね。』
母からのメール。いつも忙しいのに珍しいな。仕事が急になくなったのか？ まあ、来てくれるなら多少は良い姿を見せないといけない。

明日の目標が増えたが、特に気に留めずそのまま眠りに就いた。



体育祭の日、私は朝五時に起きた。弁当作りの為である。今まで料理などをしたことがない私だが、今回はそんなこと言っていられない。

時間は無駄にはできない。まず唐揚げから!!

キッチンに立ち、油を注いで温め、冷蔵庫から昨日漬け込んでおいた生の肉を出す。最近のスマホは便利だ。調べれば何でも出てくるのだから。粉をまぶして……。

パパが手伝いを申し出てくれたが、それは断った。ここでパパの手を借りたら、銀堂コハクという女に敗北したのと変わらない。

油が温まったので生の肉を入れる……。どうやって入れるんだ？

え？ 超怖いんだけど??

「おはよう。火蓮」

「おはよう」

「手伝おうか？」

「いらぬ。私の聖戦だから」

「そ、そう。でも危ないから見てるね……」

いつもはもつと遅く起きるパパも、心配して私のお弁当作りを見に来てくれた。これはなんとしても成功させなければ。

油を見る。ここに肉を入れれば、ただそれだけ……。そう、入れるだけ。だから、どうやって!?

「頑張ってるのね。火蓮」

「ママ!!」

「手伝う？」

「大丈夫……っていうかママも料理できないでしょ」

「そういえばそうね。ここでパパと見てるわ」

ママも料理は一切できない。私が園児のとき、卵焼きを焦がして、煮物の水分を全部飛ばしてしまつて以来、料理禁止となつたのだ。

私の料理下手はママの遺伝……いや、私がやらなかったただけだろう。

ビビりながらも網じやくしを使い、肉を入れることに成功する。しばらくは我慢。

数分後。油が跳ねてめっちゃ怖い中取り出し完成。次は卵焼き。

冷蔵庫から卵を出す。ええっと、軽くヒビを入れて……。

潰れて中身が出てしまった。次、次、次。全部割れた。

「火蓮。ちよつといいかな？」

「ダメ!!」

「いや、でもこのままだと卵が全て潰れて……」

「まだ、四個あるから!!」

「う、うん」

割れてしまった卵の中身は私の朝ご飯である。その後、最早スクランブルエッグの卵焼き。

そして、唐揚げ。

時間がないので仕方なく入れた冷凍食品のシューマイとたこ焼き。

これらによってお弁当が無事完成した!! 最初は出来が悪いかと思っただが詰めてみると案外いい感じ。

「できた!!!」

「よくやったね」

「成長したのね……」

二人とも感無量といった感じだ。どうだ!! 私だつてやればできるんだ!!! これをお昼に十六夜に持って行って……。

『召し上がれ』

『ミシユランもびつくりだ!!! 火原先輩つて家庭的なんですわ!!!』

『これくらい大したことないわ!!』

嗚呼、完璧。フフフ。銀堂コハクもここまででは作れないでしょ。勝った!!!



「えーと、唐揚げは二度揚げしてあるから……。後はハンバーグとポテトとオムレツとアボカドのサラダと……」

とある台所。銀白少女がせっせと料理を作っていた……。



俺は朝起きてすぐに着替え学校に向かう。実行委員は朝からやることが多いため、少し早く登校しなければならないのだ。

体育祭の場所は皆ノ色高校。そして、親の入場も許される。かなりの人数が集まることが予想される。日陰作り用のテントも張らなくてはならない。

前日に大体会場の設営は終わっているが、細かいところは当日の朝に準備する。その為、俺達実行委員が良いように使われるのだ。

俺が学校に着いたとき、実行委員はすでに殆ど揃っていた。時刻は七時前。七時から実行委員は作業開始だから、結構ぎりぎりである。もっと余裕持ってくればよかったかな？

「よし、それじゃあ作業開始しよう」

金子太一の号令で、一人を除いて実行委員全員が動き出す。火原火蓮はまだ来ていない。

もしかして、お弁当作りが原因か？

作業すること四十分。

「ち、遅刻した!!」

ダツシユで火原火蓮が到着。皆に頭を下げ謝っている。

「ごめんね。十六夜」

「これくらい、大丈夫ですよ」

「お弁当作りですっかり忘れてた……」

彼女は頭を抑えて落ち込んでいる。慣れない事をして他の事が抜けてしまったんだな。

「でも、すつごいのできた。星取れるくらい!! 楽しみにしてて!!」

「そ、そうなんですか。楽しみにします」

彼女って料理上手だったか? 『原作』だと、卵を割るの失敗して一パック丸ごと無駄にしたり、煮物ほったらかしでラノベを読んで水分全部飛ばしたり、色々やらかしていたのだが……原作とは違うのか?

準備が進むにつれ、生徒達も登校してくる。今日は体操服登校が許されているので、直接着てくる生徒もいる。制服で来てから着替える生徒も結構いる。

一単色高校の生徒も続々と校内に入ってくる。彼らは両校の指定された陣地に荷物を置き、開催まで待機。各校の待機場所は、クラスごとにさらに細かく分けられている。

実行委員も準備を終えると、一旦クラスの待機場所に行き出席確認をする。待機場所は南側にある。北側には実行委員の待機エリアがあり、そこで色々仕事をする。

出席確認をした後、再び実行委員の待機エリアで開会式の準備をしていると、金子太一の声が聞こえてくる。

「え? 前で準備運動をする香川君が休み!?!」

全体での準備運動が開会式のプログラムに含まれている。生徒の前で体操の手本となる香川君が休みらしい。

大変だな。全生徒の目前で準備運動したい奴なんていないから、代えは直ぐには見つからないだろうし。

「進行役はやらないといけないし、誰か代わりに……はッ!!」

俺を見るな。目線を逸らしたのだが、金子太一が俺の前に来る。

「頼むよ。黒田君。色々やらかしてる君なら恥ずかしい事なんて今更ないでしょ!!」

超失礼。なんなのコイツ。当たってるのがもつとムカつく。言葉を濁せ。

「お願い!! 君しか居ないんだ!!」

ムカつくけどコイツ委員長として頑張ってたしな。これくらいなら別にいいか。

「わかりました」

「ありがとう!!」

そして、体育祭の開会式の為、両校生徒たち全員が並んで開会式が始まる。集団で並ぶと人数の多さがはつきり分かるな。

生徒の親御さんも校内の至る所に居て、全体で千人近くいるかもしれない。

「それでは体育祭の開会式を始めます。まずは校長先生の話」

そこからは凄い長い。例の事件の事がありながら開催できたことの喜び。そこから謎に派生した世間話。それを×2。

軽く一時間くらいやった後、ようやくプログラムが次に進む。

「続きまして金親元次様より挨拶があります」

なんでだよ。意味が分からん。と思ってしまうが、今回金親会社から飲み物の差し入れがあったため、大人の事情が色々あるらしい。前に金親が出てくる。

「今回は合同体育祭が開催できたこと誠に嬉しく思います」

「カツコいいいい!!!」

「何あの子!!!」

「転校決意!!!」

両校の女子高生殆どがめっちゃ騒ぐ。両校の男子高校生殆どが中指を立てる。

いつもの事がスケールが大きくなっただけ。

クソの挨拶が終わり、女子たちの興奮が冷めやらぬ中……

「続きまして準備運動。前で皆ノ色高校の黒田君がお手本としやりますので生徒全員怪我しないように真面目に執り行いましょう」

この空気の中、行くのか。金親が出た後に。フィールドが完全にアイツの物になった後に出て行くのは、自滅行為に近い。しかし、引き受けてしまった。

仕方ないから前に歩いて行く。

「あれ?…なんか……背小さくない?」

「顔は……普通ね」

「可哀そう。イケメンの後に出るなんて……」

背が小さく見えるのは、金親の後だからだよ。顔も金親を見た後では、そりや見劣りするの当たり前だろ。

一単色高校の女子高生がひそひそ話すのが心に響く。

「ちよつと、可哀そうでしょ!!!」

とある一単色高校の女子高生が大声を上げた。何か嬉しい。

「仕方ないでしょ!!! フォアグラの後にアジフライが出たら見劣りするの当たり前じゃん!! それと同じだよ!! いちいち言ったらあの子に失礼だよ!!!」

お前がな。お前が一番失礼だよ。彼女がそう言うと、皆俺に気を遣

い、ちよつと気まずい感じになる。

何とも言えない空気の中準備運動をするのは地獄でした。

三十一話 アジフライ!!!

アジフライである俺は、個人競技をするため校庭の端っこで始まるのを待っていた。個人競技は先にやり、団体競技はその後で行われる。

まずは借り物競争。カードを引いてお題の物を持ってゴールという当たり前のルール。個人競技参加人数は三十六人であり、両校女子一年、二年、三年。そして男子の順番。

「十六夜君大丈夫ですか？」

「大丈夫です……」

アジフライ呼ばわりが結構心にキている。アジフライって……いや、嫌いじゃないんだけどね。美味しいけどねアジフライ。

俺が暗い顔をしていると、銀堂は恥ずかしそうに言葉を続ける。

「あ、あの、私はフォアグラよりアジフライの方が好きですよ。アジフライってお手頃で美味しいですし。最近のフォアグラって作り方残酷ですから……あまり、好きじゃないっていうか」

「お気遣いありがとうございます」

「いえ、あんまり気にしないでくださいね。アジフライの方が好きな人も結構いると思いますから」

そのまま彼女は競技開始の為に去って行く。なんか元気出たな。そうだよ。アジフライって美味しいんだよ。フォアグラだって食べてみたら案外大したことないってよく聞くし。

アジフライの方が人気があるんだ!!



最初は女子一年。六人が並び、その中には銀堂コハクも居る。いつも通り、男子の視線釘付けにしている。

スタート地点に居る実行委員の人が、笛を啜えて合図を出す。

「それでは、よいドン」

六人の女子が一斉にスタート。伏せられている内のカードから一

枚を引いて、内容を確認。

ざわざわと盛り上がる声が響く。千人近い人がいるので当然だが、いつもと違う雰囲気 naturali と高揚感と高めていく。

銀堂コハクはどんなお題を引いたんだ？ 少し迷っているが、何が書いてあるんだ？

「……」

彼女はAクラスへと走って行く。そして、野口夏子の手を取って走り出す。

同性の友達とでも書いてあったのだろうか？ そんなカードがあるのは、準備の途中で見た気がする。

二人は何処か恥ずかしそうに笑いながら、三位でゴール。絶対とは言わないが、お互いに信頼をしているように見えた。

銀堂コハクに友と呼べるものがいて、少し嬉しくなる。『ストーリー』ではなかなか人を信頼できない彼女が、少し悩みはしたものの野口夏子の下に真つすぐ向かったのは良いことだ。

……こういう『ストーリー』ブレイクは歓迎してもいいのかな？
どうなのだろう。いや、大丈夫だろう。

ダメなのは『魔装少女』同士の不仲だ。ここだけは、何があっても『ストーリー』と違ってはいけない。しかし、今の彼女らは親しい仲とは言えない。

ちなみに、俺のお題は『揚げ物』だったので、何も持たずにゴールして審判に

『自分アジフライなんで……』

と言ったら一位を認められた。



次は、パン食い競争。

「銀堂さん、頑張ってください!!」

野口夏子の声援を送り、銀堂コハクがやる気を充溢させる。先ほどの借り物競争で、さらに仲が深まったようだ。

銀堂コハクは照れくさそうに手を振って、声援に応える。

「頑張ってください!!」

「俺達が付いてます!!!」

「女神!!!」

「手振ってください!!!」

学校対抗戦なのに他校まで応援するという謎の事態が起きている。

銀堂コハクは苦笑いで返礼しつつ受け流した。

「うおおお!!」

「今俺に手振った!?!」

「馬鹿俺だ!!」

何処の学校でも男子が考える事は大体同じか。

パン食い競争とは、紐で吊るされたパンを口だけで取るという競技だ。

女子は大体一メートル八十、男子は二メートルくらいの高さに吊るされている。再び六人の女子が並び、競技がスタートする。

「ヨー!ドーン」

彼女は完璧なスタートの後に加速、一位をキープして数メートル走る。そして、パンが吊るされた場所まで一位で到着。

この場所では手を後ろに組み、ジャンプしてパンを啜えないといけない。

パンを啜えようと飛び跳ねるも、ゴム紐がかすかに揺れるためなかなか取れず、何度もジャンプするハメになる。

「と、取れない」

腕を組むことでボディラインがさらに強調され、ジャンプすることで凄いい揺れる。口を開けて何度も跳ぶ姿はエロい……。

男子達は前屈みを余儀なくされるが、何も言うまい。仕方ないのだ、これは。思春期男子にあんな格好を見せて、反応するなど言うのは無理難題である。

——おっと、俺は反応しないが競技に備えて屈伸をしなくては……。

十回近く跳んで、ようやく取することに成功する。その瞬間男子達がつかりしたように頭を下げた。

彼女はそのまま一位でゴール。ポテンシャルの高さを感じたな、色んな意味で。俺はこの競技三位でした。



二年、三年の男子のパン食いも終わり、そして、二人三脚。男女一つのペアで走るの、スタート地点で準備をするために一年男女が集まる。一年の男女の後に二年、三年と先ほどと同じ順番。

「縛るのは緩めでいいですか？」

「は、はい。お願いします」

俺は右足、彼女は左足を縛る。距離が近いと言う事もあるのだが体操服って事もあり余計に落ち着かない。

周りの参加する男子達はどうか？ ああ、緊張してるよね。やっぱり。初々しさがあふれるカップルのようだ。

応援の男子達は見なくても分かるな。

「あの、効率よく走るなら手を繋いだ方が良くないですか？」

「あ、はい」

まだスタートではないが、彼女の手を取った。柔らかい。前にも握った事はあったけど、こういうのは慣れない。

草食系を装っていいこう。そう思っていると、彼女は顔を赤くしながらも俺と目を合わせた。

「あの時もこうやって手を繋ぎましたね。お、覚えてますか？ 不良に絡まれた時の事」

「え、あ、はい」

「そ、その時は大したことはなかったのに、い、今は凄いドキドキします。あの、十六夜君はどうですか？」

「ええ!? えつと今も昔も変わらさず落ち着かない感じですかね……」

「そ、それは私を異性として意識していると認識していいんですか？」

「ま、まあ、女性だと思ってますからそうなのかな？」

「やった!」

小声で放った彼女の『やった』が聞こえた。

も、もう何なんだよ!!! 胃を虐めるかと思ったらこんな恋愛漫画的なムードにして混乱するわ!!!

凄い振り回されてる。これが主人公の力……なのか? こんな甘えた感じで来て、小声で喜ぶつてもう何なんだよ!!!

疲れるからもう意識しないぞって思ったら繋いでる手が柔らかい。それでまた意識しちゃうし。

無限ループ。

「それでは、よいいスタート」

笛の音が鳴り、思考から解放される。彼女に気を取られてる間に競技が始まってしまった。

「俺達も行きますよう。右足から」

「は、はい」

「せーの」

俺と彼女は右足から踏み出そうとした。お互いに違う足を結んでいるのに、同じ足を動かすと、もちろん――

「ふえええ」

まず彼女が膝を突き、その勢いで俺も蹴躓く。

「す、すみません」

「俺が分かりにくくいったのが悪いんです。こちらこそ申し訳ありません」

「大分差がついちゃいましたね」

「確かに、でも最後まで頑張って走りましょう」

互いに結んだ足を踏み込み、立ち上がる。上位陣はすでにゴールしていたが、そんなことでやる気を失うほど俺も彼女も諦めは良くない。

「縛つてある真ん中の足から行きましょう」

「はい」

「セーの」

決して速くはないが二人で息を合わせて走る。彼女の揺れるものから目を引き剥がして、ゴールだけを見据える。

最下位でゴール。

「最下位でしたけどいい思い出になりました。ありがとうございます。十六夜君」

「いえ、こちらこそ。それじゃあ、ほどきますね」

「はい」

パパッと布の紐を解く。これは実行委員に返却する物だから、俺が持つて行くか。

「じゃあ、俺は委員の仕事があるので……」

「はい。それじゃあ、またお昼に」

さて、俺には仕事があるから行かないと。これからクラスごとの団体競技が始まるから、審判の準備が待っているのだ。……その前にトイレに行くか。これから行きたくても行けなくなるかもしれないし。

校内のトイレに向かうと

「久しぶりね。十六夜」

後からの声に振り返ると黒い髪と黒い目。年の割には美人な今生

の俺の母、黒田愛がそこにいた。

「あ、久しぶり」

「元気にしてた？ この間はお見舞い行けなくてごめんね」

「俺が来なくていいって言ったんだから気にしなくていいよ」

「それならいいけど……あ、個人競技頑張ってたわね」

「ぼちぼちね」

「一位と三位だけでも十分凄いわ!! それとあの二人三脚の子!!!」

「え？」

「彼女なんですよ？ お母さん嬉しい！ あんな可愛いくて美人の子がお嫁さんなってくれるなんて!!」

大分深読みしてるな。ここは誤解を解かないと……。

「いや、彼女でも何でもないよ」

「またまた、あんな雰囲気で彼女じゃないなんてありえないわよ」

「いやいや、本当だから」

「えー！ あんなほの字なのに!! ビックリ!!!」

「声が大きいから、ポリウム落として」

「あ、ごめんね。それより」

母さんは妄想たくましく話を進めるが、悪気がないから非難するの
も気が引ける。

「昨日、お母さん占いの館に行ったのよ。それでね、十六夜の事占って
もらったのよ」

「そうなんだ。何で俺を？」

「いつも一緒に居れないから何かしてあげたかったの」

「そういう事、ありがとう」

「いえいえ、それでねその占いの人すっごい当たる人なの!! 当たり
すぎて色んな事に巻き込まれるから田舎でひっそりと暮らしてるん
だけど……」

「なんでそんな人と知り合いなの？」

「高校の時の隣の席で仲良かったのよ」

「あ、そうなんだ」

「それで占いの結果なんだけど……」

「……」

俺は思わず固唾を飲んだ。田舎に引き籠もらなければ騒動を引き起こすほどの的中率なのだ。いい結果が出てほしい。

「うーんとね。忘れちゃった」

「ええ？」

「スマホにメモ取ってあるからちよつと待って……」

母さんはスマホを出し、メモを読み始めた。

「至光の銀白、紅蓮の赤、稲妻の黄、大海の青、銀白の黒。これらの色が十六夜を縛るようになってくつついてるんだって!!」

「うそーん」

「本当だって。場合によってはお嫁さんが五人になるって!!!」

「それはダメじゃね？」

「お母さん良いと思う。子沢山だと楽しいし、私はサッカーチーム作りたいから十一人くらい孫が欲しいわね」

「それはない」

「あ、そうよね。補欠の子も必要だから十八人くらいかな？」

「そうじゃない」

天然も少し入っているのが黒田愛という人物。それにしても、五色縛りって……そんな、まさかな？ 占いだよね？

「あ、でもね。何か美しい色に淀みつか泥みたいなのが被るかもしれないって。そうなると色消えちゃうって!!!」

え？ この占い師ガチじゃね？ バッドエンドまで分かっちゃうの？

「既に銀白と赤は泥が消えてるって言ってた」

「こわ!!! 何それ、こわ!!! なんなのその人!! ばりくそ当たつとるやないか!!」

「次に泥が来るの黄だって。お母さんお嫁さんが減るのはやだけど、

十六夜がその泥を跳ねのけるから心配いらないうって言った」

「お嫁さんって決まったわけじゃないと思うけど」

「もう決まったも当然だと思っうわ。占いの中十割の子なんだから」

「でも、銀白の黒の子に關しては良く分からないだつて。まだ、生まれてない？　かもつて言つてたけど至光の銀白の子と似てるつて言つてた」

「その人ガチだわ」

「だからそう言つてるじゃない。黒の子は淀みもないけど、存在もない。でも十六夜の未来にはいるつて」

「超能力者だと思っう。その人。連絡先後で教えて、絶対役立つ人だわ」
「うん、分かつてる。十六夜ははずれ私の力を借りる時が来るだろうから連絡先を渡しておいてつて、もう先に言われたの」

「怖い怖い怖い」

一応、連絡先を渡してもらつた。

「至光の銀白つてさっきの二人三脚の子なんじゃない？」

「どうだろうね」

「絶対そうよ。話してるうちにあの子だつて確信したんだから!!」

「あ、そう」

「ちよつと十六夜!!　いつまで油売つてるの!!」

凜とした声が響く。俺と母さんが声の方を向くと、ツインテールに体操服姿の火原火蓮が睨めつけていた。

「紅蓮の赤!!!」

「母さん落ち着いて」

我が母上が火原火蓮を見て興奮なさつてゐる。確かに紅蓮の赤つて感じはするが。

「え？　十六夜のママ？」

「そうです」

「そうなんです!!!　貴方お名前は!？」

「二年の火原火蓮と言います。えつと十六夜にはいつもお世話になつております」

彼女は頭を下げる。我が母上は感心して、同時に嬉しそうな顔になる。

「あらあら、礼儀正しいのね」

「いえ、当然です」

「それに凄く可愛い!! 十六夜もそう思ってるでしょ?」

「まあ、そうだけど」

「そ、そんな可愛いだなんて」

彼女は顔を赤くしてはにかむ。落ち着かないのか、前髪をしきりに触っている。

「そろそろ、俺行かないと」

「そう、それじゃあまたあとでね。火蓮ちゃんも」

「はい、また」

母さんから離れて待機場所に向かう。結局トイレには行けなかった。我慢できない程ではないから、別にいいか。

「十六夜のママ、優しそうね」

「優しいですよ。怒ると怖いですが」

「うちのママもそうよ」

俺達お互いの家族を話題にしながら、わずかな時間を楽しんだ。

三十二話 占い師

一年生の団体競技が滞りなく終了し、午前の部が締めくくられた。午後の部には、二年生、三年生の競技が控えている。

俺達一年Aクラスは、クラス対抗の綱引きで勝利を収めた。個人、団体ともに、気持ちよく競技に挑めたと思う。

実行委員にも短い昼休憩が与えられ、ようやく腰を落ち着けることができた。さて、俺には、体育祭以外にも考えなければならぬことがある。

俺は『ifストーリー』を前世で読んでいたが、三巻まで。そこから先は分からないがあるとしても残り一卷。そこから先はあり得ない。

全てのバッドエンドは同一世界での出来事だと、作者が明言している。第一巻の時点で銀堂コハクが死んだ場合、五人目の魔装少女にバッドエンドは起こり得ない。だから、残り二人を救えば解決ということになる。

黄川萌黄のバッドエンドは知っているが、その先である

“ 四人目 ”

この四人目については全く分からない。

既刊の『ストーリー』、『ifストーリー』は買い集めたが、俺は全てを知っているわけではない。

銀堂コハク、火原火蓮、黄川萌黄。彼女達については過去の話まで網羅しているが、発売中止になった『ifストーリー』の内容はどうしても分からない。

住んでいる場所は大体把握できているが、どんな結末が待っているのか分からないため、四人目を守り抜く難易度はとんでもなく高い。

完璧な方法で二人の少女を救ったと言い切る自信はないが、結果的にはそこそこのことは言える……よな？ もっと上手く物事を運べたか

もしれないが、俺にはあれが精一杯。何とかなっていると思いたい。しかし、それは『ifストーリー』の知識があったからだ。

俺は四人目の行末を知らない。本来の『ストーリー』では皆ノ色高校に転校してくるが、『ifストーリー』ではどうなのだろうか？

引越してきた後か、それとも黄川萌黄のバッドエンド直後か。これについては判断のしようがない。

ただ、彼女の現在の住まいについては予想がつく。黄川萌黄の事件を解決した後すぐに向かおう、と考えていたのだが……

しかし、想定外の『占い師』の存在。『ストーリー』に関わりはないが、そんな人物がいても不思議ではない。なにせ、この世界はファンタジーなのだ。今の所殆ど味わっていないが、まごうことなくファンタジー。

妖怪、都市伝説、その他色々実在する。野口夏子も並外れた直観力を持つ『超能力者』だ。あと、この皆ノ色高校にも七不思議が存在する。俺は幽霊とかはマジで嫌いだ、超能力は羨ましい。

まあ、件の占い師にも流石にデメリット、弱点はあるに違いない。協力してくれると言うのだから、直接尋ねればいい。これ以上悩む必要はないか。

考え過ぎも良くない。行動する方が大事。早速、電話しよう。一体どんな人なのか？

スマホに番号を打込み、発信。呼び出し音が5回。繋がった。

「お主が黒田十六夜か？」

「はい。そうです。初めまして」

「愛から連絡先を聞いて我に連絡を寄越したということとは分かっている。要件を言うのじゃ」

何か。喋り方が独独だな。一人称我。なんとかじゃ。じやって……。っとそんな場合じゃない。何から聞こうか……。

うーん。どの程度占いができるか聞いてみるか。

「えっと、占いができるんですよね？」

「一応な」

「どの程度分かるんですか？」

「知らん」

「え？ 知らないんですか？」

自分の能力なのに分からないのか？ でも、何でも分かるって言わ
れなくて逆に安心したかも。そう言われたら、裏ボスかもしれないと
警戒しただろう。

「私の占いは絶対に当たるが何でもかんでも見えたり、分かったりす
るものではない」

「もつと分かりやすくお願いしてもいいですか？」

「まず、私の占いは占う相手の顔と占う条件を我が知らなくてはなら
ない」

「それから何ですか？」

「後は結果が出るまで待つのみじゃ」

簡単すぎる!!! 緩いな、占い。そんなことで占いができるのかよ。
チートもいいところだな。俺も欲しいな、チート。

心眼とか、封印されし右手とか。アカシックレコードとか無理だよ
な。あれば、あっさりバッドエンド解決できたのだがな。無い物ねだ
りしてもしょうがない。

「凄いですね。それは。当たりすぎて田舎に引きこもりになるのも納
得です」

「まあ」

結構自信満々の感じの人だな。まあ、つてそんな言い方初めて聞
いた。だけど、その自信も納得の能力。

この人に協力してもらえれば……

“四人目”のバッドエンドでも大分有利に立ち回れる。

「あの、占ってほしいことがあるのですが……」

「構わんぞ、ただ、その前にこの占いのデメリットを話しておこう」

「あ、はい」

あつて当然だな。こんな破格な力だ。とんでもないデメリットが
あるに違いない。

「私の占いの結果が出る時間はランダムじゃ。そして、結果に關してもな。情報量に差異があるとき、抽象的に見える時、鮮明に見える時。鮮明に見えても使えない時。変な感じで見える時。様々ということじゃ」

おお、何か本格的……なのか？ 変な感じ？ 使えない時？

「あの、変な感じってどんな感じですか？」

「そうじゃの……お天気ニュースのような感じで見えたり、いきなり動物で見えたりする感じかの」

急に頼りなく思えてきたんだが、大丈夫だよな？ 怪しいな。もっと詳しく聞いておこう。

「時間がランダムと言っていましたけどそれについては？」

「そのまんまじゃ。三秒だったり、一年後だったり。するの」

するの、じゃねえ!!! 一年後とか終わってんだろ!!!

「抽象的に見えると言っていましたけどそれについては？」

「色で見えたり、動物で見えたりするからの」

「鮮明に見えても使えない時というのは？」

「自転車のカギのありかを占ったら町の何処かにあると出るイメージじゃ」

つ、使えねえ……。なんだこの占い師？ どんでもねえ助っ人が来たぜって感じだった時の気持ちを返してくれ!!! しようもないわ!!

だった時の感じを返してくれ!!! しようもないわ!!

いや、待てよ。こんないい加減な占いなのにどうして俺の現状が分かったんだ？

もしや、何かとんでもない秘密が……？

「あの、俺と俺の現状についてかなり鮮明に知ってたようですが、どうしてそんなに知ってたのですか？ 流石に今の話を聞いたただけだと占いで分かったという感じがしないのですか？」

「ふむ、そこに気づいたか」

何かとんでもない秘密が出てくる感じだ。一体どんな秘密が!?

「実は、お主を占うときだけ、異常に調子が良かったんじゃない?」
「は?」

「お主の占いの結果。最初に未来、その後過去を条件にして見たがどちらも三秒ででよった。しかも結構情報量が多くな。ちよつとビビったの笑」

「いや、笑い事じゃないですよ。俺とんでもない凄い占い師かと思つて期待してたのに何ですか!？」

「わりい、すまん笑」

「ふぎけんなよ!! 凄い助っ人かと思つたら何なんですか!! 占いが当たりすぎて田舎に引きこもってるじゃなかったんですか!？」

「ああ、それなんじゃが普通に実家に帰ってたから帰っただけじゃ。愛に謝つといてくれ、見栄張つてごめんと笑」

「ごめんじゃないわ!! マジかよ!! 高校の時から同級生なのにこんな詰まらん嘘に気づかないとか、うちの母さんもやばいな!!」

!!」

確かに天然だが、三下占い師のお粗末な嘘も見抜けない程騙されやすいとは思わなかった。

「愛は悪くないぞ。何故なら高校の時、毎日、愛の自転車のカギをわざと隠して占いで見つけた感じにしておったからの。我を信じてしまうのも無理ないの」

「とんでもねえわ!!! 最悪だ……希望だったのに……」

「ふむ、一応お主の未来と過去は多少見せて貰ったからの。事情は全てとは言わないが分かっておる。我に何かできる事があればいってみよ。雀の涙ほどじゃが、できる事があるかもしれないん。」

「ちなみに俺の占いはどんな感じで出たんですか? 結果は聞きましたけど、実際はどう見えたか気になったんで一応聞きます」

「最初は愛に言われた通り未来を条件にしたのじゃ。愛は未だに我がとんでもない占い師と信じていたからの。それっぽい感じで占って、実はたいしたことのない占い師だとカミングアウトしようと思つて

いたのじゃ」

この占い師。とんでもないな。からかい癖とでも言うべきか。しかもそれに俺も惑わされたのが恥ずかしい。

「それなら、めっちゃ上手くいったのじゃ。さつき言った通り、様々な形で未来が見えての。最初はお主が我に電話をかけるシーンが鮮明に。だから愛に電話番号を渡したのじゃ。それっぽい雰囲気も出ると思つての」

滅茶苦茶しようもない。そんな下らん理由かよ。

「その後はかなり抽象的じゃが、お主の周りを様々な色がまとわりついているのが見えたのじゃ。女とは言ったがお嫁さんとは一言も言つておらんのに、愛は勝手にお嫁さんだとか言つておつたがそんなこと我は知らん。期待しておつたらうにすまんの」

「いえ、別に」

「お主の年頃では結構盛んな妄想をしてしまったじやろうに。愛には後で我からきつく言つておこう笑」

そういうことは普通、勘違いさせてしまった直後に言うんだよ。こいつ絶対面白がつて言わなかったな。

「そして、その後調子がいいから過去もついで見たのじゃ。さつきも言ったが三秒で抽象的じゃが見えての、お主が二つの綺麗な色の泥みたいなのを払ったのが見えたからこれは驚いた物じゃ」

「そんなにですか？」

「ああいうのは既に決められた運命のような物での。普通はあらがえん事柄じゃ」

「そうなんですか」

「そうじゃ。小さいころにペットを占つた時、偶々泥が見えたことがあつての。その泥が濃くなり我のペットを飲み込むと死んでしまったのじゃ。そういうのを人間を含め数えるほどだが何度も見たの」

「そうですか」

見えてしまつても何もできずに結果を迎えてしまうのは辛いな。

「数えるほどしか見たことがないからの、直感的じゃが、あれは普通で

はどうしようもない物。だからこそ、驚いたのじや。それを二つも払った者がいる事に。そして、さらにそこから二つも泥を払う者が居る事に」

「そうだったんですか」

「うむ。そういうことじや。まあ、我はそこまで凄い占い師ではないが、調子が良くて色々見えたということじや。期待させてすまんの」
「いえ」

「言い忘れておった。我がお主を見通しやすかったわけじやが調子が良いだけでなく、お主にも原因があるかもしれん」

「え？ 本当ですか？」

「もしや、俺の隠された力だろうか？ だとするなら今後使っていきたい。」

「恐らく運がいいんじゃない？」

「え？ 運？」

「占いは言ってみればガチャ的要素もあるからの。運が良いお主は結果が出やすかったのかもしれない」

「ガチャですか？」

「情報量に差異があり、あらゆることが不安定。これはガチャじや、そうは思わんか？」

「まあ、そうなのかな？」

「何とも言えないな。上手く言っているように言えてない感じがする。と言うかこの人結構緩いな。今更だが。」

「うむ。そうじや。さて、他に聞きたいこと、占ってほしいことはあるかの？」

「えっと、大海の青について占って貰えませんか？ 彼女の泥について知りたくて」

「それは、難しいかもしれんの」

「何ですか？」

「その者の顔を見ておらんからじや。言ったであろう。顔を見ないといけないと。その顔の者の未来、過去、所有物。その他もろもろ、見るのには顔じや。大海の青はあくまでお主の占いで関係があるから」

少し出た程度。その者について詳しく知りたいなら顔が必要じゃ。まあ、占いがどんな感じになるかはまた、別問題じゃが」

「なるほど。多分近いうちに何か頼みごとをしたいと思います。その時は引き受けてもらえますか？」

「構わん。愛の子ならいつでも歓迎じゃ」

なんだ、良い人じゃないか。最初はふざけた人かと思ったけど、この人もいろいろ苦労してるのに協力を惜しまないなんて。

「ありがとうございます。それでは一度失礼しますね」

「うむ、分かった。それと愛に謝つといてくれ。高校時代のカギの件と見栄を張った件」

「分かりました。それでは、また」

「またの」

さて、色々決まったことだし、一回背中を伸ばしてリラックスをしよう。なんだかんだ気を張っていたしな。さて、この後は、あ、手作り弁当か。

「十六夜君」

「十六夜」

ベンチの後から声がする。俺が電話をしてたから待ってくれたのだろう。この後、お弁当対決か。どんな感じになるのだろうか？ できるだけ二人の仲を取り持ちたいところだ。

三十三話 お弁当

女の子に挟まれて上手く立ち回る秘訣を、ラブコメ主人公から教えてもらいたい。ヒロイン達の仲を良好に保つ。さらには、何だかんだ言いながらも、互いを信用させる。どうしたらあんな離れ業を、流れ作業でできるのだろうか？

学校のベンチで二人の美少女に挟まれ、傍目には羨まれる状況のはずなのに、女の戦いのトロフィーにされてしまつては下手に喜ぶこともできない。

「それじゃあ、私からね!!」

火原火蓮が可愛らしい赤い箱を開ける。中には唐揚げ、スクランブルエッグ、シユウマイ、たこ焼き。最後の二つは冷凍食品だと思いが、それでもよく出来ている。多少の粗っぽさあるが、そこが良いのだ。手作り弁当という感じがして。

「どう？ 美味しそうですよ？」

「ええ、とつても美味しそうですね」

「ま、まあ、早起きして作ったから当然だけどね」

このちよつと照れてる感じが可愛い。ツンな感じの子が照れるのつて可愛いという世界の真理、さらに料理ができないのに頑張つて作つてくれたことで更に可愛さがアップするという相乗効果であり世界の真理。

二つの真理により可愛さの極限状態の彼女。

「それでは、次に私が」

しかし、それを上からハンマーで叩き潰すと言わんばかりのラスボス感。銀堂コハク。

彼女はおもむろに重箱を取り出す。

「な、なによ。それ!!」

「お弁当箱ですが? 何か?」

「おせちでも作ってきたの!? 普通そんなのに入れてこないでしょ!!!」

「え? そうなんですか?」

「分かってくるくせに。とぼけやがって……」

重箱とは。ありがたいことこの上ないのだが、明らかに火原火蓮のマウントを取りにきている。

俺としては凄じ嬉しい。男の夢が具現化して目の前にあるのだから。

だが、ライバルへの当て擦りという意味合いを思うと、素直に喜べない。今は、不仲を少しでも解消したいのだ。

銀堂コハクが重箱を開ける。中を見た瞬間、俺と火原火蓮は唾然とした。

「ちよつと気合が入りすぎてしまいました。女の子ならこれくらい普通ですよね?」

から揚げ、ハンバーグ、ポテト、エビフライ、オムレツ、サラダ、カレーピラフ。彩が良く更に万人受けする料理が全部入ったお子様ランチ。

ゴクリと生唾を呑むほど美味そうだった。

「……」

火原火蓮は自分のお弁当と彼女のお弁当を見比べる。相手が悪かった。

人気投票、常勝不敗。常に一位。完璧すぎる彼女。

「それでは早速お弁当対決始めましょうか」

「うう……。そ、そうね」

火原火蓮は敗北を悟り、小さく縮こまる。銀堂コハクもこの時点で勝利を確信してる顔。

「じゃあ、その火原先輩のから頂きます」

「うん……召し上がれ」

唐揚げを箸で掴み口の中に入れる。うん、美味しい。少し焦げてるけど、焦げって嫌いじゃないから全然いける。

「美味しいです。手間がかかっている感じがして」

「あ、うん、ありがとう」

「えっと、じゃあほかのもの」

「あ、うん」

銀堂コハクの料理を見せられた後だと、どう反応をしていいかわからないんだが。

あああ!! 凄い美味しい!!! なんて言えない。白々しいったらありやしない。

「美味しかったです」

「そう、よかった」

気不味い。火原火蓮の作った弁当は美味かったが、次は私のを食べて美味しいと言ってくれという銀堂コハクのオーラがヒシヒシと迫ってきており、手放して褒められない。

「じゃあ、次は私ですね!!」

「うん、」

彼女の方が美味しいんだろうが、今回は無理やり両者引き分けに持ち込もう。不仲を直すのはこの状況では無理だ。少なくとも現状維持にしくは……。

唐揚げを口に入れる。冷めてるのに柔らかい。そして、美味しい。

……う、美味すぎる。

やっぱり彼女は完璧超人だな。

「他のも食べてください。美味しく出来ましたから」

「うん、それじゃあ遠慮なく」

ハンバーグ美味しいよ……何だよこれ。とんでもねえぞ。

「オムレツも食べてください」

「はい」

箸でオムレツを割ると中から黄身がとろけ出る。半熟かよ。こん

なの美味しくないわけないだろ!!

口に入れる。卵!!! うめえ。黄身が口の中で溢れてる!!

「エビフライもサラダも良く出来てますよ。どんどん食べてください
ね」

「あ、はい」

両方とも大変おいしゅうございました。カレーピラフも絶品だった。以前にカレーが好きと言ったから作ってくれたのだろう。全ての品を一口ずつ頂いたので、結果を発表しないといけない。

「どうですか!? 十六夜君。どちらのお弁当が良かったですか!?!」

「そ、そうだね……」

ハッキリ言ってしまった方が良いのかもしれないと思うが、さて、どういつて誤魔化そうか。美味しさだけなら銀堂コハクの圧勝だが、優劣をつけるのも……何か、嫌な感じがするし。

「え、えっと」

「アンタの勝ちよ……」

「え?」

火原火蓮が自分のお弁当を見ながらそう告げた。

「私の負け。勝負にすらなってなかったわ。恥ずかしい。もしかしたら勝てるかもって思ってたのが」

「火原先輩そんなこと……」

「気を使わなくていいわ。あっちのお弁当に比べたら私のなんて霞んで当然。大したことのない弁当だし」

彼女は声を震わせながらそう言った。そのまま自分の弁当に蓋をしようとして……

「ちよっと待った!!!」

俺は彼女のお弁当を取り上げる。

「ちよ、返してよ。あっちのお弁当の勝ちで美味しいんだから私のなんて食べなくていいじゃない」

「いいえ。返しません。そして、俺の独断と偏見によって審議した結果。勝負引き分けとなります」

「ええええ!?!?!」

予想外の判定に、二人とも驚きの声を上げる。

「十六夜。気なんて使わないで!! そっちのほうが悪なの!!!」

「気なんて使っていません。厳正なる独断と偏見による結果です」

「どうしたらあのお弁当と私の引き分けになるの!!!」

彼女の疑問はもつともだろう。だが、引き分けだ。

「確かにお弁当の味だけを評価するなら銀堂さんの勝利だったのかも
しれない」

「やつぱり、そうよね……」

「でも、この勝負味だけじゃ決まらない!!! 勝敗を決めるのは俺だか
ら俺の基準、十六夜特別ポイントが存在する!!!」

「十六夜特別ポイント!?!」

二人は再び驚きに声を上げる。普通はこんなこと料理の勝負に持ち込まないだろうが、審判は俺なので関係ない。

「イエス。まず火原先輩にお聞きします。本当に家事を毎日するんですか?」

「え? そ、そうよ。偶にサボっちゃうかな? うん」

「そうですか。では、それを聞いたうえで先輩の評価に移ります。先輩のお弁当ですが味や見た目ではどうしたも銀堂さんの弁当に劣ります」

「そうよね……」

「しかし、同時に勝っているポイントがあります。それは何処だとも
いますか?」

「え? 何処かしら??」

「先輩は本当にラノベや漫画を読んでるんですか! そのポイントは
普段家事もやらず家ではごろごろして、脱いだ服をその辺に置いてい
るだらしない人がお弁当を作るといふギャップポイントですよ!!!」

「た、確かに。いや、わ、私家事するわよ。服だって脱ぎ捨てるなんて
……しないわ」

「先輩は超だらしなくて、家事なんて全くできないのは大体想像がで

きますから誤魔化さなくて結構です」

「し、失礼な」

彼女がだらしないオタク系美女という事は知っている。本、グッズはしっかりと管理しているが、服は脱ぎ散らかしだし、家事なんて全くだけないのを俺は知っている。

だからこそ、ギャップポイントが高い。

「先輩のお弁当はギャップと努力によって構成された、銀堂さんのお弁当にも勝るとも劣らない素晴らしい弁当。よって引き分けです」

「説得力はあるわね。料理下手な女の子が作るときって何か可愛いし萌えがあるわね」

「その通りです。先輩みたいな、ツンデレ、だらしない、家事なんて全くだけない女と言う三拍子そろった子がお弁当を作るというだけで、それは三ツ星シェフが作った料理と同じ位価値があるんです!!!」

「褒めてるの？ それ？ なんかイライラしてきたんだけど」

「もちろん褒めてます。というわけで引き分けということでの勝負は終わりです。素敵なお弁当二人ともありがとうございます」

咄嗟に浮かんだ考えにしては良く出来てるんじゃないか？ 本当は不仲をどうにかしたかったが、今回は間が悪い。次の機会にするしかないな。

「何ですか？ それ？」

「え？」

「十六夜君!!!」

銀堂コハクが突然声を張り上げるので、驚きに身が竦む。

「どうしてですか!!! どう考えても私の勝ちではないですか!!! あんな初心者が作ったお遊戯会みたいなお弁当がどうして、私のお弁当に勝るとも劣らないですか!!!」

「そ、それはギャップって言うか……」

「そんなの評価基準には入りません!!! 私がどれだけ苦労してこのお弁当を作ったと思いますか!!! から揚げが好きだっていうから二度

あげして美味しくして、ハンバーグは普段なら買わない高い豚と牛をミックスして、エビフライ、サラダだっていい食材をこれでもかと思つて!!! オムレツも半熟!!! カレーピラフなんて、カレーが好きだつて言つてたけど流石にお弁当にそのまま入れるのはどうかなつて思つてピラフにして入れたのに!!!」

「何で引き分けなんですか!!! 納得できません!!!」

……思つてのと違う。次こそ勝利を掴んで見せます。みたいな感じでこの場は流れるかと思つたのに。

「いや、えつと」

「引き分けなの。十六夜がそう言つたんだから納得しなさいよ」

「絶対私の方が良いお弁当なんです!!! 貴方のなんて三歳児でも作れますよ!!! から揚げ焦げてるし、スクランブルエッグ? 卵焼きも出来なくて、冷凍食品も入ってるじゃないですか!!! そんな低次元のお弁当が引き分けのはずないんです!!!」

「残念ね。でも、引き分け!!!」

「グぬぬぬ。十六夜君!! もう一回審議してください!! このままでは終われません!!!」

なんか結局カオスになつてしまった。銀堂コハクめっちゃデイスるし。

えつと、上手く纏めないといけない。

「あ、えつと銀堂さんのも星三つだよ……」

「五つつて言つて貰えないと納得できません!!!」

「その味と見た目は銀堂さんが良かったで……」

「でも、引き分けなんですよね!?!」

「はい」

「何ですか!!!」

「でも、味と見た目は世界一ですよ!! いや、宇宙一ですよ!!!」

「でも、引き分けなんですよね!？」

「はい」

「何ですか!？」

申し訳ないが、今回は引き分け。確かに料理の質などは銀堂コハクの勝ちだが、独断と偏見だから引き分け。これが一番摩擦が少ないよね? そうだよね?

ちよつと不安になってきた。

「銀堂さんのお弁当は本当に素晴らしい物だった。こんなお弁当を食べたことが奇跡であり幸運だ!!! 本当にめっちゃくちゃよかった!!!」

「でも、引き分けなんですよね!!!」

「引き分けって言うんじゃないくて、えっと。両方勝ち!!!」

「同じですよ!!!」

上手く誤魔化せない。失敗したかもしれない。でも、火原火蓮を悲しい顔にしておくことも、やはりできない。結局、俺は八方美人になりきれないクズだよ。

二人とも何というか憧れだった凄い人だから、できれば仲良くさせたかった。でも、それが難しそうだから、摩擦を最小限にするつもりだったのに上手いかなかった。こんなことなら、勝負を有耶無耶にしないほうが良かったかもしれない。

「もっと食べてください!! そうすれば考えも変わるはずですよ!!」

「十六夜。結論は変えないわよね? 一度言った事を取り消すのは最低のする事よ」

さーて、午後も実行委員頑張るか!! その前に二人前のお弁当を楽しく食べよう。

三十四話 稲妻

お弁当対決は引き分けということにしたが、銀堂コハクらしからぬ気迫に圧倒され、二人の仲を進展されるに至らなかつた。ちなみに、お弁当は二つとも綺麗に頂いた。

よもや黄川萌黄も、あんな感じになるまいな？ 彼女の男嫌いという性格上そんなことはあり得ないはずだが、対策を考えた方がいいだろうか？

魔装少女達の不和をこれ以上見たくない。結構ほのぼのしたイメージがあつたのに、銀堂コハクと火原火蓮を見ると、記憶が改竄してしまつたのではと錯覚することも最近はしばしば。

ジュースでも買って一息つくか。金親からの支給品は、午前中に尽きてしまつた。

自動販売機へと足を運ぶと、そこには美しい黄色の髪と目を持つ美女がいた。

うーん。やっぱり可愛い。モデルってこういう人になるんだ、という印象を持つ。足がエロくて、胸も結構あつて、顔も美人、そして声が可愛い。

何と言えがいいのか、エロ可愛い。この表現がしっくりくる。

彼女は自販機の取り出し口からボトルを拾い上げた後、その場から離れようとして俺に気づく。

あー。ゴミを見る目だ。

彼女が修羅場に入ることはないな。うん。

「君ってさ、まごうことなきクズだよね」

全面的に同意できる。素敵な美女を二人キープしてるクズ男だ。

「あんな可愛い子二人を侍らせて何がしたいの？ 自身の快樂を満たす道具くらいにしか思つてないでしょ？」

「いえ、そんなことはないんですけど……」

「僕さ、君の事最近よく見てたんだ。特に食堂で二人と食べてるとき

ね」

「そ、そうですか」

最近と言うと修羅場の時か。彼女は俺を見下ろす。俺の事を見て
いただって!?

まさか、一目ぼれでフラグが立ったのか!? こんなフツメンにそれ
はないな。

「君ってコハクちゃんの胸とかお尻とか事あるごとに見てるよね。
カッコつけて水を一口飲んだ時、どさくさに紛れて見る事この一週間
で十八回。咳払いして見る事二十一回。これ、ちなみに胸だけでね」
「……」

「欠伸、背伸び、首回ししながらお尻を見た回数合計三十回」

「……」

「何か言うことある?」

「いえ、なにもございませぬ」

ヤバい、本当によく見ていらっしやる。悪い意味で。好感度クソ以
下になってるこの状況、どうすればいいのだろうか?

「あ、火蓮ちゃんのもちよくちよく見てたよね。胸と尻合計で二十回
くらいだったけど」
「……」

「性的な視線を向けまくってき、恥ずかしくないの?」

「とっても、恥ずかしい所存です」

「君終わってるよ。一回死んだ方が良くくらい終わってる。これだか
ら、男は……」

「……不快にさせて申し訳ありません」

「口では何とでも言えるよね。僕の足とか胸をチラチラ見てるくせに
紳士ぶってそういうところもムカつく」

「ごみ以下ですいません」

俺は思わずその場で土下座をしてしまった。女王に屈服する奴隷
の気分になった。

「うわ、土下座って。全部キモイ。見てるだけで不快。凄いな君、この

短時間で鼻かんだちり紙より好感度低くなったよ。アジフライって名前も君には勿体ない」

「……」

「アジフライに謝ったら？ 鼻かんだちり紙以下の自分がアジフライを穢してすいませんって」

「いや、それは」

「謝んなよ。アジフライに」

「え、でも」

「謝るんだよ。ほら」

ここまで言われる人って漫画でも見たことないんだけど。校内屈指の二人の美女と関わっている俺が鼻かんだちり紙より嫌いなのか？

「鼻かんだちり紙以下の自分が……アジフライを穢してすいません」

「本当にやるんだ。キモイんだけど……」

どうすればいいだよ。どちらにしろ最悪じゃねえか!! このままじゃバッドエンド回避すら危ういぞ。どうしよう。

「鳥肌立ってきた。もう行こう」

俺の心に多大な傷を残して、彼女はその場から去って行った。彼女が男嫌いというのは知ってるが、ここまでだったか？

銀堂コハクと火原火蓮に好意を向けられる俺に、嫉妬しているのか？ 多分そうだろうけど、あんなに言うか？ 他に訳がありそうだが……。

今後が心配になる初対面だったが、会話が成立しただけで良しとすべきだろうか。いや、ダメだな。物凄く嫌われ具合に若干の不安を覚えながら、自販機を眺める。お金を入れ、水を買ひ、実行委員の待機場所に戻る。

午後は審判の仕事。早めに行って待機するか。水を片手に持ち、少し速足で歩きだした。



「皆ノ色高校二年？組の勝ち」

大玉転がしリレーを結果を発表する。勝ったチームは喜びを露わにし、歓声が沸く。それもすぐに落ち着き、選手たちは次の競技に場所を譲った。

審判も何気に疲労がたまる。二回連続でやったが、大して動いてないのに怠い。しかし、これで俺の仕事は終わりだ。後はクラスの陣地でゆっくりしよう。

一旦、実行委員の陣地に戻る。火原火蓮も待機場所に居た。

「お疲れ」

「お疲れ様です」

「疲れたでしょ？ クラス陣地で休みなさい」

「そうします」

少し猫背になりながら、のろのろとクラスの陣地に向かう。やっと休憩できると思っていたのだが、クラスの空気が物凄く重苦しい。

何だ？ これ？ 何があった？

楽しい体育祭だね？ 団体競技も勝利を収めたのに、何故こんな雰囲気になったのだろう。クラスに近づくと、野口夏子がものすごい勢いでやって来て、少し離れた場所まで俺を引きずって行く。

「ちよ、どうしたんですか？」

「どうしたのじゃないの!!! 黒田君のせいでクラスの空気とんでもないことになってるんだよ!!!」

「え？ 俺のせい？」

何か不味いことやったか？ 見当がつかない。

「銀堂さんが激おこ状態で空気が重いんだよ!!! 何したの!!!」

「あ、えっとお弁当を美味しくいただいて勝敗を引き分けにしました

……」

「あの、火原先輩とのお弁当対決？」

「そうです。その対決です」

「何で銀堂さんを勝たせなかったの!？」

「いや、火原先輩との摩擦を減らそうと思って……」

「銀堂さんのお弁当めっちゃ気合入ってたでしょ？」

「それは、うん。入ってました」

「火原先輩も良かったかもしれないけど、あの人って料理できないんだよね?」

「それは、そうだけど。何で知ってるんですか?」

「銀堂さんがそう言ったの」

「あ、そうなんですか」

「どう考えても銀堂さんが勝ちだと思うよ。銀堂さんも勝てると思っただのに引き分けにするからクラスの空気が大変だよ。どうしてくれるの?」

「え、えっと、ごめんなさい」

「謝るくらいなら銀堂さんをどうかして!! もうヤバイよ。クラス全員が気を使って、これ体育祭かよ!! って疑うくらいなんだよ!! と言うわけで早く行って!!」

「はい、行ってきます」

俺のせいで銀堂さんとクラスメイト達が気を悪くしたなら、本当に申し訳ない。しかし、なんと声を掛けたものか?

クラスの陣地に入ると、銀堂コハクの隣が空いていることに気づいた。と、とりあえずお邪魔するか?

「えっと、隣お邪魔してもよろしいですか?」

「ご勝手に」

彼女はプイッと明後日の方向を顔を背け、ぶっきらぼうに言い放った。何と返せばいいんだろうか?! こういう時、カリスマ性のあるアニメキャラなら何て言う?!

褒めるのが効果的だろうか? 行動しないと何も始まらない。よし、褒めてみよう。

「あ、あの、お弁当ご馳走様でした。凄く美味しかったです……」

「どうせ私のお弁当なんて、初心者のおちよつとしたビキナーズラックに負ける大したことない物ですから無理して褒めなくても結構です」
「え、ええ、いや、大したものですよ。……本当に大したものでしたよ」
「気を使わなくていいですよ。どうせ、初心者と引き分けるような弁

「当なんですから」

「あ、いや、そのですね……」

「煮え切らない回答なんていりません。不愉快なのであっちに行ってください」

「え、えつと」

「まだ、何か言いたいことでも？」

「いや、何でも無いです」

席を立ち、トボトボと歩き、クラスから離れる。再び野口夏子に怒られる。

「何やってんの!!! 勝ちっていいばいじゃん!!」

「そ、それは、一回引き分けと言う判決が出してしまったわけですし、火原先輩もこの場には居ないのでその場で結果を変えるのは、ダメかなと……」

「何その無駄な紳士感!! いらナイよ!」

「すみません……」

「もう!!! 二人そろってめんどくさい!!! 銀堂さんもめんどくさい所あるけど黒田君も負けず劣らずめんどくさい!!!」

「すみません……」

煮え切らない結果にして、色んな人に迷惑をかけてしまった。せつかくの体育祭なのに、これでは楽しめない。もっと上手く立ち回れなかったのだろうか？

——皆に申し訳ない。

彼女はしばらく俺の顔を見つめ、静かに語りだした。

「……じゃあ、勝敗は変えなくていいから機嫌は直して」

「はい」

「顔をシャキツとする!! 彼女に一番影響力のあるのは黒田君なんだから、まず黒田君が良い顔しないと!!」

「あ、うん」

「全然暗い!! せめていつもみたいは何とも言えない顔して!!!」

「こんな感じですかね？」

「そう!! それ!! その顔でかましてきて!!」

「はい、頑張ります」

「うん。それとちよつと私も言い過ぎたかも、ごめんね」

「いえ、野口さんの意見は真つ当な物です。悪いのは俺なんですから気にしないでください」

「そう。黒田君がそう言うならそうする」

「はい、そうしてください。俺はもう一回銀堂さんのところに行きます」

「ちなみに、どうやって機嫌を直すつもりなの？」

「うーんと、どうしましょう？」

「私に聞かれてもね。まあ、褒め殺しとか単純だけど良いんじゃない？」

「本音を交えながら、引くぐらい褒めることにします」

「それは逆にダメじゃない？」

「失礼します!!」

俺はその場から走り出した。再び銀堂コハクの下へ。真つすぐ彼女に気持ちを伝えよう。あのお弁当に対して、あの時もっと他に思ったことがあつたから。

「お隣失礼します!!」

「な、なんですか。急に……」

「ちよつと行きましょう」

「え？ 何処に??」

「行きましょう!!!」

「あ、ちよつと」

俺は彼女の手を握り、有無を言わず校舎裏まで連れてきた。

「先ほどのお弁当なのですが、本当にありがとうございます!! まるで女神が作った至高の一品でした。あんな食事を作れる銀堂さんは女神そのものですよ!!!」

「ええ？ そんなこといきなり言われましても……」

「まず勝負前提が間違っていたんです。銀堂さんのお弁当、いや、お弁当ではない。女神の兵器がお弁当対決に出た時点で、それはもう試合が成り立っていないかった!!! 女神銀堂が出た時点で引き分けではな

く、測定不能そう言うべきでした!!! 大した事のない? とんでもない!!! 俺はあのお弁当を食べる為なら一億出します!!! 銀堂さんみたいな清楚で美人、世界一の女性を作ったお弁当はそれほどの価値がある!!!」

「え、あ、そんなに褒めなくても……」

「いいえ、まだ褒めます!!!」

「ええ!？」

「本当に素晴らしいお弁当だったので、こんな事で表現しきれません!!! いや、人間の表現では表しきれない程の存在を何と言えればいいか……。いや、表そうとすること自体おこがまし……」

「もう、やめて!!!」

彼女は顔を赤くして、その場にうずくまった。

「分かりましたから!! 恥ずかしさで死んでしまいます!!! お願いですからもうやめてください!!」

「銀堂さんが自身のお弁当の価値を分かっていたようでしたので」

「な、なんでそれを先ほどの勝負で言ってくれなかったのですか?」

「そうですね。食べているときこの感想は抱いたのですが……流石にこれを言うのは恥ずかしいなと思ったからです」

「で、ですよね!! 恥ずかしいですよね!!」

「でも、銀堂さんがちょっと元気なさそうだったので、これは本音を言っって自信を取り戻してもらおうしかないと思い、言いました。あのお弁当は本当に価値のある物です!!! あれが食べられてだけでももう死んでもいい、と言う感想を抱くほどでした!!」

前世では一度でいいから彼女の手料理を食べてみたいと本気で思っていた。彼女の作った料理を口にできたらどれだけ幸せか、そんな妄想を繰り返すほどに。勝負に気を取られて忘れていた。

あのお弁当は最高過ぎて、俺が判断できるような代物でない。

「最高ですよ!!! 女神銀堂万歳!!! 才色兼備!!! 最高!! 万歳!! 才

色兼備!!! 女神銀堂万歳!!!」

「ヤメテ!!! ヤメテ!!! 分かりましたから!!!」

「どうですか!!! 自身のすばらしさを再確認できましたか?」

「できましたから、やめてください!!!」

「それは良かった!!!」

「ああ、もう、本当に何なんですか……」

彼女は視線を逸らしながら呟いた。



彼女が落ち着くのに、少々時間を要した。

「二つ勘違いしてるようなので、言っておきます。私は自分に自信が無くなったから機嫌が悪くなったのではありません。まあ、多少それもあったかもしれませんが、一番は十六夜君が私の方が良いと言ってくれなかったからです」

彼女は言葉を探しながら、俺の目を見つめた。

「私のお弁当は十六夜君の好みに合わせて、良い食材を手塩にかけて作りました。私の方が良いって絶対に言ってくれる。完成したとき、そう思っていました。貴方が食べているときの表情を見ても、私のお弁当を食べているときの方が美味しそうに食べてるから、私の勝ちだ。私を選ぶ。そう確信していたのに、十六夜君は引き分けにした」

「火蓮先輩のお弁当も、頑張りが伝わってくる素晴らしい物だったかもしれません。でも、私の方が良いお弁当のはずなんです。だから、引き分けにされた時、火蓮先輩の方が十六夜君は好きなのかと思ってしまった。お弁当ではなく人を見ているそう感じました。それが、どうしようもなく悔しくて、怒りが湧いてしまったんです」

「すみません。結果的には十六夜君に大きな負担をかけてしまいました。大分気を使わせてしまいました。でも、それでも、もう一度聞かせてください。あのお弁当対決、どちらが貴方にとって良いお弁当でしたか?」

俺は本当に馬鹿な奴だ。彼女を褒め殺して勝負を有耶無耶にしよ
うとしていた。馬鹿だ。大馬鹿だ。そして、最低。

でも、それでも、あの二人には仲良くしてほしい。俺は嫌われてもいいから、互いに認め合ってほしい。

彼女達の笑い合う姿が好きだったから……。

「そ、れは……」

「……」

「アンタの勝ちよ」

凜とした声が後ろから聞こえた。振り向くと、火原火蓮がこちらに目を向けていた

「私の負け。どうしようもなくね。悔しいけど認める」

彼女はコハクの正面に立つと、真っ直ぐ見据えた。お互いに一切視線を逸らさない。

「でもね、覚えておきなさい。私は天才なの。すぐに料理スキルもコンプリートしてアンタを追い抜く」

「……」

「だから、今は負けでいい。負けは勝ちより価値があるから。今は経験値稼ぎ。十六夜言って、私の負けって、彼女の勝ちって」

火原火蓮と目が合う。強くて綺麗な瞳。とんでもなく強固な意思が伝わってきた。

「……銀堂さんの勝ちです。あのお弁当は、今まで食べた中で最高でした」

「！」

「ああー」。悔しい!!!」

勝敗を告げると、片方は僅かに微笑み、片方は頭を抱えた。

「でも、良いわ!!!。これが経験値なのよ!!!。直ぐにSランクの料理を作ってやるわ!!」

「料理はそう簡単に習得できるものではありませんよ。見通しが甘すぎです」

「料理なんて、スマホで見ればどんなものでも作れるわ!!」

「卵焼きも出来ない人が何を言ってるんだか」

「は？ 喧嘩売ってるの？」

「いえいえ。ただ思ったことを言っただけです。もし、快に思ったのなら、申し訳ありません」

「もう少し、煽りを隠す努力をなささいよ！」

「ちよつと、何言ってるか分からないのですが……」

「その、惚けて首を傾げるの止めてくれる？」

「いったん止めたほうが良いな。聞きたいこともある。」

「火原先輩はどうして此処に？」

「二人が何処かに行くのが見えたから……じゃなくって、偶々歩いてたら見つけたのよ!! 勘違いしないでよね!! 十六夜が気になったとかじゃないんだから!!」

「あ、はい」

ツンデレって可愛いな。どうしようもなく可愛い。この後も彼女は言葉を交わした。

これで良かったのだろうか。良かった部分もあるが良くない。俺は彼女達に仲良くなつて笑ってほしい。今は難しいが、いつか必ず。いや、近いうちに、この二人を笑い会える親友にする!!

新たな決意を胸に、俺は彼女達の煽り合戦を止めに入る!!

三十五話 終幕

閉会式を待たずに、俺たち実行委員は後片付けを始めた。一般参加の生徒やその父兄達は、体育祭のクライマックスである三年？組のリーダーに沸いている。

気楽に体育祭を楽しめると楽観していたが、そんな甘い見通しは見事に外れた。何事も予想通りにはいかないものだ。軽率な言動を反省する俺の隣では、火原火蓮が備品についての砂埃を払っている。

「火蓮さん、手伝う？」

「あ、いや、大丈夫です」

最近一緒にいることが多いからすっかり忘れていたが、彼女はある一定のラインを超えないと中々フレンドリーにはなれないんだ。強気な部分と気難しい人見知りの部分。こういうギャップがあるから、彼女は人気だったんだよな。

人気ランキング、二位から五位を常に上下する彼女。一位にはなれなかったが、人気があつたのが良く分かる。

「何？ その生暖かい視線は？」

しまった。過去の余韻に浸っていると、胡乱のジト目を投げ掛けられた。

「いや、何でもないですよ……」

「嘘って顔に書いてあるけど？」

「本当ですよ。本当に何でもないです」

「ふーん……どうせ私の事を見てコミュ障だなんて思ってたんでしょ。悪かったわね。コミュ障で」

「いや、全くそんな事は思っていないですよ。俺はコミュ障なので人を馬鹿にできる立場でもありませんし」

「絶対、十六夜はコミュ障じゃないと思うけど」

「そうですか？ 結構コミュ障ですけど……」

人と話すときは結構緊張する。ともすると、相手の顔をジャガイモに思い込みもする。前世でも中々のコミュ障だった。

隣の女子が話しかけてきたときも「あ、どうも……」としか返せないほど、対人関係は壊滅的だった。いや、女子だけだ、上手く話せなかったのは。

転生してようやく常識的な水準まで引き上げられたが、いまだに心の隅には緊張感が残っている。

でも、俺成長したな。超美女と話しても「それな……」とか「あ、うん。どうかな」以外の選択肢を取れるようになってる。

前世の会話がレベル1なら、今はレベル3かな。自分の成長に思いを馳せるいると、彼女は頬を朱に染めて戦慄いた。

「よ、よくそんなこと言えるわね。……ひ、人気のない公園に連れて行ってキスを迫るくらい大胆な行動ができるくせに……」

「あ、あれはやるつもり無かったですよ。軽いジョークみたいなもので……」

もう蒸し返さないでほしい。あの迫り方はないなって今でも反省する。逮捕されても弁解できなかっただろう。

「パパとママも驚いてんだからね！ 十六夜って本当に行動が大胆だって!!」

「ですから、あれは……え？ あれ言ったんですか!?!」

「え？ あ、うん。話の流れで……」

「何で言うんですか!?! そういうのは普通言わないのが暗黙の決まりじゃないんですか!?!」

「だって、パパとママが十六夜のこと聞きたいって言うから……」

「もつと、ありますよね!?! 俺も二次元が好きとか、カレーが好きとか!?!」

「それは、もう言っちゃったの。でも、もつと知りたいって……最近の夕食の時間は八割が十六夜の話題よ」

「そ、そんなに……あの、まさかとは思いますが、あれも言いました?」

「どれよ?」

「あの、ほら、先輩がひっくり返って、ほら、見えた事ですよ」

「ば、馬鹿!! それは言っていないわよ!!! 変態!!」

キスは言いふらすのに、パンツは秘密のか。キスは未遂だし、冗談だと分かっていたから話題にしたってことか? ネタ的な感じで?

だが、そんなことを笑い話にできるほどの家族仲にあるのなら、彼女の家族のために奔走した甲斐もあるというものだ。うん。

「それは、良かったです」

二重の意味でよかった。家族仲が良くなったこと、パンツを見た事がバレていないことだ。

いくら何でも、娘の結構派手な赤パンツをその辺の男に見られたとなれば良い気分にはならないだろう。良かったー。バレてなくて。もし、ばったり街中で鉢合わせしたら気不味いというレベルじゃないからな。キスを迫ったという事実で気不味くなるのは確定だが、未遂で冗談だから、パンツ丸見えよりはマシなのでよしとしよう。

「あ、あれは流石に言わないわよ!! 親に後輩にパンツ見られたとか冗談のレベル超えてるわよ!!!」

「ですよ。いや、良かったです、切実に」

「何で落ち着いてるのよ!!! もっとアタフタしなさいよ!!! 私が一人漫才してるみたいじゃない!!!」

「すみません」

実は結構慌てているが、彼女ほどは表に出さない。これが大人の対応という物だ!!!

パーンと音が響いた。リレー終了の合図だ。残るは、フォークダンスだけか。始まる前に、手を付けた分は片付けておきたい。

「それじゃあ、俺はこれ運ばないといけないので失礼します」

「ちよ、まだ話は!!」

「失礼します」

パイプ椅子を数個持ち、倉庫に向かって行った。流石にあの話題を続けるのは、恥ずかしくて居たたまれない。

俺は仕事に託けて逃げ出した。



十六夜がパイプ椅子を持って、離れていく。

ちよつとムカつく。パンツを見た話をしたのに、あんまり慌てなかった。もつとあるでしょ、私だけ恥ずかしがって、十六夜は涼しい顔。

もしかして、十六夜にはどうでもいいことだった？ 乙女からしたら重要事項何だけど……。でも、男の子ってこういうのに食いつくものじゃない？

私を女として見てないから、あんな大したことない反応だった？ いや、それはないわ。

パパとママから十六夜の好感度はマックスだというお墨付きをもらっている。

きつと、内心ではかなりアタフタしていたのね。きつとそうだわ。パパとママが好感度高いと言ってるんだから、いらぬ心配だったわね。

パパとママとは、最近よく話すようになった。夕飯の時間が最近の一番の楽しみでもある。ただ、少し気になる事と言えば……

『十六夜君とは何処まで行ったのかしら？』

『どこも行っていないけど……』

『恩着せがましくしないなんて、なんて出来た子なの……』

『十六夜君は普段どんな感じなんだい？』

『うーんとね、普段は特にこれと言っていないかな？』

『なるほど、優秀だからといって無暗に力は使わないということか。能ある鷹は爪を隠すとはよく言ったものだ』

こんな感じで何を言っても好感度が上がるのだ。確かに十六夜は

素敵な部分が沢山あるけど、そんな深読みしなくても……。他にも

『十六夜君は普段どんなものを食べるのかしら?』

『毎回食堂でカレー食べてる』

『カレー食べてるってだけで、良い子って感じがするわね』

『十六夜君は趣味とかあるのかい?』

『私と同じで二次元とか好きらしいけど』

『これが、運命か……』

両親の十六夜推しが凄い。こんなはまだ序の口。この間深夜に二人が話しているのをこっそり聞いた。

最初は二人の仲がどうなっているのか心配していたのだが……

『孫の名前はどうか?』

『そうね。二人の名前のイメージを取って男の子なら紅夜なんて良いかもしれないわね』

『それなら、女の子は陽火なんて良いかもしれないね』

『それは良いわね?』

ええええええええ???

!!!!

早い早い!!!

何処まで想定してるの
!!!!???

私達、まだ付き合ってもないんだけど!? それなのに親が孫の名前を考えるって……。

『あら、やだ私達ったら早とちりしすぎたわね』

『そうだね、まだ孫は早かったかもしれないね』

そうよ。孫とか流石に早すぎ……。

『まずは式場からだったわね』

『僕もうっかりしていたよ。まず式場だね』

いや、だから付き合ってもないから!!! 何処の世界に付き合ってもない娘の式場を探す親が居るの!!!

『最終的に決めるのは二人だけど、ある程度こっちでピックアップし
といった方が良いと思うんだけど、アナタはどう思う?』

『僕も異論はないよ。善は急げと言うからね。早速調べよう。あ、も

しかししたら十六夜君の家は身内だけで式を挙げたいって思ってるかもしれない』

『そういう式場も調べないといけないわね。取りあえず百件くらい……』

『善は急げと言うからね。こんどの夏休みに親同士で顔合わせするのもいいかもね』

『それは名案ね。善は急げというものね』

いや、急ぎすぎ!!! どんだけ急いでるの!!! 善は急げって言うけれども、限度があるでしょ!!!

こんな感じで、二人が毎日式場を調べている。仲が良さそうで何よりのだが、いくら何でも早すぎる。

改めて思う。十六夜の影響力は凄い。二人は十六夜の事がとんでもなく気に入っている。そのせいか、ちよつと行き過ぎな気がするが……。

今皆で楽しく過ごせるのは、十六夜のおかげ。あの時、背中を押してくれたから。パパとママは十六夜の話が殆どだが、それ以外も話している。

会社の仕事の相談事とか、料理を少し覚えたいから教えてほしいとか。そんな毎日がどうしようもなく楽しい。

でも、そんな毎日に水を差すのが銀堂コハクだ。

あいつは事あるごとに私にマウントを取ろうとする。今日の弁当もそうだ。あんなクオリティ普通作ってくる?

その場は引き分けになったが、後になって私の負けになった。これに関しては仕方ない。負けから学べることもある。ここは良いのだ。

問題はあのスタイル!!!

何だ、あれは……と思わず戦慄するほどの若干のムチツとした感

じ。特に胸と尻。デカイ!!!

それに比べて私は?????

あんな体、反則だ。エロいとかそういう次元じゃない。

………羨ましいいい!!! 私だってあれくらい欲しい!! 前はそこまで意識はしていなかった。いや、多少はしていた。だが、あくまでも多少だ。

だけど、最近は十六夜が居る。男は有るか無いかと聞かれたら、やっぱり有る方が良いらしい。だとするならば、私はヤバイ。

正直な所、かなり小振りな感じ。全体的に見て。

メロンとクレープの生地くらいの差がある。格差が酷い。ママも結構控えめな感じなので、遺伝だから仕方がないと言われれば、そうなのかもしれないが……

クソ!! ……これ以上考えても仕方ない。そんなことを考えて大きくなるなら苦労はしない……。

……!! そうよ! ママが小振りで控えめでもパパは結婚したんだから、スタイルの差はそこまで重要じゃない!!!

フツ、また取り越し苦労をしてしまったわ。

一人そんな妄想をしながらも、私はパイプ椅子の足を磨いていく。そう言えばフォークダンス……私やり方知らない……。

十六夜は知ってるのかな?



早いところ、片付け終わらせよう。何だかんだ大変だった体育祭ももう終わり。最後に皆がフォークダンスを踊る中、俺はパイプ椅子を運んだり、テントをしまったりしていた。

フォークダンスに参加できなくても、全く未練はない。そもそも、

踊り方を知らない俺が楽しめるものではないだろう。それに実行委員なら、そんな時間はないくらい忙しい。

最後の結果発表もある。その前にある程度は終わらせないと……。

フオークダンス結構踊ってる奴いるな。ん？ なんだあの列？

先頭には金親か……。うちのクラスの男子は端っここで悔しそうに藁人形に釘を打ってるな。

いつも通り。

「もしよろしければ、俺と!!」

「いや、俺と!!」

「いやいや僕と!!」

「いやいやいや俺と!!」

「ご、ごめんなさい。踊る気分では……」

体育祭は最後まで忙しかった。競技より実行委員の方が大変だという思いがある。担当の資材が片付いたとき、フオークダンスは終わろうとしていた。

「十六夜、やり方知ってる?」

「知りません」

「ああ、やっぱりそうなの……。なんでラノベキャラとかは知ってると思う?」

「そういう教育を受けているのでは?」

「どういう教育よ」

一段落ついて、二人で落ち着いて言葉を交わす。そこへ銀堂コハクも加わった。

「お疲れ様です」

「わざわざ、ありがとうございます」

彼女は薄く含み笑いを浮かべた。

「あの、私やり方知ってますよ?」

「あ、えつとですね」

「話に割り込まないでくれない?」

「すみません。あ、それですね……」

さりと一言謝って、彼女は上目遣いで俺を覗き込む。途端に言い合い合戦が始まり、そのまま体育祭は幕を下ろした。

ちなみに、結果は俺達皆ノ色高校の勝ちで、体育教師の七星が跳んで喜んでいた。

稲妻の少女

三十六話 過去

痛い、痛い、痛い。怖い、怖い、怖い。

ただ、その感情が僕を支配していた。蹴られた足が熱く、ジンジンと激痛が走る。

『痛いっ!!! や、ヤメテ!! お父さん!!』

僕は足を押さえて、その場にうずくまる。母が僕を抱いて僅かな安心感が湧くが、それでも恐怖が支配する。

『貴方!! もうやめて!!』

母は僕を庇うが、本当は怖がっていることに僕は気付いていた。僕も母もずっと目の前の男に虐待され、支配されているからだ。父と母が何時からそんな関係なのか知らない。でも、物心ついた時には既にそうなっていた。

『おい、背デカいな』

『巨人の女だ』

学校では同学年のクラスの男子に背が高いことで馬鹿にされた。それを庇ってくれたのは何時も女子生徒だった。学校では少しの間安心感が持てるようになった。

だが、家には恐怖しかなかった。

あの男は外面だけは一丁前で、対外的には仲がいい家族に見えるよう仕向けていた。僕も母もそんな生活を続けた。

だが、ある時転機が訪れた。勇気を出した母が記録を取り、それを警察に提出したのだ。それによりアイツの魔の手から解放された。あの時の安心感、幸福感は途轍もなかった。

家でも学校でもようやく最高の日々が送れると思った。毎日のように男子が上背を馬鹿にするが、女の子の友達はいつも庇って、遊びに誘ってくれた。この時の僕はバカだった。もっと早く、あの事実に関心すればよかった。

中学に入り、初めて気になる異性が出来た。中学一年生の二学期、二つ年上の背が高い先輩に告白しようと、恋文を綴った。

一学期から気になっていて、思えば一目ぼれだったのかもしれない。話したことなんて殆どなかったが、想いはあった。僕は本当にバカだ。男なんてクズしかいないのに、その事実気付けたはずなのに、考えもしなかったのだから。

『先輩……僕と付き合ってください』

『いいよ。付き合おうか』

その時は嬉しかった。想いが成就したと思ったから、でもそんなのはただの幻想だった。付き合って一週間、偶々廊下で話し声が聞こえた。

『そう言えばお前あのデカイ後輩と付き合ってるんだっけ？』

『あぁー。まあ、一応』

『お前、別の子気になってるんじゃないやなかったっけ？ 一つ下の三組の……』

『そうなんだけどさ。振られちゃったんだよ』

『じゃあ、あのデカイ子はキープ的な感じなのか』

『そうそう、身長高すぎてちよつとキモいけど顔とかはいいから。とりあえず付き合うだけ良いかなって』

ケタケタ笑い声が聞こえる。僕の体は震えていた。悲しくて、やりきれない。怒りでどうにかなりそうだ。だけど、悲しさが大きく、喪失感が強く何もできないまま教室に戻った。中学校に進学しても、背が高いことで弄られることは多かった。

『巨人、前見えね』

後の男子が軽々しく言い捨てる。それに釣られて他の男子がせせら笑う。助けてくれたのは、クラスメイトの女子だ。

この時、ようやく気付いた。遅すぎるが、ようやくだ。

これまでの人生で自分に害に為すのは、いつも男という存在。元父

であるクソ男。身長を馬鹿にする学校の男子達。自分を傷つけてきたのは、アイツらだ。

一方、人生でいつも幸福をくれたのは、女という存在だ。母は安心させてくれた。クラスメイトの女子は、困った時にいつも手を貸してくれた。

これに思い至ったとき、男という存在に対し嫌悪以外の感情を抱かなくなった。だけど、女子の多くは男が気になって仕方がないようだった。

高校に入学すると、さらに強く感じた。新しい友達、中学からの知り合い。皆悪い子じゃない。だけど、異性に強い関心があるようだった。僕がおかしいのか？ 男嫌いな僕は、違う生き物なのか？

寂しい。周りに合わせて男子が好きだと言うことは、どうしてもできなかつた。周りの女の子は差別などしないが、寂しさが無くなることはない。そんな中、面白い子を見つけた。

綺麗な赤のツインテール。可愛くて少し大人しきを感じる少女、自分の前の席でいつも本を読んでいる。本当にひたすら読んでいる。

『火原さんって好きな俳優とか居るの？』

『あ、ごめん、私そう言うの分からない』

『火原さんってどういう人が好きなの？』

『…強いて言うなら魔術使える人かな』

『?????』

彼女はあまり人と接しない。本当に最低限で、ずっと読書を続けている。たまにニヤニヤしたり、一人百面相したり忙しい。彼女に対して何か通じるものを感じていた。僕は彼女の後の席ということもあり、よく観察できた。見れば見るほど面白くて、仲良くなりたいと思えた。

『火蓮ちゃん』

後から話しかける。彼女は振り返り僕を見た。

『何？』

『いつも何読んでるのかなって、思ってたよ』

『魔術学院の出来損ない』

『面白い?』

『それ以外の感情は無いわね』

『あ、そうなんだ』

『もしかして、興味ある?』

『ちよつと、だけ、有るかも』

『そう! だったら教えてあげる!!!』

そこからはマシンガントーク。後半から、いや前半から何を言ってるのか分からなかった。ただ分かったのは、彼女は物凄い二次元好きで、それ以外はあまり興味がないということだ。気難しいところもあるけど、饒舌になることもある。

後の席だから、話す機会が少しずつ増えていった。二次元以外の話題は本当にどうでも良さそうで、可愛い服の話になった途端欠伸をした。

それが可愛くて、だんだんとスキンシップが増えた。彼女はビツクリすることが多いが、受容体質なのか嫌がる素振りは見せない。そのため、僕もどんどん過激になってしまった。他者とのズレを感じていた僕にとって、彼女との時間は甘美だった。彼女はどう思っているか分からないが、僕は友達になりたい、なれたらいいなと感じていた。

そんな彼女が急に変わった。ある日からお弁当の本を読んだり、ラノベ以外の本に手を出し始めた。原因はすぐに分かった。

好きな人が出来たのだと。寂しさを感じたが、彼女が幸せになればいいとも思った。僕にはもう理解できない感情。でも、彼女は違う。ズレているという疎外感が再び強くなる。でも、それでいい。

相手は恐らく、色々噂が立っている一年生だろう。入学早々病院に運ばれたちよつと怪しい奴。そいつは本当に良い奴か? と軽い疑惑を感じているとき……

——ある物を見つけた

そこに載っているのは……これは本当か? どうなんだ?

もし、もしだ。ここに書いてあることが本当なら……
こんなことは許せない。僕だからこそ異常な怒りが湧いてくる。
確かめないと。そして、どうにかしないと。



体育祭が終了した翌日。俺は欠伸を噛み殺して登校する。体育祭が終わると、中間テストが待ち構えている。

これこそが、次のバッドエンドの切っ掛けだ。この結末を避けるのは、かなり難しい。そもそも黄川萌黄の好感度が何故か異常に低い。原因はちよつと分からない。あれか？ 美人二人と仲良くしてるからか？

火原火蓮を取られたことへの嫉妬か？ この時間軸では、『ストーリー』でも『ifストーリー』でも彼女達のつながりは殆ど無い。しかし、火原火蓮に対する黄川萌黄の好感度は、一方的にかなり高い。

彼女は男嫌いのために他とのズレを感じ、悩んでいた。そのことで火原火蓮にシンパシーを少し感じていた……らしい。この辺りの事情は明かされていないため、絶対とは言えない。

でもなあ、彼女は利己的な感情であそこまで酷いことは言わないんだよな。男嫌いとは言え無闇に攻撃はしないのが彼女だ。

入学直後に佐々本と怒られたが、あれは本当に佐々本が悪く、周りに不快を感じる生徒がいたからこそ怒ったのだ。

彼女があそこまで詰るのは、理由があるのか？ 分からない。何か訳ありな感じがするが……。

バッドエンド回避には、いつも通り俺にヘイトを集めて、黒幕が手を出したところを振り返り討ちにするという方法が挙げられる。さらに、

手を出してこない場合も考えている。その為に彼女の守護霊ポジに行きたいのだが、今の状態で行ったらガチで警察に突き出されそう。四人目の事もあるのにそれは困る。

その為に何とか協力関係に持ち込みたいのだが、現時点では難しい。何とか彼女の強く当たる原因が分かればいいのだが、そう簡単に行くだろうか。現時点では話すら聞いてもらえないだろう。

そんな事を考えているうちに教室までたどり着いた。扉を開け中に入ると、教室内は若干暗い感じだった。どうしたんだ？

「おい、十六夜」

「どうした佐々本」

「もうすぐ中間テストなんだ……」

「そうだな。テストだな」

「このままだと……俺は……」

なるほど、それで他の男子生徒も暗い顔をしているのか。俺は前世の知識があるので多少大丈夫……ではない。

まず勉強が好きではない。特に英語と数学。英語は文法が難しい。数学は普通に難しい。それ故わからん。

まあ、今の俺にとって勉強は二の次だ。黄川萌黄の事に集中しよう。

彼女は結構人気が高いキャラである。人気投票では火原火蓮と同じく二位から五位を上下していた。彼女は男が嫌いなのだが、そこが良いと言う人もいた。

ファンからの一言に……黄川萌黄に罵倒されたいだの、蔑まれたいだのちよつと危ない感想が見受けられた。

それと彼女は柔道、合気道などを独修している。近接戦闘センスが桁違いなのだ。単純な強さなら、人間カテゴリーで二番目くらいに強

い。ちなみに一番は六道哲郎。

筋肉量が多いわけではないが、彼女は力の使い方に関してプロフェツシヨナル。

前世の一部の業界では、黄川萌黄に一本背負いされたい。武道でポコボコにされたい等と言う意見がネットに書かれていて、ちよつとビックリした。一時期、彼女のファンはドMが多いという結論が出回るほどそう言った意見が多かったのだ。

俺はドMではないため、そんな思いは一切ない。まあ、程よい罵倒ならいいかも……いや、そんなことはない。

教室のドアが開く。六道先生だ。

「ホームルームを始める。いきなりだがもうすぐ中間テストだ」

教室内に緊張が走る。険しい顔をしているのは俺の席の近くの男子。銀堂コハクの近くにいる人は涼しい顔をしている。あそこらへんは頭のスペックが別次元のためノー勉でも高得点が取れるのだから。

「分かっていると思うが赤点を取ったら補習だ。約二週間後にテストが始まる。それまでにしっかりと勉強しておくように」

彼はこちらを一瞥した。俺の席の近くには成績不良者頭が集まっているのを知っているから、無意識のうちに目を向けてしまったのだろう。

佐々本を筆頭に、男子生徒達は顔を青くした。

三十七話 最悪

カリカリと黒板にチョークで書いていく音が鳴り響く。徐々にテストが近づいていることもあり、全員の集中力が上がっている気がする。皆がテストで頭がいっぱいの中で、俺はこれからの事に思考を向ける。

黄川萌黄のバッドエンドは、中間テストの最終日の出来事を切っ掛けとする。この時点で、既に女子二人が殺害されているため、校内には良くない雰囲気か漂っていた。気にしていた火原火蓮が死んで、黄川萌黄の心に負担がかかったところから物語は始まる。

今回は、彼女の心の最も弱い部分を傷つける物語。中間テスト最終日に、元恋人と父親と再開することから始まる。運命の皮肉を湛える『ifストーリー』は、今回もかなり悪辣なものだ。

まずは、彼女が中学時代に振った男との再会。彼女から告白したが、偶然にも下衆な魂胆を知ることとなり、一週間と付き合わず別れた元恋人である。

相手は女と仲間の男を連れていているが、これまでの『ifストーリー』とは異なり、いきなりエグい目に遭うわけではない。

だが、軽薄な態度でこぞって彼女を馬鹿にする。男らにとって、年下に本性を見抜かれたのだという悪評に対するほんの小さな仕返しのためだったのだろう。物質的な被害はないが、心には大きな負担がかかる。

その後、父と再会する。

彼女のトラウマの中で最も根深いものは、父親から受けた虐待の記憶。高校に入るまで様々な困難に見舞われてきたが、その中でも最悪と言えるものがバッドエンドに関わってくる。

再会したのは本当に偶然。彼女の元父親であるクソは逮捕されたが、接触こそ禁じられているものの今では釈放されており、不運にも遭遇してしまう。

父への恐怖はかなり描写されていた。怖い怖いと何度も心の内で叫び続けるが、嘗て守ってくれた母はすでに他界していた。今の彼女は一人暮らしで、遺影と仏壇に縋るしかない。

恐怖でなされるがまま。単純な強さなら余裕で勝てるのだが、その強さを発揮できないからこそ最悪の事態を免れない。

相手のクソ野郎は、会ってすぐに恐怖が残っていることを確信し、一旦別れるふりをする。彼女は何事もなかったことに安心して帰宅する。その後、人気のないところで暴力を振るわれる。それによりトラウマが甦り、言いなりの人形になってしまう。

恐怖で冷静な判断ができない彼女は、相手を部屋に入れてしまう。現金を渡すが、通帳からも引き出すように脅される。少し抵抗するが、結局は言われるがまま。恐怖の象徴である男……。トラウマの根源である相手に彼女は……。自らの部屋、母の仏壇の前で……。

血が繋がっているとか最早関係はない。彼女の心は途轍もなく不安定なのだ。怖くて、怖くてたまらない。その日の夜中室内で首を吊って、彼女は終わる。恐怖そのものの相手にそこまでされたら、心が崩壊して頭がおかしくなったのだ。

元父には、幸福な家庭を築いたエリートというラベルを剥がされた恨みが残っている。逆恨みもいいところだが、こういう性根の曲がった人間がたくさん出てくるのがバッドエンドだ。亡き元妻への恨みは矛先を変え、男は娘を徹底的に痛め付けようとした。目に物見せた後、殺そうとすら企んでいた。結果的には、目的が果たされることなく、男は再び罰を受けることになる。しかし、黄川萌黄が救われたことにはならないだろう。

そんな未来を変えるため、黄川萌黄の元父親を適当に煽って、ヘイトを俺に向けさせる。元エリートだから、転落してざまあとか大声で言えば、我を忘れて俺を襲いかかるだろう。そしたら、ぶっ飛ばして通報してやる。

一度豚箱にぶち込むことができれば、しばらくして再び相対しても

どうにかなるのだ。『魔装』を手に入れさえすれば、指一本で殺せるくらいの強さになるから、恐怖心があっても関係ない。『魔装』の力は尋常ではない。

クソ男を1とするなら、『魔装』を纏う彼女は一万くらいになる。いくら頑張っても、蟻一匹が雷神に敵うことはあり得ない。今回さえ乗り切れば、後は安心なのだ。何としても守護霊くらいの位置に着きたい。

最悪の場合、ストーカーになろうと思っている。それでもいいのだが、最善はやっぱ守護霊の位置だ。何かあったとき、一秒でも早く動きたい。万が一の時、肉壁になれる。銀堂コハクの二日目の時、本来ならいないはずの場所に不良が現れた。俺がバッドエンドその物に関わることで、イレギュラーが起る可能性がある。だからこそ、守護霊の位置だ。

守護霊の位置になるには一つ、気を付けなければならないことがある。それは、何かしら接点がある方が良くということ。今までの二人にも、接点を作ろうとしてきた。銀堂コハクはクラスメイト、不良から一緒に逃亡、不機嫌だが多少の会話。火原火蓮なら二次元。いきなり守護霊の位置という選択肢もあったが、女の子からしたら、知らない男が付きまとうのは恐怖以外の何物でもない。それに関しては黄川萌黄でも同じはずだ。いくら強くても、男が急に近付いて来たら怖いだろう。だから、接点が欲しかった。

こいつウザイなと思われても、無害な事だけでもアピールできれば、彼女は不快感だけで恐怖を感じることはないだろう。恐怖と不快、両方与えるよりも、せめて片方のほうがいい。本当は両方感じてほしくないが、申し訳ないがこれが俺の限界だ。

これまで守護霊作戦で上手くいっていたから、今回もそうしようと思つてたのだが……。あの好感度の低さだ。付き纏おうものなら、即、警察一直線だろう。

黄川萌黄は男嫌いで、守護霊の位置にいけば不快感を隠さないだろう。そのまま、巴投げや一本背負いでのされてしまうかもしれない。それくらいで済むなら大したことじゃない。しかし、今の好感度では

警察に通報されるかもしれない。四人目の事もあるため、それだけは避けたい。

そのまま、巴投げやら、一本背負いなどやられてしまうかもしれない。それくらいで済むなら大してことじゃないのだが。

今の好感度では警察に通報されてしまうかもしれない。四人目の事もある為、それだけは避けたい。

マジで警察だけのご勘弁だ。多分目も付けられてるし、この町で今一番怪しいのは俺だ。一度通報されたら、四人目の下に行くのが遅くなる。黄川萌黄のことが終わったらすぐに四人目の様子を確認したいので、通報だけはダメだ。バッドエンド回避の為なら、最悪警察に通報されるのは別に構わないが、このタイミングでは勘弁してほしい。

彼女からしたら不快であることには変わらないだろうが、それに関しては謝るので許してほしい。彼女の危機を回避したら二度と関わらないから勘弁してもらおう……と考えていたのだが、それでも今の状況では通報エンド以外ない。

基本的に彼女は男に干渉を貫く。嫌いだけど自分から行動を起こすことは殆どない。だからこそ、彼女が俺にあれほどの暴言を吐いたことに、かなり驚いた。訳があるのだと思うが、あそこまで言うとは……。

原因は何かしらあるはず。それを見つけて何らかの形で片づけないと今後に関わる。

現在の鼻かんだちり紙では、付きまとったら即通報。アジフライ並みの好感度にしてある程度の接点を持つことが今の目標。

異常な態度には原因があるはずだが、どうしよう。判断材料がない。仕方ない、想像してみよう。

うーん、どうなんだ？ 俺が嫌われるわけ？ 視線？

「この問題の……黒田。解いてみる」

いや、そんな短絡的でいいのか？ うーん、しかし、他に思いつかない。

「黒田ー。聞いてるか?」

どうしよう、一向にわからんぞ。うん。……でも、そう言えば彼女以外の生徒の様子も一部おかしかつたような……。気のせいと言えばそれまでだ。アジフライ事件、二股疑惑、色んな噂で変な意味で注目はされている。しかし、最近はずっと、周りの一部の態度が違うような気もする。

「黒田!? 聞いてるのか!?!」

「うるっさいわ!!! こっちは世界のこと考えとるわ!!」

思わず叫んでしまい後悔した。周りからの視線がこれでもかど刺さる。

「今は数学だぞ」

「すみません。聞いてませんでした」

この後、めちやくちや謝罪した。



試験の最終日まで、二週間くらいの時間がある。しかし、油断は良くない。ここら辺で聞いておかないと。何故あそこまで強く当たったのか? それくらいいだらう。聞くだけなら警察に通報されることも、投げ飛ばされることもないだらう。よし、昼休みを使って聞きに行こう。

今できる事はそれくらい。なら、それくらいやらないとな。



私の名前は野口夏子。何処にでもいる普通の女子高生だ。そして、現在私の友達である銀堂さんが思い人である黒田君に食事を誘おうをしているのを遠目で眺めている。最初の彼女と比べたら、ずいぶん大胆な行動ができるようになった。

私とも、初対面の時より大分心から話して貰えてる気がする。話題も広がり、最近ライトノベルの話なんかもする。

『あれ? 銀堂さん、何読んでるの?』

『これはですね。最近読み始めた恋愛系のライトノベル。『ヤンデレ

過ぎる彼女はどうか?』です。』

『あ、それ聞いたことあるかも。結構ヒロインがぶっ飛んでる奴だよ
ね?』

監禁とか。料理に血を混ぜたりとか。普通ならやらない事をす
るって、クラスメイトの誰かが言ってた気がする。

『ぶっ飛んでる? うーん、そうなんでしょう? 私は全部ではな
いですが、共感できる部分があったのでそのような印象は抱きませ
んでした』

『それって、具体的にどこら辺に共感したの?』

『監禁……、いえ、手作りの料理を気になっている人に食べて欲しいと
いう感情ですね』

彼女はこの時、監禁と最初に言ったのを私は聞き逃さなかった。

『今、監禁って言わなかった? え?』

『アハハ。冗談ですよ。流石に共感はできませんでした』

『そっか、だよね!! 共感してないよね!! 多分そこは共感してはい
けない部分だからよかったよ、本当に』

『はい、一瞬だけ、それもいいくらいで留まりました』

『いや、良かった……え?』

『何ですか?』

『一瞬だけ、思ったの?』

『ええ、一瞬だけですが。でも、そんなことをすれば捕まってしまいま
すよ。今時の警察は凄いからと理性的に考えたらただの空想的な話
だと思い、そこからは共感しませんでした。警察に捕まったら思い人
とも会えないですし』

『ああ、それなら良かった? ちなみにだけど、料理に血を混ぜるとか
はどう思った?』

『あれは、全く共感できません。衛生的にダメです。カロリー計算を
完璧にして、必ず三十回咬んで食べてもらうようにすべきだと思います
』

『あ、そこは一般視点に近いんだね』

そこからは、ちよつとしたガールズトーク。彼女の思考は偶にとんでもない感じになるときがあるが、結局のところ可愛い面が目立つ。でも、一瞬でも監禁という行為に共感してしまうのはどうなんだろうと思つたが、それでも可愛い。

彼女がライトノベルを読むのは、会話を増やしたいからという可愛い理由。

食事に誘うのも、少しでも気を引きたいから。そう、今だつて。

「あの、一緒に食堂に行きませんか？」

「すみません。ちよつと、行かないといけないうところが合つて。またの機会に……」

「そう、ですか……」

凄いい落胆してる。がつくり肩を落としてる。

あんな態度をとつたら、もう好きつて言つてると同じだと思つけど。それでも付き合つたりしないのは、黒田君が銀堂さんと特別な関係になる気がないということだろう。

普通、銀堂さんにあんな態度とられたら、男子だつたらすぐにでも付き合うともうけど……。黒田君つて変わつてるな。前から思つてたけど。

「今日は予定があるみたいです……」

「お疲れ。そういう日もあるよ」

「はい。でも、予定つてなんでしよう？」

「なんだろうね。こればかりは考えても仕方ないんじゃないかな？」

「気になりますね……」

「何する気なの？」

「ちよつと、後をつけます」

「いやいやいや、それは流石に……」

「十六夜君も以前はよく私に付いてきてたので、大丈夫ですよ」

「そ、そうかな？」

「絶対そうです。文句なんて言えるはずないです。ちよつと、行つてきます」

「あ、うん」

私も行こうかな。彼女が暴走とかしたら止めないといけないし。私は席を立ち、黒田君を尾行する銀堂さんの尾行を開始した。

三十八話 集結!!

体育祭のときに俺をボロクソに詰った理由を、黄川萌黄から聞き出さないといけない。下がり切った好感度をリセットし、通報だけは回避するために。

実際に通報するとは限らないが、最悪を想定すべきだ。あの攻撃的な態度からして、マジで警察に付き出しかねない。もしかしたら……と考えて行動した方が良さだろう。俺は本当に大したことはできない。だから、小さくてもやれることは全部やっておくべきだ。

俺は二年Aクラスの引き違い戸を開ける。ドア近くの席で本を読んでいた火原火蓮は、すぐ俺に気付いた。

「あつ、十六夜、どうしたの？ もしかして、私をお昼に、さ、誘いに来たの？」

「え、いや、その、黄川先輩に用があつて……」

彼女の後の席から、黄川萌黄が射貫くような強い視線でこちらを睨みつける。超怖い。ヤバい、これは本当に守護霊やつたら通報かも……。

「何？ 僕は君と話すことなんて無いよ」

「すみません。俺にはあるんです。五分だけ俺にください」
「……………」

彼女は目を細めて俺を見つめた。教室内の二年生たちは、俺が来たことでひそひそ話し出す。

「え？ 今度は黄川？」

「三人目かよ」

「ねえ、やっぱりあの噂って……」

益々誤解が深まっていくが、慣れというのは恐ろしいもので、もう気にならない。メンタルトレーニングにちょうど良いくらいだ。

「いいよ、五分だけあげる」

「ありがとうございます」

「じゃあ、行こうか？」

「はい」

「ちよつと待って。何で萌黄に用があるの？　そこをハッキリさせなさいよ。十六夜」

「えつと、大したことじゃ……」

どうしよう。素直に言っても、彼女と黄川萌黄との仲が拗れるだけだ。それに、これは俺と黄川萌黄の問題だ。人に話すようなことではない。

「ちよつと待ってて。火蓮ちゃん。僕が解放してあげるから」

「何言ってるの？　萌黄？」

「こつちの話だから気にしないで。火蓮ちゃんはここで待ってて、すぐ終わるから」

「本当に何言ってるの？　十六夜もどんな用事が言いなさいよ」

「すいません、大したことじゃないので」

「そればかり………いいわ。ここで待ってる。早く行つて」

「はい、失礼します」

「それじゃあね、火蓮ちゃん」

俺達は教室から出た。火原火蓮が引いてくれて助かった。俺に強く当たる理由を聞きに来たなんて言ったら、黄川萌黄の評判も下がりそうだ。

「どこに連れて行くの？」

人には聞かれたくないし……屋上は人いるか……。校舎裏かな？

「校舎裏でいいですか？」

「……やっぱりね。いいよ、そこで」

「ありがとうございます」

やっぱりね？　どういう意味だ？　なんか盛大な勘違いをされるような気がするが、まあ、話をすれば誤解は解けるだろう。

俺達は校舎裏に向かった。



何よ。十六夜の奴。萌黄誘って、どっか行つて!!!　私の前で誘うなんて良い度胸じゃない。

今度は萌黄なの？ 私には飽きたってこと？ そんなはずは……
ないわよね？

気になる。二人が何を話すのか。……十六夜も私に冗談とは言え無理やりキスしようとしたし、私もちよつとくらい強引な事しても問題ないわよね？

私はコツソリ音を立てず扉を開けて、教室を出る。そのまま、二人の尾行を開始する。二人は階段を下りてった。

何処に行くつもり?? 萌黄って男嫌いのはずじゃ……もしかして、二人は既に特別な関係？ 仲良くないふりして、裏ではラブラブ？ ラノベとかでも男が嫌いなヒロインが落ちてラブラブになる話はよくある。

『ちよつと、ダメだよ。ここ、学校だよ?』

『すいません。黄川先輩、我慢できなくて……』

『もう、しょうがないな。後、二人きりの時は萌黄でしょ?』

『萌黄……』

『十六夜……』

流石に飛躍しすぎたわね。萌黄の男嫌いは筋金入りだし。ラノベ主人公みたいな奴じゃないとこんな展開はあり得ない……って十六夜はラノベ主人公みたいな奴だった!!! もしかして、いつの間にか十六夜が萌黄を攻略してて、その流れで付き合ったりなんかして……

『もう、我慢できないです。俺と付き合ってください』

『僕、男嫌いだけど君は特別、だよ?』

『お、黄川先輩……』

『萌黄でしょ?』

『は、はい。萌黄……』

クソ、クソ、クソ。絶対二人の話聞いてやる!!! 十六夜ならこんな展開になっても不思議じゃない。

『何考えてるのですか?』

『うぴ!』

『なんて声を出してるんですか?』

「びつくりするじゃない、急に話しかけるの止めてくれる?」

そこに居たのは、現在私が一番妬ましいと思っている。銀堂コハク。

「何でアンタも居るの?」

「お昼誘ったのに用事があるからと断られたので……その、……私より優先する用事って何か気になりました」

「そう……」

それで、十六夜の事をつけてきたのね。さて、邪魔だがここで騒ぐわけにもいかない。尾行を続けよう。けど、コイツの尾行の理由が結構浅いわね。

どことなくヤンデレの素質があるような……気のせいかな。それに今考えるようなことでもない。

「変に足音とか出すんじゃないわよ」

「そちらこそ、気を付けてくださいわね」

非常に不本意だが、ここからは二人で行こう。クツソ、近くで見るとやっぱり可愛いわね。コイツ。

「あれは二年の黄川萌黄先輩ですよ?」

「そうよ」

「どう、して、十六夜君と一緒に居るんですか?」

急に雰囲気が変わった。一瞬、私も冷や汗が出たかもしれない。

「知らないわよ。それを探りたくて此処にいるんだから」

「そうですよね……」

私たちはコソコソ後をつける。二人は外に出た。本当にどこ行くつもり? 二人はずつと無言だ。そして、たどり着いたのは……ここ、校舎裏!!??

え? 嘘? やっぱり?」

『ちよつと、屋外はハードすぎない?』

『すいません。我慢できなくて……』

『もう、しょうがないな』

十六夜!! 我慢しろ!!! いや、これ私の妄想だから、まだこんな展開になると決まったわけでは……ないけど。十六夜も男だし、欲が外

れて……。

「それで？ 何の用？」

「黄川先輩に一つだけ、聞きたいことがあります。体育祭の日、あそこまで俺にきつく言ったのはどうしてですか？」

「ああ、あれね、理由なんて一つだよ。君がクズでどうしようもない男だから真実を言った、それだけ。何？もしかして、愛情の裏返しとでも思って期待した？ 自意識過剰過ぎない？ 性欲の事しか考えてないから脳みそがおかしいんだよ」

は？ 萌黄？ 私に殺されたいの？ 私の十六夜にそんなこと言ってタダで済むと思ってるの？ 私は先ほどの不安が吹き飛び、怒りで頭がいっぱいになる。

それは、私の隣に居る銀堂コハクも同じようだ。目のハイライトが消え、憎悪を燃やしている。

「どうして、そこまで俺が嫌いなんですか？ 貴方が男嫌いと言う噂は知っています。だけど、自分からわざわざ男に暴言を吐くような人ではないと思うんです」

「……………うわ、キモ。僕の事を何でも知ってるみたいに言ってさ。何？もしかして、僕の事もストーカーでもして調べたの？ あの二人にしたように？」

「いえ、勘です」

「……………ふーん。まあ、どっちでもいいけど。君がクズだというのは変わらない事実だしね？ もういいかな？ 君みたいなのに時間を割く程、無駄な時間はないからね」

「いい加減にして!!!」

「もう、我慢できません!!!」

私たち二人は、物陰から飛び出す。一発ぶんなぐってやる!!!

★★★

うーん、やっぱり好感度が低い。何で、ここまで？ 聞いてもなかなか答えてくれないし。

「まあ、そう言わずに答えて……」

ドンドンドン。カんだ足音が背後に響いた。な、何だ？ 何が起こってるんだ？

顧みると、怒りの形相で食らいつく美女を直視することになった。こ、怖い。

「あ、二人と……」

「ちよつと、どういうつもり？」

「十六夜君を悪く言つて、何か楽しいですか？」

凄、遂に初期メンバーである『魔装少女』の三人が邂逅した!!!!

ちよつと興奮する。この三人が面と向かつて集まるなんて、本来なら夏休みまであり得ない。

ただ、銀堂コハクと火原火蓮が物凄いメンチ切つてるのを止めないとな……。

「え？ ぼ、僕は、二人の、為に……」

あ、涙目になってる。彼女つて意外と怖がりだからな。メンタルも結構弱いし。二人を宥めて、拗れないようにしなきゃ。

「は？ 何それ？」

「貴方が一番不快なんです」

「ヒツ！……ご、ごめん、な、さ、い」

「ちよつと、待つてください。多分何かわけがあると思いますから、話をもつと聞きましょう」

二人は不満を隠そうともしない。

「何で？ あんなに言われたのに庇うの？」

「そうですよ。庇う必要はないです」

「で、でも、一般的に考えて、ここまで言うつてよっぽどの理由があると思うんですよ。だ、だから一回話を詳しく聞きましょう？」

「……そうね」

「……話をとりあえず聞きましょう」

よ、良かった。とりあえず落ち着いてもらえて。俺の為に怒つてくれているのは嬉しいが、魔装少女の仲違いは何としても止めたい。

「でも、その前に一発ビンタさせて」

「いやいや、先輩流石にそれは……」

「そうですよ。火蓮先輩」

全く落ち着いていなかった。しかし、そこで銀堂コハクが諫めてくれる。流石だぜ。こういう時何だかんだ頼りになる。

「手の平じゃダメです。拳にしないと」

いや、全然頼りにならねえ!!! 頼むから暴力系はやめて！ 黄川萌

黄が怯えて腰抜かしてるよ

「銀堂さん、グーはダメじゃないかな？」

「大丈夫ですよ。本当なら、鼻をぶんなぐって、骨を折ってやりたいですけど。頬にしますから後遺症は残りません」

「ダメダメ!! 暴力はダメですよ!!」

「これは暴力ではありません。粛正です」

「暴力ですよ!! 一回話させてください!! お願いします!!」

「……十六夜君がそこまで言うなら」

「ほら、萌黄。さっさと話しなさい。ただ、事と次第によっては、二つのグーが待ってるわ」

いつの間にか火原火蓮も手の平から拳にパワーアップしている。

黄川萌黄はびくびくしながら口を開く。

「だ、だって、その、男が二人を性欲を満たす道具にして、弱みを握ってるから、解放しようと思ってる……でも、証拠が見つからないから……」

「は？ 誰よ？ そんな根も葉もないこと言ったの？」

「十六夜君がそんなことをするはずありません。冗談でもそんなことを言わないでください」

二人が拳を握った。もうちよつと聞こう!!

「ヒツ……えつと、その校内の噂とか、新聞とか、あとネットとかで二人がとんでもない目に遭ってるって書いてあったんだ」

「そんな噂、あったんだ」

「知りませんでした……」

「でも、そんなの鵜呑みにするアンタも問題よ」

「で、でも全部信憑性があるんだ。見てよ、これ!!」

黄川萌黄が携帯であるウェブページを表示する。それは、いわゆる

学校の裏サイトだった。俺についてあることないこと書かれている。

『黒田十六夜は二人の美女を無理やり手籠めにした』

『入学して直ぐに入院。喧嘩慣れしている。そこから導かれるのはD
V説』

『手籠めにした二人には、バレない様に外でヒロインみたいな事をさせている』

おいおい、とんでもないな。誰だ、こんなの書いた奴は？ 若干真実を入れてそれっぽく嘘つきやがって。

「何よ。これ。全部根も葉もないデマじゃない」

「……」

「その、後これも……」

次に表示されたのは、写真。俺が冗談で火原火蓮にキスしようとしたところだ。画像はかなり遠くから撮ってあるため少し荒いが、彼女が嫌がっているように見える。これ、撮られてたのか……。

「最初は、真偽の分からない噂だから、監視程度だったんだけど。体育祭の日はこの写真がアップされたんだ。これで、載ってる事全て真実だと確信した。黒田十六夜は証拠を完全に消してるっていう噂もあったから。だから、僕が証拠になろうって思ったんだ」

「な、なるほど。そういう事でしたか」

「適当に悪口を言ったら、DV男って説があつたから僕に手を出すって思ったんだ。ヘイトを稼いで手を出させて豚箱にぶち込んで二人を開放するっていう考えで結構強めに当たった」

お、俺と似たようなやり方だな。こうして人から聞くと結構強引な手だな。それにしても、誰だよ、こんなの書いた奴。殴っていいか？
「二人の相談役になっても、秘密を強制させてるなら意味ないし。一秒でも早く二人を救いたかったから……、二人は本当に酷い目に遭ってないの？」

「なってないわよ。この写真だって、キスしてないし。十六夜は私の家族を救ってくれたの。両親だって引くくらい気に入ってるんだから」

「十六夜君はとっても優しい人です。噂は全くの嘘です」

「……本当に？ 嘘、ついてない？ 無理やり言わされてない？」
「違うって言ってるでしょ？ 仕方ないわね、よく聞きなさい！ 十六夜との話全部聞かせてあげるから」

この前の事件が全て暴露された。いや、恥ずかしい。火原家の父母に言った、熱血漢が好みそうなセリフを一字一句完璧にトレーズされた。

「も、もう良くないですか？」

「流石です。十六夜君!!」

「略して、さすいぎね。どう？ これでも疑う？」

「う、ん。じゃ、じゃあ、コハクちゃんは？ ストーカーされて弱み握られたって。コハクちゃんを救ったって噂もあったけど、あれは全部彼が自作自演だって説もあるし」

「全て話しましょう」

俺が懐に辞典を入れていたこと、不良から救ってくれたこと、どんなに酷いことを言っても守ってくれたこと。彼女は早口に語った。

いや、だから、恥ずかしいって!!!

「さすいぎね」

「さすいぎです」

なに？ はまったの？ さすいぎ!!! 本当に勘弁してほしい。

「それ、やめてください。本当に恥ずかしいです」

「ほ、本当に？ じゃあ、ここに書いてあるのは……」

「全部嘘よ」

「嘘です」

「十六夜はね、優しいのよ。暴力なんて振るわないわ。体見せてあげよっか？ 何処にも怪我とか痣とかもないわよ」

「私もです」

「う、嘘。勘違い……」

「何か言う事があるんじゃないの？」

「そうです、そうです」

黄川萌黄は項垂れて俺の方を向いた。

「その、酷いことを言って、ごめんなさい」

そして、頭を下げる。

「勘違いなら仕方ないですよ。気にしないでください」

「え？ いいの？ 僕が言うのもあれだけど、普通あそこまで言われたら、もつと怒るんじゃない？」

「勘違いなら仕方ないですよ」

彼女からしたら、自分のような目に遭ってほしくないっていう思いがあっただろうし。彼女は訳アリだと元から知っているし、怒る気にはならないな。

「本当にごめんなさい」

彼女は再び頭を下げた。男嫌いでも、自分が悪いと思ったら、男女関係なく謝ることができる。多少の偏見を持っているが、根っからの善人。彼女のファンも多かった訳だよな。

「二人もごめんなさい。不快になったと思う……」

「十六夜がいいなら、私はいいわ」

「私も十六夜君が良いなら」

ふうー。彼女達のおかげだが、なんとか誤解を解けることができた。情けは人の為ならず、とは言い得て妙だ。

「それで、このサイトどうやって潰す？」

「まずは学校側に報告しましょう。その後、相手を特定したいのですが……」

「いや、そこまでしなくても」

確かに許しがたいが、他にやることがある。気にはなるが、今は相手にしている余裕がない。

「そこまでするべきよ」

「そうですよ」

「そ、そうですか」

物凄い剣幕で二人に詰め寄られ肯定してしまう。俺の為というのはありがたいが、どうしたものか。

「早速、学校側に報告よ」

「でも、ネットの特定は難しいですよ。どうしましょう」

「そこら辺は報告してから考えればいいわ。ネット技術は私達には無理だし」

「そうですね。もし特定できたら、どうしましょうか」

「地獄を見せる」

「それがいいですね。こんなことを考える脳みそを破壊しましょう」

「いやいや、過激すぎですよ!! 俺は気にしてませんから!!」

とりあえず、学校側への報告だけで済ませることができた。

三十九話 善人おっさん

よし、よし。何とか誤解が解けたぞ!!! クックック……。

これで黄川萌黄にストーカーしても、通報させることはないだろう。本当に安心した。あの後、学校裏サイトについて六道先生に報告をして、そこで一旦区切りとした。学校側がこれから調査をしてくれるらしい。ネットに書き込んだ犯人は……まあ、他クラス男子だと思う。美女二人と一緒に居たら面白く思わない者も出てくるだろう。もしくは、普通に面白がって行為に及んだか。その二択だろう。

具体的な犯人は……恐らく特定できないと思うが、そればかり気にするわけにはいかない。今は勘違いを正しただけで満足。満足。

六時限目を聞き流す。皆真面目に、いや、寝てる男子がいるな。そんなことはどうでも良い、うん。

中間試験の最終日まで時間はある。それまでは無理に接する必要はないかな？ 無害な事が黄川萌黄に伝わったはずだ。

——キーンコーンカーンコーン

「授業はここまで。復習を忘れないように」

毎回、この先生は毎回同じような事を言っているが、生徒を心から心配しているように感じる。俺もそこそこ点数取っておきたい。

「ああー、やべ、寝てた……」

佐々本が終鈴で目を覚ました。

「赤点は取らない方がいいぞ」

「そうだな……ま、一夜漬けでいいか」

そう言うと、再び眠りについた。赤点常習者の典型例みたいな奴だな。

終業前のホームルームが終わると、全員が早々に帰りの準備を始める。中にはこの後一緒に勉強しようとする生徒同士で相談している者も見受けられた。俺は帰る。まだ、大丈夫。

「十六夜君」

「どうかしましたか?」

「えっと、色々気にしているかなと思ひまして……」

「あんまり、気にしてないですよ。ネットなんてそんなものですし。真実もあれば嘘もあるでしょう」

「そうですか……」

「銀堂さんのせいとかではないので気にしないでください」

「え!？」

「いつもと顔が違いますし、銀堂さんは優しい人ですからそんなことを考えてるかなと思います」

「そう、ですか」

彼女からは気にしてるという感じがヒシヒシと伝わってきた。悪いのはネットに書いた奴であって、彼女ではない。

「本当に気にしなくていいです。ネットなんてそんなものですよ。真実もあれば嘘もある。そんなの少々振り回されてたら人生が窮屈になっちゃいますよ。所詮噂ですから、大丈夫です」

「……ありがとうございます」

「お礼を言われるほどでもないと思うのですが……どういたしましたか?」

「……十六夜君は本当に優しくて、凄い人ですね……」

「銀堂さんの方が五億倍凄いと思いますか?」

「そ、それは違うかと……」

「そうですね。ゼロが三つくらい足りないですよ」

「……フッフ、ジョークもお上手ですね」

割と本気で五千億倍以上凄いなと思ってるが、それが通じることはないだろう。彼女もジョークと受け取っている。まあ、いいか、元気が出た感じがするし。

「それじゃあ、俺は帰りますので、また明日」

「はい、また明日」

俺は教室を出ていく。今日はまっすぐ家に帰ろう。



十六夜君。ああ、もう、どうしましょう?!

好感度が益々上がってしまう。普通なら私を責めてもいいのに、あ

んな優しい言葉をくれた。そのうえ、ジョークまで言って私を元氣付けてくれた。

表情から機微を読み取るなんて、熟年夫婦みたい。正直、前半で罪悪感は払拭され、後半からはニヤニヤを抑えるので精一杯だった。

あんなに優しくされたら、その内我慢できなく……。いやいやいや。流石にそれはダメです。節操のない女と思われるのは最悪。気品のある乙女をこれからも演じなくては。今の所、全く、これっぽちも、変なミスとか言動とかはしていない。

大丈夫。私がこのままいけば結ばれると、夏子さんからお墨付きを貰っている。純真な乙女。乙女だ。このまま、完璧な優雅で気品のある乙女キャラで頑張っで行こう。

でも、いつになったら？ あんまり長く待てそうにない。早く欲しい。彼が。欲しい。

もし付き合ったら、どうしよう？ まずはGPS？ それともスマホのパスワード把握？ 手料理以外食べる事禁止令？ 他の女の子との関係制限？ ……まあ、今は考えても仕方ない。追々考えていこう。

そう言えば、私、結局連絡先交換できてない。恥ずかしくて聞けないのだ。

それに比べてあの女は……。あっさりと十六夜君の連絡先をゲットして……。妬ましい。嫌悪に近い感情。だけど、嫌いではないような感じも……。いや、嫌い。私より先に連絡先を貰ったのが納得いかない。でも、今の私に聞く度胸は……。ない。恥ずかしいのだ。十六夜君の連絡先を聞こうとすると、どうしても恥ずかしくなってしまう。連絡先を教えて欲しいとか、どうにもできない。

何故、彼女はできた？ 敵から学べって夏子さんも言っていた。彼女から学ぶ……。最近分かったが彼女みたいなキャラクターは『ツンデレ』と言うらしい。やってみる価値はあるか？ 『ツンデレ』。

大体、行動パターンは把握している。最近、二次元の知識を蓄えつつあり、それとなく十六夜君と話せるようになってきている。やって

みよう、『ツンデレ』。何か彼に効果があるかもしれない。連絡先も手に入るかもしれない。



「十六夜」

「お疲れ様です、火原先輩」

校門に差し掛かったとき、火原火蓮が声をかけてきた。いつもより元気がない様子だ。……彼女もか。二人とも優しいが、俺のせいで落ち込まれると気が咎める。ここは、あっさり解決してやろう!!!

「あのさ……」

「気にしないでください。ネットなんて真実もあれば嘘もある物です。そんなの一々振り回されてたら人生が窮屈になっちゃいます。所詮噂ですからそんなことを気にするほど俺の器は小さくないですし、火原先輩のせいでは全く、これっぽちも無いので気にしないでください。これ以上気にする素振りを見せたら、逆に怒ります!!!」

「あの、まだ、なにも言っていないんだけど……」

「大体、分かります。先輩は顔に出やすいですから」

「あ、うん、そう？ 何か、なんて言っていないか分からなくなっちゃった……えつと、ありが……」

「どういたしました!!!」

「だから、私殆ど会話できてないんだけど!? 何で被せてきたの!?

RTA!? 早すぎるんだけど!?!」

「そのくらい、元気の方がいいですよ」

「も、もしかして、私を元気づけるために?」

「え? あ、まあ、はい」

「嘘つき。ちよつと、面白がつてたでしょ?」

「そ、そんなことないです」

「もう……でも、嬉しい、ありが……」

「どういたしました!!」

「だから、最後まで言わせなさいよ!!!」

!!!!!!!

よし、元気が出たな。暗い雰囲気をぶち壊し、高度なギャグ空間にすることで、彼女をいつもの状態に戻すという高度な作戦は成功したな。銀堂さんはこういうメタな感じは把握できない。火原火蓮だからこそできるのだ。

「いい？ 私は年上？ からかうなんて百年早いわ」「すみません」

「ま、いいけど……十六夜って、やっぱり面白いわね」

「そうですね？ 俺程平凡な奴はいないと思いますけど？」

「それは無理あるわね」

「そうですね？」

「うん、無理」

「まあ、頭のねじは多少ぶっ飛んでるかもしれませんがね」

「ぶっ飛んでるって言うより、優しすぎるって感じじゃない？ 転生

主人公並みだから、将来変な奴に騙されないかちよっと、心配になるくらいよ」

「優しすぎるですか？」

「うん」

「それは、違いますね」

「え？ 何処が？」

俺が優しくするのは彼女達だけ。善人転生主人公は誰でも優しくするが、俺は人を選ぶ。誰かれ構わず優しくするわけではない。俺はそんな大した人物ではない。

「秘密です」

「はあ!? そこは言いなさいよ!」

「すみません、これは流石に言えません」

「私、そういう謎的なやつ、滅茶苦茶気になるんだけど」

「まあ、大したものではないですから」

「うん、気になる」

「すみません」

「いつか聞ける？ その秘密？」

「それは無理かもしれませんが」

「ええ？ 益々気になるじゃない」

言えるはずない。実は前世から貴方に憧れて大好きで、貴方の為なら何でもするつもりだって。恩返しがしたいって。

恥ずかしい。そして、頭おかしい奴認定間違いなし。

「大したことじゃないので」

「そればかりね……あ！」

「どうかしましたか？」

「パパとママが……十六夜を家に連れて来いって……言ってたんだ」

「パスでお願いします」

「もう、毎日言われてるの……毎回、躲してるんだけど。私も結構辛いつていうか……その、圧が凄いつて言うか……一回は連れて行かないとその内学校に直接車とかで迎えに来るかも……」

「ええ？ それは、流石に……」

「じゃあ、来てよ」

「冗談とは言え娘にキスしようとしたので、気不味いから行けません」

「そ、それはそうだけど。もう、両親公認だから」

「それはそれでダメでは？」

「私もそう思うけど、ね？ 一回だけ？ 良いでしょ？ パパとママ

の圧が日に日に強くなってるの。一回だけだから。ね？」

「またの機会にお願いします」

「そこをなんとか」

「真面目に気まずいのでパスでお願いします」

気不味い以外の何物でもない。冗談で娘にキスを迫ったんだ。どう考えてもヤバイ奴だろ。恐らく、好感があると言って家に呼び出し、俺を殺す気だ。絶対行かん。

「はあー。もう、あんまり、こういうのは恥ずかしいからやりたくないんだけど……」

彼女は、ちよつと上目遣いで媚びるように俺を見つめた。

——お願い、来て？

「ッ!!」

そ、それは……そんな言い方されたら、クソ、顔が良い奴じゃないとできない高等テクニクをここで駆使するか。しかも、俺みたいな男子には効果的。やるじゃないか。

だが、残念。普段から銀堂コハクと火原火蓮にずっと接している俺は、美女に耐性が付いてしまった。申し訳ないが断らせてもらおう。「行きます」

「やった！　じゃあ、早速行くわよ！」

「え？　あれ？」

あれ？　断るつもりだったのに。口が勝手に……。彼女はスマホにパパッと入力して、すぐにポケットにしまった。

「もたもたしないで行くわよ」

「あ、あの、やっぱり」

「行くって言ったわよね？」

「あ、はい」

どうやら、俺に美女への耐性は全く付いていなかったらしい。



ああ、もう、やっぱり優しいじゃない。この善人十六夜!!!

十六夜は、ネタにノリそして気遣いもできる最高過ぎる、もう運命の相手としか思えない程の男。私が十六夜に絡んだから変な噂がたったかもしれないのに、それを気にせず、場の空気を良くしようと面白い事言ってくれる。

もう、最高じゃない!!　最高過ぎるわよ!!!　メインヒロインになりたい!!　まあ、すぐに特別な関係は無理があるわよね、でも……

ククク、どうやら上目遣いは効果的のようね。まあ、私って結構顔が良いから。何と言ってもパパとママの子だもん。二人の子である私が可愛いくないはずがない。

でも、こういうのって自分がやると物凄く恥ずかしいのよね。十六夜はかなり意識してたみたいだし良いんだけど……。今後はこういうのやった方がいいのかな？

恥ずかしいけど。効果ありなら……。やろう。恥ずかしいけど。何

故か分からないが最近異常に焦りが湧いてくる。今後、この修羅場が加速するのではないかという焦りが。萌黄は誤解だったけど、十六夜なら、本当に落とすかもしれない。

萌黄はスタイル抜群のモデル体型、そして僕っ娘。魅力はバツチリ兼ね備えている。万が一に備えて、今のうちに色々やっておかないといけないわね。

十六夜も男の子。若い男子。そして、恐らく女子に耐性がない。なら、今度はあの手で行こう。貴方だけに秘密の私を見せる作戦。本来なら見せない面を見せることで男子は喜ぶって本に書いてあった。

見せない面……なんだろう？ クーデレとか？ ヤンデレとか？
ヤンデレ……………。

ヤンデレと言えば何故かアイツを思い浮かべてしまう。銀堂コハクだ。まだ確定ではない。でも、もしかしたらヤンデレの兆しがあるかもしれない。もし、ヤンデレに覚醒して、そして十六夜がヤンデレ好きだったらどうしよう!?

練習しておくか？ 普段見せない面。そして、先を見越してのヤンデレ属性の獲得。やっておいて損はない。

十六夜のどんどん突き進む感じ。私も見習わなきゃ。

でも、その前に今日の夕食ね……。お願いだからパパとママ。暴走だけはしないで!!!

十六夜に変な風に思われたくないの。だから、お願い。そう思っ
て、先ほど連絡を入れた。家族全員が見れるグループに。

『今日、十六夜が家に来るって』

流石にパパとママも大人だ。十六夜が来ると言っても、落ち着いた
対応を……。その時、携帯が鳴った。見ると……

『何でもっと早く言わないの!?! 尾頭付きで鯛買ってくるわ!!!』

『赤飯焚いておくよ。おめでどう』

ああ、不安だ……。胃が痛くなってきた。

四十話 新生

問。娘に無理やりキスをしようとして、さらにパンツ見てしまった場合、その娘の親に会うときどのような顔をすればいいか？

回答。分からない……。だって、どうすればいいか分からなくない？ パンツはまだバレてないけど、無理やりキスをしようとしたんだよ？

ヤバいでしょ？ 普通だったら二度と関わるなつて言うくらいだと思う。これでキス事件がバレてなかったら、多少行きやすい。あくまで多少であるが。そもそも、女の子の家に行って、その子の両親と顔を合わせるつて事態が気まずい。

行きたくねえ……。絶対変な奴つて思われてるよ……。公認？ 絶対嘘だ。

ちよつと熱い言葉を伝えただけど、実は娘に冗談でキスをしようとした変態。

『あんた達がやり直せるつて信じてるんだよ。なら、貴方も信じてやれよ。貴方が貴方達が一番信じなきやいけないのは火原火蓮じゃないのか？ 彼女がやり直せるつて信じてるだけで、もう一度やり直して一から家族を作る理由になるんじゃないのか？』

こんな熱いセリフを言つて、実はキスだぜ？ 娘にキスしようとしたんだぜ？ 恥ずかしさと気まずさでどうにかなりそう。殴られたりするかも。

……手土産でも持つていくか。うん、そうしよう。

「あの、先輩」

「今更行かないはダメつて言つたでしょ？」

「そうじゃなくて、何か手土産でも……」

「ああ、そういう事。気にしなくていいわよ。こつちが呼んだんだし」「いえいえいえいえいえいえいえ、お邪魔するわけですから、断固として買います」

「そ、そう？…そこまで言うなら」

良し！ これで雀の涙ほどではあるが夫妻から、変な目で見られる

要素が減ったぞ。ほんとに少しだが。

「それでは、行きましょう」

「あ、うん」

場所を移す。まず、お饅頭屋さん。専門店らしいのだが、生地が薄皮とか、中身がこしあんとか、粒あんとか、いろいろある。どれも美味しそうだが……。

「あ、これ、美味しそうじゃない。パパもママもお饅頭好きだし、これでいいんじゃない?」

「うーん……」

確かに、どれも美味しそうだ。だが、こんな安物でいいのか? もうちよつと良い感じのが良い。高めのやつ。お、良いの発見。これにしよう。他のより高いけど、大した額じゃないし。

「よし、これにしましょう」

「ええ? これがいいと思うけど……。それ、ちよつと高くない?

数もあんま入ってないし」

「これくらいがいいでしょう。二つ買います」

「そう……」

これで、多少機嫌が良くなりますように……。

「じゃあ、そろそろ私の家に……」

「あ、その前に」

「?」

「ハムとか買って行きましょう」

「まだ買うの!?!」

ハム、ソーセージ、饅頭、メロンを買って、火原家に向かう。物で釣るわけではないが、これくらい買った方がいい。娘にとんでもない事をしたわけだからな。



彼女の家に着いた。

「ちよつと、待ってて……」

「あ、はい」

彼女は一足先に家の中に入って行った。僅かな時間が経つと、彼女の大声が聞こえてきた。

『ちよつと!!! これはダメー!!! 何これ!? ヘンテコ家族って思われるじゃん!!! ダメダメ!! 絶対ダメ!!!』

何だ? 何があるんだ? かなりの大事だな、これは。帰っていいか?

そんな事を考えていると、家のドアが開く。彼女が暗い顔で出てきた。

「どうぞ、おあがりください……」

「だ、大丈夫ですか?」

「ええ、とりあえず……その、最近のパパとママはちよつと、ユニークって言うか、そんな感じだから。だけど、凄く優しくて良い人だから。誤解しないでね?」

「え、はい」

彼女に念押しされて家の中に入って行く。綺麗で清潔感のある内装には、落ち着いた気品がある。廊下を渡ってリビングと思われる部屋のドアの前で彼女は止まった。

「十六夜にパパとママも感謝してる。勿論私も。でも、感謝がぶっ飛んでると思うから……あまり、変に思わないでね?」

「はい、二度も念押ししなくて大丈夫ですよ?」

「それでも、たりないのよ……」

「え?」

「とりあえず、ようこそ、火原家へ」

彼女はちよつとがっくりしながら扉を開けた。そこには……

『Welcome 黒田十六夜様!! 大感謝祭!!』

大きめの看板がぶら下がっており、紙で出来た輪つかを繋いだ輪飾り、ペーパーフラワー、くす玉がある。クリスマスですらこんな飾りつけはしないだろうって言うくらい豪華な部屋になっていた。

「ようこそ、十六夜君」

「よく来たね、さ、座って」

火原夫妻が満面の笑みで出迎えてくれた。何が起こってるのか、ちよつと分からない。

「えつと？」

「とりあえず、座って……何も言わずに……」

彼女も頭を抱えながら座るように促す。テーブルの上には料理が並んでいた。赤飯、鯛、から揚げ、サラダ、その他もろもろ。

「あ、その、つまらないものですが」

「まあ、気遣いの塊のような子ね!!」

「失われし大和魂を宿しているんだね!!」

……そ、そんな褒めるか？　っていうか、キス事件の事は別にいいのか？　あんまり気にしている感じじゃないが……。

「……とりあえず、座って……」

「大丈夫ですか？」

「どう見える？」

「大丈夫な感じではないですね」

「でしょ？　ほら、席について」

「あ、はい」

彼女に促されるまま席に着く。火原夫妻と向き合い、火原火蓮が隣に座った。

「あ、すみません。その前に手洗いとうがいしてきていいですか？」

「当たり前な事を当たり前になすのは鬼才ね」

「そうだね」

「……」

彼女も無言で洗面台に向かった。

「何か、思ってた感じとは違いますね」

「変って思うかもしれないけど、変じやないのよ!!　本当に!!　二人とも世界一やさしいの……。二人とも十六夜に感謝してるだけだから嫌な感情は抱かないで欲しい」

「大丈夫ですよ。ちよつと、好感度が高すぎるような感じもしますが……先輩の両親なんですから変な人ではないことは容易に想像でき

ます。」

「そ、そう……ありがとう」

「いえ、早いとこ手を洗って行きましょう。俺お腹空いちやって」

「うん、行こう」



よ、良かった。パパとママが変人に思われなくて。流石にあそこまでされたら引かれるかと思っただけど、良かった。

最初はその飾りつけはダメと思っただけど、パパとママがせっかく作ったものだし、無理に片付けるのは出来ない。かと言って、あのまま通せば十六夜が私たち家族を変人と勘違いして嫌うかと思っってしまった。私は十六夜に私達三人共好きになってほしい。

だから、変に気を遣ってしまったけど……

まあ、あの十六夜がそんな事を気にするはずないわよね!! ああ、本当に杞憂!!!

もう、パパとママも褒め過ぎ!! 普通はあれやったら引かれるわよ!!

まあ、大海より深い懐を持って、魔眼並みの観察眼を持っている十六夜だから大丈夫だったけどね!!



結局、一発殴られることなく、食事するだけだった。料理はどれも絶品だった。帰る為に玄関で靴を履きながらそんな事を考える。帰り送って行くと言われたが断った。一人で帰れるし、迷惑をかけたくない。

あの夫妻はやっぱり褒め過ぎな気がする。最初にお吸い物に口をつけたのだが、汁から食べるのが礼儀らしくそれも褒められた。後、質問も凄い。両親の事も聞かれたな。夏休み、お盆の予定とか。

何だかんだ充実した食事だった。それに、大分家族の距離が近くなった気がする。それが確認できて安心した。

「それでは、ご馳走様でした。失礼します」

「いつでも婿に……じゃなかった遊びに来てもらって構わないわ」

「そうだね、孫の顔……じゃなかった君の顔が見たいから、いつでも遊びに来てもらって構わないよ」

「え？ あ、はい。失礼します」

とりあえず家を出た。かなりとんでもないことを言っていた気がするが、気のせいだろう。きつとそうだろう。火原火蓮が外まで見送ってくれる。

「送ってく？」

「いえ、大丈夫ですよ」

「今日はありがとう。楽しかった」

「こちらこそ、楽しかったです。料理もおいしかったですし」

「そう、良かった」

彼女は一呼吸おいた。風が吹き僅かに髪が揺れる。月明かりが彼女を少し照らす。

「ねえ」

「どうしました？」

「アイツとはどんな感じなの？」

「アイツ？」

「コハク……教室とかで……」

「偶に話したり、話さなかったりですかね？ クラスメイト結構居ますから、銀堂さんも他の女子生徒と話したりしてますよ。特に野口夏子さんって言う女子生徒とよく話すのを見ますね」

「……よく見てるのね」

「そんなに、見てないですよ……」

一瞬、彼女から表情が消えた。声も冷たくなり、ゾクツ!! と背筋が反応してしまう。潜在的な力を感じさせる雰囲気彼女からは感じられた。

「見てるんだ。そんなに……私の事は最近、ほったらかしなのに……」

「ええ？ そ、そんなこと……」

「前は、十六夜から色々誘ってきたのに……何で？ 何で？ 最近は構ってくれないの？ 貴方から来てくれないの？」

「あ、えっと」

俺は一步下がってしまった。何が起きてるんだ？ さつきまで優しい雰囲気だったのに、急に極寒の地に移された気分だ。

「何で？ 何で？ 何で？ 何で？ 何で？ 何で？」
「ちよつと……先輩」

「何で逃げるの？ 嫌い？ 私が嫌い？ そうなの？ 嫌いななの？」

俺は思わず尻もちをついてしまった。こ、怖すぎる……リアルヤンデレ。初めて見た。急すぎないか！

「ご、ごめんさ、さい。すみ、み、ません」

体が震えてしまう。声も正常に出ない。極寒の直中に居るように震えが止まらない。止めようとしても止まらない。

「あ、ご、ごめん。そこまで、怖がらせるつもりじゃなかったんだけど……」

「え？」

急に彼女はいつもの雰囲気に戻った。

「な、何で？」

「えつと、本当にごめん。ちよつと、ヤンデレをやってみたかっただけなんだけど、悪ふざけが過ぎたかも……ごめん」

「よ、よかった。冗談だったんですか……マジで怖かったです」

「そ、そんなに？ ごめんね？ と言うか、ごめんなさい」

「大丈夫ですよ。リアルヤンデレを味わえた貴重な経験と思えば大したことはないです」

「ごめんね」

彼女は手を差し伸べた。それを掴まって足に力を入れる。いやー、冗談で良かったですね。いや、かなり怖かった。

「大丈夫ですよ」

「ごめん……」

「いや、大丈夫ですつて」

「調子に乗り過ぎた。あんなに怖がらせて……最低よね……」

「そ、そんなに落ち込まなくていいですよ！ 結構、需要有りでしたし、先輩の知らない面が知れて良かったです！」

「そう……」

す、すごい気にしていらっしやる。ちよつとビツクリはしたけど、俺も冗談でキスしようとしたから。まあ、相殺だよな？

「もし、それでも気にしてるなら、あのツンデレで元気一杯な先輩に戻ってください。あの先輩が一番素敵と一緒に居て楽しいですから。俺も冗談でキスとかしようと思いましたし、両成敗ですよ」

「……………か、勘違いしないでよね！ 別に十六夜の為に元気になるんじゃないんだから！ このまま落ち込んでるとパパとママが気になるから仕方なく元気になるだけなんだからね!!」

「そうそう、その感じです。ヤンデレは先輩のイメージじゃないですよ」

「ありがとう。今後はツンデレで行くわ」

「はい」

やっぱり、素直で一緒に居て楽しいな。表情がころころ変わって話も結構合うから飽きがない。小説読んではいるときはこんな女の子と話してみたかなと思ってたから、この日常が幸せなんだよな。

「それじゃあ、俺は帰りますね」

「うん」

「それでは、また明日」

「また明日」

よし、帰るか。それにしても火原家は随分『ストーリー』と変わったな。夫妻は仲良さそうだし。火原火蓮もヤンデレを演じるとは…………。ちよつと、怖かったが可愛いことには変わらない。だが、俺はツンデレの方が好きなんだよな。

色々、考えながらも一人駅に向かう。この世界、色々変わり始めている気がする。それが良いのか、悪いのか、わからない。



——やっぱり、優しいわね

十六夜のことになると、最近我を忘れてしまう。暴走してしまう。

迷惑をかけているかもしれない。でも、抑えられないこの気持ち。

——好きだ。私は

自分勝手かもしれないけど、私の事も好きになって欲しい。これからはアピールの方法を変えないといけない。ツンデレの私が一番つて言ってたわね。そして、ヤンデレ好きではなかった。今後はツンデレで行こう。今日、彼を更に知れた。

彼が一番好きな私でこれからはアピールしよう。

四十一話 蜂

気が付くと、白い空間に居た。あれ？ これ、何処かで見覚えがあるような……。

え？ 嘘でしょ？

「十六夜君……」

背後から呼びかけられる。デジャブが過ぎるな。おいおい、どうせこれは前回の同じパターンだろ。ゆつくりと振り返るとそこには……『魔装』ではなく、パーカーを着ていた、かなりラフな格好。

しかし、髪は所々ぼさぼさ、目の下には大きな隈ができています。こういう彼女も味があつていいな。だが怖い感じもする。

「好きですか？ 好きですか？」

「え？」

展開についていけない自分がある。これは夢だろうけど、急すぎないか？ でも答えたほうがいいよね？ 答えないと夢とはいえ殺される。一応好きなことには変わらないし。

「……大好きですよ」

「私は、宇宙一好きなのに……、たかが大好きなんですか？」

「いや、だって二択で良い方を……」

「その二択を超えて欲しかったのに……。超えて欲しかったのに……」

無茶苦茶すぎないか!? 二択の良い方を答えたのに!? いや、夢なんだろうけど……。

彼女の手には包丁が……いつの間に……そのまま彼女は……それを俺に向けて、腹部に。

「なんだ!! この夢は!!」

そこで、ハッと意識が覚醒した。どんな夢だよ。恐らく、火原火蓮が急にヤンデレしたのが頭に残ってたな。大分、リアルな夢で凄いビビる。

刺された場所を思わず擦ってしまおう。いくら夢でも、リアルな夢は何となく現実にも影響があるもんだな。



朝から、とんでもない夢だ。登校しながらも未だに刺された場所を気にしている。

「おはよう」

「おはようございます」

「昨日はありがとう。パパもママも喜んでた」

「ごちそうこそ、お世話になりました」

火原火蓮が歩み寄ってきて隣で歩調を合わせる。良かった。いつもの元気いっぱいを感じた。こうでなくてはな。

「おはようございます。十六夜君」

背後から呼びかけられる。夢に近い展開に、僅かな緊張感が走る。火原火蓮も顔を顰めて振り返る。

俺達は今日の彼女の姿を見ると、自身の目を疑った。

ツインテール。いつものさらさらの銀髪の長髪を纏めていた。ん？ どうした？ 可愛いな。おい。

「か、勘違いしないでくださいね。別に十六夜君だから挨拶をしたわけではなく、人として当然の行動なんですからね」

「……」

可愛いが展開について行けない。どういう事か説明を要求したい。

「何してんのよ!?! それ私の十八番! 属性を安易に増やそうとするんじゃないわよ!」

「勘違いしないでください。別に属性を増やそうとかそんなんじゃないんですから」

「ツンデレ、なめんな。言う事が安直すぎるわ!」

「貴方も同じような事しか言わないじゃないですか!」

朝の平和なひと時のはずが……止めに入り、なだめるまでに登校時間全てを費やした。しかし、ここの仲を改善するにはどうするべきか、もつとしっかり考えないといけない。この二人を……仲良くさせたい。どうしたものか？



教室内は大騒ぎだった。銀堂コハクのツインテールはとんでもなく話題になってる。男女ともに目が釘付けだ。佐々本と一緒に彼女を眺めながら会話を続ける。

「いや、コハクちゃん可愛いな」

「確かに」

「お前は毎日一緒だからいいよな」

「まあ、幸せ者と言う事には変わらないな」

本来なら、一緒に居ること自体が幸せな事。彼女との時間も貴重な物だ。釣り合っていない。だからこそ、妬みも生まれてしまう。このクラスにはそんな奴はいないが、他の学年やクラスにはいるだろう。だからこそ、あんな事がネットに書かれてしまった。仕方ないと言えば仕方ないんだよな。

「羨ましいいぜ。本当に可愛いからな。ツインテールって最高すぎるな」

「確かに、夏ガチャの限定キャラくらいの特別感はあるな」

「その褒め方は絶対やめといた方がいいな」

言ってから、俺もこれはないなと思った。そうだ。乙女二人について佐々本に相談してみよう。何かいいアイデアがあるかもしれない。

「なあ」

「どうした？」

「仲の悪い女子二人を仲良くさせたいんだが、どうしたらいいと思う？」

「うーん、乙女心は複雑って言うからな。難しいかもな」

「そうか……」

確かに、そうだよな。そう簡単にあの仲悪さをどうにかできるわけではないか。

「でも」

「??」

「俺の母さんが言っただけで、女って仲が悪くてもひよんなことがきっかけて仲良くなる時があるらしいぜ」

「そうなのか？」

「俺の母さんが言っただけだが、そうらしい」

「なるほど。参考になった。ありがとう」

そうか。女の子にはそういう事があるのか。少し見守るのもありかもしれないな。だが、あくまで一つの手段として考えるだけ。色んな策も考えておいた方が良いな。あの二人は『魔装少女』の中でも特に仲の良い二人だったから、相性は悪くないはずなんだ。『魔族』が攻めてきた時の為にも、この『絆』を作りにくい状況をどうにかしたい。

「あ、そうだ。これ例の物だ」

「そうか、値段は？」

「相場の1.5倍でいい」

「よし」

金を渡し、紙袋を受け取る。中には聖書が入っている。ロマンがあるため、ついエロ本博士の彼から買ってしまおう。これで五冊目だ。相場より高いが、自分で買うよりは良い。エロ本は買うとき恥ずかしいからな。うん。

さて、聖書は置いておいて二人の事を考えないと……。どうしたものか？



私の名前は野口夏子。ごく普通の女子高生である。

昨日、銀堂さんを尾行して様子を伺っていたんだけど……。いやあー、凄かったね。あんな展開になるとは分からなかった。と言う

か、火原先輩も尾行してたという事実にも驚きを隠せなかった。

あの二人って、何だかんだ仲良さそう……かな？ 相性は凄くいい感じがするんだけどな。それに、黒田君への好感度が二人とも高すぎる。

いつの間にあそこまで……。二人とも好感度がドンドン高くなつて、いつか限界突破しそうで怖い。特に銀堂さんは負けず嫌いで何かの片鱗を感じるし。火原先輩も物凄い負けず嫌いって感じがするから、それが二人の関係と好感度に拍車をかけてるんだと思う。

ボクシング用語で何かあったつけ。ええつと『ミックスアップ』。互いに高め合うっていう意味だっけ？ あんな感じがする。このまま行くとどうなるのか少し気になる所ではあるが、私は銀堂さんの恋を応援するという立場なので、色々アドバイスの事はしているが……。今日はかなりビツクリした。

いきなりのツインテール。多分、前に私が言った「相手を知ることが大事」を実行したのだと思うけど、直球過ぎない？ いや、可愛いけどね？ 需要はたっぷりあるけど。これでも黒田君には効果が薄い。いや、効果はあるけどそれだけと言った方が正しいかな？

手強いね。かなり手強いね。好意はあるけど付き合うつもりはなあっていうのが一番難航するね。うーん、弱点だらけなんだけどな、黒田君。

女子への免疫無し。銀堂さんへの好意はあり。だけど、落とせない。これは……正直お手上げに近いかもしれない。でも、何かできないか考え続けよう。

◆◆◆
◆◆◆
友達の為だからね。

さて、昼休み。食堂に行くか。彼女が俺の下に来た。ツインテールという可愛さマックスの姿でだ。

「十六夜君、一緒に食堂行きましょう」

「ハイ……」

「か、勘違いしないでくださいね、べ、別に貴方と食べたいんじゃないんですよ……えつと、確か……仕方ないから誘ってあげてるだけなんですか

らね!!」

えっと、確かって聞こえたんだが。無理してツンデレを演じなくてもいいと思う。本家が居るわけだし。

「あの、無理して……」

「十六夜!!」

本家が来た。ツンデレオブツンデレの火原火蓮だ。ドアをバンッと開けて堂々の登場を果たす。

「仕方ないから、お昼一緒に行ってあげる。感謝してよね」

「あ、はい」

「ちよつと、私が仕方ないから一緒に食べるんです!」

「私が仕方ないから食べるのよ!」

「仕方ないのは私です!」

「仕方ないのは私よ!」

周りがざわざわする。男子達、シャーペンを投げようとするのはやめてくれ。

佐々本が言っていたけど、本当にひよんなことから仲良くなるのか? 不味いな。どうすればいいか。そうだ! 中間テストの勉強なんてどうだ?

無理だ。二人とも勉強は全くする必要はなく、学年も違う。考えていると、火原火蓮にもう美女が控えているのに気付いた。

「あ、ど、どうも」

黄川萌黄だ。彼女は申し訳なさそうに俺に頭を下げた。昨日のことを気にしているのはすぐに分かった。わざわざ謝罪に来たということか?

「萌黄は昨日のことをもう一度謝りたいんだって」

「ああ、なるほど」

火原火蓮が教えてくれる。俺の読み通り、彼女は律儀だな。

「あの、色々、本当に申し訳ありませんでした」

魔装少女達に謝れっぱなしだな。三人そろって……。まあ、もう気にしてはいないが、本人からしたらあそこまで言ったら気にせざるを

得ない感じか。

俺は男だから嫌い。だが、それとこれとは別。悪いと思っただから謝る。線引きがすっかりしてるな。

「昨日も言いましたが大丈夫ですよ。勘違いだったわけですし。これ以上気にしなくて大丈夫ですよ」

「そう……」

彼女は少し落ち着いた雰囲気を取り戻した。先ほどまでは罪悪感による焦りが見えていたが、それも薄まって行く。

「それじゃあ、僕は失礼します」

彼女はもう一度頭を下げて、その場を去って行った。

「十六夜君、懐が深すぎです」

「さすいぎのバーゲンセールね」

いつの間にか彼女達の喧嘩が収まっていた。恥ずかしいからさすいぎだけは止めてくれ。

お昼は二人に付き添われながら食べた。



昼食後、一人で外にある自販機に向かっていた。あの二人を仲良くさせたかったが何もできず、胃にダメージが来たため一息つきたい。

自販機の近くには見慣れた顔があった。

「あっ」

「どうも」

黄川萌黄が複雑そうな顔して自販機の前に佇んでいた。鼻かんだちり紙を思い出す。恐らく彼女も思い出しているだろう。どうすればいいか分からずアタフタしている。

「ゆっくり選んでいいですよ」

「あ、はい」

畏まってるな。一応、学年的には俺後輩なんだが。彼女は急いで自販機のボタンを押し、急いで飲み物を取り出し、急いで釣り銭を掻き出す。しかし慌て過ぎたのか、お釣りを取り零した。硬貨がそこら中

に散乱する。

「あー！」

「大丈夫ですか？」

「す、すみません」

俺も彼女も屈んで硬貨を拾う。集めた硬貨を彼女に手渡した。

「ありがとうございます」

「いえ、それとあんまり畏まらなくていいですよ。俺一年ですし」

「そ、そんなわけにはいきません。失礼な事をしてしまいましたし……」

「二度も謝ってもらったら、もういいですよ。流石に」

「そ、そう？」

「はい」

フランクな話し方が彼女の特徴だし、そっちの方が合ってるからというのが本当の理由なのだが。

「じゃ、じゃあ、そうしようかな？」

「そうしてください」

「こんな男もいるんだ……」

彼女から呟きが漏れた。普通は何か言った？ とか聞くのだろうが、俺はがつつり聞こえているのでそんなことはせずに聞き流す。彼女の男嫌いはそう簡単には直らない。でも、ほんの少しだけ信頼が芽生えたのかもしれない。

そこに、二匹の蜂が飛んできた。俺と彼女に一匹ずつ向かってくる。刺されると大変危険である。彼女は虫と心霊系が大の苦手。俺と同じである。

「うわー！ 蜂!!」

「ヤバッ！」

お互いに頭を下げるがそれでも襲い掛かってくる。彼女が刺されてはいけないと手で払う。それでも中々消えない。

彼女が一匹を払うと、その隙にもう一匹が顔に迫る。……さらに、もう一匹追加。

彼女が少しパニックになる。ついでに俺も。

「もう、走って逃げましょう」

「う、うん」

二人して覚悟を決めて走る。しかし、彼女は余りにも慌てていたため躓く。俺も慌てていたが、転んではいけないと咄嗟に支えるために腕を出す……。彼女は持ち前のバランス力で転ばず、付き出した俺の手は……。

「あっ」

「ッ!!!」

銀堂コハクとの思い出がフラッシュバックする。あの時もこんな感じだったな。いやいや、俺にはラツキースケベの性質でもあったのか？

柔らかく、なかなかの重圧。確か……。……。何故か、いつの間にか蜂は居なくなっていた。なんでだ？ 急に？ 彼女の目はゴミを見る目に戻っていた。

「ちよつと、優しい奴って思ってたらこれだよ……。これだから……。男は」

「じ、事故ですよ……」

「うるさい」

世界が反転した。彼女は俺の腕を掴んで背負い地面に叩きつける。俺も左手で地面を叩いて受け身を取る。しかし、痛い。

「……どさくさに紛れて触るなんて」

「だ、だって、転びそうでしたから……」

「肩を掴めば良かったじゃん」

「俺も慌てていたので……」

「信用できないな……。もしかして、僕だけじゃなく、二人にもセクハラしてない？ 適当な言い訳を言ってる」

心当たりしかない。や、ヤバイ。どうしよう。ここで再び鼻かんだちり紙に戻りたくねえ……。と言うか二人にした、胸とパンツがバレたら……。

「そ、そんなこと……」

「そう、じゃあ、二人に聞いてもいいよね？」

「え？ 聞いても何もないと思いますよ……」

「それでも二人の意見詳しく聞きたいよ。正直、この時点で警察だけど……昨日のこともあるし、二人にも話聞かないとね？」

「いや、でも……」

「それじゃあね。また放課後に」

彼女はスタスタと去って行った。放課後……ヤバい。二人にしたセクハラ的なのがバレたら、もしかして警察!?

四十二話 三対一

放課後が来てしまった……。本日の授業は何故かいつもより数段早く終わった気がする。帰りのホームルームも終わり席に座りながら項垂れていると、教室のドアが開いた。

「十六夜。萌黄が話したいことあるって」

ざわざわと教室内が騒ぎ出す。火原火蓮と黄川萌黄。この学内で三本の指に入る美女が自分の教室に顔を出す。この現象に慣れ始めている自分がいることに戦慄を禁じ得ない。

まだ、火原火蓮はセクハラ……。事故の事は知らないようだな。この後どうなるのか見当もつかない。ただ、恐ろしいことになることは確かだ。

「はい……。今行きます」

彼女達が待つドア付近までトボトボと歩いた。火原は笑顔だが、黄川の目には疑心が宿っている。そこに銀堂コハクも参戦してきた。

「ちよつと待ってください。十六夜君に用ってなんですか？」

「ああ、そう言えば萌黄はアンタにも用があるって」

「私にも？ ……用って何ですか？ 萌黄先輩？」

「ここじゃあ、あれだから一旦外に行かない？ あんまり大声で言う事でもないし……」

「まあ、良いですけど……。また、十六夜君に何か失礼な事を……。？」

「だ、ダイジョブだよ……。そ、その、ちよつと確認したいことがあるだけでそれを二人にも……。き、聞いてほしくて……」

銀堂は先日のお勘違い事件が再燃しないよう黄川に圧を掛ける。黄川は物凄くびくびくしながら、目を逸らして話を続けた。確かに、かなり怖い。

顔は凄く可愛いのだが、目の奥に深い闇を垣間見た気がした。本当に一瞬だから勘違いかもしれないが。

「落ち着きなさい。ここでは話させないんだから、とりあえず喫茶店にでも行かない？」

「そうですね。そこで問い詰めればいいだけですから」

「そ、そうだね。喫茶店に行こう……」

火原が止めてくれたから銀堂が一旦引いた。この後は喫茶店か……。



喫茶店に着いてしまった。火原火蓮と以前話してすぐに別れた喫茶店だ。

「いらっしやいませ。あー！ この間の！ 仲直りできたんですね！」

「ええ、まあ、一応そんな感じですかね……。あの、この間はお店の雰囲気悪くしてすみませんでした」

「十六夜じゃなく私が悪くしたんです。すみませんでした」

俺と火原、二人で謝罪する。あの時は気が動転していて謝れなかった。失礼な態度だったかもしれない。

「気にしないでいいですよ。仲直りできて良かったですね」

「はい、ありがとうございます」

「ありがとうございますー！」

以前の事を謝罪してから席に案内される。店内にいた数人の客は、美女三人に好奇の視線を向ける。

ハーレムとでも思われているのかな？ そんなことは一切ないんだが……。俺では全く釣り合いがとれない凄い人達なのだ。ハーレムなんて思い上がりは一切ない。

「じゃあ、私が十六夜の隣座るから二人はそっち側に座って」

「何言ってるんですか！ 仕方ないから私が一緒に座るんです！」

未だにツンデレが残っている銀堂コハク。可愛いな。いつものお嬢様的な感じが一番だが、偶にはこういうのも全然ありだ。火原火蓮のヤンデレも良かったのだが、ちよつと怖すぎた。

落ち着いた店内の雰囲気をごこれ以上騒がすのは他の客に迷惑かも……。

「ありだな」

「コーヒーが美味しい」

「美女の喧嘩とコーヒーってあうな」

あ、逆に満足してるんですね。でも、これ以上二人を喧嘩させるわ

けにもいかないので止めるのだが。

「ええつと、二人とも店内ですから落ち着きましょう」

「じゃあ、十六夜が決めなさいよ。私を選んだら、仕方ないから座ってあげてもいいわよ」

「そうです。決めてください。もし、私を選べば、し、仕方ないから隣に座ってあげます」

「……」

どうしよう。どっちを選んでも……敢えて、黄川萌黄を……。チラリと彼女の様子を伺う。

「ッ！」

彼女はブンブンと何度も頭を振った。そこに自分を巻き込むなど言う意思がよく伝わってきた。流石に彼女を巻き込むのはダメだな。逆に拗れそうだし。なら、どうすれば……。

「あの一、お冷持ってきました」

店員さんがお冷をテーブルに並べる。まだ座らなくて迷惑だったかもしれないな。

「二「ありがとうございます」」

「いえいえ」

店員さんが2膳の箸を握りこむ。そして、

「席が決まらないならくじで決めたらいいと思いますよ。ほら、ここに割りばしが四本あります。短いのと長いのでペアです。中々決まらないならこういうのもありますよ」

意外な助っ人だ。俺が決断できず困っているのを悟り、手を差し伸べてくれたのではないか？

「くじ引き……まあ、ずつとこのままって訳にもいかないわよね……
本当は十六夜にスパッと決めて欲しいけど……」

「本当は十六夜君にスパッと決めて欲しいところですが、十六夜君はこういう時は決めきれないですし……」

二人で訴えるような目線を俺に向ける。……この二人、実は仲がいいのか？

「はい、それじゃあどうぞ」

店員さんの手の中にある割りばしを四人全員で引く。結果は……、

「嘘……何で？」

「何でアンタと一緒になのよ！」

「それはこっちのセリフです！」

俺と黄川が短い割りばし、火原と銀堂が長い割りばしを引いた。とりあえず席につく。俺が窓際席で、隣の黄川が通路側、火原が俺の向かいで、銀堂がその隣という配置になった。

「とりあえず、注文しましょうか……」

「ちよつと、私が見てるじゃない！」

「私が見てるんです!!」

「……」

ツンデレーズがメニューの取り合い。黄川はメニューを眺めている。二つしかないため、共有するしかない。

「あ、パフェ」

「太るわよ」

「は？」

「あ？」

「太りませんよ、ちよつとくらい食べても。逆に貴方はもっと食べたほうがいいのでは？ まっさら体系なんですから？」

「うっさいわね……」

そう言うが早いか、火原は銀堂のわき腹を抓む。

「ちよ、ちよつと、何するんですか？」

「大分皮下脂肪がついてるみたいよ？ 豚さん？」

「あ？」

「は？」

收拾がつかない。

「俺、このブラックコーヒーにしますね！ 黄川先輩はどうします!？」

「え？ あ、じゃあ、ココアで……」

「それじゃあ、もういいですよね？ これ使ってください！」

メニューを渡す。これで一旦二人を分断できる。この二人を仲良

くさせたいとずっと思っているのだが、全く進展しない。

二人はそれぞれメニューを眺め始め、注文を決めたようなので店員さんを呼ぶ。

「ご注文はお決まりになりましたか？」

「僕はココアでお願いします」

「私はパフェでお願いします」

「私はオレンジジュースでお願いします」

「俺はブラックコーヒーでお願いします」

店員さんが注文をとり背を向ける。そうすると再び喧嘩になるわけで……、

「カロリーの過剰摂取」

「幼児体系」

「豚」

「ぺったん」

「もう、やめましょう!？」 他のお客さんも居るわけですし!」

「た、確かに!」

ようやく二人のスイッチが切れたようだ。

「他のお客さんの居る前でこんなことをするなんて、はしたないわよね」

「そうですね。迷惑ですし止めましょう」

周りの客たちは少し残念がっているが、俺のテーブルは落ち着きを取り戻した。

「そう言えば、萌黄。用って何?」

「確認したいことがあると言っていましたか?」

一息つく暇もなくイベントが進行する。さて、お願い神様、俺を助けてくれ。

「二人って、彼にエッチなこととかされたことない?」

「ええ!」

「きゅ、急になによ!」

「大事な事だから聞かせて欲しい」

二人は何て返すんだ……。

「な、ないですよ。私は……」

「私もないわ……」

よ、良かった。二人ともありがとう!! これで誤解は解けたよ!!
多分。

「そ、そうなんだ。……じゃあ、今日のあれも偶然の事故ってことなのかな……どうなんだろう……」

「事故ってなんですか?」

「私も気になる」

あ、なんか雲行きが怪しくなってきた……。

「ああ、うん、あのさ、今日、彼に触られたんだよね……」

「……………何を?」

「その、胸を……」

「ドウイウコト?」

二人揃って目のハイライトが消えた。

「えっと、わざとかわざとじゃないか僕には判断できないし。もしかしたら、二人もどさくさに紛れて痴漢とかされてないか心配になったから二人にいろいろ意見を聞こうと思ったんだけど……」

「ドウイウコト?」

黄川の話は全く入っていないのか。こちらを凝視する。机をくぐってこちらに來ると、二人は逃がさないと言わんばかりにそれぞれ肩を掴みグイッと顔を寄せた。

「じ、事故なん、で、す」

「ホントウニ?」

「ひゃ、ひゃい……」

「一から十まで全部聞かせていただきましようか? 火蓮先輩もそう思いますよね?」

「そうね。全部聞きたいわ……」

「ウソはつかないでくださいね?」

「もし、ついたら……」

「わ、分かっています!!」

一時間かけて何とか疑いを晴らした。蜂が襲ってきて偶然が重なり事故が起こってしまったことを、十回以上してようやく納得してくれた。ブラックコーヒーの味は分からなかった。



結局事故なんだろう。二人にはそんな行為に及んでいないようだし、何度も状況を説明する彼を見て、話を聞いているうちに、確かにその通りだと納得できなくもない。

火蓮ちゃんとコハクちゃんは仲が悪そうに見えて実は仲が良いのかも知れない。お互いに共感しあう仲間のように見える。僕とは違う。あの喫茶店で疎外感を感じた。

彼に好意を持っていた二人に、僕は共感はできない。

僕は他の女の子とはずれている。今日の事で自分がずれてるという思いが強くなった。ネット、噂に惑わされ現実と区別できない。僕は普通じゃない。背も高いし、偏見もある。考え方も体つきも他の人とは大きく――、

“ズレテイル”

寂しい……。このまま、僕は一人ぼっち？

いけない。あまり考えないようにしよう。これを考えしだすと歯止めがきかない。永遠に負のスパイラルだ。偶にふと考えることがあるが、毎回何も得るものはない。ただ、自分に負の印象を抱くだけ。今日はもう寝よう。



まったく十六夜君は……一体どんなラッキースケベですか？
ラッキースケベという言葉は最近覚えた。ライトノベルで使われる

単語だけど、まさか現実で起こると思ってもみなかった。

でも、良かった。誤解で。

もし誤解ではなかったら、どうなっていたか。私自身も想像ができない。まあ、十六夜君はそんなことをする人ではないと信じていたが……念のため疑っただけだ。

今日はもう寝ましようか。私はベッドに横になり目を閉じる。

目を開けると、制服を着て通学路を歩いていた。あれ？ さっきまで寝てたような気がするけど……。どこか体がフワフワする不思議な感覚だ。

「銀堂さん!!」

この声は十六夜君。すぐに分かった。

「十六夜君。おはようございます」

「おはようございます。もし良かったら、俺と学校行きませんか？」

い、十六夜君から誘ってくるなんて……久しぶりで若干緊張してしまふ。

「全然、良いですよ……」

「やった!!! それじゃあ、行きましよう!!」

彼は私の手を握った。えええええ!!? せ、積極的過ぎませんか!?

そのまま、二人で学校までの道を歩く。凄い恥ずかしい……。周りの人達も凄い見る。

学校に着いても手を離さなかった。教室に着いて、ようやく彼は手を離れた。

も、もう、何なんですか!?! いつもと違いすぎませんか!?! 嬉しいですけど! 嬉しいですけど!

彼は自らの席に戻って行き……。その時、急に景色が切り替わった。夕日に照らされた学校の屋上にいつの間にか私は立っていた。目の前には十六夜君が強い瞳を私に向けている。

「銀堂さん、俺と付き合ってください!」

ど、どないしたん!?!? 何これ!?! 夢みたい!!!

「は、はい。こちらこそ、よ、よろしく願います……」
つ、付き合うならやらないといけないことがある。

「あの、十六夜君。まずスマホのパスワードを教えて貰えますか？」

「良いですよ！ パスワードは0721です!!」

「ありがとうございます。後、明日からはお弁当を作ってくるので、食堂では食べないでくださいね？」

「はい！ はい！ はい！」

「後、他の女の子と話すのも控えてください。話すときは私に許可を取ってからというのを約束してください」

「はい！ はい！ はい！」

「それじゃあ、不束者ですがよろしく願います……」

「はい！ はい！ はい！ はい！ よろしく願います！」

やった!! と、特別な関係?! ミジンコ程に僅かだが付き合うための条件をつけてしまった。でも、十六夜君から付き合っただけでほしいと言ったわけだからなんの問題もない。十六夜君は……私の彼氏は急に私の目の前に来た。

「付き合ったので、キスしていいですか？」

「えええ!! 急すぎませんか!？」

「それじゃあ、早速」

「ちよつと、心の……」

彼は私を抱き寄せて唇を……。



ピピピピピピ
!!!!!!

私はベッドから飛び起きた。目覚まし時計の音が室内に鳴り響く。
ゆ、夢？

後三秒目覚ましが遅ければ……あのまま……。

そう考えると頬が熱くなる。本当はあれくらい十六夜君から来て欲しい。だって、いつも私から色々誘うけど恥ずかしいから。彼には

乙女心をもっと分かって欲しい。少し、頬を膨らませてしまう。
彼に対する僅かな不満だ。でも、あの夢は良い夢だった。

——いつか夢を現実に……。

四十三話 繋がり

昨日は厳しく説明を要求されたものの、黄川萌黄の勘違いを直すことができた。それは良かったのだが……。いくら何でも俺にラツキースケベ起こりすぎじゃないか？

もしかして、俺って『超能力者』？ この世界では野口夏子の『直感力』が『超能力』に該当するように『ラツキースケベ』も『超能力』に該当するんじゃないか？ 変な事を考えた。忘れよう。

中間テストの最終日まで後一週間と数日。もう余計な波風を立てないようにしたい。二度とラツキースケベは起こさない。

一人通学路を歩いていると、銀堂コハクが隣に来て挨拶をする。まだツインテールだった。いや、可愛いから最高なんだけどね？

「おはようございます。十六夜君」

「おはようございます」

「……」

「？」

彼女は何かを期待するようにジッと目を見た。え？ 何だろう？

「まあ、そうですね……そんな都合のいいことないですよね……」

不意に衝撃を感じ、視線が虚空を彷徨う。脇道から誰か飛び出したのか。相手は俺とぶつかった勢いで倒れた。あちらから来た感じがするが一応謝罪を……知り合いだった。

具体的には食パンを啜えて火原火蓮だ。

「ちよつと、どこ見て歩いてるのよ!!」

「あ、すみません」

「……それだけ？」

「慰謝料とかはちよつと……」

「いらないわよ。はあくまあ、そんな都合のいいことないわよね……」

俺は火原火蓮の手を取り起こすと三人で歩き始める。二人が喧嘩しそうになると上手くなだめながら……。



それは、放課後の銀堂コハクの一言から唐突に始まった。

「十六夜君。勉強会をしましょう」

「勉強会？」

「はい、もうすぐテストですよ。勉強はしておかないといけません」

「ああ、うん。どうしようかな……」

「しましょう！ 勉強会！ 仕方ないから私が教えてあげます！」

グイッと顔を覗き込んでくる。あ、可愛い。

「それには及ばないわ！」

「また、貴方ですか？」

火原火蓮が仁王立ちしていた。ツインテール美女二人である。

「私、テストは教科書一周すればほぼ満点取れるし天才だから私に任せなさい」

「私だって授業聞いてれば満点なんて余裕です」

そう、この二人学力は高い。と言うか『魔装少女』は全員滅茶苦茶勉強できる。最低でも八十五点という驚異的な成績を誇るのだ。

「貴方は二年生でしょう？ だったら一年のテスト事情に入って来ないでください」

「学年なんて関係なく、勉強できる方が教えたほうが良いに決まっているじゃない。その方が十六夜の為と思わない？」

「一理ありますが今回のテストの分野なら私の方ができます」

「いいえ、私の方ができるわ」

「け、喧嘩はダメですよ……」

二人の言い争いの間に入りつつ下駄箱に向かっていっていると、前を歩く黄川萌黄がこちらを一瞥して、すぐ目を逸らす。その目は物をねだる子供のようだ。寂しそうに肩を落とした姿はとても小さく見える。

……最近の出来事で疎外感を覚えたのかもしれない。このままではいけないだろう。彼女達の距離が離れていくことは勿論だが、黄川萌黄が孤独になってしまうのはもつとダメだ。と言うより俺が嫌だ。

どうする？ 何か気の利いたことを言いたいが……男の俺がどう

こう言っても響かないと思う。でも、この二人なら？ 運命を共にする彼女達なら何とかできるかもしれない。まず話す場を整えなくては……。

「勉強会やりましょう。黄川先輩を入れて四人で」

「え？ 四人ですか？」

「私は十六夜と二人でやりたいんだけど？」

「四人で!! やりましょう!! 俺の家で!!」

「え! 十六夜君の家で!」

「そ、そう!? ま、まあそれなら……」

「それじゃ、四人目を連れてきますね!!」

走る、追い越す、止まる、振り返る。そして、帰ろうとする彼女の前に通せん坊するように立ち塞がった。彼女は目を見開く。

「な、なに?」

「これから俺の家で勉強会やるんですけど是非来てください!!」

「わ、悪いけど予定が……」

「来てください!!」

「いや、予定が……」

「どんな予定ですか!」

「そ、そんな強気で来る?」

強気な誘いに彼女は少し狼狽えた。良心の呵責を感じるが、ここは押し切る。彼女は小心者である上に、今は俺に対して若干の負い目もあるはずだ。このまま攻めれば彼女は必ず折れる。

「それって、どんな予定ですか!」

「あ、えつと、ば、バイトがあつて……」

「終わるまで待ちます!」

「で、でも終わるのく、九時くらい……」

「では、勉強会は夜十時から泊まり込みで!」

「む、無理! 君男でしょ!! その家に泊るなんて無理!!」

「実は銀堂さんと火原先輩を俺の家に泊めようと思ってます」

「はあ!? ダメでしょ!? 若い男女が!」

「そのままエクスカリバーしようと思ってます」

「何!? エクスカリバーって!?!」

「あく、二人の好感度が高いからあつさりカリバーかな?」

「あつさりカリバー!? 良く分からないけどダメでしょ!? 良く分からないけど!?!」

「誰か止める人いないかな? このままだと二人がカリバーになるよ……誰か、止める人が……ハッ!」

「わ、わざとらしい……」

とりあえず俺の家に来てもらおう。彼女は一人きりで寂しいんだ。他の女の子と違うことの孤独を埋められるのは、俺ではない。男の俺では不快しか与えられない。ならば、無理を通してでも胸の内を晒せる人と触れ合わせる。

「良いんですか? あの二人が俺の魔の手に落ちても? 先輩が俺の家に来ないと……グフフフ」

「げ、下種……分かったよ。行くよ」

「よし、では行きましょう」

少し離れたところで待つて居る二人に勝ち誇った顔を見せる。

「と言うわけで四人で俺の家に向かいますよ」

ぐずる黄川萌黄を引きずって行く。



よくある二階建ての一軒家。明るい黄色と穏やかな茶色の外壁。

俺の自宅である。さて、三人を家に入れる前に――

「ちよつと、待つててください。五分、いや十分」

「分かりました」

「いいわよ」

「……」

大急ぎで部屋の片づけを敢行する。あんまり散らかっているわけではないが清潔感のある部屋の方がいいだろう。

エロ本は戸棚に隠して……多少のごみを拾って、消臭スプレーをして……よし、完璧。

玄関を開けて三人を呼び込む。

「お待たせしました。どうぞ、普通の家ですが……」

「は、はい。お邪魔します……」

「ここが、十六夜の家……」

「……」

黄川萌黄以外の二人は緊張と好奇の入り交じった面持ちでキョロキョロと観察する。黄川萌黄の複雑な表情からは上手く心境を読み取れない。

三人をリビングに入れる。ダイニングテーブル、ソファ、テレビ。あまり面白みのない一般的な部屋だ。

「あっ！ 俺お菓子買ってくるの忘れてました。買ってきます！」

「いいわよ。気使わなくて」

「そうですよ」

「いえ、俺が食べたいので三人でちょっと待っててください」

俺はリビングから出ていった。

頼む。



僕たちはダイニングテーブルの席について彼を帰りを待った。僕の隣に火蓮ちゃん。向かいにはコハクちゃん。

押しに押され、つい来てしまった。彼女達にエロいことをすると脅されたけど、おそらく嘘だろう。

そして、僕の嘘もバレていた。本当は来たくなかったけど、色々粗相した負い目もあり実質的に選択権はなかった。正直、もう帰りたい。近くにいるはずの二人が遠く感じるから。それがどうしようもなく寂しい。

「なんか落ち着かないわね……」

「ええ、そわそわします」

「萌黄はどう？」

「何とも言えないかな……」

「そう？ つていうかアンタ大丈夫？ 何か元気が無いように見える

けど?」

「確かにそうですね。萌黄先輩大丈夫ですか?」

「うん……大丈夫かな?」

孤独が辛いことをうまく隠せない。違和感を誤魔化しきれなかったみたいだ。彼女達には秘めたまままでいたかったが、この空間はひどく居づらい。

「……萌黄どうしたの?」

「何でもないよ?」

「……本当に?」

「うん」

「でも……」

二人が心配してくれている。気分が悪いと言って帰ろうかな?ここに居ても辛いだけだし……。

仮病で帰ってしまったおうと決めた瞬間、火蓮ちゃんのスマホが鳴った。彼女はスマホをジッと眺めた。何が届いたのか良く分からないけど、僕はもう帰ろう。

「あの、体調が悪いから僕は帰ろうかな……」

「そうですか……送って行きましょうか?」

「ありがとうね。コハクちゃん。でも、大丈夫だよ」

僕は席を立つ。この場から早く離れたいという思いに支配されていた。でも、ここを去っても寂しさは埋まらない。ここから離れても、離れなくても一人。

取り繕った笑顔で部屋のドアに向かって……

「待ちなさい」

火蓮ちゃんだ。

「萌黄、座って」

「ごめん、体調が悪いから今日はもう帰るね……」

「座って」

「いや……でも……」

「少しだけだから、座って」

彼女の強い瞳に僕は逃げるといふ選択肢を失った。もう一度席に腰を下ろす。彼女と目が交差する。

「何か、悩みとかない？」

「え？」

いきなりどうしたのだろう。唐突に始まるお悩み相談。でも、彼女はふざけているわけではなく真面目だった。

本当は……言ってしまいたい。

「何かあるんじゃない？」

「えっと、特にないかな……」

嘘。あるんだ。本当は……。でも、言えない。

「本当に？」

「うん、無いよ」

言って、もし、それが肯定されたら……。悩みなら常にあった。

“ズレ”

他の女の子との違い。分かっている。でも、言われたくない。彼女に『ズレ』を肯定されたら、壊れてしまうかもしれない。

何より、一番怖いのは

“拒絶”

されること。

独りにはなりたくない。離れているけど、これ以上離れたくない。さらに孤独が加速するのは耐えられない。

「そう……それで悩みは何なの？」

「え？」

「それだけ辛そうな顔してたら分かるわよ」

「だ、だから無いって……」

次の瞬間、彼女は僕の頬を両手でつかみグイと顔を無理やり近づけた。

「あるんでしょ？」

「いや、無い、よ」

「言わないとこのままキスするわよ」

「ええ!？」

「しかも、舌入れてかなりディーブな凄いやつ」

「いきなりそんなこと言われてもな……」

これって、彼が無理やり悩みを打ち明けさせたやり方と同じだ。彼女はジッと目を見続けた。彼女の視線は逃がさないと言わんばかり。

「言って。言うまでずっとこのままよ」

「あはは、ないんだけどな……」

「そう、だったらこのままね」

「アハハ、困ったな」

彼女はいつまでもそのままだった。すぐに解放してくれると思っていた。でも、ずっとそのまま。

一時間。

二時間。

彼女は強い瞳をずっと僕に向け続けた。僕も逸らすことができず、お互いに瞬きすらできなかつた。その結果、二人とも涙が溢れてくる。それでも彼女はずっと、ずっと僕を見続けた。コハクちゃんも多分ずっと見ていると思う。見ていないから分からないが……。

「そ、そろそろ帰してくれない?」

「無理よ。言うまでずっとこのまま」

「何でそこまでするの?」

「色々あるけど一番は萌黄の辛さが分かるから……ほっとけないの」

「どういう事?」

「一昨日話したけど、私は十六夜に悩みを相談して解決したって言うたでしょ? その悩みって何年も前からずっと抱えてた。誰にも言えず不安とか焦り、恐怖を抱えるってすごく辛いと思う。私がそれを感じてたから……今日の萌黄を見てたら自分を思い出した。だから、ほっとけない」

言ってもいいの? 言ってもいいのかな? どうなのかな? 肯

定されないかな?

ズレテイルことを……。

「どんな悩みを持っているか分からない。でも、言わないと始まらないわ。怖いと思う。でも、そこから一歩踏み出さないとずっとこのまま」

「……嫌だよ、怖いよ。このままでいいよ。僕は……」

「分かるわ。言っても今以上に辛い結果になりそうで、踏み出したくない気持ちは。でも信じて。私を。どんな悩みも孤独も受け入れるから」

「本当に？」

「うん」

「絶対に？」

「約束する」

怖い、怖い、怖い。でも、彼女になら言ってもいいのかな？　こんな僕でも受け入れてくれるのかな？

言ってもいいのかな？　彼女はいつまでもずっと僕を見続けてくれた。

「僕は背が……高い、そして男に対して、偏見を持つてる……」

「……でも、他の女の子はこんな……背が高くないし、僕みたいな考え方もしていない。だから、その、他の女の子と違う別の存在のような気がして……それが寂しくて、孤独で……辛かった……」

涙が少しずつ溢れてくる。

「僕って “ズレテイル” かな？」

「そんなことないわ。コハクもそう思うでしょ？」

「はい……」

コハクちゃんも肯定してくれた。あれ？　コハクちゃんも泣いている。

「人ですから差があるのは当たり前です。体も考え方もこの世界に同じ人は一人としていないでしょう。皆違って皆良いと言う奴です。萌黄先輩は全く、これっぽちもズレてはいません。私が保証します」

「勿論、私もね」

「ありがとう……」

二人からの言葉は想像以上に響いて孤独を埋めてくれた。暖かい気持ち溢れてくる。

「これからは寂しいときは言いなさい。離れても、電話くらいならしてあげるから」

「電話私もしますよ。萌黄先輩。連絡先交換しましょう」
「うん！」

良い雰囲気になり、全員が泣いている。

「コハクも泣いてるのね」

「二人が瞬きもしないで見つめ合っているので、私もしようと思って一緒にの事をして、一緒に泣いて。それが嬉しいんだ。

その時、どこからかすすり泣く声が聞こえてきた。

「ヒック、グスツ……」

「あれ、この声って？ 十六夜君？」

「やっぱり居たのね……」

火蓮ちゃんがリビングのドアを開けると、顔面を涙と鼻水でぐちよぐちよにした彼が露わになった。

「十六夜、買い物に行っただんじゃなかったの？」

「ヒツグ、し、心配でええええええええ、よ、様子見てたらあああああ、感動的なあああ展開なつてええええええええ」

「はいはい、ありがとね。十六夜も心配のメール送ってくれて……」

メール？ どういう事だろう？

「火蓮ちゃん、メールって？」

「十六夜が萌黄の様子がおかしいから相談に乗ってあげてほしいって。自分は男だから不快にさせてしまうから私に頼んできたの」

「そう、なんだ」

「そうよ、十六夜にもありがとって言ってあげて」

顔がぐちやぐちやの彼。そうか、彼も心配してくれていたのか。彼はやっぱり今までに会った男とは違うのかもしれない。

「ありがとう」

「いえええええええええ、ダイヨウぶですえつええええええええ」

「十六夜、言語がとんでもないことになってるわよ」

「十六夜君は本当に優しいんですね」

「二人が言う “ さすいぎ ” って言うのがちよつと分かった気がするよ」

この場に居る全員が泣いている。嬉しい時にはあまり泣かない。

——でも、この雰囲気はどうしようもなく気に入ってしまった。

四十四話 お泊まり

「エツグ……ヒツグ……うああああつああああつああああつあああああ
ああ!!!」

「男の子でしょ。もう泣き止みなさい」

「十六夜君、ちり紙です」

「あじ、がどう、ごじやいあまあうあす」

火蓮ちゃんが頭を撫で、コハクちゃんがちり紙を差しだす。彼はちり紙を受け取ると鼻をかむ。かれこれ一時間以上泣きっぱなしだ。えっと……滅茶苦茶良い人っていうことで良いのかな？ きつとさうなのだろう。

僕のことなのに僕より泣いて僕をよりも僕を心配してくれている。こんな男に会ったことは今までなかった。

今までにない男である彼に、少し興味が湧いた。

その後三十分して彼はようやく泣き止んだ。

◆◆

「す、すいません。俺が結局一番泣いちやつて……」

「いいわよ、それだけ優しいってことなんだから」

「そうです、そこが十六夜君の魅力です」

「僕の為に泣いてくれたんだから謝ることはないよ」

ち、ちくしよう！ 恥ずかしいじゃないか!! 鼻水垂れ流して号泣って!!

あんな感動的な場面を見せられたら泣いちまうよ!!

火原火蓮と銀堂コハクの真つすぐな性格の分かる素晴らしい出来事だった。やつぱりかけえな！ おい！

しかし、恥ずかしいことには変わりない。俺の方が精神年齢は上なの……。火原火蓮に頭なでなでされて、銀堂コハクにちり紙渡してもらって……お得だな。最高だな。特に頭なでなで最高だな。流れでもらったが母性溢れる安心感があつた。加えて彼女にしても

らった事が光栄で素晴らしい経験で感動してまた感極まってしまうというループ。

子供でもあそこまで泣かない。黒歴史だな……最近、黒歴史がドンドン増えてるような……。

まあ、黄川萌黄が寂しくなくなったなら良かったんだけど……。

『ストーリー』では、黄川萌黄が孤独を告白するのは正月。その頃には『魔装少女』として戦う内に仲間意識が強くなり、自分から告白するのだ。そこで、銀堂コハク、火原火蓮、四人目も悩みや過去を打ち明け絆が深まる。

突っ走りすぎてかなり前倒しになってしまったが、まあ、大丈夫だろう。絆とか親密度はいくらあっても困らない。

「あ、大分外が暗くなってますね」

「そうね」

「そうですね」

「そうだね」

夜道に美女三人を解き放つというのは、どうも心配だ。全員を自宅に送ることはできないし。俺が悩んでいると……

「十六夜君。……夜道を一人で帰るのは危ないので泊めてくれませんか？」

と、泊めてほしいだ!!!!!! う、嘘だろ……。こんな美女を家に泊めるだって!! ど、どうしましょう!?

「はあ、何言ってるのよ!?!」

「コハクちゃん、若い男女が一つ屋根の下はダメじゃないかな?」

「銀堂さん、流石に、それは……」

「夜道は危ないです。こんな時間に私を夜道に放り込むつもりですか?」

「その言い方は……」

そんな言い方をされると反論できない。しかし、泊めるのも……ダメじゃないか? 万が一の間違いがあれば……。

「泊めてください……」

「うっ、で、でも」

媚びるような声は艶やかだ。瞳は少し揺れていた。そ、そんな目で言われたら……。しかし、泊めないぞ、俺は!!

「もしかしたら、また変な人に付きまといられるかもしれない……。私、怖いです……」

「うぐぐぐ、そ、そうですね……」

「騙されないで! 十六夜! しっかりして!」

「コハクちゃんって演技派なんだね……」

「でも、怖いって……言ってますし……どうすれば……」

以前の事が思い出されて過剰に恐怖心が湧くのも仕方ない。一人で帰すのはダメだろう。嘘という可能性もあるが関係ない。この雰囲気、彼女の彼女に言われたら何とかする、という選択肢しかないのだ。しかし、どうするのが正解なのか……。

「だったら、タクシーとか呼べばいいじゃない! 何なら私のパパにお願いして家まで二人とも車で送ってあげるわよ!!」

「チツ、余計な事を……」

そ、そうか、うっかりしていた。彼女のために何かしたくても、家に泊めるのはダメだよ……。他にも手段はあったんだな。

「十六夜君……」

そんな甘えた声と目はヤバいって……。だが、も、もうその手は食わないぞ……。ハッキリと断ってやる。

「銀堂さん、ごめんなさ……」

「十六夜君。実は最近隣の部屋から変な音がして……。私、怖いです……」

「……うぐぐぐ、しかし、あ、いや、でも……」

「だから、しっかりして!!! こんなの秒でわかる嘘じゃない!!」

「コハクちゃんって結構あざといんだね……」

確かに嘘かもしれない。その可能性があるのは勿論分かっている。しかし、もしかしたら本当かもしれないという可能性もなくはない。それで彼女が怖がっているなら何とかしたい。しかし、泊めるのは……。

「ウソって言う証拠はあるんですか？」

「うぐ、だ、だったら私の家泊めてあげるわよ」

「それは一番ないです」

「はあ!? 失礼にもほどがあるんだけど!？」

「得体のしれない人の家には泊まるわけにいかないという常識的判断です」

「誰が得体知れないって!? だったら私は十六夜の家に得体のしれない奴を置いてはおけないわ。十六夜を守るために私も泊まる!？」

「何言ってるんですか!? ダメですよ!？」

「得体のしれない奴が泊まるから仕方ないわね。こればかりは!」

二人がギャーギャー言い争う。先ほどまでの強い絆は何処へ行っ
てしまったのだろうか? ずっとあの感じていてほしかったんだが
……。

「僕は帰ろうかな。お邪魔だろうし……」

「お邪魔ではないですが大丈夫ですか? 夜道は危ないですよ?」

「……ありがとう、大丈夫だよ」

「そうですか……」

何ならタクシーを呼んであげよう。お金は俺が出してもいい。黄
川萌黄はリビングのドアに向って行く。そしてドアノブに手を――
「どうせ、怖いなんて嘘なんでしょう!？」 隣の部屋から変な音って言
うのも絶対嘘!」

「嘘じゃないです! 最近この辺りは幽霊が出るらしいんですよ!!
それも怖いんですよ!!」

ピタツと彼女のドアノブを回す手が止まった。そのまま数秒フ
リーズする。

「嘘つくんじゃないわよ!!」

「本当です!! とんでもない幽霊がこの町のあちこちに!!」

「聞いたことないわ!!」

二人の怒声が響き渡る中、黄川萌黄がドアの方に向いていた体をこ

ちららに向けなおした。そして、蒼い顔で苦笑いして告げた。

「ぼ、僕も泊ろうかな?」

「はああああ!?!」

「ほら、やっぱりこの時期のこの時間は女の子は外に出てはいけな
いって言う条例があるし……」

「ないわよ」

「そ、それじゃあ……あ! それにこの町には女の子は外に出てはい
けないって言う古来からの習わしもあるし……」

「聞いたことないですよ」

「と、とにかく二人が泊まるなら僕も泊まる。ほら、あれだから……そ
う!」

若い男女が一つ屋根の下はダメだよ。風紀があれだから! 間違
いが起きたら大変だし、風紀があれだから! 万が一に備えて風紀を
僕は守る!」

「萌黄先輩って風紀凄く気にしますね……風紀委員なのですか?」

「え? あ、えつと……図書委員です……」

幽霊が怖いんだろう。黄川萌黄は虫と幽霊が苦手だという設定だ
からな。普段は一切そういうことを考えないようにしているが、一度
考えるとしばらく色んなものに怯えてしまっただよな。怖がるのも
仕方ない。

「と、とにかく二人の内どちらかでも泊まるなら僕も泊まる!! け、決
定事項だから!!」

「も、萌黄まで……」

「私の計画が……」

もしかして三人がと、泊まるのか? 夢みたいな展開だがこれは
……良いのかな? 超美人であり、『魔装少女』の初期メンバーの三人
が俺の家に……光栄だけどこれでいいのか?

倫理的には……でも銀堂コハクは怖いって言ってるし、黄川萌黄も
一人暮らしたから家に帰ったら一人で怖いだろうし、ここで火原火蓮
だけ泊まるのはダメって言うのも不公平だ。えつと、どうするのが正
解なんだ……?」

「ううつ……仕方ないですね。三人で泊まりましょう」

「そうね……それでいいわ」

「うん、そうだね。良かった四人も居れば怖くな……」

色々悩まざるを得ない。一体何が正解なのか、俺には分からないぞ……。

「そういうわけですので十六夜君。お世話になります」

「よろしく、十六夜」

「あ、その、よろしく……」

「えっと、その……」

考えがまとまらず、まだ答えられない。

「いいですよね？」

「いいわよね？」

「いいかな？」

「あ、どうぞ。むさくるしい所ですが……」

この三人に言われたら泊めるしかないな。悩みとかは吹き飛んだ。まあ、手を出さなければ問題ないし。これで絆が深まれば尚良いから泊めてもいいよね？ 学校の生徒とかにはバレないように、いつもより早く家を出て、それから……。

色々考えたが、俺は賢者の如く達観していればいい、ということはあるんだ。



四十五話 お泊まり2

『魔装少女』の三人を家に泊めるといふファンであれば夢のまた夢の様な展開になった。緊張しすぎてソワソワが止まらない。

「夕食はどうしましょう?」

「私が作るわよ」

「あ、僕も手伝うよ」

三人が夕食の相談をしている。時刻は六時三十分を過ぎている。大分お腹が空いてきた。

「火蓮先輩は無視するとして萌黄先輩はどのくらいお料理できますか?」

「ちよ、無視は酷くない?」

「僕は一通りできるよ」

「それは頼もしいですね。二人で協力して作りましょう」

「私も居るわよ!」

「火蓮先輩は料理が得意では無かったと思いますが……」

「フッフ、あれから特訓に特訓を重ねてカレーが作れるようになったのよ!!」

どうだと言わんばかりに胸を張りドヤ顔で宣言する。銀堂コハクは言葉を詰まらせた。

「そ、そうですね……意外ですね。カレーが作れるようになってたんですか……」
「フッフ。言ったでしょ? 日々進歩するつて?」

「でしたら三人で作りますか?」

夕食を三人で作ることが決まり、彼女達は互いに頷き合う。何となく贅沢だろうか? 『魔装少女』の初期メンバー三人のスペシャル料理。いくら金を積んでも足りないくらいに価値がある。

「十六夜君、何か食べたいものはありますか?」

「そうですね。何でもいいですかね?」

ポテトチップの海苔塩味をご飯に混ぜてマヨネーズを入れたものでも、彼女達の料理なら五百万円出してでも喜んで食べるだろう。端

的に言うと、どんなものでもありがたい。

「何でもいいが一番困るんですよ?」

「そ、そうですか?」

た、確かにそうだな。三人がリクエストした料理を振る舞ってくれるなんて、俺って幸運だな。

「では、カレーでお願いします」

「十六夜君、いつもカレー食べてませんか?」

「確かに十六夜はいつもカレー食べてるわね」

「僕が観察してた時もずっとカレーだった」

「いえ、偶にハヤシライスとかシチュー食べてますよ?」

カレー好きは否定はしないが、毎日カレーを食べてるといいうわけじゃない。

「同じような物じゃないですか。十六夜君栄養のバランスを考えてください」

「あ、はい」

「全く……家では普段何を食べてるんですか?」

「まあ、色々ですかね? から揚げとか春巻きとか……」

「……ちよつと、失礼します」

何を感じ取ったのか、銀堂コハクが冷蔵庫の中を覗き込む。ドアポケットにはケチャップやマヨネーズなどの調味料が並び。内棚には麦茶と水のボトルが幅を利かせている。

「……」

次に野菜室を開く。付け合わせ野菜としてキャベツの千切りとキュウリを保存してある。俺はあんまり野菜を食べないから、空間にずいぶんと余裕がある。

最後に冷凍室を開く。こちらには冷凍食品がギッシリと詰まっていた。冷蔵庫はスリで冷凍室はギッシリの方が効率が良いらしい。銀堂コハクはジツと観察していた。

「……」

彼女は目を閉じて空を仰いぐ。それから俺をジツと見た。

「十六夜君。もっと健康に気を遣いましょう」

「え?」

「野菜が全然入っていません。上は多少の調味料とウインナー、ベーコンといった加工食品。下は冷凍食品のオンパレード。食べるのが悪いというわけではありませんが、おそらく十六夜君はこれしか食べていないのでは?」

「そ、そうです」

「加工食品ばかり食べていると体の健康状態が崩れます。もっと、バランスよく手作り料理も食べないといけません」

彼女以外の二人も同意を示した。

「そうね、十六夜もつと気を遣わないと……まあ、私はパパにバランスのいい手作り料理を作ってもらってるだけだけど……」

「コハクちゃんの言うとおりだよ。加工食品の食べ過ぎは良くないね」

火原火蓮は後半の言葉をモニョモニョと濁したが、二人とも心配してくれていることは伝わった。俺は一人暮らしで料理もあまりしないから、簡単に食べられる食品に必然的に手を出すことになる。

「今日は私が献立を立てます。しかし、この食材ではバランスの良い食事は作れません。作り置きもしたので現在食材が足りません」

「そ、そうですか」

「今からスーパーに行つて食材を買いましょう」

「マジですか? もうすぐ七時ですが……」

「……食材を買いましょう」

「あ、はい」

ゆ、幽霊とかが怖いんじゃないのか?

「あの、幽霊とかは……」

「四人も居れば寄つてこないでしょう。さあ、早い所スーパーに行きましよう」

「そうですか」

彼女の迫力に気圧されてスーパーで買い出しすることになった。



買い物客は多くなかった。客層は、仕事帰りの社会人が多く見受けられる。そんな中、俺達は野菜売り場を物色していた。流石にこの時間に高校生はいない。このメンバーを見られたらまた変な噂が立つところだ。俺の噂については諦めているが、彼女たちにまで火の粉が降りかかるのは避けたい。

「この野菜は色が悪いですね」

「コハクちゃんこっちのいい感じじゃない？」

「そうですね、それにしましょう」

野菜を見る目のある二人が次々と野菜をカートに乗せていく。俺と火原火蓮は何もできず置いてけぼりだ。

「……やっぱり、私って女子力低い？」

「そんなことは無いですよ」

「そうよね……低くないわよね……」

彼女は口惜しそうにそう告げて、俺と一緒に二人の後についていく。手持ちぶさたな時間が続く。二人は今度は肉を見てテキパキとカゴに入れる。その様子を見た火原火蓮はがつくり肩を落とした。

「うう、二人について行けない……」

「先輩、気にしないでください」

「で、でも」

「前にも言いましたがやっぱり萌えですよ。先輩の料理下手とかを気にしてモンモンする感じがとんでもない萌えなんです。これはあの二人には出来ない先輩だけの特別な魅力です」

「そ、そうだったわね。うっかり自分の属性の利点を見失ってたわ……ここで多少のリードを見せられても他で挽回できるわよね。ありがとう十六夜」

「いえいえ、自分の属性を分かってもらえて良かったです」

属性とかメタ発言だが、彼女なら問題ないだろう。彼女は機嫌良さそうに俺と二人の後をつける。その時、お菓子コーナーから一人の男がヌツと現れた。

「あ、六道先生お疲れ様です」

「ああ、黒田……と二年の火原か……」

「あ、はい。ど、どうも」

火原火蓮は体をこわばらせて目をキョロキョロさせた。初対面では六道先生相手に緊張しない方が難しい。彼女はシユンと小さくなり俺の後ろに隠れた。

「黒田、ネットの事だが閉鎖になったそうだ」

「あ、そうなんですか」

「犯人は分からないが今度学校側からのお便りを全学級に配布する。とりあえずはそれで様子を見ることになる」

「色々すみません」

「気にするな。お前が謝る必要はない」

い や、貫禄あるな……しかし、彼のカゴの中にはシュークリーム十個、プリン十個、生クリーム、アイス、ホットケーキミックス。見た目に反して可愛らしい。彼は甘党なことは『ストーリー』にも記載されていた。この事実を知らなければ、本人の見た目とカゴの中身のギャップに驚きを抑えることはできないだろう。

「それでは俺は帰るぞ。また明日学校でな」

「はい、さようなら」

「さ、さようなら」

火原火蓮はずつと俺の後ろで縮こまっていた。六道先生が見えなくなるると、彼女はいつもの調子を取り戻す。

「あの人、甘党なのね。何というか意外ね……」

「ああ、確かに初見だとそう思うでしょうね」

「何その言い方？」

「気にしないでください。ちよつとミスりました。それより二人を追いましょう」

「ああ、うん」

話してるうちに二人との距離が開いてしまった。俺達は急いで彼女達を追いかける。



「ああ!! もう、危ないですよ!!」

「うっさいわね!!」

「手が切れないか心配なんです!! 包丁返してください!!」

「出来るから!!」

「お、落ち着いて……二人とも危ないよ」

夕食のメインディッシュはトマト煮込みのロールキャベツらしい。他には、きんぴらごぼう、ヒジキ、チヂミを作ると言っていた。ソファアから眺めると、三人の立ち姿は絵になるな。

出来るまで何も言わず座っていてくれと告げられている。料理の出来が楽しみだ。……喧嘩している二人を止めなくていいのだろうか。

「だったら私が手を抑えて教えますから暴れないでください。手が切れたら大変ですから」

「え、あ、そう? じゃ、じゃあお願いしようかな?」

「はあー、本当はやりたくないのですが怪我されても困りますから仕方なくやるんですよ? それに、十六夜君の家のキッチンを貴方の血で汚すわけにはいけないですから」

「あ、うん、サンキュー……」

「当たり前ですが猫の手にしてください。知ってると思いますがニンジンのは固いですから押すように切るんです。こんな感じに……」

「……そう」
「感触を覚えてください。貴方の包丁使いは危なっかしいですから」
「うっ! パパにも言われた……」

心配する必要はなかったかな。銀堂コハクは後ろに回り両方の手を添えて教えている。

ニンジンを切り終わると、豚肉とニラを切って行く。暫くすると全ての食材を二人は切り終えた。黄川萌黄はその間にトマト缶を使ってトマト煮を作っていた。

「今度はキャベツにタネを包みます。手伝ってください」

「うん……ありがとうね?」

「お礼を言われるすじあいはありません。貴方の為ではなく十六夜君

に迷惑をかけないためにやっただけです」

「そう……だとしても勉強になったありがとう」

「……包み方を教えるのでよく見ておいてください」

お？ ここに来て一気に二人の距離が縮まったんじゃないか？

最近よくギスギスした雰囲気になったが、何だかんだ二人の距離が縮んでるのかもな……。

「こうです」

「こう？」

「合ってます。その感じで包んでください」

「おけ」



テーブルに料理が並び、いい匂いが漂ってくる。トマト煮のロールキャベツ、きんぴらごぼう、豚肉の入ったチヂミ、ヒジキ、お味噌汁、白米。滅茶苦茶豪華じゃないか。

「美味しそうですね……皆さんありがとうございます」

「気にしないでください。お泊まりさせていただくのでこれくらい当然です」

「そうよ、気にしないでいいわよ」

「二人の言うとおりだね」

早速頂こう。

「食べていいですか？」

「召し上がれ」

「頂きます」

ロールキャベツにかぶりつく。トマトの酸味と溢れる肉汁がたまらない。

「うめえ」

「それは良かったです」

「そうね」

「そうだね」

「味付けは萌黄先輩なんですよ」

「凄く美味しいです」

「お口にあったようだなによりだよ」

テレビ映した方が良いかな？ 会話とかも増えるし。

「何かみたいの有りますか？」

「いえ、特には……」

「私もないけど」

とりあえずテレビをつける。おどろおどろしい映像が流れる。

『都市伝説シリーズ』

「夏子さんが良く面白いつて言ってる番組ですね」

銀堂コハクが番組を見て呟く。俺はあんまりこういうの好きではない。彼女が見たいならこのままでも……と思つたが、黄川萌黄は苦手だったな。怖さに悶えるシーンは可愛いくて萌える。彼女の萌シーンを見たいという気持ちもあるが、……嫌がつているのを無理強いすることもない。

「あ、すいません。見たいつて言ってるようなものですね……でもこういうのは苦手な方がいると思うので他の番組にしましょう」

「私は気にしないわよ」

「あ、その、ぼ、僕も気にしないよ……」

嘘だな。俺も苦手だし、ここは一肌脱ぐか……。

「すいません。俺こういうの苦手で……」

「そうなんですか!! すみません、すぐに他の番組にしてください!」

「可愛いところもあるのね、十六夜」

「アハハ、苦手なら仕方ないね! さっさと回して、回して!」

チャンネルを回してトークショーを映す。それを見ながら三人と夕食を共にした。世界一有意義な時間だった。



お風呂が沸いた。三人を先に入れるべきだろう。パジャマは俺の母のものを貸す。

「お先にどうぞ」

「しかし、一番風呂は十六夜君の方が……」

「お客様ですからお先にどうぞ」

「そうですか？ ではお先に失礼します」

「悪いわね」

男が入った風呂は抵抗あるだろう。当然の判断だ。

「悪いね。寝巻まで貸して貰って……」

「黄川先輩もあまり恩を感じなくていいんですよ？ これくらい」

「僕の場合は特に色々あったわけだし」

「それくらい大したことではないのですから。それよりお風呂どうぞ」

「ありがとうね」

三人が風呂場に入った。『魔装少女』の入浴シーンでは、黄川が暴走して抱き着いたり触りまくったりするのを火原が止める。今回はどうなんだろうな……。



「ちよつと、アンタ……大きすぎない？」

私はつい声に出してしまった。私より一つ下のくせに生意気なほど大きい。いや、私より大きいのは分かってはいたが、流石にこの年でこの大きさは反則じゃないか？

学校指定のワイシャツを脱ぎ露わになった彼女の下着姿。白いブラを使っているが問題はそこに収められているとんでもない兵器。谷間の線が長い事、長い事。

「まあ、そうかもしれないですね……」

「コハクちゃんってF？」

「いえ、Eです。でも、最近このブラもきつくなってきました」

「ほぼFなんだね……何というか……触っていいかい？」

「そ、それはちよつと……」

「一回だけ。ほんのちよこつとでいいから……」

萌黄が親指と人差し指で少しだけとアピールする。そういう萌黄は黄いろの下着をつけている。こ、こいつも中々大きい。せ、線が結構長い……。

「ええ？ ……本当にちよこつとだけなら。まあ、良いですけど……」
「それじゃあ、失礼して」

萌黄がコハクの手で掴んだ。その後、驚愕の顔をする……。

「何……これ……やわっこくて、ほんのりあつたかくて……大きい餅を持つてるみたい……」

何度も掴んだり離したりを繰り返す。そ、そんなに凄いな……。

「あ、あの、もういいですよね？」

「……」

「あの、返事を……」

「！」

萌黄は今度は両手で揉み始めた。たわわを揉みしだく。

「んあつ！ あ、ん！」

「こ、これはしゅごい、しゅごいよ」

「話が、ちが、んっ！」

「止めなさい！」

ぱちんと萌黄の頭を叩く。流石にこれはやりすぎだと思う。止めなくてはいけない。

「少しって言ったのに、話が、違います……」

「ご、ごめん。つい……」

コハクは力なく膝を床に着けるも、両腕を交差させて上半身だけは守る。萌黄は素直に謝罪したが、目線は名残惜しげに胸元に残している。

揉んでるの見て確かに柔らかさうだと思った。指が肌に沈んでしまいかと錯覚したほど……。

「もう、変態さんは嫌いです」

「うう、ごめん。でも、何かコハクちゃんに変態って言われてもあんまり不快感はないのが不思議……」

「その辺にしときなさい。脱衣所で騒いでないで早くお風呂に入りましょう。十六夜が後に控えてるんだから」

私がそう言うと、二人ともいそいそと着衣に手をかけた。



バスタオルを上半身に巻いて私達は十六夜の家の方ろに入る。浴槽の蓋を取ると湯気が立ち上り室内の温度が少し上がったような気がする。

「ねえ、コハクちゃん、もう一回だけ、もう一回だけだから。ね？」
「嫌です」

「萌黄、その辺にしときなさい」

「でも、凄いなだよ？ 触り心地が？ もう、虜になったちやう感じなんだ」

「そ、そんなに凄いの？」

と、虜？ ちよつと気になるわね……女の萌黄でもこんなになるってことは相当なんだろう。男だったら一体どうなるんだろう？

その時、十六夜の顔が浮かんだ。そして、とんでもないイメージも。

『あん♡ 十六夜君激し過ぎます♡』

『我慢できないよ。はあ、はあ』

『狼さんになっちゃいましたね♡』

『うう、ぎ、銀堂さん』

いや、そんなことはないだろうけど、起こるはずないだろうけど……け、研究の為に……。

「ちよつと、失礼するわね」

私は彼女の胸に手を伸ばす。ガツと掴むと……頭を鈍器で殴られたくらいに衝撃だった。私も自分のを触るときがあるが比べ物にならない。餅だ。これは餅だ。

しかし、正月に食べる餅とは次元が違うほど柔らかい。そして、沸々と怒りと言うか嫉妬と言うか複雑な感情が私の中に湧いてきた。

「あ、貴方まで……」

「火蓮ちゃん……どう？ 触り心地は？」

「……餅。とんでもない餅」

「だよね!? とんでもないよね?」

「ムカつく、ムカつく」

「な、何なんですか？ 貴方達は？ こ、後輩の胸を揉みしだいて……」

「私をムカつかせた罰として暫く揉みまくる……」

「な、何ですか!? その罰は!？」

「じゃあ、僕は依存させた罰として揉む」

「どんな罰ですか!? お二人もおかしいですよ!」

『嗚呼ん、ちよつと、あ、嗚呼、嗚呼ん、らめえええええつ』

彼女の甲高い声が風呂場に響き渡る。反響する声が私たちを刺激する。しばらく彼女はされるがままだった。



全員が体と髪を洗い終え、湯船に身を沈めている。

「悪かったわよ。今度ジュース奢るから機嫌直しなさい」

「僕は揚げパンを奢るよ」

「そんな問題じゃありません!! 女性同士だからと言ってセクハラにならない訳ではないですからね!」

「ごめん」

「ごめんね」

コハクが大分不機嫌になってしまった。されるがままになった後の彼女は体が火照りエロかった。その後、怒りの形相。謝っても中々許してくれない。

「ば、罰として貴方のも触らせていただきます」

コハクはビシツと私に指を向けた。

「嫌とは言わせません! ほら、万歳してください!」

「さ、流石にそれは……ちよつとハズイ……」

「関係ないです、さあさあ万歳してください!! じゃないと警察です!! 万歳するまで許しません」

「わ、分かったわよ」

「火蓮ちゃんのも僕揉みたいかも……」

私は両手を上に掲げた。バスタオルで隠れているが、手を使えないと無防備になったような気がする。とても恥ずかしい。お風呂に入っているのだから体温が上がるのは当たり前だけど、さらに熱くなる気がした。

「それでは失礼しますね。言つときますけど私が良いというまでそのままですから……ね!」

「ふあえ、あん!」

「なるほど……A、いやB? うーん、大分小振りですがBはある……のでしょうか?」

「も、もつとやさし、んんん!」

「貴方の指図は受けません。暫く恥ずかしさにくすぐったさに悶えて頂きます」

「もう、だ、だめ」

「萌黄先輩、腕が下がってきているので抑えてあげてください」

「うん、分かった」

「ちよ、ちよつと萌黄」

「ごめん、その姿は萌えるからもつと見たい」

腕が押さえ付けられて抵抗できない。

「フフフ、さあ、お仕置きタイムスタート……」

『ら、らめめめめつめめええつええつえ』

今度は私の甲高い声が室内響き渡ることになった……。



「はあ、はあ。や、やり過ぎよ」

「フフフ、イーブンですよ。さて、最後は……」

「ぼ、僕? 良いよ。バツチこい!」

コハクの目に晒されても、萌黄はあんまり嫌そうに見えない。と言
うか喜んでるんじゃないかな？ その気配にコハクは数秒悩み、妙案
を思いついたようににんまりと笑った。

「萌黄先輩への罰が決定しました」

「何？ コハクちゃん？」

「私の話を聞くだけです」

「そ、それだけ？」

「はい」

「ちよつとコハク流石に鼻肩が過ぎるんじゃない？」

コハクと私は犬猿の仲と言っても過言ではない。しかし、ここまで
罰の重さに差があると、ちよつと文句を言いたくなってしまう。

「鼻肩ではありません。ちゃんとした罰です。それでは萌黄先輩よく
聞いてくださいいね？ 途中で話を聞かなかつたり、耳をふさいだりし
たら最初からやり直しです」

「え？ あ、うん。分かったけど一体何を……」

コハクは雰囲気を少し暗くして話を始めた。

「これは私が親友の夏子さんから聞いた話なのですが……」

「え？ も、もしかして……」

コハクの雰囲気と話の入り方から怪談であることを察してしまっ
たらしい。萌黄が怖い系が苦手だつてコハクも気付いていたのね。

まあ、都市伝説の番組を見たときの反応で誰でも分かるか。

「小学校の裏の墓地に……」

「た、タイム!! 何で僕だけ!! 揉んでよ!! 僕の胸を！ 火蓮ちや
んより大分揉み心地は良いから!」

ほほう、言ってくれるわね。萌黄……。

「コハク続けて」

「勿論です」

「うろう」

「萌黄先輩、罰はしっかり受けてもらいますからね？ でないと永遠
にこの話を貴方の前で話し続けます」

「ひ、ヒイイ……」

この後、萌黄はお風呂なのに顔を蒼くして震えながら話を聞き続けた。コハクはかなり根に持つタイプということが良く分かった。



今頃三人は何してるのかなあ……入ってから結構経つと思うんだが。俺は時計を見た。もうすぐ十時を超える。入ったのは九時だから一時間くらい。女の子なら普通なのか？

そこら辺は良く分からないが、三人が仲良く入っているなら良しとしよう。リビングのドアが開き、パジャマ姿の三人が戻ってきた。

銀堂コハクはほくほく顔でエロい。ツインテールにしている火原火蓮はコハクのようなロングヘアーだ。黄川萌黄は……どうした？ 顔が尋常でなく蒼いんだが……。

「ごめんなさい、十六夜君。長風呂してしまつて」

「悪かったわね。十六夜」

「いいんですよ……それより黄川先輩は……」

「気にしないでください。ちよつとお話しただけですから」

「そうなんですか？」

「そうです」

「ああ、そうですか……」

その事に触れてはいけないのか？ 少し聞くくらいならいいだろう。

「大丈夫ですか？ 黄川先輩？」

「……ダイジョブに見える？」

「いえ……見えません」

「だろうね。まあ、気にしなくていいよ。ううう、眠れるかな、今日……」

察した。大方怖い話でもされたのだろう。ええつと、どうするべきか？

「十六夜君、萌黄先輩のこれは罰なんです。私もかなりの事をされたのでイーブンなんです。十六夜君は気にせずお風呂に入ってください」

「ああ、そうですか……」

そう言えば、暴走した黄川先輩に怖い話でお灸を据えるという話が『ストーリー』にあった。まあ、これは何だかんだ仲良くなっている証とも言えるから良いかもしれないが……今日眠れるか？

黄川萌黄は心霊系が大の苦手。それはチャームポイントでもあり弱点でもある。そこを突かれたようだ。

「ささ、十六夜君お風呂にどうぞ」

「はい、それでは……」

俺はお風呂に向って行った。黄川萌黄は大丈夫か？



お風呂に入った。

彼女達が入ったお風呂……べ、別に何とも思っていないんだから!!
……キモいな。さっさと入って上がるう。

髪と体を洗い湯船に念入りに浸かった後、風呂場を出た。



時刻は十一時近い。もう良い子は寝る時間だ

「三人は客間を使ってください。布団三枚敷いてあるので」

「何から何まですみません」

「ありがとうね」

「……どうも」

「あそこの部屋です」

その後、少し話をして三人を部屋まで送った。

「それではおやすみなさい」

「また、明日ね」

二人は部屋に入って行く。黄川萌黄も続いて入ろうとする。

黄川萌黄大丈夫か？ フォローしておくか。良い睡眠をとれないと健康に関わるらしいからな。

「黄川先輩ダイジョブですか？」

「ダイジョブだよ」

「あの、この家にはお化けとかいませんよ。俺ずっと一人暮らししてますが心霊現象は一度も起きてません」

「そう、なんだ」

「それとこれどうぞ」

「これは連絡先？」

「メールと電話番号です。夜おトイレ行きたくなったら怖くて先輩は一人で行けないと思うので連絡してください」

「な！ 何言ってるの！ そ、そんなことないから。し、失礼だよ!!」

「そうですか、ではその連絡先はいりませんね」

俺が彼女に渡した連絡先のメモに手を伸ばすが、彼女は取られまいと手を引いた。

「い、一応、貰っておくよ」

「そうですか。それではおやすみなさい」

「お休み……」

彼女はちよつと不機嫌そうにしながら部屋の中に入って行った。

さてと、俺も二階の自室に行くか……。



深夜。寝ている俺にスマホが鳴った。

そこに書いてあったのは

『起きてる？ 起きてるなら、言いづらいんだけど……部屋の前まで来てくれないかな？』

四十六話 深夜

黄川萌黄からのメールが届いたため彼女達が就寝する客室に向かう。廊下の電気をつけ下の階に降り、廊下を渡って部屋の前で数回ノックをする。

すると、ゆっくり扉が開いた。寝ている二人のために音が立たないようにする気遣いが感じられる。

「……………こんばんは」

「はい、こんばんは」

「あの、言いづらいんだけど……………」

「おしっこ漏れそう、でも一人で行くのは怖いから付いてきてほしいということですよね？」

「……………もつと言い方とかないの？」

「直球で言った方が時間が短縮するかと思いましたが。僅かな時間の口スで先輩がトイレに行くのが遅れ漏らすことになったら大変ですから」

「……………だとしても、オブラートに包んでほしいな……………」

「そうですか。申し訳ありません。では、早く行きましょう」

「う、うん」

彼女は部屋から出て俺の後をついてくる。大分距離が近く、彼女はさり気なく俺のパジャマの裾を掴んでいる。そこが可愛くてドキドキする。

外はかなりの大雨が降っており風も強く、雨と風の強い音が僅かながら不気味さを感じさせる。しかし、そんなことより彼女の方が印象が強く、俺は全く怖くない。

「ううっ……………不気味だよ……………」

「そんなことは無いですよ。お化けなんて一度もこの家に出たことはないって先程も言ったじゃないですか」

「今日偶々居るかもしれないじゃん……………」

「気持ちはわかりますがダイジヨブですって」

彼女は内股で歩くが中々進めない。よっぼど我慢してたようだ。

「あ、ちよ、ちよつと待って。一旦、落ち着きたい……」

「ダイジョブですか？」

「ヤ、バイかも……」

彼女は顔を蒼くした。色々最悪の事を考えている様子が。安心させてあげよう。

「ど、どうしよう……」

「先輩大丈夫ですよ」

「え？」

「漏らしても誰にも言いません。すぐに片づけますから」

「漏らす前提で話さないでくれる!? 漏らさないから! あと、言うとしてもオブラートに包んでてって言ったよね!」

「すみません……」

「ああ、もう……なんか落ち着いた……」

「それは良かったです……ええと……洪水しないようにトイレ行きましょう」

「……とりあえずオブラートに包んでくれてありがとう」

俺はトイレの前で歩みを止めた。

「外で待ってますから」

「うん……それで……その……」

彼女が何か言いたげな表情をしている。だが大丈夫だ。俺は彼女の言いたいことが全て分かっている。トイレ内の音が聞こえたら嫌だということだ。俺は紳士だからすぐにでも対応する。

「大丈夫です。スマホで昔話の桃太郎を流しておきます」

「あ、うん。気遣いありがとう……」

「どういたしまして」

彼女がトイレの中に入って行ったのでスマホで桃太郎を流す。

『昔々、あるところに……』



その後、手を洗うために彼女を洗面台まで連れて行った。

「か、鏡に映ってるの僕だよね？ 不気味に笑ったりしてない？」
「してないですよ」

彼女は目をつむり手を洗うと、そのまま鏡を見ず逃げるように去る。俺もそれについて行く。……よっぽど怖い話をされたんだな……。

彼女は一人暮らしのため怖い話には極力関わらない。生活がままたらなくなるからだ。怖い話のCMが映るだけでそのチャンネルを変え、三か月はそのチャンネルは使わないという徹底ぶりだ。だからこそ怖がりでも一人で生活できる。……今日は銀堂コハクに怖い話をされて何もできなくなってしまったのだろう。

俺も怖い話は嫌いだ、夜中に一人トイレには行けないほどではない。……幽霊屋敷は難しいが……。



再び部屋の前。

「あ、あ、あ、ありがとう……ひ、一人じゃいけなかったから……」

「いえ、お気になさらず」

「それと、さっきは混乱してたから強めに言っちゃった……ごめん……」

「仕方ないですよ。大分切羽詰まってきましたからね。誰でもあんな感じになりますよ。それより遅くまで起きていると美容の敵です。早く寝ましょう。明日起きられなくなりますよ」

「う、うん、そうする……おやすみ……」

「おやすみなさい」

俺はその場から立ち去り二階に上がって行く。彼女が大洪水を起ささなくて良かった。



僕は昔の事を思い出していた。両親が離婚した後、母と二人で暮ら

していたときの記憶だ。

『えーん。お母さん！ トイレいけない!!』

『大丈夫、お母さんが一緒に行ってあげるから』

怖くて一人で行けない。だからいつもお母さんに手を引いてもらった。

『お、お母さん。そ、そこにいる!?!』

『いるから大丈夫』

『こ、怖いから何か歌って』

『それじゃあ、桃太郎の歌を歌うわね……もくもたろうさん、桃太郎さん♪ 御腰につけたくきび団子〜一つ私にくださいいな♪』

トイレの中にいるときも、本当にそこにいるのか不安で何度も話しかけて歌って貰った。懐かしくて大切な記憶。心が落ち着く。

先程も昔のような安心感があつた。お母さんと一緒のたくましい背中。慈愛。まるで、お母さんが……生き返ったような……そんなはずはないけど、そう錯覚するほどだ。また、寂しさを感じてしまった。

——でも、もう一度あの安心感、慈愛を受けたい

……何を考えているのだろうか？ 僕は軽く首を振って考えるのを止めた。

僕は自分の布団に横になる。僕は二人の真ん中に位置取りしたから、両隣の可愛らしい顔が良く見える。この二人の気持ちよさそうな顔を見ていたら起こせなくて、彼に同行を頼んだのだ。最初は頼んでいいのか、凶々しくないか色々悩んでしまったけど……彼に頼んだのは……

——それは、正解だった気がする。



目覚ましが鳴り俺は目を覚ました。僅かな眠気を残しつつ下の階に降りていく。リビングからトントんと包丁の音が聞こえてきた。

「十六夜君、おはようございます。すみません、勝手に台所を使っちゃって」

「いえ、構いませんよ」

銀堂コハクが朝ごはんを作っていた。家庭的だ。それに寝巻姿にも風情がある……。

「朝ごはんはもう少しでできるので座っててください」

「はい」

二人はまだ起きてこないのか……。火原火蓮は朝が弱いことは知っている。黄川萌黄はそうでもないはずだが……。もうすぐ朝ごはんだ。ここは起こしに行くべきだろうな。

「俺は二人を起こしに行つてきますね」

「作り終わつたら私が行きますよ」

「いえ、これくらいさせてください」

「そうですか？ ではよろしくお願いします」

「はい」

客間には仰向けで気持ちよさそうに寝る二人の姿があつた。火原火蓮はお腹を出しており、顔は少しにやけている。

黄川萌黄は火原火蓮の手を握つて満足げな表情だ。さて、彼女達を起こさなくてはならない。天使より尊い寝顔をこれ以上見れないのは残念だ。

「火原先輩起きてください。朝です」

「んんっ……世界の半分くらいじゃ私は買えないわよ」

一体どんな夢を見ているんだ？ 幸せそうにニヤけてるから相当満足感のある夢なんだろうが……。

「起きて下さい」

俺は肩を揺らす。しかし、なかなか起きない。何度も揺らす。グラグラと何度も強めに揺らすと、ようやく彼女は薄っすらと目を開けた。

「先輩起きて……」

「ううっ……あれ？ 魔王十六夜は？」

「寝ぼけてないで早く起きてください。朝ごはんがもうすぐできるですよ」

「ああ、うううん、そう、ね」

彼女はまだ眠気が残っているようで僅かに頭をフラフラさせながらリビングに向かった。しかし、足が布団に引つかかり俺へと倒れ込んできた。俺より小柄とはいえ高校生を受け止めるのは重……く、なんてないな！

「大丈夫ですか？」

「ああ、うん。大丈夫。後五分このまま……」

彼女は俺に寄りかかるとそのまま瞳を閉じた。吐息を感じるほど近くに彼女がいる。自分のものでない体温はすごく温かい。……起こしてあげたいが仕方がない。先に黄川先輩を起こそう。

「黄川先輩も起きてください」

「うう……」

彼女はすぐに目を覚まし状況を察した。

「ああ、ごめん。起こしてくれてありがとう」

「いえ、朝ごはんが出来ますから行きましょう」

「うん……え？ 火蓮ちゃんどうしたの？」

「五分このままだそうです。仕方がないので五分このままでいます」

「あ、そう……それじゃあ先に行ってるから」

その後、起きて状況を自覚した火原火蓮は顔を赤くしてアタフタした。



三人で朝食をとった後は早めに投稿する。家から一緒に出るところを見られたら、彼女達の変な噂が立ちかねない。学校裏サイトは潰れたが、犯人はまだ野放しなのだ。

今日は『魔装少女』三人並んで話している。真ん中に黄川萌黄。その左に銀堂コハク、右には火原火蓮。ずいぶん親密になったらしい。「やっぱり早起きは苦手ね」

「これくらいで何を言ってるんですか？ 早起きと言うのは四時に起きることを言うんですよ」

「それは早すぎじゃないかな？」

少し早めだがその日は学校で朝をのんびりと過ごした。



何事もなく終業前のホームルームの時間を迎えた。昨日六道先生が言っていた通り、学校からネットの使い方に関するお便りが配られる。学校の対応が抑止力になってくれるのを期待しよう。

佐々本から聞くまで俺は知らなかったのだが、いつの間にかやら新聞部が活動休止になっていた。話を聞く限り、どうやら最近の事らしい。教師陣も流石にあの新聞はアウト判定だったみたいだ。

そんな感じの大したことない一日。

その日の放課後。銀堂コハクに誘われ図書室で勉強会をすることになったのだが……

「あ、ここも違いますよ」

多くの学校でも同じだと思うが、図書室の机と椅子は本を読むためだけではなく勉強のために設置されている。やる気のある生徒たちによって多くの席は埋められている中で、幸いにも空席を見つけることができた。

「ここも違うわね」

「あ、ここも違うよ」

彼女達三人は全く勉強する必要があるため全員で俺を教えてください。三人から集中的に間違いを指摘されるとちよつとプライドが傷つく。精神年齢は俺の方が年上のはずなんだがなあ……。

「十六夜君スペルミスが多いですよ？」

「十六夜、ここさつきも間違ってた？」

銀堂コハクは優しく諭してくれる。火原火蓮は気合を入れるためなのか軽く頭をポンポン叩く。

「もつと、SVCを意識しなきゃダメだよ？」

黄川萌黄は的確にご教授してくれる。三人は俺に良い点数を取ってほしいのか、毎日ご指導してくれた。

周りからの視線も凄いいし、三人の指導はかなりハイペースだ。彼女達の気持ちを無下にはできず音を上げるわけにはいかない。テスト

の日までひたすら勉強漬けだ。

そして、中間テストの日がやってくる。

四十七話 最速

テストの日が訪れた。男子達の顔が絶望だったのは言うまでもない。

一日目、国語、保健体育。二日目、化学、社会。そして、三日目であり最終日、英語と数学である。

一日目、二日目は難なく終了。日に日に男子達の顔がやつれていくのは気にしない。『魔装少女』組は特に気にする素振りなく余裕そうだった。

そして、今日が運命の三日目。今はテスト中。答案用紙にペン先を突きつけている。

テスト最終日、学校からの帰り道で黄川萌黄の『ifストーリー』が始まる。それを回避するために、黄川萌黄に憑いて……ついて行く必要がある。

ただ懸念事項が一つある。それは、銀堂コハクと火原火蓮が同行すること。二人には関わらないでほしい。二人に火の粉が飛ぶのは許せない。何としても今日だけは関わらないでもらおう。

……よし、テストが終わったな。色んな意味で。ここ最近勉強に集中できなかった。バッドエンドが近づいている。それを考えると、どうにも落ち着いていられない。

ここまですも通りの日常だった。問題は今日なのだ。些細な偶然が災厄を招く『ifストーリー』が幕を開ける。速攻でぶっ飛ばして四人目の所に向かおう。俺は心に決めてペンを置いた。



ホームルームが終わった。急いで黄川萌黄の下に行かなければ。教室中で涙を流しながら喜ぶ生徒達を尻目に駆け出す。今日は銀堂コハクに構わず、二年生の教室に向かった。

スーパーダッシュで二年生の教室に到着。教室のドアを開けると……、

——二年Aクラスの生徒全員と教師が俺を驚いたように見た。
教壇から連絡事項を伝えていた教師が俺を見て固まる。黄川萌黄を含めた生徒達も困惑。

ま、まだ二年生のホームルームは終わってなかったのか……。
「失礼しました」

俺はそつとドアを閉めた。数分待つと銀堂コハクが俺に手を振って歩み寄ってきた。

「もう、十六夜君。行くなら行くって言うてください」
「すみません」

彼女は僅かに頬を膨らませて不満を露にした。リスみたいで可愛い。ナデナデしたい……。。

今はそんな事を考えてる場合じゃないな。黄川萌黄の全てが掛かっているのだから、もっと集中しないといけない。

銀堂コハクには申し訳ないが今日は帰ってもらおう。ううっ、良心が痛む……。

「銀堂さん」

「何ですか？」

「今日は帰ってください」

「……え？」

彼女は俺の言葉を上手く飲み込めないようだった。見る見る内に顔が暗くなり、絶望を象っていく。

や、ヤバい、こんな顔見たくない!!

「今日だけ、今日だけです！ 別に嫌いになったとかそういうのではなくどうしても今日だけ貴方と一緒に居られないんです！」

「今日……だけ……」

「この埋め合わせは必ずします！ 約束です」

「……埋め合わせ？ それはどのような事ですか？」

「エエと……深くは考えていませんけど……とりあえず何でも言うこと聞きます」

「……なんでも？……なんでも……なんでも……え!? なんでも!？」

「はい！」

「えっと、それじゃあ……フヒヒ……いや、流石にダメですよ……」
彼女の顔は一旦晴れやかになったかと思ったら、だらしなく笑い、そこからさらに真顔に戻るといふ百面相に近い変化を見せた。表情が変わるのはコロコロ魅力の一つであり、是非深堀したいが今は置いておこう。

「あの、ですから今日だけは……」

「はい、分かりました……」

消沈した雰囲気は消えないが、俺の覚悟が伝わったようでコクリと頷いた。

「……埋め合わせ……楽しみですね」

彼女はにんまりと笑った。

「それでは今日は……今日だけ、失礼しますね」

「はい、それでは、また……」

彼女は恍惚の笑みを浮かたまま踵を返した。勢い余って今日だけと言ってしまったが、暫く他の町に行くんだよな……。後で考えよう。

彼女の背中を見送ってから間を置くことなく、二年生の教室のドアがガラツと開いた。

教師に続いて火原火蓮と黄川萌黄が出てくる。

「どうしたの？ 物凄い形相だったわよ」

「黄川先輩に大事な用事があるんです」

「え？ 僕？ 分からない問題でもあった？」

テストで難問に苦しんだとでも勘違いしたのだろうか。そんなこととはどうでもいい。今はバッドエンド阻止に集中する。

「その前に火原先輩、少しいいですか？」

「え？ 私？」

「はい、黄川先輩はそこで一ミリも動かず待って居てください」

「うん、わかった！ って、一ミリも!?!」

「はい、勝手に動かれると困りますので、例えおしっこに行きたくなっ

ても俺が戻ってくるまで動かないでください」

「何でそう言うことかな!？」

「それでは、火原先輩。ちよつと行きましょう。絶対に動かないでくださいね!」

火原火蓮を教室から少し離れた場所に連れ出した。そこで向き合う。

「ど、どうしたの? きゅ、急に二人きりになって?」

「単刀直入に言います。今日は俺に関わらずまっすぐ家に帰ってください」

「え? え? え? な、何でそんなこと言うの? わ、訳が分からないわよ? 何か私不快になるような事言った?」

「嫌いになったというわけではないんです。むしろ先輩には好感しくないです」

「そう、ならよかった……」

彼女は肩の力を抜いて表情を和らげる。俺が彼女を遠ざけようとしていると勘違いさせてしまったらしい。気が動転するほどに焦る彼女には申し訳ないが、今日だけはどうしてもダメだ……。

「今日だけ、今日だけです。いつも一緒に居るのに急に関わるなって言うのは失礼だということは分かっています。ですからこの埋め合わせは必ずします。何でも言う事を聞くので今日だけまっすぐ家に……」

「な、なんでも? え? 本当に?」

「はい。本当になんでも」

「そ、そう。何でもか……まあ、それならいいけど……それにしても十六夜。ビックリしたわよ、急に関わるなって」

「すいません。気持ち焦ってしまって……」

「何があるの?」

「まあ、大事な用ですね……」

「むう、十六夜って隠し事多いわよね。自室も見せてくれないし……」

この間家に泊りに来たときに部屋を見せてと言われたが絶対に入れなかった。理由は三つある。一つはエロ本がある。二つ目はエロ

本がある。三つ目はエロ本があるからだ。

佐々本經由のエロ本が大分貯まっている。量が増えてきたため隠しきれなくなってきた。バレたら気まずいので隠し通す以外の道はない。

「アハハ、すみません。まあ、ミステリアスな方がカッコいいので……」

言い訳としてゼロ点に近い。もっと上手く誤魔化せないものだろうか……。

「話す気がないっていうことは分かったわ。十六夜の事だからそれなの理由はあるんだろうけど、あんまり無理はしないでね？」

「はい、ありがとうございます」

彼女は寂しげに語った。心の中では不安があるのだろう。心配をかけたくないが、俺にはやるべきことがある。

俺は彼女とそこで別れた。



黄川萌黄と二人で歩いている。前後左右、東西南北に気を配りながら。帰り道を送って行くと言って彼女と帰路を共にした。

「あの、それ止めてくれないかな？ 恥ずかしいんだけど……」
「お気になさらず」

この後、二つの災難が降りかかる。まずは元カレとの再会だ。彼が今の恋人を連れて街をぶらついているところにバツタリ鉢合わせる。黄川萌黄とわかるや否や、背丈をバカにしてケラケラ笑ったり告白の物まねをしたり彼氏と彼女そろって煽り立てる。

放っておいても彼女が死ぬことはない。かと言って放っておく理由もない。黄川萌黄を傷つけたクズに何としても謝罪の言葉を口にさせてやる。クククク……。

しばらく歩く。子供に指を差されるのは久しぶりだな。客観的に見て奇妙な行動であることは承知の上だが、道行く他人から遠巻きに

観察されるのは辛い。

「ねえ、本当に恥ずかしいよ……」

「我慢です」

「そ、そんなこと言われても……」

彼女は羞恥に悶えており、止めるように俺に促す。しかし、俺は止まらない。

同じやり取りを繰り返しながら、さらに歩を進める。

カップルが腕を組んで歩いてくるのが見えた。耳にピアス。アイツだな。約50メートルほど離れた場所にいる。

事情を知らない部外者なのに一方的に煽ってくる女は間違いなくクズだが、男の方は輪にかけて酷い。奴は女に隠れて複数人と浮気をしている。……今日が年貢の納め時だが。

男が黄川萌黄に気付いた。薄く嗤いながらこちらに近寄ってくる。彼女もあの男を認めた。

そして、クズ男が言葉を発する

——前に俺はクズ男の首に腕を回す。

ダツシュで近寄り、男と肩を組んだのだ。クズカップルは俺の行動を理解できずに動転する。

「な、何だ？ お前？」

「ちよつと、誰このフツメン？」

女に聞こえないよう声を潜める。

「……………呉服屋のミカちゃん……………」

「な、何言ってるんだ？」

クズ彼氏は状況が分からないようだ。

「……………自販機のミミちゃん……………」

「え？ いや？ お前……………」

「カーニバルのセイラちゃん……………」

「お、おい、お前……………なんで、それを……………」

「さあ？ 何ででしょう？ ちなみに隣の子は自販機のミミちゃんですわ……………」

浮気相手のあだ名だ。こいつは恐怖を抱いているはずだ。知らな

いはずの事を知っている男に突然組み付かれたのだから。何を知っているのか、どうやって知ったのか、男にヒントはない。

「このことを隣のミミちゃんに言っちゃおっかな」

「お、おい」

「もし、嫌なら……黄川萌黄に謝罪してもらおうか。目の前にいるのは分かっているだろう」

「わ、分かった。する、する。だから……」

「ああ、分かっている。腰を九十度に曲げて謝り、二度と関わらないことを誓えば……橋の下で呉服屋のミカちゃんとしたことも黙っておこう」

「な、何なんだ……お前は……」

『世界』を知る者……とでも言っておこう。それより早く謝れ」

クソ彼氏は黄川萌黄の下に行き、九十度に腰を曲げて謝り、彼女を連れて逃げ去った。黄川萌黄は何が起こっているのか分からずポカーンとしていた。

昔トラウマを植え付けた男の一人がいきなり謝ってきたのだから、そうなるのも無理はない。

ククク。これがざまあ展開というやつだな。本来なら色々悪口を言うが、それすら言わずに退場させ釘を刺す。まさに最高の展開だな。

最速だな。彼氏と出会ってから謝罪させ退場させるまで……

“一分二十七秒”

「……何したの?」

「特に何もしてないです」

「どう考えても何かしたでしょ? アイツって昔僕に……いや、そんなことはどうでもいい。肩組んで耳元で何か言ったよね? そこからあの男の様子がおかしく……」

「アハハ、何か裏を読んでるようですが全然違いますよ。アイツが知り合いと思っただんですけど全然違う人だっただけです。それに相

手もビツクリしたのでしよう」

「いや、いくら何でもそれは……」

「だとしても俺は本当に何もしてませんよ。俺が勘違いしただけです」

「そ、そう？　で、でも……ううん、何でもない」

彼女はもう考えないようにしたようだ。そのまま二人で道を歩く。

彼女は意を決したように語り始めた。

「僕は男が嫌いなんだ」

「そうですよね……」

「分かってたよね？」

「ええ、まあ」

「……色々あつてさ……あの男は僕が男嫌いになる理由の一つで、信じてたのに裏で色々僕の事を言ってたんだ……」

「そうですか……」

「あんまり詳しく知らないけど、自分から謝るような人間だけじゃないということとはわかる。君が何かをしたとしか思えない」

「……」

「言いたくないならそれでもいいんだ。でも、ありがとう。スカツとしました。あんな九十度に腰まげて謝罪してくるなんてビツクリだよ」

「そうですか。スカツとしたなら良かったですね」

「うん、ところでさ……一応僕会話してるわけだから目を合わせて欲しいな……さっきから前後左右を交互に見つばなしで気まずくて恥ずかしいんだけど……」

俺はいつも通り前後左右、東西南北ずっと警戒しつばなしだ。真剣な話をしているのにキョロキョロしては失礼だと思われても仕方ない。しかし、今は次の災厄に備えないといけない。

次は父親か。名前は確か……浅黄黄我あさぎわうがだったか……。

バッドエンドに登場するクズは大体頭のねじが外れている。だからこそ、煽って手を出させぶつ飛ばすという手段を取れる。

このやり方で大丈夫だろうかと心配になるときがある。もつとい方法が他にないか？　スマートなやり方はないか？

余計な事を考えると判断力が鈍るから今まで考えないようにしてきた。

不安もある。

だが、そのまま突っ走ればいいとお墨付きを貰っている。信じて俺は進もう。



クズ元カレを撃退した後、前後左右を警戒しながら先行する。黄川萌黄は恥ずかしそうについてくる。何度言っても俺が止めないからもう諦めたみたいだ。

「……………」

「ううっ、凄いい見られてる……………」

周りからの視線が痛い。彼女は羞恥に身を縮めて頬を赤くする。商店街を抜け住宅街に入る。

…………曲がり角から一人の男が出てきた。俺は咄嗟に黄川萌黄の前に立つ。

背中の黄川萌黄が息を？んだ。その男は俺達に視線を向けると足を止めた。

「う、そ……………」

「萌黄か!？」

こいつが浅黄黄我だな。身長は二メートル以上ある。一見優男の印象を受けるが、本性は全く違う。昔は悪かったとか、もう一回やり直そうとか、前向きな言葉を口にするのは最初だけなんだよな。

「あの、俺達帰りたいので失礼します。先輩行きましょう」

「う、うん」

「待ってくれ！ 昔は悪かった！ 萌黄にも黄奈きなにも！」

「ほら早く行きましょう」

俺は彼女の手を取ってその場から離れた。そして、黄川萌黄を残して俺は浅黄に近づいた。

「……………」

「…………お、お前!!」

会話の時間は二分くらいか。かつての職場から退職してダサイとか、虐待して捕まるのざまあとか、適当な事を彼に吹き込んだ。ヘイトを自分に向けることに磨きがかかった感じがする。最近、煽りについて研究している。口角を吊り上げたり声のトーンに気を付けたりした結果、『煽りの極意』を身に付けた……気がする……。

そのまま浅黄に背中を向けて、再び彼女の手を取りその場から離脱した。

浅黄はその場から動かなかった。

「ようやく見つけたぞ……そして、お前も覚えておけよ……」

後ろから怨嗟の声がかすかに聞こえる。聞き間違いではないだろう。恐らく追ってくる。

彼女を送り届けた後、まだ近くにいたら好都合だ。大声で馬鹿みたいに煽ってやろう。ヘイトはすでに十分稼いだがな!!

あの男から早く遠ざかるために、彼女の震える手を握り先を急いだ。彼女は放心状態になり動けなかつたようだ。

彼女の恐怖は簡単に克服できるものではない。ただの女の子には難しいだろう。

道中、彼女はずっと無言だった。



彼女の自宅は二階建てアパートだ。この時点で彼女が浅黄を家に入れると、バッドエンドのルートに入ってしまう。ここまでは順調だ。彼女にはこのまま自宅待機してもらおう。

「それでは今日は失礼します。今日の所は先輩はこのまま家に居てください。何があっても出ちゃダメですよ。嫌な予感がするので……」
「…………うん」

「それとこのお守りをどうぞ。このお守りがあればありとあらゆる厄災をはね除けると噂のものです」

「あ、ありがとう」

「それを百個です。単純計算で効果は百倍です」

「多いね……ありがとう」

お化けが苦手な怖がりの彼女にいつかあげようと思っていた。なかなか贈るタイミングが見つからず今まで持ち歩いてきたお守り百個を渡した。

「それじゃあ、また」

「またね……」

さて、彼女は不安に感じているだろうから速攻で片付けようか……。



「それで道を歩いてるところを急に襲われたと？」

「はい、急にナイフですよ。ビビりました」

「前から思ってたけど君事件に巻き込まれすぎじゃない？」

今警察の聞き取りを受けている。相手は毎度お馴染みの人だ。一回目、二回目、そして三回目。何度もこの人と会うと運命的なものを……感じないな。

あの後、物凄い顔でナイフで襲ってきたので速攻でぶっ倒して警察を訪れた。怖かったが慣れとは恐ろしいもので、前より落ち着いて対処できた。

恐怖よりどれだけ早く片付けるかに頭を使いつつある……。

「君さ色々持って歩いてるみたいだね……いや、防犯グッズを持ち歩くのは悪い事ではないんだけど……あまりやり過ぎるのもね……」

「昔から厄介事を引き寄せる性質なのでどうにも準備をしないと落ち着かないんですよ」

「君は死神か何かなのかい？　こういうのを言っていていいか分からないけど警察内では“七色町の死神”って名前が流行りだしてるよ。あまりに事件に巻き込まれるから」

「そうですか……」

「まあ、君が関わった奴ら全員頭おかしそうな人間ばつかだから責めるのもお門違いかもしれないけどさ……だとしても、一人目が無職ス

トーカー取り調べもろくにできない狂人。二人目は永遠に恨みを話し続けて取り調べもろくにできない狂人。三人目は前科ありの暴力殺人未遂者。いや、オンパレードだね」
「そうですか」

「三人目は君が色々言ったって言ってるみたいだけど……」

「さあ、何のことか分かりません」

「そうかい……まあ、君は被害者だから……証拠もないし……正当防衛って事なのかな？ 一応聞くけど自招防衛じゃないよね？」

「まさか、俺からは何もしてません。あつちが急に襲ってきたんです」

俺から手を出したようなものかもしれないが、バレなければ問題ない。実際に手を出したのはあつちだ。俺が煽った証拠もない。さらに、あちらは児童虐待の前科がある。どちらを信じるかと言えば怪しさは残るが俺だろうな。

「それじゃあ、もう帰っていいよ。あんまり巻き込まれないでね。言っても仕方ないかもしれないけど……」

「はい、失礼します」

取り調べ終了。これでバッドエンドを回避したことになる。クソ親父は豚箱行きだ!! これで一安心……ではない。まだすべきことがある。

すぐに動き出さないと……。警察署の外に出ると一台の車が俺の前で止まった。

そして……。



ピピピピと目覚まし時計の音が響く。僕は手探りで目覚まし時計を探し音を止める。布団から起きてキッチンに向かう。

昨日はよく眠れないかと思つたがそうでもなかった。久しぶりにクズと超クズに会ってしまった。超クズの時は恐怖で一瞬何もできなくなりそうになった。元父親であり全ての元凶。もう会うことはない。そう思っていたのに会ってしまった。反省のような言葉も口にしたが、あの男は絶対に反省なんかしていない。僕には分かる。

昔を思い出して体が震えた。怖くてどうしていいか分からなかった。でもそんな時彼が手を引いた。

超クズとあったとき真っ先に僕の前に立ってくれた……。クズの時も何か色々やってくれたようだ……。

そして、お守りを百個もくれた。一つでいいのに百個もだ。それだけ心配をしてくれたのだろう。昨日トラウマが甦り眠れるか心配だった……。お守り百個のおかげで安心して眠れた。

ベッド中にお守りをまき散らしてその上に寝る。それによって恐怖が和らいだのだろう。

本当に優しくて逞しくて素敵な人だ。

恐らく、超クズはまた僕の所に来るだろう。しかしもう大丈夫。僕にはお守りが百個もあるのだから。

負ける気がしない。いつでもかかってこい。

——骨折ってやる……。

そんな事を考えテレビをつけると……。

『浅黄黄我容疑者。高校生殺人未遂で逮捕。前科あり!!』

既に超クズは逮捕されていた。高校生……。もしかして、彼がやってくれたのか？

恐らくそうだろう。だとしたら気になることがある。

彼は一体何者？ 知りえない事を知っている。行動が余りにス

マート……。

気になる。彼の事が……。電話しよう。数回コールが鳴ると彼の電話に繋がる。

「もしもし?」

「もしもし、おはようございます。どうかしましたか?」

「あの、朝のニュースで昨日会った背の高い男が捕まってたんだけど……」

「あ、そうなんですか。そういう事もあるんですね」

「君が何かしたんだよね?」

「いえ、してませんよ」

「嘘つき……今日の放課後ジツクリ聞くから……」

「それは無理ですね……」

「なんで？」

何で？ 最近は放課後いつも四人でいるのに……。

「俺……今、海にいますので」

「はあああ!?!」

唐突すぎる。意味が分からない。昨日まで普通にテストやって超クズを豚箱に入れてくれたと思ったら今度は海にいる!?

何なんだ？ 一体どういう思考をしているんだ？

彼の事が何も分からない。でも、知りたい……。どういいう経緯で彼が海に行ったのか考えてみた。

………全く想像できない。彼は一体何者なのだろう？

大海の少女 四十八話 海原町

青い綺麗な海。そこから獲れる新鮮な魚介等が特徴の素晴らしい町。それがこの海原町だ。自然が溢れて空気が美味しい。

こんな素晴らしい所に来るなら観光で来たかった、と思ってしまうても悪くないだろう。

「ふあああ、眠いの……」

「そうですか」

「この町は魚介類が美味な事で有名らしいの。何か食べたいものじゃ。マグロとかアジとかアワビ、ホタテ……じゅるり……どうじや食べてみとうないか？」

「アンパンと牛乳でいいです」

現時刻は七時三十分。とある女性と二人きりで車内にいた。とある高校の前に張り込んで登校する生徒達の様子を伺っている。

先ほど黄川萌黄の電話を受けた。ニュースで父親が逮捕されたことを知ったのだろう。報道されたとしても俺は匿名のはずなのに、どうして電話を寄越したのだろう……。まあ、いいか。気にする事でもない。

「しかし、こんな朝早くから高校の前に車を停めて監視とは……恐れ入るの。登校している学生が怪しむような視線を向けておるぞ？」

「気にする事でもないでしょう。それよりアンパンどうぞ」

アンパンの封を開け隣にいる女性に差し出す。それと牛乳。朝飯はコンビニで買ったものだ。

「アンパンと牛乳とは……まあ、いいんじゃないが……」

彼女はアンパンを食べているようだ。すると意外にも満足したような表情を見せる。

「いけるの。最近のコンビニは進歩しとるの」

「そうですか」

「お主、全く我の話を聞いておらんな……」

「聞いてますよ。コンビニがすげえって話ですよね」

「まあ、そうじゃが……話とは耳だけで聞くものではないじやろう？

目と耳と心で聞くもの……なのだが……さつきから東西南北見渡して全く我を見ていないではないか……お主のそれは話を聞いていないと同じじゃ」

「そうですね」

「……」

隣にいる彼女はがっくりと肩を落とした。四人目の発見が優先なのだから、彼女に構っていられない。

視界を横切る生徒達の流れの中で、一人の少女が目についた。ショートヘアーだが前髪だけ長く伸ばして片目を隠している。目付きは鋭い。瞳は澄んだ海の色をしているはずだ。

——片海アオイ

彼女は少しガラが悪いギャルヤンキーに見える。周りの奴らは勘違いして少し怯えているが、本当は違う。

四人目を初めて見た。可愛いじゃないか……。ちよつと強面な感じが良いんだよな。

彼女がこれからエグイ目に……。許せんな。

だが、何が起こるか全く知らない。今までファンタジー要素は一切なかったが、これからも同じとは限らない。ファンタジー物だったらどうしよう……。

念のため、お守り、聖水、お札などを買い揃えておいた。効果の程は疑わしいが準備するに越したことはない。この車の後部座席に積んでいる。

だからと言って安心はできないだろう。仮に何かしら効果があるとしても、そもそも必要となるかすら分からないのだ。早く詳細を知りたかった。

「まだ、出ないんですか!? 遅いですよ! 占い!」

「そう言われてももの。結果はランダムじゃから……」

「そこを何とかしろよ！ それでも占い師か!？」

「急にどうした!? 怖いぞ!? お主!？」

彼女は「占い師」であり『超能力者』である。能力の発動条件を満たすために、彼女にここまで足を運んでもらった。

発端は体育祭の日に遡る……。



占い師の存在は俺の行動予定に大きく影響した。想定外の強力な味方をどのように活用するのが最善か考える必要に迫られた。

二人のお弁当対決の時も頭の片隅で考えていた。黄川萌黄との初顔合わせの時も……片隅で。

そして、午後の実行委員の仕事が始まる前に考えをまとめた俺は、占い師に電話をかけた。

「もしもし?。」

「聞こえておる、頼み事じゃな?。」

「そうです、その頼み事なんですけどお願いしてもいいですか?。」

「構わん。言ってみよ」

「はい……それでは今すぐ……それは無理か……明日、海原町に行つて片海アオイと言う女子高生の顔を拝んでください。恐らくその町に一つしかない女子高に通っていますのでよろしくお願いします。顔を見た後は直ぐに占いを始めてください。そしたら一旦帰つてもいいです」

「ちよ、ちよっと待て、速すぎ……」

「その後は俺の指示があるまで占いに徹してください。そして、俺の高校の中間テストが終わる数日前に連絡しますからに車で俺を迎えに来てください。そのまま海原町に向かいます。一緒に来てもらいますから、その辺はよろしくお願いします」

「速すぎるわ!!! 我の話を聞け!!! 全く訳が分からんわ!!!」

「そうですか……」

「そうじゃ、分からん。速すぎて聞こえんぞ」

「そうですね。それじゃあ、メールで送ります。そこに細かい日程なども載せておきますのでよろしくお願いします」

「う、うむ」

「言つときますけど全て俺の言うとおりにしてくださいね？ 頼みを聞かつて言ったんですから責任は取ってください。それでは失礼します」

「お、おお。了解じゃ」

そこで一旦俺は電話を切った。急いでメールを送り、詳細を彼女に伝える。

彼女の能力には波がある。占い結果が分かるまでの期間と結果の具体性がランダムなのだ。

それでもデタラメを吹き込まれるよりはましだ。

むしろ気を付けなくてはならないのは、結果ではなく過程の期間だった。少しでも早く占いを始めたいので、占いの条件である「対象者の顔を見たことがある」を早めに達成してもらいたい。

間違いが起こらないように俺も同行したかったが、黄川萌黄との不仲問題にかかりきりだ。彼女だけで行つて貰おう。

片海アオイの特徴を細かく説明すれば、彼女を知らない占い師でも見つけられるはずだ。彼女の容姿は頭一つ抜けて良く、良い意味で特徴的だ。さらに念を入れて写真を撮ってきてもらい間違いはないか俺が確認する。

これで占いの結果が出れば片海アオイのバッドエンドが回避しやすくなるぞ!!



そんな考えだったのだが一向に占いの結果はでない。俺に関する占いなら間を置かずすぐに結果が出るのだがな……。

昨夜俺を基準に占ってもらい、少し先の未来で四人目を救うのが見えたらしいが詳細は分からず終い。ちなみに黄川萌黄のバッドエンドは回避できていたらしい。

もしかしたら俺経由でバッドエンドの詳細を掴めるかと思ったが、そう上手くはいかない。

やはり本人の運命は当事者を占って見るしかないだろうか？

占いは不安定だから良く分からんな。

「まだ出ないんですか？」

「出ないの」

「うーん、パワーストーンでも食べれば出やすくなりますかね？」

「それだと、出るのは占いではなく腹を下して出るとんでもものない物じゃー！」

「一回試してみませんか？」

「そんなんで出るわけないじゃろう!? 発想がぶっ飛んでおるな!」

「それじゃあ、俺の買ってきた聖水を飲んでください。何か神秘的な力で効果があるかもしれませぬ」

「まあ、それなら」

「取りあえず五リットルくらいお願い申し上げます」

「腹下すわ!! 申し訳ない程度に丁寧に言ってもそんなには飲めんぞ!!!」

まあ、万が一の時に運転者が腹下して動けないと困るな。このままでは、占いの結果が出ないことも想定しないといけない……。

もう宛にしない方が良いかもしれない。出たらラッキーくらいで考えておこう。仕方ない。片海アオイと仲良くなり守護霊ポジにくしかないな……。



私の名前は野口夏子。どこにでもいる普通の女子高生だ。

いきなりだが朝から校内は騒がしかった。特に私たちの教室である一年Aクラスが……。

「おい、朝のニュース見たか？」

「絶対黒田」

「アイツ巻き込まれすぎじゃないか?」

「死神……なのか?」

テレビでは高校生としか言っていないなかったのに、ニュースに出たのは黒田君と皆確信しているらしい。決めつけはよくない、黒田君がニュースの高校生と決まったわけではないのだ。

証拠なんて何もない。それなのにみんな決めつけてる。

全く、皆噂に惑わされすぎだ。現代人に求められているのは情報を鵜呑みにするのではなく見極めること。それをみんな忘れている……全く、全く仕方ないな……。

………まあ、私も黒田君だと思っただけ………これはあつちに置いておいて。

問題は私の前の席にいる銀堂さんだ。朝から落ち着きがない。ずっと頭を抱えてぶつぶつ呟いている。

「十六夜君大丈夫ですか? 大丈夫ですよ? …… …… ……あのニュースの犯人……もし、十六夜君に何かあつたら……」

うわあ、見てはいけない物を見ている気分だ……。彼女は黒田君を心配して細い声でしみじみとした雰囲気だった、その次の瞬間彼女は犯人に怨念をかけるように声を発した。

これは……見てはいけない奴だ……クラスメイトの皆も大分ビビってるな……銀堂さんをチラチラ見てる。……それくらい雰囲気かヤバイ。

「あの、銀堂さん……落ち着いて」

「ブツブツぶつぶつブツブツ……」

あつ、聞いてないね。これは。彼女はしばらくそのまま、私が話しかけても彼女には届かなかつた。

黒田君が学校に来ることはなく、彼女は時折彼の席を見て……ブツブツブツ一人で話している……。

暫くすると担任である六道先生が教室に入ってくる。

「席にツ……」

「先生! 十六夜君はどうして学校に来ないんですか!?!」

速い!! 先生が席につけと言う前に彼女は立ち上がり声を少し荒げて問う。先生は少し難しい顔をしている。

「うむ、黒田は今日は欠席だ。風邪をひいたらしい」

「で、でも、今日の朝のニュースで……何かあったのではないのですか!?!」

「何も無い。朝のニュースは俺も見たが黒田とは一言も言っていない。憶測で話すような事でもない。黒田は風邪だ。それ以上でもそれ以下でもない」

「わ、分かりました……」

銀堂さんは渋々再び席に着く。そして再びブツブツ……独り言。そんなに気になるんなら電話すれば……あつ、連絡先持ってないんだっけ？

「ブツブツぶつぶつ……」

ふうーここは私が励ますしかないだろうな。これは後でジューズだね。黒田君？



朝から僕は火蓮ちゃんとの素晴らしいコミュニケーションをとっていた。彼女は朝の登校中に彼に会えなかったので萎えていた。

彼女は知らないようだから、彼が海にいることを伝える。

「ええ!?! 十六夜が海!?!」

「そ、そうらしいよ。か、顔近くない? 嬉しいからいいんだけどさ……」

「わ、私にそんなこと一言も……」

「僕も朝聞いたんだよ」

「何で?」

「え? あ、電話かけて……」

「……………」

「な、なに?」

彼女は僕をジツと値踏みをするように眺める。な、なんだろう？
ちよつと怖いかも……。

「……気のせいかな」

彼女は小声で何かを言ったが僕には聞こえなかった。その後彼女は
その視線を解き、いつものような少し強気な視線に戻った。

「何で電話したの？」

「えっと、朝のニュースが気になったから……」

「ニュース？」

「見てないの？ このニュース」

「朝は寝坊して見れなかったのよ」

僕はスマホにニュースを表示して彼女に見せる。彼女はそれを見
ると目を大きく開く。

「こ、これ十六夜じゃない！」

「一応匿名だから絶対と言うわけではないと思うけど……僕もそう思
う」

「どどどどど、どういう事!? こここここ、これは!？」

「落ち着いて火蓮ちゃん。朝電話したら結構大丈夫そうだったから命
に別状とかないんじゃないかな」

「そそそそそ、そうね。いいいい、命に別状はないなら、しししし、
心配いらないわよね……」

「全然落ち着いてないね」

彼女は急いでメールを作成し始める。カタカタと携帯を叩く音が
聞こえる。彼女はメールを送った後も落ち着きがない。

席に座りながらずっと机の上に置いたスマホと睨めっこしている。
そう簡単に返信は来ないと思うけど……送ったばかりだしね。

「まだ来ない……まだこない……まだ来ない……まだ」

あつ、これ僕の苦手な奴だ。ちよつと怨霊っぽいセリフ回しで心霊
的なものが思い浮かんで怖くなってしまふ。や、やめて欲しいかも。

「火蓮ちゃん、それちよつと怖いんだけど……」

「まだこない、まだこない、まだこない」

「ヒい！ こ、怖い！ お願いだから話聞いて！」

「何？ 今、忙しいんだけど？ 用事なら後にしてくれない？」

「急に辛辣すぎない!？」

彼女は唐突に辛辣になり対応が氷のように冷たくなった。今日の火蓮ちゃん情緒不安定過ぎない？

喜怒哀楽があつて可愛いのが火蓮ちゃんだ。けれども今日の彼女は、悲しみから疑惑、そこから幽霊。アグレッッシブが過ぎる。

「で？」

「いや、そのまだ来ないってやつ止めてくれないかなって思って」

「ああ、そういうこと。分かったわ」

「ありがとう」

「返信、返信、返信……」

「それもやめて!!」

結局怖い。

四十九話 伝承

私の名前は野口夏子。何処にでもいる普通の華の女子高生である。

「銀堂さん、黒田君ならダイジヨブだよ」

「で、でもニユースに……」

「先生も言ってたけど黒田君って言ってなかった訳だし、先生が風邪で休んでるって言うんだから大丈夫だよ。命に別状とかはないだろうし、今日の休みの原因は風邪だよ」

「風邪ですか……でも、でも、でも風邪が悪化してそこから……」

「大丈夫だって。黒田君体丈夫そうだし」

「大丈夫でしょうか……電話もできないですし……」

「知ってる人から聞けばいいんじゃない？ 男子とかなら知ってるだけ……」

「そうですね……誰か連絡先知ってる人は……」

彼女は教室の男子達を見渡した。知ってるのは佐々本君かな？

けど、銀堂さんも聞きづらいかもしれないし、ここは私が行こう。

「私が聞いてくるよ」

「ええ!?! いいんですか!?!」

「これくらいならお安い御用だよ」

「あ、ありがとうございます」

さて、佐々本君に聞かないとな。私は席から立ち、佐々本君の下に向かった。彼は本を読んでいた。

「佐々本君」

「ん？ なんだ？」

「黒田君の連絡先を持ってるよね？」

「ああ、知りたいのか？」

「まあ、そんなところ」

「……ほれ」

「ありがとう」

彼はスマホに連絡先、電話番号、メールアドレスを表示した。両方を私の携帯に保存する。これで任務完了!!

「それじゃ、ありがとう」

「おう」

ふー、親切だな……親切で感謝すべきなんだろうけど読んでる本がエロ本でなかったら素直に感謝できたんだけど何か複雑な感情になった。

「銀堂さんスマホ出して。連絡先教えるから」

「ありがとうございます」

彼女はスマホに連絡先を登録すると早速長文を打ち始める。カタカタカタ……な、長くない？ 初めてのメールなんだから軽くな感じでいいのでは？

ちよつと〃心配だから連絡したよ♡〃くらいで良いと思うのだが、彼女のはかなりの分量だろう。……一体何を書いて……。

気になった私は背中越しにコツソリと彼女のスマホを拝見する。

『おはようございます。急で申し訳ないのですが十六夜君の容態が心配なのでご連絡させていただきました……』

おっ！ 最初の掴みは最高だね！ 丁寧に簡潔に述べているがそこに相手を思う優しさが垣間見える。うーん、いいね!! 銀堂さん良い感じだよ!!

どれどれ続きを……

『朝のニュースあれは十六夜君ですよ？ 一体何があったんですか？ 大丈夫なんですか？ それともこれは私の考え過ぎなんでしょうか？ 本当に風邪で欠席したのでしょうか？ だとしたらお見舞いに行きましょうか？ おかゆ作りしましょうか？ おでこ冷やしましょうか？ それとも両方できない理由で欠席なのでしょうか？ だとしたら私にできることは何ですか？……』

中盤がダメだ!! ハテナマーク何個あるの!!?? 急に!! 急に質問攻め!! これは怖いよ!!

「ストップ、銀堂さん」

「な、何ですか？ 今忙しいのですが……」

彼女はスマホを隠すように胸に押し付けた。やっぱりそこら辺は

恥ずかしさがあるんだね。思い人に送るメール内容を見られたら恥ずかしいのは分かるけど、このままではダメだ。私がしっかりと中止しないと。彼女が隠したスマホ、そのままスマホが埋もれて完全に見えなくなりそう。おっと脱線した。

「流石にそれはダメ」

「何がですか?」

「重すぎるよ、そのメール」

「え? メールは重くないですよ?」

彼女はスマホをフリフリと振った。いや、確かにメールは重さとかは無いんだけど、そういう意味じゃないんだよ。銀堂さん……。

「あ、そういう事じゃなくて。何ていうか、そのメールだと相手に余計な負担をかけちゃうってこと……なんだ」

「え? このメールでは……ダメなんですか……?」

「えっと、相手を思いやる気持ちは感じる事ができて凄くいいんだけど……何というかオーバーヒートしてると思う」

「お、オーバーヒート?」

「もっとフランクな感じって言うか親しみを感じれて、それでいてあんまり長くない感じがいいんじゃないかな? 初めてのメールのわけだしいきなり長文を送り付けるのも何か……ね?」

「これでも大分抑えたのですが……夏子さんが言うならそうなんですね……」

「あ、それで抑えたんだ……」

彼女は再びカタカタとスマホに文字を打ち始めた。彼女の素直さが良いところなんだよね……さて、どんな感じになったかな?

『ハロー! 十六夜君! 体調大丈夫? めっちゃ心配です! どんな感じか秒で連絡してね!』

うーん、OUT! いや、素直さは良いんだけどこれはダメだよ!?
ハローって!! 秒で連絡!?

「ダメダメダメ!!!」

「ふえ！ きゅ、急に大声を上げないでください！」

「いやだってO U Tなんだもん!! なんて恋愛事になるとポンコツになるの!？」

「ぽ、ポンコツ!? ひ、酷くないですか!？」

「もう、私が一から教えるよ！」

私がそこそこのメールを打った。

「こ、こんな感じでいいのですか？ 連絡は何時でもいいというのは……私はすぐにでも返信が欲しいのですが……」

「相手を気遣わないとね。一応、病人なんだから」

「そ、そうですね。十六夜君は大変かもしれないですよ」

「そうそう、あんまり黒田君に負担をかけないようにしないとね。それを踏まえて相手を心配するのが大事だと私は思うな」

「成程です。……十六夜君は大丈夫でしょうか……」

彼女は悲しそうに顔を歪める。それだけ心配なのだろう。私的に全然大丈夫な感じがするんだけどな……。

「まあ、私は黒田君はびんびんしてるような気がするんだけどね」

「え？ そうなんですか？」

「勘だよ。あくまでね。だから絶対と言うわけではないんだ」

「そうなんですか……でも、夏子さんの勘はよく当たりますからね。この間も株の上昇と下落をピシヤリ当てましたし」

「アハハ、偶々だよ。でも、将来は投資家にでもなろうかな！ なんてね？」

「良いと思いますよ。似合ってます」

「うーん、投資家が似合うって女子高生的にどうなんだろう？」

「あ、す、すいません。悪い意味ではなく良い意味の投資家です」

「ごめん、ちよつとからかったただだから気にしないでいいよ」

「び、ビックリしたじゃないですか！ もう！」

何か、彼女が急に元気になった気がする。一体どうしてなんだろう。

「銀堂さんさつきより急に元気になってない？」

「え？ ああ、そうですね。心が軽くなりました。先ほどまで心配でどうにかなりそうだったのですが……夏子さんが大丈夫って言うならきつと大丈夫なんだろうなって思ったので……」

「そ、そう？」

「はい、だって、その、なんていうか夏子さんは信用できるって言うか……なんていうか、信用と言うか、信頼できる……その、と、友達ですから……」

急に可愛いな。おい。入学当初彼女は他者との壁を作っていた。そこから黒田君とかかわることで少し緩和された。

彼女の恋のサポートということとで少しだけ親密度を得た。毎日、色々恋の話をしているうちに私たちの距離が縮まっていくのは感じていた。でも、本人からこうやって信頼しているという言葉をかけてくれたのは……嬉しいな。

「えへへ、そっか友達か」

「は、はい」

「可愛いなもう！」

「きゃー！」

私は彼女に抱き着いた。すっごい良い匂い、きつといいシャンプーとかリンスとか使ってるんだろうな。髪もサラサラでべたつきとか一切なし。

「な、なんですか？」

「可愛いから抱き着いたんだよ」

「す、するにしてももつと、こう事前に言ってください！ 本当に心臓に悪いんですからー！」

「分かったー！」

私達友達の親密度がさらに上がった!!

そんな朝のひと時。



「我たちはいつまでここで見張っておればよいのじゃ？」

「強いて言うなら災ディザスターいを回避するまで」

「唐突な厨二キャラ……」

俺達は車内から学校を監視していた。時刻は九時近い。目につく所にはもう生徒の影はない。

「もういいじやろう？ 校内に入るのは確認できたわけじや。放課後から監視を再開すれば」

「いや、もしかしたら学校にテロリストが来るといふありがちな展開の可能性がある。その場合はこの車で校内に突撃しないといけませんから待機しましょう」

「ありえんわ!! そして困るわ!! これ我の車!! と言うか最悪が起ころのはもつと先と言ったであろう!! 休憩じゃ!! 休憩じゃ!」

「……確かに休める時に休まないといけませんね」

「そうじやろう、そうじやろう。もしもの時に万全でなければ実力は発揮できないものじや」

占いによるとバッドエンドはまだ先。ここで体力を使いすぎるのも確かに良くない。

「分かりました。では休憩しましょう」

「だったら海鮮!! 海鮮丼食べに行こうなのじや!!」

「ええ、いいですよ。自由時間の間なのですが……」

「ん?」

「現時刻は九時。そして学校が終わるのは大体三時だからお先に昼の十二時まで休憩してください。俺はその間も監視を続けます」

「ええ……? まあ、いいんじゃないが……」

「安心してください。俺の休憩時間は殆ど取りません。貴方が戻ってきたら多少トイレに行くくらいです」

「ええ?」

「車は持つて行つていいですよ。海鮮丼食べてきてください。ただ、食中毒とかは気を付けてくださいね」

「あ、うん。分かったのじや。何故監視を続ける? 最悪はもつと先だと言ったであろう?」

「確かにその通りですね。しかし、今現在最悪に関する情報がない以

上少しでも情報が欲しい。もしかしたら何気ない日常にヒントがある可能性がありますので監視は続行すべきかと」

「今、相手は校内にいるのじゃが……」

「ええ、そこだけは本当に残念です。透明化の『超能力』でもあれば四六時中側にいるのですが……しかし、そんな『超能力』は無い以上できる限りでするしかありません。本当なら校内に入りたいのですが通報されてしまう可能性がある以上外で待機するしかない……ということです」

「そ、そうか。普通にとんでもないことを言っておるな……まあ、我は少し休憩させてもらおうかの」

「はい、どうぞ」

彼女はここまで運転をしてくれた。疲れが貯まっているだろう。休息を与えるべきだ。三時間だが。

俺は一旦車から降りて校門の前の陰で待機する。ここ女子高だからな。男がいるだけで怪しまれても不思議ではない。

占いの車が見えなくなるとスマホに連絡が届いた。

うーんと、あつ火原火蓮からだ。えつと、なにになに……ああ、彼女もか……ニユース匿名の意味が……。

携帯が再び振動した。今度は銀堂コハクからか。彼女は……おお、普通に風邪の心配だな。まあ、二人に心配かけたくないし、実はぴんぴんしてて海にいると正直に言うしかないな。

とりあえず二人には早く返信して何か監視とヒントを……

「おや、見かけない子だね」

「あ、どうも」

「観光かい？」

「ええ、まあある意味観光ですかね」

年配の女性だ。地元の人だろうか。うーん、この人に何か聞いてみるか。何か怪しい集団とか狂人とかがいらないか。

「あの、この町ってどんな感じですか？」

「良い町だよ。事件なんて滅多に起きない平和そのものって感じだよ」

「はあ、なるほど。何か怪しい人とかは居ないですか？」

「あまり聞かないね」

下手人は地元民ではない……のか？ それとも火原火蓮のバッドエンドの坂本典礼みたいなのに、本性を隠している？

色々想定する方が良いかもしれないな。

「それじゃあ、最近何か変わった事とかはないですか？」

「うーん、特に無いねえ。ああ、でももうすぐお祭りがあるよ」

「それはどんな祭りですか？」

「この町に古くから伝わる陰陽師を奉るお祭りなんだよ。昔々にこの土地に大きな災いを齎した“夢喰い”という妖怪がいてね。それとある陰陽師が封印したことに人々が感謝を示すために催しを何かしようというのが始まりなんだよ」

「……そんなことが……」

「ほほほ、今時こんな話を信じる若者はいないから伝承が忘れられつつあるんだけどね……」

これはバッドエンドに係るかもしれない。ifストーリーは物語なのだ。作者が意味ありげな伝承を話の筋に絡めても不思議ではない。意味もない可能性もあるが、俺はこの町について全く知らないので念のためもっと詳しく聞きたい。

「その伝承もつと詳しく聞きたいのですが」

「ほほほ、物好きな若者だね。ただ申し訳ないけど私もそういう伝承があるということしか知らなくてね。細かい部分は分からないんだよ」

「そ、そこをなんとか」

「そんなに知りたいのかい？ この町の図書館に古い文献があるから見てみるといい、それとこの町長はこういった事に詳しいから聞いてみるといい」

「そうですか。ありがとうございます」

「ほほほ、私も久しぶりに面白い若者にあえて楽しかったよ。ありがとう」

そう言うと、おばあさんはその場から歩いて行った。サンバイザー

をしながら歩いているから散歩でもしていたのだろう。あのおばあさんが言っていた“夢喰い”何か不吉な予感がする。

この町の伝承も詳しく調べた方が良いかもな。

五十話 伝承2

十二時まで女子校の前で待機していたが、校内の様子に変化はなく、手掛かりを掴めなかった。こうなったら伝承に詳しいという町長に行くしかないかな……。

近くに見覚えのある車が停まった。占い師が帰ってきたのだ。俺はドアを開け、用件だけを話す。

「すみません。ここしつかり監視してください」

「い、いきなりじゃな……」

「と言うわけでお願ひします。もしなんかあれば連絡お願いします」

「う、うむ。テンポが速すぎぬか？」

よし。図書館に行つて文献を見てみよう。それから町長を訪ねてみる。アポイントなしで会つてくれるだろうか。



「ううっ、返つて来ません……」

「まあ、まだお昼だから……」

「で、でも遅くないですか？ 三時間以上返事が来ないんですよ」

「そ、そう言うときもあるよ。スマホの充電がないのかもしれないよ。」

それとも水の中に落として壊れたりしたのかもよ」

「そうですね！ 何か訳があるんですよ!!」

「うん、そうだと思うよ。あ、ごめん私そろそろ委員会に行かないといけないから」

「私に付き合つてくれてありがとうございます。頑張ってください」
「うん。またね」

夏子さんはお昼休みを委員会の集まりに費やすようだ。今日私は誰と昼食を食べよう？ 十六夜君も夏子さんもない……。

そこで、教室の扉が開く。

「あつ、やっぱり十六夜いないんだ……」

「だから火蓮ちゃん言ったじゃない、今日は海に行つてるからいないつて」

私が今一番嫌いな人ランキング第一位の火蓮先輩と萌黄先輩だ。

二人とも十六夜君を探しに来たんだろうけど……ちよつと待って、海って何だろう？

「あの、萌黄先輩海ってどういうことですか？」

「え？ ああ、何か彼は海にいるみたいだよ」

「それをどうして萌黄先輩が知ってるんですか？」

「ひい、ちよ、ちよつと怖くない？」

「そんなことないですよ？ それよりキリキリ吐いてください」

「いや、ただ電話で聞いただけで……」

「何故？ 電話番号を？」

「そうよ、萌黄キリキリ吐いて」

「ひい、二人してええ!!」

「ここでは話しづらいですか？ でしたら屋上に行きましょう」

「そうね、行くわよ」

「ちよ、なんでこういう時に限って協力するのさ!!」

私と火蓮先輩で彼女の腕をロックして屋上に連行した。彼女の事はあまり好ましくはないが、こういう時だけは何故か物凄く共感できる。



何故か僕は二人に屋上に連れていかれた。この二人はいつもバチバチやり合っているのに偶に物凄くかみ合うときがある。僕は救われたのだから変だとは言わないんだけど……

「それで何故十六夜君の連絡先を？」

「そうよ、吐きなさい」

二人は静かに尋問を開始した。屋上で美女二人に挟まれるのは僕的には凄く嬉しいのだが……嬉しいはずなのだが……恐怖しか湧いてこない。空は爽やかな青のはずなのに黒い雲に覆われていると錯覚してしまう。

「あの、彼から渡してきて……」

「え？ 十六夜君から？」

「どういうこと? いつの間にたぶらかしたの?」

「ち、違うよ。そ、その僕に気を遣ったんだと思う……困り事があつたから彼が仕方なく僕に連絡先を言ったんだと思う……」

「本当ですかあ?」

「体に聞かないといけないわね」

「ええ!」

彼女達はいきなり僕を押し倒して馬乗りになった。そして、両腕をロック。

「ちよ、ちよつと急すぎない!」

「脇くすぐりの刑に処します」

「ええ!?! なんで!?! 本当の事言ったのに!?!」

「私より先に連絡先を貰っていたのが気に喰わないです」

「完全に八つ当たり!」

「私は萌黄が嘘を言っている可能性を示唆して仕方なく脇をくすぐるわ」

「ええ!?! 嘘なんてついてないよ!?!」

「口では何とでもいえるんですよ」

「そうよ、そうよ」

二人は捕食者のように指を脇に近づける。嬉しいような怖いような……。

「それでは取りあえず十分耐久でいきますよ?」

「早めに本当の事を言う事ね」

二人の影が僕を覆った。

『ちよ、アヒ、いいいい。あはっはは、や、やめて! くすぐりたいからああつあ』

とりあえず十分耐久した……。



「はあ、はあ、はあ、ひ、酷いよ。はあ、もう、じゅ、十分はやり過ぎ……おかしくなりそうだったよ……」

「すいません。萌黄先輩」

「悪かったわね」

「全然悪く思っていないね……」

二人は一切悪く思っていないようで、謝罪をしているが気持ちも込められないのはすぐに分かった。僕は今肩で息をしながら腰を下ろして呼吸を整えている。二人も楽な姿勢で座ってはいるが僕とは違い余裕の表情だ。

「あの、結構ガチできつかったんだからね？ 最初はちよつと良い感じかなって思ったけど後半からはマジで変な気分だったんだから」

「申し訳ございません。全く、これっぽっちも気づきませんでした」

「悪かったわね。全然、微塵も気づかなかったわ」

「うそつき!! 絶対気付いてたでしょう!! 途中から二人とも楽しそうだったもんね!! 凄いなやなやしてたじゃん!!」

「ええ？ そうですかあ？」

「うーん？ 私も分からないわねえ？」

二人は首をかしげて互いにアイコンタクトしながらとぼける。

「ううっ、二人ともまだお風呂の事根に持ってるの？」

彼の家に泊ったとき僕は二人に対して結構物凄い事をした。コハクちゃんを好き勝手にして火蓮ちゃんを拘束した。まだそのことを根に持っているのだろうか？

「全然持ってませんよ」

「私も持ってないわ」

「そ、そう？ いや、根に持ってなかったとしてもあれは酷いよ。限度があるよ……」

「ごめんなさい萌黄先輩。揚げパン奢りますから」

「悪かったわね。萌黄の悶える姿が可愛いかったからもっと見たくなっちゃったのよ」

「いや、絶対悪いと思ってないし、絶対根に持ってるでしょ!? ニヤニヤしてるし!？」

この二人絶対根に持ってる。

「まあ、萌黄先輩が十六夜君をたぶらかしてなくて安心しました」

「そうね、良かったわ」

「それにしても何故十六夜君は海にいるのでしょうか？」

「十六夜の行動は私達には測れないから考えても仕方ない気がするけど……未だに連絡が返ってこないのよね」

「私もです」

急に二人の雰囲気为重くなった。なんだろう、情緒が不安定過ぎる……。

「ですが、私の親友の夏子さんが十六夜君は大丈夫と太鼓判を押してくれているので命に別状はなくピンピンしてると思います」

「なんでそんなことわかるの？」

「夏子さんの勘は物凄く当たるんです。百発百中、外れたことはないんです」

「何それ？ 超能力？」

「本人は勘としか言っていないませんがどうなんですかね？」

「まあ、どうでもいいか。命に別条がなくてぴんぴんしてるなら。それより問題は何で私達に返信をしないのかってことよ」

「萌黄先輩だけ事情を知っていたということは先輩にだけ返信をしたということですよ。まあ、時間が合わなかったということもありえますが……」

「どうなのかしら？ 本人に聞きたい所ね……」

「ええ……面と向かって直接……」

「そうね……帰ってきたらまた十六夜の家に集まりましょう？」

「それは良いですね……」

「フフフフ」

いやいやいやいや。怖い怖い怖い怖い。何なのこの二人？ 可愛くて僕は大好きなんだけど偶に本当に怖い。

で、でもこれって僕が電話したからややこしくなってるのかな……

いや、僕のせいじゃないな、うん。

はあ、今日はいい天気だな。僕は青い空を見渡した。澄んで気持

ちのいい空のはずなのに遠くに雷雲が見えた気がした。



時刻十二時十二分。図書館に到着した。ありふれた内装ではあるが設備はまだ新しく綺麗だ。目的の本を探し出すのに時間がかかりそうだったので司書に尋ねることにした。

「あー」

「なんででしょうか？」

返却された本を本棚に戻している女性職員に話しかける。彼女は眼鏡を掛けており知的な印象を抱かせた。

「この町の伝承とか伝説とかの本ってありますか？ 特に“夢喰い”って言う妖怪？ 怪異？ その辺は良く分からないのですが……」

「ああー、見たことはありますが……何処だっけな……少々お待ちください」

「はい、わざわざありがとうございます」

心当たりがあるようだった。高校前で話した年配の女性によると、夢食いへの関心が薄れているとのことだったので、すぐに文献に行き着けるのは幸いだ。数分後、職員は一冊の古書を持ってきてくれた。物凄い年季が入っているな……。

「こちらですね。大分傷んでいるので扱いは十分気を付けてください」

「はい、ありがとうございます」

「いえ、お気になさらず。仕事ですので」

彼女は笑顔でそう言ってくれた。良く出来てるな。本を受け取ると座れる場所を探す。館内には年配の方が少しいるだけだった。平日の昼飯時という理由もある。

さて、早速机の上に本を広げる。古い……かすれて読めないところもあるぞ……。

ええつと……

『嘗てこの土地に妖怪あり。夢を喰らい、人の精神を喰らい、魂を喰らう。数多の人々が身を残して死に至った……滅亡しかけたこの土地

を救ったのは一人の陰陽師。封印を施しこの土地を救った。その功績をたたえ後世に伝えるべくこの土地にて催しを毎年行う……」

うむ、うむ、ほほー。この本……くつつつつつそどうでもいいな。肝心なことが書かれていない。俺はどうすればこの妖怪に勝てるのかを知りたいだけで、祭りの由来を調べているわけではない。大筋はあのおばあさんからすでに聞いていたし、それに俺は伝承とか興味ない。

どこにも対策が載っていない。クソ。無駄足だな!!

はあー、しょうがない。急いで町長の所に行くか。

「おや、やっぱりここに来てたんだね」

「あ、どうも」

先程のサンバイザーを被ったおばあさんだ。腰が全然曲がっていない姿勢の良さ。健康の証だな。

「どうだい？ 望みの情報はあったかい？」

「いえ、ありませんでした。俺は“夢喰い”の倒し方を知りたいのですがこの本には載っていませんでしたね」

「そうかい、だったら町長の所に行くんだね？」

「はい」

「だったら饅頭を持っていきな。あの町長は気難しいが手土産を持っていけば一発さ。いつも老人会じゃ気難しさが目立ってるんだよ。水泳教室の時もみんなして気を遣ってね。だから素早く話を聞きたいなら手土産は必須だよ」

「なるほど、ありがとうございます。それでは……」

「ちよつと待ちな」

「はい……」

色々教えてもらったのに愛想よく対応できず気が引けるが、俺には時間はあまりない。下校時刻までに情報を集めておきたかった。急いで町長の所に行きたい……。

「“夢喰い”の倒し方が知りたいんだっただね？」

「ええ、まあ……」

「絶対とは言えないがね。目には目を歯には歯をと言う言葉がある。

もしかしたら夢喰いに対抗するには『夢』かもしれないね」

「?? どういうことですか?」

「ほほほほ、私にも良く分からないね。なんとなくそんな気がするというだけだよ」

「そ、そうですか。すみません。俺急ぐので」

「ああ、すまないね。止めてしまつて」

「いえ、謝る必要はないですよ。ありがとうございました。助かります」

俺は急いで館内を走つた。そしたらスリッパを履いていたため足がもつれて転んでしまう。

「だ、大丈夫ですか?」

「はい、先を急ぐので」

先程の職員が俺を心配してくれる。クソ、少し血が出てるな。転ぶなんて俺も疲れがたまっているのかもしれない。

「……大分お疲れの様ですね」

「ええ? そうなんですかね?」

「はい、あまり無理をなさらぬように」

「ありがとうございます。失礼します」

忠告を聞かずダツシユでその場を後にする。

「館内は走らないようお願いします」

「あ、はい」

——俺は早歩きに切り替えた。

初対面の人に疲れを見抜かれるなんて、自覚はなかったが疲れた顔をしているのかもしれない。

まあ、片海アオイさえ救えれば俺がいなくても「魔装少女」の物語は良い方向に進む。頑張ろう。

ああ、でも全部終わったら今まで頑張つた分、そしてずっと気を張つてた分が一気にきそうだな……。

俺は饅頭屋に向かって走つた。



「すいません。饅頭ください!」

「おお、いらつしやい。見ない顔だな」

元気の良さそうな店主さん。話してる余裕はない。

「一体どこか……」

「これください!!」

「ああ、わ、分かった」

「はい、一万で足りますよね?!?!」

「え、あ、うん、そうだな……」

「釣りはいらねえぜ!!」

「おお、毎度あり……」

俺はそこからダツシユで町の役場に向かった。現時刻は一時四十分。学校が終わるのは大体三時だから急がないと……。

図書館で大分時間を使ってしまった。急いで町長さんの所に向かわないと……。

俺はこの町を再び駆け抜ける。今度こそ実用的で間違いない情報が手に入るといいんだが……。

俺は不安と微かな希望を胸に抱いた。

五十一話 遭遇

町役場に到着した。役場の場所はおばあさんから聞いていたため道に迷うことはなかった。

夏が過ぎ去った後とは言え、走り続けたので汗が吹き出してくる。所内ではクーラーが効いていたので涼しい……と言うか肌寒いくらいだ。まあ、汗をかいていたからこれくらいがちょうどいい。

「あの、町長さんついていますか？」

「えっと、どのような御用ですか？」

「町の伝承について聞きたくて」

「ああー、確かに詳しいですねー。少々お待ちください」

中年くらいの男性職員は奥の部屋に入って行った。町長は時間をくれるだろうか。事前に連絡しておいた方がよかったかもしれないな。と言っても、会わないという選択肢はなかった。そう考えれば強引ではあるが押し掛けるのも悪い手ではないかもしれない。……数分待つと中年男性が戻ってきた。

「一応、許可は貰いました。ただ町長はかなり気難しいお方なので……そこら辺はご容赦ください」

「はい」

町長室に入る。歴代町長の写真が壁の高い位置からこちらを見下ろしていた。豪華な装飾が施された木製の広い机。来客用のソファーに腰かけている気難しさ全開のおじさんは、立ち上がる気配すら見せない。

「お前が町の伝承について聞きたいという若者か？　しかし、この町の伝承をそう簡単に余所者に……」

「伝承と言うより“夢喰い”にあった時の対処法が聞きたいのです。あ、これ饅頭です」

「ふん、こんなもので釣ろうとは片腹痛い」

「と言いつつ饅頭を自分の隣に置いた。」

「さて、“夢喰い”についてだが……」

話が早くて助かる。小言を言われのはあまり好ましくない。

「五百年以上前の存在でありこの町に信じている者はいない。例外はいるがな……この妖怪は象の姿をしており、人の中に潜り精神に大きな負荷をかける」

「対処法はなんですか？」

「陰陽術で封印が無難だな」

「使えません。他には」

「うむ、これはかなり難しい方法であるが……」

「気にせずどうぞ」

「うむ、〃夢喰い〃は人の精神を汚染する。だが自身の夢を自由自在に操作できれば退治することができるかもしれん……」

「夢ですか……」

「夢の中の経験は現実には百パーセント反映はしない。しかし、悪夢を何回も味わえばそれは精神に大きな影響を与える。嘗ての人たちも植物人間のようになってしまう」

「確かに夢も多少現実に影響はありますね……」

前に銀堂コハクに刺された夢を見たとき目が覚めると思わずお腹を擦ってしまった。あのおばあさんの言っていた通り、やっぱり夢でしか対策できないのか……。

「だが、それは妖怪でも同じこと。限りなく現実に近い夢が人間の精神に大きな影響を与えるなら妖怪の精神にも影響があってもおかしくない」

「な、なるほど？」

「私を知るのはここまでだ」

「どうしたら夢を操れますか？」

「それは……私にはうまく説明できないな」

「……それでもいいです」

「……強烈で明確で鮮明なイメージが必要だ」
「？」

「私より詳しく説明できる者がいる。ここからは、この町に住む陰陽師に聞くと良い」

「ええ!?! いるんですか!?!」

だったらそいつに封印してもらえば全部解決じゃないか!! まあ、まだ妖怪がバッドエンドに絡んでると決まったわけではないが陰陽師がいれば百人力だ。

「しかし、その陰陽師は大分気難しい」

「そうですか……」

気難しい人多くないか、この町。

「私から連絡を入れておこう。そして手土産にはサバの味噌煮を持っていくと話がしやすいだろう」

「はい、ありがとうございます」

「今時、こんな昔の伝承を聞きに来るとは珍しい。この町の住人ですら興味など微塵も持たないのだが……」

「もの好きなんですよ。それでは失礼します。ありがとうございますました」

「後これを持っていくといい」

「これは？」

「悪しき者が近づいたときに反応する宝玉だ」

「は、はあー。これが？」

「そうだ。持って行け。伝承といったものに関わるときは注意した方が良いからな」

「ありがとうございます」

見た感じただのビー玉だ。しかし、貰えるものは貰っておこう。この人良い人だなあ。

その後、俺は陰陽師の末裔の住所を教えてもらい部屋を辞した。時刻はすでに三時になろうとしていた。そろそろ彼女は学校を出るはずだ。下校中に一度接触を持ちたかった。陰陽師に会うのは明日の午前中にしよう。

役場の外に出るとー

「おや、町長から話が聞けたようだね」

「あ、どうも」

「ほほほ、次は陰陽師かい？」

「ええ、行くなら明日になります」

「ほほほ、頑張りなさい」

おばあさんはそのまま歩いて行ってしまった。

この時、慌てていた俺は気付かなかった。俺が陰陽師に会いに行くことを彼女は知らないはずだった。



時刻は二時五十分。僅かに息を乱しながらも車内で監視を始める。

「何か変化はありましたか？」

「ないの。いたって平和じゃ」

「そうですか……」

「お主は何か掴んだのか？」

「少し気になることがありました」

「ほお、それは？」

「夢喰いという妖怪がいるそうです。それが何か関係あるのかまでは分かりませんが」

「妖怪か……我も見たことはないがないという確証もない……か……」

「占い師が存在するんですから妖怪もいても不思議ではないです」

というかこの世界には妖怪が実在する。『ストーリー』にはあんまり出てはこなかったが……。

「しかし、かと言って妖怪が関わると言ったわけではないともいえるの」

「ええ、だからこそ今回は何としても守護霊ポジにつかないと」

「?? まあ、ほどほどにの」

「ええ」

数分待つと女子高生たちが続々と校内から出て帰宅していく。そこに一人ぼつんと歩く片海アオイ……。

彼女は控えめに言っただけだ。

そして、見た目は結構強めだが、内心はかなり可愛い。例えば好き

な物はシンデレラ、ぬいぐるみ、スイーツ。趣味は散歩、スポーツ、料理。

意外と友達が欲しいと思っていたり、相手に強く当たってしまうことを気を揉んでいたたり、オツドアイを気にしていたりする。

お化けが苦手だったり寂しがり屋だったりと黄川萌黄と重なる部分も多い。しかし、黄川萌黄と違って彼女は感情を表現するのがとてもなく苦手だ。

そんな彼女をこれから尾行しなくてはならない。しかも、車に乗りながらでは守護霊ポジにつけないので俺一人で行かなくてはならない。

「それじゃあ、一旦俺は歩いて尾行するので何かあったら迎えをお願いします」

「うむ」

俺は車から出て片海アオイの後をつける……。

◆◆

彼女は一人で帰り道を歩く。今このポジションよりは守護霊ポジに行きたい。

どうやって話しかけようか……どうやって仲良くなろうか……。

彼女の前に一匹の野良犬が現れる。ワンワンと吠えてグルグルと威圧する。彼女は僅かに驚き一步下がる。ここで俺にあるビジョンが見えてしまった。

噛まれる↓感染症にかかる↓死亡↓バッドエンド

僅か一秒で俺は先を見通した。ここはあの犬を撃退しないとけない!!

「危ない!!」

「きやー!」

彼女の前に慌てて立つ。野良犬と向かい合う。

「くっ、大丈夫ですか!!」

「え? あ、え?」

「急いで逃げてください!!」

「……いや、ただの犬なんだけど……」

「細菌を持っている犬かもしれません」

「変わってんね。アンタ……この犬この辺りじゃ結構有名な犬だから大丈夫。吠えて人ビビらせるけど何もしてこないから」

「どうですかね。今日に限って噛みついてくるかもしれないから」

「このままアンタが威圧をやり続けたら噛みつくかもね。とりあえずその犬は大丈夫だから。あーしも昔から知ってるし、そもそもこの犬、飼い主いるからケアとかはばっちりだよ」

「ガチですか?」

「がち」

何だよ。ビビらせやがってただの犬かよ。こいつはバッドエンドに関係なさそうだな。そもそも犬に噛まれてから始まるバッドエンドって……なさそうだな。

どの話にも共通するが、やっぱり過度な演出があったりする。犬に噛まれるって言ってみれば地味だよな。ふうー、とりあえず何てことなくて良かった。

さて、偶然ではあるが違和感がなく彼女との初対面を果たすことができたと思う。

この機会を逃したくない。そのまま何もせず別れたら次に声をかける口実がなくなってしまう。

彼女は友達を欲しているから友達的な感じで……近づこう……言い方悪いな。親しくなろう。うん。

いつの間にか犬は去って行った。

「あの犬知らないってことはアンタこの辺の者じゃないでしょ」

「ええ、まあ……」

物凄く睨まれているように感じるが、本人にはそんなつもりはない。目つきの悪さ、オツドアイ、強い言動は、彼女のコンプレックスなのだ。恐らく心の中では気を遣っている。落ち着いた雰囲気彼女が会話を続けた。

「何でここに来たの?」

「観光です」

「ふーん、一応礼は言っておいたげる。サンキュー」

「いえ、勘違いなので……お礼を言われるほどでは……」

「だとしても庇おうとしたわけだし」

「そうですか。ではどういたしまして」

「……………」

彼女は鋭い目を向けた。片方は前髪に隠れており両目を見ることはできないが、彼女の目には少しの色が含まれている。

「えっと何か？」

「アンタ、ビビんないの？」

「何にですか？」

「いや、あーしの目とか……」

「ビビらないです」

「そ……」

ああ、そういう事か。彼女は中学校の頃にこの辺りに引越してきた。前の学校でも今の女子高でも目つきが悪いことで驚かれたり周りが自分を遠ざげるから俺の反応は新鮮なのか。

『ストーリー』でも最初は皆ノ色高校の生徒達に驚かれるが、『魔装少女』銀堂コハクや火原火蓮、黄川萌黄は物怖じせず受け入れるんだよな。そこから友情が生まれる。

距離を置かないだけで、こちらが想像する以上に彼女は嬉しいのかもしれない。

全く、こんな可愛い子を遠ざけるとは見る目がない。目つきが悪いくらい大した問題じゃない。そこが良いとすら思う。オツドアイもチャーミングだ。こんな彼女が酷い目に遭うなんて絶対に避けなくてはならない。どうやったら彼女と共に……

はっ!! 良いこと思いついたぞ。観光案内してもらおう。それなら情報収集しつつ彼女を守れる。一人で出歩かれるより観光案内と称して一緒にいる方が良い。彼女の予定には問題ないはずだ。『ストーリー』によると、彼女の両親は共働きで家にいないし、彼女は放課後を趣味の運動に費やしている。

彼女は趣味で習慣的に散歩したり走ったりする。その習慣は彼女が幼いときからずっと続いている。今日も放課後は運動をするはず

だ。

しかし、派手に町中を動き回るのは抑えて貰おう。彼女の運動神経はかなりのものだ。素の身体能力も高い『魔装少女』でも彼女のランニングについて行けるのは黄川萌黄だけだ。そのとき銀堂コハクと火原火蓮は横腹を抑えてダウンしていた。

「あの、俺この町の事全然知らないので宜しければ案内してもらえませんか?」

「え? マジ?」

「あつ、ナンパじゃないですよ?」

「いや、そこは疑ってないけど……初対面なのにかなりグイグイ寄ってくるなって」

「人の縁を大事にするのが信条なので初対面とか俺には関係ないんですよ」

「……………ふーん、初対面でも関係ないね……人の縁を大事にするとはいい」

「あーしに頼むなんてね……物好きもいるもんだ……」

片海アオイは自分をかなり卑下するときがある。自分に友達は出来ないとか、避けられるのは自分が悪いとか。俺は彼女の良いところを沢山挙げられる。だがこういう時の彼女は嫌いだ。

「あんまり自分を卑下しないでください。貴方は魅力的ですよ。かなり!! かなり!!」

「…………」

「あつ、ナンパじゃないですよ?」

「いや、そこは疑ってない……まあ、いいよ。案内してあげる」

「お願いします」

「一回家帰って荷物置いてからでいい感じ?」

「良い感じですよ」

「そ……じゃ一旦あーし家に帰るからここら辺で待ってて」

「いえ、ついて行きます」

「マジ? バリグイグイ来るじゃん……」

「あつ、ナンパじゃ」

「それはもういい。……うーん……まあ、いいか。それじゃ面白いものないけどついてきたら?」

「そうします」

彼女はゆっくり歩きだした。俺は彼女について行く。これで彼女の側にいることができる。

俺の言動に違和感を持たれるかもしれないが、追い払われるほどでもないだろう。今までも大分強引だったわけだし。気にする事じゃない。しかし、これで彼女の現住所が分かることになる。

よっしゃ、自宅把握したぜ!! ……俺変態みたいだな……いや、大丈夫だ。今回で最後。彼女達を救うまでは泥をかぶると決めたんだ!!

片海アオイを救ったら真つ当な人間になるぞ!! ストーカーもしない。無理にキスを迫ったりしない平凡で真面目でただの傍観者。ただのモブ。

彼女達を救ったら普通になると俺は誓った。

五十二話 観光

彼女の住んでいる一軒家の前で俺は待機していた。この大きい家にほぼ一人暮らしか……彼女の両親は夜には帰ってくるが家に誰もいないは寂しいよな。俺も偶に家が物凄く広く感じる時がある。「お待た」

「全然待つてないです」

先ほどまで彼女は女子高の制服姿だったが、水色のパーカーに動きやすそうな黒のレディースパンツといったラフな装いで家から出てきた。

いやー、映えるな。世界に拡散したい……。

俺がまじまじと見ていると、彼女は少し身を引いた。

「え？ 何？」

「あ、いや、何でも無いです。それより案内お願いします」

「ああ、うん」

いやー、クール系美女っていいなー。カッコ可愛いなー。

俺は彼女のボディガードのように横に陣取り、あらゆる方向に気を配りながら歩く。

「新手のギャグ？ それ？ あーしに突っ込んでほしいの？」

「すみません、癖なんです」

「いや、どんな癖？ 目つき悪い女とそれを庇うように周りを常に警戒する男って怪しさベリーマックスなんだけど？ さつきから通り過ぎる子供たちの視線が突き刺さってヤバいんだけど？」

「これ……ばっかりは……」

「……はあー、ほどほどにして。じゃないとここで観光案内終わり」

「はい、ほどほどにします」

その後、彼女に五回止められるよう注意されたが、六回目からは何も言わなくなった。



町並みは、都会と田舎どちらに近いかわかると言われたら田舎に近い。スーパーマーケットやコンビニが数店あり、商店街には店が立ち並び

活気に溢れてこそいるが、遠くを眺めると必ず自然が目に入る。

「この町は荒事とか起きないからそんな警戒しなくてもいいんだけど……って言っても無意味か」

「はい」

「はいって……メンタル強いね、アンタ」

「いやー、それほどでも」

「マジで強いね。ちよつと尊敬するわ」

彼女の言う通り、確かに平穩そのものという印象を受ける。なんと
言うか、町全体に吹く風の心地よさとか……風の違いななんて本当は分
からないが、なんとなくそんな感じがする。

偶にすれ違う住人は老若男女問わず優しそうなオーラをしている。
オーラなんて本当は見えないのだが何となくそんな気がする……こ
の町で陰惨な事件が起こるなんて考えにくい。

「ここが海鮮市場。新鮮な魚を大声で売るところ」

「いやー、賑わってますね」

「お土産も充実してるからね。この町の人だけじゃなく外から来た人
も良く使うから」

「ほえー。ちなみにですが、この市場にいきなり魚ではなく外から来た人
体するような狂人はいたりします?」

「いない。その発想するアンタがヤバいと思う」

「この市場はよく使いますか?」

「結構メンタルに響くような事言っちゃったんだけど……ダイヤかよ
……使わない」

「そうですか……」

「次行くよ」

「おけです」

ここには気にかかることは特にないな。テレビに映る魚市場のイ
メージそのものだ。彼女はここを利用しないらしいから、優先して探
索する必要もないだろう。放置でいいか。

「そう言えばアンタの名前聞いてなかった。あーしは片海かたうみアオイ」

「俺は黒田十六夜です。よろしくお願いします」

「よろ。それじゃ行くか」

「よろです」

「……」

「？」

「からかつてる？」

「いえ、全然そんなことないです」

「そ」

「そうです」

「……」

彼女の歩みが少し速くなった。



次は、この町の最大の特徴である綺麗な海。

「ここが見てわかるように海と人気の砂浜」

「なるほど」

砂浜にはエンジョイ勢のリア充達が多くいた。カップルが追い駆けっこしていたり、小学生達が砂でお城を作っていたり、サーファー達が海に挑んでいたたり。

「この海には怪しい人は……」

「いない」

「そうですか」

「何でそんなことばつか気にすんの？」

「癖で……これ……ばつかりは……」

「……深くは聞かないでおく」

「それより、この町の都市伝説と言うか伝承とか聞いた事あります？」

「え？ あー、何か聞いたことあるような……」

「どんな感じですか？」

「えっと、この町何個か伝承あるらしいけど幽霊が心優しい人間を助けるってやつなら聞いたことある」

「初耳です」

そ、そんな伝承が？ こ、これはバッドエンド関係なのか？ でも、

助けるって言うから大丈夫なのか？　と言うかこの町伝承多くね？
詳しく聞いてみよう。

「でも、助けるって言っても対価が必要らしい」

「対価ですか……優しい人は無償で助けて欲しいのですが……」

「いくら幽霊でもリターンが欲しいんじゃない？　親切には裏があつたりするものだし」

「そ、そうですね……」

「昔は髪の毛とか片目とか取られたって場合もある」

「ええ？　優しい人めっちゃ損してませんか？」

「所詮伝承だから気にすることは無いと思うけどね……」

彼女の表情が少しだけ強張った。心霊が苦手な彼女に聞くのはどうかと思ったが今回は我慢してもらおう。幽霊が人助け……ええ……マジかよ。あんまり心霊系は来るなよ。

「まだ、見ていく？」

「もう大丈夫です」

「それじゃ、次行こうか」

「おけです」



次に彼女と向かった先には何百段と続く階段があつた。この上に
あるのは神社か何かか？

「この先には何かあるんですか？」

「神社っぽい何か。でも古いし小さい。それより上からの景色がい
い」

「……何か悪霊がいたりとか……」

「ないよ、あーしずつと此処に通ってるから」

彼女は軽くステップを踏むようにテンポよく登って行く。彼女の
背を追っていると、ポケットに振動を感じた。……着信でもあつたか
？　しかし、ポケットに入れた手に触れたのは、スマホではなくビー
玉だった。確かに振動している。

「此処はやめときましよう」

「え？ 景色が絶景であーしの推しなんだけど？」

「ここには悪霊的な存在がいそうです」

「何で分かんのか？」

「とある人から貰ったこの悪しき者に反応するビー玉が……」

翡翠色のビー玉が小刻みに震えていることを彼女に確認してもらう。彼女は興味深そうに眺めると、それならと踵を返す。

「へえー、あーしは幽霊とか怖くもないし信じないけどアンタがそういうならここはパスしとく」

「そうしてください」

彼女は早めのテンポで階段を下りる。大分怖がつてるな……。それにしても、この神社調べた方が良さかもな。

そのまま色んな所を案内してもらい、彼女を家に送って今日は解散となった。



今日もいつも通り学校では怖がられた。皆あーしを怖がつて避ける。目が怖いつて、ひそひそ言っているのも聞こえる。

その帰り道、人に吠えまくることで有名な犬を見かけたとき、同じ年ぐらいの男の子と出会った。

そいつはあーしを怖がらなかつた。……あーしの目を真つすぐ見てくれた。……久しぶりに同年代と話した。あーしの尖つた言い方を気にしているような感じもない……。オカルトの話はあんまりしないけど……。

奇抜な言動が目立つ変わった奴だけど、一緒に過ごした時間は案外有意義だったかもね……。



『台風が海原町付近を直撃する恐れが……』

この町の情報を流すラジオ放送を車内で聞き流しながら、気になった事をメモをしていく。

「それでどうじゃった？ 大海の青との交流は？」

「楽しかったですよ。本当ならもっと楽しかったのでしょうが」

「我の方が色々伝承について調べたが大した情報は無かったぞ。怪しい人物もなしじゃ」

現在、占い師と二人で彼女の家の前に停めた車の中にいる。貰ったビー玉を車のメーターの上に置いて、それを時々確認しつつ彼女の家の様子を伺っている。

「そのビー玉本当に使えるのか？」

「多分、マジ物です」

「ほう、こんなビー玉がの」

「このビー玉が震えたらヤバい証拠です。何かが近づいてるとい感じだと思います」

「そうか、では一旦我が夕食やらなんやらを買ってくる」

「はい、お願いします」

彼女と交代で監視や買い出しを行っている。深夜も時間交代で監視を行う予定だ。あの人滅茶苦茶良い人じゃないか？ 全部終わったら高級ハムとかスイートポテトとか謝礼を送ろう。



翌日。午前七時。占い師さんが隣で爆睡している。

我が母、そして火原火蓮の母である火原孤火奈もそうだけど、この人も結構お年を召していらっしやる割に見た目が若いんだよね。年齢と見た目が噛み合わないってのは二次元あるあるだけど、実際に見ると戸惑うこともしばしばある。

夜十二時から三時まで占い師が監視し、それから俺に交代して今まで見張り続けた。今日は彼女の登校について行く。観光してたら偶々見つけたとか言い訳して無理やり合流しよう。

……彼女、女子高……か……視線がきつそうだな……。ま、まあ今回だけだし。頑張ろう!!

——女子高生の物凄ひひそひそ話に晒され、さらに片海アオイに軽くキレられたが、何とか無事彼女を学校まで送り届けることができた。

——彼女には申し訳ないが、この短い期間だけは耐えてもらわなければならぬ……。

——放課後、謝ろう。



町長から陰陽師の住所を聞いていたため、彼を探し回る必要はなかった。手土産であるサバの味噌煮は昨日の内にスーパーで購入済みだ。

俺はサバの味噌煮を持って陰陽師の住まいを訪れていた。日陰が沢山あって涼しくて眠りやすく住みやすそうな場所だ。ちよつと肌寒い感じもするが……これくらい普通か。

しかし家は古そうだな……ギリ人が住めそうな感じはするがゴキブリとか出そうで嫌だな。

インターホンすらない。鐘があるのでそれを鳴らす。

「ごめんください」

声を響かせると中から足音が聞こえてきた。同時にギイギイと木の床が軋む。たったそれだけで、このあばら屋の住人が住居に対してひどく無頓着なのが分かる。古い扉が開いて中から怪しげな男の人が出てきた。髪は長くぼさぼさで、隈に縁取られた目は死人のようだ。

浮浪者と見紛う怪人だが、この人物が陰陽師ということらしい。聞くことを聞いたらさつさと片海アオイの女子校に戻りたい。

「シユヒヒヒ、君が夢喰いを気にしているという若者だね、ししシツシ」

“笑い方の癖”が特徴的すぎる。とりあえずそれは置いておこう。町長が話を通してくれたようで助かる。

「あ、これサバの味噌煮です。お好きと聞いたのでスーパーで買った

ものですが……」

「デュルフウフフ、ありがとう私はサバの味噌煮に目が無くてね。ただ私の場合買い物に行くところんなりだから色々ね……」

「そうですか」

彼は怪しさを自覚して買い物客に遠慮しているようだ。それより見た目を直した方がいいと思うが、そう簡単に人は変わらないのだから。

「それより、夢喰いの事を……」

「べろろろろ、そうだね。ぴゆるるる。夢喰いにあつたときの対策を聞きたいんだね？」

「はい、と言うよりも出てきたら貴方に封印してほしいのですが」

「スルルル、それは無理だね。時代が進むごとに陰陽師全体、と言うより霊的な関係者全員の力はなくなってしまうんだ。イフフフ、妖怪も現代になるにつれて出てきにくくなって退治の必要がなくなったことが原因だね。私も力はもう一切持っていないんだ」

「マジかあ……」

「ただ、陰陽術だけが有効手段じゃないんだ、キュルルル。夢喰いは夢の中に入り込むというより自分で作りだした夢の中に引きこんでその中で精神を蝕む感じなんだ、ペレレれ」

「……」

「夢喰いの作り出す夢の世界はもう何でもありの異世界と言ってもいい。想像したことがダイレクトでその世界では反映する。それがリアルで鮮明なイメージなら尚更効果ありなんだよ。クククク」

「つまり襲われたらその世界内で想像をして夢喰いを乗り切れて事ですか？」

「うーん、まあ、そうなんだけどそう簡単にも行かないんだよね。まず、昔にこの土地で被害が拡大したのはその世界に引き込まれても誰もその世界で好き勝手しようなんて思わなかったんだよ。“夢の世界”なんて引き込まれたことすら分からない位その世界は良くできている。そして夢喰いは先ず相手を殺す。そうすることでそのイメージが焼き付いて何もできなくなる。恐怖に支配されるわけだね。」

そしてそこからさまざまな拷問やら何やらをしてその世界から精神を開放し食べて終わり……スルルル」

そんな能力の敵を物語に登場させたら、どんな演出でも矛盾なく行えてしまう。この妖怪がバッドエンドの黒幕だとすると平穏な町でも凄惨な出来事が起こりうるわけだ。

「君が言った想像力で乗り切るっていう選択肢は間違っってはいない。陰陽師もまずは夢の中で夢喰いと戦ってその世界から外に逃がれ封印した。ただね夢喰いは想像力が凄いんだ。龍、鬼、大入道などの妖怪を多々作り出せる。昔、陰陽師が外の世界に追い出せたのもそれまで異形と戦ってきた経験があるからイメージがしやすかったということなんだ。プルルル」

「……なるほど。夢の世界は想像力が全て……」

「夢喰いはその世界で負けそうになると外の世界に逃げるよ。そこを陰陽師は見逃さず封印したわけだけど……」

「夢の世界で不利になると逃げる……」

「おお？ 何か思いつきそうな顔をしているね？」

もしかしたらこの方法なら……行けるかもしれない……夢の世界では相手もダメージを負うという前提だが。

いや、ダメージが入るから不利になると逃げるんだ。だとすると……

「一応確認しますが“夢の世界”では夢喰いにも影響はありますか？」

「勿論さ、そうでなければ逃げたりしない」

「成程……」

「もしかしなくても何か対策が浮かんだね？」

「ええ、百パーセントと言えないところが嫌ですが……」

「いやいや、ビツクリだね、テラテラテラ」

「その夢喰いが封印されている場所ってあっち方面の沢山階段を登った所ですか？」

昨日片海アオイと行ったが階段の途中で引き返した場所を指す。

あそこでビー玉が反応したのだ。

「イエス！ その通り！ あそこに封印してあるよ。大分古くなって
るけど」

「あそこから出てくる可能性はどれくらいですか？」

「今の所、確率が高いよ。小さい神社と言うより祠か。木で出来てい
る古いやつだけど効力が薄まってきている」

「出てこないのが一番なので封印とかしたいのですがどうすればいい
ですかね？」

「そればかりはね……」

野放しの妖怪より封印された状態を相手にした方が楽なはずだ。
少なくとも、仕掛けるタイミングはこちらが選べる。

「俺一応お札とか買って持つてるんですが」

俺は常備していたお札を見せる。通販サイトのキャッチコピーに
よると、魔除けと封印の効力を併せ持つ。

「これパチモンだね。今力がない私でも分かるパチモンだ」

「クツソ、★ゼロにして最悪なレビューにしてやる」

「全ての物事は上手くいかないさ」

「他に殺す方法があります？ 夢喰い」

「うーん、無いね」

「そうですか」

「悪いね」

「いえ、貴重なお話が聞けました。ありがとうございます」

「いやいや、僕も久しぶりに人と話せて楽しかったよ。フェラララ」

「その笑い方だけは止めた方がいいですね。それでは失礼します」

「バイイ、少年」

陰陽師の家を辞する。奇妙な笑い方をする怪人だったが、彼から得
た情報は有用だ。片海アオイの女子校へ足を向けると……

「ほほほ、陰陽師には会えたみたいだね」

「あ、どうも……」

「このおばあさん、いくら何でも遭遇しすぎじゃないか？ このおば
あさんが現れるときだけ肌寒いような……気のせいか……？」

「それじゃあ、後は任せたまよ。ほほほ」

「……はい」

おばあさんはスタスタと腰を一切曲げず去って行った。悪い人ではない感じがするが、本当に人か？　なんかおかしくね？　呼び止めようと思っただけが気付いたら消えていた。

ビー玉が反応しなかったから悪しき者ではないということは分かるが、あの人も警戒するべきかもしれない……。

そんなことを考えながら、

——俺は女子校に向かつて走った。



放課後に昇降口で靴を履き替えていると彼女が呟いた。元気がなく雰囲気重い。

彼に送ったメールの返信があまりに遅すぎる。丸一日放置されるのはおかしいと思い始めているようだ。

最初は十六夜を問い詰めてやるって息巻いていたのだが、なんだかんだメールの返信はすぐに来ると思っただけで、一日無視はかなり彼女に堪えたようだ。

「結局、返信来ないんだけど。一日過ぎた放課後なんだけど」

「ほ、ほら多分携帯を海に落っこしているんだよ……砂浜で遊んでたらなくしたのかも」

「そう？　何か……忘れられてない？」

「……そ、そんなことないよ！」

火蓮ちゃんも携帯を見て目を細めた。彼女には色々フオローを入れて誤魔化しているけど、そこに気が付いてしまったかあ……絶対不機嫌になるからそれだけは勘弁だったんだけど……。

きつと彼は忘れてるんだろうなあ……ちよつとどうかと思うけど……。

彼女もメールの返信がない理由を電話で聞くことは流石にないよ

うだ。メールの返信をしないからって電話するのは何か重い奴みたいに思われるからね……。

これきつとコハクちゃんもそろそろ気付いて不機嫌になってそう。二人のフォローしないとイケないのかな？ あっ！ でもコハクちゃんの場合は夏子ちゃんっていう同じクラスの気の利きそうな子もいるし大丈夫だよね!!

だったら火蓮ちゃんを僕が……

本当なら彼が気遣うべきことだよな？ 彼の事が二人は好きでそれで悩んでるんだから。はあく、二人は好きだけどころいう時の二人ってあんまり関わりたくないんだよなあ。怖いんだもん。そしてなんというか近寄りがたい。

できれば今日は帰りたい。でも前に助けて貰ったから元気出してほしい。ここは僕が一肌脱ごう!!

「火蓮ちゃん。この後カフェいかない？」

「行かない。そんな気分じゃない」

「まあまあ、何か食べれば気持ちがあすつきりするかもよ。ね？ せつかくだから？」

「……そこまで言うなら……」

「よし、それじゃあ行く……っ！」

うわあー、外に歩き出そうとすると物凄い負のオーラを出した銀色の少女が……ええ？ 夏子さんは？

「あ、あのコハクちゃん？」

「ブツブツぶつぶつ」

ああ、これは聞こえてないね。うん。もう少し大きい声で言わないとダメかな？

「コハクちゃん!!」

さらに後ろから肩を掴んだ。彼女は流石に気付いたようで、こちらに顔を向けた。昼休みのノリノリで楽しそうな感じは何処に行ったのか、彼女の顔には影が差し込んでいた。

「どうも」

「こ、この後暇かな？」

「ええ、暇ですよ……」

「だ、だったらカフェいけない？」

「いえ、今日はいいです。私は家で無気力に引きこもってますよ……どうせ私ちよつと顔が良いだけですぐに忘れられる放置少女ですから……」

「そ、そこまで言わなくてもいいんじゃないかな？ あのさ、元気ないみたいだし元気出すためにもカフェとか食べに行こうよ」

「どうせ、私なんか食べられてもカフェが悲しむだけですよ……」

「いやいやカフェは悲しまないと思うよ……」

物凄くネガティブになってしまっている。さつきから腕を絡ませてなんとかここまで運んでいる火蓮ちゃんも元気ない。コハクちゃんも元気ない。

地獄だ。この絵面は地獄だ。

これ以上見たくないよ。コハクちゃんも無理やり連れて行こう!!

「ひ、暇なら僕についてきてもらうよ」

「……」

人形のような彼女の腕を抱き寄せて無理やりカフェに向かって歩き出す。両手に美女とは僕にとってご褒美なのに……気まずい。こういうの最近多いような……。

力なき彼女達と歩き続け、以前四人で一緒に来た喫茶店に到着した。ここのスイーツ、飲み物は凄く美味しいらしい。ネットのレビューによると、元気がないときに此処に來ると元気になるとのこと。それにあやかりに來たのだ。

お店のドアを開けると前に接客してくれた女性店員が出迎えてくれた。

「いらっしやいませー。つてあら、また来てくれたのね？」

「はい、三人でお願いします」

「あれ、前は……ああ、そういう事。それじゃあ好きなお席にどうぞ」

この人物凄い気が利くな。彼がいないのと二人の酷い顔を見て、あ

る程度事情を把握したみたい。見事過ぎる神対応。僕は店員さんに言われた通り、向かい合う席に場所を決めた。

二人を並ばせて反対側に僕が座る。二人の顔は未だに暗い。

「ほらほら、食べて。今日は僕の奢りだよ?」

「食べる気しない」

「私もです」

「でもでもこういう時だから食べて元気いっぱいにしなと!」

「それじゃあ、たこ焼きで……」

「綿あめにします……」

「そんなへそを曲げないでメニューから選んで。ね?」

二人はメニューすら見ずに適当に口にした。ああ、どうすればいいんだろう? そこへ女店員さんがお冷を持ってきた。

「お冷になります」

「ありがとうございます」

「……」

「何か元気がないようですがよろしければ事情をお聞かせ願えませんか?」

店員さんが心配をして声をかけてくれる。声色は優しさに溢れておりつい相談したくなってしまふ衝動にかられそうだ。二人はつい気を許してぽつりと口にした。

「メールの返信が……遅いんです……もしかしたら私を嫌いになったのかも」

「私を送ってからもう丸一日経ってるんです……私に興味が無くなったのかと心配になってしまつて……」

ズラうんと重力が重くなりこのまま押し潰されるかと思いきや!!

「ふむ、そのメールの相手は以前一緒に来た彼ですね?」

「はい……」

「彼は貴方達に好印象を抱いているように見えたのですが……もしかしたら貴方達を釣っているのかもしれないね?」

「どういうことですか?」

「今、メールが帰つてこなくてモヤモヤして彼が気になっていますね」

？」

「はい」

「それが彼の狙いなのかも。貴方たち二人をモヤモヤさせて自分を意識させようとしてるのかも」

「!!!」

きゅ、急に重力が軽くなった……店員さんが凄いのか二人がチョロいのか良く分からないけど……。

「今、二人はどう？ 彼の事で頭がいっぱいじゃない？」

「た、確かに」

「そうです、いっぱいです」

「それが狙いじゃないかな。でも彼もこういうのに慣れていないから返信時間を計りかねているんじゃないかな？ 私なりの推測ですけど」

「そ、そうだったんだ……まあ、それなら仕方ないわよね」

「十六夜君、テクニシャンです……」

嘘も方便とはこういう時に使うのかな？ 偶には嘘も巧みに使わないとだめってお母さんも言ってたな……。

「それでご注文は？」

「あ、私はナポリタングラタンとハンバーグステーキで」

「私はチョコパフェとイチゴパフェとバナナパフェと宇治抹茶パフェで」

「僕はココアをお願いします」

「はい、少々お待ちをー」

店員さんはサラッと注文をメモすると厨房に戻って行った。商売上手と言うのかもしれない。あの人に上手く丸め込まれて二人は……

「もう、十六夜君ったら私にアピールしたいなら直接言ってくれればいいのに。そしたら私は……キヤツ。私ったら何をはしたくないことを……でも、良いかも」

「もう、十六夜の男版ツンデレ」

二人は頬に手を当てて体をくねくねしている。と言うか二人めつ

ちや食べない!? 急にお腹が空いたのかな?

料理が届くと二人はバクバク食べ進めた。

「ハムハム、ごっくん。美味しい」

「はーむ。うーん、アイスが冷たくい、そして甘くて美味しくて
すう」

幸せそうで何よりだけど、お会計がかなり高くなりそう。この日だけで僕は九千円ほど使った。二人が美味しそうに食べてたからいいけど

五十三話 観光2

ここまでの時系列

“一日目”（黄川萌黄を救った次の日）

十六夜達の女子校監視

〈同時刻〉銀堂コハクと夏子の絡み

火原火蓮と黄川萌黄の絡み

銀堂コハクと夏子のメール創作

←

十六夜にメールが到着。（おばあさんに邂逅してうっかり忘れる）

〈十二時頃〉

十六夜の女子高監視交代。図書館で調べもの。

←

『魔装少女』のイチャイチャ。（黄川弄り）

←

〈午後二時過ぎ〉

十六夜が町長と話す

←

十六夜が急いで女子高に戻り片海アオイの尾行、犬を撃退（勘違い）

〈放課後から夜中〉

そのまま観光案内。

占い師と情報交換

“二日目”

〈午前中〉

占い師を見て年齢詐称疑惑、片海の登校に付きまといて軽くキレられる

←

十六夜が陰陽師と話す。

←

『53話のスタート地点』 十六夜side

←

店員さんの神サポート（二日目の皆ノ色町放課後。52話）

——大分時間軸がごちゃごちゃしてる様な感じがしたのでまとめ
ておきました……

申し訳ございません。大変読みづらかったと思います。
今後ともよろしくお願いいたします。

彼女の監視を始めてから二日目。時刻は午後三時過ぎ。片海アオ
イが下校する時間だ。今朝の登校で不機嫌にさせてしまったことを
謝らなければならぬ。学校の前で黙って腕を組み壁に寄りかかり
ながら彼女を待つ。

校門から出て行く女子高生からレーザーポインターを浴びせられ
ながら堂々と待つ!!

暫くすると女子高生たちが潮が引くように一本道を開ける。その
一本道を無言で通るのは片海アオイだ。クソ、可哀そうじゃねえか。
だが俺が行った所で解決しないどころか益々マイナスな印象を与え
てしまうだろうしな……。

「また居るし」

「いや、その、今日も観光案内お願いしたく……」

「昨日で全部終わったんだけど?」

彼女は少し不機嫌そうな雰囲気醸し出して一人で帰路を歩いて
行く。俺は彼女の隣を歩いて庇うようについて行く。

「それ、やめろって言ったよね?」

「す、すみません」

「謝るくらいなら止めて欲しいんだけど?」

「すみません。無理……です」

「あっそ」

そこから彼女は何も言わずスタスタ歩いて行く。心苦しいが守護
霊ポジで東西南北に気を配る。

大分、怒らせてしまったかな……今までもそういう事はあった。俺が変な目で見られるのは別にいいんだが、彼女達が嫌がることはしたくない。

はあー、強い『超能力』とかがあればと何度思ったことか……。

彼女と共に歩いていると、赤いランドセルを背負った子が泣いているのを見かけた。小学校の低学年ぐらいだろうか。

転んで擦りむいたのか、膝から僅かに血が垂れている。

「うわあああん！ 痛いよおおお！」

それを見た瞬間、彼女は疾風のようにその子の傍に駆け寄る。懐から簡易医療セットを取り出し、消毒、そして絆創膏を貼って手早く処置をした。俺も一瞬過ぎて反応ができなかった……。

「これでいいよ」

「あ、ありがヒい、め、目が怖いよおお!!」

女の子は再び泣き出してしまふ。彼女は驚かなかつた。まるでそう言われると分かつていたようだ。

小学生の女の子は逃げるように走り去ってしまった。お礼くらい言わせたかつたが、彼女がそれを望んでいない。

「……」

彼女は再び歩き出す。

片海アオイはオッドアイで目つきが悪い。そのせいで昔からよく人を気後れさせてしまふ。

親切にしても感謝が返ってくることは少ない。だけど彼女はそんなことは関係ない。自分が傷ついても誰かを助けることに躊躇しない。

——そこに俺は憧れたんだ

だけど、彼女が傷つかない訳じゃない。顔には出さないが寂しさと切なさを感じている。だから彼女は自己評価が低い。こんな自分だから仕方ないと達観している。

自分の良さに気づくのは『魔装少女』として仲間達と戦うように

なつてからだ。この時点の自己評価はまだ低いまま。

出会って間もない俺が何を言っても彼女に響かないかもしれない。ただ伝えたい、彼女に彼女自身の凄さとカッコよさを。

「あの」

「何？」

「さっきの片海さんの行動めっちゃカッコ良かったです」

「は？ 何それ？ 変な気とか使わないでくんない？」

「使ってないです。それと片海さんの眼。俺めっちゃ好きです!!」

「……マジでムカつくから黙ってくんない？」

彼女は鋭い目つきでこちらを睨む。今までとは違う明確な怒気をこちらに向けていた。からかわれていると思つたのだろう。

「俺は真面目です。本気で貴方はカッコかわいい!!」

「……馬鹿にされてるのは分かった」

俺の言う事が気に障つたんだろう。彼女は猛スピードで走り俺から離れていく。

し、しまった。俺の足では彼女に追いつけない!!

クソ。クソ!! ミスった!! 俺はなんてことをしてしまったんだ

!! もし、このまま俺が居ないとこでバッドエンドが起こつてしまつたら……ま、不味い……。

俺も走るが彼女には追いつけない……。

追いつけない……。

——という展開は容易に想像できたので彼女の腕を掴んで走れないようにした。

「は？ ちょ、離してくんない？」

「貴方が疾風のように走って逃げられたら捕まえられないので」

「いや、逃げんよ。何でそんな発想してんの？」

「何となくです。そんなことより俺は貴方の行動も貴方の眼も素晴ら

しいと思います」

「はあく、この吊り上がった目が？ 子供に泣きながら逃げられる才子の行動が？」

「はい。貴方の子供を救った行動はカッコいい以外の何もありません。誰かを救うために迷いなく走る姿に感服しました。自分が傷つくことを顧みずひた走る貴方が俺は好きなんです!!」

「……会って二日目と言うセリフじゃないと思うんだけど……長年付き添った幼馴染に言う位のセリフだと思うんだけど」

「そんな細かいことはどうでも良いですよ!! 今は!!」

「あ、うん。そんな強気で来る？」

「つい、気持ちが昂ってしまい……申し訳ございません」

「そんなしみじみ謝らなくてもいいんだけど……」

「次に片海さんの眼ですがカッコよさの中にも優しがあって、偶に恥ずかしがる時に目がぐるぐるする感じとかオッドアイも味があって俺は好きです。眼が欲しいくらいです!!」

「え？ ごめん？ 感動の感じを出してるところ悪いんだけどツッコミどころ多すぎてちよつと良く分かんない感じになってるんだけど……まず何であーしがオッドアイなの知ってるの？ 髪で隠してるんだけど……後、あーしのこと前から知ってる感じがするんだけど？」

「知りません。貴方の事は昨日初めて知りました。オッドアイは昨日偶々、一瞬だけサラッと見えました」

「ふーん。ま、どうでもいいけど。こんな目にそんな感想を持つとか物好きだね……」

彼女の自己評価がまだ低いので俺は彼女の肩を掴み目線を合わせた。もつと語らなくてはなるまい。

「これはダメじゃね？ 流石にポリスでしょ？」

「『こんな目』っていうのが納得いかないんですよ。もう、これは一時間位語るしかないですね……」

「語るって会って二日の相手の目を一時間語れるのってどうかと思う

けど。後、肩離してくんない？ マジでポリス呼ぶ」

「フツ、俺は警察に連絡させないですよ。肩を掴んでるからあまり自由には動けないでしょうし、それに携帯を出したとしても取り上げて民家にも投げ込めばいいだけですから」

「マジでちよつとアンタヤバいと思う」

「クク、そんなこと……言われても傷つきませんよ……今更、ですから……」

「バリバリ萎えてるじゃん」

「クク、そんなことは置いておいて語りますよ。一時間」

「ええ？ マジでなんなん？」

そこからは語りつくした。

十分経過

「ですから片海さんは二重で、瞳の色は海のようにきれいで……」
「……」

二十分経過

「そもそもオツドアイと言うのが魅力に溢れており……」

「そろそろハズいんだけど……」

五十分経過

「ですから俺はこの瞳が大好きでその良さを貴方自身にも分かって欲しくてですね」

「も、もういいでしょ？ そ、そろそろハズい、マジでそんな褒めちぎらなくても……」

一時間経過

「つまり……」

「もう無理!! 聞けない!! 恥ずかしい!」

「フフフ、まだまだ聞いてもらいますよ。肩を押さえていますから耳に蓋をすることもできないでしょう？ そして恥ずかしくて眼がぐるぐるしてきていますがこれが可愛くて仕方ないですね」

「や、やめろおお!!」

結局、一時間半話してしまった。彼女の肩の拘束を一旦解くと彼女

は顔を手で覆った。顔はトマトより真っ赤。

「はあ、はあ。マジでアンタヤバイ……」

「いや、つい語りたくなってしまったんですよ。貴方の自己評価が低いからそれを見て見ぬ振りができないと言いますか。そんな感じなんですよ。それより悶えてる片海さんは需要があり過ぎてグッズ化したらそれはそれは売れるでしょうね……」

「アンタマジでヤバイ。マジでヤバイ」

「それよりどうですか？ 良さに気づけました？」

俺は彼女の肩を再び掴んだ。もし、ここで評価が低いなら再び語るしかあるまい。

「ここであーしがまた変な事言ったらまた語るつもりってのが目に見えるんだけど……」

「さあ、どうでしょう？ それよりどうですか？」

「……まあ、その、なんていうか……意外と……」

「意外と？」

「あ、違う……その……あーしの目って普通に良い所も沢山あるんだなって気付いた……感じ？ ……これでいい？」

「正確には良い所しかない。ですがまあいいですよ。怖がる人は見る目が無いだけです。目が肥えていない人が多くてこの世界は貴方にとって住みづらいでしょうが頑張ってください!!」

「……どんなエールだよ……」

「それより観光案内お願いします」

「昨日で終わったけど」

「二週目に行きましょう」

「……もう突っ込まない……」

この後、昨日案内してもらった場所を再び回った。



あーしは鏡の前で自分の目を眺める。

左には目つきが物凄く悪い青い目。右には灰色の目つきが悪い目。ずつと、悪い所しか分からなかった。見てこなかった。いい所なんて無いと思っていた。

瞳がきれいでカッコいいけど可愛いか……ハッキリ言っただけの言う事はハチャメチャだった。同じことを何回も言っただし、かなり口下手なんだろう。

だけど、あれは褒め過ぎだ……何？ あれ？ どんなメンタルしてたら会って二日の女子をあんなに褒めちぎられるの？

通り過ぎる人たちがひそひそ話してたけど彼は気にした様子はないかった。

『え？ もしかして口説かれてるのかしら』

『今時の子供は大胆ね』

『あらあらあの子顔真つ赤にしてるわ』

周りの目を少しは気にしてほしかった。恥ずかしくて何もできずに永遠ともいえる自分の褒めちぎりを聞かされる。一種の拷問。

アイツめちやくちや変わってる。

……まあ、ちよつと嬉しいって思った、あーしも変わってるのかもね……。



この町に来てから三日目の放課後、俺は彼女と三週目の観光案内をしてもらっている。

今日の午前中は古い師に学校を任せて俺は年配の方たちが通うスイミングスクールやゲートボール場に向かい聞き込みをした。そこで“夢喰い”は特に女性の魂が好きという情報を得ることができた。

そして、我が母からメールが届く。家を空ける言い訳として、母にはちよつと旅行に行くと言っただけである。メールでは、旅行がどんな感じか気になっているようだ。

そこで俺はある事実気づく。銀堂コハクと火原火蓮にメールを返していなかった。急いでメールを返信し謝った。とんでもなく怒っているんだろうなと思ったのだが二人ともそんなことはなかつ

た……。ふうー良かった……。

さて、メールの件は置いておいて再びこの町について考える。

今の所、何も無い。平和過ぎる……。やっぱり伝承が関わってくるのかな……。

「ここが魚市場ね……。三回目だけど」

「そうですか」

「次行くよ」

「はい」

彼女を守るように次の場所に歩き出す。彼女はもう何のリアクションも取らず何も言わなくなった。

「そういえば、アンタって年幾つ？」

「今年で十六です」

「年下なんだ」

「そうですね」

精神年齢的には大分俺の方が上だけだね。

片海アオイが転校してくるのは二年Aクラス。火原火蓮と黄川萌黄と同じクラスだ。黄川萌黄がボッチの片海アオイを気にかけて交流が始まる。そこから銀堂コハク、火原火蓮とも関わることになる。「年下の感じがしないんだけど」

「大人の雰囲気出てますか？」

「そういうわけでもないけど……。なんとなくそう感じただけ」

「そうですか……」

大人の雰囲気を感じないか……。まあ、仕方ないか。俺は大分ヤバいことしてるしな……。

「この町って本当に平和ですね……」

「まあね。それに空気もいいからランニングとか散歩とかするとスッキリするんだよね」

「確かに気持ちいいですね。空気が」

この日も特に何も起こらなかった。

段々と不安が強くなる。どうすればいいのか分からない。

しかし、このあと占い師の彼女がようやくやく真価を發揮する。



彼が学校を休んでもう三日目。ずっと休みっぱなしで校内も少しざわざわしている。どんだけ海でエンジヨイしてるんだろう……。

「ねえ、見て見て十六夜から返信がきたの！」

「ああ、うん、そだね……それもう十回くらい聞いたけど……」

放課後、二人で帰り道を歩きながら話しているのだが……メール返信を何回聞いただろうか？ 大体十二時ちよつと前位に届いてそこからご満悦だった。

何だかんだでメールが返ってくるだけで嬉しいとは……チヨロすぎじゃない？

いくら何でも。

今日は放課後の予定が特になかったので、火蓮ちゃんが本屋に寄るのについて行くことにした。二人で歩いていると前方で見覚えのある後姿がスキップしていた。

「おーい、コハクちゃん！」

「はーい、何ですかー！」

ああ、すつごくご機嫌そうだ。可愛いんだけど……。彼女は勢いよく振り返り手をピシツと上に挙げた。

「ご機嫌だね。大体何が合ったか想像つくけど」

「えへへ。返事が来たんですよ、えへへ」

「それは良かったね」

「見てください。特に火蓮先輩」

スマホにメールを映し出して僕たちの前に出す。嬉しさを抑えられらずにニヤニヤする彼女は可愛い。そして火蓮ちゃんに見せつけてマウントを取ってやろうという考えも透けているがそれは置いておこう。

——火蓮ちゃんがそれを見て鼻で笑った

「フツ」

「何が可笑しいんですか？」

あ、雲行き怪しい。火蓮ちゃんが笑った瞬間コハクちゃんから笑顔が消えて目を険しくした。

「いやあ、別になんでもないわ。まあただ私の方がメールが返信されたのが早かったなって……」

火蓮ちゃんがメールをスマホに映し出して今度はコハクちゃんに見せつける。僕は二人のメールが見える位置に移動して見比べる。

火蓮ちゃんのメール到着時間が十一時五十九分。コハクちゃんのメール到着時間十二時五分。ああ、これはメンドクサイ展開になってきた。

「ううっ………!!」

一瞬悔しそうにしたかと思っただコハクちゃんが今度は鼻で笑う。何かあったのかな？

「確かに時間は僅かにそちらの方が早いのですが重要なのはメールの内容です。フッフ、私の方が七文字ほどメール文字数が多いんです!!」

「な、なんですすって!？」

再び見比べるとコハクちゃん五十八文字。火蓮ちゃん五十一文字。

いや、誤差でしょ。たった七文字くらいで何を言ってるの。コハクちゃん……けど可愛いから許す!!

そしてそれに動揺する火蓮ちゃん。ただ独欲強いのか？ 会ってまだそんな経ってないでしょ？ どんだけ好感度上がりやすいのか!?

でも可愛いから許す!!

「フッフしかも七には幸運の意味を持っています。つまり七文字多いという事は私に貴方より幸せになって欲しいという十六夜君からの隠れメッセージです!!」

いや、それはない。どんなこじつけでそんな結末になったのか……妄想豊かだな……ちよつと引くくらいとんでもない発想。

「な、なな、なんですすって……で、でもそんなただのこじつけじゃない……」

「動揺してるようですねっ。」

「……ただの偶然にそこまで妄想豊かになるアンタにちよつと引いてるだけよ」

「負け惜しみですね」

火蓮ちゃん信じてる顔してる!! ただのこじつけだよ!! どう考えたらそれを信じるの!! 火蓮ちゃんはしばらく考え込むとハツと何かを思いついたようだ。頭で豆電球が光ったような錯覚を僕はしてしまった。

「フッフ、負け惜しみですって? そんなことないわよ!! 結局アンタの言ってる事なんて空想上の戯言。それに比べて私には記録があるわ!! 私の方の返信を優先したっていう証拠がね!! アンタにはその空想を正しいと言える証拠があるの?」

「ううつ、それは……」

「所詮アンタのは妄想、空想、理想。現実には一切関係ない。ただ適当で偶然なピースを集めてたまたま形になった物を喜んでる子供よ!!」

何か急に立場が逆転した。これを板挟みで見せられている僕の心情を二人には察してもらいたいんだけど……。

「で、でもでも私はラッキーセブンという事実が……」

「証拠なし、根拠なし、そんなものは事実がないって言うのと同じなのよ!!」

「そ、そんなあ……」

一体僕は何を見せられているんだろう? 論破、論破、論破。二人が論破しあう姿。絵になるがあんまりこの空間にいたくない……。

「へへーんだ、先輩に矛を向けるからそうなるのよ。これに懲りたらもう私に逆らわないことね」

「うわあああん!」

勝利を得た火蓮ちゃんがピョンピョンとウサギのように跳ねる。敗北したコハクちゃんは悔しそうに叫ぶ。

ここ道の真ん中だから周りを通りすぎる人の目がとんでもないことになってそう……あつ! 通り過ぎる人達全員良い物見たと嬉しそう。

勝利を喜んでコハクちゃんの悔しそうな顔を見て満足した表情の火蓮ちゃんは本屋に向かうために僕に僕に号令をかける。

「行くわよ。萌黄本屋に」

「えっ？ このままコハクちゃんは放っておくのか？」

「放っておきましょう」

「ええ？ 流石に放っておけないよ」

コハクちゃんはガツクリと肩を落としてブツブツ呟いている……。

「妄想じゃないんです……事実なんです……」

これ、どうやって收拾つければいいんだろう？ と、とりあえずこのまま放っておけないけど……。

その後は彼女を誘って三人で本屋に行った。元気な火蓮ちゃんと魂が抜けたコハクちゃん。

二人に気を遣いすぎて胃が痛い……。

本屋で時間を過ごしその場で解散することになったので、僕は帰り道に薬局に寄った。

五十四話 最恐

三日目の夜。車に乗り牛乳でアンパンを流し込みながら片海アオイの家を監視していると占い師が唐突に奇声を上げ始めた。

「おおおおお、来た来た来た!!! 凄いの来た!!!」

「つ、ついに占いが?」

「そうじゃ……ああ、今回は……うむ。悪霊が目覚めそれが青を飲み込む。本当なら悪霊をもうちよつと封印できたらしいが台風によって神社が壊れそれによって陰陽師の封印が解けるらしい。封印が解けてから大海の青が死ぬまで全て一日の出来事じゃ!!」

「ナイスです!! めっちゃ役に立ちます!!」

「まあ!! ハハハ!!」

やっぱり悪霊系だったか。だとするならばやるべきことは決まっているな。神社に出向き“夢喰い”をぼこぼこにするという行為だ。台風が来るのは天気予報では明後日の出来事。だとするなら決着をつけるなら今日にすべきか?

「この悪霊、夢喰いは大海の青に前から目を付けていたらしいの」
「……なるほど」

彼女はあの怪しい神社から景色を眺めていた。そして夢喰いは女子の魂が好きな変態だからか。

封印されていて外の色は見えるのか……まあ、あるあるな感じはするが……ありふれた設定のために化け物に目をつけられるとは、彼女にとつては大迷惑だな。

「それでどうするのじゃ? 今日にするのも有りじゃが……」

「今日にしますか……」

「いや、明日にするべきじゃ」

「なぜ?」

「お主は大分疲弊しておる。今日はしっかりと休み明日に全力をかける方が良いじゃろう。リラックスをしとけ」

「そうですね。全力を尽くすなら明日ですね……」

「今日はお主は寝ろ。万が一に備えて我が深夜全てを監視してやる。」

それなら心配事もないじゃろう」

「そうですか……ありがとうございます」

完全に疲れをとって明日に賭ける……。目を閉じると俺は……すぐに……。



四日目。俺はスッキリと目覚めることができた。

「起きたか……」

「ありがとうございます。行ってきます」

「うむ……任せるぞ」

「はい」

よほど疲れが溜まっていたようで、彼女はプツンと糸が切れたように寝息を吐き始めた。現時刻は七時三十分。車から出て歩き始めると後ろから肩をとんと叩かれた。

「おはようございます」

「おはよう。散歩してんの？」

「まあ、そんなところですね」

「ふーん、今日は付きまとわないんだ」

「流石に三日連続で朝付きまとうのはダメかなって」

「一日も二日もダメだけどね」

「アハハ、そうですよね」

「? 何かあった？」

「別にはないですよ。それより祭りがそろそろ始まりますね」

「……三日後だね、でも台風で準備できるか分からないからもつと先の可能性もあるって」

「へえー」

そこからある程度彼女と歩き途中の分かれ道で別れる。彼女は学校に俺は神社っぽい封印場所に。

「それじゃ、俺はこっちですから」

「そ。……放課後どうする? また案内する?」

「ああ、どうしましょう……いや、ぜひお願いします」

「おけ。それじゃ」

彼女は軽く手を振るとすたすた歩いて行った。俺が生きて帰ってきたら彼女には観光案内をしてほしい。安心して彼女が観光案内を味わえるならそれはとんでもないご褒美だ。これを心の支えにしよう……。



天高くと言う程ではないが、そこそこ長い階段を登る。百段、二百段、三百段と上がると、そこには小さい神社っぽい祠があった。

周りには大きく立派な樹木が生い茂り僅かに太陽の光を遮断する。祠を調べると古い扉に三枚のお札が貼られているのが分かった。少し不気味さを感じポケットに手を入れるとビー玉が揺れていた。

扉に貼つてあるこれが封印のお札？ これを剥がせば夢喰いが出てくるのだろうか？ おそらくそうなんだろうが……心を落ち着けていると

「ほほほ、封印を解くつもりかい？」

後ろからいつものおばあさんの声がある。いつも唐突に現れるな。絶対人間ではない。が、悪い存在でもないだろう。後ろを振り返らず俺は聞いた。

「ええ、前から気になっていましたが貴方は幽霊的なあれですか？」

「ほほほ、どうかね」

「色々助けてもらってありがとうございます。対価が要りますか？」

「私はね、この町の子供たちの笑顔が好きなんだ。それを見られなくなるのが嫌なだけなんだよ。それがずっと見れば後は何もいらないさ」

「……そうですか」

「ほほほ、後は頼んだよ。私にはどうしても敵わない存在だからね」

声がしなくなり後ろを振り返ると誰もいなかった。声が聞こえたのは幻聴だったと思ってしまうほど、この場は静けさに支配されていた。

さてと、ぶっ飛ばすか。

お札を三枚引きちぎると、古びた祠が揺れ始めた。そしてゆっくりと扉が開く。祠の中には腐った肉のような茶色の像が収められていた。大きさは全長一メートル。思ったよりは小さい。

「グハハッは。遂に出てこれたぞ!!」

汚く、醜い声。聞いているだけで虫唾が走る。

「人間、感謝するぞ。封印を解いてくれるとはな。ククク、もう少し長く封印されているはずだったが最高だ。ここにきて俺に運が回って来たぞ!!」

「そうか、それでお前はこれからどうする?」

「グアハハ。まずはこの陰陽師が守ったこの土地に住む人間を全て俺の餌にしてやる!! 前から美味そうと思っていた人間もいるしな!! ああの女の魂は清らかだ。ぐちやぐちやに壊して食ってやりたい!!」

「そうか。ちんこの考えそんな低能な考えだな」

「ああ? おい人間、俺様は寛大だ。封印を解いたお前は見逃してやってもいいと思っていたんだ。謝れ。そうすればお前だけは助けてやろう」

「ちんこに下げる頭などない。それより口が臭い。黙れ、金玉が腐った匂いがする」

「いいだろう!! 余程死にたいようだなア。俺の世界にお前を引きずり込んでぐちやぐちやにしてやろう」

「ぐちやぐちや五月蠅い。もつとスマートに言えないのか? 後、口が臭い」

「殺す、殺す。開け”夢の世界”」

夢喰いから黒い影が伸びて俺を包む。黒い影が消えるとそこに広がっていたのは砂漠だった。永遠に続くと思われる果てなき空と砂漠……。

あまりに現実味を帯びていて確かに言われなければ夢とは分からないだろう。

「グアハハは!! 後悔しろ人間!! 手始めに龍に噛み砕かれる!! 龍にかまれて全身から血液が噴出し、咀嚼されれば関節があらゆる方向

に曲がり死より辛い!!! がハハハ!!」

空に龍が現れた。蛇の様な体つき色は緑で血のような目。口からは唾液が垂れ俺を食おうとしているのがすぐに分かった。龍は大きく口を開けて俺の方に……。



夢喰いはご満悦だ。何百年か振りに外に出ることができ、そして再びあらゆる人間の苦痛が聞けるからだ。十六夜に逃がすと言ったがあれも嘘で本当は逃がすと言って安心させた後に地獄に叩き落とすつもりであった。

しかし、十六夜が煽ったことですぐにでもこいつを殺すという思考に至った。この世界ではただの人間は何もできない。陰陽師も最早いない。

自分の思うがままの世界を夢喰いは感じていた。現代は動きにくい。が、それくらい良いと思っていた。ここから先は自由。自由。自由。

手始めにこの人間の精神を折り廃人にしてやるつもりで龍に飲み込ませた。龍は大きな口を開け十六夜を飲み込む。

「クハはは!! 一回殺した程度では物足りない!! 何度も苦痛に……」

愉悦。それを感じていたがふと違和感に気づく。龍が苦しそうに吠え始めた。

「どうした? 何が……」

理解が及ばない。この世界は自分の思うがままのはずなのに、龍が命令にない行動を見せたからだ。

——龍の腹から黒い極光が放たれた。

それにより大量の血があふれ出し雨のように砂漠を濡らす。

「な、なにが」

緊急事態に夢喰いは焦りだす。こんなことは一切考えていない。どういふことか考えていると頭上から声が響く。

「フツ、何が起こっているか。全く分からないようだな」

「なに!?」

そこには黒いマントを靡かせ、黒く長いマフラーを首に巻き、さらに黒い鎧を纏っている十六夜がいた。手には黒く禍々しい聖剣を握っている。

「一体何が!!」

何が起こっているのか分からなかったが異常な事態であるのは違いないため、夢喰いがこの世界からの逃亡という選択を取ろうとした、その時

——夢喰いはサイコロステーキのようにバラバラにされた。

「じゅあわわ」

「ふっ、つまらないものを切ってしまったな」

「我ああガガガ嗚呼ああ!!」

悲鳴にならない叫びを上げる。この世界では自分もダメージを負うため、切られれば痛いのは当然なのだ。急いで自身に修復のイメージを施す。ゆつくりと再生していき元の象のような体型へと戻った。「こうなったら逃げて……!!」

「既にこの世界は俺の支配下に置かれている。俺の魔法、世界縛りによってな」

夢喰いはその宣言を信じられなかった。しかし、現に自分が外に出られない。自分が作った世界なのにもかかわらずだ。この時夢喰いには疑問しかなかった。嘗ての陰陽師すらこの世界ではここまでの力を発揮できなかつたからだ。それなのにこんな冴えない人間がどうして、と。

「なぜ!? なぜただの人間がこの世界で自由に力をふるえる!? あり得ない!! こんなことはありえない!!」

夢喰いの当然の疑問。それに十六夜は鼻で笑った。

「ふっ、いいだろう。冥土の土産に聞かせてやる。嘗て俺はヒーロー、英雄といったものに憧れていた。雨の日に傘を差さず剣のようにして振り回し、プールに入ったときは空中浮遊をイメージしたり色々な

ことをして圧倒的な存在を目指していた。

そこで、とある自作の存在を自分で作り上げそれを目標にトレーニングをしようという考えに至った」

「それによって出来たのが今の俺の姿。黒を基調としたデザイン。装備全てにあらゆる能力が宿っている。この存在の名までは考えてはいなかったが

名付けるならば天衣無縫ぼくので天下無双かんので質実剛健えたな正義戦士たさいと言ったところか……」

あり得ない。常軌を逸している。が、それが事実。今日の前で起きているのだから信じるしかない。ここで夢喰いに更に疑問が沸いた。

「……何だと……だとしてもそれだけでここまでのイメージが……」

「その通りだ。この話には続きがある。昔から妄想を垂れ流して生きてきた俺だが流石に小学生に入る前には現実を知ってしまった。そこで俺は妄想することが極端に減ってしまった」

「だとしたらなぜ!？」

「だが、あるとき一冊の本に出会った。そこには夢が詰まっていた。俺はその本を読むときには脳内でシーン再生し続けた。それだけではない、読んでいない時もひたすらにその本の事ばかり妄想するようになった」

「お風呂、授業中。電車通学での僅かな時間。降りてから学校に行くまでの時間。暇さえあれば妄想、妄想、妄想。それを繰り返しているうちにいつしか俺の妄想力は現実となんら変わらない程に極まっていた……名づけるならば……」

妄想現実とでも言っておこう」

頭がおかしい。この人間は頭がおかしい。夢喰いはそう思い、そして後悔した。こんな人間を夢の世界に招き入れてしまったことに對して……。

「さて、そろそろまたバラバラにしてやる。現実に戻ったら俺は何もできないからな。この世界でお前を殺す」

「ま、まで。俺はまだなにもしてない。お前に多少の危害を加えようとしたがなにもしなかつたんだ、み、見逃してくれ」

「ダメだ。お前は外に出たら好き勝手暴れる。俺はやられたらやり返すという男ではない。やられる可能性が一パーセントでもあるならやられる前にぶっ飛ばすというのがポリシーだ。故にここで死ぬ……」

「くそがあがあがあ!!」

夢喰いが咆哮した。そこからあらゆる妖怪、化け物が大量に生み出される。しかし、それを十六夜は豆腐を切るように切って行く。

「ちようどいい、俺の装備について説明しよう。まず俺のつけているマフラーいや、

魔フラーは自身の攻撃力を五億倍にする」

夢喰いは一步下がった。生み出した化け物達を盾として展開する。しかし、十六夜はなんてことないように歩いて近づいてくる。

「そしてこのマント。これは自身の攻撃力を一億倍にして、一秒毎に体力と魔力を全回復するという性能だ」

聞けば聞く程意味が分からない。言葉が変わっているため十六夜の言うことを全て夢喰いが理解したわけではない。しかし、化け物だということとは分かった。

「そして、この鎧だが防御力無限。魔法攻撃完全無効。俊敏五億倍」

さらに近づいてくる。目の前にいるのは自身の常識を超えた化け物。だが殺らなければ自分が殺られる。夢喰いは覚悟を決めつつあった。

「そして、この剣だが攻撃力を百兆倍にして必殺技を発動できるという代物だ」

次々と異形の化け物を生み出す。逃げれない。だったらアイツを殺して出るしかない。

例え妖怪であっても覚悟を決めた者は強い。死を意識しそこから這い上がった夢喰いの想像力は限界を超えていた。

そこからは死闘、死闘、死闘。一体何時間戦ったか分からない。もしかしたら一日経っているかもしれない。そう夢喰いは思い始めて

いた。だが死を意識した夢喰いは強く次第に目の前の黒騎士を追い詰め……ついに……。

日本刀を持った亡霊剣士は十六夜の頭を刺すことに成功する。約十万體以上の化け物を生み出し続けた夢喰いが疲労していた。だがやり遂げたのだ!!

十六夜の頭、そこから血があふれ出した。つまり勝ったのだ、あの化け物に。

「クククク、あはははははは!! 勝ったぞ!! あの花け物に!! グアハハはつはあ!!」

戦闘時間はここまでで一日以上経過していた。夢の世界と現実では時間の流れが違うが、精神的疲労は同じ。疲れ切った夢喰いは歓喜、ただ歓喜した。

「これでここから出られる。そして人間どもを……!!」

出られない。この世界から。あの化け物を倒した!! だが出られない!! 何故だと疑問を抱くと

ザクザクザク。どこからか砂の上を歩く音が聞こえてくる。それも一つじゃない。数千、いや、数万。嫌な予感がして後ろを振り返ると

先程の黒騎士の軍隊がこちらに向かって歩いてきた。太陽が鎧を照らし光る。夢喰いにとつては悪魔の光に見えた。

そして、そこで夢喰いの心は折れた。

先程、一体倒すのにどれだけの労力を費やしたか……それが数万。勝てるはずがない。殺される。絶望、絶望、絶望。

「言い忘れていた。俺は分身できるんだ。もつとも本体の俺の百分の一以下だな」

一人の黒騎士が呟いた。あれが本体なのだろう。しかし、もう夢喰いには何かする元気も力も残っていないかった。

「さて、全員で大魔法である超インフイニティドラゴン絶放射を放つとしよう」

全ての黒騎士が片手を突き出し、そこに魔法陣が展開される。そこから高熱のレーザーが何万と発射された。それによって夢喰いは完全消滅する一歩手前まで来ていた。

「最後は大々的に殺してやろう。この俺の奥義でな……」

十六夜が聖剣を空に掲げた。暗黒の光が集まり、そのまま空へと飛翔する。

「さくらばだ。ドラゴニックストリーム・ジ・アブソリュート・オーバー
ドライブ・スピリチュアル・ヘカトンケイルダイナミック・オーバー
レイ!!!」

十六夜が大声を上げると更に聖剣の光が強くなっている。夢喰いに抵抗する気力は全くないが、それでも十六夜はオーバーキルをするつもりだ。

「フューチャリング・カオスインファイニティ・コスモスタナティス・オブ・エクスカリバー」

この技の名前が長いには理由がある。作った時期が幼過ぎたため名前のセンスとか英語の意味とかよく分からず適当にそれっぽい名前をぶち込み、なんか技名長い方がカッコいいという下らない理由である。

「ビーフ・オア・チキン・エレメンタリースクール・ジュニアハイスクール・オルタナティブ・ストライク!!!」

黒き光。いや太陽が全てを包み込み込み夢喰いはそこで完全に消滅した。塵すら残さず……封印されてから何百年と地上を夢見た化け物はこの世界では一日。現実世界のタイムで僅か

“一時間”ほどしか生存できなかった。砂漠に放たれた太陽は全てを燃やし尽くした。そして十六夜は一言呟いた。

「俺の”ドラゴニックストリーム・ジ・アブソリュート・オーバードライブ・スピリチュアル・ヘカトンケイルダイナミック・オーバーレイ・フューチャリング・カオスインファイニティ・コスモスタナティス・オブ・エクスカリバー・ビーフ・オア・チキン・エレメンタリースクール・ジュニアハイスクール・オルタナティブ・ストライク”に抱かれて消えろ」

こうして十六夜は四つ目のバットエンドを回避したのだった。

五十五話 その後

「我ああああああああああああああああああああ!!!」

一人の男が自身の心臓を抑えて地面に倒れていた。

まるで大きな闇にでも心臓を侵食されたように。

まるで痛々しい病に侵されたように

悶えて只管に叫ぶ。

いくら叫んでも痛みが止むことはない。それどころか益々強くなる一方だ……

「は、はずかしい!!!」

一時間位、叫び続け彼はようやく平常運転に戻る。



俺は先ほどの戦闘を思い出す。

……恥ずかしい!!! ハズカシイ!!! いや攻撃力百兆倍とか何!?

頭おかしいだろ!!! そして最後の必殺奥義がヤバイ!!

技名長すぎるだろう!!! 俺は地面に横たわりグルグル回転。その

後、大声で叫んだ。

「ああああああああああ、恥ずかしいii!!!」

俺もう完全に厨二だよ!!! どうしようもない厨二だろ!!! 嗚呼あ

ああああああああ!!!

体が震える。ただだだ恥ずかしい。この策なら行けると思っていた。だけどやったらやつたで馬鹿ハズイ!!

傘を振り回すとか頭おかしいだろう!? 水中で空中浮遊の練習とかおかしいだろう!? 実は水中で空中戦を想定してプール壁キックとかしてたのを思い出した!

ハズカシイ……

で、でも誰にも見られてないからセーフだよね!? よ、良かった

たあー。夢の世界の出来事で!!

スマホを見て時間を確かめる。現時刻は十時か。あんまり時間は経っていないようだ。一応念のため占い師に電話する。数回コールするとすぐに出てくれた。眠いだろうに申し訳ない。

「もしもし?」

「おお、勝ったのか?」

「はい、ですけど念のため俺を基準に見てください」

「わかった……無事回避できておる、淀みが消えた。それではすまんが寝かせてくれ」

「はい、ありがとうございます」

「うむ……」

プツンと電話が切れた、あの人めっちゃいい人だな。気持ちよく寝てもらいたい所である。そしてありがとうございます占い師。おめでどう俺。全てのバッドエンドを回避したぞ。

今日は豪勢に行くぞ!! 旅館があるからそこに泊まって美味しいもの食べて遂に

ただのモブになる。いやー、俺なんかによっぱメインキャラポジはきついつすわ!! これからは傍観者だな!! グアハツハは!!!!

俺は気分よく占い師さんの車に戻りそこで二度寝をかますのであつた



「ふあああ」

俺は欠伸をして起きた。時刻は三時近い。二度寝と思って寝すぎたか……

「起きたか」

「はい。お目目ぱっちりです!!」

「そ、そうか……何かお主テンション高くないかの?」

「いえいえ、そんなことないですよ!! それより今日は旅館に泊まって豪勢に行きましょう!! 旅費と食費は全部俺が持ちます!!」

「そうか、では黒騎士に任せるとするかの」

「今なんて?」

「だから黒騎士に……」

「おおおおおおおおお!!!」

「いや、お主を基準に占っておるのだから見られる事くらい想定できるじやろ。それにしてもスムーズなボス戦だったの。見ててあの象が可哀そうだったぞ。分身を一体倒したがあの後軍隊をだして心を折る為にわざと殺させたな?」

「あああああぐああああ!!!」

「叫ぶな。誰でも通る道じや。それで最悪を回避できたのだから良しとせい。まあ、愛にはこのことを包み隠さず伝えるがの……ぷぷ、技名長すぎて草」

「ああああああああああ!!!」

この後、俺は一時間位顔を抑えたままだった。

「ほれ、さっさと行け。観光案内があるんじやろ? 旅館はさつき伝

えた所じやからな」

「こんなはずでは……こんなはずでは……こんなはずでは」

「それじやあ、チエックインしとるからの。技名草」

「おおおおおおお!!!」

彼女は車を動かしさっさと旅館に向って行った。俺はと言うと片海アオイに放課後観光案内をしてもらおうという約束がある為彼女の自宅前で待機。彼女が来るまで再び先程の事を思い出す。

はああ、黒歴史だよ。思い出したよ、嘗ての全てを……それを嬉々として語る自分にもビックリだよ。ずっと封印してきたのに……それが解かれてしまった。あんな技名使う奴居るか? 黒歴史に浸っていると彼女が帰宅した

「あ、片海さん」

「……アンタさ学校行かなくていいの? 平日にずっとこっちいるか

「ら気になったんだけど」

「良いんですよ。風邪つて言つとけばいいんですから」

「それO.U.Tでしょ？」

「良いんですよ。少しくらい。それより観光案内をしてください……
気分を変えたくて」

「……そう、何かあったっぽいからしてあげる。案内。ちよつと待つ
てて」

「はい……」

彼女は俺の内心を察してくれたようでそれ以上何も言わず自宅に
入って行った。そして数分待つと彼女は黒のパーカーに短パンだ。
足が見えてええ感じ。

「それじゃ、四週目行く？」

「はい、お願いします」

よーし、リフレッシュしてやるぞ!! 厨二病の事はもう忘れよう。
彼女との夢の様なひとときで……

魚市場や海、何度も見てきたが今までとは感じる想いが全然違う。

「あの神社行けてないのはガチでキツイんだよね、あーしの推しだか
ら」

「……もう行けますよ」

「え？ マジで？ オカルトは？」

「誰かが討伐した様です……」

「ふーん、なら行こうよ。ガチで良いところだから」

「ああ、うん、そうですね……」

「いや？」

「いえ……大丈夫です」

あんまりあそこには行きたくないんだよな。俺の新たな黒歴史
が誕生した場所だからな……だが、折角案内してくれる彼女の推しの
場所を断るわけにはいかない。

再び、黒歴史が生まれた場所に足を運ぶ俺。彼女はここに着くと神
社は無視してこの町が見渡せる高い丘の様な場所に行く。

見渡すと夕日によつて照らされた海原町が。海がオレンジ色で風情があり風が俺たち二人の横を駆け抜ける

「あーし、ここからの風が好きなんだ」

「ああ、淀みが消えたこの町を駆け抜ける風はまさに……あつ」

「どつたの？ 急に？」

し、しまったああ！ 夢の癖がつい出てしまった……ここは上手く誤魔化して

「と、とある詩人がこんなセリフを言つてたんですよ!!」

「ふーん、自分の言葉つて感じがしたけど」

「まさか、ハハハ」

「笑顔引き攣つてるけど」

「しよ、しよんなことないですよ」

「噛み噛みだし。けどこれ以上の追求はやめたげる」

「いや、本当に詩人の話なんですよ」

ふうー、何とか誤魔化せたようだな。いや、別に俺は厨二ではないけどね。この後、彼女とは解散になった。俺はお泊りする旅館に向かつていると……

「流石ですわ」

「最近の流行りらしいですわよ」

二人の女子高生が歩いてた。片海アオイと同じ制服を着ている為女子高に通っているだろう。ここ最近張り込んで分かったのだがこの女子校に通っている生徒全員お嬢様の様な感じがする。

彼女達は楽しそうに談笑しながら帰って行った。やつぱり友達は居たほうがいいよな……彼女は皆ノ色高校に来てから友達が出来るが今はいない……どうにかして作ってあげたいが……取りあえず考えてみよう



「ドラゴニックストリーム・ジ・アブソリュート・オーバードライブ・スピリチュアル・ヘカトンケイルダイナミック・オーバードレイ・フュー

チャリング・カオスインフィニティ・コスモスタナティス・オブ・エクスカリバー・ビーフ・オア・チキン・エレメンタリースクール・ジュニアハイスクール・オルタナティブ・ストライク……いや、お主のセンスよ」

「……」

「クククク、ガチで草じゃな」

「もういいですよね？」

「いやいや、こんなネタを放っておくほど我も馬鹿ではないぞ」

「はあー、もういいです」

旅館でエビやらマグロやらの刺身、茶わん蒸し、すき焼きを食べながら占い師と夕食を共にする。台風の為、そして折角だから祭りも見たいので今日を含めて三日間泊まることにした。色々お世話になったのでこの代金は全て持つことにしたのだが……このままだと払いたくない。

占い師である彼女は全てを見ていたようで事あるごとにからかってくるのだ。これでは感謝が薄れてしまうという物である。

「さて、いったん、一旦からかうのは置いておいて……」

「一生置いておいてください」

「それは無理じゃのおく」

「めっちゃ煽りますね」

「まあ!! さて、明日は台風らしいから一日ここで待機。そして三日後ある祭り見て帰ると言った感じかの？」

「そうですね。明日はしっかりと休みませうか。そしてですね……祭りの日何ですけど……」

「うむ?」

それとなく俺は彼女に相談をした。



「かあああ、いい湯だああ」

頭髮と体を洗った後、俺は湯船に浸かっていた。露天風呂の為、外の景色を眺めながら入る。いい湯過ぎてヤバいな……

俺はしみじみと今までの事を思い出す。銀堂コハクから始まり、火原火蓮、黄川萌黄、片海アオイ。

全てのバッドエンドを回避したのだ。ここまで思えば長かった……様々な困難があったが成し遂げたぜ。これからはモブだな。

どこにでもいる“モブ”。別にモブが好きと言うわけではないが何というか……背伸びしてた感がある。モブのくせにメインキャラぶっていたようなそんな気が。『ストーリー』が始まるのは夏休み。そこからはニヤニヤしながらハラハラしながらドキドキしながら彼女達を見守るとしよう。

——もう、この世界の命運は俺ではなく彼女達にかかっているのだから。

「さようなら、メインぶっていた俺。こんにちわ。モブな俺」

肩まで湯船に浸かりしつかりと心身ともに温まった俺は冷えないうちに露天風呂を後にした。



次の日、この町に来て五日目はひたすらに部屋の中でゴロゴロしそのまま二度寝、三度寝をしながら過ごした。土砂降りの雷雨だが全く怖くなく今までの解放感からかそよ風程度にしか見えなかった。

六日目もダラダラ。台風はどこへやら行ってしまった。太陽が町を照らし大分気温も高くなってきている。夏が少し近づいているのだなと感じた。この日はお土産を買ったり銀堂コハク、火原火蓮、黄川萌黄からのメールが来たので返信した。

そして、七日目。祭りの日であり今日で俺達はこの町を後にする。「さて、それでは手筈通りに」

「うむ。分かった。我ごういうの一回やってみたかったのじゃ」

最後の最後。俺達はある作戦を執行するために……。帰りの通学路で……



お嬢様の様な弱く儂い女子高生が二人組で帰路を歩いていた。

「この後、お祭りにいきませんか？」

「いいですわね。参りましょう」

上品に笑い、お互いに歩幅を合わせて歩く。無垢な少女二人に忍び寄る影が二つ。金髪の男。サングラスをかけ如何にも悪そうといった雰囲気。女子高生たちはあまり関わらない様にと道をそれる。しかし、ガラの悪い男がわざとぶつかる

「いった!! いったいわー!。これあれや、折れてるわ!!」

「だ、大丈夫ですか？」

「いや、これ折れてるわ。慰謝料やで。ホンマ」

「そ、そんな、貴方達から……」

「そ、そうですわ。私たちは道をそれて……」

女子高生たちは男の雰囲気には怯え強く出れないようだ。ガラの悪い男は折れていると主張しある提案をする。

「ああ!? ワイが自分からいったんちゅうんか!? 折つといてそれはないやろ!百万よこせや」

「そ、そんないきなり……まあ、払えますけど……」

「……五億や、五億払えや」

「ええ!? そんなの無理ですわ!!」

「そうですわ!! 無茶苦茶が過ぎるのではなくて!?!」

独特な三下の様な話し方をする男は百万は払えると言う事に焦り急いで額を引き上げる。これ以上関わりたくない女子高生二人が困っている……

その場に救世主が現れた。片海アオイである。彼女は何か騒ぎが起きていることに気づき此処にやってきたのだ。丁度、彼女の帰路で起こっていた、そして見た目が若い女性に事件が起こっていると知らされ誰よりも事件に早く気付き此処に到着したのだ。

「何やってんの? アンタ?」

「ああ!? 誰や自分!?!」

「あんたを何回も観光あ……」

「ヒーロー気取りの鼻折ってやるわ」

片海アオイの言葉を遮るように男はいきなり殴りかかった。かなりゆっくり目に……まるで掴んでと言わんばかりに。

案の定、彼女に掴まれた。

「クソお、なんて力や!!」

「いや、全然力入れてないんだけど……」

「グおおおおお、目が回る!!」

片海アオイは男を振り回すようにグルグル回した。彼女を中心に駒のように男が回る。五回転くらいすると彼女は手を離し男が投げ飛ばされ民家の壁に激突する。

「グあああはああ!! こ、ここまで強いとは自分ナニモンや!!」

「ええ? アンタが勝手に回って勝手に……」

「く、クソお、ぼえてろー」

「……ええ?」

ガラの悪い男は急いでその場から逃げて行った。逃げる途中で三回ほど転び如何にも三下感を出しながら。

「あ、ありがとうございますですわ。片海さん」

「カツコ良かったですわ……」

「いや……あれは……」

「お姉さまと呼ばせて頂けませんか!」

「わ、私も!」

「いいけど……」

「片海さんってお優しいのですわね。私誤解していましたわ」

「そして、カツコいいのですわね。感激ですわ」

「あれはそんな大したことじゃ……」

「まあ、恩着せがましくもないなんて!」

「何て素敵な女性なのでしょう!」

「……」

とんでもないマッチポンプだなと片海アオイは思ったがとんでもなくキラキラした目を向ける女子生徒二人に何も言えず仕舞いだ。

「もしよろしければ連絡先を交換いたしません?」

「私も!!」

「ああ、うん」

彼女達と連絡先を交換した後、彼女達とは別れた。

「カッコいいですわ」

「私たちはどうしてあの魅力に気付かなかったのでしょうか? 颯爽と

現れて三下を瞬殺する手際の良さ、凄すぎますわ」

別れた後、帰路につく片海アオイの後ろから彼女達の話し声が聞こえてくる。何が何だか分からず仕舞い。なし崩し的に関係をもつて知った彼女の心境は複雑だ。

状況が分からないが同年代の女子二人の連絡先が知れて嬉しい。この二つが混じっている。取りあえず彼女は帰路に向かって歩いた。



「いやー、上手いききました。ありがとうございます。片海さんに連絡してくれてありがとうございます」

「まあ、これくらい構わん。こういうの楽しいからの」
ククク、完璧な変装だったがあの金髪男は俺だったのだ。相手はお嬢様たちでこういった状況には弱い、ピンチに颯爽と現れるヒーローにはときめいてしまうものだろう。

そのまま彼女との関係を持たせるといふ俺の完璧すぎる計画。学校まで着き纏った事で顔を覚えられていると思っただからこそ変装と言う手段を取った俺。そしてあっさりやられる三下を演じるという計画全てが上手くいった。

案の定、あの二人は片海アオイを尊敬したな。

しかし、片海アオイが俺の変装を見破ったのには少し驚いた。それのせいで俺が勝手に一人劇場をする羽目になった。パンチを少し遅めに放ち、そしてわざと掴まれそのまま自分で駒のように彼女の周りを走り吹っ飛ばされる。咄嗟にこのような感じに計画を変更したが正解だったな。ククク。

今は祭り近くの駐車場で車を停めてそこで占い師と話している。全てやることはやったので今から祭りを楽しもうという算段だ。

まだ明るい祭りにには既にかんりの人数が居る。俺達は今日の夜帰るので早めに楽しんで早めに帰ろうという計画だ。流石に休み過ぎたな……色々やってもらって何なんだがこの人は仕事とか大丈夫なんだろうか？

「それじゃあ、祭り楽しみましょう」

「うむ」

俺はカツラとサングラスを置き、念のため服装も変えた。先ほどまでは黒いジャケットだったが今は黒のパーカー。車に荷物を置き俺達は祭りに向かう。

「あー！」

「どうかしたかの？」

「このビー玉返すの忘れてました」

「そうか。では車を……」

「いえ、一人で行きます。お先に楽しんでください」

「そうか、気を付けるんじゃないぞ」

俺はビー玉を返しに町の役場に歩いて行く。最近はずっと走っていたがゆっくりと街並みを眺めて楽しみながら歩く。

そして、役場に向かう途中の角を曲がると……

「あ……」

制服から着替え青いパーカーを着た彼女とバツタリ。こんな偶然があるんだな……

「見つけた」

「どうも」

「あれ何？」

「え？ 何のことですか？」

「とぼけられると思ってんの？ 声ですぐわかったんだけど」

「この世には同じの声をしてる人が……」

「いない」

彼女は問い詰めるように俺にグイッと近づいた。

「なんかさ。アンタって妙なんだよね。あーしのことを知ってるような感じがするし、行動も何処か変だし」

「そういう人もいますよ。世の中は広いんです」

「あっそ。で？ アンタは何者？ 何がしたいの？」

「言うならば……世界の命運を一時期だけ背負ったモブと言ったところでしょうか……そして目的は既に達せられた……」

「……ふざけてんの？」

「す、すいません」

上手く誤魔化そうと思ったのだが出来ないようだ。まあ、転生者ですとは言えないしな。いってもふざけてんのかと言われるだけ。彼女も大分痺れを切らしているようだしな……

「俺はモブですよ。そして目的は秘密です」

「……話してほしいんだけど？」

「それは無理です。それより俺はこれから大事な用事があるんですけど」

「そうなの？ 何大事な用って？」

「このビー玉を返さないといけないんです」

「それって、悪霊に反応するって言う……」

「これ借りものなんです。だから返さないといけなくて」

「ふーん、だったらあーしも行く。暇だし」

「分かりました」

フツ、上手く誤魔化せたな……話を変えて話題を逸らす。これが大人のトーク術だ。

彼女と一緒に町役場に向かう。

「アンタって学校何処？」

「皆ノ色高校です」

「へえー、どんなところ？」

「良い人が多いですね」

何てことない世間話をしつつ役場に向かう。しばらく歩くと役場の所に着いたが……俺は愕然とした。同時に戦慄も……

役場のあつた場所には……何もなく……あるのは廃墟だけ……

「ねえ？ 此処なの用事がある場所って？」

「……あの、ここって役場の場所じゃ……」

「ああ、確かに三十年前はここにあってらしいけど古くなって建て直すとき場所を変えたらしいよ」

「……マジかよ……」

「どつたの？ 顔青いけど」

「いえ、取りあえずこのビー玉はこら辺に置いておきます」

「え？ いいの？」

「はい、それより走りませんか？」

「？ いいけど」

「祭りの場所まで競争って事で……」

「うん、良いけど……」

「それじゃあ、スタート」

俺達は走った。その場から逃げるように……つまりあの町長は……そしてあの人に紹介された陰陽師も……

対価……饅頭とサバの味噌煮。確かに対価は渡した。この町に来て俺が話したのが殆ど幽霊だったなんて……俺実は幽霊が苦手なんだよ……

彼女達の為ならと思う事で頑張ることが出来たが今ではもう無理、怖い怖い。マジかよ。こんなオチってありかよ



「はあはあはあ」

「ダイジョブ？」

「は、い……」

俺達は猛スピードであそこから逃げて祭り会場で呼吸を整えていた。俺達と言うより俺か。彼女は全く疲れていないようだがな。

「おお、どうしたのじゃ。そんなに汗をかいて」

未だに整わない呼吸を抑制しながら声のする方を見るとお面を頭に、そして両手にたこ焼、焼きそば、お好み焼き。エンジョイしている占い師が。

「あつ、アンタさつききの」

片海アオイは占い師を見るとやっぱりと言う視線を向ける。俺は逸らしつつ口笛を吹く。

「ふむ、何やら我は邪魔の様じゃの。後は若者同士楽しむといい」

占い師はそのまま再び祭りの人波に紛れて行った。勘違いしているような感じがするな……

「……どうする？」

「えっと、それじゃあ折角ですし……俺が財布になります」

「そこは一緒に回ろうよでいいんじゃない？」

俺達是一緒に回り始める。沢山の人、そしてカップル。浴衣を着てイチャイチャしている者達を見ているとイライラする……訳でも無いな。片海アオイと祭りを回れるとか幸せ者だな。俺。

「何か食べますか？ 財布になりますよ」

「もう、突っ込まない……たこ焼とか食べたいかも」

だつたらたこ焼を食べに行こう。店を探しながら二人で歩く。綿あめ、お好み焼き、射的、金魚すくい、沢山の魅力的な出店。

段々と人が増えてきて熱気が高まっていく。

たこ焼き屋は沢山あるがその内の一つに並びそこで順番が回ってくるのを待つ。

「へい、らっしやい。カップルかい？ 初々しいね」

「カップルじゃないんだけど」

「そ、それは悪かったね。そ、そんなに怒らないでくれよ」

店員のオジサンはちよつとからかってやろうという感じだったが彼女があっさり断りさらに彼女の目を見て怒らせたと勘違いしたようだ。

「いや、別に……」

「彼女怒ってないですよ。だからそんな気を遣わなくて結構です。それよりたこ焼二パックお願いします」

「おお、そうかい、それじゃあ二つで800円だ」

「はい」

五百円玉を一枚と百円玉を三枚値段ちょうど手渡したこ焼を受け取ると近くの座れるベンチを探す。ちようど一個空いていた。沢山の人が居るなか座れるなんて運が良い。

「ここで座って食べましょう」

「……うん」

彼女にたこ焼を渡す。

「お金返すけど」

「いえ、これくらい良いですよ。観光案内三回もしてもらいましたし。今日は俺が出します」

「いや。でも……」

「それに奢った方が懐が深くてカッコいい感じもしますし。どうぞどうぞ食べてください」

「……サンキュー」

彼女は割りばしを割るとパクパク食べ始めた。美味しい物を食べている彼女の顔は何処か冷めている。先ほどの店主か……

「どうかしました？」

「別に」

彼女はやっぱり自己評価が低い。以前彼女を褒めちぎったがそれで改善するようにはならないか……。簡単には人は変わられない……

「何度も言いますが俺貴方の眼好きですよ。貴方には魅力が……」

「……あんがと。でもさやっぱりあーし、自分に自信を持つことができななんだ。この間アンタに褒めてもらった時はちよつと嬉しかった、さつき同年代女子二人に尊敬の眼差しを向けられた時も……でも、やっぱり怖いって言う人が多いから……」

「そうですか……」

「うん……」

「そうか……やっぱり俺にはそんな大層な事は出来ないか。当然だ。でも、最後まで俺は言い続ける。」

「それでも俺は貴方が素敵だって言い続けますよ。眼は魅力的で誰よりも優くてひた走る貴方が素敵で魅力あふれてるって」

「……」

「俺には貴方を自信あふれるようにすることはできません。でも、俺は貴方が世界で一番魅力的だと思います」

「……会って間もないのに……分かるの？」

「ええと、そうですね……会って間もないのに分かるんです」

「そう……世界で一番ね……」

「あ、すいません。宇宙で一番でした……いや、全ての次元、全ての時間で一番かな？」

「……ぷふ、あははは」

彼女は急に笑い始めた。お腹を押さえて子供のよう。笑いすぎて目からは涙が浮かんでいる。

「アハハっハ！ 腹痛い!! 腹痛い!! 真面目な顔で滅茶苦茶な事言うから！」

「アハハ!! 会って何日？ 私達、あはっは！」

「俺はマジで本心ですよ。決して冗談とかでは」

「分かってる。分かってる、だから可笑しいんだって、ククク、アハはははは」

彼女は基本的にクールキャラだからこんな笑う事は殆どないはずなんだが……どこかツボに入ったか？

二分ほどでいつものクールさを彼女は取り戻す。

「一時間ぐらい褒め殺しされて、宇宙一、次元一って言われたら。そりゃ、多少自信つくもんだよ。良く言えたね。普通は恥ずかしくて言えないと思うけど」

「いやー、つい。気持ち荒ぶって俺ですら制御できなくなっちゃいました」

「ふーん、まあ、何となく自分を好きになれそう。あんがと」

「いえいえ、本当の事を言ったままでですから。大したことではないです」

そういうと彼女は再びくすつと笑って軽く髪をかき上げた。彼女の隠された右目が露わになる。灰色の目だ。左は青。やっぱりいい味出てるな

彼女と両目が合う。彼女は薄く笑いながら口を開く。

「本当の事って……だとしても褒め過ぎ……もしかして……あーしのこと」

そして、少し恥ずかしそうに頬を染めた彼女は俺に訪ねた。僅かに首をかき上げて

——口説いてる？

まだ、辺りは暗くない。ムードなんて特に無い。祭りを行きかう人々が視界の片隅に見える。だが見えない。

彼女しか俺には見えなかった。

「いえ、本当の事を言っただけで口説いてるわけではないですね……」

「知ってる、冗談だから」

「そうですか」

「それより、他の店行こう。観光案内料まだ足りないからさ」

「はい、行きましょう」

俺達はベンチから立ち上がり祭りを楽しむために歩いて行く。彼女には沢山奢った。かき氷、射的、e t c。だが彼女は何だかんだ気を遣って割り勘にすると言ったりしたのだが俺が全て出した。彼女の財布になれるなら本望なので特に苦ではない。

そして、少し早めの解散の時がやってくる。

「あんがと、楽しかった」

「いえいえ、こちらこそ」

「本当にいいの？ お金？」

「いいんですよ。寧ろ財布になれて嬉しいくらいなんですから」

「そう……」

彼女はパーカーのポケットからスマホを取り出す。そして俺に向けた

「連絡先……」

「ああ、そうですね。折角だから交換しましょう」

「本当はアンタから言った方が……いや、なんでもない、それじゃあサツサと交換しよ」

「あ、はい」

彼女と連絡先を交換する……つまり『魔装少女』四人の連絡先を俺は持っているという事か……とんでもねえぜ……

「それじゃ、俺はこの辺で」

「そう……」

「あのー、ちよつといいですか？」

俺達が別れの挨拶をしようとするのと誰かが話しかけてきた。見るとマイクを持った女の人。後ろにはカメラやらなんやらを持った人たち、テレビ局か何かか？

「今、祭りの人たちにインタビューしてるんですけど素敵なカップルを見つけたのでお話を聞きたくて。お時間大丈夫ですか？ ほんの二分くらいですから」

「ええつと。あーし達はカップルじゃないつす。友達っていうかそんな感じ？」

「そうなんですか？ では恋人未満友達以上ってことですか？」

「そんな仰々しくないけど……」

「お二人は出会って何年ですか？」

リポーターの人は片海アオイにずっとインタビューをし続ける。こういうネタはみんな大好きだから欲しいのは分かるけど……

「一週間前に出会ったばかりだけど……」

「まあ、スピード婚ならぬスピードカップルですね」

「だから、カップルじゃなくて……」

メンドクサイ人たちに絡まれたな。まあ本当に二分三分程度ですんだから良かったが最後の最後がこれか……

「それじゃあ、観光案内ありがとうございました。失礼します」

「またね……」

「はい」

俺達はそこで別れた。最後の締めりは悪かったが何だかんだ俺の生きてきた中でこれほど楽しい祭りは初めてだった。

五十六話 閉幕1

彼が休んでからもう一週間近くたつ。土日休みを挟んでも彼は学校に来ない。一体どんな用事が……

「ねえ、萌黄」

「どうしたの？」

今、僕に話しかけてきたのは同じクラスで結構仲がいい女子生徒。徳川とくがわ冬美ふゆみちゃん。緑髪、黄金の瞳で顔も可愛い僕の推しの一人。

「うち、パパから美味しいラーメン屋の割引チケット沢山貰ったんだよね。それでさ、毎日食べ過ぎて流石に飽きが来ちゃってだからもしよかったら貰ってくんない？ 結構おいしい所だから。行って損はない場所だし」

「いいの？ 貰えるなら折角だし貰おうかな」

「店主は拘りの強い女大将だって。スープとか麺にはもう凝りに凝ってる」

「へえー、美味しそうだね。しかも女大将って言うのがいいね！」

「割引チケット三枚あるから。はい」

彼女は僕に割引チケットを三枚差し出す。使用期限は一週間か

……

「味は保証する」

「ありがとう」

三枚か……誰か……あ！ 折角だし二人を連れて行こう。二人は偶にぎすぎすしてるけど偶に仲良さげだし、そう言うときの二人は見ててほのぼのするんだよね。よし放課後、女子三人でラーメンだ!! こういう機会があれば仲良し度が上がるかもしれないし。

しかし、この時の僕は知らなかった。まさかラーメンのスープが水のように薄くほぼ無味になるなんて……



放課後、ホームルームが終わり帰りの為に身支度を整えている彼女

を僕は早速誘う。

「ねえ、火蓮ちゃん。美味しいラーメン屋行かない？」

「ラーメン屋？ うーん、どうしようかな？」

「すつごく美味いらしいんだ。ネットの評判もいいんだよ」

「へえ、そこまで言うなら行ってあげても良いわよ」

「それじゃあ、コハクちゃんも誘おう」

「アイツ誘うの？ だったら行かな……」

「行くよ。ほら行くよ！」

「ちよ、腕引つ張るんじゃないわよ」

ふうー、無理やりにも誘うことが出来たぞ。フッフ、僕もメンタルが強くなつて来たな……。彼ほどじゃないけどね……

次に誘うのはコハクちゃん。火蓮ちゃんはちよつとむくれ顔。教室に迎えに行くと、ちようど彼女が出てきた。

「コハクちゃん」

「萌黄先輩……とお邪魔虫ですか」

「名前すら覚えられないなんて脳、大丈夫？」

火蓮ちゃんは挑発するように頭をトントンと叩く。そこから互いに青筋が浮かび雰囲気が悪くなる。

あわわわわ、ぼ、僕が止めないと……

「コハクちゃんラーメン屋行かない!？」

彼女達の間立ち二人の壁になる。それなのにコハクちゃんは僕の体から僅かに顔と手を出して火蓮ちゃんを指さした。

「そののぺちやぱいも行くんですよね？」

「ああ!? 何、ねじ切りたいの!？」

火蓮ちゃんの、た、タブーに触れただけでなく。そこから更に高度な煽りを入れてくるなんて……

火蓮ちゃんも声がどす黒くて女の子の声とは思えない。

「私行かない！ ビッチと一緒にご飯なんて食べたくないし」

「誰がビッチですか!? 私は乙女です!!」

「別にアンタなんて一言も言っていないけど心当たりがあるようね」

「っ!! この、アマが……」

二人の背中には何かが見える。コハクちゃんには白いトラ。火蓮ちゃんには

フェニックス不死鳥。ゴゴゴゴゴゴと互いの守護霊の様な物が激突するようなイメージが……

と、止めないと……

「二人とも落ち着いて……仲よくしよう?」

「無理」

「無理です」

何でそんなところだけ気が合うんだろう? お互いにそっぽを向く。不仲感が半端ない

「せ、折角ラーメン屋の割引券が三枚あるんだ。これは行かないと損だよ!!」

「私その豚が行くならパス」

「っち、私はそのさらし巻き女が行かないなら行きます」

「そ、そんな……せ、折角……」

どうしようかなあ。ここままだと二人が不仲のままになってしま
う……一人ラーメンも寂しいし……でもチケットもあるし……

こ、こうなったら

「ふえええん、二人が喧嘩するよお、えーんえーん」

秘技『嘘泣き』。その場でしゃがみ込み手を目元に当てて泣いたふりをする。やったことないけどなんかうまく言っている感じがする。

「も、萌黄泣かないですよ!」

「そ、そうですよ。私達のこれは、あれ、ですよ。じゃ、じゃれ合いッていうか。

ねえ?」

「そ、そうそうただのじゃれ合いなのよ。だ、だから泣かないで?」

二人が気遣い、そして火蓮ちゃんを頭を子供を宥めるようにナゲナデ……グヘヘへ幸せ……ってそんなこと考えてるわけじゃないよね。僕って意外と演技の才能が!!? いけないまた脱線した!!

「ひつく、二人が仲悪いから……」

「ほら、私達仲悪くないですよ!!」

「そうよ。見て見て」

二人は肩を組む。上半身は凄く仲がいい。しかし、下半身、特に足が互いに踏み合っている。

「足が仲悪いよお」

「ううっ」

すると二人は互いに踏むのを止めてイライラしながらも笑顔浮かべる。

「ほら、今度こそ……仲いいわよ」

「ぐぐ、ええ、仲いいですよ」

「よし、それじゃあラーメン屋行こう!」

僕は一気に立ち上がりラーメン屋の方向に向かってビシツと指を差す。そして、その方向に歩き出す。

「……なんか上手く丸め込まれたわね……」

「とんでもない演技でした……」

後ろから何か聞こえるような気がするが気のせいだよな?



「此処ですか?」

「ふーん、結構目新しいお店なのね」

外装だけでもかなり最近できた感じが良く分かる。店内に入るとカウンターとテーブル席がある。僅かに空いた席が複数。

「いらっしやいませ。何名様でしょうか?」

「三人です」

「カウンターとテーブル席どちらがよろしいでしょうか？」

「テーブル席でお願いします」

フフフ。こっちの方が二人のかわいい顔が良く見えるからなんだよね！ テーブル席では僕が二人に向かい合う。隣あわせの二人は何処か変な感じが……

「それじゃあ、注文しよう!! もう二人ともそんな険悪な感じじゃ他のお客さんも気にしちゃうからダメだよ！」

「そうね……取りあえず注文を。はい萌黄」

「ありがとう」

火蓮ちゃんが僕にメニューを渡してそして自分の分を取って眺める。このお店メニューは二つある、だが火蓮ちゃん側にメニュー、調味料が置いてある為コハクちゃんが何もできない。火蓮ちゃんはメニューを一人で見て隣のコハクちゃんには見せない。

「見せてくださいよ」

「ああ、これも美味しそう」

「無視しないでください!!」

「プイっ」

「もう見せてください!!」

「いやーだー」

二人で取っ組み合いのようになってしまう……。

「ほらコハクちゃん僕の見せてあげるから、ね？」

「流石萌黄先輩！ 胸だけでなく器も大きいんですね！ それに比べて何もかも小さいこの人は」

「嗚呼!?!」

「ストップ、ストップ。周りから見られてる!!」

かなりの大声で言うとな彼女達は一旦落ち着いた。そしてなんとか注文を終えることに成功する。その時も色々あったけど……

『私は豚骨ラーメンお願いします』

『ぷ、共食い』

『この人はお子様ラーメンでお願いします。ほら体つきも言動も幼いでしょっつー。』

店員さんが物凄く困ってたなあ……ラーメンが来るまで何の会話をしようかな。二人は何も話さないし僕が会話を回さないよ。

「火蓮ちゃんは最近のおすすめのラノベはある？」

「うーん、『魔術学院の出来損ない』は年がら年中お勧めだけど……最近はね、『最弱賢者の無双英雄譚』とか？」

「そんなのあるんだ……最弱なのに無双なの？　ちよつと矛盾してる感じがするんだけど？」

「最弱イコール最強って意味だから問題ないわ」

「へえーそうなんだ。そんな隠れた意味が……えっとコハクちゃんは最近ハマってる事とかある？」

「料理でしょうか？　フランス料理に興味が出てきました」

「へえー、フランス料理……凄いね」

「普通ですよ」

火蓮ちゃんの場合は今まで触れてこなかったジャンルだからあんまりついていけない、コハクちゃんの場合はジャンルが突き抜けているから上手く合わせられない。二人とも個性が強いな。そこが良いんだけどね。

「お待ちせしました。豚骨ラーメン、キムチラーメン、味噌ラーメンになります」

店員さんがラーメンを持ってきてくれた。良い匂い。ちよつと夕食には早いけど問題ないよね？

「「頂きます」」

スープを一口、美味しい。二人も満足げの表情で箸がドンドン進むようだ。美味しい物を食べているときはみんな幸せになるんだなあ。なんかこの雰囲気が好きだ。

三人で夢中で食べていると店内にあるテレビに生中継番組が映っていたので何となくだが目を向けてしまった。

『今、海原町のお祭りに来ています』

「海原町ってどんな町だったかしら？」

「自然豊かで特に海がきれいでも有名な観光地でもある場所ですよ」

「あの町は祭りの時期が随分早いんだね。夏まではもうちよつと時間あるんじゃない?」

「確か、夏祭りではなく伝承をもとに催された祭りらしいので時期はあんまり関係ないらしいですよ」

「何でそんなこと知ってるのよ」

「なんとなくで全国を調べてた時期があるんです」

「す、凄いね……そんな時期があるなんて……」

三人でテレビを見ながら感想を漏らし会話が弾む。僕も二人もラーメンは大分食べ終わっている為テレビに意識がいく。

『沢山のカップルが居ますね。インタビューしてみましよう。すいません』

キャスターの人が男女のカップルに話しかける………
嘘……

あわ、あわわわわわわわつ。か、彼が居る………しかも隣に知らない僕好みの女の子。

ふ、二人は……恐る恐る二人を見ると
「……………」

二人が無言になったあ! えええええ!!?!? ここに来てこんな感じになる!!? 折角、ラーメン屋に来て三人で楽しく会話していい雰囲気だったのにな、こんな結末になる!!?

と言うか学校休んで女の子と祭りって不良!? 不良なの!?

キャスターの人がインタビューを見知らぬ女の子に……

『お二人は出会って何年ですか?』

『一週間前に出会ったばかりだけど……』

えええええ!!? つまりこの一週間学校休んでナンパしてたの!!?!? 馬鹿じゃないの!!? どうするのこの空気!?

「あ、えつと、そ、そっくりさんも居るんだね。アハハハ」

自分で言っていてこんな苦しいいい訳はない。二人も一切話さないし。胃が痛くなってきたよ。

その後、僕たちは特に会話することなく解散した。僕も慌て過ぎて

割引チケットを使うのを忘れ帰りに薬局に寄ることになった。彼には後で損害賠償を請求しようとして心に固く誓った。



昨日の深夜自宅に帰ってきたのだが疲れが大分溜まっていたためすぐに眠りについてしまった。今日からは学校に行かなくてはならない。

遂にモブか……モブである俺のモーニングルーティンは朝ギリギリに起きて適当に朝食を済ませ欠伸をしながら登校する。

嗚呼、平和だ。気分が良い。彼女達に恩返しをしたいという気持ちが一番でそれを成し遂げられたことも嬉しい。

「勇者だ」

「おい、勇者が居るぞ」

「勇者十六夜だ」

コソコソ話している皆ノ色高校の生徒達が何やら俺を“勇者”と言っている。学校を一週間丸々休んだからか……？

それにしても久しぶりだな学校行くの。鼻歌交じりに通学路を歩いていると後ろから肩を叩かれた。振り向くと火原火蓮。

「おはようございます」

「……」

あれ？ 聞こえなかったのか？

「おはようございます？」

「……おはよう！ 十六夜！」

やっぱり聞こえなかっただけか。彼女は僅かに空いた間があったが満面の笑みで挨拶を返す。

「あ、返事遅れてすいません。わざわざ送ってくれたのに」

休んですぐに彼女からメールが来たのに返せなかったことは俺のミスだからしっかり謝罪しないと。

「……うんうん！ 大丈夫よ！ だって十六夜も色々忙しかったみたいだし……ね？」

「あ、はい。そう言ってもらえると……助かります……?」

何か彼女の雰囲気がいつもと違うような……男子三日会わざれば刮目して見よと言う言葉もある。それは女子にも適用するのか? 気のせいかもしれないけど……

「ねえ、十六夜、ちよつとこつちに來てもらってもいい?」

「あ、はい。でも学校が……」

「いいじゃん、だって散々サボったんだから。それにほんのちよつとだけ……いいわよね?」

「は、はい」

なんか悪寒が……気のせいかな? 彼女について行くと人通りが少ない路地裏のような少し暗い場所。そこに入ると彼女はいきなり俺の胸倉をつかんだ。

「あ、あの、どうかしたんですか?」

「フッフ、どうかしたんですか? ですって? おかしなことを言うのね? まだバレてないとも思ってるんだ」

「え?」

「十六夜、海に行つて何してたか正直に言つてごらんさい。怒らなから」

彼女はそう言いながらも俺の足に穴をあけるのではないかと言わんばかりにグリグリと踏みつける。どういう事?

「えつと、観光しました……」

「へえー、それは楽しかったんでしようね? 女の子をナンパして女の子を観光するのは……」

「な、なんか勘違いしてないですか? それと足がちよつと痛いんですけど……」

「あ、ごめーん。勝手に足が動いてえ。自分でも止められないのお」

「あ、そうですか……」

「で? あの女は誰?」

「だ、誰の事ですか?」

「まだバレてないと思ってるんだ？ あのテレビに出てた青髪の女は誰だっけ聞いてるんだけど？」

「……テレビ……テレビ……あつ!! あのキャスターの時のインタビューか!?!?」

「それ違います!! あの人は偶々会ってそれで観光案内してもらって、そのお札に祭りで奢っただけで!!」

「嘘つき。お似合いカップルってテレビで言ってたんだから……誰の為にツンデレ演じてると思ってるのよ……偶に本心で言う事もあるけど、馬鹿みたいに勘違いしないでとか言ったりしてんのも十六夜がその感じが良いつて言うからやってんのよ……それなのに十六夜は……また女の尻追いかけて……最近美容院とか行って髪整えて貰って綺麗にツイントールを纏める方法とか聞いて……料理も勉強して……ブツブツぶつぶつ……」

や、ヤバい。物凄い長文……目が怖いし声も低い。ヤンデレ……じゃあないよな? ……色々誤解があるからしつかり解かないと……

「火原先輩!! 本当に誤解なんです。あの青い人とは友達ですけど恋人ではないんです!! 本当に神に誓います!!」

「証拠は？」

「ないですけど……俺の目を見てください。嘘ついてるように見えませんか!?!」

「……見えないけど……」

「じゃ、じゃあ信じてくれますよね?」

「でも……」

「実は先輩の事は一時も忘れていなくてお土産も買ってきたんです!」

「ほ、本当?」

「はい、どうぞ!!」

彼女にお土産であるお饅頭を献上する。メールの返信は忘れたけど……一時も忘れてないという事におこう……ぐぐ、仕方ないな

……これは。あんまり嘘はつきたくないけど……

「……これ？」

「そ、そうなんです！」

し、しまった。あんまりいいお土産じゃなくて火原火蓮があんまりこれと言った反応を見せない。可愛いストラップとかの方が良かったかなあ？ でも家族で食べれると思ったんだけど……

「先輩の家族で食べて欲しくて」

「………はあく、まあ、ギリギリ及第点……平常点込みで……」

「そ、そうですか」

「信じるわよ。青女とは何ともないって」

「は、はい、友達です」

「そう、なら学校行きましょう」

「はい！」

セーフ。何がセーフか良く分からないけど……この調子で行くと銀堂コハクまで……俺は久しぶりに胃が痛くなるのを感じた。

「十六夜！」

「？」

「仕方ないから一緒に学校行ってあげる。感謝しなさい！」

「そうですね。では、ありがとうございます」

そういう彼女の顔は満面の笑みでちよつと恥ずかしそうだった。彼女と一緒に登校するのは久しぶりかもな。

そして、彼女はやっぱり可愛いな、おい。

五十七話 閉幕2

「それでね、最近のおすすめはね『最弱賢者の無双英雄譚』なの」
「タイトルが矛盾した感じがしますがラノベタイトルの最弱と最強はほぼ同じ意味なので何の問題もなく、無双とつくのでつい手に取ってしまいそうになる本で面白そうですね」

「流石十六夜!! 分かりみが深いわね!!」

「いやーそれほどでも」

「十六夜と久しぶりに話すと楽しいわね……それでね、他にもおすすめがあつてー!」

前半の部分は小さい声だがガツツリ聞こえているため反応に困る。嬉しいけど……彼女とは学校の玄関で別れたが他の生徒達が“勇者”だと言っているのは意味が分かってしまい嬉しくない……



教室に入ると全ての生徒が俺を見た。尊敬の視線をするもの、単純に身を案じる者、ごみを見る視線を向ける者様々だ。ちらりと銀堂コハクの席を確認すると彼女の背中が見える。

そして、真黒なオーラが……

やべえ、誤解されてる。そして下手したら夢見たいな展開になるかも。いや、流石にそれは無いか。

「お前……良く来れたな」

「久しぶりだな。佐々本」

「一週間サボって女と祭りとは恐れ入るぞ。マジで見ろこの男子達の尊敬の眼差しと女子からのごみを見るような目を」

「何も言えない」

「取りあえずコハクちゃんを何とかしろよ。体育祭の時よりもマジでヤバイ」

「知ってる……後これお土産」

「なんだこれ?」

「官能小説」

「あざす!」

さて、彼女にどうやって話しかけようか……時間があるときが良
から昼休みだな。



「あの、銀堂さん」

昼休み俺は意を決して彼女に話しかける。ここまで異常ともい
える授業の長さだった。教室の雰囲気は最悪。周りからお前のせいだ
と言われる視線がきつかった。

「……どうかしましたか!?!」

一瞬の静けさから元気よく彼女は返事を返す。それが逆に怖い。
満面の笑みの瞳の奥そこから何やら狂気的な物を感じる。

「あの、少しだけ時間あります?」

「勿論ありますよ! ……私も丁度昼休みに呼びに行こうと思ってい
たので……」

ハイアンドローを彼女は使い分ける。それによつてますます冷や
汗が噴出し足ががくがくと震え始める。怖くて逃げたいが、しかし、
ここで先延ばしにすると余計にとんでもないことになる予感がする
ので彼女の誤解を解こう。

「そ、それじゃあ、お、屋上に……」

「ええ、行きましょう」

よし! 彼女を呼び出せた! このまま屋上に行こうとすると銀
堂コハクの後ろの席にいる野口夏子と目が合った。

彼女はカンペに何やら文字を書き俺に見えるように掲げる。なん
だろう? アドバイスとかか?

“一回死ね”

……さて、屋上に行こう



青空がどこまでも続き晴れやかで爽やかな今日この頃のはず。し
かし、彼女からあふれ出る真っ黒なオーラによつて俺ビジョンでは魔

界にいるようにも感じられる

屋上は誰も居ない。そして彼女はここに来るまで一言も話さなかった。

「あの、ですね。恐らくですが銀堂さんは誤解されていると思うんです」

「はい？ 誤解？ 良く分かりません」

「俺とテレビに出てた青色の髪の子あれは友達と言うか……」

「フフフ、アハハ……十六夜君……そんなに慌てなくても大丈夫ですよ。十六夜君は悪く無いんですから……」

「え？」

俺は悪くない？ つまり怒っていないという事か？ 良かったあ、ほつといたら刺されるんじゃないかと思っていたんだが誤解されていなかったのか……

「悪いのはたった二つです。あの女と十六夜君の中にある男性の本能」

「ん？」

「あの女にたぶらかされたんですよ？ 大丈夫ですよ、私が呪縛から解き放つてあげます……先ずは一緒に住んで恋人になってお互いの良さをより深く知って……」

「あ、あの」

「はっ！ すいません。説明の途中でしたね。もう一つの男の本能ですけどこれは本当に仕方がないんです。十六夜君は男の子ですから女の子に目移りしても仕方がない。ええ、仕方がない、仕方がない……男性と女性は本能で求めあうもの。仕方がない、仕方がない……」

仕方がないならそんな怖い雰囲気で来ないで欲しい……彼女の話が無言で聞いていると彼女は後ろに隠していたのか大きなハサミを出した。

「この大きなハサミ何だか知っていますか？ 手芸で使う布切ハサミって言うんですけど知ってますよね？」

「は、はい。何故今？」

「そうでした、そうでした脱線してしまいました。男の本能による行動は仕方ないんです。でも、このままだと十六夜君は悪い女に騙されて人生が滅茶苦茶になってしまいかもしれません」

「そ、そうですか？」

「……いやいやいやいやハサミ出して言われるとめっちゃ怖い。それに彼女が何を言いたいか大体わかってしまって更に怖い。彼女は顔では笑いながらも目が笑っていない。」

「それはダメです。絶対に……だから男性の本能の元を……これでちよん切つちやおうかなあゝつて……思っただんです」

「も、元つて何ですか？」

「何ですかつて、そんなのナニに決まってるじゃないですか」

「………ははああああああああああああああああ!!」

「やばいやばいやばいやばい!! 大体予感にしてたけど実際言われると驚嘆度がヤバイよ!!」

「そ、それはダメですよ!! 女の子になつちやいますよ!?!」

「それならそれで愛します。ですから、ね？」

「いや、ね? つて言われてもダメですよ!」

「我儘言わないでください。貴方の為なんです。大丈夫責任は持ちます。ですから、ね?」

「ダメダメですよ! 一応俺結婚願望とかあるし、子供だつて欲しいですし!!」

「何だかんだで俺も彼女は欲しいし、結婚願望だつてある。前世じゃ陰キヤだつたわけだしな……」

「結婚……子供……私も結婚もしたいし子供も欲しいです……じゃあこのハサミは使えませぬね……」

彼女は残念そうにハサミをしまった。とんでもない事になってないか? 彼女のヤンデレ具合と言うか。そもそも彼女がヤンデレになったのは俺のせいかもしれないけど。

「あの、そもそも俺たぶらかされてもいないんです。あのテレビに

映ってた人はただの友達で特別な関係とかじゃないんです」

「本当ですか？」

「観光案内してもらってそれでお礼に奢るといふ話になった所をテレビの人が勘違いしてカップルだとか言ったんです」

「そうだったんですか……」

「信じられませんか？」

「……複雑です。十六夜君の言う事は何でも信用したいのですが何処か疑ってしまうという気持ちもあります……」

「でも、インタビュで青色の女の子もカップルじゃないって言っていましたよね？ 当事者同士が否定してるわけですし、信用度は大分高くないですか？」

「そう、かも、しれませんね。すいません、早とちりをしてしまったようで……」

「いえいえ、俺を心配してくれている気持ちも感じれたので嬉しかったです。後、これお土産です」

「ええ!? 私に!？」

彼女に渡したのは饅頭である。火原火蓮とお土産を買えるところちやごちやになるかと思つたから同じ物にした。かなり美味しい饅頭だがセンスが悪いから機嫌悪くなるかな？

「すいません。本当はもつといいものを買えれば良かったのですが」

「いえ！ 私の為に……買ってきてくれただけでも……嬉しいです！

十六夜君からの贈り物……一生食べません!!」

「賞味期限以内には食べてくださいね。流石に色々問題もあるかもしれないし……」

「で、でも勿体なくて食べられません!!」

「ああ、いやでも虫とか湧くかもしれないよ？」

「ジップロックを十枚くらいして保存します!!」

「え、えつとまた今度贈り物しますからそれは食べてください……」

「ええええ!! また贈り物を!? えへへ、ありがとうございます。それじゃあこのお饅頭は美味しく頂きます!」

「是非食べてください」

彼女の笑顔が華のように可憐になった。良かった……今何時だ？
時間はお昼休みの中盤位。まだ少し時間はあるけど食堂で食べる
くらいの時間はないかな。購買に行くか。

……
黄川萌黄はどうしよう。彼女は俺にあんまり興味ないだろうし

「それじゃあ、十六夜君食堂に……すみません。私のせいで時間が」
「俺が呼んだので気にしないでください。購買も偶には食べたいで
す」

「フフ……それじゃあ、購買に行きましようか？」

「はい」

「あ」

彼女は何かを思い出したようにそこで止まった。笑顔が急に闇を
持った感じに……

「どうしましたか？」

「朝、火蓮先輩と一緒に登校した件を詳しく簡潔に私が納得いく理由
を教えてもらっていいですか？ 何故？ 私を誘わなかったのか？
何故わたしをさがさなかったのか？ この辺を詳しくお願いします
ですね？ さあ、どうぞ？ 十六夜君を私は信じていますからそれなり
の理由があるんですよね？ それを早く教えてください」

この日のお昼はナシになった。残り全てを弁解する時間に使用し
たからだ。彼女を納得させる理由が見つからない為、後半から褒め殺
しを行いそこでチャイムが鳴り誤魔化すことに成功した……

お腹空いた……でも、彼女は少し怖かったけど何だかんだ俺を気遣
う感じもあって嫌いには絶対なれないな。



放課後。教室内の雰囲気も随分回復しこれから帰ると言ったとこ
ろ。黄川萌黄は弁解とか必要ないか？ 彼女はあんまり俺に嫉妬と
か興味もなさそうだし……それなのにあれは違うんだよって言うて

もな……キモいだけ

「十六夜君、一緒に帰りましょう！」

「はい、そうですね……」

彼女が久しぶりながらも帰りの誘いをしてくれる。断るわけには行かないので承諾するが火原火蓮も……

すると教室のドアが勢いよく開いた。

「十六夜！一緒に帰るわよ！」

火原火蓮も来た。後ろには黄川萌黄も……なんかこつちをちよつと睨んでる。俺と銀堂コハクが二人のそばに寄り全員で廊下に出ると銀と赤が睨み合い。

そして俺は黄色ににらまれる……

「二人ともちよつといいかな？ 僕彼に少し言いたいことがあるんだ。五分だけ貸して」

「何言う気？」

「そうですね、何言う気ですか？」

二人のこわこわの雰囲気が一気に黄川萌黄に降りかかる。

「ヒい、だ、大丈夫だから二人の思うような事じゃないから！ 神に誓うから！」

「なら、良いけど……五分だけよ」

「一秒遅れることに先輩は十分間私達のおもちやですから」

「えへへ、二人のおもちやになら僕なつても……って一秒で十分は多すぎ!! 二人のおもちやになるの楽しいのは五分くらいだから一秒ごとに五分にして!! それより先は変な気分になるだけなんだよ！」

いやー、黄川萌黄っぽい複雑な頼みだがそこがいい。俺は推すぞこの頼みを!!

「ダメです。十分です」

「そうね、十分よ。だって五分すぎてからの萌黄をいじるのが楽しいんだから」

「それは分かります」

「ええ!? 二人はドエス!? まあ、それもアリだけど……」

三人の世界を永遠に見ていたくなるが無理だよな。動画に納める

か。俺は三人の世界をスマホに納める前に三人に聞いた。

「三人の写真、スマホで撮っていいですか？」

「「ええ？」」

三人共首をかしげて疑問を浮かべる。確かにいきなりスマホで撮っていいかと言われたら首傾げるよね。

「いいですけど、撮るなら別の場所にしませんか？」

「そうね。廊下はないわね」

「うんうん」

「それより萌黄はいいの？ 用があるんでしょ？」

「あ、そうだった。ちょっと来て」

「萌黄先輩変な事したら……」

「そうよ……」

「し、しないって……ほら、いくよ」

俺は彼女と一緒に一旦屋上に……

屋上に着くとまだ青空が浮かんでいる。一体何を言われるんだ

……

「君に聞きたいことと言いたいことと請求したいことがある」

「な、何ですか？」

「まずはこの前聞きそびねたあの男の事。君は何をしたの？」

「特に何もしてないです。勝手にあっちが襲ってきて……」

「……はあー、本当の事は言わないんだね。分かってたけど……次に請求」

「請求とは？」

それにしても、請求とはなんだろう？

彼女は一枚の紙を俺に手渡した。そこには……

胃腸薬代、ラーメンの割引できなかった分の代金。胸揉まれた痴漢代。しめて三万円……まあこれくらいなら払ってもいいな。俺のせいもあるだろし。

前の二つに関しては良く分からないが……

「払うの明日でいいですか？」

「何で払うの!? ちょっとしたジョークだよ! そう言う所だよ、君のモヤモヤするところ!!!」

「そうなんですか?」

「そうだよ!」

彼女は情緒不安定になり俺から紙を取り上げる。

「まずね! 君には痴漢された! それに君のせいでラーメンを割引し忘れた!! 胃も痛くなった!」

「す、すいません」

「でも、君には感謝してるんだよ! バカヤロー!」

彼女は紙を丸めて床に叩きつけた。その後再びそれを拾う。

「君のせいで毎日がなんだかんだ楽しいんだよ! バカヤロー!」

そして、叩きつける。拾う。

「君のせいで僕の心の中は複雑でぐちゃぐちゃなんだよ!! 意味わからない言動が多いし、痴漢するし、痴漢するし!! 酷い事言っても直ぐ許すし、何考えているか分からないし!! 聞いても答えてくれないし!! とんでもない受容体だし!!」

「申し訳ございません」

「でも、トイレに着いてきてくれて安心したんだよ!! あの二人とも仲良くなれたんだよ!! バカヤロー!」

叩きつけ。彼女は再び紙を拾う。

「ああ、だから何が言いたいかというと……良く分からないんだよ!! 僕もこんな気持ちは初めてなんだよ! 感謝はあるけど男だし、でも安心するし、でも男だし、訳が分からなくてずっとモヤモヤしてるんだよ。馬鹿やろー!!」

彼女は叩きつける。今度は拾わない

「……ちよつとスッキリした。良く分からないモヤモヤを言えて……」

「そ、そうですか?」

「僕も本当に何を言いたかったのかは分からないけど、これが言いたかったんだと思う……何言ってるか自分でも分からないけど……」

「まあ、人間なんてそんなものですよ。心を言葉で表現するのは至難

の業ですから気にしなくていいと思いますよ」

「だから、そういうのがモヤモヤさせるんだけど……まあ、いいや。スッキリしたし二人の所に戻ろうか」

「そうですね」

彼女は感謝を伝えたかったのか？ それとも……いや、よそう。外れてたら気持ち悪いだけだ。

戻ると二人が満面の笑みで待っていた。

「萌黄……三分遅刻！」

「つまり……1800分ですね、三十時間おめでとうございます！」

「ああ!? 忘れてた!! ちよつと待って二人とも流石にそれは!!!」

「分かってるわよ」

「分かってますよ」

「そうだよね、流石にじょうだん……」

「小分けにして使うから」

「ええええ!? 何それ!?!」

「火蓮先輩と私が萌黄先輩の悶える姿が見たくなかった時に使ってます」

「補足説明がとんでもない!?!」

『魔装少女』の初期メンバーである三人。そして片海アオイと五人目。彼女達の運命は一体どんな結末になるかは知っている。何度も見た。見返した。

でも、彼女達は何度見ても飽きない。

「ちよ、ちよつと君からも何か言つてよ!? 君が言えばふたりも落ち着くし!? 僕は二人にいじめられたいけど限度があるんだ!」

「そうですね。写真撮りましょう。屋上で」

「ええ!? 無視!? 僕無視!?!」

「いいわよ」

「私もいいですよ」

「何でこんな時ばかり二人は団結するの!?!」

四人で屋上に行く。青い空とフェンスをバックに

「それじゃあ、ハイチーズ」

パシャリとスマホで撮ると大好きな三人に囲まれた写真。

彼女達の為に動いたがそれは俺がやりたかったこと、俺の勝手な心で動いたからご褒美も報酬も出ることはない。でも、ちよつとだけモブにしては頑張ったわけだし

取りあえず、これくらいならいいよな？

彼女達との写真をスクショ百枚してと……待ち受けにもな……

宝物だな

「この後、あの喫茶店行きませんか？　俺が奢ります!!」

「勿論行くわよ」

「私も行きます」

「僕も行くよ！　奢りならたくさん食べて君に迷惑かけて八つ当たりしてやる!」

「萌黄?」

「萌黄先輩?」

「ヒい、ご、ごめんなさい。冗談です……」

楽しいな。大変だったけど楽しくて、ワクワクして夢がある。素晴らしいファンタジーで魅力的なキャラが沢山いる。

此処はそんな世界。

魔装一步前

五十八話 両親

ある日、私のスマホに一本の着信があった。画面を見るとお母さまと言う事が分かる。

「もしもし？ お母さまですか？」

「はい、そうですよ」

「えっと、何か？」

「コハクさん。貴方が以前言っていた黒田十六夜と言う人物について聞きたいのです」

「い、十六夜君の事ですか？」

「そうです、以前にも言いましたね？ 付き合うべき男性は慎重に選べと」

「十六夜君は凄くいい人です!!」

「私もあの人も貴方の事が心配なのです。今まで男性とのかかわりが殆どなかった貴方が急に運命の人だと言ったのには驚きました。コハクさんは見る目があります。万が一と言う事もあります。一度その彼と話せる機会を設けてください」

「そ、そんな急に……」

「それではお願いしますね。私も物凄く興味があるんです。優しくして紳士でコハクさんを一番に考えてとんでもなくラブラブしている貴方の彼氏さんにはね」

「い、十六夜君は多忙ですから……き、厳しいかもしれませ……」

「でしたら私達でそちらに向かいます」

「あ、で、でも」

「それでは失礼」

「あ、お母さま!?! お母さま!?! き、切れてる……ど、どうしましょう!?!」

お母様とお父様が来る!?



「ど、どうしましょう!?! 何かアドバイスをお願いします。夏子さん!」

「ごめん、もう一回説明してくれる……」

私の名前は野口夏子、華の女子高生。もうすぐ期末テストが近づいてる中親友である銀堂さんからある相談を受けていた。

「で、ですから、私のお母様とお父様が私に会いに来てしかも十六夜君に会わせろって!!」

「しかも、黒田君とラブラブカップルだって言ったと?」

「はい……」

「何で言ったの?」

彼女の両親はどうやら物凄く厳しいご家庭らしい。彼女が一人暮らしをしているのも彼女を立派な大人にするためだとか。でも親からすれば心配は当然なので良く電話はするみたい。

「えっと、見栄を張ってしまったというか……十六夜君の良いところを沢山お母様に言っていたら彼氏なのかと聞かれてどうせ……:そうなるのでいいかなって」

「あ、そうなの?」

あら、理由がとんでもなく可愛い。可愛いけど……:どうしてそんなこと言っちゃうの? 恋愛はポンコツか……:そこも可愛いけど

「でもさ、だったら正直に言えばいいんじゃないかな? お母さんに嘘でしたって」

「あの、そうなんですけど……:私のお母様は……:その、とても厳しくてとても怖くて……:嘘の報告をずっとしてたってバレたらお尻ぺんぺん……:百発……:」

「高校生でそれはないんじゃないかな?」

彼女は顔を蒼くしている。そんなに怖いなら最初から本当の事を

正直に言えば良かったんだろうけど。彼女の苦手な物が一つ分かって嬉しいような気も……

「いえ、お母様ならやりかねないです……お母様は嘘が途轍もなく嫌いで……お尻がお猿さんになって……その後お説教ですう」

彼女は頭を抱えてガクガク震えている。自分で招いて自分で困ってるよ……

本当なら正直に言えいいんだけど彼女は怒られたくない。さて、どうしたものか……

「つまり、嘘がバレて怒られたくないって事？」

「そ、そうです！ 何とか誤魔化したいのでいい訳を考えてください！ お願ひします！ お母様だけは！ お母様だけは！」

「ああ、うん。じゃあ本当に付き合っちゃいえよ？」

「それができたらもうしてますよ!! 私の妄想では既に付き合っただてを十回くらいしてるんですから!! でも、妄想では上手くいくのに現実では上手くいかないんです……」

「だよね……うーん……」

まあ、彼女が直ぐにでも黒田君と付き合えれば私が協力もする必要もなかったし、それを求めるのは酷だよね……でも、何かこのままじゃじり貧な感じがするんだよねえ？ 黒田君と銀堂さんを結ばせるのが私の目的。

これは上手く使えば何か変化を起こせるかも……本当は正直に言うのが一番なんだろうけど

「だったら、黒田君に協力してもらえば？ お母さんを誤魔化したって」

「そ、それじゃあ、私が嘘つきの女の子になってしまうじゃないですか!?! 嘘つきは嫌われてしまうかもしれない！ そもそもそんなウソを他の所で言っただとバレたら引かれてしまうかも……」

「大丈夫だよ。嘘は女の特権だし、引かれるかも知れない嘘はさらに嘘で誤魔化せば問題なし」

「……そうなんですか？」

「嘘を上手く使える女の子はモテるよ」

「……うう、じゃあいいです」

「あ、うん、えつと先ず黒田君には両親に見栄を張って彼氏がいると言ってしまったと言うんだ」

「は、はい……」

彼女は顔色を少し暗くする。嘘をつこうと思つてつくのは彼女は得意じゃない。なんとなく無自覚の内に使うときはあるけど、明確な意志と目的を持って彼女は嘘をつかない。でも彼女は嘘をもつと覚えるべきだ。上手く使えば最高の武器になる。

「銀堂さんさつきも言つたけど嘘を巧みに使える女の子はモテるよ。銀堂さんは少し素直過ぎるところもあるし嘘を学ばないと！ 黒田君を落としたいなら!! 覚悟を決めて!! 悪い女になる覚悟を!!」

「は、はい……悪い女……」

「そう、悪い女。あざとい所とか見せたりわざと困ったり……えつとどこまで話したつけ……そう黒田君にまず嘘つくでしょ？ そして両親に会ってもらい誤魔化す。これで決まり!!」

「本当にそれでいいんでしょうか？」

「いいんだよ！ それにこれはチャンスでもある」

「……チャンス？」

「嘘で恋人のふりをしてもらうんだよ？ そこで沢山アピールできるよ？ もしかしたら本当の恋人になるかもよ？」

「私が嘘を上手く使えば？」

「うん、勿論。全部正直に言つても彼は協力してくれると思うけどこつちの方が良いと思う。私の勘だけ」

「……分かりました」

彼女は僅かに考えると何か意を決したように覚悟を決めたようだ。

「それじゃあ、先ずは黒田君に頼んでみないとね？ 言いづらいなら

私が」

「……いえ、私が行きます」

「そうっ？」

「はい」

彼女は緊張しているのか顔がこわばっているが深呼吸をした後、

ゆっくり彼の席に向かって行った。



俺が七色町に帰ってきてから二週間近くたつ。その間に中間試験の結果が張り出された。一年の一位は銀堂コハク、二年の一位と二位は火原火蓮と黄川萌黄。俺は七十位くらいだった。

夏休みから『ストーリー』が始まるからな。まだまだ時間がある。その前に学校のイベントの一つである。期末テストがある。今回もそこそこでいいかな？

「あの、十六夜君」

「どうしました？」

銀堂コハクがなにやら複雑な顔をして俺の席の前に来る。どうかしたのか？ 大分深刻そうだが

「頼みがあるんです」

「なんですか？」

「ここでは頼みづらいので……屋上で」

「はい、分かりました」

彼女と共に屋上に向かう。彼女からの頼み事……ま、まさか告白とか!? いや、でもそれで火原火蓮との仲が抉れたら……

そうだ、まだやること残ってたな。二人のギスギス感を完全に治したい。偶に仲がいい感じがするけど『魔族』との戦いの中でそれが急に発生したらとんでもないことになる。

そんな事を考えていると気づいたら屋上に着いていた。屋上には俺達二人しかない。青空が綺麗に見える下で彼女と向かい合う。こ、告白をやりわりと躲すには……えっと……

「私凄く困ってるんです、十六夜君、助けてください、」

「何でも言ってください」

彼女が困っているなら助けよう。告白と勘違いしたことは恥ずかしいが……

いや、大分恥ずかしいな

「あの、私両親によく連絡するんですがその時に見栄を張って彼氏が

いると言ってしまったんです……それで両親が会わせろって……言うんです」

「えええええ!？」

銀堂夫妻と言えどもなく厳しくて怖い人たちだよな? 銀堂コハクは苦手な事は少ないがその中で最も苦手なお母様。それが来る!？」

『ストーリー』でもその厳しさは良く語られていた。その夫妻が……「それで私のお母様は嘘が物凄く嫌いでもし嘘とバレたら私……私……」

彼女はしくしく泣き始める。こんなに怖がってたかな? 泣く程に……

「な、泣かないでください」

「十六夜君私に協力してくれませんか?」

「嘘の彼氏ですか?」

「はい、嘘の彼氏。一時期でいいので……じゃないと……私、怖くて……」

「うーん……だったら俺と一緒に謝りますよ」

「え?」

「嘘って人なら誰しもつくと思うんです。無自覚につく時、意思を持ってつく時、本当の事を言っていたのに実は嘘だった時。細かく言えばもつともつと沢山のパターンがあると思います。人生に何回嘘をつくのかって聞かれたらもう数え切れません。だから、嘘を嘘でごまかすくらい大した問題じゃないですし、それも良いと思います」

「……」

「でも、銀堂さんの親は銀堂さんを心配してるわけだから……嘘つく人を選ぶって訳じゃないけど正直に言った方が良いでしょうな……怖いなら俺も一緒に謝りますし。それでどうですか?」

彼女の両親は厳しいがそれにはしつかりとした理由がある。まず一人暮らしの理由は彼女を立派な大人にするための修行。だが中学時代の事もある為彼女の事は物凄く心配している。だからこそ定期的に連絡をしているんだ。

だから、俺にはその二人に嘘をつくことは出来ない。

「あ、あ、あの、そ、その」

「どうかしたんですか?」

「ご、ご」

「?」

「ごめんなさあーい」

彼女は泣き始めた……どういうことだ?

話を全部聞くと彼女は……俺の事を両親に良く報告をしているらしくその過程で俺を彼氏と言ってしまったらしい……屋上のフェンスで彼女は体育座りしながらゆっくりと語ったのだが

それを聞かされると恥ずかしいな……

「あの、すいません……私は」

「気にしないでください。それより両親はいつ頃くるんですか?」

「今週の土日に私のマンションに来ると……言っていました」

「だったら俺もその時に謝るので、どうですか?」

「は、はい、お願いします」

高校生でお尻ぺんぺんは可愛そうだし……そもそもこんなイベントなかったし俺のせいかもしれないしな。

「い、十六夜君、嘘ついてすいませんでした」

彼女は未だに瞳に涙が残る中深々と頭を下げる。そんなに謝らなくても……誰でも付くのが嘘だから。

「良いですよ。俺も嘘とかつきますし」

「そ、そうなんですか? えへへお揃いですね……」

「そう、ですかね?」

彼女は少し元気を取り戻したようだ。……彼女の両親怖いんだよな……



「成程……そうだったんだ」

「はい、ごめんなさい。折角アドバイスをくれたのに」

「うんうん、私の方こそごめんね。余計なアドバイスだったと思う」

私は銀堂さんから事の顛末を聞いていた。なるほどね。そうなたか……ちよつと急ぎ過ぎたな。まだ一年生なんだからゆつくりしていてもいいよね。

高校生活はまだまだ始まったばかり、そして未来には何かとんでもない事があつて一気に状況が変わるかもしれない。

ちよつと失敗したな。でも黒田君らしい答えと言うか馬鹿真面目過ぎて少年漫画かよと突っ込んでしまいそうになる。だけど彼女には悪いことしたな。

「いえ、とてもいいアドバイスでした。嘘はただ使うんじゃないと言う経験も得られましたし十六夜君の良さも更に知れたので……」

「そ、そう」

彼女の雰囲気は何処か変な感じがするような気がするけど気のせいかな？

「十六夜君……益々欲しくなっていました……どんな手を使つても……フッフ」

怪しげに笑う彼女は舌なめずりをする。その時の彼女は魅惑するサキユバスのように見えた……

「ぎ、銀堂さん？」

「あ、はい。何ですか？」

気のせいかな？ いや気のせいじゃないと思うけどやっぱり潜在的な女性の能力は段違いなのかもしれない……

私が話しかけると彼女は先ほどまでの色っぽい感じは何処かに行つてしまいいつもの華のような彼女に戻る。

「ああ、えつと……」

「何ですか？」

「……黒田君のことだけでもつとゆつくり行つてもいいかもね。私も焦り過ぎてたかもしれない。高校生活はまだ始まったばかりだし。一步一步積み重ねていこう？」

「はい、着実に行きましょう」

私ももつと完璧な作戦を考えないとな……ゆつくりだけど着実にいけるような……作戦か……意外とほつとくのが良かったりして……



「なあ十六夜聞いたか？」

「何がだ？」

席に座っていると前の席に座る佐々本が俺に話しかけてきた。その表情は少し焦りの表情。

「今年の夏休み。六道先生が主催の……」

「精神強化合宿……」

「そうだよ！ それがあるらしい。去年もあつたみたいだけどあまりの辛さに上級生が一人も参加しないらしい……」

「それで……？」

「それでさ俺その事実を知る前に適当に言つて参加するつて言つちまつたんだ」

「ご愁傷様です」

六道先生の精神強化合宿はとんでもなく辛い。お寺での修行の様なメニューを一泊してこなす。青少年の育成という名目なのだが余りの辛さに殆ど参加する者はいない。

佐々本が知らずにノリで参加しAクラス男子を巻き込むというのは『ストーリー』にもあつたな……俺は絶対参加しない。

「おい、頼むよ！ 今他の奴らにも頼んでるけどなかなか集まらないんだよ！」

「あ、そう」

「なあ、頼むつて!! エロ本良くあげてるだろう!!」

「馬鹿、声デカい！」

クラスメイト達は皆話していて聞こえていないがこれ以上話していると聞こえてしまうかもしれない。仕方ないな。

「分かった！ だから黙れ!!」

「よっしゃ!! それじゃあ、俺は他の奴のところに……」
佐々本は他の男子の所に頼みに行った。

五十九話 親

さて、銀堂夫妻と会う週末を迎える。ちよつと緊張しながらも……
饅頭を手土産にして彼女のマンションに向かう。ここに来るのも久しぶりだな……

彼女のマンションにつくと白いワンピースを着て入り口で待ち構えていた。顔が青いけど大丈夫か？

「おはようございます……」

「大丈夫ですか？」

「ええ……もうお母様たちが来ています……本当にいいんですか？」

「いいですよ。行きましよう……」

「すみません、私のせいで……」

「大丈夫ですよ……」

中に入り、エレベーターで上の階へと上がって行く。それにしても彼女のワンピース姿は清楚で何処かエロいと言うか、首筋、うなじが良い感じだ。偶に髪を耳にかける仕草がエロ……

「あ、あの、そんなにみられるとは、恥ずかしいです……」

「すみません」

流石に見すぎたか。あんまり見るのは良くないよな。彼女は嬉し恥ずかしそうに眼をパチパチしながら指摘する。

「で、でも見たいなら好きだけ……私を……」

彼女が何かを言いかけるとそこでエレベーターが止まりドアが開く。彼女は言う事を中断して息を飲みまっすぐ歩いて行く。俺もそれに続いて行き彼女の自室の前で二人して止まる。

「あの、本当にすみません」

「何度も言いますがこれくらい大丈夫です。俺から提案したことですし」

「十六夜君は本当に優しいですね。それに比べて私は……なんて自分勝手な……」

部屋のドアを開け中に入る時彼女は自己嫌悪するように呟くと静

かに入って行く。玄関には大人の靴が二つ綺麗に並べられていた。本当に居るようだ。

廊下を抜けて進んでいき……あ、ここで前ラツキースケベがあつたんだよな。ってこんなことは考えるべきじゃない。

リビングの中に入ると白と言う名がふさわしい二人が居た。一人は若い……女の人、姉かよと言う位の若さ。彼女は銀堂コハクの母親である銀堂マシロ。もう一人はずっと腕を組んで瞳を閉じている強面の父親、銀堂白夜^{ぎんどうひやくや}。いやいや、二人共雰囲気^{ぎんどうひやくや}が凄いな。

冷徹と言うわけじゃない。落ち着きがある二人には芯ともいえる何かがある。銀堂マシロは俺を値踏みするように見ると薄く微笑んだ。

「お、お母様、お父様、十六夜君をお連れしました……」

「初めまして黒田十六夜さん」

「は、初めまして。これ詰まらない物ですが」

「あら、わざわざどうも。しかし、そんなに強張らなくても、自分の家だと思つてくつろいでいいんですよ。お二人はラブラブカップルなのでしょう?」

「……」

カップルについての勘違いはすぐにでも解きたいがこの夫妻の雰囲気^{ぎんどうひやくや}が俺の恐怖を駆り立てる。自分の家だと思つてと言うが無理に決まつてる。銀堂白夜は無言で圧力が凄いし……マシロは微笑みが逆に怖い。銀堂コハクもどうしていいか分からないように固まつていた。

約束したからな。まずは俺から事実を伝えて一緒に謝ろう。

「あの、そのことなんですけど実は彼女が見栄を張つてついでにしまつた嘘^{うそ}つて言うか、冗談^{冗談}つて言うか……」

「コハクさん、嘘^{うそ}なのですか?」

「あ、あ、も、申し訳^ごございません」

「えっと、銀堂さんは嘘^{うそ}をついてしまった事を気にしていて、俺も謝りますから。俺の顔を立てると言う事で怒らないでください」

未だに椅子に座らず俺たち二人は気を付けのポーズで会話を続ける。椅子に座っている夫妻が見上げているのに見下ろされているように感じる。

銀堂マシロは怒ることなく全て分かっているように笑った。

「怒りませんよ。それに分かっていますよ。それくらい」

「え？」

「この部屋に入ってきたときの二人を見た瞬間からそんな気はしていませんでした。しかし、コハクさん嘘をつくとは感心しませんね」

「も、申し訳ございません。つい……」

「まあ、いいでしょう。それより十六夜さん座ってください。貴方には感謝しているのですから」

「感謝ですか？」

「ええ、今お茶を淹れますからそれからゆつくりと話しましょう」

「はい……」

銀堂マシロがお茶を淹れに台所へ。銀堂白夜は全く動かない……気まずいな。まあ口下手な事を知っているからどうと言う事はないけど……

「十六夜君は凄いですね」

「え？」

「お父様に会う人は大体怖くてもっと慌てるのですが……十六夜君はあんまり感じていないようなので」

「そうですか？」

「はい。落ち着いていて凄いと思います」

「……」

ヒい、娘と楽しそうに話してるからお父様が俺をギロリと睨んできたよ!! お前には娘はやらの意味が込められていそう……

ダイニングテーブルに俺と銀堂コハクが座り、向かい合う方向に銀堂夫妻が。銀堂マシロが淹れてくれたお茶はオシヤレな味がするハーブティーだった。

「十六夜さん、コハクさんからすべて聞きました。お礼が遅くなつてしまい申し訳ございません。色々娘の為にしてくれたようでありが

とうございます。不良、ストーカーどちらも危険な相手。一步間違えば命を落としていたでしょう。本当にありがとうございます」

「俺からも礼を言わせて頂こう」

「どういたしました。でも俺も世話になってますからお相子と言う感じで気にはしませんよ」

「そうなのですか……十六夜さん、コハクさんは貴方の事ばかり電話で語るのです」

「お、お母様!？」

「コハクは黙ってなさい」

「ひゃ、ひゃい」

ピシツと空間が張り詰めるようにお母様が銀堂コハクを止めた。嘘を怒ってるんじゃないか？

「娘から聞いていると思えますがこの子は中学の時に色々ありました。回復するには大分時間がかかると思いました。しかし、貴方と出会って人を信頼することを再び覚え、友達が出来、さらに初めて異性で気になる人を見つけた。これは喜ぶべきことだと私達夫妻で感じています。全てあなたのおかげです」

となりで銀堂白夜が首を大きく振って共感している、夫妻の阿吽の呼吸を感じる。

「しかし、同時に危うくも感じています。私と同じでこの子も愛情が深い。それゆえに貴方が離れて行ったらこの子は壊れてしまうでしょう。こんなことを言うのは失礼も重々承知です。助けてもらった恩にそぐわない形になってしまふ事も……ですが、お願いします。この子を支えてあげてください。側にいてあげてください。今日はこれをお願いに来ました」

「俺からもよろしく頼む」

「お母様、お父様……」

大の大人がここまで頭を下げるなんて……本当に子どもの事を思っているんだな。凄いいいかカツコいいいというか。尊敬しかない。

そして、俺もそれに応えないと

「最大限頑張らせて頂きます」

「ありがとうございます」

「礼を言う」

「十六夜君……」

「あの……」

俺が言葉を遮るように言うと三人が俺を不安そうな目で見た。

「一つだけ、ママ様の言葉を否定させていただくと彼女に友達ができたのは彼女が頑張ったからです。銀堂さんは視野が広くて、なんとなく一人の子に優しく声をかけたり、言いたいことを言えない子に言いやすいように場を整えたり、分け隔てなく接したりそうするからこそ作り上げられた友達なんだと思います」

「そうですか……フッフ、コハクさんの言っていた通りの人の様ですね」

「感謝しよう」

「い、十六夜君……」

少しきざつぽすぎたか？ 何となくをスルーすべきでない場所かと思つたからつい言つてしまつたが……この感じ、何処かで……

……火原家みたいにならないよな？

「もう少し、二人の学校生活に着いて聞いてもよろしいでしょうか？」

「俺も聞こう」

「分かりました。えっと、この間の体育の授業で……」

この後、学校の対人関係を詳しく言つたり、他愛もない授業風景を言つたり……そうしていると気づけば時計の針が一周していた。

そろそろ帰るか。今日は買い物もしないといけないし。銀堂家は水入らずのわけだし。

「あの、そろそろ俺お暇しようかなって……折角家族水入らずで居るんですから」

「十六夜君、気にしないでください。もつと一緒にいきましょう」

「コハクさん、無理に引き留めるのも迷惑ですよ」

「そうですね……それじゃあ……」

落胆したように彼女は顔を落とした。俺は席を立ち玄関に向かう。三人で見送りとはいふ丁寧な家族だ……

「それじゃあ、お茶ごちそうさまでした。失礼します」

「十六夜君。また月曜日に……」

「はい、また……」

「俺が外まで見送ろう」

「え？」

「そうね、あなた頼むわね」

「うむ」

「で、でしたら私が！」

「コハクさんは私とお話しますよ」

「ええ!？」

何故か銀堂白夜が外まで送ってくれるらしい。ドアを閉め二人で歩く。この人スマートな感じで俺より背も高い。180位はあるな。顔もイケメンだし。遺伝子が優秀そうだな。

「本当に礼を言う」

「あ、だい、大丈夫です」

急に話しかけられてビックリした!! と言うか何故送るんだ?

娘への牽制? あんまり距離は詰め過ぎるなっていう

「コハクとマシロはよく似ている。愛情の深さが特に」

「そうですか」

何が言いたいんだ? エレベーターに入ると益々雰囲気为重く感じる。口下手なのはわかるけど……知ってても二人きりはね

「昔、マシロに監禁された事がある」

「んん?」

話が急に変わってないか? 愛情の深さの話じゃなかったっけ? それが監禁?

「コハクも愛する人に対する思いが強いと、思った以上の行動をしてしまうかもしれない。だが、逃げないで真摯に受け止めて欲しい。それを言いに来た」

「わ、分かりました……あの、他にマシロさんにされた事って？」
「……そうだな。一度浮気したと勘違いしてナイフを突きつけたこともあったな。後は睡眠薬とか」

そんな裏話初めて聞いたぞ!! ま、まあ娘と母親の性格が一致なんてしないから大丈夫だろうけど……

「頼む」

「は、はい」

真剣な顔で頼まれ承諾する。先ほど承諾してるから今更断るようなことをしないけど。

つまりこの人は念押しに来たわけか……良い父親だな、本当に。

それにしても監禁か。大丈夫だよな? 流石に? 何か胸にしこりが残る感じがしたが俺は気付かないふりをした



「ああ、十六夜君……」

「コハクさん、少しお話をしましょう」

「十六夜君……」

「コハクさん?」

「は、はい。何でしょうか?」

「一度リビングに戻ってソファアの上で話をしましょう」

「はい」

十六夜君が帰ってしまった。虚しさが残るがお母様との話があるので急いで戻らないといけない。もしかして、嘘を怒っている……?

お母様の隣に座り何を話されるかあれやこれやと想像する。一番有力なのは嘘をついたことでソファアの上でお尻ぺんぺん……

「コハクさん。非常に有意義な時間でした。お時間を作ってくれてありがとうございます」

「い、いえ、私こそ、お母様とお父様が私の事を考えてくれて嬉しかったです」

「それは親として当然ですから。さて、話は変わりますが彼の事が好きなのですね?」

「は、はい」

「そうですね……普段の電話内容、そして今日見ていて彼に寄せる想いが尋常ではない物であることは直ぐに分かりました。まるで昔の私を見ているようで危うくも感じました。そこで貴方に注意すべきことがいくつもあります」

「何でしょうか？」

「強すぎる一方通行の愛は破滅を生む、と言う事です。コハクさんは私の性格によく似ています。大きな抛り所、好きな相手に出会ってしまふと異常な愛を向けてしまふ。それだけでなく嫉妬、妬み、嫉みも。相手ではなく自分の気持ちばかりが優先になり過剰な結果を生む……心当たりはありませんか？ 全部自分の思い通りにしないと気が済まない。安心できないといった感情に」

「……あり、ます……」

火蓮先輩が十六夜君と一緒に居るとむかむかする。私だけがそこに居たいのに。と独占欲が働いてしまふ。

「咄嗟に出たという事はまだまだ深く考えれば思い当たることはあるでしょう。いいですか？ 相手の気持ちを考えるのです。自分の気持ちを一切出すなどは言いません。しかし、あまりに強い自己中心的な思いは相手を傷つけます……私のように……」

「お母様のように？」

「そう……話がそれました。一度、気持ちを落ち着けて自身で考えてみてください。振り返って見てください。ゆっくりと時間をかけて」

「はい」

「それでも気持ちが先走ってしまうこともあるでしょう。人間ですから失敗もあります。その時は素直に謝るべきでしょう」

お母様は私の手を取り私の胸元に手を置いた。そして優しく諭すように語りかける。

「どうですか？」

「私、何回も十六夜君に迷惑を……」

「大丈夫です。彼は懐が深そうな人ですから一回のミスをとやかく言う人ではないでしょう」

「で、でも……」

「まだまだ」ハクさんは若い。何でも完璧にこなせる必要もないので
す。これから積み重ねて一步一步成長すればいいんです」

お母様は私の頭をなでる。お母様に頭を撫でられるのはやっぱり
好きだ。

自分ばかりを優先してきた……自分の気持ちだけを……今日もそ
う、怒られたくないからと言う私の気持ち。

もつと、彼のことも考えないと……そうじゃないと彼に近づけな
い。

分かっている。そう簡単には変わらない事は。でも、変わる努力を
しよう。

私は彼に近づくために、彼の隣に居る為に……

六十話 ゆっくり

「ふああ」

僕は朝の欠伸をしながら通学路を歩く。眠気が抑えきれずに何度も欠伸を繰り返す、昨日は昔聞いた怖い話を唐突に思い出してしまいよく眠れなかったのだ。

一人で通学路を歩いていると前に赤髪のツインテールが見える。歩幅を大きくして彼女の隣に行く。

「おはよう。火蓮ちゃん」

「……ん、おはよ……」

彼女の瞳の下には物凄い隈があり足も少しふらついている。彼女は偶にこういう感じの時がある。理由は深夜アニメかな？

「昨日も遅くまでアニメ見てたでしょ？」

「う、ん。今期は面白いのが多くて……」

「ダメだよ。夜更かしは」

「萌黄も隈ができてるわよ……」

「僕は仕方ないんだよ……寝たくても眠れなかったんだから……」

二人で眠気が残る中歩いていると、後ろから誰かが走ってくる音が聞こえてくる。火蓮ちゃんも気になったように振り返ると銀色の髪の少女だった。

彼女は僕ではなく火蓮ちゃんに用があるようで火蓮ちゃん目掛けて一直線。そして、彼女の前で止まる。

「はあ、はあ」

「な、何なのよ？ あ、朝から……」

「貴方に、話したいことが、あつて……」

火蓮ちゃんは驚き、コハクちゃんは肩で息をしている。呼吸が乱れながらも必死に言葉を発して何かを伝えようとしている。

「何よ……」

「わ、私たちの、今までと、これからを見直すべきだと私は、思いま……た」

「……………どういう事？」

「コハクちゃんは息を整え火蓮ちゃんと向かい合う。」

「私は、今までずっと自分の思いだけを優先してきました……………それは貴方もですよね？」

「……………そう、かもしれないわね」

「私たちのこの想いは尊い物だと思います。でも、本当にこのままでいいのでしょうか？ 自分たちの事ばかり優先して十六夜君の事を考えていないように最近は特に感じます」

「……………」

「このままでは私はいけないと思います。十六夜君は私達に優しくしてくれます。恐らく、何をやっても笑って許してくれます。でも、それに甘えすぎるのはもうやめにしませんか？」

「……………」

「火蓮先輩、一度胸に手を当てて考えてみてください。今までを……………そこに相手を想う気持ちがあったのか。敬う気持ちがあったのか」

「コハクちゃんは火蓮ちゃんの手を取って胸に当てるように誘導する。火蓮ちゃんは瞳を閉じる。数秒すると彼女は目を開けた。」

「そう、ね……………私達、好き勝手やり過ぎたかもしれないわね……………昼食にあんなに騒いで、束縛して、十六夜の気持ちを全然考えてなかった……………」

「はい、そうです。その通りです。十六夜君の気持ちを踏まえて私たちはこれから十六夜君と接して、アピールして、好意を伝えていきましよう」

「……………私、焦ってたの。コハクがスタイル良くて、顔も可愛くて、私より上だから十六夜君を取られるのかと思って、それが嫌で何としても取られたくなくて……………」

「私も同じです。火蓮先輩と話するときの十六夜君は楽しそうで、しかも私が知らない話もするから嫉妬して、そんな二人を見るのが嫌で取られてしまうと思うともっと嫌で……………」

「……………お互い焦ってたのね」

「……はい」

二人はかみしめるように呟く。いつものいがみ合う二人はそこには無かった。

「……焦ったらだめよね。この気持ちはそう簡単には芽吹かない、芽吹かせてもいけない。大事な物だから、ゆっくり育んで大きくしないとね……もう一回自分を見つめなおすことにするわ……」

「……私も一昨日からそうしています。そう簡単ではないことは分かっていますが少しづつ変わりたい、そして十六夜君に近づきたいですから……」

「……私も変わるわ。だって私も十六夜に近づきたいから……」

二人はきつと変わって行くだろう。すぐには変わらないだろうけど、変わろうとする意志がある限り人は変わる。僕の眠気もいつの間にか吹き飛び二人のやり取りに心を奪われていた。

「………こういうのって人に言われないと分からないから……コハクに言われて見つめなおすきっかけができた。だから、その、ありがとう……」

火蓮ちゃんは照れながらも目は逸らさず、コハクちゃんに告げた。コハクちゃんも、もどかしそうにしながらも目は逸らさず……告げた。

「べ、別に、貴方の為ではなく、い、十六夜君の為に言ったんです……でも、貴方が礼を言うなら……ど、どういたしまして……」

なんだろう、この感じ。二人の距離がググつと近づいたような……そんな感じ……

見ている、心地いい。

「でもね、勘違いしないで。私にとってコハクはライバルだから。私が譲ることはない。今日から少し私のアピールが減ったように思うかもしれないけど、アピールが減るんじゃないやなくて歩幅を小さくするだけ。だから油断はしないことね」

「フッフ、私だって歩幅を小さくするだけですよ。貴方こそ私が諦めたと思って油断しないでくださいね」

好戦的な笑みに変わる二人は互いを尊重する“ライバル”だ。

「フフフ、油断なんかしないわ。コハクが相手なんだもの」

「私だって油断はしません。火蓮先輩が相手ですから」

朝から二人共凄じ熱気だ……ん？ コハクちゃんのポケットから何かが落ちたぞ。拾ってみて見ると……

「ああ！ そ、それは！」

そこには、先ほどコハクちゃんが言った熱いセリフがこれでもかと書いてあった。カンペを用意してたんだ。可愛い。もしかして必死に考えたんじゃないかな？ 彼女も目の下に隈があるし。

「萌黄ちよつと見せて」

「ハイハイ」

「えつと、『最初に走って先輩の元に来ることで必死が伝わる』、『このセリフは先輩が反省した後の方が効果的』……」

「か、返してください!!」

顔を真っ赤にして取り返そうとするコハクちゃんを躲しながら火蓮ちゃんは紙を読んでいく。彼女の行動は全て計算されていたようだ。

『『ここで声のトーンを高くすると必死さが伝わる』、『ここはスピード感のある言い方がカッコいい』。フフ、コハク。貴方って本当に可愛いわね』

火蓮ちゃんはからかうような視線を向ける。年上が年下をからかうように。それでコハクちゃんはますます恥ずかしがる。

「な、なんですか!?! こういうの言った事がないからどうしていいかわからなかったんです! 悪いですか!?! いいじゃないですか!?! 事前にプロット考えて練習するくらい!!」

「練習もしてたの?」

「あああ、ち、違います。してないです!!」

はずかしがる彼女に今度は真面目な表情で火蓮ちゃんは告げた。今度はライバルにお礼を言うように。

「別に馬鹿にしてないわよ。これのおかげで私の心に響いたんだから。ありがとう」

「そ、そんな真面目にお礼を言われると逆に恥ずかしいですから、や、やめてくださいよ……」

「これ返すわ。本当にありがと」

「ううっ、恥ずかしい……どういたしまして……」

二人の友情劇をいつまでも見ていたいけど……時間がヤバイよ!!
うっかりしてた!! 遅刻しちゃう!!

「ふ、二人共!! もう遅刻!!」

「あ」

三人で一斉に走り出す。二人ともやつぱり速いな。火蓮ちゃんは普段の授業で見てるから知ってるし、コハクちゃんはこの間の体育祭でちょこつと見たけどそれでも早いって分かるくらいの運動神経……でも、胸の揺れが凄い。また、大きくなったんじゃ……

「どどど、どうしましょう!?! もし遅刻したらお母様に怒られちゃいます!! お尻ぺんぺんですう!」

「もう高校生でしょ? って言うか胸の揺れ凄いわね……」

「眼福だよね」

「み、見ないでください!!」

前を抑えて揺れない様にしながらもコハクちゃんは走り続ける。抑えても揺れるものは揺れるが……

因みに僕たち三人は遅刻せずに済んだ。

しかし……

「まさか、二年の成績トップの二人が一時間目から爆睡なんて……何か事情があるのね。今回は見過ごしましょう」

「まさか、一年の成績トップの銀堂コハクさんが一時間目から机に顔をうずめるなんて何か事情があるんだろう。今日は見過ごそうかね」

徹夜と朝からの全力ダッシュで全員が一時間目から爆睡したのは言うまでもない。

六十一話 女子力向上委員会

まさか、銀堂コハクが授業中に寝るとは……珍しい事もある物だな。疲れていたのか？

理由は良く分からないが女子には色々あるのかもしれないな。現在は昼休みでどのように過ごすか考えていると前の席の佐々本が眼鏡を掛けたとある男子生徒を連れてきた。コイツ、確か……

「なあ、十六夜」

「どうした？」

「秋斗あきとがお前に用があるって」

猿飛秋斗さるとびあきと、同じクラスに居て、『魔装少女』においてもなかなかの癖のあるキャラクターである男だ。

「十六夜殿、拙者の頼みを聞いて欲しいでござる」

こんな感じに個性的な話し方をするのだ。もちろん嫌いではないが

「拙者はネット仲間と協力してゲームを作ってるでござる。そこにギャルゲーとホラゲーがあるのでござるがそれを十六夜殿にプレイしてもらい感想を聞きたいのでござる」

こいつはゲーム作りが好きでネットで仲間を集めて作り、それを販売してたりする。将来の夢は売れるゲームクリエイターだっけ？

「なぜ俺に？」

「十六夜殿のようなりアルハーレム男の意見を取り入れれば益々ゲームのクオリティが上がると思ってたでござる」

「別にハーレムでは……ホラゲーは何故？」

「十六夜殿は怖いものが苦手と言っていたでござるから、良い意見が聞けると思っただでござる」

「そうか……ギャルゲーは良いが……ホラーゲームはちよつとな。

ギャルゲーは良いが」

「ありがとうでござる」

そんなに頭を深々と下げないで欲しいんだが……ホラゲーはなあ……

「取りあえず、頭を上げてくれ。プレイしてみるから」

「おお、ありがとうでござる。ギャルゲーはかなりお色気シーンなどが多いでござるから満足すること間違いなしでござるよ」

「そうなのか」

「取りあえずまだ完成まで時間はかかるでござる。その時になったらまたお知らせをするでござる」

「ああ」

「取りあえずお礼を申し上げるでござる」

秋斗は深々と頭を下げる。かなり力を入れているのだろう。少しでも良くしたいという姿勢が感じられた。

「それじゃ、食堂に行くか。秋斗もどうだ？」

「そうだな。折角だし」

「なら、ご一緒するでござる」

「おう、それよりお前ってさコハクちゃんとかには敬語なのに男子にはタメ語だよな」

「ああ、女子と話すときはつい緊張してしまうんだ。それで敬語になる」

「あるあるだな」

「分かるでござる」

俺達は食堂に向かう。

ホラゲーは一人じゃやりたくないな……



「それで話とは何ですか？」

「うんうん、そろそろ話してよ」

僕とコハクちゃん、火蓮ちゃんが食堂でそれぞれ食べるものを頼み席に着く。そこで今回僕たち二人を呼び出した火蓮ちゃんに本題を聞く。

いきなり彼女が食事でもしながら話をしたいといったのだ。コハ

クちゃんも呼んで。この三人で食堂で食べるのは初めてじゃないだろうか？

「私思ったの。今現在私には女子力が足りないって」

「は、はあ？ そ、そうですか」

「だから、私は女子力を高めたい。二人にも協力してほしい」

「僕は良いけど、コハクちゃんは？」

「……敵に塩を送るような真似は本当ならしたくないですが、私にも貴重な経験値になりそうですし。自分自身も見直せるかもしれないから……協力します」

「それで具体的に何をやる気なの？」

「……決めてない……」

火蓮ちゃんはやると決めただけで何をやるかまでは決めていないようだ。朝に変わると宣言したその日の休み時間に行動するとは……速いな……

誰かさんみたい……

「うーん、料理とかファツションとか男が喜ぶ仕草とか、話し方とかを学ぶって感じが良いんじゃない？」

「それよ、萌黄。ナイス」

「えへへ、それほどでも。それで先ずはどうする？」

「私は少しの時間も無駄にしたくない。今この食堂で出来る事をまずやりたい」

「そんなものありますか？」

「うーん、それじゃあ、僕が出すお題に答えるって言うのは？ 女の子らしい可愛い答えでも良いし、場合によってはユーモアのセンスも鍛えられる。それにいろんな話題に触れれば会話のレパートリーも増えて一石二鳥どころか三鳥だよ」

「いいわね。早速やってみましょう」

「私もぜひお願いします」

「うん。それじゃあね……」

「ここで軽く勝負しませんか？ どちらが素晴らしい回答を出来る

か

「いいわよ。してあげようじゃない」

この感じ、何か女子会っぽくて好きかも……。これから定期的にこれを開いて二人とイチャイチャ……。いいね！

「問、貴方には最近彼氏ができました。その彼氏と円満に末永く幸せにするには何が必要だと思いますか？」

「うーん、そうですね……」

「いざ考えると難しいわね……」

二人は腕を組み考える。コハクちゃんは腕を組まないほうがいいんじゃないかな？ 強調されすぎ……。胸が

「はい！ 整いました！」

コハクちゃんが元気よく手を上げる。何か途轍もない事を思いついたように……

と言うか整いましたって……。大喜利じゃないんだから。楽しそうだから僕もやるけど……

「貴方には最近彼氏ができました。その彼氏と円満に末永く幸せにするには何が必要だと思いますか？」

「愛と既成事実」

「重い！ 重いよ！ 確かに全く見当外れではないけどそれは言ったらダメだよ。愛は全然可愛いし、コハクちゃんも可愛いからオツケー。総合評価は95点」

「既成事実と言わない方が良いんですね……。勉強になりました」

「私も整ったわ」

「はい、それじゃあ火蓮ちゃん。貴方には最近彼氏ができました。その彼氏と円満に末永く幸せにするにはどうすればいいと思いますか？」

「愛と互いを想い本心を言い合う事」

「百点!!」

「この答えが出たのも十六夜のおかげだね」

「くっ、五点負けてしまいました……。やりますね。火蓮先輩」

「まあね」

良い雰囲気の二人はいつまでも見ていたいけど、次のお題考えないと……

「さっきのお題を少し引き継ぐね。貴方の彼氏との生活を小説のタイトルにするならどんなタイトルにしますか？」

「はい！」

「コハクちゃん。どうぞ」

「私が彼と結ばれるまで」

「おおー可愛い。百点！」

「私も出来たわ」

「火蓮ちゃんどうぞ！」

「いきなり私に話しかけてきた後輩が実はとんでもなく良いやつで、私の家族問題も解決してくれて気付いたら家族公認の許嫁候補になっていた件」

「長くない!? タイトルで内容が全部分かっちゃう感じがするね。でもこれは……97点かな……」

「くっ、三点負けた……」

「シンプルが良い時もあるんですね」

「なるほど。勉強になったわ」

「この集まり特別な感じがするから名前を付けたいな……えっと何が良いかな? 二人にも聞いてみよう」

「この三人の集まり何か名前を付けたいなって僕思うんだけど。二人はどう思う?」

「良いと思いますよ。つけましょう名前」

「そうね……」女子力向上委員会「ってどう?」

「おおー、いいね！」

「私も良いと思います」

三人であらたに委員会を結成した次の瞬間。昼休みが終了まじかのチャイムが鳴り響く。食器が乗ったトレイをもって片付けの為席を立つ

「そろそろ期末近いわよね?」

「そうですね。勉強会をしたいですが無理に誘うのも迷惑かと……でも十六夜君には良い点数を取って欲しいです」

「そうね。明後日くらいから無理のない程度に誘う感じにしない？」

「そうですね……」

二人つてやっぱりは気は凄いい合うんだろうな……本質的に似てる感じがする……

それに同じ人を好きだから余計に共感できるところが……

良いなあ……僕にもその気持ち分かる日が来るのかな……



俺は久しぶりに一人で下校している。最近は二人がグイグイ来たからお祭りの様な感じだったのが急にお通夜のようにになると……ちよつと寂しい。

『魔族』が現れて『魔装少女』が戦うのは夏休みの後半。八月十六日。今は七月だから時間はあるんだよな……

そもそもこの作品それなりにシリアスな感じは勿論あるが、ほのぼのとした感じも大分多い。『ifストーリー』が異常だっただけで本当なら女の子のほのぼの感が満載。

一人で歩いていると

「にやにやにやにや！ お前が“夢喰い”を倒した人間か！」

後ろを振り返ると尻尾が三本もある普通サイズの猫が居た……コ

イツは……『ストーリー』でも出てきた。滅多に出ないオカルト系でいたずら好きの妖怪。

ねこあらし
猫嵐だ。

人を猫にする力を持った妖怪で銀堂コハクが猫にされて困るというのが『ストーリー』でもあったがそれは『魔装少女』の力を得た後だからここで出てくることは無いんだが……

「あの封印された“夢喰い”を倒した人間が居ると聞いて見て見たが……何とも言えない感じがするにや……」

「そうですね……」

「夢喰いは妖怪の中でも危険な妖怪として有名だからにや。それが出てくる時期がそろそろだったから全員焦っていたのにや。感謝するにや」

「別にいいですけど」

なるほど。夢喰いを俺が倒したから気になって見に来たと……あんまりオカルト系は出てこないがこういうった妖怪は普通の人間には興味を持たない。銀堂コハクが猫にされたのも『魔装少女』と言う特別な人間だったから。興味を持つて事は俺つてもう、普通じゃないのか……妖怪の世界だと……人間の世界だと普通だが

「お礼に猫にしてやるにや」

「遠慮します。おい！ やめろよ！」

「遠慮するにや」

猫嵐から光があふれ出す。眩しくて目を閉じて開くと……いつもより視界が低い。

嘘だろ!!! 来ていた制服と荷物が下に落ちている。この猫化は猫嵐が満足するまで解けない。おいおい、どうすればいいんだよ

「おい、なかせ!! ふざけるな!! 俺悪くないけど謝るから!!」

「やったにや！ 夢喰いを倒した奴を倒したにや!! 他の妖怪どもに自慢してくるにや!! それが終わったら戻してやるにや」

猫嵐は何処かへ行ってしまった。荷物は散乱。俺は猫状態……どうすればいいんだよ。家には入れない。こんな姿じゃ言葉も話せない。

どうしよう……どうしよう……

俺が迷っていると。向こうから

「今日は十六夜君の為にテストの要点を纏めないと……」

「私も手伝うわ」

「僕も」

「私の家でやりませんか？ 図書館も最近人が多くなってきていますし」

「こ、コハクちゃんの家!! すぐ行こう!!」

「萌黄落ち着いて」

ああ、神は俺を見捨てていなかった。彼女達に気づいてもらおう。後、荷物も拾って貰おう。

『おい、気づいてください!』

俺は叫んだ。ニヤーンとしか話せないが……

六十二話 猫生活

俺は叫んだ。気付いてくれと!!

『頼む!! 気付いて!!』

「ん? 猫がいるわね……こっちに向かって鳴いてる」

「野良でしょうか? 黒くて小さくてかわいいですね」

「つて言うか周りにうちの高校の制服落ちてない!? 事件!」

お、早速三人が気付いてくれた!! 頼む俺って気付いて!!! このままだと野宿だよ!!

なんか雲行きも怪しくなってきたし、夜は雨降るかも……

三人が膝を曲げてお尻を地面に着けずに腰を下ろす……太ももが良い感じに見えちまう。銀堂コハクは肉付きが良いな。火原火蓮は引き締まってる中にもほのかな柔らかさがありそう。黄川萌黄の足はもうエロいね……いや、全員エロイんだけどね……

こんな事を考えてる場合じゃない。気付いてもらわなくては

『俺ですよ!! 黒田ですよ!!』

「この制服、男子ね……」

「何故、服が脱ぎ散らかされているのでしよう?」

「何か事件のにおいがするね……これ交番に届ける?」

「そうね。取りあえずつて! ちよ、ちよつと待ってパンツもあるんだけど!! 誰よ!!」

火原火蓮がズボンを持つとした時中にパンツがあるのを見つけると大慌てで手を離し声を上げる。

「これはとんでもない変態の予感がするよ。争った形跡もないしきつと自発的に脱いだんだ……ほつといてコハクちゃんの家に行こう」

「そうね。何か危ない感じがするわ……」

「そうですね。見なかったことにしましょう」

銀堂コハクと黄川萌黄と火原火蓮は見て見ぬふりと言った感じで帰ろうとする。制服は良いから俺に気づいて!!! 制服も出来れば気付いて欲しいけど!!

「あ、この猫どうする? ……ちよつと僕好みかも」

「私も……なんか十六夜に似てる様な……」

「確かに……」

銀と赤と黄の二人は制服から猫化した俺に興味を移す。

「十六夜君にそっくりな目です!! ああああ、私決めました!! この子と一緒に住みます!!」

「ええ!? いきなりすぎじゃない?」

「そうよ、拾うならもつと慎重に選ばないとダメよ」

「もう決めました!! 貴方の名前はイザヨイです!!」

銀堂コハクが俺を両手で抱え目をキラキラさせる。制服どうしようかな……誰か交番に届けてくれるかな?

「ええ!? 彼と同じ名前を付けるの!」

「いいんですよ! そっくりですし! ねえ、私のイザヨイ?」

「コハクの他の欲を感じたんだけど」

『それより出来れば制服も拾って欲しいです……』

「アハ、名前喜んでくれますよ! ほら、にやーにやー言ってます!」

「喜んでるのかな? 僕にはわかんないや……でも後でちよつと抱かせて?」

「私も」

「いいですよ。ねえ? 私のイザヨイ?」

『制服を……拾っていただけませんか?』

「ああー、可愛い、最高。まさにこれは運命。私とイザヨイの運命の出会い」

彼女は俺を抱き寄せた……うおおおお!!! 上半身の存在感がすげえええええ!! 息できないですよ!!! うあああああつああああ猫ってさいこおおおおお!!!

「なんか彼と猫を混同してない?」

「そうね。確かに十六夜と似てるってのは分かるけど……」

「あく、可愛い、私のイザヨイ!! 私のイザヨイ!!」

「アンタ、私のイザヨイって言いたいだけでしょう?」

「うん、僕もそう感じる……」

「なななな、何言ってるんですか!? そ、そんなことないですよ!?
うですよね?! 私、イザヨイ!」

『ノーコメントでお願いします』

「ほらほら、私のイザヨイがそんなことないって言ってます!! だから、私は私のイザヨイと言いたいだけではないんです!!」

「あ、うん、それでいいわ」

「それよりコハクちゃんの家にいこうか?」

「はい、イザヨイはしばらく抱っこしてあげますからね? 何と言っても私のイザヨイですから!」

「アハハ、凄いな……それにしてもこの猫。殆ど汚れないような……野良だよな?」

彼女は再び抱き寄せる。き、酸素がう、薄い……でも、これで死ぬなら……満足かも。銀堂コハクで窒息死ならそれで……



何とか彼女のマンションの部屋の中までは生きることが出来た。それにしても猫って良いな。グへへへ。童心に帰る感じ……

「それじゃあ、テストの要点を纏めましょう」

「分かったけどいつまで抱いてんのよ」

「猫窒息しちゃうよ?」

「ご、ごめんなさい。イザヨイ……大丈夫でしたか?」

彼女は俺を離す。ああ、急にむなしい……でも、ようやく空気がすえる……

「ああ、やっぱりちよつと弱ってる。しばらく放っておきなさい。空気を沢山吸わせてあげるの」

「そうですね。ごめんなさいイザヨイ……」

「コハク、イザヨイってよんで恥ずかしくないの?」

「全然大丈夫です。むしろ気分が良い感じですよ!!」

「そ、そう? 私は絶対無理ね……恥ずかしくて死にそう」

「僕も……良く分からないけど恥ずかしいから無理そう」

「そうなんですか？ イザヨイゆっくり休んでくださいね……あ、その前にお風呂に……」

銀堂コハクは心配そうにしながら俺をお風呂に連れて行く。二人もついてきた。因みに帰りにちゃんと猫用のシャンプーを彼女達は買ってきた。

「えへへへ、イザヨイ隅々までキレイキレイにしてあげますからね……」

「顔が下種くなってるわよ」

「コハクちゃん優しく洗ってあげてね？ 猫の皮膚は繊細だから」

「はい、優しく優しく……えへへ」

銀堂コハクに体中の隅々まで洗って貰った……ちよつと如何わしい気分になったのは内緒だ。俺を休ませるために洗った後ソファアの上に置くと彼女達はダイニングのテーブルの方に向かう。そこで三人共勉強道具を広げる。

「それじゃあ、範囲教えてくれる？」

「はい、ここから……」

「だったら小テストも……」

三人が俺の為に……ううつ、嬉しいよお。やっぱり大好きだよ……可愛いよ……

三人は二時間ほど机に向かい合い、要点などを纏めていた。小テストなども制作してくれた。

「こんな感じでいいのではないでしょうか？」

「そうね」

「大分集中してたからもう外も暗くなつて来たね……僕はそろそろ……」

「でしたらお二人共泊って行ってください。夜中に女性を送り出すのはあまりよろしい事ではないので」

「ええ!?! コハクちゃん泊っていいの!?! じゃあ! 泊る!!!」

「火蓮先輩はどうしますか？」

「そうね。折角だから泊まらせてもらおうかしら」

「どうぞどうぞ。それじゃあ、夕食を作りたいのですが少し待ってく

ださい」

銀堂コハクは俺の元に来るとソファから俺を手で抱っこし、自分がソファに座ると彼女の太ももに俺を置いた。クっ、これが生殺しか……

「イザヨイとのスキンシップがありますから！」

「だったら私も」

「僕も」

彼女の両隣に二人が陣取る。可愛い顔が三つも……エロい太ももあるし。最高だな。おい。

「尻尾ふさふさです」

「ぼ、僕は肉球触ってもいいかな？」

「私は耳を」

や、やばい、くすぐりたい……段々変な気分……尻尾なんて未だ感じた事のない新感覚だ……

彼女達の絹の様な指で全身を触られる。優しくつねったり、さすったり、撫でられたりさつきのお風呂の時にも思ったが変な気分……くすぐりたいのですか？ でももうちよつと我慢してください。イザヨイ……」

「イザヨイのミミって可愛いのね」

「肉球いいなあ」

これ以上これやられたら新たな扉を開けることになる。逃げない!! 脱出しようとするが出来ない。簡単に力で押し付けられる。

「イザヨイ？ 私達からは逃げられませんよ？ 後もうちよつとだけですから……ああ、耳も……いい」

「ごめんね。イザヨイ。あと一分だから。ああ、肉球もいいわ」

「僕は尻尾。ああ、ふさふさ。ごめんね？ あと一回だけだから」

その後、直ぐに開放してもらったが……後ほんの少し遅ければ俺は完全に新たな扉を開けていた。

彼女達は一緒にクッキングをして夕食を終える。俺はキャットフードを出されたが一口だけ興味本位で食べて後は食べなかった。

いつになったら猫嵐は元に戻すんだよ？ いや、充実はしているが……猫のまんまは

「お風呂入りますか？　すでに湧いているのでお先にどうぞ」

「そうね。萌黄先良いわよ」

「いやいや、ここは三人で入ろう!!」

お風呂か……まあ、猫だし……俺も入りたいな……変態か、俺は？

「三人ですか？　私は良いのですがイザヨイを放っておくわけには行かないのでイザヨイもいいですか？」

「うん!」

「それじゃあ、少し狭いですが入りましょう」

彼女達に連れられて脱衣所に……三人が衣服を……

「ふう、最近熱くなって来たわね」

「そうですね。ちよつと服の中が蒸れて……」

「あれ？　コハクちゃんまた大きくなってない？」

「もう、思っても言わないでください！　恥ずかしいんです!!」

「けっ、二人して私を虐めて……」

下着だ……クツソエ口い。銀堂コハクは白。黄川萌黄は黄色。火

原火蓮は赤。全員がそれぞれエッチい。

ゴクリと生唾を飲んでしまう。

そう言えば彼女達の体も成長するんだよな。銀と黒は最終的にH、黄はF、青はE、赤はB。俺は何を考えているんだああああ!!!

「アハハ、そんなつもりはないんだけどね」

そう言いながら下着に黄川萌黄は手をかける。二人も……俺は目をつむった……

流星にこれ以上はダメだろ。……薄目ならギリ……嫌ダメだ。

お風呂に三人が入ると俺は目を閉じる。

「あん、きゅ、急に揉まないでください!」

「良いではないか。良いではないか!!　この存在感!!」

「けっ、イライラさせるわね」

ちよつと、目を開ける。そこでバスタオルで隠しているがいつもより肌が良く出ている彼女達……まあ、これくらいなら前世で見てるしいいよね!! あ、生はヤバい!!! 悶える声がお風呂場を反響して俺の耳にダイレクトに!!

くああああ、たまらないよおおおお。マニアにはファンには……たまらないよおおおお。頭の中でこのようなシーンは何度も見たけど生はヤバい!! 何度でも言おう生はヤバい!!

三人の天国が終わるとそれぞれが体と髪を洗う。その時は紳士なので目をつむったり薄目で見るといふ紳士ぶりを見せた。

「湯船に三人は入れますかね?」

「行けるよ!!」

「萌黄テンションが高いわね」

三人で湯船に入る。彼女達が浸かることで中の水があふれ出す。俺は湯船には浸からずでも彼女達がよく見える浴槽の手をかけるところで彼女達を眺める

「ふうー、いい湯ね……」

「火蓮ちゃん、何か雰囲気がいきなり変わったね」

彼女達は会話を始めた。落ち着いた風呂の中本音がこぼれてしまふのかもしれない

「そうね。ゆっくりで良いって分かったからかな? 私って自分で言

うのもなんだけどツンデレって感じがするの」

「そうですね……確かにそんな感じがします」

「まあ、確かにそうだね」

「それが十六夜も良いって言ってくれて。だからアピールしたくてでも無理に脚色してた。その必要が無くなったって思うと肩の荷が下りたって感じ」

彼女はゆっくりと肩を回す。そ、そうか。俺の好みに……何か恥ずかしいな……

「誰かを好きなるって面白いわね。気持ちが目まぐるしく変わるけど、十六夜の事を考えるとドキドキするのだけは変わらない。この気

銀と黄に赤は迫られ湯船の中で両手を抑えられて……

「ん、ああ、ちよ、あん、本とうに。は、激しい……」

銀堂コハクが片方の手を抑えて空いた手で触りまくる。黄川萌黄も同じようにして揉みまくる。

ホホーウ、エエですな……縛っていないロングの赤髪が湯船に浸かり、彼女が悶えることで湯がバシヤバシヤと揺れる。血行が良くなっているようで顔が朱に染まって行く。

端的に言えばエロい。

「はあああ、ここまでにしなさい。イザヨイにガン見されて恥ずかしいんだから」

「確かに、ずっと見てましたね」

「猫にも火蓮ちゃんの魅力が分かるのかな？」

火蓮いじりが終わり三人の再びなんてことない会話が始まる。そこで再び猫の俺の話題になる

「ねえ、もう一回イザヨイ触りたくない？」

「触りたい」

「私もです」

「あの感触忘れないわよね？」

「うんうん」

「私のイザヨイを一回捕まえましょうか。その後はイザヨイを三人でさわさわしましょう」

「賛成」

銀堂コハクが俺に手を伸ばす。俺は新たなる扉を開ける可能性があるある為躲す。

「もう、逃げないでくださいよ」

「そうそう」

「ここはお風呂だから逃げられないわよ」

彼女達は湯船から上がり俺を捕まえようとする。風呂の中は逃げ場なんて殆どない。

三人は俺を捕まえようとするがここでつかまったら俺は……本当に……

しかし、猫の俺は簡単に捕まる

「イザヨイ、捕まえました！ もう、ほんのちよつとさわさわするだけですから暴れないでください」

や、ヤバい。墮とされる……逃げないと……

彼女に軽く押さえられ赤ちゃんのように高い高いされる。

「えい、抱っこですよー」

彼女は胸に押し付けた。おいしいいいいい!! や、ヤバいいい

「次は私よ。ああ、可愛い!!」

ほっぺをすりすりされその後、胸に抱いた。ほのかな柔らかさが……俺の顔にいいい。ねこつてさいこうおおおお

「次は僕ー。ほれほれ、ミミ触ると気持ちよさそうだね。えいえいえい」

ミミ触られ、抱っこ。耳の触り方がエロいんだよ!!!!

このままじゃ……マジで墮とされる……その時俺の体が発光した

「「えっ」」

そして

「いって!!」

俺は人間に戻った。俺を支えられなくなった彼女が落としてしまい尻を下に打つ。

俺は現在裸だ……彼女達の前には下半身全裸で……彼女達は俺の顔を見ると顔を赤くして

「「ああああああああああ」」

「「へ、へんたあああああああ!!!」」

シャンプーや桶が飛んできた。

六十三話 もう一人

俺はタオルを腰に巻き正座していた。パジャマに着替えてソファーに座る彼女達の顔は羞恥と言った感じ。大体の状況を説明した。

流石に今回は土下座するしかない。いや、今回もか……

「妖怪に猫にされてしまったって事故とは言え申し訳ございません」

俺は深々と頭を下げる。と言うよりは土下座だ。

「十六夜君顔を上げてください。そ、そそのびびび、ビックリはしましたけど……十六夜君に非はありませんから」

「そそそ、そうね。ね、猫になったなんて信じられないけど……この状況を見る限りそうとしか信じられないわね……あの制服も十六夜のだったのね」

二人は顔を真っ赤にしながらも仕方ないと納得をしてくれる。しかし……

「あ、あんなものを……僕、あんなものを……彼の体中を弄って体に密着させて……」

「ちよ、ちよつと萌黄先輩!! 忘れようとしてるのに言わないでください!! 恥ずかしいんです!!」

「そそそ、そうよ!! 言わないで!!」

「だって、忘れろって言ってもあそこまで触って弄ったんだよ!! 無理だよ!! あれ全部彼の体だったんだよ!!」

「止めてください!! 思い出してきたじゃないですか!!」

「あの、お風呂のあれだって一生記憶に残っちゃうよ!!」

「萌黄、止めなさい!!!」

三人で今までの事を思い出し羞恥の海に沈む。この後三十分はそのままだった。俺に非が無いと思ってくれたようで特にこれ以上はお咎めなしだった。

「十六夜君。お父様の着替えがありますからそれを着てください」

「ありがとうございます。その色々すいません」

「十六夜君が悪いんじゃないと思うんです。その猫が全部悪いんで

す。それよりもうその話はやめてもらっていいですか？ 色々……
恥ずかしさで死んでしまいそうです、から……」

「そ、そうですよね……」

先程の告白の様な火原火蓮とのやり取りを思い出す。これから俺はどう接して行けばいいんだ？

火原火蓮と黄川萌黄はソファアに座り未だに羞恥に顔を染めている。俺だって恥ずかしいわ!!

「取りあえず大分時間も時間ですし、寝ましょう……十六夜君も一緒に……」

「いやいや、それは……ソファアを貸していただけませんか？」

「だ、ダメです!! お、お客様ですから!!」

「いやいや、若い男女が寝るなんてあつてはいけません。今日の所はソファアで寝かせてください」

「そ、そうですか？ それなら……あの、なんでそんなに目線を逸らすんですか？ なにか私が不快な事をしてしまいましたか？ 猫の時に触り過ぎたのが不快だったんですか？」

彼女が心配そうに見るがただ彼女達の好意を聞いてただ単にドキドキしているだけである。こんな経験初めてだ……

「い、いえ、なんでもないです。そ、それより早く眠りましょう。明日も学校ですから」

「はい……何かあつたら言ってくださいね。お二人共もう寝ましよう」

「そうね……」

「ううっ……」

赤と黄は恥ずかしさに目を逸らして寝室のほうに向かって行く。寝室に行く火原火蓮をつい見てしまう。火原火蓮を意識してしまう……マジでこのままだとラブコメが始まってしまう……しかも精神年齢がおっさん並みの俺がJKを意識するということんでもない物語が……

とりあえず、今日は寝よう。俺は銀堂家のソファアに横になった。



眠れない……俺には刺激が強すぎた……時刻は深夜だ

高次元の感触が忘れられない……ソファアーの上で横になりながらぼーと目を閉じる……。そこにある声が響く

「にやにやにや、猫の生活は満喫できたかにや？」

「お前……戻すタイミングに悪意があるんだよ」

「にやにやにや偶然にや。お前の運が悪いだけにや。いや良いと言った方が良いかにや？」

「俺はもう疲れた。どっか行ってくれ。妖怪とかは好きじゃないんだ」

「勿論。もういくにや。ただ奇妙な人間が集まっているなどと思って気になっただけにや。人間とは惹きあう生き物だにや。特にあのお前の手籠めにしている三人のメス」

「メスとか言うな。あと、手籠めも言うんじゃねえ」

「にやにやにや、奥底にあるオーラの強さが他の人間とは違う。勿論お前もにや」

「俺も？ 俺みたいなモブにオーラが？」

「お前自身が異端な人間だと気づいた方が良いにや。お前のオーラはあの三人に匹敵するほどにや」

「まさか、俺に隠された力が……」

俺は自然と片目を抑えてしまう。失われし童心がこういった形で呼び起こされるとは……

「妖怪にはそういったのが分かる奴もいるにや。さて、久しぶりに人間の滑稽な姿が見れて面白かったにや。特にあのお前のメスたち」

「メス言うな。と言うか見てたのか。戻すの絶対わざとだろう」

「わざとじゃないにや。おっと長居し過ぎたにや。そろそろ帰るにや。人間のメスと戯れも見れたし満足にや」

猫はふつと消えた……オカルト系は嫌いなんだよ。もう二度と来

ませんように。

それにしても俺に特別な力ね……

案外『魔力』とかあったりして……でも、あってもそれだけじゃ意味ないんだよな……

これからどうしたものか……『魔力』があるなら……でも変に関わるのもな……色々考えるがどうするべきか答えは出ない。変に『ストーリー』に関わるのもなどと考えていると寝室のドアが開いた。

「あの、十六夜君。起きてますか？」

銀堂コハクの声が聞こえる。部屋は暗いため顔は良く見えない。

「はい」

「そうですか。何か話し声の様なものが聞こえたので気になったのですが……眠れませんか？」

「いえ、もう少しで眠れそうです。騒がしくてすみません。ちよつと電話してたもので」

「そうですか……それならお休みな……十六夜君少しお話をしてもいいですか？」

「は、はい。大丈夫です」

彼女は俺の隣に座った。何となくだが彼女の全体像は見える。

「一つ謝りたい事があって」

「何ですか？」

「最近の私が貴方に酷い仕打ちを……」

「そ、それなら気にしないでいいですよ。本当に」

「それでも一言だけ、すいませんでした。迷惑を沢山おかけしたと思います」

「本当に大丈夫です」

「ありがとうございます……あの身勝手なお願いですが相談にも乗って頂けませんか？」

「いいですよ。俺でよければ」

「……あの、私の中にもう一人の自分がいるような気がして……」

「中学の時に虐めにあってから時折、良く分からないんですけど……」

こんな荒唐無稽な話だれにもしたくないんです。でも、今日人が猫になるというあり得ない事象を目にして私にも何かあるのかなって……それで猫になった十六夜君に聞いてもらいたくて」

「……そうですか」

「信じられませんか？」

「いえ、信じます。何か俺に出来る事があれば……」

「ありがとうございます。ただこの話を聞いて欲しかっただけですから大丈夫です。それに前の貴方の言葉で私は既に救われていますから……あ、でも十秒……だけ手を、に、握ってくれませんか？」

「は、ははい」

緊張しすぎた俺はたどたどしさを残しつつも彼女の手を取った。暫くすると彼女は手を離す。何故か名残惜しかった。いつも感じる感情とは別の感情を俺は感じた

彼女はソファー立ち寝室に向かう……

「十六夜君ありがとう、それとおやすみなさい」

「あ、あの」

俺は彼女を呼び止めてしまった。

「何かあればまた言ってください。どんな些細な事でもいいので」

「ありがとうございます」

彼女は寝室に戻って行った。



眠れない。私は外を見た。雨が降り出して雨音が聞こえる……

隣には萌黄とコハクが寝ている。私は今までの自分を変えようとしている。もつとゆっくりで良いと……だけど、ふとママが言っていたことを思い出した……

最近家族の仲が良くなって色々ママと話してるときに……

『好きになればなるほどに思い人との接し方が分からなくなるのよね……態度がドンドン冷たくなっちゃう。それをあの人と貴方と十六夜君が溶かしてくれたのだけ』

『……』

『火蓮も私に似てる所があるから……正直に言うのが一番よ。覚えておいてね』

私にもそんな日が来るのか……十六夜との接し方が分からなくなる時が……一瞬だけ不安が浮かんだ。だがそんなことはない。私は首を振り布団をかぶる。

次第に雨音で私は眠りへと誘われた。



僕の中で二人は友達……だったら彼は？ 友達？ 良く分からない。彼を二人は好意的に思っている。二人が好きなら協力をしたい。二人の幸せな顔は好きだから。でも、何かが引つかかるような……今日は眠れない……お化けが怖いわけでも無いのに……ただ瞳を閉じているとリビングで誰かが話している音が……彼の声だ。電話でもしているのかな？

暫くすると声が止み隣で誰かが……コハクちゃん？ 火蓮ちゃん？

目を薄つすらと開け、シルエットでコハクちゃんだと分かった。彼女は寝室から出ると彼の元に行き話を始めた。コツソリドアに耳を当てて聞いてしまう……

数分の会話だった。

そして、彼と彼女は手を握り

『何かあればまた言ってください。どんな些細な事でもいいので』

彼は彼女に真摯で想いが乗った言葉を残す。今までとは違う……彼の言葉に乗る想いの何かが……僕にはわかってしまった。

そして、その時胸がチクリと針で刺されたように痛んだ。気のせいだ。

彼女が戻ってくる。僕は急いで布団をかぶり瞳を閉じる。彼女の気分が良い鼻歌が聞こえてくる。

彼女が嬉しい心境なら僕だって嬉しくなるはずなのに……今はそんなことなかった……

雨音が聞こえる……もう、眠れる気分じゃなかった……

六十四話 夏前

「君のさまざまな荷物が落ちてたんだって…」

「猫になってました……」

「そんなウソは……とりあえず全裸徘徊疑惑があるからこれからは気を付けなよ……本当に警察内じゃ死神疑惑あるから」

「はい……」

俺は制服を返してもらった。朝、警察に落とし物が無いかと聞いたところを確保である。そのまま事情を聴かれていた。銀堂コハクパの服を借りて此処まで来たのだが死神疑惑がますます強くなってるな……

警察署内の一室を借りて制服に着替える。銀堂コハクから借りたこの服は洗って返却しよう。その時、昨日の事を考える。正しく激動の日だった。

銀堂コハクと火原火蓮……あんなに好意を……気にしてしまう。そして、もしかしたら魔力があるかもしれないという事だ。

俺に魔力が……もしあるならどうする？

この質問に俺は簡単に答えることはできる。彼女達の物語の手助けをする……と言った感じだ。この世界を読んでいるとき何度も考えていた。

もし、俺が居たら……と。この世界の『ストーリー』は色々なジャンルで言えばライトな内容。しかし、困難もある。難易度で言えばハードくらいかな？

だったら、そこをイージーに……

そこまで考えて俺は首を振った。憶測で考え過ぎるのも良くない。制服に着替えると三人が待つて居てくれた。

「すいません、お待たせしました」

「気にしてないですよ」

「私も」

「僕も」

余り広がり過ぎないように四人で歩く。何気ない会話をしながら。

しかし、火原火蓮はあまり話そうとはしなかった。

「火原先輩どうかしましたか？」

「え？ あ、いや、何でもない……」

「火蓮ちゃんは君に色々しつこかったのを気にしてるんだよ。そうだよね？」

「あ、いや、その……うん……」

彼女は下を向いた。僅かに顔に影が差す。

「全然、気にする必要はありません！ モーマントイですよ！」

「でも、ごめん……」

「だ、大丈夫ですって。せ、先輩とのラノベ話とかは楽しいですから」

「あ、ありがとう」

「っ！ い、いえ」

彼女のありがとうで出た笑顔。それに不覚にも取り乱してしまう

……

「十六夜君、顔赤くないですか？ もしかして熱ですか？」

「大丈夫十六夜？ 病院行く？」

銀と赤にグイツと来られる。なんだ、この感じは……思わず一歩下がってしまう。

「いえ、なんでもありません。それより学校に行きましょう」

俺は少し早足になってしまった……ラブコメの波動を感じる……登校の会話はたどたどしいものになってしまった。これは猫になっていた時の彼女の好意を完全に聞いてしまったからだ。三人の羞恥はかなり凄かったために猫の時の記憶はないと言っておいたが実際あるから意識せざるを得ない。

歩いていると様々な生徒達の声が聞こえてくる……

二つ名に『アマゾン』が追加されました



期末テストが終われば夏休みだ。夏休みは精神強化合宿に参加さ

せられることになったことだけが心残りだ。

「ここはね。こうするの？　十六夜聞いてる？」

「ひゃ、ひゃい」

「どうしたの？　あんまり集中できてないみたいだけど」

「す、すみません。気を付けます」

「そう」

顔が近いよ……最近慣れてきたのにここにきて……

放課後の勉強会。火原火蓮に教えてもらっている。銀と黄は現在、小テストの丸つけやら次に教えるポイントを近くで纏めている。

三人共良い人過ぎ……

「また、集中できてないみたいだけど……私じゃ……もしかして嫌かな」

「そ、そんなことないですよ。続けます。勉強!!」

俺が乱されてどうする。折角彼女達が教えてくれるのにここで不甲斐ない点数を取るわけには行かない。

気合を入れなおしカリカリとシャーペンで書いた。

……俺って二度目の高校生活なのに……凡ミスや記憶が抜けてる所が多いんだよな。もう一回頑張らないと……



そして……テストの日。あ！　ここ勉強会でやった所だ!!

と言った感じでかなりすらすら解けた。

そして、結果が張り出される。学年によって張り出される場所は違うのだが火原火蓮と黄川萌黄がわざわざ俺を気にして見に来てくれた。

折角見に来てくれたのに順位は30番代……微妙だな……クソ。

「十六夜頑張ったじゃない。順位が前とは段違いよ」

「アハハ、三人のおかげですよ」

「流石です。十六夜君」

「五十番一気に上げるのは凄いと思うから君も誇っていいと思うよ」

「いえ、三人のおかげですし」

一位が二人。二位が一人。一年と二年の銀と赤の不動の成績トツプ。そして優秀も優秀の二年の二位の黄。場違い感が半端ない。

あ、佐々本名前が一番最後にある……やったなアイツ

「なにかお祝いしたいわね」

「喫茶店行きましょう」

「賛成。僕あの喫茶店にある茄子のはさみ揚げ食べてみたかったんだ」

「でしたら俺に奢らせてください。三人にはお世話になりましたから」

「それを言うなら私だって十六夜君にはお世話になりっぱなしです」

「私も」

「僕も」

「でも、今回は俺が奢ります。女性に奢るのはマナーですから」

「まあ、紳士ですね。流石十六夜君！」

「私は前から知ってたけどね」

「ありがとうね」

三人にはお世話になってるから当然だ。

しかし、周りから『変態紳士』と言う言葉が聞こえてくるのは気のせいだろう。うん。

「まあ、ある意味紳士だよな」

「なるほど」

「アマゾン」

「アイツモテるな」

「ちくわ大明神」

「誰だ、今の!？」

『アマゾン』とかぼそぼそいうんじやないよ……生徒達の話し声が色々聞こえてくる。しかし、だいぶ慣れてきたな……人のうわさにも。俺は三人に視線を移す。

あと少し、あと少し、今俺の前に居る三人が……もう少しで……

夏休みがそこまで来ている



期末テストが終わりなんてことない日常を過ごし気付けば明日から夏休みだ。クラス全員の顔がワクワクした顔を抑えられず今から何処に行こうかどうやって過すごそうか考えているようだ。

「よく聞け、明日から夏休みだ。遊ぶことも大事だが勉学の事も忘れないように……」

六道先生が夏休みの注意事項を話している。精神強化合宿は男子は全員参加するようだ。まあ、そこに関しては『ストーリー』にも載っていたし知っていたけどな……夏休みに入っいつてすぐに精神強化合宿は行われる。七月二十七日だな。

そして、『八月十六日』……世界は動き出す……

その前に夏祭りがある。『ストーリー』ではかなりあっさり目で飛ばされたがこの町の『七色祭なないろさい』は大掛かりな祭り。屋台も多いし花火も綺麗だし有名なのだ。

それには行っておきたいな。八月九日、十日二日間行われる。

「では、規則正しい夏休みを過すごすように。解散」

「「いええええいいいい!!」」

生徒達が騒ぎ出す。今学期最後のホームルームだからテンション

上がっているようだ。

俺も多少は上がっているがな……ああ、精神強化合宿は行きたくなえ



私の名前は野口夏子。しがない高校生である。

私は前の席に居る銀堂さんの恋愛事情のお手伝いをしているのだが最近黒田君に大分意識の様子が見えている。しかし、この事実はまだ伝えていない。彼女は彼との距離感を測りかねていたようでそのことを気にしているようだからだ。

だからこそこのことだけは言わない方が良いというのが私の結論だ。

六道先生の話を聞きながら私はこれからの事を考える。夏休みと言えばイベントは目白押し、しかしここで私が下手に色々いってしまつて彼女が自分のペースを乱してしまうのは良くないだろう。

最近は何ほど積極的ではないがアピールは少しずつ行っている。それが一番だったのではないかと思う位の和がある。しかし、うかうかしてたら不味いという焦りも彼女の中であるようだ。

二年の火原火蓮先輩と言う存在。まあこの人も最近落ち着いているからこそドダバタ感は無くなっている。しかし、火花は散っている。

二人と一緒に居る黄川萌黄先輩……は微妙な立ち位置だなあ。テレビに映つてた青い人も友達以上位の感じだったし……

“何かとんでもない事”
が起こらない限り二人のトップ感は崩れる感じはしない。

あ、でも……銀堂さんも火原先輩もまだ何かありそうなんだよな……彼女自身たちも一筋縄ではいかない『最大の欠点』を抱えてそう……勘だけど……

まあ、夏休みなんだから“色々な事”が起こるんだろうなあ……

銀堂さんと黒田君で夏祭りにも行って欲しいな……



六十五話 欲望の盃

「どうして、こんな、事……しなくちゃ……いけないんだ……」

「お前が……やるって言ったんだろ……俺達を巻き込みやがって……」

「拙者、もう、無理でござる……」

俺達は現在、何段にも続く階段を炎天下の中、走り続けていた。一番上にはお寺がありそこを何回も往復、往復。全員夏休みなのに体操着である。

六道先生の精神強化合宿である。とりあえず肉体を鍛えようというコンセプトで五十往復することになっている。

いやいやいや、やっぱりとんでもないよ……金親も参加しているがあいつでさえわき腹を抑えているみたいだ。あのスーパーマンの金親がだ。これはもうとんでもない。一年Aクラスの男子達がゾンビのように階段を歩いている。

これは死ぬぞ……

なんとか終わると水を浴びるように飲み全員でお寺の日陰で休む。その後、お寺の中に入り座禅だ。生徒と教師である六道先生も座禅を組み精神統一。

「六道先生、これいつまでやるんですか？」

一人の男子生徒が六道先生に聞いた。

「何も考えなくなるまでだ」

「それって死んでるんじゃない……」

このお寺は貸し切り状態なので永遠と座禅を組むことになる。熱いぞ……他の生徒も腐ってきている……

朝から階段往復、そして座禅……これが昼休憩をはさみ夕方までとなると、例え一泊二日とは言えこの合宿に参加する生徒が居ないわけ

だ。

次は全員でラグビーの試合の前によくやるハカを全力でやり昼休憩。

「キツイ。もう帰りたい……」

「大丈夫だ……後は午後の部だけ……ああ、恐ろしい……」

全員疲弊しきってるな。お昼は冷やしそうめんなので何とか食べられると言った感じだ。器の中にあるめんつゆ。そして氷の冷たさ。

何処か風情がある……こんな呑気な感想を持っているのは俺だけのようだ。

何というか確かにきついが……思ったほどじゃないな。勿論体力的には限界ギリギリのギリなんだが……精神的には余裕があるような……

「やはり、僕たちが彼らを引っ張て行くしかないようだね。十六夜」

「え？ 急にどうした？」

金親が急に俺の隣に座り話しかけてきた。どうやらこいつもまだ余裕があるようだ。まあ、金親さんですからね？ イケメンで何でもできる。これくらいはやってもらわないと……ちっ、ダウンしとけよ……

「涼し気に昼休憩をするのは僕たち位だからね。先頭に立って皆のやる気を掻き立てるべきだと思っただけさ」

「ああ、そういうこと……」

「しかし、僕より気楽そうにしている君はもはや超人だね」

「お前の方が気楽そうだが」

「いや、君の方が余裕そうだよ。全く午前のトレーニングが応えていない。大したもんさ」

「どうも」

まあ、褒められて悪い気はしないんだがなんか上から来られているようで……と思ってしまう俺は心がすさんでいるんだろうな。

「午後の部を始める。全員整列！」

六道先生の号令が鳴り響く。張り上げた声はヤクザのようだ。まあ、ヤクザの家系なんだけどね。

「ええ!? もう無理」

「地獄だ」

「鬼が呼んでいる」

男子生徒の声が聞こえてくる。さあてと俺は整列するか。

午後の部は午前との部と同じものだった。同じものをするだけでメンタルには相当の負荷がかかる。そして、午前のきついという印象があるので余計に。セミの鳴き声をBGMにしながらもメニューを全員誰一人欠けることなく達成したのだった。

その後、お風呂に入った後、夕食。そしてそのまま就寝である。全員でお寺の隣にある宿舎のようなどころの同じ部屋で泊まる。クーラーが付いている大部屋の和室のような感じで一日の疲れが溜まっているのか既に寝ている者もチラチラと見える。しかし、一部は俺に用があるようで

「ずつと、聞けなかったことを聞こう」

「そうだな……」

何やら男子達は物凄い剣幕で俺を睨む。大体察しは付くが……

「お前、あの美女三人と何処まで言ったんだあつあああ!!!」

「そうだ!! 吐け!!」

「どうせ、股間のホワイトロケット砲を300パーセントチャージしてぶっ放してるんだろぅが!!!」

とんでもない偏見だな。全く如何わしいことはしていない

「何もしていない。俺は童貞だ」

「嘘つけ!! あんなに一緒に居て何にもないわけ無いだろうが!!」

「そうだそうだ!!」

「落ち着け。既に寝ている生徒もいるんだ」

やっぱり、何時か聞かれると思っていたがこのタイミングで来るか。あんなに美女と一緒に居たらそういう風に思うのは当然だが本当に何も無いんだ。言っても分かつてはくれ無さそうだな。

「全部吐くまで……」

男子生徒が追及を続けようとしたその時、部屋のふすまが開く。そこには六道先生が。

「今日はしっかりと体を休めろ」

その一言で全員が眠りの世界に旅立った。しっかりと睡眠をとり次の日にこの合宿は終了となった。終わった後、号泣するものが多かった。感動が全員に沸き上がり全員が二度とこの合宿には参加しないと決めた。



夏休みはかなりの浪費した日々が続いた。久しぶりにゲームをしたり何となくで今後を考えたりしたらドンドン日には過ぎていき気付けば八月に突入し祭りの日になっていた。

『七色祭』

この町で行われる大きなお祭り。かなり有名なお祭りの様でテレビ局などの取材もある。そして、今日は銀堂コハク、火原火蓮。黄川萌黄と一緒にいくことになっている。

本来の『ストーリー』ならこの時点では彼女達の接点はなく、祭りには黄川萌黄しか行かなかった。銀堂コハクは誰も信用していないから行きたくない。火原火蓮は興味が無い。黄川萌黄はなんとなく祭りの雰囲気を感じる為に来たという描写が少しだけされた程度。この後の『魔装少女』がメインなためあっさりとした感じだった。

しかし、今は全員が祭りに揃う。これくらいなら多少の『ストーリー』との齟齬があっても大丈夫だろう。

俺は黒のパーカーにジーンズで待ち合わせ場所に向かう。人がものすごく多い。俺たち以外にも待ち合わせの人達は多いようだ。頭をキョロキョロ動かしながら三人を探す。夕暮れ時。カップルなどの待ち合わせが多いな。

十分前に到着しているが三人はすでにいるかもしれない。そう思って探しているとざわざわと人の声が聞こえてくる

「何だあの三人……」

「美人揃いだ……」

「誰を待ってたんだ？」

どうやら、あそこら辺にいるみたいだ。こういう時美人つて便利だなとしみじみ思う。待たせているようなので早足で向かうと……

三人の女神が居た。

銀堂コハクは純白ともいえる綺麗な生地を基調に美しい花柄が描かれた着物。しかも、ちよつとお団子にしている。火原火蓮は深紅の生地を基調に椿が描かれた着物。黄川萌黄は太陽の様な眩しい生地にヒマワリや沢山の華が描かれている着物。

おいおい、綺麗すぎるだろ……そこに向かう俺の場違い感ときたら……

「あ、十六夜君！ こっちですよ！」

銀堂コハクが俺に気づき手を振る。周りの人たちもあんな美女を待たせるなんて一体誰なんだ？ と言った感じで俺を見ると……

「え？ あの子？」

「何だろう……フランス料理のフルコースにいきなりアジフライ出されたこの感じ……」

「モブみたいな子……」

最近この手のざわめきに徐々に適応しているのかあんまり心が動かなくなつた俺である。いや、やっぱりちよつと来るものはあるな。

「すいません。お待たせしました」

「いえいえ、私達も今来たところなんです」

「そうよ、だから気にしなくていいわ」

「うんうん、謝る必要なんて無いよ」

「お気遣いありがとうございます」

三人共優しい……それにしても本当に可愛い。えへへへへ、尊い。うなじがエロい……

あんまり見てると不快かもしれない。この辺にしておこう。それより、こういう時って一言褒めたほうがいいんだろうな。

なんて言おう……慣れてないから分からないよ……

「えつと、三人共お綺麗ですね……まるで……えつと……」

三人が俺の言葉の続きが気になったようにグイッと視線を向ける。ここはとんでもなくきれいな彼女達に普通以上の褒め方をしたい。どうしよう……混乱してきた……ここ、こんなの初めてだよ!!

「まるで絵本から飛び出してきた、お、お姫様みたいですよ……」

「えへへ、ありがとうございます」

「ありがと……」

「僕も一応礼は言っておく。褒めてもらったわけだし」

は、はずかしいな……こんなセリフを言う事になるとは……

「そ、そろそろ、歩き出しましょう!」

「そうですね、沢山の出店があるので楽しみましょう」

四人で歩き出す。来る人来る人、全員が振り返る。振り返るしかないと言う程に三人は可愛い、美しい。

先ずはたご焼き屋。

「四つたご焼きください」

「おう、よ……?」

おい、俺と彼女達の顔を見比べるな。ちよつと気にしてるんだから俺がここは奢ります」

「十六夜、そこまではいいわよ。自分で」

「そうですよ」

「そうだよ」

「ここは俺が奢らないと……何というかマナーだと思いますから! 絶対俺が払います!」

「そ、そう？ 悪いわね」

「すいません……十六夜君。私から誘ったのに」

「偶にはわがまま言っても良いんだよ？」

「いえ、俺が奢りたいので」

たこ焼き代を払いそれを三人に渡す。

「座れる場所探しませんか？ こんなに人が居ると食べられませんし」

「そうですね」

「そうね」

「でも、本当に多くなってきたね」

座れる場所を探す。四人で並んで歩く。しかし、大分人が多く、徐々に位置がずれていく。どんどん人が増えてる。手を繋いで……いいのか？ 一瞬の迷い。今までになかったその迷いで離れていく。

「人、多すぎ……」

「十六夜君何処ですか!？」

「波が凄いよ!!」

三人の声^が聞こえてくるが見えない

「どこですか!?!」

大声で叫ぶ^{!!}が三人とのコミュニケーションが取れない。スマホで連絡を取るしかない。取りあえずメールで最初の場所に集まろうという趣旨のメールを三人に送る。そうするとすぐに了解の返信が返ってくる。

人と人の間をかき分けつつ急いで元の待ち合わせ場所に向かう。しかし、中々進めない。

ある程度祭りから離れると人も徐々に減ってきた。

「十六夜君ー」

後ろから銀堂コハクの声が聞こえる。振り返ると女神のごとき美しき。

「すいません。俺がもつと上手くやればはぐれなかったのに」

「謝らないでください。あれだけ人が居ればしかたないですよ」

「そうですか……」

火原火蓮と黄川萌黄はまだ来ない。人混みのせいで上手くここまで来れないのだろう。

「十六夜君。二人で最初の待ち合わせ場所に行きましょう」

「はい」

二人で歩く。なんとなくドキドキする……傍から見たらカップルに……見えるわけ無いな。あれ？ 銀堂コハクの歩き方がオカシイ。

「銀堂さん大丈夫ですか!？」

「あ、い、いえ、大丈夫です……」

彼女の足を見る。すると右足の草履の鼻緒が当たる足の甲が少し赤くなっていた。人混みの中急いで来たのだろう。靴擦れだ。

「靴擦れしてる……すいません……あの時人混みの中ではぐれなければ」

「……十六夜君。なんでもかんでも一人で責任を感じて背負い込むのはやめてください。これは私のせいです」

「でも」

「これ以上、言ったら私、怒っちゃいますよ」

「……すいませ……」

「むう」

「あ、えつとなんでもないです」

「フフ、はい、それでいいです」

彼女は笑った……俺が迷ったからこういうことになる。迷いは今は捨てないと。せめてここからは俺が運ばないと

そう思っていたその時……

「あれえ？ コハクじゃん？」

「っ！」

俺の後ろからある女の声が聞こえてくる。銀堂コハクの方からは

見えているようで彼女は驚きと恐怖の顔をした。

俺も何事かと振り返る。

そこには、三人ほどの女子高生と二人の男子高校生のチャラいグループだった。誰だ？ こいつら？

「誰ですか？ この人達？」

「あの、この、人達は……」

彼女の怯えようで俺は直ぐに分かった。こいつらは中学時代に彼女を虐めていた奴らだ。『ストーリー』にはこいつらが来るような描写はない。いや、描く必要がないだけか……本来ならここに銀堂コハクが来るはずはないから出会う事もない。この祭りは有名だから来てたのか……

「久しぶりい、まだ、男漁りして……」

俺は彼女が何かを言う前に銀堂コハクの耳をふさいだ。イヤホンに音楽を流し完全にシャットアウト。

「い、十六夜君!？」

耳をふさいでいるから彼女には声が聞こえない。相手は何だこいつと言った表情で俺を見る。

「ああ。アンタそいつに騙されてるよ」

「そうそう、援行しておじさま方から人気のコハクちゃんに騙されてるよ。離れた方がよいよ」

「って言うかマジでこの子顔とスタイル良い感じじゃん。俺も金あげるからさ……」

俺はそのまま彼女をおんぶするとその場から離れるように歩いて行った。こいつらの話は聞く意味はないからだ

「待ちなつて、モブ顔のアンタはそいつに騙されてるから善意で私たちには言ってるわけじゃん」

「ねえ、そいつ中古だよ？ かなり使われた中古」

「色んな男から金とかむしり取って……」

彼女達はごちゃごちゃ言っていたが俺がずっと無視すると面白くなくなつたのか消えて行った。訳の分からんイレギュラー……今後

もありうるかもしれない……

もう、迷っていられない……俺が最善の最高ルートでこの世界を歩めるように彼女を、いや彼女達をサポートしよう。

「……」

「……」

彼女をおんぶして歩き待ち合わせ場所に到着する。彼女は何も言わなかった。

「十六夜!!」

「ふうく、ようやく人混みから戻ってこれたよ」

「すいません。俺がはぐれない様に出来れば」

「いいわよ。十六夜のせいじゃないんだし。それより、むう。なんでコハクをおんぶしてるの?」

彼女はフグのように顔を少し膨らませるとちよつとだけ羨ましそうに銀堂コハクを見た。

「銀堂さん、靴擦れしたみたいで。火原先輩と黄川先輩は大丈夫ですか? もし、ダメなら三人共俺が背負いますが」

「私は大丈夫。それよりコハクの足の処置をしてあげましょう。えつと……絆創膏……持ってないわ……萌黄は?」

「持つてるよ。クロスにして貼るから一回何処かで座らないと……あ、あそこ空いてる」

「行きましょう。それと今日はスーパーで色々買って俺の家でばあーと過ごしませんか? 人が多すぎて祭りどころじゃないですし」

「そうね。十六夜の家で買ったお菓子とかではあーつとやりましょう」

「いいね、そうしようか」

銀堂コハクを背負いながら歩いて行く。この後、処置をした後、スーパーで色々買って彼女達は俺の家に泊めた。

別にやましいことはしてない。普通に彼女達と過ごした。

ただ今日で俺は新たななる覚悟を決めた。ただ、それだけ



あの時、中学の時に私を虐めていた相手にあつた時。時間が凍ったように思えた。怖い怖い怖い。ただひたすらにそう思った。

彼の暖かい時間が冷たいものになって行く……そう思い始めていた。

でも、彼はまるで全て分かっているかのように私の耳にイヤホンを刺すと大音量でアニソンを流しその後私をおんぶすると黙ってその場から離れて行った。

冷たくなりかけた私を彼は一瞬で暖かくしてくれた。

あいつらは彼に色々な言葉をかけた。口の動きで大体言っていることは分かった。だが彼は一切気にすることなく黙って私を連れて歩いた。

その嬉しき。カッコよさ。愛おしき。全てが理想を超えた……

惚れなおした

彼を好きになって良かったと思った

そして……同時に自分の気持ちを抑えきれなくなりそうだった。

欲しい、欲しい、欲しい。彼が欲しい。喉から手が出るほどに……ひたすらに欲しくなった。

最近彼に迷惑をかけないように控えめに行動していたがそんなことはどうでもよくなるくらいに欲しくなってしまふ

このまま既成事実を作つて彼を私に縛り付けたい……彼は責任感が強いからもし行為に及んだらきつと私の側にいる……それを考えるとうとうしようもなく高揚感が湧いてくる。

欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい。彼が……でも。こんなことを

したら迷惑だ……

欲しい、彼の気持ちを考えて、でも欲しい。相手の気持ちを考えないで。

最近、ゆつくり行くと私自身が決めたのに……

欲しい、欲しい……

このまま、家に上がらせてもらって色仕掛けで……無理やり……

そこまで考えて私はお母様の言葉を思い出す。そして胸に手を当ててゆつくりと考える。

欲望の盃からあふれ出る欲を抑える……しかし、なかなか止まらな
い

生まれ、欲しい、生まれ、欲しい、生まれ、欲しい

生まれ生まれ欲しい生まれ生まれ生まれ生まれ生まれ欲しい止ま
れ生まれ生まれ!!!!

——生まれえっええええ

!!!!!!

彼におんぶされながら一人胸に手を当ててからどれくらいの間
が経っただろうか?

私は凄く長く感じ、私は汗を沢山かいていた。

そして、なんとか抑えられた……

その後は、彼の家で四人で過ごした。彼は祭りに人が多すぎると
言ったが私にいつらを会わせない為だろう。

嬉しい……また……欲が……良かった……大丈夫だ。この欲望の
奔流……またいつか……出てしまうのだろうか……

いや、大丈夫。今抑えられたんだから……僅かに残るが……

その日は彼の家で楽しくワイワイ過ごした。過ごしているうちに
私の中で欲は次第に完全に収まって行った……

魔装降臨

六十六話 プロローグ

暗い空間。何処までも続く天井と草も石ころですら一切ない平地。先が見えない程に広い。

不気味なほどに何も無い。しかし、その空間には石像が四つ。

一つは、角が生えた悪魔の石像。大きさは二メートルほどで白衣を着ている。

一つは、全長三メートルはある大きなゴーレム。

一つは、百八十センチメートルほどのスケルトンの剣士の石像。骨に服を着せており一本の剣を背負っている。

そして、その三つとは比べ物にならない程の大きな禍々しい存在。龍の様な二つの翼。

異常なほどに伸びた爪。大きな角が一つあり全長15メートルはある。

全く動かない石像。しかし、その内の三つにひびが入り始めた。少しづつ、しかしそれはドンドン大きくなり石像全体にひびが入ると石像の外装がはがれ中から生命が出てくる。

ゴーレム、若々しい悪魔、スケルトンの剣士。それぞれが現状を確認する。頬を触ったり手をグーパーしたり……その後一息について三体は話し始めた。

「ようやく、石化の封印が解けたわね。全く、星霊せいれいもやってくれるわね。」

男の悪魔は女口調で話し始めた。首をぽきぽきと鳴らす

「全くだぜ。咄嗟まおうさまに魔王様を盾にしたとしてもこんなに長いとは思わなかったぜ」

大きなゴーレムが肩をグルグル回し辺りに土塊をまき散らす。ゲラゲラと笑いお調子者の雰囲気漂う。

「……魔王様の封印は解けてはいない……か……」

スケルトンの剣士は僅かな言葉を紡ぎ自身よりはるかにデカイ石像を眺めた。ここにある大きな石像の事を魔王と呼んでいる。

その後、自身が背負ってる剣を抜き眺めた。シンプルなデザインのロングソード。剣の柄は黒で刀身は真っ白のように光り輝いている。「まあ、いい。それより剣は……特に変わりなしか……流石……魔剣まけんデルフィッド……」

スケルトンの剣士は魔王の石像には既に興味はなく剣に夢中である。寡黙キャラのようだ……

「それにしても一体何年たったのかしら？ 大分長い事石化状態が続いてたけど」

「さあな。俺にはわからねえぜ」

「……約千年……」

「あら、骨三郎流石ね。数えてるなんて」

「魔の三銃士最強の名は伊達じゃなえな。おい」

「……そういうのはいらん……そんなことを言う暇があるなら《ミツシエル》《ここから脱出する方法を考えろ》」

「はいはい、照れ屋なのは相変わらずね。けど脱出して簡単に言うけどここはあの星霊が私を封印した結界のような場所なのよ。そう簡単に出来るとは思えないわ。下以外何処までも続く平地……」

ミツシエルと言われた白衣を着た悪魔は辺りを見回す。そして足が付き唯一限界がある地面をジッと見る。その後、靴の先で地面をコンコンと叩く

「ここを壊したら行けるかしらん？ ちよつとドーンやってくれるかしらっ。」

「いいぜ、ただ地面が超固い場合、全力で殴りすぎると痛いからソコソコで殴るがな!!!」

「相変わらずの図体のわりに意外と臆病なのね」

ドーンと呼ばれたゴーレムが地面を殴る。そこそこと言っていたがかなり大きな音がドーンとなる。しかし、僅かなクレーターが出来

るのみ。普通の地面だったらこれ以上の大穴が出来ていただろう

「オイオイ、かなり抑えたがこれは相当の硬さだぜ……アルテミスの地面の何倍だこりゃ？」

「うーん。これは正攻法じゃ無理ね……ねえ、私達って魔族の王である魔王様に仕える最高戦力のわけだけど……この中で魔王様に絶対の忠誠を誓っているって言う魔族は手を挙げて」

「……」

「……」

ミツシエルが質問をするが彼を含め誰も手を上げることはない。

その答えを分かっていたようにミツシエルが肩をすくめた

「まあ、分かっていたけど。そうでなきゃうあの時魔王ベルゼビユート様を盾になんかしてないわよね」

「俺は仕方なく仕えてただけだ」

「俺は……仕えていた意味はない。なんとなく……ただ……戦闘ができるからだ」

「だったらこの石像好きに使ってもいいわね」

ミツシエルが魔王の石像に触れた

「エーデルチェンジ等価交換……」

魔王の石像の下半身が形を変え一つの大きな黒い物質になった。かなりの長い時間を費やして……

石像を物質に変えるまで一時間以上かかっていた。

「……どうする気だ？」

「これで大きな兵器でも作ってここを脱出しようと思ってるねえー」

「おおい、出来るのかよ？」

「多分出来るわ。封印前に戦艦を作ろうとか考えてたんだけど良い物質がなくてきなかったのよ。でも製作書は大体出来てたしね……後はこれを加工して……あ、上半身も物質に変えておきましょう。目覚めるとめんどくさそうだし」

ミツシエルは魔王の上半身も一時間ほどで黒い物質に変えた。そ

の後、自身の背負っていたバッグからありとあらゆる機材やら何やらを取り出す。中には纏められた戦艦の製作書も……明らかにバッグの容量以上の量がありあのバッグは普通の入れ物ではないようだ。

「あーあ、魔王様殺しちゃったよ。コイツ」

「あら、いいじゃない。魔王様が居ると色々めんどごともあることだし」

「確かに……僅かにミスっただけで殺される同胞も居た……」

「そうそう、それより改造するわ……大体、丸々三日ほどは使うけどそれまで二人は今までなまった体でもほぐしていたら？」

「そうだな……俺の秘技である閃せんてんはおうまけん天霸王魔剣も大分なまっている……」

「……名前を変えた方が良いわよ。封印前から言ってるけど……」

「これでいい……」

「グアハハ、久しぶりの運動だああ!!! こらららあつああ!!!」

ゴーレムのドーンが騒ぎだし、スケルトンの剣士である骨三郎は剣を振り。オカマの悪魔博士は物質を大急ぎで加工していく。

この空間は一体何なのか……そしてここにいる異形の者達は……
一体……

この日は人間界の時間で八月十一日……

運命の日……は八月十六日……とある女子高生達に世界の命運が託される。

これはそのプロローグ



と言うのが『魔装少女〜シークレットファイブ〜』の魔族が攻めて

くる前に小説に書いてあったプロローグだ。

入学から特に何の変哲もないイベントを辿り、その後『魔族』による侵略が始まる。

目的は世界征服と言う何とも言えない、何処にでもある理由である。しかし、攻めてくる三人の魔族であるが世界征服はあくまでついでと言った感じなのである。

魔王ベルゼビュートを裏切っている三人の魔族だがそれぞれに好きな事や目的がある。それが一番で他はどうでもいいのだ。だが元魔王の配下であるから魔王の悲願である世界征服を一応しておくか……位に考えている

そして、先ず手始めにこの俺達が住む現代に様子見で『怪人』を送り込んでくる。怪人とは魔王の最高戦力の一人魔の三銃士である

？世紀の天才ウルトラスターと言う二つ名を持つオカマ博士であるミツシエルが作り出す化け物である。

何故、いきなり現代に怪人を送り込むのかは理由が色々ある。そして、それを事前に察知して妖精族ようせいぞくも現代にやってくる。妖精族とは背中に羽が生えてる以外は余り現代の人間とは変わらない種族であり異界アルテミスからこちらの世界にやってくる。

そして、その一人の妖精と偶然居合わせた銀堂コハクと、火原火蓮、黄川萌黄が出会う事で物語が八月十六日に始まる。

俺はバッドエンドを回避したら後は傍観しようと考えていた。後には俺は何となくで過ごしても問題なんて無く彼女達が何とかしてくれる。バッドエンドを回避したことに満足し物事を深くまで考えずに適当に過ごしていた……

だからあの時俺は銀堂コハクを辛い目にあわせかけた。本当ならあそこに彼女はいるはずがなく、元いじめっ子の同級生と会う事などあり得ない……しかし、俺がいたことで関わった事でそう言った事態が起こってしまった。

現状に満足し、その先を考えようとせずにはいた俺の軽率な行動のせいであり、俺が彼女達に関わった事で起きたイレギュラーでもある。バッドエンドを回避したしモブに戻ろう。でも何となく居心地もい

いから彼女達とも接しよう……そんなことを心の何処かで考えていた自分を殴りたい。

超美人でありいずれ世界の命運を背負う五人の内三人と関わりを持つなどどこにもいない。準レギュラーの様な物だ。そんな存在がいればイレギュラーも起こりうるのは想定すべきだった。

これから起こりうることが俺の知識通りに行くとは限らない。ならばやることは決まっている。これから彼女達に始まる物語の“最適解”のサポート。そして彼女達をなるべく危険な目に遭わせない事を考えこれからは動く……

……幸い、もしかしたら俺には『魔力』があるかもしれないのだから。無くてもサポートはやるがな。

さて、ここまででやることは決まった。そして最初にやることは

……

今日は八月十一日……先ずは……八月十六日に片海アオイを七色町に呼び初期から四人で活動させる。

六十七話 あと少し

現在、八月十六日。早朝八時

俺は海原町の彼女の自宅前に居た。今日は運命の日。今日魔族が攻めてくるので……先ずは初手として追加メンバーである片海アオイをいきなり初期メンバーにぶち込むという一手である。

片海アオイが転校してくるのは十一月。火原家が離婚して火原火蓮が赤井火蓮あかいかれんになった後である。それをいきなりこの時点でメンバーに入れる事によって大幅な戦力の強化。そして、彼女達の“絆”や“波長”を早期から育んだり合わせたりすることが出来る。

「お待たせ」

彼女の家の玄関のドアが開き、中から彼女が出てきた。かなりラフな格好でパーカーである。彼女は動きやすい格好が好きであり余りオシャレとかに気を遣わない。火原火蓮もそうなのだが、黄川萌黄に二人共オシャレに目覚めようという事で銀堂コハクを入れて四人で買い物に行くなどと言う展開もあつた……あれは良かったぞ……

「いえ、全然待つてません。それより朝早くからすいません」

「いいよ、あーしも七色町興味あつたし」

「そう言つてもらえるとありがたいです。それじゃあ早速向かいましょう」

彼女には前回の海原町の案内のお返しに七色町を案内するという提案をしたのだ。後、紹介したい友達もいるという内容だ。しかし、実際はそうではない。気を抜くことはできない……緊張も少ししている。

朝早くから彼女と一緒に新幹線に向かう。チケット代とかはすべて俺が持つ。これはマナーだよな。うん。男だし……それに一応俺って精神年齢は彼女より全然上だし？

最初はバスに乗り、乗り換えて新幹線。更に電車やバスを使う。バスに乗り揺られていると彼女が保冷バッグを出す。

「朝ごはん食べた？」

「いえ、食べてないですね」

「……おにぎり作って来たけど……食べる？」

「い、いいんですか？」

「いいよ。昆布と鮭とから揚げのおにぎりがあるけどどれが良い？」

「から揚げお願いします」

「はいよ……ん、これ」

彼女はおにぎりを保冷バッグからだし俺に手渡してくれた。くうう、片海アオイのおにぎりが食べれるとは……嬉しい。

早速頂こう

「頂きます」

「ん、召し上がれ」

一口頬張る。まだ中の具が出ないので二口。から揚げと米の相性が抜群だ、そこにマヨネーズもあつたら不味いわげがない

「めっちゃくちや美味しいです！　ありがとうございます」

「そ、……から揚げ好き？」

「はい。好物の一つです」

「へえ……」

彼女は特に表情を変えることなく俺の話聞いていた。俺は夢中になっておにぎりを食べた。すぐに一つ目を平らげた

「……まだあるけど」

「それは先輩の朝ご飯ですよね？」

「あーしは昆布が好きだしダイエツト中だからこれ一個でいい。だから鮭のおにぎりも食べて」

彼女はラップに包まれているおにぎりを俺の前に突き出した。そこまで言われたら……頂こうかな……

「本当に大丈夫ですか？　本当はお腹空いてるんじゃない……」

「いい、昆布だけで十分。だから……これ」

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて……頂きます……」

彼女は俺の食べるところをジッと見ていた。おにぎりの味は凄く美味しい

「美味しいです。鮭の油が良く出て米と絡んで……」
「そ……」

その後、彼女は昆布のおにぎりを食べ始めた。僅かに唇が微笑んで見えるのは見間違いのように見えるが……そうではないようにも見える。

彼女が食べ終わった後はなんてことない会話を繰り広げた。新幹線に乗り換え、電車に乗り継ぎバスに乗車して遂に七色町に到着した。現在の時刻は十一時過ぎ。そこから歩いて町案内を始める。時間をしっかりと気にする。今日は時間を意識しないとやってられない。

「この喫茶店良く行くんですよ」

「何が美味しいの？」

「えっと、ナポリタングラタンとか大きいパフェとか」

「ちよつと興味あるかも」

「お昼はここで食べますか？ 奢りますよ」

「……交通費も出して貰ってお昼までは……祭りの時も奢ってもらったわけだし……はあーしが」

「いや。俺に払わせてください。これくらい大したものじゃないです」

「……でも」

「いえいえ、ここは俺が。それじゃあ、ちよつと早いんですけどお昼にしましょう」

俺達は店内に入る。この喫茶店に来るのはもう何度目だろうか？ 大分お気に入りしている。

「いらつしやいませ……あ、君また来てくれたのね。んん？ えつと……また……違う子……なのね……」

店員さんは最初は元気よく出迎えてくれたのだが片海アオイを見ると……え？ コイツまた違う女連れてるよ……と言う顔をした。しかし、直ぐに営業スマイルに戻す。

何とも言えない心境の中。一旦席に着く

「常連なんだ」

「ええ、まあ……」

「誰と来たの？」

「と、友達と頼もしい先輩ですかね……」

「そうなんだ」

「は、はい、あ、これがメニューです」

「ありがとう」

彼女にメニューを手渡す。そう言えば彼女は先輩だからこれから片海さんでなく片海先輩の方が良いのだろうか？

まあ、今は考えなくていいか……

「あーし、ナポリタングラタンにする」

「それじゃあ、俺は……」

俺がメニューを眺め注文する品を決めようとした時、店内のドアが開きお客さんが入ってくることを示す鈴の様な音が店内に鳴り響く。

「いらつしやいませー……」

「またパフェ食べに来てしまいました」

「あ、そ、そうなんだ……いや、でも、今はその……いらつしやいませ……」

何やら聞き覚えがある声が聞こえてくる。可愛らしい銀の音が

……店員さんの気まずそうで逃げる足跡も

「あ、十六夜君！　ぐうぜ……ん……ですね……」

「あ、どうも……」

「そちらの方……テレビと一緒に出てた……」

……分かつてはいたが銀堂コハクのようなだ。彼女とは今日の午後片海アオイと合わせようと思っていたのだがこのタイミングとは。銀堂コハク、火原火蓮、黄川萌黄には今日の午後に予定を開けておいて欲しいというメールは送っている。そこで友達と言う事で片海アオイを紹介して皆で仲よくしようという計画だった。

遅かれ早かれこういう展開になるのことはなんとなくだが心の準備していたのだが……何というか……気まずい

彼女の気持ちには何となく気付いているし……それなのに他の女の人と一緒に居るところを見せるのはやっぱり……クソだよな……俺って……

しかし、今だけは何としてもやり遂げよう

「えっと、彼女は友達なんですよ。以前海原町でお世話になったのでそのお礼に町の案内をしています」

「ああ、そうですか。友達……友達……だからこそその町案内……なるほど……納得しま……す……あ、メールで言ってた紹介したい友達と言うのもその人……ですよ？」

「は、はい」

「なるほど、なる……ほど……」

彼女は心臓に手を当てている……そして目をつむつた……一息つき目を開く。その後、不安そうに彼女は俺達に聞いた。

「も、もしよかったら私も町案内にご一緒してもいいですか？ 予定では午後から一緒に遊ぶという事ですけど……私もこの町で押さえたい場所を紹介したいので」

「あーしいいけど」

「ぜ、是非お願いします」

「それでは十六夜君隣いいですか？」

「どうぞ……」

彼女は俺の隣に座ると片海アオイと向き合う。銀堂コハクは黒い笑顔で片海アオイは特に何んとなし無表情。

「自己紹介しておきますね。私の名前は銀堂コハクと言います。十六夜君と同じ学校に通っていて、同じクラスで仲良しこよしです。年は十六ですよろしくお願いします」

「そう……あーしは片海アオイ。年は今年で十七よろしく」

「年上の方ですか……あの十六夜君とは友達なんですよね？ それ以

上ではないですよね？」

「?? ああ、うん。友達……でしかないと思うけど」

「そうですか……嘘や勘違いするような言い回しはしてないですよね？」

「何を深読みしてるか知らないけど友達。それ以上でもそれ以下でもない……」

「そうですか。ふう、ちよつと肩の力が抜けました……」

彼女は片海アオイと会話し一息つく彼女の雰囲気優しいものになる。心臓に手を当てていた手を下ろした……

その後、彼女はパフェを頼み。俺達は早めの昼食を食べると案内の続きを始める。

時刻は十二時。魔族が来るのは三時。ここから僅かに見えるアウトレットモールの近くに黒い大穴が現れそこから“怪人”が出てきて暴れだす。それを妖精が止める……しかし妖精には止められない。そこで偶然居合わせた三人が魔装を託され怪人を圧倒するというのが流れ。

しかし、ここをいきなり四人にして圧倒的な戦力差でぶっ潰す。安全マジンを確保しながら……

俺はこの後の流れを考えながら道を歩く。銀堂コハクがおススメの場所があるのでそこに行くという感じである。

彼女のおすすめはあらゆる本が揃っている……本屋らしい……まあ、この町景色とか物凄くいい所とかはないからな。ここつて前に火原火蓮と一緒に来た本屋だな。普通の本屋よりは断然大きく売られている本も豊富。

「ここが私が行きつけの本屋さんです……たくさんの本がある……場所です……」

「本屋に本って当り前じゃ……まあ確かに大きいけど……これがこの町の抑えておくべき場所？」

「えつと、そうです……」

彼女は気まずそうに答えると小声で「ごによごによ何かを言った

「……………だって仕方ないじゃないですか。私はこの町に来て長くないですし……………私はただ二人きりにしたくない為にお勧めがあるってでっち上げただけなんですから……………」

片海アオイには聞こえていないようだが俺は難聴ではないので聞こえてしまう。

……………心が……………痛い……………

「折角だから見てっついていい?」

「どうぞどうぞ」

彼女は折角のおすすめだからと中に入って行く。参考書を眺めているとき……………

「あの、十六夜君」

「な、なんですか?」

「あ、あの女の人は本当に友達なんですよね? いや、疑っているというわけではないのですが、その一応と言うか……………」

「は、はい。そのお世話になった友達です」

「よ、良かった。あ、すみません……………何度も……………ご迷惑でしたよね……………」

「いや、その、全然、そんなことはなく、俺の方が申し訳ないって言うか、何ていうか……………」

「いえ、私が全面的に悪いです……………」

「いやいや、俺の方が……………なので気にしないでください」

「は、はい。あ、ありがとうございます」

何と言うかピンクの空間に二人でいるような感じになってしまいがこの後は大事なことが控えている。気を引き締めないと……………

十二時三十分か……………待ち合わせは一時でそこから五人で過ごして……………そのまま……………魔族との戦闘……………もし俺に『黒騎士』のような力があれば魔族を完全に滅ぼして平和を確保するんだけどな……………

「あれ? 十六夜じゃない」

「コハクちゃんもいるね。皆して奇遇だね」

今度は後ろから火原火蓮と黄川萌黄の声がする。どうやら二人も本屋に来ていたようだ。

「お二人とも来ていたのですか？」

「私はラノベと漫画の新刊を買っておこうと思ってね。後ついでに十六夜に教える為に何か参考書買って教える勉強しようかなって」

「僕は最近、ラノベとか漫画とか興味があるから集合時間前に本屋をうろうろしてたら火蓮ちゃんとバツタリ会ってそこから一緒に……集合時間前に皆揃うなんて面白い事もあるね……あれ？　そこにいる女の子ってもしかして……」

銀堂コハクと二人が会話している際中、黄川萌黄が大海の青に気づいた。そして火原火蓮も

「あく！　あの時祭りに居た子じゃない!!　ってことは紹介したい人って、もしかしなくてもこの人!!」

「ええつと、そうです……」

「火蓮先輩大丈夫です。この人は十六夜君の友達でそれ以上でもそれ以下でもないそうですから」

「本当に？」

火原火蓮が片海アオイに目を向けた。片海は銀堂コハクに僅かに目を向けると少し遠慮しながら話した。

「そう、その子にも言ったけど友達。他にはなんもない」

「そ、そう。ごめんね？　変に騒いで」

「ダイジョブ」

申し訳なきように彼女は告げた。互いに未だに距離を測りかねているのが分かる。しかし、

「ねえ！　君は名前なんて言うの!?!　僕は黄川萌黄!!　よろしく!!」

途轍もないフレンドリー。黄川萌黄がビシツと手を差し出す。こういう時の黄川萌黄は心強い。

片海アオイが転校してきたときも真っ先に話しかけたのは彼女だ。彼女ならすぐに仲良くなるだろう。他の二人も何だかんだ仲良くな

る

彼女のコンプレックスである目については全員気にしない。そのことに顔には出さないが片海は驚いているだろう。

「片海アオイ……よろしく」

「私は火原火蓮よ……よろしく」

「……よろしく」

揃ったな……中盤メンバーが。初期からいきなり四人を集めるといふ暴挙だがまあ、大丈夫だろう……互いにまだ距離を測りかねている感じだな。

「アンタの言ってた友達紹介ってこの三人？」

「そうです。何かめっちゃ仲良くなれる感じがしませんか？」

「まあ、そうだね……」

何となくだが三人を気に入ったようだ。よし、最初は四人の輪を作るといふ目論見は達成したな。

「実は片海さんに町の案内をしているんですけどよろしければ……二人も一緒に行きませんか？」

「勿論だよ!!」

「私は基本的に家に居るからあんまりお勧めとか紹介できないけど……」

「全然オツケーです」

よし、五人で行くことに成功したぞ!! 後は纏まってアウトレットモールから近すぎず遠すぎない安全マージンを確保した距離にいればあちらからこっちにやってくる。

「それじゃあね、僕のおすすめの景色の見える高台に行こう!! アオイちゃん!!」

「めっちゃ、グイグイ来るね……アンタ……」

「まあね!」

片海アオイと腕を組んだ黄川萌黄を先頭に俺達はついて行く。

俺は警戒心を緩めずに行かないとな……時間はまだ余裕がある。

スマホ画面を眺めながら歩き始めると服の袖が引つ張られた。振り向くと火原火蓮が小さく袖を掴んでいた

「ねえ、アオイさんは本当に十六夜の友達なの？」

「ツ!! は、はい。そうです」

「そうなんだ。良かった……あ、いや、そのこういうの聞くって彼女でもないのにおこがましいかもしれないけど……その私気になっちゃって……その……ごめん」

「い、いや、謝らないでください!! 何と言うか俺のせいって言うか……だからお気になさらずでお願い申し上げます……」

クソ。集中しないとイケないのに乱されてしまう。

でも……俺ってクズだな……本日二回目……そう感じた。

「うん……それじゃあ……ちよつと恥ずかしくなっちゃったから……私は萌黄たちの所に行くね……」

「はい……」

顔が赤い彼女は先頭の二人の方に向かって行った。

……今は集中しよう。するとまた袖が引つ張られる

「十六夜君……ちよつと鼻の下伸ばしてましたね……いや、私がこんなことを言うのもおかしい話なんですけど……ちよつと面白くないです」

「あ、す、すいません……」

「確かに火蓮先輩は可愛いですけど……」

「……すいません」

彼女は少し膨れ顔。リスのようだ……そして手を胸に当てている。

「まあ、良いですけど……今は……ちよつと気持ちの整理したいので私も先輩たちの所に行きますね」

「は、はい」

一瞬だけ、彼女の雰囲気が変わった。そして彼女は俺から離れ前に四人が並ぶ……

俺って好意にはどう答えればいいんだ……今は保留にさせてもらおう……どこまでクズなんだと思うが……何処までもクズなんだよ。でも、前に楽しそうに並ぶ四人を見てこの和を乱すようなことはしたくない……

落ち着け。今考えるべきことはこの後攻めてくる魔族の事だ。

俺は切り替え上空に意識を向けた。

六十八話 メル

異界アルテミス

現代とは違う文化があり発展してきた世界。そこには嘗ては二つの種族、今は一つの種族が暮らしている。

背中に蝶のような羽があるがそれ以外は大きさも見た目も現代人とあまり変わらない妖精族。

妖精族が暮らすアルテミスはスマホと言った電子機器は無いがそれに代わる特殊な技術、資源が存在する。世界観はファンタジー感があり、モンスターやダンジョンもあり、多少の犯罪はあるが世界は間違いなく平和そのものである。

そして、アルテミスにある一つの王国の城の玉座の間。レッドカーペットが敷かれ他にも豪華な家具が置いてあるまさに王様の部屋。玉座には髭を生やしたそこそこの年より。人間なら六十代ほどの見た目。

その玉座の人物の前に一人の妖精の少女が立っていた。緑の髪に茶色の目。見た目は若々しい二十歳前位の控えめな感じのする美女。「遂に、魔族が目覚めてしまった……このままではこの世界が危機にさらされる可能性がある」

「……準備は出来ております。メルフィ様……」

「まだこの世界が危機にさらされると完全に決まったわけではない。結界は常時展開されている。だからこそメル、危険と判断したらいつでも帰って来てくれ。現世界最高の妖精であるお前を失う事だけは避けなければならないことだから……恐らくこの世界に来れないと分かった魔族はもう一つの近い世界に行くだろう……」

「分かっております。出来る範囲で魔族の殲滅、監視、調査をしていきます」

「うむ、頼む……」

「では、失礼します」

王、メルフィは深刻そうな顔で言葉を捻りだす。そしてメルと呼ば

れた妖精の少女は覚悟を決めた趣で玉座の間を後にする。

「ほんま、なんでワイがこんなことをせなあかんねん。というか王に頼まれたら断るとか無理やん。あく怠いわ……ホンマ怠い……まあ、母ちゃんにもしとは言え危機が迫るから行くしかないんやけどな……」

メルが先ほどとは違い怠そうな顔をして呟いた。それは誰にも聞かれず空気の中に溶けて行った。



「で、出来たわ……」

妖精のメルがとある任務を王様から受ける一日前。

魔族である、ミツシエルが呟いた。ミツシエルの前には黒の戦艦……長さは約二十メートル、縦は二メートル。途轍もない大きさだ。魔王の体から作り出した資源を惜しげもなく使い完成させた。

新魔王とも言えるだろう。

ミツシエルは感動した後、疲れたようにへなへたと腰を突く。

「やるじゃねえか!!! 中々のデザイン、嫌いじゃないぜ」

「……嫌いじゃない」

ドーンと骨三郎も黒の戦艦を気に入っただようので早速中に入ろうとする。しかし、そこで骨三郎が立ち止まり二人に呼び掛ける。

「……そうだ、名前を付けなければならぬ……魔王号・サターン……どうだ?」

「却下ね」

「却下だ……普通に戦艦だけでいいだろう」

「そうね、ただの黒の戦艦でいいわ」

「そうか……」

骨しかないスケルトンの表情に変化が付くなんてあり得ないがどこことなく寂しそうだ。

少し、寂しそうな骨三郎、ドーンは黒の戦艦に入っていく。その後を付けるようにミッシェルも中に入る

「おおおおお!!!」
「おおおおお!!!」
「ロマンじゃねえか!!!」

「なかなか……」

「戦争時代とは比べ物にならない程の技術力を持っていた私だけど、資源が無かった。しかし、それを補う魔王様から出来た素材なのだからこうなるのも不思議じゃないわ」

自信満々にミッシェルが告げる。戦艦内は様々な場所がある。縦をする部屋。トレーニングをする部屋。食事をする部屋。そしてミッシェル専用の研究室。娯楽、訓練様々な事が出来る素晴らしい船内。他にもさまざまな部屋があり特殊な作りで魔法袍のように中の大きさが外観では想像できない程大きいものになっている。

「取りあえず、出発するから……この下の地盤をぶち破れるといいんだけど……アンタたちは操縦なんてできないだろうから適当に寛いでなさい」

ミッシェルは一人で操縦室に向かう。多々あるボタン、レバー。キーボードの様な物。本来アルテミスにこういった技能はない。彼一人でここまで作り上げた。まさに大天才と言える。

手慣れた感じでボタンを押していき、レバーを引くと戦艦が動き始める。そして戦艦内で感知を始めた。今自分たちのいるこの魔界を……

最初は下の地盤を食い破るつもりだったが……

「この先もずっと地面だけみたいだし……『ゲート』を使うしかないわね……ええっと、この反応はアルテミスね……へえ、アルテミスの近くにもう一つ世界があるのね……知らなかったわ。まあ、この世界は

追々調べようかしら。情報もないわけだし……」

戦艦内に特殊に作られた魔導兵器^{まどうへいき}。魔族が作り出す兵器である。世界そのものの存在を感知。またそこにワープもできる。とんでもないチートである。

魔王と言う最高素材を使っているという理由もあるが……

『魔導兵器』異次元への転移を可能にする『ゲート』を彼は使おうとする……しかし……

「んん?? アルテミスにワープが出来ないわね……何か阻害するものが何重にも……どうしたもんかしら? ……この阻害……作った奴は中々の天才ね……無理やり破れない事もないけど……単純に魔力が足りないわね……」

魔王と三人が封印されていた場所は全てに拒絶された空間ともいえる場所だった。そこから脱出するというだけでも途轍もない事だが全ては上手くいかない。

そして、ミツシエルはもう一つの世界に目を付ける。

「この世界……なら行けるのよね……どんな感じなのかしら? ……ここで魔力調達をしてアルテミスに……でもこの世界の情報は……不確定ね……でも、ずっとこのままって言うのもね……試しに私が作った“怪人”を送り込んで情報を集めさせようかしら……その住人が負の感情を出せばそれをそのまま魔力に変えられる『魔導兵器』も作ったわけだしね」

こうして、ミツシエルはとある“怪人”を現代に送り込む。因みにだが怪人も『魔導兵器』に含まれ、魔族でそれを作れるのは過去も今もミツシエルだけだ。



と言う感じでそろそろ『魔族』の作り出した怪人。そして関西弁『妖精』メルが現代に現れる頃だろう。

そもそも、『魔族』がなぜアルテミスに直接行かないのか。それは『妖精』であるメルが開発した世界の防護壁ワールド・ボーターと言う魔法器物マジックアイテムを使っているからである。

未来に魔族が復活するのではないかと言う危惧があつたのでメルが開発したのだ。使用する魔力は膨大なためアルテミスにある各国で手を結び使用している。使用魔力が膨大だが世界そのものに壁を張り侵入を阻害する。だからこそ世界に入れず『魔族』は現代に攻める以外の選択肢はない。

妖精が発明したものを『魔法器物』マジックアイテム。魔族が発明した兵器を『魔導兵器』マジックヘイキと言う。

『魔法器物』、『魔導兵器』。言葉の意味はほとんど同じだ。発明したのが妖精か魔族かそれくらいの違いしかない。そして『怪人』も『魔導兵器』に含まれるように『魔装』も『魔法器物』に含まれる。

「良い景色でしょ?」

「まあ、そうだね」

「私はこんな場所があつたなんて知りませんでした」
「中々ね」

四人が並んで景色を眺めながら話している。町が一望できるいい場所なのだがこれから考えると自然と気持ちが悪くなる。

出来るなら彼女達には戦ってほしくない。だが、彼女達でなければ世界は救えない。

モドカシイ。もっとチートが欲しい。転生特典が欲しい。

もし、魔力を得たとしてもそれだけ……それではいつか足手まとい

になる時が来る……

彼女達の後姿を見ながら俺は思う。俺は彼女達が好きだと。それが一人の女としてなのか、キャラクターとしてなのか。

未だにハッキリとはしない。だけど好きであるとは自信を持って言える。

俺は、俺に出来る範囲で、いや、それ以上に頑張る……

彼女達の完璧なサポートをする……

俺は拳を握る。

やってやる。俺が……

俺が……絶対に……

……例えるならばRPGでラスボスにレベル99でスキルマックス、結構あつさり勝てるくらいに……彼女達を育てる。

「君は見ないの?」

黄川萌黄が少し後ろに下がっていた俺の元にいつの間にかきており思考から解放される。大分考え込んでしまったようだ……時刻は二時五十九分……

あと少しだ。彼女を除いた三人は話しながら景色を眺めている。

「ああ、はい。見ます……」

「お腹でも痛いのか? 顔色悪いように見えるけど……」

「いえ、普通です。こういう顔です」

「あ、そ、そう?」

「そうです。心配ご無用です」

「それならいいんだけど……あのさ、変なこと聞くけど……アオイちゃんとは……やっぱなんでもない。それより君も眺めて。良い景色だから……」

「……はい」

彼女……今……いや、止めておこう。今は『魔族』の事だけを……彼女に背中を押される。アウトレットモールが見える。

そして、その上から唐突に大きな黒い輪が現れる。中は真っ黒で見えない。そこから八重歯が二つ口から飛び出た吸血鬼の怪人である。『怪人ドラキュレ』が現れた。

六十九話 掟破り

「何よ、あれ……ここは三次元よ……」

「ブラックホールのようにも見えませんが……」

「良く分からないけど皆で逃げよう!! 絶対危ないよ!!」

「そうだね……少しでも離れた方が良いかも」

全員、驚いている。当り前だ。恐らくアウトレットモール周辺の間は大騒ぎで、そこに『妖精族』のメルが現れ戦闘を始めるだろう……そして、勝てないと判断したメルが……



「ごっつい見た目やな……確か魔王が負の感情を魔力に変えられるって伝承にはあったけど……魔王ではない……一緒に封印された魔族にもあんな感じのはいなかったと思うんやけど……所詮伝承やからか? 嘘が入つとるんか?」

緑の髪に茶色の目で関西弁の妖精であるメルがとあるビルの上から『怪人』を見ていた。

メルに与えられた任務。それは自分たちとは違う世界に行ってしまう魔族の対処などである。

魔族の王である魔王ベルゼビュートは他者の不幸の感情を魔力にするという驚異的な『権能』を所有してた。妖精族は他の世界での魔王の魔力供給を恐れ魔族の対処をメルに任務として課したのだ。自分たちの世界は安全だが他の世界で魔力が集められそれによってワールド・オーダー世界の防護壁が破られることを危惧して……

妖精と魔族。この二つの種族には絶対的な壁がある。そもそも妖精は魔力量が少ない種族。

しかし、魔族は魔力量が妖精の数倍の者が殆どでありさらに、特殊な力である『権能』を持っているものまで居るのだ。その為千年前に妖精族には侵略行為を阻むことが出来なかった。その教訓をもとに

『魔装』と言う技術が生まれた。何かあった時の自衛のために。

『星霊』によつて『魔族』は殆ど駆逐され、魔王と側近の四体も封印されて平和が実現しても来るべき時が来ることが分かっていたのだ。

そして、メルは妖精の中でも絶対的な力を持つ。魔力量はぶつちぎりの世界一。常人の五十倍。そして様々な魔法器物マジックアイテムの開発。メルだけなのは誰も着いて行けず足手まといになつてしまうため、またワールド・ボイダー世界の防護壁の維持の為に魔力を持つものをなるべく外に出さな
いという理由がある。

妖精の王はメルならば全く分からない世界でも十二分に対処してくれると確信していた。

しかし、ここで誤算が複数あることを彼らは知らない。一つは魔王の肉体は既にないという事。二つ魔王の肉体はないが負の感情から魔力を作り出すことが出来る兵器を魔族が開発している事。

三つ、どれだけ頑張つても妖精族では魔族に勝てない事。

「まあ、取りあえずあれをボコればええんかな？」

メルは『魔装』を展開する。手には一本のダガー。緑のリボンが胸元に付けられ、ミニスカートにフリフリのメイド衣装。

彼女は跳躍し、飛翔している吸血鬼のような見た目の怪人に挑む。ダガーで取りあえず様子見。斬りかかると……上から途轍もない衝撃が振りかかる。

数十メートル上から叩き落され勢いよくコンクリート道路に激突する。

「ッ、あぐっ」

頭のいいメルは直ぐに失敗を悟る、最初から全力で行くべきだったと……そして、勝てないという事も分かってしまった。

「こ、れは。勝てへんわ……ワイは一応世界一なんやけど……」

何とか起き上がる。ダメージは追ったがまだ十分動ける。仕方な

いと撤退の準備をする。その時、周りには現代人の姿が見える。

「早く!! 逃げて!!」

「ヤバいぞ!!」

「何だよ!! あれ!!!」

負の感情。これを放って置いたら過剰な魔力の供給が為されてしまふ。どうするべきかと思考を巡らせる。

「クククク、いきなり何かと思つたがタダのザコのようだな」

メルの上から吸血鬼が見下ろしていた。

「この世界の種族は情弱で助かる!! 負の感情で大量の魔力が作り出せるからな!!」

『ウインドシユート』!!!」

魔装を纏っているときだけ使える、『魔装技』。いわゆる必殺技という物である。ドラキユールに風の大玉が当たる……が効果はない。

「今、何かしたか?」

「ホンマ、魔族ってバケモンやな……」

「魔族と言うより怪人と言つた方が正しいがな。それより俺を知っているという事はこの世界の種族ではなさそうだ。と言う事は妖精族か?」

「だったらなんや」

「いや、何、聞いていた通り弱小種族だと思つてな!! この程度では痛くも痒くもないぞ!!」

ドラキユールが腕を振り上げメルに殴りかかる。回避するメルだが愕然とする。ドラキユールの拳は全て自身の十倍以上の力の差があつたからだ。

頭のいいメルは避けながらも現状の打破を思考する。逃げたらいつかこの化け物はアルテミスに来る。

今、この場で倒さなければならぬ。しかし、自分には出来ない。僅か十秒で彼女は答えを導き出す。

「……この辺りにいる魔力が多いこの世界の住人に頼むしかない……」

僅かにだがこの世界を観察したメルはこの世界は平和な世界であり、自分たちの世界と同じと言う事に気づく。そして、超常現象に全く耐性が無く必要以上に混乱していることに。

しかし、違う種族。もしかしたらとんでもない魔力保持者がいるかもしれない。その生物に頼めば或いは……と。

急いで魔力感知を始める。居るかどうかは分からない。しかし、やってみないと意味もない。自分たちの世界も滅びる。

辺りの魔力を感知すると……

とんでもない魔力数値が現れる。自分をも遥かにしのぐ。それも一か所に複数反応。これはついていると急いで移動する。

「これしかないわ……『ウインドシユート』」

煙幕代わりに魔装技を放ちその場を離脱する。

「逃げるか。まあ、いいだろう。俺は暴れて複数の負の感情を引き出すことが仕事だからなあああ!!」

遂に怪人が暴れだす。

それをドラキュレを介して見ていた魔族たちはご満悦だ。この世界なら簡単に魔力を集められるから……

しかし、魔族側にも大きな誤算があった。

一つ、妖精をはるかにしのぐ魔力保持者が居る事。

二つ、その者達が妖精と手を取る事。

三つ、その中に尋常ではない世界を知る者が居る事。



「急いで逃げましょう!! どう考えてもあれは普通ではないです!!」

「そうね……爆発のような音も聞こえるし……」

「一体何が起こってるんだろう……」

「あーし達は逃げることに専念した方が良いでしょう……」

俺達は高台から去り、爆音がするアウトレットモールから少しでも離れる為に必死である。

そろそろ……メルがこちらに気づいて向かっているころだな。本来なら銀堂コハク、火原火蓮、黄川萌黄がアウトレットモールより少し離れたところでバツタリ遭遇。そこから爆音がして一緒に逃げているところにメルが来る。

ここは本来より安全面を意識し距離はあるがこれくらいなら感知してくる。そんな事を考えていると……俺達の前に緑のメイド服のような『魔装』を纏ったものが降り立つ。

「その五人!! ちょっとええか?!

いきなり話しかけてきた。超人的な人物に彼女達はたじろぐ。

「だ、誰よ!?!」

「ワイの名前はメルって言うんや!! 細かい説明は後でする!! だから今暴れている化け物を止める為に力を貸してくれへんか!?!」

彼女は必死と言う趣で俺達に頼む。しかし、コハク達は難色を示す。当然ともいえるだろう。訳の分からん奴にいきなり戦ってくれと言われてもどうしていいかなんてわからないのだから。

「そんなことを言われましても……どうして私達なんですか?」

「あんさんたちが普通以上の魔力を持つてるからや!!」

「魔力ってなんなの?」

「えっと、特別な力って言うかそんな感じや!!」

「化け物ってきつきから爆音出してる奴の事？」

「そうや!!」

銀堂コハク、黄川萌黄、片海アオイの順番に聞いていく。四人共中々戦いに行くことに踏ん切りがつかないようだ。

「俺にはその魔力とやらはあるのか？」

「あるで!! 五人共あり得ない位の魔力保持者や!!」

彼女達は難色を示している……『ストーリー』でもこんな感じだ。何度も頼まれ悲鳴が聞こえ、そこで彼女達が『魔装』を取る。だがそう簡単には掴めない……

だが、今は魔族の作り出した怪人が暴れている……そして、魔力が供給され始めている。

「手を貸してやる」

「!!」

「ホンマか!! おおきに!! だったら予備の『魔装』があるからこれを使ってくれや!!」

彼女から手のひらサイズの魔装を展開する魔装具マジックホルダーを渡される。携帯のような開けるデザイン。

「そしたら開いて中のボタンを押すんや!!」

「ちよ、ちよと待ってください!! 十六夜君!! こんな訳の分からない人の言う事を真に受けるんですか!! 嘘をついているかもしれないですよ!! もっと慎重になってください!!」

「そうよ!! これは現実なの!! そんなの捨てて逃げましょう!!」

「僕ももうちよと考えた方が良くと思うな……この子は可愛いけどちよと怪しいし」

「一回立ち止まるべき」

俺を心配してくれるのはありがたい。しかし、ここで止まるわけにもいかない。さらに、これで俺が安全だと分かれば彼女達も『魔装』を手に取りやすいだろう。

俺はボタンを押した。

その時、魔法陣のような物が展開される。それは俺を包み、そして

眩い光から抜けると俺は黒のゴスロリの服装、胸元に黒のリボン。髪は何故か長髪になった。

「い、十六夜君!? これは……じゅるり……アリです……」

「何でゴスロリなのよ?」

「何故か僕の中に響くものが……」

「アンガイ似合ってるんだけど……」

彼女達の感想が聞こえる。俺はクルリと回り現状を確認。そして力がみなぎるのを感じ取った。

これが魔装か……

「……なるほど……」

「ちよつと、ジャンプしてみるんや」

「ああ……」

言われるがまま足に力を入れ跳躍する。その瞬間、一瞬で景色が切り替わる。大体二十メートルは飛んだな。

これでも余力を残している。まだ飛べる。

物凄い力だ……

「それじゃあ、早速あの化け物を退治に行くで!! 着いてきてくれや」
「分かった」

「わ、私もやります!! 十六夜君一人でそんなところに向かわせられませんか!!」

「十六夜がやるなら私だってやるわよ!!」

「ぼ、僕も……」

「……あーしも」

「助かるで!! 五千人力や!!」

メルが四人に魔装具を配る。そして四人がボタンを押す。

「ニッ!!!」

四人も光に包まれそれぞれが魔装を纏う。まさかこの瞬間に立ち会うことが出来るとは……

銀堂コハクは銀色のドレスとティアラ。そして光の聖剣。ライト・キャリバー

思わず結婚したいと思う程だ。

火原火蓮は赤のセーラー服に近い物に胸元リボン。そして赤のミニスカ。両手には刀が二本。ダブル・インフェル二刀豪炎ミニスカがエロくて膝枕を是非してほしい。

黄川萌黄はゴリゴリの黄色のメイド服。頭飾りも黄色で俺に尽くしてほしい。ご主人様と言われたい。

両手にはグローブ型の鉄拳である、ボルテージナックル雷拳。

片海アオイは巫女のような和服。しかし、ちよつと乱れている感じ。肩は出ているし、少しひらひらしているがあくまで和風な感じ。そして頭には大きな青いリボン。

彼女と一日中、虎拳とか金比羅船々とかして一緒に遊びたい。

片手には湖の短剣。ウンディ・ナイフ

「わ、私のスカート短すぎない？ これ、ぜ、絶対パンツ見えちゃうんだけど……」

「僕、メイド服始めて着た……意外といいかも」

「あーしの服……和風なのか洋風なのか良く分からないんだけど……ちよつと肌出すぎだし」

「私は結構いいですね。ウエディングドレスの感じも少しします」

「ホンマありがとうな!! 試運転も兼ねて全員ジャンプして見てくれないや」

彼女達は恐る恐るジャンプをする。

「「「っ!!」」」

全員がジャンプをすると風が吹きあがり俺の長髪がかなり揺れる。二十メートルほどジャンプした彼女達は降りてくると驚いたような顔つき。

「ナニコレ!?!」

「ヤバいです……」

「僕夢見てないよね……」

「素でヤバイ……」

信じられないようだがこれが事実。彼女達のポテンシャルなのだ。「あんさんたちの魔力なら適当に戦っても勝てるはずや。ワイについできてくれや」

メルがいきなり跳躍する。俺達について行くために跳躍をするのだが思ったより飛んでしまったり、前に行ったり、かなりバラバラ。しかし、明らかにメルより遠い距離を一瞬で移動できた。

「これ、難しいんだけど!!」

「思ったより飛んでしまいますね」

「あれ？ 僕そっちに行くつもりだったのに」

「力入れ過ぎた」

「……」

「ホンマ、とんでもないわ……」

驚いているメルに俺は少し離れたところから話しかける。

「俺は少し、別行動をする。四人を頼んだ」

「え!?! ちょ、いきなり過ぎんか!?!」

俺はある作戦を実行するために彼女達と離れた。



怪人であるドラキュレが町で暴れている。道路には穴が開き、信号機を破壊。徹底的な破壊活動である。

「グハハハ!!! ひれ伏せこの世界の種族!!!」

暴れている怪人。そこに少女たちの声が響く。

「そこまでよ!!」

火原火蓮が声を上げ怪人の前に五人の少女が立つ。

「ワイはサポートするで。あんさんたちと一緒に戦うのは多分無理や」

メルは少し後ろに下がる。ドラキュレは四人を見据える。

「誰だ？ お前たちは?」

突然だがこの世界、『魔装少女〜シークレットファイブ〜』には怪人

と戦う前に名乗りのシーンがある。

「純白の魔装少女……シークレットシルバー!!!」

「紅蓮の魔装少女……シークレットレッド!!!」

ゆえにこのようにドンドン名乗って行く。初回から……いつの間
にと思うが何故か出来るのだ。しつかりとポーディングまでする。

打ち合わせとかはしていない。ご都合主義、またはお約束と言える
ものだ。そしてこの名乗りシーン。敵は絶対に手を出さない。稀に
出す敵も居るが基本的には手を出さない。お約束という物だ。

そう、お約束。絶対時間。しかし、それは登場人物達のみに適用さ
れる。

今現在、敵の動きは完全に停止している。そこを最初から狙う男が
一人。お約束を利用し敵の背後に回り込む。

黒き魔装を纏った十六夜が剣を首に刺し……ぶった切った……

血のような物が溢れる。血の雨だ。いきなり速攻で彼は魔族の作
り上げた怪人ドラキュレを倒したのだ。首と体が真っ二つ。

これには彼なりの理由がある。一つは彼女達は魔装に慣れていな
いのもっとしつかりとこれから修行し安全マージンを確保してか
らの方が良いという考え。

そして、この戦いは初回なので結構あっさり勝つのだが多少『魔装
少女』もダメージを負う。それを知っていて彼が動かないわけには行
かないという理由。

最速であり最善の掟破り。敵でありながら同情するとネットでは
炎上するだろう。彼もそれは分かっている。

だが、彼は止まらない。これまでも、そしてこれからも……
奇想天外の行動はこれからも続いて行く。

——此処に敵にも味方にも世間にもヤバイやつ認定される魔装少
女（男）が誕生した。

不意に彼はつぶやいた。後にネットでパワーワードとして未来永
劫語り継がれることになる言葉を……

「永遠に眠れ……」

七十話 説明

今から千年前。アルテミスには魔族により妖精界への侵略があった。力が無い妖精は抵抗ができなかった。そこへ星霊が現れ魔族を蹂躪し一部を封印した。それが目覚めこの現代に攻め込んでいるという説明を簡単にメルが俺の部屋のリビングで彼女達にしている。

四人共信じられないという顔つきだ。

「……そんなことがあり得るのでしょうか？ ですが十六夜君も……以前猫に……なっていましたし」

「え？ どゆこと？」

「えつと……前に彼が猫になった時があつたんだよ……ああつ、思い出してきちゃった……」

「もう、止めなさい……その話は」

「猫になるなんてあり得る？」

「ああ、うん、あり得るんだよ……これが……」

「へえ……そう……なんだ……」

猫事件の事があり全員に信憑性が増す。しかし、まだどこか現実として受け入れきれしていない部分もありそう。仕方がないといえばその通りだ。

今までそう言った経験など無かつたのだから、『ストーリー』の時もそうだったな。その時は三人だが中々受け入れがたい感じだった。

「まあ、そういうわけなんや。だからこそあんさんたちには協力してもらいたいんや。ワイの世界の為。この世界の為にも……改めて頼む。力を貸してくれ」

メルが頭を下げる。俺を含めた彼女達に協力をしてもらうのが一番最善だという事は既に分かつたのだろう。

魔力量は銀堂コハクが二千倍、それ以外の四人は千倍。彼女が住む

世界の最大魔力値を大幅に超えているのだから。

「俺に出来る事があればやります」

「十六夜君がするなら私も」

「私もやるわ」

「僕も」

「……あーしもやるよ」

「ホンマ!? おおきに!」

メルはひとまず一安心と言った感じだ。『ストーリー』では銀堂コハクはトラウマがあり渋々やってやるという感じだった。火原火蓮も黄川萌黄も仕方ない、取りあえずお試してみたいなと言う心境で魔族との戦いがスタートする。それに比べたら反応は大分いい。

ここまででは計画通りと言ったところか……彼女達に『魔装少女』になることを決心させる。だが、この程度では不十分だ。

しかし、こういう事を直ぐにでも受け入れるとは彼女達は凄いな。

「一つ聞いて良いですか?」

「なんや?」

「魔装……今現在では使用になれていないのでトレーニングをしたいんですけど」

「それなら、ワイが作つとくで」

「あと、俺の魔装のデザインを多種多様にしてください。この世界においての男性の一般服なども欲しいです。出来ます?」

「できるで。魔装のデザインはワイの好みで適当に作つとるからな。

あ、そう言えばあんさんは男やったな。女装は嫌な感じだったか?」

「いや、別にいいです。あれはあれでいいですから。ありとあらゆるパターンを想定したいので」

「分かったで!!」

よし、後は魔族はこの地域に攻めてくることが多く、完璧な団体行動をする事が大事。のであれば『ストーリー』よりもっと多方面に進

まなくてはならない。

彼女達との“絆”と“波長”、ここが大事。そして……五人目は……まだだな……こればかりは焦っても仕方ない。

俺がそんな事を考えていると銀堂コハクが手を挙げた。

「あのく、魔装を纏つてから……何だか体が変な感じがするのですが……これは何なんでしょう？」

「あ、僕も」

「私も」

「あーしも」

無論俺もである。まあ、俺はこの現象は知っている。

『魔力開放』だ。

「ああー、それはあれやな、『魔力開放』や」

『魔力開放』ですか？」

「せや、あんさんだけじゃなく全員そうやろうけど。魔装は人の中にある魔力を無理やり引き出すという作用もあるんや」

「へえー……それって大丈夫なんですか？」

「まあ、基本的には大丈夫やな……例外もあるんやけどそれはまれな話やし、気にせんでいいと思うで」

「そうですか」

魔力とは普通の現代人では決して使えない。何らかの手段で引き出すことが必要である。魔装で無理やりと言うのも一つだがマジックメディア魔法薬マジックメディアと言う薬のような物を一錠飲むという手段もある。

魔力と精神は密接な関係があるとされており精神状態で大きく変わる。誰かを守りたいとか強い思いがあるとより力が出る。

俺があっさりドラキュールを倒せたのは強い思いがあったものもある。裏技的な物を使ったという事もあるが。

そして、未だに魔力には解明できていない現象を起こしうる力があるらしい。

ここが物凄く重要なんだがまあ、一度置いておこう。メルも魔力に対する大体の説明を終えたようだしな。

「つまり、強い意志とかがあるとより力を出せるって事でいいのかし

らう？ ラノベとかでよくある設定ね」

「ラノベ？ まあ、大体あつとるで」

さて、俺が一旦席を外すとするか……

「少し、風にあたつてきますね……」

「十六夜君、でしたら私も」

「コハク、十六夜を一人で行かせてあげなさい」

「え？ どうして……」

「いいから。偶には一人でゆつくりしたいんでしよう？」

「はい……すみません。失礼します」

俺は部屋を出て風に当たりに行く。外に出ると夕焼けが俺を照らしていた。

俺は一息つく。

「やっちゃまった……クツ、もう一人の俺が、じゃなかった。黒歴史が急に蘇るとは……口からぽろつと……まあ、独り言みたいな物だし誰にも聞かれてないよね？ ふうー、そう考えると良かった」

俺は先ほどの永遠フオーエバーを振り返る。不幸中の幸いで黒歴史を彼女達に晒す事は無かったと俺は一安心をする。

夏休みから始まる魔族との戦闘。俺がすべきは最善ルートの走り。遂に魔装を得た彼女達+俺の英雄譚が幕を開ける。



「十六夜君、なにやら思いつめた顔をしていたような……」

「察してあげなさい……多分、傷口を洗いに行ったのよ」

「どういうことですか？」

「そりゃ、傷口に塩を塗ったんだから痛みを引かせるために水で洗うように一回落ち着きたいって意味よ」

「……お二人は分かりますか？」

「……僕は分かってるよ」

「あーしも」

「???どういうことですか?」

「……厨二的な行動がついつい出ちゃったから恥ずかしくて死にたいって事。アンタも察してあげなさい。十六夜は厨二と現実の間で揺れてるんだから」

「成程……死にたくなるほどの恥ずかしい言動をしたから一人で自分を見つめなおしたいって事なんですね。でも、私はカッコよかったと思います!! 十六夜君を今から褒めちぎりたいです!!」

「コハクちゃん、それしたら傷口にデスソースを塗る行為だよ。僕たちのすべきことはあの言動については触れない事が求められるんだよ」

「……分かりました」

彼女達は十六夜の厨二的な行動を見て見ぬふりをすることに決めた。そこで、アオイがある話を切り出す。

「アイツ……あの化け物倒すのめっちゃ早かったね……五秒もかからなかった……まあ、アイツなら納得するところもあるんだけど」

「さすいぎなんですからあれくらい当たり前です」

「そうよ、さすいぎなんだから」

「アハハ、まあ彼なら結構納得するところもあるかも……」

「あんさんたちのアイツの印象ってなんなんや?」

その数分後、十六夜が戻ってくる。彼女達は十六夜の厨二的な行動については全く触れなかった。



◆◆
一方魔族組は……

「なんなのよお。あの女? ……私の作った怪人があんなあつさり

……」

「なかなかの動き……アサシン……なのか? 興味ありだ……」

「これはしばらく様子見だな……」

「まったく情報が分からなかった……でもあそこの種族は怪人に対して大分恐怖してたから魔力は多少集まったけど……怪人を作るにも魔力はかかるし……だからと言ってこれ以外に方法は無いし……はあ、魔力の無駄遣いをしてる気分ね」

黒の戦艦に乗っているミッシェルは今後に頭を悩ませる。ゴールのドーン、悪魔博士のミッシェルは十六夜をヤバい奴認定していた。



「これからあの化け物と戦うんだよね？ あーしもこつちに住んだ方がいいのかな？ 色々これから修行？ みたいなのもやるんでしょ？」

「確かにそうですね……うーん、どうしましょう。私のマンションで良ければ……」

「僕のアパートでもいいよ」

「私の家は流石に居づらいだろうし……両親居るから」

「えっと、いきなり今日会って同居は……」

「いいですよ。今日から運命共同体のような物ですし」

「うんうん、それに僕はルームメイトが欲しかったし丁度いいんだ」

片海アオイの住まいが決まりそうだ。俺の家と言う手も考えたが流石にそれはダメだよな。彼女の両親も心配するだろうし……しかしやることは全てやらないと。

「……俺の家でどうですか？」

「え？ 流石に迷惑じゃない？」

「俺は良いですよ……」

かなり言いづらいが切りだす……普通はこんな事言えないが……。

「……後、三人もご一緒にどうですか？ メルさんもいいですよ」

「!!」

「ええんか？ それなら頼むわ」

片海アオイは表情を変えない。メルはあつさり承諾だが三人は少し戸惑っているようだ。

「ええっと、わ、私はいいいんですけど……いきなり一緒に住めよだなんて……」

「そんなワイルドには……」

「私もいいけど……パパとママが何ていうか……変な勘違いしそう……」

「僕もいきなり住むのは……」

「片海先輩はどうしますか？ 俺は全然問題ないです」

「……迷惑じゃない？」

「いえ、全然」

「……なら……両親に相談してからだけど……お願いしようかな」

「「ええええ!!」」

「何？」

「何？ じゃないですよ!! 男と女と一緒に住むってそれは何とかもつと繊細に決めないと！ 間違いがあつたらどうするんですか!!?」

「間違い？」

「そうよ！ この年の青年は欲が大分高いのよ！ いつ狼になるかなんて分からないんだから!!」

「狼？」

「……アオイちゃんあんまり意味が分かってないようだけど……若い男女が一緒になるのは不味いつてのは分かる？」

「どゆこと？ なんで一緒に住むのが不味いの？」

片海アオイは全くという程性的知識が無い。三人はすっかり知っているみたいだけど。しかし、片海アオイが住むなら他の三人も住みやすいだろう。

俺の計画では彼女達の同居が目的なのだ。安全面、絆の育みややすさ。全てを考慮すると全員同居が一番いい。

「アオイちゃんって……あんまりそういう事分かんないんだね……コ

ハクちゃん後の説明はお願いね？ 先輩命令だよ？」

「そうね。コハク、教えてあげて」

「な、何で私が!？」

「アオイちゃんにこういう事は不味いつて教えてあげないと」

「そうよ、先輩命令よ」

「……なんて理不尽な……えっと、何と言えればいいんでしょう……」

「……」

銀堂コハクが片海アオイに性的知識を照れながら伝授するというのは『ストーリー』にもあったな。

「こ、ここでは十六夜君も居るので……廊下に行きましょう……お二人もついてきてください」

「分かった……」

四人でリビングから出て行く。するとメルと二人きりになったわけだが彼女にも話がある。

「いやいや、モテモテやな。ヒューヒューやで」

「それは一旦おいておいて」

「なんや、こっからがおもしろいのに」

「確か、メルさんはアルテミスから来たんですよね？」

「まあ、そうやで」

「……俺達をアルテミスに連れて行くことって出来ますか？」



コハクちゃんに僕たちはついてきた。流石にちよつと可哀そうだけれど僕も流石に言いたくないし、でもアオイちゃんにも無知のままっでの問題あるし……と言う事で先輩の権力を使うことにしたのだ。

「えっと、こういった知識は普通なら誰もが持っているのですが……」

アオイ先輩は子供の作り方って知ってますか？」

「……詳しく知らない」

「うう、そうですか……」

「でも、大人のキスって聞いたことある」

「えっと、直接的な表現は避けて説明しますね……私もこういった表現は初めてなので……えっと、えっと……こ、こういう事です」

コハクちゃんは顔を真っ赤にして右に人差し指、左手で輪を作り……右の人差し指を左手の輪に入れた……

「??」

「で、ですからこういう事ですって!!」

「??」

「何で分からないんですか!? 貴方は中学の保健体育の時間に何をしていたんですか!?!」

コハクちゃんが恥ずかしさで大声を上げる。うん、見てるこっちも恥ずかしい。火蓮ちゃんも恥ずかしそうに顔を伏せている。アオイちゃんは全く分からないように真顔で眉を顰める。

「ああ、もう!! 今度、教科書で説明しますからこれで終わりです!! いいですよね!? これ以上は無理です!!」

「分かった」

コハクちゃんが恥ずかしさ全開で首を縦に振った。確かにここで止めておこう……こんなピュアな子がいるなんて……。

その後、何だかんだで彼の家に全員で住むことになる。

まあ、一人で住むのは寂しいものがあるしちよつと魅力的ではあるけど……まさかこの同居生活がとんでもなく過酷になるとはこの時の僕は想像もしなかった。

七十一話 新生

その日、説明により大分時間が遅くなってしまったので俺は彼女達を泊めることにした。まあ、気軽に泊めるのもどうかと思うんだが同居するわけだし……いいかな？ いや、本当は良くないだろうな……
と言うわけで彼女達が無事魔装を得ると言うプロセスは突破した。現在俺はメルに家の中を紹介しつつ今後の要求をする。

「それでここら辺にトレーニンングルームを作つて欲しいです。研究室とかはご自由に何処でも使つてください」

「おお。ありがたいで、こう見えてワイは一応研究者やからな。そういうんがないとキツイところや」

「そうですね。それでアルテミスに連れて行つて貰えるんですか？」

「あー、それなんやけど……ちよつとまだ答えが出てないみたいなんや……すまん、流石にいきなり魔力量が千倍の者を複数と言うわけにもいかないんや……こつちから協力を持ち出しておいてホンマに申し訳ない」

「いえ、それは想定内ですから大丈夫です」

本当はアルテミスに今すぐにも行きたいがあちらの世界が拒むというのは想定内。今現在で出来る事を随時やつて行く。本来の『ストーリー』でも彼女達は向こうの世界に行くがそれはこちらでの様々な戦闘を経て信用をされてから。それをいきなりにはいかないだろう。

「すまん、魔装ならすぐにも用意できるんやけど……ところで、なんであんなに種類が必要なんや？ 子供用の服まで用意するんやろ？」

「魔族が一般市民を今後襲う事は想定内。そこで一般の服を着て紛れ込み、わざと逃げ遅れることで不意打ちをすることが出来る。さらにそれをあらゆるバリエーションですること、魔族に一般市民への手出しを抑止させることが出来るということですよ」

「ああ、なるほど。本当に逃げ遅れた人間が居た時に手出ししづらい状況を作るといふ事やな？」

「そうです」

それだけが理由ではないが大体そんな感じだ。一般市民が人質に取られると色々めんどくさい。万が一現場に間に合わなかったことも想定する。

「いや、でも子供服はどうするんや？ 着れへんやろ体格てきに」

「そこは幼児化する薬でも作ってください」

「出来へん事もないけど……それはちよつと時間かかるで？」

「そうですか……出来るだけ早くお願いします」

「分かったで」

彼女は優秀な研究者であつちの世界にはこちらにはないファンタジーが溢れている。『ストーリー』でも『魔装少女』の幼女化はあつたので薬は作れるだろう。

「じゃあ、早速作業するからあんさんは部屋でゆっくり……」

「いえ、手伝います。何でもいいですから」

「あー、じゃあ魔力貰ってええか？ その装置に注いでくれや」

「はい」

彼女の近くにある機械に魔力を注ぐ。時間を無駄にしない為に俺はしっかりと今後について考えを巡らせた。



「できたわ、二体目の怪人……」

「おお、そうなのか。前回は全く情報が分からなかったからな。今回こそ相手の情報が欲しいな」

「わかってるわ。今回は速さに特化した怪人。魚雷人よ」

黒の戦艦内、ミッシェルが新たな怪人を作り上げお披露目をする。半魚人のような体つきだが全身からバチバチと放電している凶悪そうな怪人だ。

「イエーイ！ ビュンビュン！！ 俺さまはスタート出来たら一番速いぜ！！ ビュンビュン」

魚雷人は戦艦内を雷速で走り回る。それには魔族たちも驚きを隠せない。

「おお、中々じゃねえか」

「……俺程ではないが」

「まあ、今の所は情報集めだからね」

「情報集めじゃ終わらないぜー!! うっかり倒しちゃうかもな!!」

「ビュンビュン!! 俺はスタートしたら一番速い!!」

戦艦内を特急列車のように走り回る。

「ま、取りあえずあつちの世界に向かってくれる?」

「直ぐに向かうぜ。俺はスタートしたら一番速いからな!!」

怪人が現代に到着するのは明日の午後……一体どのような戦いになるのかそれは誰にも分からない。



彼とメルちゃんが何やら話をしている中、僕たちは泊めてもらうので夕食を作るといふ話になった。

「アオイちゃんは料理できるの?」

「ぼちぼちのぼちくらい出来る」

「そっか、じゃあ四人で作ろう。何が良いかな?」

晩御飯のメニューを決めるといふのはかなり大変な物だ。僕は自炊だから凄く分かる。

「……から揚げが良いんじゃない……深い意味ないけど」

「いいですね。十六夜君も好物ですし!!」

「そうね。から揚げにしましょう」

アオイちゃんがから揚げを提案することで今晚はから揚げに決定。アオイちゃんはから揚げが好きなのかな?

これからは皆で同居と言う事になるけど……こんなことになるなんて僕は全く想像できなかった。異世界の話。侵略者の存在。どれも荒唐無稽だが現実に起きてしまったので信じるしかない。

僕だけじゃない、世間一般でもかなり困惑の声が上がっている。

SNSのトレンドは『化け物』、『魔法少女現る』関連の事が二位からずらっと書かれている。一位は『永遠に眠れ』らしい。

ニユースは何度も化け物による破壊活動について報道している。そんな凶悪な化け物と戦うわけだけど……彼が居ると思うとちよつと安心する。だって、僕も怖いけれどやれるだけのことをやるつもりだし、同時に彼一人で十分ではないかと思うからだ。

改めて彼は普通じゃないと思う。良い意味で。

「それじゃあ、から揚げを作りましょう」

「そだね……」

「あ、その前に私はパパとママに連絡しないと……」

まあ、色々考え過ぎず彼女達との料理を今は楽しもう。



夕食を食べた後、僕たちはお風呂に入り、そして借りた部屋で四人で並んで寝ることになった。彼はメルちゃんと色々やることがあるからまだ寝ないらしい。

布団の上で全員で向かい合い話し始める。

「アオイちゃんもしよかったら女子力向上委員会入ってよ」

「何それ？」

「女子力を向上させる目的の集まりだよ！ お買い物したり会話のレパートリーを増やしたり楽しいんだ!!」

「……いいの？」

「いいよ！ それじゃあ、寝る前に早速やってみよう！ このボードにお題の答えを書いて」

「大喜利なの？」

「そう言うときもあるだけだよ！」

アオイちゃんにボードを渡して僕はお題を伝える。コハクちゃんと火蓮ちゃんは準備万端だ。

「それじゃあ、この写真で一言」

スマホのアプリでランダムに写真を表示する。トラックの写真が

映ると真つ先に火蓮ちゃんが手を上げる。

「異世界転移装置」

「?? 良く分からないけど……可愛いから百点」

「え？ 基準甘くない？ しかも良く分からないって言ってるんじゃない？」

「良いんだよ。可愛いは正義だから」

「あ、基準が崩壊してる感じね……」

アオイちゃんはまだこの委員会に慣れていないようだ。考えるより慣れた方がいいよね？

「彼氏に別の女のおいが……そんなときどうする？」

「はい」

「コハクちゃん」

「監禁……ではなくしつかりと向き合って今後について話し合います」

彼女のボードは上の方が黒くグジャグジャと書かれて一部見えな
いが、綺麗な字で今後についてしつかり話すと書いてある。

「後半は偉い、前半ちよつと怖いけど……まあ、九十点かな。可愛いし
……ちよつと怖いけど……」

「いやいやいや、ダメでしょ。監禁とか言ってるし、向き合うって全部
吐きだすまで暇無理やりこじ開けて聞く狂気と言う意味でしょ。つ
て言うかなんであーしがツツコミ役なの？ あと判定基準が甘すぎ」
「ナイスツツコミー！」

「そんなサムズアップされても……」

僕の見立てた通りアオイちゃんはかなり面白い。新たな可愛い
女の子で輪が広がった感じがする。

◆◆ 新生女子力向上委員会の初回はかなり盛り上がった。

七十二話 スタート

彼女達を泊めた日の夜、俺は新たに作られた訓練室で魔装を展開して訓練を開始していた。魔力によって作られた特殊な部屋であり広さは通常より何十倍もある。家の一角に扉を付けそこをくぐると此処に来ることが出来る。

「いきなり飛ばし過ぎるのは良くないで」

「いえ、大丈夫です……」

「そうか……ならワイも頑張らなあかな……」

彼女は訓練室を出て行く。きつと研究室に向かったのだろう。

「感触をしっかりと掴んでおきたい……これからの為にもな」

彼女達への負担を少しでも軽減するために俺は頑張らないといけない。特に彼女達は高校生、学業に支障を出させない。だからこそこつそりと訓練をしなくてはいけないのだ。深夜に訓練をしてるとすれば優しい彼女達は気を遣って止めるか、一緒にやると言い出すだろう。それはいけない。負担がかかるし何より、お肌に悪い。彼女達の絹のような肌を荒れさせるなんてことがあれば……それは全裸で土下座物だ。

さて、何となくジャンプやら剣を振っているのだが今使っているのは黒い刀だ。

そして黒色のローブを纏っている。他にも要求した数種類の魔装が出来上がっている。

優秀な彼女が一晩もかからず仕上げてくれた。

魔装にはそれぞれ『魔装技』と言う必殺技のような物があり直接的な攻撃力を持つものからサポート的な幻惑まで様々だ。

そして、一つの魔装で出せる『魔装技』は三つまでであるため使い分けも重要だ。

今夜は眠れるか分からない。その日俺はひたすらに訓練をした。



次の日、俺は自身のベットから起きる。しかし、眠気が取れない……顔には出さない様に下の階に降りていく。

後、二週間は夏休み。『ストーリー』では夏休み中のイベントは残り二つ。一つは魚雷人の襲来、そして学校の七不思議探索である。

「おはようございます十六夜君。ご飯できてますよ」

あれ？ まさかの髪型三つ編みスタイルですか？ 可愛いじゃないか。服装は我が母の普段着でただのTシャツ。だが銀堂コハクは朝から素晴らしい。

「おはようございます。すみません朝から」

「いえ、これくらいは……あの、どうですか？ この感じは……」

彼女は僅かに三つ編みに触れた。色気が凄い。

全く……朝から眠気を覚ましてくれるとは……全く……最高じゃないか……朝から彼女を拝めるとは。ここは紳士的かつ大人の雰囲気であらうじゃないか

「と、とても似合ってますね。しゅ、しゅばらしです」

「あ、ありがとうございます」

つい噛んでしまった……朝だからな。口の動きが芳しくなかった。決してドキドキして緊張したわけではない。

食卓には卵焼きとみそ汁、白米、漬物。いかにもと言った健康食だ。

「……頂きます」

全員で食べ始める。まさかこんな朝ごはんを食べられる日が来るとはと内心感動している俺のだが片海アオイが全員に話しかける。「あのさ、あーしは両親と面と向かって話さないといけないから一旦今日帰るね」

「あれ？ アオイちゃん許可貰ったって言ってなかった？」

「そうなんだけど一回話したいんだって」

「まあ、両親からしたら心配よね……いきなり同居って言われても……私は秒でオツケーが出て今日にでも荷物が届くんだけど……」

「それはそれでちよつとどうかと思うけど……まあ、あーしは一旦帰

るから……」

「寂しくなるね……アオイちゃんが帰っちゃうなんて」

「いや、直ぐに帰ってくるから」

引越しか家庭事情とかいろいろあるだろうし。こういうのは仕方ない。

「十六夜君、私はお母様もお父様も了承をくれたので……今日にでも引越し業者の人に頼もうと思っっているのですが……大丈夫ですか？」

「はい」

「僕も……今日引越し業者に頼もうかな。大丈夫？」

「勿論です」

「えつと、十六夜……私はもう頼んじゃったんだけど……大丈夫？」

「ダイジョブです」

「多分だけど一週間ぐらいで荷物が届くと思うけどあーしは大丈夫？」

「何の問題も無いです」

傍から見たらラノベ主人公かよと思えるな。美女と同居とか……まあ、力を一か所に集めさらに絆を育むためにはこれが最善だ。

朝ごはんを食べ終える。この後は特にこれといった予定はないため訓練をしたい。勿論彼女達にも多少してもらいたい所ではある。

『ストーリー』でも訓練はするがそこまでするわけじゃない。勿論彼女達に大幅な負担をかけるつもりはないがある程度を毎日積み重ねることはしなければならぬ。

「この後、食休みしたら一回訓練室行きませんか？ 魔装の慣れとか大事ですし」

「そうね……ステータスアップは基本だもんね」

「あーしは午後帰るからそれまでなら」
と言うわけで食休み……メルと彼女達はソファに座り俺はダイニングの方の椅子に座る。流石にあの中に入るのはちよつと緊張する。

それにしても……俺の知ってるあの感じ……彼女達とメルが並ん

でいる……感慨深いものがあるな。ソファアに座るメルと彼女達を眺めてそんな心境になっているとニユースに俺が映っていた。『敵か味方か。女か男か。変態か紳士か。謎の黒戦士現る!!』

痛い、どうやら永遠フォーエバーがトレンド一位らしいが……勘弁してくれ。テレビに映る俺はあっさりと怪人ドラキュレを倒す。

今後も魔族は様子見だがドンドン怪人を送り込んでくるだろう。そして今日の午後にも……無論、速攻で倒すがな……。

その後三十分ほど食休みをして訓練室に向かう。『それじゃあ、魔装を展開してくれや。色々レクチャーするで』

彼女達は魔装を展開する。こんなことを考えるなんてどうかしているんだが可愛い。火原火蓮のセーラー服って足がもろ見え……ミニスカなので……ついチラ見してしまう。後、片海アオイの和服って肩が出てるからつい見ってしまう……

「……十六夜……見すぎよ……恥ずかしいからちよつと控えて。後アオイの肩も、萌黄の足とコハクの胸もね」

「あ、すいません」

皆ちよつと顔が赤い……そしてすべてバレていた俺も恥ずかしい。こんなことで出鼻を挫いてしまうなんて気を入れなおさないといけない。

「それじゃあ、先ずは軽くジャンプの反復練習からいこうや」

全員で軽くジャンプを始める。皆、中々コツを掴めないが俺だけはスムーズにジャンプ、そこからの空中で一回転。等々器用に出来る。

「十六夜君、凄いですね……」

「いえいえ、これくらい」

「流石ね……」

「ちよつと出来過ぎじゃない？ 隠れて訓練でもしてたんじゃないの？ 凄い事には変わらないけど」

「やるじゃん」

ちよつとだけのドヤ顔。まあ昨日訓練してたしな。いや、今日もか。

「うーん、やっぱりまだまだだな。魔力量が凄くてもまだ扱いきれない感じがするで。先ず魔力を感じ取って体中で練り上げ強化したい所に纏う……これを全身にしたり一部にしたり使えるようになるにあんさんたちは絶対ムテキやで」

「む、難しいですね……」

「そう簡単にはいかないのが普通やで。これは感覚と言うかイメージが重要やし、更なる魔力を引き出すには強い感情も必要。まあ、魔力の扱いは一朝一夕では出来ないのが普通なんやけど……」

「だったらなんで十六夜はあんなに魔力操作が上手いのよ」

「何と言うかオーラが鮮明で落ち着いてるね。彼」

「引き出してる魔力量も段違い……」

「さ、さあ？　なんであそこまで出来るんかワイにも分からんわ……いくら何でも一晩でここまでなるもんか？　あり得んやろ……」

どうやら俺の魔力操作は凄いやうだ。察してはいたのだがな。しかし、皆からの怪しみの視線が……ここは惚けておくか……。

「え？　俺って凄いですか？　全く気づきませんでした」

「滅茶苦茶気づいとるやん。何やそのムカつく言い方……」

「十六夜が……俺なんかやつちやいました？　みたいなこと言ってる……」

「惚けるの下手すぎじゃない？」

「十六夜君は嘘が苦手ですから」

「二秒でわかる嘘」

どうやら上手く誤魔化せたようだな……。

さて、俺が何故ここまで魔力の引き出しと魔力操作が出来るのかというと、一つは想いが強いという事。俺は彼女達を守りたい、その為にはどんなことでもする覚悟がある。異常なほど強い想いが異常な

ほど多い魔力を引き出している。

そして二つ、何故操作ができるのか……それは嘗てヒーローに憧れていた時代に遡る必要がある。

嘗ての俺は勝手に筋肉に力を入れて魔力がここに集まっている!! とか高台に登り多大な風を感じて風を纏うとか、風を魔力に変換して吸収しているとか、座禅を組みイメージで勝手に魔力を透明感のある清らかなオーラとして想像したりしていた。

それぞれの経験がこの世界の魔力操作にピッタリとハマったのだ。イメージでしていた魔力と言う概念。魔力を感じるようになっても嘗て感じた風のように纏い、力を入れ操作し、吸収、そして一切揺らぎのない清らかな精神統一。それが俺の魔力操作を完璧にした。

「十六夜君、何かコツのようなものがあるなら教えてもらいたいのですが……」

「え?」

「そうね。教えなさい」

「うん、コツの一人占めはダメだよ」

「あーしにもお願い」

……どうしたものか……『ストーリー』では戦う内に何となくで経験が積み重なっていくのだが……この特殊なコツを話して魔力操作が出来るようになるなら……。

「えつと風を纏うというか」

「どういうことですか?」

「えつと、こう……吹き荒れる風を全身で受け止め……それを腕とか全身に貼ってバリアにする感じと言うか……他にも座禅を組んで精神統一とかすると良いイメージができるかもしれない……。イメージをしてそこから感覚をつかむというのが一番だと思います……。筋肉に力を入れてそれで魔力が集まっていると仮定してみる

とか……じ、自分に合った方法を試すのがいいかと」

「成程、イメージから……十六夜君は凄いですね……どうしたらそんな方法が思いつくんですか？」

「……えっと。その……」

「コハク、十六夜をそれ以上痛めつけないで……十六夜、ありがとう。試してみるわ」

「あ、えっと、こ、個人的だけど凄くためになる良い話だったよ……ね？ アオイちゃん？」

「そだね……」

生暖かい視線で見られた……。



訓練の後、昼食を済ませて片海アオイを送る為に駅へ向かう。バス停で彼女が帰るバスを待つ。

他愛ない話をしているとバスが来る。

「それじゃあ、またね」

「ううっ、すぐ戻ってきてね」

「泣かなくても……まああんがと」

「アオイ先輩、寂しくなりますね……」

「いや、だから直ぐに戻ってくるから……あんがと……」

「一日しか一緒に居なかったけど結構アオイの事好きよ……またね……」

「あのさ、直ぐに戻ってくるって言ったよね？　そこまで溜めて言う必要ないって……あんがと、またね」

「寂しかったらワイにいつでも電話してええんやで」

「もう突っ込まない……でもあんがと」

此処は俺も何か気の利いた感動的なセリフを言うべきだろうか……みんな結構いい感じの事言ってるし。

「片海先輩。別れは寂しいですけど人は巡り合うものですから離れても心は……」

「からかってるでしょ？ 怒るよ？」

「あ、すいません」

「……またね」

あれ？ 俺だけあんがとが無かった。ちょっと寂しい……。

彼女はバスに乗って帰って行った……そして時刻は大体一時……次なる怪人が出るのは昨日同様アウトレットモールの頭上に三時。皆で帰るといふ話だったのだが俺だけ離脱する。

「あ、ちよつと買いたいものあったんだ」

「え？ それでしたら一緒に」

「いえいえ、皆さんはお先に帰っててください。これ家の鍵です。それでは！」

俺はその場から離脱しアウトレットモールの方に向かう。序盤は俺だけで十分だ。彼女達は魔装に慣れるまで戦う必要はない。

危険からは避けて欲しい。



「十六夜君。何か隠してる感じがしますが……」

コハクちゃんは話してる途中で一旦思いつめたように押し黙った。私達三人はどうしたのかとコハクちゃんを見る。

「それより……十六夜君から……合鍵を託されてしまいました……こ、これは一種のプロポーズでしょうか!?!」

「違うわよ」

「違うで」

「違うと思うな」

「いえ、きつと十六夜君からの遠回りのメッセージなんです。結婚してほしいという!!」

「違うわよ」

「違うで」

「違うと思うな」

この後、コハクちゃんを宥めるのに三十分はかかった。



アウトレットモールの頭上に大きな穴が開く。暗く大きな穴。現代人たちは例の化け物だとそこから逃げ始める。その近くにいる者たちも急いで離れる。

そして、その大穴から半魚人のような体つきでバチバチと電気を帯電している化け物が……。

「きゃーー！」

「ば、化け物だ!!」

「逃げろおおお」

悲鳴、悲鳴。そして大穴から飛び出した魚雷人。

「イエーイ!! 俺は速いぜ!! 逃げても意味ないぜ!!」

悲鳴のある方向に向かい人間の負の感情を引き出そうとするが一人だけ逃げ遅れた男の姿が見える。服は一般的で前髪が伸びて目が見えない。ギャルゲーの主人公のような奴。

「ひいひい。助けてくれ!!」

「おお!? 逃げ遅れか!? もっと悲鳴を聞かせろ! 俺の放電で感電

死させるぞ!!」

「うわあああああ!もう、駄目だあ……お終いだ……」

「クハははは!! それでいい、ギャハガギャ!!」

唐突に男の手から刀が顕現し魚雷人を突き刺す。懐から緑の血があふれ出す。

「き、貴様……何者……」

その言葉の瞬間、男の周りに魔法陣のような物が展開しローブを被っていた。怪しげな男、一体何者なのか。

「フツ、他愛もない」

刀を引き抜くと今度は黒色の極球体を男が作り出す。懐に刀を刺され多大なダメージを追った魚雷人は動けない。

あの黒い球体を受けたら自分は死ぬ。魚雷人は死を覚悟した。そして苦し紛れに呟く。

「ク、そ。スタートさえしたら俺が一番速い……はず……なのに……」

それは死を覚悟しても速さの主張。相手への精一杯の威嚇でもあった。それを聞いたローブ男は……呟く。

「スタート出来たら……なんて考えてる時点でお前は俺より遅い」

魚雷人は黒の極球体に飲まれた。そして跡形もなく粉々になる

……。

ジャッジメント

「成敗完了……」

七十三話 七不思議探検隊

『学校の七不思議って本当にあるのかな?』

『それを確かめに来てるんでしょ』

『私はないと思うな』

とある女子高生の3人組が話しながら暗い校舎の中を歩いていた。日は墜ち何処か不気味さを感じさせる校舎を……。

『六つ周ったけど何も起きなかったし。デマなんだよ。七不思議なんて……』

『そうだね、なーんかガツカリ』

二人の女子生徒が期待外れと言わんばかりに気ままに話していると一人の女子高生が足を止めた。

『ねえ、何か聞こえない?』

『え?』

『音楽室から……』

『……聞こえるかも……』

『確かに……』

先ほどまでの雰囲気が一変し途端に重苦しいものに変わる。聞こえるのだ……曲を演奏するピアノの音が。

『これヤバくない?』

『……逃げよ』

『……そうしよう』

そう言った瞬間、曲が鳴りやむ。音楽室は彼女達の居る階の上にある。音楽室のドアが……開く音が聞こえた……。

その瞬間、三人は走り出す。全速力で。

『やばいやばいやバイヤバイ』

『七不思議ってマジなの!』

『早く逃げないと!!』

程なくして彼女達は学校から出ることが出来た。誰一人欠けることなく……。



「って事があつたんだって」

「本当ですか？　いまいち信憑性に欠けますね。しかし、そういった事も全面的には否定できないのが現状ではありますが……」

「……」

火蓮ちゃんとコハクちゃんが食卓にお皿を並べながら話している。聞こえない、訓練室での訓練を終え夕食の時間が近づいている。因みにだが彼はまだやるやしい。今はまだ夏休みと言う事もあつて訓練はかなり入念にしていた。

彼は無理をしなくていいと言つたがそういう彼が無理をするのだ。そうなるも僕を含めた二人も頑張りたくなつてしまう。特に最近彼が二度も怪人を討伐している。これに僕たちはあまり良い印象を抱かなかつた。一人で戦う状況だったのは確かだがそうだとしても彼一人に負担をかけまいと頑張りたいと思つている。

確かに彼は強いけど彼一人で背負う必要などは無い。

この家に住まわせてもらうにあつて家事は分担することになつた。彼は料理は出来ないらしいので僕たちがやることになる。

「皆ノ色高校には七不思議があるって聞いたことはあつたけど……」

「ネットで書き込みがあつたんですよね？　幽霊を見たつて」

「そうよ、ほらここに書いてある。多分だけどこれ私と同じクラスの子ね」

火蓮ちゃんがコハクちゃんにスマホの画面を見せてつけているのが横目で確認できるのだが……二人が何やら話しているがよく聞こえないんだよなあ……。

今日、三人とも荷物が届き魔力によって作られた部屋に荷物を置くことになった。しかし、魔力という物は本当に凄い。いやメルちゃんが凄いんだろうけど……。

「ねえ、萌黄はどう思う？」

それにしても今日の夕食は肉じやががあ。美味しそうだなあ。僕

が気合を入れて作った甲斐があるという物だ。

「萌黄先輩、手で耳を塞がないで私達の話聞いて下さい」

「おーい萌黄ー」

肉じゃがの白滝を眺めていた僕。そこに二人が耳に当てていた僕の手を抑えて降ろす。

「ヒい、な、なに？」

「ですから七不思議についてどう思いますか？」

「嗚呼、そういう事ね……ぶっちゃけ言うとかくだらない感じだよね。高校生にもなつて七不思議とか、子供過ぎて草生える感じだよね」

いや、本当にくだらなくて草w。草に草を生やすなと言う位おかしな話だ。高校生は大人へ向かう途中なのにそんなオカルト話に現を抜かすなんて、ああ、くだらない。

「キャラ変わった感じするわね……もしかして、萌黄……怖いのか？」

「ちよつと何言ってるか分からないんだけど？ いや怖いとかあり得ないし、くだらないから草なだけだし」

「そうですか？ 無理して見栄を張らなくてもいいんですよ？」

「見栄張ってないです。どうぞお話を続けください」

全く……僕が怖い？ いや、あり得ないわー。二人の雑な考えには困ったものだよ。うん。

「そう。なら続けるけど……」

火蓮ちゃんが話を続けようとする……リビングの扉が開きメルちゃんがやってくる。

「お腹すいたで……幼児化の薬なんてそう簡単には出来へんわー。考え過ぎてお腹ペコペコのペこやわ」

ナイスタイミング！ いや、別に喜ばしいことではないがつい思ってしまった。メルちゃんは疲れたようで背伸びをすると食卓に並べられている肉じゃがとかを眺める。

「いやー、美味そうやなー」

「そうよ。特にこの漬物は私が野菜を切つてジップロックに詰めて、調味料を入れて揉むという四工程をパーフェクトにこなしたから美

味しいに決まってるわ」

「因みにこのサバの味噌煮は私が作りました。肉じゃがは萌黄先輩が」

「へえ、皆料理上手いんやな。ええお嫁さんになるで……アイツの胃袋もガツチリゲットやな」

「そ、そんな、黒田コハクになるなんて……」

「いや、そこまでは言うてへんで……」

火蓮ちゃんは自信満々に胸を張り、コハクちゃんは両手を顔に当て照れている。いやーこれだよ。僕が求めていた会話という物は。いや、ほんと七不思議とかつまらないよね？ 時代遅れだよな？

そんな空気からこの場を開放したメルちゃんは素晴らしい。メルちゃんだけは僕の味方だよ。

「それで七不思議って何の話や？」

おいメル、貴様もか？ 貴様も僕の敵なのか？

「ああ、それはですね……かくかくしかじか」

「しかしかかくかく」

「へえー、興味深いわー。この世界にはそんなのがあってワイの好奇心がウズウズするで。その七不思議のある学校まで案内してくれや。是非とも調査したい!!」

メルちゃんはやる気満々と言う気迫が溢れる。確かメルちゃんはアルテミスでは研究者……気合が溢れてしまったのかもしれない……。

「夜しかでえへんのやろ？ なら今日の夜早速行こうやないか!! エエやろ!? なあ、エエやろ!? 面白そうやし、皆で行ったら普通に楽しそうやし!!」

「え、あ、うん。私は良いけど……十六夜がなあ」

「私も良いですけど……ただ、十六夜君がこういうのは苦手と言っていたので……」

物凄い形相でメルちゃんに迫られる二人だが彼が原因でイマイチ踏み切れないらしい。それとメルちゃんの押しが強い為若干引いている。

「ええー!?? それはないわ! まあ、萌黄もええやろ?」

「あ、いや、僕は……」

二人が煮え切らない返事の為僕に同意を求めてくる……困るよ……彼女は僕に詰め寄ると上目遣いだ。瞳もウルウル状態。

「なあ、ええやろ? ワイ、行きたいんや……皆と一緒に」

か、可愛い……こんな美人な子に言われたら……断れるわけない。それに僕に上目遣いは効果は抜群だ。

「行くうか……」

「やったあ!」

思わず、がつくり肩を落とす。メルちゃんが喜んでるからいいけど……その後、少しして彼がリビングにやってきた……。



今日の訓練は中々ハードであり、収穫も大きい物だった。先ずは魔法人形オートマタを使った実戦形式の訓練。『ストーリー』でも使われたものなのだが本来より高性能になっている。

理由は俺の魔力をかなり使っているからだ。彼女達のパーフェクトな育成の為にはやはり対人戦闘は欠かせない。しかし、実戦はあまりに危険である。と言うことでこの魔法人形である。

人型で武器も自由自在。実戦に限りなく近い。これをやっていけば危険を冒さずに彼女達は確実にレベルアップができる。『ストーリー』の彼女達よりだいぶやる気があるようで毎日訓練をすると言い出した。

今のうちにやれることはやっておかないと。彼女達が楽できるように少しでも辛い目に遭わない様に。

いつか、俺では追いつけない程に彼女達とは差ができる。

そんな事を考えながらリビングに向かうとこの時点ですでにいい匂いが漂ってくる。夕食に期待しながらリビングに入ると何やらメルが騒いでいた……。

そして、黄川萌黄ががつくり肩を落としていた。これは……もしかして、七不思議イベントか？ 彼女達の最初のコメディであり若干のホラー回だ。俺もニヤニヤしながら読んでいたのを覚えている。特に怖がる黄川萌黄が可愛すぎる神回。

「なあなあ、この後皆で七不思議を調べに学校に行くんや！ 行くやろ!?! 行くやろ!?!」

メルがピョンピョン跳ねて喜んでいる。彼女は研究者だから探求心があるのだが、こういった誰かと一緒に行くとか遊ぶとか大好きなんだよな……。

だけど、黄川萌黄が幽霊的な物が苦手だから今回は止めた方がいいのかもしれない。俺が苦手だからとか言って。

「俺、そう言った事が苦手なので止めときませんか？」

そう言った瞬間。ぱあつと顔が明るくなる黄川萌黄。しかし、メルが顔を暗くする。

「ええ……行こうや……」

「ぼ、僕が行くから元気出して!!」

黄川萌黄が自分から行くことを推奨する。彼女は俺と同じで女の子の泣き顔に弱い。そして、彼女は幽霊が怖い事とか絶対に言わず見栄を張る。

『ストーリー』ではまず火原火蓮が話をする。銀堂コハクの家に住み着いたメルに魚雷人を倒した後、魔族の事とかを詳しく聞いているときにいきなり七不思議の話が始まりメルが興味を持ち仕方なく全員で行くという流れだ。現在の流れは『ストーリー』とは若干違う部分もあるんだろうけど大体こんな感じだろう。

どうしたものか……このイベントは若干のオカルト要素が入っているが、怪我を負うとかそういうのはない。しかし黄川萌黄は怖がる。一方でメルは行きたくて仕方ない。それに彼女は既に行くと言ってしまった。何だかんだ覚悟も決まっている顔つき……俺が行かないと言っても黄川萌黄はメルの為に行くだろう。

ここは、彼女の威厳を保つために全く怖い要素がない七不思議探検にするか……。

——それにこういつた展開になることはある程度想定していたのでオカルト要素は既に取り除いている。その為ただ暗い校舎を皆で歩くというだけになる。

このイベント……七不思議と言っているが一つしか不思議要素無し。皆ノ色高校三階の音楽室にある肖像画の中から人が出て動き出すのだ。そしてピアノを弾く。さらに追いかけてくる!!

——なので、昨日の朝に肖像画を盗み既に焼却炉に入れてある。

『魔装少女』の『ファンブック』に、あの肖像画の中から出てくるのは幽霊ですが肖像画さえ焼けば魂が消滅がしますと書いてあったからな。さらにあの肖像画はいつから皆ノ色高校にあるか不明と言う設定らしい。

だから、まあ燃やしてもいいだろう……本当はダメだろうけど……。

「俺も行きます」

「ええんか!?!」

「十六夜君無理しないでください!」

「そうよ! 怖いのに無理はダメ!」

二人が気を遣っているが大丈夫だ。

「大丈夫ですよ。五人も居れば幽霊なんて怖くないですから」

こうしてホラー要素を排除した七不思議探検が始まった。

七十四話 side?

不気味が漂う夜の校舎。そんな場所に行くとなるとどうしても恐怖心が湧いてしまうだろう。夏と言う事もあり生暖かい風が吹きそれが余計に恐怖を演出する。そんな中で肝試しをやろうとすれば……。

恐怖に身を包まれる……はずだった……。

とある五人組が校舎の中に入って行く。アニソンをそこそこの音量で流しながら……。

「やっぱり、『魔術学院の出来損ない』のオープニング『 트레이ションナル・サンクチュアリ』はいいわねえ」

「そうですね。特に最初の落ち着いた感じから一気に開放感溢れる感じが」

「そうなのよ！　そしてオープニングの鳴りやむところで主要キャラ集合！　つてのが凄くいいわー！」

「火原先輩はその最後にでてる主要キャラ全部言えます？」

「当たり前じゃない！　テル君でしょ、マリちゃんでしょ……」

五人の内のアジフライのような男と赤い髪の美女が話している。どうやらアニメのオープニングの挿絵の話らしい。赤髪の美女はスラスタとキャラの名前を言って行く。

「もう、二人しか分からない事ばかりで話さないでください！　面白くないじゃないですか！」

「まあまあ、落ち着いて……よかったあこの感じなら全然怖くない……」

銀色の美女が頬を膨らませて二人に注意をする。それを黄色の美女が止める、どうやら彼女からしたらこの雰囲気は都合のよい物らしい。

「なんや……この緊張感のかけらもない夜の探検は……」

その様子を見て緑髪の美女が呟いた。彼女の言う通り明らかに肝試しの雰囲気ではない。

そんな中、彼女達は校舎内を進んでいく。



フフフフ、夜にアニソンを流し校内で肝試しをする奴は世界を探しても俺くらいだろうな。おかげで全く怖くない……黄川萌黄もさぞかし気分は軽やかだろう。

「最初の七不思議は二階女子トイレの二番目の個室に『花子さんいらっしやいますか』と聞くと答えるものですね」

「そうね……あ、こんどは『魔術学院の出来損ない』の二クール目のオープニングね！」

二人が話しているときに一期のクール目の『トラディショナル・サンクチュアリ』が終了して次なる曲が流れる。そして、僅かな最初の音楽で火原火蓮が反応する。

「その通りです。『トラディショナル・サイン』ですね」

「二期のクール目は『トラディショナル・パーフェクト』で私的には『トラディショナル・パーフェクト』が一番が良くなつて思ってるんだけど……ああ、やっぱり二期の二クールの『トラディショナル・エレガント』が一番かも」

「だからあー！ 二人で話さないでください！ 面白くないじゃないですか！」

「その作品はトラディショナルに何か強い思い入れでもあるの？」

銀堂コハクが面白くなさそうに俺と火原火蓮の間に壁を作り、黄川萌黄はトラディショナルにツツコミをかます。しかし、彼女が怖くなさそうで良かった。これで威厳も保たれるだろう。

この最初のイベント……ここまで彼女達は話さなかった。

『なぜ、私がおんなことに付き合わなくてはならないんですか？』

『私も溜めてたアニメ見たいなか来たんだから文句言わないでくれな
こっ。』

『まあまあ、二人とも落ち着いて……ヒい、窓が揺れた！』

銀堂コハクは人と接することがあんまり好きではない時期。火原

火蓮は仕方なく来てやった感じを出し、黄川萌黄はただ怖がっていた。

まだまだ、絆とかそんなものはない時だったから全く和を感じなかったが……今は何処か感じる事が出来る。『絆』は彼女達にとって最重要。本来より仲が良い感じが凄く嬉しい。

「皆で話せることを話しましょう」

「何よ」

「そうですね……一年Aクラスであつた様々な事を話しましょう」

「それ、十六夜とコハクしか話せないじゃない。面白くない」

「と言うか……二人で話すことが目的だね……」

「もつと、緊張感もとうや」

彼女達＋メル……本来より良い関係になつているのは明白だ。もしかしたら、かなりあつさり世界は救えるのかもしれない……。

そんなことを考えながら俺はアニソンの流れる夜の校舎を歩く。

言わずもがな特にオカルトは起こることはなく黄川萌黄はご機嫌のまま帰宅していくことになる。



「なんや、面白いこと何にも起こらなくてつまらんわ」

「いやあ、本当に残念だね！ いや、もう、本当に、残念だなあ！」

「何か、嬉しそやないか？」

「いや！ まさか！ そんなこと！ ないよ！」

「絶好調やないか」

メルはガツカリした様子でそれを励ます黄川萌黄。しかし、全く励ますつもりが無いようにも思えるほど彼女は嬉しそうだ。

「十六夜君。一回アニソンを止めてください！ それが流れてると火蓮先輩と十六夜君の二人空間が破れないんです！」

「止めるんじゃないわよ！ 決して止めるんじゃないわよ！ 十六夜！ 今度はあの定番のアニソンを頼むわ！」

二人で互いに取り組み合いをする二人。そして美女に囲まれているのにアニソンを流すアジフライ。中々カオスな展開だな……。

これで夏休みは終わり。そして二学期が始まり物語も動き出して

いく。

さあ、俺たちの戦いはこれからだ。



何処かの部屋、そこでとある女性が原稿用紙に万年筆で文字を書いている。何枚も紙を積み重ねている。恐らく彼女は小説家だろうが書いている彼女の顔は全く楽しそうではなく苦汁をなめるような顔つきだ……。

そこで部屋をノックする音が聞こえる。女性は筆を止め客に部屋にはいるように促す。

『どうぞ』

『先生、出来ましたか？』

『もう少し……ですかね……しかし、書いていて面白くない物ですね……』

『本当に申し訳ございません。しかし、我が社の稼ぎ頭は今、先生しかないのです。『ifの第二巻』はもう凄い売れ行きで……全盛期以上と言いますが……』

『そうですか……』

女性は自身の本が売れているというのに全く売れそうな外見ではない。部屋に入ってきたのは恐らく彼女の腰の低い担当者だろう。

『この『if』は四巻までしか書くつもりはありません……。貴方の頼みだからこの仕事を受けましたが……。やはり、辛いというか……。あなたには感謝しています。メジャー作品になる前から支えてもらって……。しかし、これ以上は……。』

『……大変申し上げにくいのですが……。上からの命令で……。『魔装を得る前のバッドエンド』が現状売れているのだから『魔装を得た後のバッドエンド』の方も売り出したいと……。それをお願いしてこいと言われまして』

『そんなことを言われても……。』

『お願いします！ 今我が社は風が吹き始めている！ どうか、新たに『バッドエンド作品』を書いてください！ 私の首も……。かかっているんです！』

男は土下座をした。女性は目を落としたため息を吐く……。

『……分かりました……。』彼女達が魔装を得た後にバッドエンド』……。考えるだけ……。考えてみます……。ただ、直ぐには了承できません……。あと、『五人目』の

『銀堂クロコ』だけは描こうにも少し無理があるので、出すとしてもこちららも『四巻』しか出せないという事を覚えておいてください』

『ありがとうございます！』

男は頭を地面に打った。彼女は完全な返事を洩ったがほぼ了承したような物だった。それに男は感謝を示したのだろう。

『それでは失礼します』

その後男は作業部屋から出て行き女は一人になった。そして、彼女は一人呟いた。

『すまないね……。こんなことを考えて描く私は……。君たちの親失格だ……。』

彼女はそう言うのと部屋の方向に目を向けた。そこには銀と赤と黄と青と黒の少女のポスターが……。

『しかし、あの人は私の恩人なんだ……あの人の土下座の頼みは断れない……』

そして、再び彼女は万年筆を持ち、原稿用紙に文字を描き始める。辛そうにしながらも彼女は書いていった。

彼女の猫背の背中は悲壮だ……。

そこで、プツツリ映像が切れる……。

「何じゃ……今の夢は……」

とある占い師は大量の汗をかいてその夢から目覚めた……。

魔装降臨編 〈完〉

パラレル時空ラブコメ編 銀ノ章1

ご注意点。このお話は本編には関係ない別時空のお話です。

もしも、二人が同じ学校に居たらと言うお話です。

銀堂コハクが中学二年生で黒田十六夜が一つ上の年上で先輩である中学三年生と言う設定です。

今後の事にちよつと悩んでいるので息抜きも兼ねて投稿します。細かい所には気を遣っていないのでそこら辺はご了承ください。

ある日、俺は目覚めてしまった……前世の記憶がよみがえりこの世界が『魔装少女〜シークレットファイブ〜』の世界と言う事を認識したのだ。

『ifストーリー』の時を考え俺は歩き出さないといけない。世界滅亡なんて嫌すぎる。

中学三年の現在特に力もなく、体も弱い。バッドエンド回避の為にトレーニングを開始して更に勉強もしなくてはならない。ようやく走り出そうとした時……自身の通っている中学で……彼女を見つけてしまった……この世界の主人公である……銀堂コハクを……。

この時期の彼女はまだ幼さも残っているが色気と美しさを兼ね添えておりまさに絶世の美女である。バッドエンド回避の為、多少は仲良くなろうと気楽な感じに思っていたのだが彼女の学年は中学二年生。

つまり……彼女はいじめにあっってしまった……。

問、目の前で美少女がいじめにあっってしまったら君ならどうする？

回答、なんとしても助ける。



私はいじめられている……無駄な正義感を振るって友達を助けたばっかりに……いや、もう友達ですらない。

彼女の為に手を伸ばしたのに……彼女は私に手を伸ばさなかった。毎日、毎日、机に落書きをされ男子達からは性的な目を向けられ続ける……。

「ねえ、お金貸してよ。援交で稼いでるんでしょ」

「そうそう、軽く一万でいいからさ」

放課後に路地裏に呼び出され数人の女子に囲まれる。してもいいことをしていると言われ金をたかられる毎日。

「も、つてない、です」

恐怖で上手く声が出せない。寒くないのに凍える世界に一人ぼっちの感覚を覚える。

私を持つていないというと奴らは私を壁に押し付け顔の近くをドンと勢いよく叩く。驚きと恐怖で瞳から涙が零れる。

私になにをした？ なにもしてない。正しいと思った事を正しいと言っただけ……。

理不尽だ。最悪だ。何も信じられない……。

「嘘つくなって、この間四十代のおじさんとホテルに入ってくところ見たよ」

「あ、私も」

「うーわ、きも」

「だから……金寄せせよ」

鞆を取られ奴らは財布を取り出すと中の資金を確認する。そして、お札だけ抜き取るとポイッと地面に捨てて靴で何度も踏んだ。

「やっぱり持ってんじゃない。ヤリマン」

「おじさまからの指名ナンバーワンだもんね」

「ガチでキモい」

私が手を差し伸べた彼女も奴らと混じって笑いあう……もう、嫌だ……。

誰でもいいから……助けて……そう……思った時だった……。

誰かが……歩いてくる。この中学の制服を着た男子生徒……どこかで見た覚えがあるかもしれないが誰からは分からない。

彼の顔は怒り……静かな怒りの表情をしていた。

「だれ？ この学校にあんなモブみたいな奴いた？」

「知らない、って言うかモブ過ぎてウケル」

「何か用？」

三者三様に奴らは反応する。そしてその中の一人が彼に用を聞いた。

「いや、流石にやり過ぎだと思ってな……今すぐその子に土下座しろ、そうしたら殺すことはしない……」

彼の言葉には嘘は混じっていないかった。しかし、奴らはそのように感じてはいないようでケラケラと笑いあう。

「いや、殺すって厨二かよ」

「うけるわ」

「殺せるわけないじゃん。犯罪だよ？」

彼はそう言われると黙って近くの木に寄る。そして木の枝に手を伸ばす。よく見るとそこにはカメラが置いてあった。彼はそれを取ると奴らに見せる。

「社会的に殺すって意味だから殺せるけど」

それを聞いた彼女達はようやく焦りを覚え始める。さらに彼は木の枝から小型の録音機、そして奴らの足元を急に掘り出した。

全員が何をやってるんだと思うとビニールに包まれた録音機。さらに……ドンドン掘り出していき最終的には十数台もの録音機やらカメラ、撮影機やらを次々と取りだす。

「で？ どうする？ これを学校とか教育委員会に送るか？ いじめは犯罪だから裁判にすらできるけど」

「……いや、マジでそれは……来年受験とかあるし……」

「それともネットに晒すか？ 俺は刺し違えてでも殺すぞ、社会的に……」

「か、勘弁してよ……ちよつと遊んでただけだから……」

「じゃあ、土下座しろ。そして二度とこのような事が無いように努めろ」

彼女達は未だにプライドが邪魔してるのか中々できない。そこで彼は指を地面に向けて

「どおおおお、げええええつええええ、ざああああしいいいいろおおお!!!」

何処かのドラマでこんな感じの人が居たような気もしなくはないが……彼は大声で言い放った。

彼の表情に恐れをなしたのか彼女達は手を地面について頭を下げた。

「すみませんでした……と言え、そして、しつっつっつっつかりと頭を地面に付けろ」

彼は再び彼女達に命令する、しとかの間の伸ばしが凄い。

「すみませんでした」

「すみませんでした」

次々と彼女達は土下座と謝罪をしていく。虐めていた奴らが……こんなことが起こるなんて。

「どうします？ 銀堂さんが殺せというなら殺してもいいんだが……こういった奴らは弱みを握り続けた方が愉悦が味わえるから敢えて告発しない方が良と思います。個人的にですけど」

彼は私に話しかけてきた……なんていえばいいんだろう……。

「あ、じゃ、じゃあ、それでお願います……」

「だそうだ。分かったら二度とこんなことをするな。そして今すぐ消えろ」

彼は今度は奴らに向かつてそう言った。言われた奴らは急いで逃げていく。

「えつと……遅れてすいません……もつと早く対処出来れば良かったんですけど……あ、この録音機あげます。えつと、後は……」

彼は再び木の方に行き枝からビデオカメラを持ってくる。まだ……あつたんだ……。

「これもあげます。土下座のビデオが入ってるからスッキリしたいとき見てください」

「えつと……こんなに高価な物頂けません……」

「あ、大丈夫これ全部ネットの応募で当たったものですら、実質タダです。ハイどうぞ」

彼は私に録音機をビデオカメラを渡す。その後、踏みつけられた財布と奴らが私からとった札束を逃げる時にばらまいたのでそれも拾った。

「くだらないことするな……ちよつと汚れが取れないから……」

彼は懐から消毒液とハンカチを取り出す。ハンカチに消毒液をつけると磨き始めた。

「よーし、出来たー！」

彼は私に磨き終わった財布を差し出してくれた。私はおどおどしながらもそれを受け取る。

「どうも……」

「あー、えつと……人生は山あり谷ありだし……きつと良いことも起こると思います。あとはその、何て言えばいいか分からないですけど……誰かを助けようとする貴方はカッコよかったと思います」

嬉しさと高揚感でどうにかかなりそうだった。涙が止まらない。

彼にありがとうと言いたいが上手く事が出ない。

彼は照れ臭そうに言う。今度は私の鞆を拾い……それも消毒液とハンカチで磨き始めた。そしてそれに私に渡したカメラやら財布やらを入れて一つにまとめる。

「他に何かあったら言ってください、何時でも虐める奴は殺します」

「は、はい……あの、貴方の名前は」

「三年の黒田十六夜です」

「よ、よろしくお願いいたします。い、十六夜先輩」

そうか、年上か……十六夜先輩……か、カツコいいかも……。

その日、私の恋が始まった……。



あの日から十六夜先輩は私を気にかけてくれるようになった。男たちが変な噂をしているといきなり生卵を投げつけ激怒した。例え女子が変な噂をしても女子でもそんなことは関係なく激怒し中指を立てる。

次第に私の校内の噂は薄くなり、そして無くなり……十六夜先輩がヤバいという噂で持ちきりになった。

彼はこのことも見越してわざと派手な行動をしたんだろう、そうに違いない。本当に優しくしてカツコよくて素敵な人。いきなり私の前に現れた王子様……気付けば私は十六夜先輩の事ばかりを考え一緒に帰宅するなんてこともあった。彼はあまりそういうのに乗り気ではなく止めとこうと言う。

自分が校内で浮いているから自分に関わるとまた私に矛先が向くかもしれない。だからこそ一緒に居たくない……そういう事なのだ。本当に優しい。

だからこそ好きなんだ。先輩が。

「十六夜先輩は……どんな女性が好きなんですか？」

「優しい人とか、しっかりとした人ですかね」

「へ、へえー、わ、私は小さいころからおばあちゃんに優しいってたくさん言われました！」

「え？ あ、そう、なんですか……」

「あ、後、燃えるごみと燃えないゴミはしっかり分別します！」

「そうなんですか……」

鈍感なのか、そうでないのか。恐らく後者だ。先輩は付き合うとかそういう対象で私を見ていない。こんなにアピールをしているのに……。

もつと、大胆に……。

「因みに、と、年下とかは……好きですか？」

「え？ あ、いや、うん嫌いじゃないです……」

「じゃ、じゃあ、あの、ここに……優しくして、しっかりして、年下の……優良物件が……ありますけど……ど、どうしますか？」

「あ、えっと………何処にあるんですか、その家？」

惚けた……私のほぼ告白ともいえる……物を……惚けやがった。鈍感な振りしやがった……。

「むう、もういいです！ 先輩の意地悪！」

「……」

頬を膨らませて私はそっぽを向いた。先輩はどうしたらいいのか分からずアタフタしている。いつもそうだ。分かっているくせに鈍感な振りして……。

だけど……そんな毎日が楽しい……。

彼と出会って一か月、二か月と時間が経つにつれてドンドン好きになつた。

そして、先輩が中学を卒業する日が訪れる。



卒業式を終えた人たちはみんな写真を撮ったりしているが先輩は一人。大分浮いてしまったからだ。私のせいで……でも先輩は一切私が悪いとは言わなかった。

「先輩、卒業おめでとうございます」

「ありがとうございます」

「あの、この後……私の家で卒業パーティーを……二人きりで……ど

うですか？」

女子が男を家に誘うなんて普通はしない。さらに二人きりと言う単語、これで好きと言う事をアピールしているのだが効果なし。

「あ、そうですね……でもおうちの人に悪いからやめときませんか？……」

そう、先輩は断る。二人きりの状況とかそういうのを……こんな超絶美女である最高な後輩が誘っているのに。

「最後まで躲すんですね……まあ、分かっただけ……」

そうだ、私先輩に言っただけだ。

「先輩、私引越しをするんです。この学校は何だか居づらいですし……先輩が卒業するなら居る意味もないので」

「そう……やっぱりか……」

「やっぱり？」

「あ、いや噛んだだけです……」

この人は鈍感な振りをする上に秘密もあるから物凄く質が悪い。気になって仕方がない。ずるい、本当にずるい……。

でも、このままで別れたくない。想いを告げたい。先輩と同じ皆ノ色高校に行くつもりだけどそれまで会えない。だから……ここで……想いを告げずに別れるなんて嫌だ。

「先輩、私と付き合ってください。勿論、お買い物とかではなく、男女として特別な関係になるという意味です」

「ッ！ ええ!? あ、ここで!? えっと、その……」

「……嫌ですか？」

私は逃げ道を完全に封じた。今まで直接的な言葉を避けてきたおかげで逃げ道があったが今はない。そして、ちよつとあざといが悲しみをアピール。これで優しい先輩は断れない。

つまり、実質オーケー以外の選択はない！

「嫌では……無いんですけど……」

「えーんえーん、先輩が付き合うって言うてくれないよお」

「泣かないで、えっと……」

先輩はお困りのようだ。どうやら、ようやくちゃんと私を意識したらしい。

しょうがないな。このカツコよくて、優しくて私の大好きな先輩は……。

「嘘ですよ、今はまだですけど……」

「え、あそう、そうですか……」

「コハクを意識しちゃいましたか？」

「えつと……うん……」

じゃあ、それでいいかな？

そう思ったところで私はやはり我慢ができなかった。

「やっぱり先輩が好きだから付き合ってください」

「ええ!!？」

アタフタしてる先輩が可愛い。

どうしよう、どうしようと考えている先輩に私は一歩近づいて……

殆ど密着する距離に……。

そこで私は少し背伸びをして唇をあわせた。

「ふあhうい f w ふえ w f w」

もう、茹でだこのようになる私達。先輩は変な声を上げる。

「私のファーストキスです。先輩……」

その日、押しに押しした私は先輩と特別な関係になった。

完全に本編とは関係ありません。最初は銀堂コハクを後輩ポジにしようとしていたというのはありますが……

本編開始はもうちよつと待つてください。どうするか思考中なので……

あと、このコハクちゃんはまだ中学時代ですので多少の幼さが残っています。

銀ノ章2

俺は、まさかのこの世界の主人公を彼女にしてしまった……

物語も始まっていないと言うのに……卒業式の日にあそこまで押し切られるとは思ってもみなかった。

彼女が何となくであるが好意を向けてくれていることには気づいていた。しかし、どう接していいか分からなくて難聴なふりをしたり、鈍感なふりをしたりして躲していた。

しかし、彼女は俺が難聴、鈍感なふりをしている事にも気付いていたようで……女の勘は凄まじい、いや、主人公の勘か……それとも俺の演技力が無かっただけか……

現在は高校に入学し、自宅で独り暮らし。火原火蓮と黄川萌黄と同じクラスだったので接点を持ち、更には海原町に行って片海アオイと少しだけだが交流を持ってバッドエンドを回避するために今から動き始めている。

この世界は『ストーリー』か『ifストーリー』なのかは知らないが今から動いて損はない。

これからの事を考えているとインターホンが鳴る。

彼女が来た……

ソファアールから立ち上がり玄関に向かいドアを開ける。そこには……銀色の女神が居た。彼女の周りだけ異次元と思えるような絶対的なオーラが出ている。

「来ちゃいました」

「いらっしやい……」

彼女は少し照れ臭そうに笑う。かなり大きめの荷物を持って彼女は家に入り、一緒にリビングに向かう。

ダッフルコートを脱ぐとタートルニット、下はサテンスカート。今

は冬だからな。冬服尚は当然だが……これは凄い。

おいおい……中学生……だよな……色気が凄く過ぎて変に意識してしまう。

さらに、髪型もマツシユショートのような物になっていた……彼女は『ストーリー』ではずつと長髪で腰位まで長いのが特徴で完結まで髪型は変わることは無いんだけど。これは『原作ブレイク』って奴なのか？

「すみません。急に。冬休みなので折角だから中々会えない先輩に会いたくて」

「い、いや、謝ることないですよ」

「えへへ、そう言ってもらえると嬉しいです。ところでどうですか？

今日の私」

「あ、うん、そうですね。良いと思います」

外は寒かったようで頬と鼻が少し赤い。そして、俺が褒めると更に頬は赤くなり顔がにやける。こちらもその可愛さと尊さにニヤニヤしてしまいそうになるが何とかこらえることに成功する。

「ココアでも飲みますか？」

「いいんですか？」

「どうぞ、どうぞ」

「では頂きます」

彼女をコタツの方に誘導して座らせココアを準備する。何というか本当に色気が凄い。もう、大人と遜色ないくらいの風貌とスタイル。この二つは目に毒である。つつい視線が下に向きそうになる。そして声のトーンと話し方。声は可愛らしくそれでいて鮮明で鼓膜にもよく響き、話し方も鼻につくことは一切なくそれでいて上品。仕草も凄い。髪を耳にかけたり、手を吐息で温める仕草はもう守つてあげたくて仕方がない。

只管に彼女の分析をしていると彼女と目が合う。流石に見すぎたか……女性はこういった視線に敏感であり良く思わないって聞いた。彼女にはもしかしなくても不満を与えてしまったかもしれない。

一度、目線を逸らすが気になってもう一度見ると……彼女も俺を見

ていた。そしてもう一度目が合うとウインクをする。

ちよつとあざといが可愛い。なんだこの異次元の生物は……海の生物に例えなら彼女は人魚。俺はアジ。それくらいの差がある。

そんな事を考えながら彼女のココアを持っていく。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

彼女は両手でコップを包んで飲み始めた。

く、クソが……一々可愛いんだよ。コイツ。コップを両手で包んで手を温めながら飲むって何か分からないけど可愛いんだよ！

「先輩の作ってくれたココアとても美味しいです」

「あ、ありがとうございます」

彼女は慈愛の女神が人間に微笑むような素敵な物を見せる。それは魅力的で吸い込まれそうになるが同時に屈託のない百パーセントの笑顔でもあった。

……無邪気な笑みが一番反応に困る。可愛すぎて俺の経験則からじゃ、最適解の答えが分からん。

彼女はココアを飲み終わると俺はそれを洗面台に持っていく。

「すいません。ありがとうございます」

「これくらい大丈夫です。えつとそれより……どうします……この後……」

正直、この後の予定は考えていない。いきなり家に来ていいかと聞かれて驚きながらも了承したただけだからだ。

「先輩と一緒に居るだけでいいです」

「何か、ありがとうございます……それじゃあ、テレビつけますね……」

たどたどしく俺はテレビをつける。この空間は彼女に完全に支配されていた。彼女はとんでもないことを少しからかいながら俺に言う。

いつの間にか、からかい属性が彼女に付与されていたようだ。

テレビの前にコタツもあるので俺もコタツに入る。彼女と違う方向の所から入ろうとすると……彼女は自分と同じ所で僅かに隣を手

で軽くたたいた

「先輩、ここに一緒にくっついて座りましょう」

「え、いや、それは」

「嫌、なんですか？」

彼女は上目遣いで目をウルウルさせる。そんな感じにされてしまうと俺は何としてもそこに座らないといけない

「じゃ、じゃあ失礼します」

「ふふ、どうぞ、どうぞ」

ケロッとして先ほどのまでの涙ぐましい感じは何処に行ってしまったのか。彼女は嬉しそうに微笑んでいた。手のひらの上で転がされている……

彼女とほぼ距離が無い所に座る、すると彼女は俺の腕に甘えるようにくっついた。彼女の足が当たり、胸部の圧力が俺の腕に押し当てられる。

なんて、幸せなんだ……

し、しかし、俺は年上。精神的にも。ここは賢者のような心構えで精神を統一する。

「くっついちゃいました。えへへ、でも、彼氏と彼女だからこれくらい平気ですよね？」

「あ、はい、問題ないです」

「ふふ、今は学校が離れて会えないからこういった機会は貴重なのです。私、こう見えて中々会えないから物凄く寂しいんですよ。ですからもつと休日のデートとか先輩から誘ってくださいいね？」

「は、はい」

「よろしい。じゃあ、もつとくっつきますね」

益々締め付けが強くなる。彼女との距離がますます近くなり、彼女の独占欲をじかに感じた。

彼女にこんな一面があったとは……知らなかった。

そして、なんて、胸焼けするくらい甘い展開なんだ。一般人が見たらブラックコーヒーの百倍位渋いのを飲まないとやってられないな。

彼女の顔は幸せそうだが時折、俺をからかうような視線も向けてく

る。

意識しない様に賢者の心構えでテレビを見てるとカップル特集がやっていた。道に居る男の人にどんな彼女が欲しいか、どんな人がタイプか。女性にはどんな男性がいいか。理想の彼氏、彼女を調査するという番組だ。

『どんな人を彼女にしたいですか？』

『やっぱり尽くしてくれる人ですかね』

『尻に敷かれないと思いますか？』

『うーん、あんまりそういった感じはしないですね』

それを見ていた彼女はくつつきながら俺に聞いた。

「私って、尽くすタイプに見えますか？ それとも尻に敷きそうなタイプに見えますか？」

「ど、どうでしょう……」

「先輩、気にしないでですから正直に言ってください」

「えっと、正直……尻に敷きそうと思います……」

彼女に逆らえる感じはしないからだ。美貌やそれを利用されたら何でも願いを聞いてしまいそうになる。

正直に言つてと言うから言つたのだが彼女は不機嫌そうだ

「むう、私は尽くすタイプです。尽くして、尽くして、尽くし尽くす。理想の後輩彼女なんです」

「ご、ごめんなさい」

「謝らなくてもいいんですけど……でも、先輩は私の事を分かってない様ですから、今日は沢山尽くしてあげますね……」

「た、沢山!？」

そんな言い方をされるとつい変な方向に意味をとらえてしまう。男の性。

「夜にお背中でも流したり……」

そこまで彼女が言うとなんは首をかしげる。確かに何としてもそのイベントはアジワロたいがそんな遅くまで居て彼女の両親は心配し

ないのだろうか

「え？ 今日、そんな遅くまでいるんですか？」

「え？ 今日は泊まるって言いましたよね？」

「え？」

「え？」

俺は彼女のメールを確認する。家に来ていいですかと言う内容のメール。そこには今日は泊りますと……下の方に書いてあった。み、見逃した……

「あ、書いていますね」

「はい。ですから……今日はたっぷり夜も沢山お世話してあげますね」

「ひゃ、ひゃい」

彼女の言い回しは独特で男が意識しそうな言い回しや気を引く話し方だった。彼女の言葉一つ、仕草一つでドキドキさせられアタフタさせられる。

これからドンドン彼女に俺は……

手のひらの上で転がされそう……

銀ノ章3

ご注意点。基本的に『今の所、世界の命運は俺にかかっている』は十六夜がヤル事はないのですが今回は外伝と言う事もあり、今回は違います。もし、そういうのが苦手の読者がいらつしやいましたら今回の話は抜かして読んでいただけると幸いです。

俺は今お風呂に入っています。この世界の主人公である銀堂コハクと一緒に……いやいや、体がガチガチに硬くなっている。上半身は緊張で下半身は……特に何も言わない。腰にタオルを巻いているから特にバレる事もないしな。

俺の後ろではゴシゴシと彼女がボディタオルで洗ってくれている。この世界と本来の世界、この時点で若干の相違点がある。例えるならまず銀堂コハクに彼氏なんていない。存在しない。そして、髪も短髪じゃない、長髪なんだ。

「痒い所はありませんか？」

「ひゃい」

なんで、毎回耳元で囁くんだこの後輩主人公!? お風呂の中で音の反響が凄い。全身の細胞が震える。グラグラと理性の棒が倒されそうになる。

「大分、体が硬くなっていますが大丈夫ですか? もしかして私と一緒に入るのは嫌なのですか?」

「いえ、そそそそんなことは」

「なら、良かったです。前の方も洗いまししょうか?」

「前!? まえ!?! ? AE!?!」

「はい」

「はいって……その、前ってダメじゃないですか!? そもそも、お風呂に入るのもためらわれるのに」

「私は良いですよ。軽くコリをほぐす感じで優しく撫でるように洗いますよ」

な、何なのこの主人公!? ダメだろう。こんなの絶対。コリをほぐす!? 何のコリだよ!? 優しく撫でるようにって、こっちの色んなものが暴発するわ!!

本当はしてほしいけど、心の何処かで何かが決めかねているのか、俺自身が拒んでしまう。

「いえ、自分で洗います!!」

「そうですね。まあ、大体予想してましたけど……」

彼女はあっさりボディタオルを俺に渡した。この感じから予想するに最初からからかっていただけか? クソ、この後輩彼女……くあわいいから憎めない。その後は普通に洗って二人で湯船に浸かった。

彼女と向かい合う。銀髪のショートの湯船に浸かる姿、こんな彼女のはストーリーでも見たことはないがソシャゲアプリの限定激レアなキャラを当てた以上の感動だ。

艶とホクホクで食べごろの感じの肉感と言い、鎖骨のエロさと言い、普通に可愛くてなんだよこの女神。別次元の生き物。そして、こんな人が俺の彼女という幸福感。

「先輩チラチラ見ないでください」

「あ、すいません」

流石に彼女とは言えチラチラは不味かったのかもしれない。

「みるならガッツリ、全部見てください」

ええ!? いいんかい!? ここまでイケイケで美女後輩って俺のストライクゾーンガッツリ入つとる!? 彼女はバスタオルを僅かに崩して、胸の露出を多くして一気に雰囲気のエロくなる。元々エロいけど。

彼女の顔を見るとちよつと、ニヤニヤしていた。この後輩、からかい癖が付いてやがるな……でも、見て良いのか……見て良いのか……じゃあ、見よう。ここで逆に遠慮するのももったいない感じもする

し。

「じゃあ、見ます!」

「え?」

彼女をしつかりと目に焼き付ける。眼福、眼福。そう言えば、以前、母親に彼女ができたと報告して写真を見せた時……

『あら、私のそっくりで可愛い子ね』

『……ええ、そうなのか?』

『二割冗談よ。それより、いい、しつかりと想いを伝えないとだめよ。じゃないと別れちゃうかもしれないわよ』

『ありがと。参考にする……』

『あと、十六夜の話を聞いて思ったんだけどその子、意外と承認欲求があるのかもしれないわね。私を見て、私だけを見て、貴方に褒められたい、もっと好きになって欲しい。そう言った感情がヒシヒシと伝わってくるわ。十六夜限定の承認欲求ね。十六夜、相手の子のことをもっと愛してあげなさい』

前半はそれは無いと思って無視をしてしまったが、後半はかなり重要な情報だった。俺だってここまで最高の彼女ができたら別れたくはない。だとするのであればしつかりと想いを告げないといけない。もしかしたら、彼女はからかい癖が付いたのではなく、もっと褒めて欲しかったのか? スタイルが良いねとか、可愛いねとか。もっと、褒めた事はあつたが褒めたりしないのかもしれない。

それもそうだ。彼女は人気投票一位。簡単に言えばこの世界の生態系の頂点ともいえる。それなのにちよつと可愛いとかで済むわけなよね。だとするのであれば……

「銀堂さんって滅茶苦茶可愛いですね」

「あ、え?」

「それだけじゃないです。細かいところまで気が利いて、誰にも負けない勇気があつて、困っている人を助ける行動力、服のセンスも凄い

ですし、外見なんてもう、女神の生まれ変わりですかって言う位整いすぎて、まつ毛も長いし、髪もふさふさ、貴方以上の女性っていないと思います！ 可愛すぎです！ 俺の彼女になってくれてありがとうございませう！ 俺は世界一幸せです！」

「あうあうあう……」

「そんな最高の貴方をガッツリ見てもいいですか!?!」

お風呂中でタオル一丁で何を言っているんだろうかと俺自身感じている。しかし、俺はこの人が自分から離れていってほしくない。俺も彼女の事が好きだと当たり前だが再確認する。一人の女性として好きなのだ。

そうか……俺は……なら、もっとガツガツ行こう。だって、俺だって好きでいてほしいから。

と俺自身が覚醒したら彼女は直ぐにタオルで出来る限り自分の肌を隠して、さらに言うなら手で顔も隠した。

「ダメです……見な、いで……恥ずか、しいから……」

「ええ!? 何も恥ずかしがることは無いですよ!? こんなに最高に可愛いんですから、何を恥ずかしがることがあるんですか!?!」

「っ……そういう意味じゃないです！ な、何で急にそんなグイグイ来るんですか!?! もう、私、あがります!!」

彼女はピューンと逃げるように出て行ってしまった。



俺が風呂から上がって、リビングに行くとならソファにパジャマ姿の彼女が座っていた。いつもの彼女のパターンから行くとなら崩したりしているんだが今回は前のボタンを全部キツチリ閉じてパツクをしていた。

「あ、コハクさん」

「急に名前呼びしないでください！」

「そんな……でも、もっと距離を縮めるべきだと思いますして」

「何があっただんですか!? もう!!」

彼女は洗面台の方に走って行った。先ほどのアピールが失敗したのだろうか。距離を詰め過ぎたのか失敗なのか？

そこまで考えていると洗面台から彼女が帰ってくる。パツクを外して恥ずかしそうにしている。

「あの、先輩、ずるいと思います」

「何がですか？」

「急にグイグイ来るの凄くずるいと思います……私は先輩のアタフタする姿が可愛くて、からかっていたのに、さつきから急に今まで以上にグイグイ来て……何なんですか？ 私、ちよつと怒ですつ。先輩にからかいポジを取られたような感じがして」

「そんな、俺がからかうなんてとんでもない！ 本当の事を言ってるだけなんです！ カレーは美味しい、最近のラノベタイトルは長いが多い。そして、銀堂さんは世界一で女神以上に可愛い！ それだけなんです!!」

「ああああああああ、ヤメテ、ヤメテ!! 信じられない位恥ずかしいです!!」

「そうですか。なら、やめマ……」

「でも、嬉しいからやっぱりやめないでください!!」

「分かりました！ 貴方は世界い……」

「ううっ、嬉しいでしゅ……噛んじやった……」

顔真っ赤で舌が回らなくなってしまう、噛んでさらに恥ずかしそうに照れる。フツ可愛いじゃないか。

「噛んじやうコハクさんも可愛いですね！」

「い、一旦、褒めストツプをお願いします……」

「その照れた感じも可愛いですね」

「いや、止めてって言ってますよね!?!」

俺はただ、正直に言うしかない。独特な表現とか詩的表現は出来な

いからな。その後、なんだかんだで一緒に寝ることになりました。ベッドに二人して横になっている。彼女は俺に背を向けている。

「先輩、今日は褒め禁止ですからね」

「はい。分かりました」

「はあ、からかいが楽しかったのに……」

「からかいがしたかったんですか？」

「だって、先輩が可愛いですから。からかいが楽しくて仕方なかったんです」

そうか。彼女は褒めて欲しいわけではなく、ただ単にからかいがしたかっただけなのか。勘違いした……でも、その勘違いしたおかげで自分自身を見直すことが出来た。

「そうだったんですね……」

「からかい癖の私のこと嫌いになっちゃいましたか？」

「まさか、そんなからかい癖があつてちよつとあざとい後輩な、銀堂コハクが俺は好きです」

「——っ！」

そういうと彼女は俺の上に馬乗りになった。

「わ、私が、私がからかうポジなんですよっ。ですから、こ、ここからからかって、あげます、よ」

ゆでだこ状態の彼女は俺の耳を触って顔を近づけた。耳を触るとか、反則だろ。形勢が逆転。別に勝負とかをしてるわけではないが、そう感じた、

「先輩……準備できてますか？」

「な、何の……」

「ふふ、ようやく私のしてほしい顔になった……可愛い……あと、何の準備かって分かってますよね？」

「ひゃ、ひゃい」

完全に彼女のペースに戻された。

「もう一度、聞きますね？」

月の明かりに照らせられた彼女はどうしようもなく魅力的だった
……

「準備はできてますか？」

「いや、その……出ていないです……」

「だとしても、待ちませんけど……」

彼女は俺の口に彼女自身の口を落とした。甘い……それだけで頭
がぼうつとする……深い思考に至れない。

「私も……貴方が好きです」

「お、俺も」

「これから、十六夜君って呼んでいいですか？」

「はははは、はい」

「あはっ、可愛いすぎ」

上に乗っている彼女から目が離せない。そして、俺は気付いたら彼
女を押し倒していた。今度は俺が彼女を見下ろしていた。

「きて、十六夜君……」

何も考えられない。彼女の口を塞いで……

そこからはよく覚えていない。



朝起きると、隣で彼女は寝ていなかった。下に降りると彼女は既に
起きていて朝ごはんを作ってくれていた。

「おはようございます」

「あ、お、おおはようございます」

「そんなに、挙動不審にならないでくださいよ。それより、一緒に朝ご
はん食べませんか？」

「は、はい」

彼女と一緒に朝ごはんを食べる。

「あの、昨日って……」

「分かっていると思いますが？ わざわざ言った方が良いですか？」
「あ、そうですね……」

やっぱりそうなのか。これは、だとするなら……

「絶対、責任取りますから！」

「はい、お願いしますね。十六夜君！」

ご注意点。基本的に『今の所、世界の命運は俺にかかっている』はヤル事はないのですが今回は外伝と言う事もあり、今回は違います。もし、そういうのが苦手の読者がいらっしやいましたら今回の話は抜かして読んでいただけると幸いです。

紅蓮革命編

七十五話 予兆

とある部屋に女性が万年筆を走らせ原稿用紙を文字で埋めていく。机には沢山の資料があり、女性は絆纏を纏い寒さを凌ぎながらも必死に描く。

その時、机に置いてあった携帯に電話が掛かってくる。女性は一度万年筆を止め電話を取る。

『もしもし……』

彼女は重苦しくも声を発する。

『はい……四巻は書き終わりました……内容はどんな感じか？……そうですね……ざっくり話すと……海原町の伝承を新たに設定に加えて更に夢の世界を支配する妖怪を加えました。片海アオイは妖怪に全身を何度も喰いちぎられて最後には魂を喰われると言うものです』

ウンザリしながらも彼女は淡々と話を進める。そして相手からの発せられる要望に眉を顰める。

『はい……魔装を得てからのバッドエンドですね……先ずは赤井火蓮の話を書いて欲しいと？ 順番はそちらで決めたいと？ 上が？ はい……分かりました……』

次々と要求がなされていく。会社側からの要求を彼女は断らない。いや、とある恩人からの要求を……

『今回は残虐性のある物が良いと……検討して見ます』

そういうと彼女は電話を切った。その後携帯を投げるように机に置くことと独り言のように呟く。

『はあ……赤井火蓮、いや描く時期の時は火原火蓮か……描きたくないが……夏休み最後に……『中盤』の敵キャラを……』



遂に彼女が彼の家にやってきた。沢山の段ボールの中に彼女の荷物が入っていて僕たちも引越しの手伝いをする。

僕たちの荷物は魔法の部屋に置いてあるので彼女の荷物もそこで広げて整理する。今は僕と彼女の二人きり。

彼女とは気が合いそうな気がしている……勘だけど。コハクちゃんとは火蓮ちゃんは最近落ち着きを見せているがいつ前みたいに暴走するかは分からない。彼女達は片方が暴走すると連鎖的にもう片方も暴走する。

だからこそ今の現状は平穏そのものだ……だけど暴走したとき彼女が居れば二人で乗り切れる感じがしている。

前みたいになんて一人で恐怖することはない。いや、アオイちゃんありがとう！

「アオイちゃんこの段ボールは何？」

「それはあーしの服」

「開けて良い？」

「いいよ」

彼女の服を整理するために段ボールを開ける。確かに服が入っている……

パーカー、その下にパーカー、その下にもパーカー……いや、まさか……他の段ボールを開ける……パーカー、パーカー、ちよつと良い感じのシャツ、パーカー……ジーンズ、レディースパンツ、パーカー……

「ねえ、アオイちゃんって……パーカー好き？」

「え？ 当たり前じゃん。パーカーって人類に置いて最も重宝すべき服だもん」

「……そうなのかな？」

「そうだよ、動きやすい、気軽に纏える、寒い時はポケットに手を入れられる……」

彼女はまさかのパーカー信者らしい。個性があつて良いと思うけどアオイちゃんはそれ以外にも似合うと思うんだけどな……

「何よりフードがある。パーカーのフードってさ……被ったら……無

敵な感じしない?」

彼女は結構なドヤ顔で僕に告げた。ちよつと大袈裟かな

「しないと思うけど……でも、アオイちゃんが可愛いつて意味なら無敵かも」

「……お世辞言つても何も出ないよ」

「いやいや本心だよ」

「あつそ………今度ジュース奢る」

あら、可愛い……彼女はちよつと照れ臭そうにしながらも嬉しそうだ。あんまり表情に変化はないけどそう感じる。ジュースも奢つてくれるらしいし完全に喜んでる。



俺は彼女の荷物である段ボールを運びその後、訓練でもしようかと思っている。何事も準備をしておかないとさらに今やれることもやっておかないとな。

リビングに一度戻り一旦喉を潤そうと冷蔵庫を開ける。ペットボトルに入った水を発見………それをとりだし、それを口に含む………それをぐくりと飲み込む。

その時、俺の体が発光してそこから意思が飛んでしまった……



荷物を整理した僕たちは休憩するためリビングに向かう。廊下を歩いているとメルちゃんが研究室から出てくる。

この家………大分改造されてるけど………大丈夫なんだろうか………彼の親とか怒つたりしないかな?

「荷物整理終わったんか?」

「終わった」

「それなら皆でおやつタイムやで」

「そだね」

メルちゃんと特に反応を示さないアオイちゃんに見えるがおやつと聞いて少し足踏みが軽くなった事に僕は気付いた。

そして、三人でリビングに向かうと……冷蔵庫が置いてある下あたりに服が落ちていた……。彼の服だ……。さらにペットボトルが倒れており中の水が散乱している。

「あれ？ 何でアイツの服が……」

「水もこぼしてあるし……」

「嗚呼ー！ この水、ワイが作った幼児化の水やないか!!」

メルちゃんが大声をあげて水を指さす。幼児化ってナニ!? どんな水!?

「何それ？ 何でそんなの作ったの?」

「十六夜はんに作ってって頼まれたんや。不意打ちに使えるからって」

「なにそれ……」

「それじゃあ……服が散乱してるのって彼が幼児化して何処かに行っただからって事?」

「恐らく……実はまだこれ試作品なんや。体が幼児化になると心まで幼児のようになってしまおうと言う欠点があるから……取りあえずペットボトルに入れて冷やしといたんや」

「何でそんなことすんの?」

彼女のツッコミがさえる。僕も全く同じことを思っていた。それより彼は何処に行ってしまったんだろう?

そう思っていたその時……リビングのドアが開く。

そこには……黒いローブを纏い、眼帯を左目につけ、右手には鎖を巻いており、何故かゴーグルを頭につけ、家の中なのになぜか靴を履いている……幼児化の彼が……五歳くらい……

「我が名は黒騎士……混沌より生まれた神を超えし者……」

彼は眼帯がある左目に手を付け静かに声を上げる。ちよつと何言ってるか分からないけど可愛いかも



「取りあえず……いつになったらこいつは直るの？」
「えっと、一日位で戻るはずや」
「それまでこのまま……」

二人が会話するなか僕は彼を見ていた。前から察しは付いていたけど厨二的なあれなんだ……

まあ、これくらいの幼さなら可愛いですむよね……

コハクちゃんとは火蓮ちゃんはお買い物で居ないけど二人が戻ってきたら……どうなるんだろう……

「霸王の目覚めは近い……」

いきなり何か言いだした……

彼はソファアに座りながらテレビで見ているのは子供用の番組。年齢相応の可愛さがある。ちよっとお話したい……

「えっと、ね、ねえ」

「何だ」

「えっと夜ご飯は何食べたい？」

「夕食はディナー一夏野菜たつぷりカレー 《太陽の大いなる恵みによる混沌の

エンドロール》かフエニックスの頂き鶏肉から揚げだな……」

「えっと……ごめん……良く分からないんだけど……」

彼の言ってることは全く分からない。ルビ振り過ぎじゃない？

彼は子供用番組をみながらリズムに乗っている。歌のお兄さんとお姉さんが躍っているのを見て首を振っている。

それをしばらく見ると子供番組は終わってしまう。すると少し残念そうに顔に影が……何かしてあげたい

「えっと、お姉さんが遊んであげよつか？」

「ほう、言うじゃないか。ついてこれるか？」

「まだ、何するか言っていないよ」

彼は嬉しそうに嗤う。えっと何がしたいんだろう？ このくらいの年齢の子供がする事って……なんだろう……

「何がしたいか言ってみて」

インフィニティ・ラグナロク

「神の終焉戦争」

「無理かな……おままごと、鬼ごっこ、かくれんぼとかはどう？」

「鬼ごっこか……」

彼は少し考えるように瞳を閉じる。

「鬼ごっこにする？」

「俺が鬼なら一秒すら待たず全員を捕まえてしまう。逃げ役なら年号が変わっても捕まえられないから詰まらん」

「あ、そう」

「かくれんぼも同様だ。鬼役なら俺の魔眼が隠れてる場所だけでなく個人情報まで見抜いてしまう。逆に隠れるとなると嘗て暗殺家業に身を置いておいた俺を見つけるなど砂漠から一個のビーズを見つける事の五億倍は難しい」

「あ、そう」

これが俗に言う黒歴史なのだろう。このやり取りを見ているアオイちゃんも生暖かい視線を彼に送る。

「じゃあ、おままごと？」

「いや、鬼ごっこだ」

「結局鬼ごっこなんだ」

「安心しろ人間の基準に合わせる」

「あ、うん。じゃあ、最初はお姉さんが鬼やってあげる。だから逃げて」

「フツ、一人で来られても面白くない……アオイとメルも来るが良い……三対一だ」

彼は自信満々に告げた。挑発的な宣言……仕方ないから乗っかってあげると二人に視線を送る。

「わかった。あーしもやる」

「あー、ワイはちよつと薬の調査するからパスするわ」

「そうか、なら二対一でいい。まあ、どちらにしる捕まえることなど不可能だな」

「それじゃあ、十数えたら捕まえに行くから逃げて」

「いいだろう。ロケットスタート!」

彼は何故か走るときは腕と足を交互に出す方が速く走れるのに、腰を低くして両手を後ろに広げてロケットのように走り去る……

彼の様子を一通り見てアオイちゃんがメルに聞いた。

「あれはどうゆう状態?」

「記憶は残つと思うんやけど……だけど、精神が幼いから思ったり感じたり、したいと思つた事をすぐに実行したり口に出してしまつたり無邪気さが目立つとるな……記憶が残つたままの幼児になった。そのままやな。まあ、しばらくは遊んでやるとええで」

「わかった」

今はアオイちゃんだからいいけど二人が帰ってきたら……ああ、めんどくさいかもしれない……久しぶりに胃がキリキリとする感じがする中、そろそろ追いかけないと彼が可哀そうだから僕はリビンググを出す。

「それじゃあ、アオイちゃん一緒に捕まえよう」

「そだね」

七十六話 ナゲポ

まだ二人が帰ってこない中、鬼ごっこをして彼と遊んであげた後に休憩の為に僕たちはテレビを見ていた。アオイちゃんも両親に電話中らしい。

この時間は子供用番組はやっていないので再放送のバラエティを見ている。彼を僕の膝の上に乗せて……両腕で膝から落ちない様にシートベルトのように支える。彼と此処まで密着するなんて初めてではないかと思うと少しこそばゆい。

テレビではアイドルが身体測定をする企画をやっている。かなり人気の芸能人で面白いのだが彼は疲れたのか眠そうに膝の上でウトウトし始める。

「眠いの？」

「眠くない……俺は睡眠を必要としないからな……」

変な意地を張って眠いのには眠くないと言う。もって後五分かな？

そんなことを思いつつテレビを見てみると芸能人の身体検査の前に全国の男女の身長平均が表示される。

女性の平均は……20歳で……160くらい……僕は……180

……

『小柄で可愛いですね』

『いえいえ、そんなことないですよ』

テレビの中ではアイドルを褒めたたえる。小さくて顔も可愛いきやぴきやぴ系な感じだ。

『小さくて小動物みたいでそこが愛嬌ですよね』

やっぱり小さい方が可愛いのかな……僕なんて三人より頭一つ二つ位大きいし……彼よりも大きいし……

「気にするな」

——ポンつと頭に手が置かれた

「180位大したことじゃない」

「ッ!!」

膝の上にはいた彼が僕の頭の上に手を置いていたのだ。心が読まれて少しびっくりする。

幼い精神ながらも慰めているのだろう

「実は俺には前世が百もあってな……その中に巨人の前世があるのだがその時の俺は全長五千メートルはあった」

「あ、そ、そうなんだ……」

頭をなでる彼にドキドキしてしまう。小さいのに彼は凄く大きく見える。

「その時の俺には誰にも近づけず頭の所まで来るものも一人もいなかった……だが、お前は違う。俺の手はお前の頭に簡単に届く」

そう言いながら彼は手で髪の毛を梳かすように撫でる。正直何を言ってるのか八割くらい分からないでも彼のやさしさは伝わった。そして……その撫で方に僕はある事を思い出す……

『萌黄は優しい子ね。いつもありがとう……』

お母さん……

「……たかが180センチだ。五千メートルに比べたら大したことじゃないから……えっと、つまり……えっと、何が言いたかったんだっけ……えっと、気にするな。うん、それが言いたかった」

こう言った事になれてないのか彼は恥ずかしそうにしながらそっぽを向いた。

僕は気付いたら彼を抱きしめていた。

彼は驚いたようにアタフタする。

「お、おい」

「そろそろお昼寝の時間だよ……僕があやしてあげる」

「べ、別にそういうのは……」

彼は口ではいらないう言うが体はあんまり拒まない。もしかして嬉しかったりするのかな？

「いいから、お姉ちゃんに任せて」

「あ、いや……」

「いいから、いいから」

僕は頭を撫で返す。遊んで疲れていた彼は直ぐに寝息を立て始めた……

「寝ちやった？」

「……」

寝息を立て返事も帰ってこない。彼は本当に寝てしまったようだ。僕は彼を抱きながら独り言のように呟いてしまう。

「ねえ、さっきのは反則だよ……あんな風に言われたらいやでも意識しちゃう」

「僕はね……皆で居るのが好きだから。基本的に踏み込まない様にしてるんだよ。そうすれば気持ちを抑えられるから」

「……君がね。コハクちゃん和火蓮ちゃんとアオイちゃんと話してるとき……何処か気持ちが悪いわつくんだ……でも、抑えられる……だけけど今日みたいなことされると嫌でも妬んじやうよ……」

「僕を誑かすのも大概にしてね……」



『それじゃあ、特に問題は無いのね』

「うん、上手くやってる」

『そう、迷惑をかけないようにね』

「わかった。それじゃまたね」

あーしはお母さんからの電話を切った。鬼ごっこを終えたあたり

から電話が掛かってきたのだが大分長電話をしてしまった。

リビングに戻ると小さくなつたアイツは萌黄に抱っこされて寝ていた。小さいから鬼ごっこをして疲れてんだらう

「寝ちやつたんだ」

「そうそう、鬼ごっこが疲れたみたい」

「ふーん」

「ちよつと任せていいかな？ 風に当たりたいんだ」

そう言いながら彼女はアイツを見る。そういう彼女の顔はほんのりと赤かつた

「別にいいけど何か顔赤くね？ 熱でもあるんじゃない？」

「あ、いや、ちよつと代謝が良すぎて……気にしないで」

「ああ、そう」

あーしは彼女の近くに寄る。そして彼女から小さいあいつを受け取る。体重は軽く子供と言うことを再認識する。

「それじゃあ、ちよつと風にあたつてくるから彼をよろしく」

「うん」

萌黄はそのままリビングを出て行った。あーしに彼を渡すとき名残惜しそうに見えたけど……気のせいか

取りあえずソファーに座り膝の上に彼の頭を乗せる。すやすやと寝息を立て寝がえりをうつ、すると彼の耳が少し汚れていた。

後で耳かきでも……いや、流石に恥ずいか……あと、ちよつと寝息が足に当たつてくすぐりたい……

特に何をするまでも無く時間はドンドン過ぎていく……しばらくすると彼は目を覚ました……

「……起きた？」

「う……ん……」

「ちよつと耳が汚れてるから耳かきしてあげる」

「!? いや、大丈夫だ……です……」

「するから、拒否権ないから」

急に敬語になりおろおろするのが少し可愛いが関係ない。やると

言ったらやる

棚から耳かきを持ってソファーに戻る。そして再び彼を膝の上に寝かせる

「それじゃあ、入り口からね」

「お、押忍」

お母さんと交代でよくやったけ……それに比べたら少し小さいけど問題なくできる。

「痛かったりする？」

「あ、いや、平気です」

「そ……」

ある程度やり終わると最後は息を吹き込まないといけない

「それじゃあ、息吹くね。ふう……」

「うう！」

彼の体がビクツと震える。

「くすぐったかった？」

「はい……」

「何か、大分大人しくなったね……」

「いや、そんなことはない」

「ふーん」

サクサクと進めて両耳を掃除し終えた。

「これで終わり」

「あ、どうも……」

片づけをしたところで家を開ける音が聞こえる。二人が帰ってきたんだと思う。

彼と会ってここまで全てが変わるとは思ってもみなかった。

『怖いな』

『目つき悪すぎ』

一人ぼっちが辛かった。休み時間に一人。ドッジボールに誘って欲しかった。サッカーに誘って欲しかった。可愛いシール集めとか

おままごととか、やりたいことは沢山あった……

友達が欲しかった。でも、誰も話しかけてもくれない。近寄ってもくれない。

もう諦めていた。だけど、そこで初めて彼と出会って劇的にすべて変わった。

彼は大事な友達……友達……友達……友達……

正しいはずなのに何処かしっくりこないまま、あーしは帰ってきた二人を出迎える。



「きゃー、きゃー!! 可愛い!」

「ちよ、ちよつと十六夜が窒息するでしょ!」

「い、息が……」

僕が風に当たりに行つて落ち着いた後、返つてくると二人はもう帰つて来ていた。コハクちゃんが彼を抱っこして窒息するのではな
いかと心配してしまう。

アオイちゃんは興味ない風に装っているが横目で二人と彼を見ている。

さて、ハチャメチャな二人を見ながらやはりこうなってしまったかと思う。

「そろそろ私に変わつてよ!」

「ダメです。この子は今日から私が面倒見ます。お風呂と一緒に入つて、一緒に寝て……」

「おい、息ができない……」

なんて……幸せな死に方なんだ……と言う心境である。この後も二人で彼の取り合いは続いた。

食事中も……

「はい、あーん」

「自分で食べれる」

コハクちゃんやんがハンバーグを彼の口に差し出す。

「ほら、野菜も食べなさい」

「自分で食べれる」

火蓮ちゃんが野菜を差し出す……彼は子ども扱いが気に喰わないのか一人で黙々と食べていく。

その日はずっと二人が彼に構い続けていた。



私はミニミニ二十六夜君が尊くて仕方が無かった。夕方からずっと構いに構いまくったがそれでも足りない。お風呂に一緒に入ろうかと思っただが流石にそれは止めておいた。

私がお風呂に入り、十六夜君がお風呂に入った後、就寝の時刻なのでそろそろ十六夜君を眠らせないといけない。他の三人はお風呂に入っており、メルさんはずっと研究室にいる

「眠れるように子守唄を歌ってあげます」

「フツ、睡眠耐性スキルレベルマックスの俺には効かないぞ」

「ねーん、ねーんころーりよー」

「zzz」

寝るのが速い。速攻過ぎて私は驚いてしまおうがそれより彼の寝顔を眺めながらニヤニヤする方が大事だ。

本当に可愛い……今は無防備で……二人きり……

入学して直ぐに私を守ってくれた。夏祭りの時も……欲しくて仕方ない。しかし、お母様がそれではダメだと言った。無理に言っただけに迷惑だけはかけられない

迷惑だけは……

『そんなの関係ないですよ。無理にでも欲しい物も欲しがらないと

……ね』

「ッ!!」

何処からか声がしてゾクつと背中に寒気が走った。後ろを振り返っても何も無い。

今のは……私の声に……似ていたような……

誰かが自分の中に居たように思った事は何度もある……でも、声が聞こえるなんて……今までそんな事一度も……

言葉に表せない不安を感じた。そしてここに居てはいけないと判断したので彼の部屋を出る。

その日は、もう声は聞こえなかった。



何処かの黒い空間。そこにとある黒き鉱物が置いてある。

トライ・リベリオン
魔の三銃士であるミッシェルが戦艦を作った時に余った魔王から出来た鉱物が唐突に動き出し……四つに別れるとそれぞれが独自の形を作り上げていく。

一つはライオンのような顔と体つきで二足歩行で歩くの大きな化け物。

一つは手が四つあるアシユラ

一つは悪魔の黒い羽と天使の白き翼をもつ墮天使

一つは純白の天使

彼らは名もなき魔族。そして本来ならこの時点では存在しなかった魔族。

魔王の残っていた魔力と自我が作り上げた魔族。俗に言う魔王四

天王である。

彼らは魔王からの分身のような物であるがそれぞれが独立した思考を持つ。そして性格は最悪。

ライオンのような魔族が話し出す。下品な声が戦艦の倉庫室に響いて行く

「クククク、どうやら魔の三銃士トライ・リベリオンは大した事のない相手にてこずっているようだな」

「……」

阿修羅のような魔族はずっと瞳を閉じて黙っている。ライオンのような魔族に堕天使が答える。

「その下品な話し方はやめて貰えますか？ 全く、これだから」

知的な話し方が特徴の堕天使。しかし、何処か挑発的な物言いにライオンの顔に青筋が浮かぶ。一触即発のような雰囲気にな天使が互いを宥める。

「やめてください。そのような事を言ってる場合ではありません」

天使がそういうと二人はぴたりと止まる。そして倉庫室に誰かが走ってくる。

スケルトン、オカマ博士、ゴーレム。魔の三銃士トライ・リベリオンが異変に気づき此処にやってきたのだ。ドアが開き彼らは怪訝な顔をする

「アンタたちどちら様？」

「これはこれはミッシェル様ですね」

ミッシェルが代表して四人に問いかけ、天使が代表して答える。

「私達は魔王の残骸から生まれた……名もなき魔族たち……そうですね……四天王とでも言っておきましょう」

骨三郎が剣を構える。魔王から生まれたのなら自分たちを消すつもりだと判断したからだ。

「おっと、私たちは敵ではございません。敵意をお納めください」

天使が柔らかい物言いで骨三郎を鎮める。僅かに怪訝そうにした骨三郎が問う。

「……目的はなんだ？」

それを聞かれると天使は笑った

「私達は今貴方達がてこずっている……種族を倒し……両方の世界を
征服することです」

その日、本来なら『ストーリー』の『中盤』に目覚めるはずの『四
天王』が目覚めた。

七十七話 私と彼の距離

魔族たちが乗っている黒の戦艦。その中の一角を借り、そこで四天王が話し合っていた。

「まずは魔力を集めるべきだ。あの世界の人間どもから負の感情を搾り取る。」

トライ・リベリオン
魔の三銃士が魔力に変換できるらしいからな」

「がハハハ、だったら俺が行こう」

墮天使とライオンが積極的に話に参加する。阿修羅は黙って何も言わず天使は微笑む。

「先ずはあの邪魔な訳の分からない奴らを殺す。そうすれば後は自由だ……お前にやれるのか？」

「当然だ。だが……全員はめんどくさいな。先ずは一人か二人にしておく……そうだな……あの赤い奴はグジャグジャにしたら心地よさそうだ」

「相変わらず下品な笑いだ」

「ああ!? うるせえ!!」

「やめてください」

二人が喧嘩しようとするので再び天使が止める。そうすることで張り詰めた空気の中に僅かな平穏が生まれる。

「とにかく俺が先に行く」

「そうか、出来るならやってみろ」

ライオンが部屋から出て行く。彼を見送ると墮天使は天使に話しかける。

「アイツで行けると思うか？」

「愚問ですね……余裕でしょう。魔力を使えなくする彼が行けば九割九分勝つでしょう。一人ですべては無理でしょうけど」

「まあ、一人でも片付けられれば上出来と言えるか」

「そうですね……相手は魔力だけは豊富らしいですから。一人でも大きい」

天使は何事も無いように告げた。その後、不敵に笑う

「さて、どうなるか見物ですね……」



「おい、アイツらに好き勝手やらしていいのか？」

「仕方ないわ」

ゴーレムのドーンと博士のミッシェルが不満をあらわにして話し合う。いきなり現れていきなり居座った生意気な奴らだから当然だろう。自分達の船を最早私有物扱いするクソな奴らと言う印象だ。

「だって、力が未知数なんだもの。一步引くしかないわ」

「……俺は切れたら切る」

唐突に骨三郎が話に混ざる。この三人は絆はないが四天王が気に喰わないと言う共通点がある。

「まあ、好きにしなさい。私は様子見に徹するわ」

「うち……俺もそうするぜ」

不機嫌ながらも二人は様子見をすることを判断。それを見て骨三郎も仕方ないと瞳を閉じる。瞳なんてないがそんな感じがするだけ。

「仕方ない……様子見だ」

絆はないが何となく気は合う三人だ……



私にとって十六夜は大事な人だ。十六夜の事を最初は特に何とも思っていないかった。ただの気が合う二次元仲間。

何処にでも居そうで腰も低い、二次元友達が居なかった私にとって彼との時間は非常に有意義で楽しい物だった。

しかし、その時見て見ぬふりをしていた家族との問題。ずっと悩んでいた……だけどそれを強引に無理やりに彼は向き合わせてくれた。見えないところで守ってくれた。支えてくれた。

その時から淡い気持ちが始いた。十六夜と一緒にこれから一緒に居たい。沢山話もしたいと思うようになった。

だけど、そこでライバルが現れ、拳句の果てにファンタジー要素が

現代に現れたりどたばたしてあんまり落ち着いて話が出来ない。

十六夜は何時も走っている。怪人も一人で倒す。私達を傷つけないという彼の優しさであることは分かるから嬉しい

だけど、同時に私を信じていないのではないかと思ってしまう。頼るには値しないかと思っているのではないかと不安になる。

言いたいことは沢山あるのに言えない。

また、前と同じようになってしまう。私は素直になれない事が多い。思ってる事を全く言えないと言う事はない、だけど全部言えるわけでも無い。

心にぐるぐると不安が渦巻く。

このままではいけない。十六夜と話をしよう……そんな事を考えてはいるが……話せずに日々は過ぎていく……

何処かで腹をくくらないと……



幼児となっていた俺らしいのだが無事に二元に戻ることに成功した。幼児の時の記憶は残っていない……彼女達にどうだったと聞いたら……いつも通りと言っていたのでちよつと安心した。

今はメルの研究室にいる。彼女には殆ど研究室勤めをさせてしまい申し訳ないがやれることは全部やつておきたい。

俺は常に魔装だけでなく、魔法器物マジックアイテムを持ち歩いてる。銃とか多少ではあるが回数は限られるが無いよりはましなので持っている。

『ストーリー』は知ってるが流れ通りになるとは限らないからだ。

しかし、そう思いつつも何だかんだ流れ通りいくのではないかと思

い始めてもいる。『ifストーリー』の時もそうだがキッチリ流れ通りだったこともあり、物語の運命力があるような気がしている。

杞憂と考えて行動するけどな……

「お前さんはいつも色々持ち歩いとるな」

「念のためにです」

彼女が研究室で座りながら俺に話しかけてくる。彼女の机には色々な資料が散乱している。流石に異界の言語は読めない。

「なーんか、頑張り過ぎな気もするで……もつとあの子達も頼った方がええで」

「いや、危ないかもしれないと思うと……つい」

確かにかなりやり過ぎた気もする……彼女達が危ないと思うと体が動いてしまうがもつと効率のいいやり方があった気がする。実戦の経験だつて重要なんだ……

「でも、あの子達もお前が危険なのは絶対嫌なはずやで」

「そうかも……しれませんね……」

彼女達も俺に気遣つてくれる。負担をかけまいと行動する。しかし、それと同時に別の方向に負担をかけている。

「あの子たちは才能もあるし訓練だけでも十分強くなれるで。けど心では溝的な物が生まれると思うで……一緒に戦うんやからもつと協力しないといけないやろ」

「そうですね……」

「ま、全部真に受ける必要はないけどな……ほな、後はこれ」

彼女は軽く笑うと銃型の魔法器物を渡してくれる。それを懐にしまい、予備はバッグに沢山入れて研究室を出て行った。

どうしようか……

悩んでるいるが答えは出ない。今まで通り突っ走るだけで良いのか……どうなのか。もうすぐ付いて行けなくなるからそれまでただけ出来ることをやると言う安直な考えで良いのか……

そう簡単に答えは出ない



その日、アウトレットモールの頭上から大きな黒い穴が開く。そして、そこからライオンの魔族が姿を現す。

ライオンは現れると早速町を破壊し始める。

人々は逃げまどいそれによって負の感情が生まれ魔力が蓄積していく。異変を感じた十六夜達は魔装を纏い現場に急行し、ライオンと対峙する。

「あれってライオンでしょうか？」

「そう見える」

「確かにそうだね」

「ありがちなデフォルトね」

彼女達は現場に着くと相手の分析を始める。彼女達の表情は冷静な分析を心掛けてはいる。

しかし、十六夜だけは焦りと不安を覚えていた。そもそも夏休みには起きるイベントはもう無い。さらに目の前のこの魔族は本来ならここには居ないからだ

そもそも、『魔装少女』は『序盤』、『中盤』、『終盤』で構成されている。

『序盤』は三人でひたすら怪人を倒しつつ活動する。『中盤』は片海アオイが転校してきてから年末まで。そこからが『終盤』である。

そして今日の前にいるライオンは『中盤』に出てくる敵なのだ。

更に言うなら、中間パワーアップして対峙する敵キャラだ。中間パワーアップをしなければ絶対勝てない敵でもある。

「グアハハはー。来たか！ では、早速」

「逃げてください！ 危ない！」

何かを発動させようとするライオン。そしてそれを見て逃げるように指示をする十六夜。彼女達は十六夜の焦り具合に一瞬、不安を覚えるが彼が居るなら逃げないと言う思考であった。

「崩壊世界……」

ライオンが大きな黒い球体を火原火蓮に向かって発射する。物凄いスピードで彼女に向かい彼女はその中に閉じ込められる。

十六夜は庇おうとするが上手くいかず一緒に巻き込まれ……二人はこの世界から消失した。

残された三人は焦りと怒りで次々と『魔装技』を放つ。

銀堂コハクは光のレーザーを放つがそれを避けられる。そのままそのレーザーは空に行き雲を貫通する。それをみたライオンは冷や汗をかかざるを得ない。今回は撤退しようかと判断する

「これは……引いておくか」

「あの人たちをどこにやったんですか!!」

「生きているぞ……今はまだな……」

そういうと今度は全身に電気を纏った『雷神モード』の萌黄が頭上からかかと落としを喰らわせライオンはコンクリートに激突する。

そして、アオイも水のナイフでライオンを切り刻もうとする。水のナイフは蛇のように伸びてしなやかだ。

ライオンはそれを避けると黒い球体をまた出して今度は自分がそこに入り……消えた。

残された彼女達には大きな喪失感を残して



そこで私達は目覚めた。魔装はいつの間にか使えないものになっており、さらに魔力そのものが感じられない。

周りの景色は灰色。草木は枯れはて、人の気配は一つもない。

「十六夜。大丈夫？」

「ハイ……」

「ごめん。にげろって言ったのに……それに従ってれば」

私はあそこで意地を張って出しゃばってしまった事に後悔をした。こんな訳も分からない世界に彼を巻き込んでしまったからだ。

ただ、また一人で向かって行く十六夜を見ると居ても立っても居られない……それが彼の迷惑になってしまった……

「気にしないでください……それより……」

十六夜は景色をざっと見まわすと瞳を閉じて考え事をし始めた。それは数分に及ぶ。

十六夜も魔装は解けておりパーカーを着ているだけだ。そして背中にはいつも持ち歩いているリュック。

やがて思考を終えると十六夜はある提案をする

「取りあえず、歩きましょうか。魔力も使えないみたいですし」

「そうね……」

辺りを警戒しながら私達は歩き始める。何処までも続く地平線。十六夜は前のように私を守るように、前後左右、東西南北を警戒しながら歩く。

この感じ懐かしい……前は厨二に見られるから恥ずかしいって言っただけ……

しばらく、私達は歩いた。どこまでも荒れ果てた土地。何も無い。

何も……

こんな世界に……一人で来ていたら……きつと寂しさでどうにか
なってしまうだろう。

ここに十六夜が居てくれて助かった。だけど……やっぱり私は足
手まといなのかな……歩きながら警戒する十六夜を見て私は思う。

「何も無いわね……」

「そうですね……質が悪い世界です。魔力も使えない。食料もない。
人もいない。最悪の世界ですね」

「そうね……」

私達は取りあえず歩き進めた。すると急に訳の分からない人型の
影のような物が現れる。

「逃げましょう！」

「う、うん」

彼は私の手にとって走り出す。手はギュツと握られこんな状況な
のに何処か幸せを感じてしまう私は大馬鹿なのだろう。

私を庇ってここに来たのに、私を守ってくれているのにこんなこと
で一人幸せになっている。

その後も何度も訳の分からない人型は襲って来た。何度も何度も
逃げているうちに私達は疲弊していった。まるで誰かに弄ばれてい
るような感覚に陥った。

「はあ、はあ」

「せ、先輩、コーラどうぞ」

十六夜はバツクの中からコーラを出すと私に差し出す。冷えては
いないがのどを潤す為にはこれ以上の物は無かった。

口を付けて一気に飲み干す。

あれ？ これって最初から開いてた？

「も、もしかして……これ……飲みかけ？」

「あ、すみません……それしかなかったのです……」

ええええ!? そ、それって間接……き、キス……

「あ、うん、じゃあ、し、仕方ないわね……」

こ、こんな状況なのに……ラブコメのような展開に……これってあ

りつちやありなんじゃない……と思ってしまう私は独りよがりのダメメ野郎!!

気を引き締めてそこから私達は偶に襲ってくる人型の影から逃げていった。

もう、何時間も経つ。いつしか、本当に疲労が体中を周り足が棒のようになってしまう

「ご、ごめん。ちよ、ちよつと休憩させて……」

最早、私はただの生身の女子高生。何の力もないただの凡人。しかし、そこでまた人型の影のような物が現れる。

このまま一緒に居たら……私だけでなく十六夜までも

「わ、私を置いて逃げて……」

「それだけは出来ないです」

十六夜は私を背負うと再び逃げ始めた。どんな時でも私を支えてくれる……

私の好感度メーターはどんどん上がって行った。彼の背中は何くても大きくて安心感があつて……ドキドキする……

「お、重くない?」

「大丈夫です。寧ろ軽いです」

「そ、そう」

十六夜はずっと私を背負って歩き続けた。何処までも……

特に会話はない。だけど彼の優しさが伝わってくる。次第に彼への想いが強くなる……

……この人とずっと一緒に居たい

十六夜はどう思ってる? 足手まとい? ただのオタク仲間?

私は……

そこで、頭上からあのライオンの化け物が現れる……

「我っハは!! ここまでお前たちの逃げ惑う姿は楽しかったぞ! だ

が、ここでもう終わりだ！」

そうか……あの化け物は影の人型を放ってわざと走らせていたんだ。必死に逃げたけどそれはアイツの手のひらの上。

ここでは魔力も魔装も使えない。

このままじゃ、二人揃って共倒れだ……

私は彼に背負われている。ここまで支えてもらった。私を見捨てれば十六夜なら助かるかもしれない

「ねえ、十六夜……私を置いて逃げて……」

本当は怖い。でも、十六夜を失うのはもつと怖い。ずっと支えてもらった。助けてもらった。せめてこれくらいの恩返しを……

そう思った。そして彼は私を地面に下ろす。

そう、それでいいよ。私を置いて……逃げ……

「逃げないですよ。例え死んでも……大丈夫です。そこにいてください……全て計算通りだ」

彼は私にその大きな背中を向ける。その姿に息を飲む……

「グあはは！ この世界では魔力は使えない！」

「知ってるぞ。それより早く来てくれ。こっちは布石は全て揃っているんだ」

「そうだ！ 良いことを思いついた！ その娘を置いて行けばお前は助けてやってもいいぞー！」

ライオンの化け物がぎらぎらした目を私に向ける。ぞくりと恐怖が私を襲い体が震えだす。

「無駄な事を聞かないでくれ。この人は大事な人だ。その人が後ろにいる。絶対に退かない……」

十六夜は僅かに足が震えていた。怖いんだ。そうか……十六夜は凄いいけど凄くないんだ。私と同じなんだ……

「そうか……じゃあ死ぬね！」

ライオンの化け物が十六夜に大きな腕を振り上げる。全く見えな
い。

魔装は動体視力の向上もする。魔装を纏っていたら防げるかもし
れないが普通は防げない。

しかし、攻撃のピンポイントにシールドを展開し全て防がれる。

私には全く見えない……十六夜には見えているの？ しかも、なん
で魔力が使えないのにあんなシールドを展開できるの？

「ほう……防ぐか……ならこれはどうだ！」

何度もシールドで防がれる。そして、十六夜は銃型の魔法器物でラ
イオンを打ち抜いた。

そんな……なんで動きを追えるの？ なんて当てる事が出来る
の？

魔力が使えない……メルが言っていたけど魔力とは絶対である物
とない物では絶対的な序列が付く。

あのライオンは魔力を使っている。でも、十六夜は使えない。それ
なのに十六夜が押している。

十六夜は何度もライオンを打ち抜く。一発も外さず確実に当てて
ダメージを与えていく。

「グハ、な、何故、この世界で……俺が追いつめられる……」

あのライオンも全くこの展開が予想してなかったようで驚きを隠
せない。全身から血を流し風穴がいくつも開いている。

そして、十六夜は更に当てていく。もう、これでもかと銃で当てる。
もう相手も動けない。しかし、延々と銃で風穴を開ける。

「ぎゅら、がは、であ!!」

容赦ない……流石、十六夜……カツコいい……

そして、遂に相手の四肢が吹き飛び、そこで十六夜は相手のこめか
みを狙う。

「な、なぜ俺が負けるんだ……」

自信の死を悟り相手が恐怖と疑問を提示する。それを聞くと十六夜は口を開いた。

——何で負けたか、明日までに考えておいてください

堂々と言い放ちその後、更に言葉を十六夜は続けた。

「まあ、お前に明日なんてないけど」

皮肉たつぷり、挑発的な物言いに相手に青筋が浮かぶ。しかし、直ぐにこめかみを打ち抜く。それによって灰色の世界にヒビが入り始める。

この世界の主を倒したからだろう。

十六夜は銃をしまうと私の元へ寄って来る。

「大丈夫ですか？」

「う、うん」

は、はずかしい……こんな……十六夜ってカッコよかったっけ？

彼の顔はいつもの五割増し位カッコよかった。

最近の私の想いは何処か落ち着いていた。コハクが言った迷惑とかいろいろ考えてしまい、セーブをかけていたのだ。

しかし、その想いに再び火が付こうとする。

言うならば、冷え切ったアジフライを電子レンジにかける。いや、それだけじゃない。タルタルソースとレモン汁が付いたくらい。前とは比べ物にならない位。心に想いが募って行く。

十六夜は照れ臭そうに笑った

——貴方が無事でよかった

その時、恋のキューピットに心をハートの矢で十本くらい一気に打ち抜かれたような感覚に陥った。

顔が熱い……とんでもない……熱い、熱い、熱い。

そ、そうだ。お礼を言わないと……一言ありがとうって言わないと……

「フン、別にあれくらい一人で片づけられたから。十六夜が勝手にやっただけだし、お礼なんて言わないから！」

あ、あれ？ 思った事と言ってることが全然違う……つい、反射的に出てしまった。私はプイっとそっぽを向いた。

な、なんて失礼な……折角助けてくれたのに……

——い、一体、な、何が……私に起こっているんだ……

七十八話 答え合わせ

俺は焦っていた。

今までにない。予想外の出来事。

覚悟はしていた。何かがきっかけで本来の出来事とは違った事が起きるのではないかと……だからこそ片海アオイだつてこの町に呼んで仲間に加えた。

だけど、『中盤』に出てくる敵がまさか『序盤』に出てくるなんてそこまでのイレギュラーなんて起こりうるだろうか。

『崩壊世界』……中盤に出てくる『四天王』であるライオンが使う権能。

その世界では自身以外の者に呪いをかけ魔力を使えなくするという能力で、単純な方法では絶対に勝てない。

片海アオイが転校してきた後、『中間パワーアップ』をした後に本来なら戦う相手なので勝てたがこの時点では絶対に勝てない。

——しかし、俺は一つの必勝法を直ぐに思いついた。

先ず、ライオンの性格は自信家で非道で相手を弄びそして殺す。最悪な敵だ。命乞い、戯言何をして最後には絶対に殺し相手の苦しむ顔を何よりも好む。

そう、だからこそ。隙がある。

先ずは、敢えて逃げまどう。只管に。そして人型の影。あれはライオンが作った僕^{しもべ}。相手の性格からして絶対に使ってくると思つた。それで相手を疲労させて、ひたすらに疲労させてそして最後には希望を失わせて殺す。相手の性格からその程度は想定できた。

ずっと、逃げて、逃げて逃げ続けた。そして、遂にライオン本人が現れた。ずっと何処かで見えていたはずだ。逃げる俺達を見下しながら、それが飽きたので遂に殺す判断をした。

だが、追いつめていたのは俺の方だった。

この世界。維持するには魔力を消費している。それが長ければ長い程消費量は大きい。そして人型の影も魔力を使う。ずっと俺は魔力を使わせる事だけを考えていた。魔力は魔族にも怪人にもあり、強さに直結する。防御力、攻撃力、権能、全てに精通している。それで先ずは攻撃力、防御力をダウンさせる。

だが、それだけでは足りない。所詮、丸腰では動体視力が下がり動きなど見えるはずはない。これを使い、ダメージを与え防御をする。

——だが、それだけでは足りない。所詮、丸腰では動体視力が下がり動きなど見えるはずはない。いくら奮闘してもそこで終わり。

普通ならの話であるが……

俺は違う。昔から『魔装少女』を読んでいる。何度も、何度も。

当然、この敵が出てくる時も……その内にあることに気づいた。

明確な表記は『ストーリー』にも無かった。だが、確かにあった。

このライオン、独特の癖が……

突進してくるときは右足を下げる。

右手を上には振り上げる時は中指が僅かに動く。

左手を右に振るときは舌を一瞬出す。

蹴りは僅かに踏み込み地面に土の山ができる。

連撃は呼吸を整え全身の筋肉が大きくなり圧迫する。そこから俺を中心として、右、下、左、上、右、左、最高で六連撃。

それ以上はせずに一旦下がる。

さらに、挑発に弱く一度決めた相手以外に手を出さない。

防御、来る場所が分かるならそこに置いておけばいい。来る場所が分かるならそこに向けて銃を放てばいい。

無論、博打。もしかしたら、間違いの可能性もあった。その不安もあつた。しかし、同時に守らなくてはいけない人が居る。俺が退いたら今の彼女は誰が守るのか。それを考えたら絶対に退けない。そして上手くいく気もしていた。これは理屈じゃない。勘に等しい。

俺には幸運もある。だから大丈夫。
そう決めて向かって行つた。

魔力の消費によつて攻撃力を下げた事でシールドで防ぐことが出来、防御力を下げたことで銃でも貫通できた。

これが素の状態ならシールドが壊され、銃による攻撃も筋肉を貫通しなかつただろう。

俺だからこそできた裏技ともいえる。

それによつてピンチを切り抜けたのだが……彼女が……

「フン、別にあれくらい一人で片づけられたから。十六夜が勝手にやっただけだし、お礼なんて言わないからー」

まあ、別にお礼を求めた訳じゃない。それにライオンも彼女が本来なら討伐するのだから、彼女の言つてることも間違いじゃない。

中間パワーアップを終えた彼女はライオンに『崩壊世界』に連れてこられそこでライオンを倒す。

あそこを何度も読んだからこそ勝てたと言える。

そんなことを考えていると……世界に光の粒子が溢れる。この世界の主が居なくなり俺達は元の世界に戻れるだろう。灰色の世界が崩壊していく。

色のない世界の植物、荒野。そこに僅かに色がともつたような達成感を得た。

——足が震える。手が震える。死をここまで間近に感じたことは初めてだ。

あそこは腹をくくっていた。全てが終わり一気に体に負担がかかる。息をしていることが嬉しい。こんなに素晴らしい事なのかと錯覚する。恐怖からの解放。それが俺に喜びを与える。

——だけど、それ以上に彼女を守れてよかった。只管にただ只管にそう思った。

今後もここまで大きなイレギュラーが起こるのだろうか……そう思うと一刻も早く『アルテミス』に行かなくてはならない。ついでに『占い師』にももう一度占って貰おうかな……

そんな事を考えていると彼女が話しかけてくる。

「わ、私でも勝てたから、て、手柄を譲っただけだから……」

しかし、彼女の異様なこのツンツン具合はなんだろう。勿論、本心からこんなことを言っていないのは分かっている。

顔はもう、リンゴのように真っ赤である。熱でもあるのかと思う位真っ赤である。そして、チラチラ俺を見てはそっぽを向く。偶に目が合うとそっぽを向く。

腕を組んで強気でツンツンな彼女。確かに彼女はツンツンしているツンデレ属性を兼ね備えているのは『ストーリー』でも見ていたので分かってはいるが……しかし、だとしてもここまでツンツンするのは見たことがない。

いや、ツンツンではないかもしれない。怒っているのかもしれないおんぶしたときに……胸の感触を感じて少し幸せに感じたことに怒っているのかもしれない……

俺の予想では普通に『ありがとう』とか、『さすいぎ』とか言われると思っていた。しかし、言わずに怒っているという事はもしかしたら……そうかもしれない。

徐々に世界が光によって支配され俺は考え中のままその世界は消えて俺達は元の世界に戻った。



とある作者の部屋。冬と言う事もあり女性は絆纏を着てコタツに入り作業をしていた。コタツ机の上に資料を広げ只管に万年筆を走らせる。

しばらく、その作業をすると一旦休憩をしてテレビをつける。

『ストーリー構成に避難殺到』

『嘗ての栄光を穢すな』

『このように今、ネットでは完結した人気作品の発売した新たなストーリーに対する非難が殺到しています。作者、そして出版社に対する不満が強まっている現状です』

女性はため息をつき、テレビを回す。そして、再放送のドラマを見ながら餅を食べる。そこに彼女のスマホに電話が掛かってくる。

『はい……私です』

女性は力なくも返事をしてそこから会話へと発展させる。そしてスマホから聞こえてくる知らせに驚きつつ歓喜もした。

『そうですか……発売中止……プロットは練り終わったのですがそれでは仕方ないですね。はい……はい……それでは』

クツクツと彼女は笑う。机に置いてあった書いていた原稿用紙を破りごみ箱に捨ててプロットが書いてあるノートもゴミ箱にダンク。その後、羽を伸ばすように背筋を伸ばしてコタツに入りドラマを見た。

彼女が見たドラマはハッピーエンドと言う内容だった。

『やはり、ハッピーエンドが一番だね……』

『もうすべて終わったのだから好き勝手やらして貰おうかな？ 救済の物語を作るくらい別に問題は無いだろう？』

その後、彼女は再び新たなノートを出しプロットを練り始める。プロットを考えているときが一番楽しいのだ。

『折角だから救済の主人公でも入れてみようか。発売はしないがネット』

トに挙げるくらいしても問題はないよね?』

誰に聞くわけでも無く彼女は呟き、ただただ子供のように笑った。その後、何時間も思考にふける

そして、遂にペンを持ちノートに主人公の名前を書く。

『そうだね……この救済の物語の主人公の名前は黒田十六夜とでもしておこうか』



「大丈夫でしょうか、大丈夫でしょうか……」

「コハクちゃん落ち着いて……」

「でも、でも、嗚呼、お願いだから戻ってきて……お願い、お願い、お願い」

二人が連れていかれてから僕たちは一度彼の家に戻っていた。僕たちの雰囲気は重くて、とてもじゃないがこのまま居られない。

もし、このまま二人が帰って来なかったら皆バラバラになるかもしれない。そう思ってしまう。アオイちゃんは一言も発しないが動揺しているのは言うまでもない。

特にコハクちゃんは正直見ていられない。火蓮ちゃんの事も心配してるんだろうけど、それ以上に彼が居ない事で精神に大きな負荷がかかっている。

メルちゃんも色々調べているが一向に彼と火蓮ちゃんがどこに居るかは分からないようだ。

早く、戻ってきて欲しい……寂しいよ……

二人共大事な人なんだ。火蓮ちゃんは孤独から救ってくれた。彼は手を伸ばし続けてくれた。

どうか、どうか、どうか……戻ってきて。

そう願う僕の瞳からは涙が零れた。

七十九話 タブー

とある女性が雪降る中、街を歩いていて。すれ違う者達はカップルだらけ。何となく自身に寂しさを覚えてため息を吐く。

白い吐息を吐きながら進んでいく。

『救済の物語と言っても全く思いつかない……鈍ったのか？私も。

ハッピーエンドが思いつかないとは……』

彼女は頭を回して新たなるビジョン獲得の為に、お出かけをしているようだ。彼女は景色を見ながら歩き続ける。

冷たい風が彼女を突き抜ける。

『ファンにも悪い事をしたなあ、応援してくれた人も多かったのに……今度の主人公は……ラッキースケベ多めでサービスシーンを多くしよう。後、魔装少女が添い寝したとき何故か寝相が悪くなってエッチな展開になるのも追加しよう』

独り言を呟く。傍から見たらやべー奴だが彼女には気にしてる余裕はなかった。ファンが大炎上して罵詈雑言がネット上に飛び交っていた。

しかし、殆どが悲しみの声。それを彼女は悪いと思っていた

『今の所、主人公の名前と助っ人が占い師しか思いつかないし……性別とか……性格とか……これって言うのが思いつかない……スランプかな……』

アイデアが振ってこないと思いつながら歩いていると……信じられない事が彼女の前で起こる。

トラックが制御を誤り彼女の元に突進をしてくる。猪突猛進のトラック。彼女は咄嗟によけようとするのだが彼女の前には小さい子供がいた。その子突き飛ばし自分もトラックから回避しようとする

るが……

——大きな鈍い音が鳴った

『あ……れ……う？ も、し、か……して……死ぬ？』

周りでは一般人の悲鳴が聞こえる。彼女が守った子供は何とか生きていくようだ。

何て唐突でとんでもない幕切れ。自身の終わりを悟り、彼女の頭の中には走馬灯がよぎっていた。

記念すべき彼女の書いたライトノベルの一卷発売。彼女は本屋でずっと積み上げられた自身の本を隠れて眺めていた。

買え。買え。買え。買ってくれ。そう思念を送りながら……

周りからひそひそ話されたり店員には二度見されながらもずっと監視し続けた。そして誰かが手に取ると飛んで喜ぶ。

そして、彼女はネットで反響を調べた。面白いと言う人や中には全く面白くないと言う人さまさま。

面白くないと聞くと彼女は萎えて、豚骨ラーメンをやけ食いして二キロ太る。そこからまた痩せる。

面白いと聞くと嬉しくなって豚骨ラーメンを替え玉で大食いして太る、そこからまた痩せる、そういう生活を繰り返していた。

いつからか大ヒットして、アニメ化もして喜んで……でも、時代は変わって……

訳の分からない最悪の物語を書いて……

そして……

——ああ……これは罰……か……

彼女はそう思ってしまった。栄光を穢した自分への。

——彼女達には申し訳ない事をした……最後にハッピーエンドになる物語を描きたかった……

それは彼女の後悔。彼女にはドンドン後悔が湧いてきた。救済の物語も描けず、プロット、主人公の設定すら考えられなかった。

——主人公……彼女達を愛する者、真つすぐな者、自分を顧みず、魔力もあつて……そんな感じに……今になって少しづつ思いついてきた……安直だがそんな人が……

走馬灯と思い出し、後悔に沈みながら……彼女は……

願った。そんな人が彼女達を救って欲しいと



彼と火蓮ちゃんが帰ってきた。事情を聴くと訳の分からないライオンを上手いことをして倒したらしい。相変わらずとんでもない。

アオイちゃんは帰ってきた二人を見ると僅かに瞳から涙をこぼしていた。

そして、コハクちゃんは……

「十六夜君……良かった……」

「あ、そ、そのぎ、銀堂さん……当たってます……」

コハクちゃんが彼に抱き着く。いいなあ、コハクちゃん……間違つた……彼が羨ましいだった。

それにしてもコハクちゃん……目からハイライト消えてない？

気のせいだと思っただけ……後、あんな堂々と抱き着ける？ 恥ずかしさとかどうでもよくなるくらい心配だったから後になって恥ずかしさとかくるのかも……

僕にも抱き着いてくれないかな、彼……じゃなかった！ コハクちゃん！

「ちよ、ちよつとそういうのやめなさいよ!!」

二人の抱き着きを見て火蓮ちゃんが怒り心頭で二人を引つpegす。何というか……この感じ前にもあつたような

「何ですか。邪魔しないでください」

「この家でそういうの禁止だから」

「いつできたんですか」

「今」

「ここは十六夜君の家です。貴方のルールは無効です」

「社会一般的にそういうのはダメでしょ。常識考えてくれる？」

「は？」

「あ？」

あ、あれー？ おかしいぞー？ 最近良い感じの雰囲気だったのにここに来て二人がメンチきって前みたいになつてる。

それと彼も久しぶりに胃を押さえている。懐かしいなあ。後、火蓮ちゃんの感じが少し変わっている気がする。

なんて言えればいいんだろう。こう、何と言うか、瞳の力強さと言うか、想いの強さと言うか、火に油を注いってしまったと言うか。

そして、コハクちゃんもそれが伝染した気がする。二人は前から相

性は良さそうだった。いい意味でも悪い意味でも。

火蓮ちゃんが燃え始めたら……

「そもそも前から貴方が気に喰わなかったんです!」

「私もよ、って言うかコハク……少し太ったんじゃない?」

「はあああ!?! キープしてますう! めっちゃ気遣ってますう!! ギリ誤差に納めてますう!!」

「そう? 前よりポツチャリしてない? 特にお腹のぜい肉……キープ出来てないでしょ」

「さ、最近、肩甲骨のトレーニングと腹筋のトレーニングと、縄跳びを始めましたから絶対超スリムになります!!!」

そう言えばコハクちゃんって体重とか体型とか物凄く気にするんだよなあ……前に……

『え? え? え? う、嘘……え? 何で』

『どうしたの? コハクちゃん?』

彼女が体重計に乗って青ざめていたのを発見した。下着姿でお風呂呂に入る前に体重を測っているようだった。

『よ、六百グラム……太ってました……』

『なーんだ。そんなの誤差じゃん』

『い、いえ。このまま、いいいいいい、行ったら……重さで地盤を貫通して星の裏側に行ってしまうかも……さらに十六夜君から幻滅されて……あわわわわわ、ど、どうにかしないと……』

『いやいやいやいや考え過ぎだって。十分スリムだよ? 全く太ってない。可愛くて最高だよ!! 太ってないし、体型だって女の理想だよ!! モデルみたい!』

この時の僕はフォローをしたつもりだったんだけど、同時に本当の事も言っていた。彼女はちよつと考えすぎだから気にしなくていいよって事を伝えようとしていた。

『……先輩、ちよつとそこで脱いでもらっていいですか?』

彼女が疑いの眼差しを向けて僕に話してきた

『あ、うん。良いけど』

僕は服を脱ぎ下着姿になると下から上までじつくりと観察をした。何というかこの時の彼女に見られるとちよつと緊張した。

『嫌味ですか?』

『ええ!? 何が!?』

その後、彼女はいきなり怒ったように僕に言葉をぶつけてきた。苦虫を噛み潰したように顔を歪め目はちよつと怖い

『コハクちゃんはちよつとポツチャリだけど気にしなくていいよおお。まあ、僕のスタイルは鬼だけどねえ……みたいなことを言いたいんですよね?』

『偏見、偏見!! そんなことないって! 純粹に褒めてるだけだつて!! っつて言うか鬼つてナニ!?』

『本当にそうですか? 異常なほどの細くてエツチい足。引き締まったお腹。形が良くて結構大きい胸……嫌味ですか? どうせ、私は豚ですよ……』

『だから違うって!! 話聞いて!!』

彼女に体型の話はタブーだと言う事を僕は悟った。そして、そこに更にアオイちゃんもやってくる。

『何騒いでんの?』

とんでもない助っ人が現れてくれた。この時のコハクちゃんは何を言っても嫌味にしかとらない程、体重とか体型に悩んでいた。ここでアオイちゃんも言ってくれば説得力が増す。

『アオイちゃん、良いところに! コハクちゃん、全然太ってないよね!?』

『え? あ、うん、そだね。太ってないよ』

アオイちゃんはその場の空気を察してくれたようで直ぐにフオ

ローをしてくれた。しかし……

『アオイ先輩そこで脱いでもらっていいですか……』

『いいけど……』

アオイちゃんが服を脱ぐ。やつぱりと言うかアオイちゃんは引き締まった肉体美で胸もあつて何というか……程よい感じ……ちよつとエツチい、言い方だけど……引き締まっていい感じなのだ……

今すぐにも褒めちぎりたい所だが……捻くれたコハクちゃんの前では……

『またですか?? ……そうやって先輩二人でぽちやぽちやした、私をぽちや子ちゃん扱いですか……』

『そ、そんなことないって……』

『アンタ十分スリムだよ。ほら、皮下脂肪も……』

そう言つてアオイちゃんはコハクちゃんの横腹に触り、優しく摘まむ。ほら、全然ない……あ、ちよつと思つたよりあるかも……

『ない、ジャン……』

アオイちゃんもつまんでみると思つたよりあつたみたいで言葉に詰まつてしまう。自慢ではないが僕は皮下脂肪が殆どない……アオイちゃんも……かなり捻くれたコハクちゃんには、いや、年頃の乙女にはかなりの嫌味行為に取られてしまう可能性もあるかもしれない……

『今、あ、この豚、思つたより脂身が乗つていて食べごろだなんて思いましたね?』

『いや、そこまでは……』

『もういいです。先輩が二人して虐めるのもうお風呂入ります』

一人、どよんと影を落としながらお風呂に入つて行く。この時、僕たち二人は決めた。

『アイツには体型と体重についてはタブーみたいだね』

『そ、そうだね……大分ひねくれちゃたみたいだし……』

この後、コハクちゃんが自分の不徳の無さを僕たちにぶつけてしまい、失礼な態度をしたと謝罪してくれた。

こういう事があったので嫌が応にもその話はしなかったんだけど……火蓮ちゃんが爆弾を落とした。

火蓮ちゃんもスリムで全く体型維持とか気にしないらしい。しかも、痩せ体質。この間も夜に一人ポテトチップを割りばしで食べていた。それを見たコハクちゃんが親の仇を見るような目で火蓮ちゃんを見ていたのを知っている。

火蓮ちゃん……体型とか言うのは止めておこう。特に最近是他が近くにいるから余計に気にしてるらしい……

僕はこの騒動が一旦落ち着いたら火蓮ちゃんにそれとなく助言しようと思った。



最近の私は何処か可笑しい。

十六夜に助けってもらってから何というか……十六夜に素直になれない。前はまだ話すくらいなら容易だった。

だけど、今は面と向かうことですら心臓がスライムのように跳ねて、体中が熱くなって、脳が沸騰する。

そのせいで何を言っているか分からずオーバーヒート。そして、遺伝と思われるツンデレ体質。この二つでついつい天邪鬼のように反対の事を言ってしまったり、思ってもいない事を言ってしまう。

助けてもらった次の日の朝も……

おはようと言うつもりだった。

目のまえに寝間着姿の十六夜……

「お、お、お……」

まさかの『お』で止まる。たった四文字。それが言えない……胸が苦しい。鼓動がドンドン大きくなり頭が沸騰する。眼がぐるぐると回っているような錯覚を受ける。

「おにぎりが朝ごはんだからとつと食べてくれる？ 片付けられないから」

もう、最悪!! とんでもないほどの嫌味な女と思われても可笑しくない。それなのに十六夜は

「すみません。急いでいただきますね」

全然怒らない。寧ろ俺が悪いから仕方ないな感じである。ママが言っていたことはこういう事だったんだ……そう思った。

親子で好きになれば成程、どうしていいか分からないツンデレ体質……とんでもなく厄介な体質だ……

普通ならベタばれで積極的にアタックをしたい所。しかし、それができない。その癖に十六夜が女の子と仲良くするとムカムカして嫉妬して、ついつい強く当たってしまう。

こんなのは……最早、悪役令嬢より質が悪いかもしれない。

こんなんではデートなんか誘えない。言いたいことが言えず、何を言ってもいいか分からなくなる。これではいけない。

そして、最近になって十六夜を遠くに感じることもありそれが焦りにも繋がる。

十六夜は一步引いているような、私達には壁があるような……そんな感じもしている。

この現状を打破したい。何としても……そのためには……

——先ずは……ツンデレママに相談しよう

八十話 壁

俺は再び占い師へと電話をかける。理由は本来とは違いすぎる『ストーリー』の流れだ。もし、あの時ライオンに……と考えることも出来る。何が起こっているのか分かるのであれば聞きたい。

「もしもし」

「……もし、もし」

彼女の声は全く覇気が無く以前のよう自信あふれる声はどこに行ってしまったのか。

「どうしたんですか？」

「い、や、最近、変な夢を見すぎての……睡眠が足りん……」

「そ、そうですか……」

良心が痛むが仕方ない、彼女に占いをお願いしよう。

「あの、占いをお願いしたいんですけど……」

「うむ……分かった……」

力なく彼女は呟き数秒経過する。するとやはり直ぐに占いの結果が出る。運だけは俺は良い。

「お主の周りにいる……四人、それぞれに再び黒雲のような霧が掛かっている。だが、紅蓮の赤は回避されている」

「やっぱり……一人に二つも災厄が振りかかるとかあるんでしょうか？」

「我もこのようなことは前例がないから分らんが……一度回避したのだが……再び生まれたのか、そこらへんは分らんが……そもそも二つあったか……」

一つ回避したらもう一つなんてありえるのか？ 『ifストーリー』にはそんな感じの話なんて無かった。イレギュラーなのか何なのか分からないけど……恐らく中ボスであるライオンが来たから残りの三人もどんどん来るのではないかと勝手に予想はしている。

「あの、あの大海の青の顔は知ってますよね？　なので至光の銀白、稲妻の黄の写真を送るので三人共占ってもらっていいですか？」

「分かった……いったん切るぞ……我は寝る……ああ、それと他の三

人はまだ最悪は先じゃ、それだけ……」

「よろしくお願いします」

プツンと電話が切れる。大分やつれてたな……
彼女にもいろいろ事情とかあるんだろう。そんな中協力してくれるのだから感謝。

写真は前の集合写真を送って、片海アオイの顔は知ってるから彼女に占ってもらおう。

後は、出来る事をしないと……来るべき災厄。残りの四天王と仮定して、ならば異世界アルテミスに行ければ全てが解決できる。
これからの考えながら俺は一旦、リビングに向かった。



私は一人寝室で電話をかける。数回コールすると繋がり、私はママに話し始める。聞きたいことは今現在の私の事情を踏まえて、今後どうすればよいかと言う事である。

「もしもし、ママ？」

「そうよ、どうしたの？ 十六夜君と婚約の報告？ それとも恋人関係になった事の報告？」

「……それ以前の問題……」

いきなりのママの期待するような声。それが私の心に重くのしかかる。現在の私の状況は前と全く進歩していない

いや、寧ろ……後退しまくっているともいえるからだ。

「……大分元氣ないのね……何かあった？」

「うん……その、端的に言おうと……前より十六夜の事が……その、好きって言うか……良い感じに見えて……そのせいで、まともに話せなくて……思ってる事と反対のこと言ったり、全く心にもない事言っちゃうから……どうしたらいいかなって……」

ママには魔装少女の事は秘密だから、ここに至る事情は言えない。だから、省いて伝える。

「そう……難しいわね。私も最近までそういう状況と言えるような感じだったから……」

ママの声は深刻そうで後悔するような声だった。パパとママの離婚騒動。あれも助けてくれたのは、手を伸ばしてくれたのは……そう思うと頬が熱くなる。

「でも、やっぱり向き合っていくしかないのよ。いくら伝えずらくても、正直に真つすぐ……じゃないと進めない。それをあの人と火蓮と十六夜君が教えてくれた」

「……」

「だから、頑張つて。私からはそうとしか言えない。大丈夫、貴方は誰よりも出来る子。勇気もある子。絶対できる。だから、前みたいに一歩踏み出して」

「うん……ありがとう、ママ。頑張ってみる」

「頑張つて……また何かあればいつでも言つてね。それじゃ、またね」「うん、また……」

ママとの電話が終わる。

ママが背中を押してくれた。やればできるつて言ってくれた。よし、やってやろうじゃない!!

話すだけ、前みたいに話すだけ。アニメの話でも漫画でもラノベでも、何気ない日常的な話でもいい。話せないなら話せるまで話す。ただそれだけでいい。

その考えで私は取りあえず十六夜の元に向かう。ここは十六夜の家なので直ぐに見つけることが出来るのだが……普通に考えて一つの男の家に住むつてヤバくない？

今更感半端ないけど……今考えるとかなりアタフタしてくる。そんな中家中を探しているとリビングに到着する。

というわけで……家主の十六夜が現れた!!!

「あ、あ、えっと」

「どうかしました?」

き、き、緊張してきたあああ!! お、落ち着け。まずは世間話から……

「さ、最近熱いわね……」

「そ、そうですね。夏ですから……」

「き、気温も高いわね……」

「そう、ですね。夏ですから」

「……どうして、こんなに暑いのかしら?」

「えっと、夏だからだと思えます……後は地球温暖化ですかね?」

や、やばい。十六夜も何を話しているのか分からないって顔してる。私も何を話しているのか分からない。まずい、非常に不味い。最近私がツンツンしすぎて距離が出来始めてる気がする……

このまま離れ離れなんか……いや、今は考えるべきではない。

世間話は失敗。しかし、私には、私達には二次元ネタがある。これで挽回よ。落ち着け、私は年上。十六夜は年下。

年上の貫禄を見せつけつつ精神を統一するのよ。

「そう言えば、最近、面白そうな新作のラノベが出たの……」

「どんなあらすじなんですか?」

十六夜が興味深そうに聞き返す。ようやく前みたいに話せる感じになって嬉しいんだけど……タイトル何だっけ?

「ちよっと待って、ド忘れしたからスマホで確認する」

「はい」

やばい順調に少しでも行くと嬉しくて記憶が飛ぶ。誰が私がこんな感じになるなんて予想しただろう。ちよっと強かったり、思ってる事と逆を言ったり、それを分かったうえでわざとツンデレをしていた。

でも、本当にツンデレになるとこんなもどかしくて、ほんのちよっ

と話せるだけで嬉しすぎて自分を忘れてしまう。心が躍る。

スマホで新作ラノベを確認を……確認……確認……できない。十六夜の家のWi-Fiの調子が悪い……借りてる立場だからとやかくは言わないけど……

「あの、どうかしました？」

「ああ、うん、ちよつと……スマホの調子が……ツ!!」

十六夜が不思議そうに私の顔を見る。私も彼の顔を見る。彼の瞳に私が映り込むのが分かった。

彼の瞳、やさしくて強い、何度も見てきた。いつも支えてくれて誰よりもまっすぐ見てくれる。

『俺が背中を押します。何かあっても支えます。だからもう一回挑んでください!! 後悔する貴方を俺は見たくない!!』

『おかげで私たち家族の蟠りが大分解消したわ。全部十六夜のおかげよ。本当にありがとう』

『先輩たちが一歩踏み出したからですよ。俺は背中を押しただけですから全部俺のおかげではないです』

唐突に過去の記憶がフラッシュバックする。どうして、今になって……ようやく鼓動が落ち着いてきたのに……

『貴方が無事でよかった』

震える脚を奮い立たせてあの時、私の前に立ってくれた彼。それを思い出す。

次の瞬間、

——脳が沸騰した

「えっと、火原先輩？」

「ツ！ ……わ、Wi-Fiの電波弱すぎ!! ルーター変えなさいよ!!!」

「す、すいません。朝は調子いいんですけど……それ以外は偶に調子悪い時があつて……」

やって、しまった……そんなことを言うつもりなんて全くなかったのに。変な事で怒ってしまった。十六夜は悪くなんて無いのに……

最低だ……

私はそこから走って離脱して寝室に向かった。

「先輩!？」

あの日と同じ、あの時と同じ、言いたいことが言えず何度も同じこと繰り返す。結局私は変わっていない。

情けない、情けない、情けない。

意気地なし。ママに励まして貰ったのに、十六夜に何度も突っぱねた態度。

最悪最低、人徳がない、そう言われても可笑しくない。

きつと彼もいつか私を嫌ってしまうだろう。今は優しさで笑ってくれるけど、いつか、呆れて見限って離れていってしまうだろう。

でも、それが嫌だとも思ってる。自分勝手が過ぎる。自分がこんなに情けなくて、どうしようもない女なんて知らなかった。

私はその場から逃げるように去った。魔装を纏って

靴を履いて家を出て……何処に向かう訳もなく、風すら置き去りにする速さでただ走った……



火原火蓮とは最近、なかなか話せない事が多い。彼女がかなりツンツンして『本来』とは違いすぎて何をどうしたらいいのか……分からない。あそこまで彼女がツンツンする理由は何なんだろう。

同居生活にストレスでも感じてしまったのか。俺を嫌ってしまっただのか……いや、それは無い……よな？ そうだったら悲しいどころの話じゃない。

追うか、追わないか。そう聞かれたら勿論追う。ただ、彼女が俺を嫌いになってしまったなら……そう思うと心臓が痛い。

だが、何かあるなら行かないと。不安があるなら聞くと、改善してほしいところがあるなら直す。

彼女は魔装を纏って出て行った。俺も魔装を纏わないと追いつけない。急いで纏い外に出る。

しかし、彼女の姿は何処にもなく見渡すことが出来る場所に行き、町全体を見渡しても見つからない。

異常ともいえる猛スピードを彼女は出すことが出来る。そして、俺は彼女がいきなり出て行ったことで出遅れてしまった。僅かな時間出遅れただけがそれがとんでもない距離を作り出す。

何処に行った……

人の家の屋根から屋根を飛んだり、銭湯の煙突に乗っても見つからない。気付けば何時間も見つからず焦りを俺は覚えていた。

こういう時、彼女なら何処に行く？

分かっているはずなのに分からない。知っているはずなのに知らない。そう言った矛盾した感情が渦巻く。

思考しながらも動き回り、日が落ち始めオレンジ色に町は染まって行く。

焦りに焦って……どうしたらいいか分からない。そう思ったその時、

ふと何となくだがあの公園が頭に浮かんだ。

あの日、彼女と向き合った場所。

まだ、あそこは見えていなかった。そう思いその場所に走った。

◆◆
夕日に照らされる錆びれた公園。子供たちはもう帰り始め、滅多に使われない公園には誰もいないと思う位静かだ。

しかし、その寂びれた公園のくたびれたベンチに赤いセーラー服に身を包んだ少女が体育座りして顔を膝に埋めていた。

見つけた。と俺は戸惑いながらも彼女の元に向かう。そして、彼女の元に近寄りベンチに腰を下ろす。

「あの、火原先輩？ 何か不安とか悩みでもあるんですか？ 何かあつたら聞きますよ？」

「……」

「もう、遅いですし一旦家に帰りませんか？ そこで話を……」

火原火蓮は絞り出すような声を発しながら首を振った。

「放っておいて……」

「それは無理です。貴方を放つてはおけない」

「もういい、私はこのまま……一人が好きだから放っておいて」

彼女はずっと体育座りで目を合わせずただか弱い声を出すだけだった。本当に大きな悩みでもあるのだろうか。

「そんなのは出来ないです」

「放っておいてよ……」

「嫌です」

「どっか行つて」

「此処にいます」

「いいから……どっか行つて！」

彼女の大きな声に僅かに驚きを隠せない。彼女が俺を拒絶する。

前とは違う。前はその理由が分かった。家族と言う絆にひびが入りそこに踏み入るのが怖くて、それを变えたくても何もできずそこに触れてしまったから彼女は拒絶したように振る舞った。

でも、今は分からない。本当に拒絶されてしまったのかもしれない。

多分、いや絶対に彼女に拒絶されたら俺はショックで寝込んでしまおうだろう。怖い、彼女に踏み込むことが。

何より怖い、拒絶されるのが。

だけど、やっぱり俺は彼女が好きだ。彼女達が好きなんだ。

そんな状況を見過ごせない。俺は嫌われても拒絶されても何としても彼女と向き合う。

「絶対に行きません……俺は貴方が泣いていたら絶対見過ごせないんです。だから、言ってください」

正直、嫌われたくはない。でも、前から決めていたことだ。彼女達の為なら何でもやるって。どんな結果になってもいいって。

「ツ……意味わかんないのよ！ 私は一人が良いって言ってる！何で放っておいてくれないのよ！」

彼女が膝から顔を離し、俺を見る。彼女の顔は目元が腫れていた。きつと泣いていたんだろう。

彼女の顔から涙が落ちる。ぽろぽろと落ちていく。泣き顔を見せる彼女を見て俺が知っているどの顔でもない彼女だと分かる。

彼女の疑問に俺は嘘をつくべきでない。本心を言わないと意味がない、言わないといけないと分かった。そうしないと変わらない事も。

彼女の疑問の答えは簡単だ。ずっと前から分かっていた。だから言おう。

だけど、この答えには少し齟齬がある。俺は確かに彼女達が好きだ。何よりも大事で何よりも優先するべきこと。

だけど、俺は彼女達を何処か……『キャラ』として見ていたんだ。その常識が抜け切れていなかった。

だから、自分が思っていた行動と違う行動をすれば戸惑ってしまった。

だけど、そんなのは当たり前だったんだ。

人は変わって行く。それは彼女達も。俺と関わって行く中で彼女達は変わりつつあるんだ。それを、そんな当たり前前のことを俺は分かっていたいなかった。

俺は好きだ。彼女が『キャラ』として、だけど『一人の女性』としても。それを自覚して今。心臓が大きく高鳴り始める。

二次元の話をしてる時、偶に照れる時、他の女の子と話していると嫉妬して頬を膨らませる時、ツンツンしてる時。

笑っているとき。知らない顔の時も態度の時も、全部が好きだ。

「俺は死んでも火蓮かれん好きだから。それだけ。だから、どんなに嫌われなくても、拒絶されてもそれでも君が泣くのは見たくない」

「え？ う、嘘……」

「嘘じゃない。だから言ってくれ。何でもする。何でも。君が泣かないでくれるなら」

「あ、いや、その……」

彼女は戸惑いながらもその瞳から涙が零れ落ちる。それがドンドン強くなり彼女の涙が止まらない。

手で何度も彼女は目を拭う。しかし、それで全てを拭う事は出来ない、次々から次にもう滝のように出てくるからだ。

「い、言う」

「そうですか！ ではどうぞぞ！」

「で、でも………ちよ、ちよつとここで待ってて」

彼女は泣きながら、かすれた声で言うと大急ぎでその場から離脱した。その時の彼女は風なんかよりも速く、光のような速さだった。

彼女が去ると一人寂びれた公園で一人。

すると途端に冷静になる。

いや、好きって言ってしまった!!

ムードとか考えろよ!! そもそも精神年齢年下JKに告白って何

か不味くない!?

犯罪じゃない!?

しかも、何か敬語じゃないし！ 途端にイキってタメ語使ってるし！
！それがますます恥ずかしい！

でも、話してくれるって言ったしそれは良かったのか？ ちよつと待っててと言ったがそのまま帰られたりしないよな？ 大丈夫だよな？

生暖かい風に吹かれながら彼女を待った。



えええええええ!?

こ、告白されちゃったんですけど!?

もう、涙完全に引っ込んじゃった……嬉しすぎてニヤニヤが止まらない。ちよつと待って……

冷静になろう。冷静になろう。冷静になろう。氷のように、氷属性のように。冷静に、冷静に……

……告白されちゃったんですけど!?

いや、無理無理！ この状況で冷静は無理でしょう!! いきなり過ぎない!! いや、嬉しいよ、最高だよ。でも、心の準備が出来ていないし、今の私は思ったことがなかなか言えないから時間を設けた。

私がこんな嬉しいのは彼から好きと言って貰った事だけじゃない。最近ずつと感じていた私と、いや私達と彼の壁。薄くて見えないけど絶対にあると感じていた壁にヒビが入ったような気がしたからだ。

でも、まだそこにある。ガラスの壁のように私達を隔てていた。

多分、私が行かないと壊れない。片方じゃなくて両方で行かないとダメなんだと思う。でも、今の私にはどうすることもできない。

思ったように話すことも伝えることも……

「ただ、十六夜があんなに言ってくれたのに……諦めたくない。だから、あの時みたい……踏み出す。」

私は十六夜の家に入り急いで手紙を綴った。魔力で作られた自室に入って机に向かい合っていると萌黄が入ってくる。

「火蓮ちゃん、どこ行ってたの？ もう、心配したんだよ？ あれ？」

「彼と一緒にじゃないの？」

「ごめん、直ぐに私出かけるから。先ご飯食べてて」

「また出かけるの？」

「うん」

手紙を書き終えたら急いで家からでた。これで本当に彼に伝わるか分からない。

壁が壊れるか分からない。想いが伝えられるか……また傷つけるようになってしまおうと思うと怖い。だけど、何度でも……挑んでやる。

公園に到着すると彼の隣に座って手紙を広げる。顔が熱い。顔だけじゃない体も心の全部熱い、マグマのように自分が燃えていると錯覚する。

「十六夜、聞いて」

「は、はい」

「私は、十六夜のこと、す、す、す、好きです！」

手紙に記した本心、私の全てを彼に向かって伝える。恥ずかしい、心臓が飛び出しそう。

「家族を救って貰って、どんな時でも優しくカッコよくて、一生懸命な貴方が、好きです。世界一好きです。でも、私は最近、思ってる事と反対のことを言ったり、思ってもない事を言って貴方を傷つけてしまう。でも、それでもあなたと一緒に居たい。ずっと、ずっと一緒に居たい。貴方が遠く感じる時もあります。大きな壁が私達にはあ

るように感じる時もあります。意味が分からないかもしれないけど
そう思うんです……」

「だけど、一緒に居たいんです」

「こんな世界一めんどくさい私ですけど……あなたと一緒に居てもいい
ですか？」

獄炎の火山かなにかなのか。熱すぎて溶けそう。十六夜は目を
キョロキョロさせてアタフタして顔を真っ赤にして……

「あ、当たり前です。そ、そんな貴方が好きなんですから……」

……伝わった。そう思うと再び涙が止まらない。嬉しくて体が軽
い。私は気付いたら十六夜に身を預けていた。公園で抱き合う二人、
とてもロマンチックな感じだ。

「……えっと、正直、俺嫌われたかもって思ってた……よかった、
火原先輩に嫌われてなくて」

十六夜がポツリと不安をこぼした。これまで彼がこういつた事を
言う事は無かった。私はそれに僅かな嬉しさを感じて、同時に自分が
どうしようもない存在だと思った。

もう、手紙に続きはない。気持ちを綴った手紙はない。

でも、もう少しだけ……頑張れ、私。

やはり、手紙じゃないと難しい。彼の前だと上手く考えが纏まらな
い。頑張れ、私!!

「……勘違いしないで。私、十六夜の事が大好きなんだから……」



もう、完全に日は暮れた夜道。

二人組の男女が歩いていった。一人はアジフライのような少年で一

人は精霊のように美しい少女。互いに顔を赤くして勢いで色々やり過ぎたと反省しながらそれでも互いに歩幅を合わせる。

不意に少女の手の甲が少年に当たった。少年は最初は偶然かと思ったが、それは一度じゃない、何度も何度も当たって、それが少女の意思表示だと少年は気付いた。

少年は少女の手を取った。

「ッ！」

互いに何も言わず、ただ只管に一緒に歩く、だけどその手を互いに握りながら

両者共にこの時の心境は一緒だった

——手汗ヤバイ……ウエットティッシュで拭いておけばよかった

——でも、尊い

八十一話 ヤンデレ、数歩手前

とある夜、僕たち四人は二人の帰りを待つていた。コハクちゃんもアオイちゃんもメルちゃんも夕食を食べずに待つて居た。

既に時刻は七時を回っている。こんなに遅くまで二人で出かけるなんて……いや、二人で出かけるとは言っていないけど、ここで二人が居ないって事はそういうことなんだろう。

それを察してかコハクちゃんはニコニコしながらも何処か怖い。アオイちゃんはどこことなく不機嫌そう。因みにメルちゃんは寝たふりをして二人に触れないようにしている。

それにしても連絡もなくここまで遅いなんて一体何をしてるんだろう？

まさかとは思うけど如何わしいことはしてないよね？

『い、十六夜、優しくしてね？』

『はあ、はあ、火原先輩』

『私を手籠めにして……』

無い無い。二人に限ってそんなことはない。こんな妄想をしてしまふ僕はどうかしてる。

今日の夕食は麻婆豆腐。コハクちゃんが作ってくれた。とっても美味しそうなんだけど……味するかな？

そんなことを考えていると……遂に玄関のドアが開く音が聞こえる。

「すみません、お待たせしました」

「あれ？ 食べてていいって言わなかった？」

彼と火蓮ちゃんが帰ってきた。そうするとコハクちゃんは薔薇のような笑顔で出迎える

「ずいぶん遅いお帰りですね？ 二人してどこで何をしていたのやら

……ご説明頂けますよね？」

「あ、そ、そんな言う程のことじゃないわよ……」

彼も火蓮ちゃんも顔を赤くして互いにチラチラ見ては逸らす……え？ 何があつたの？

「ねえ、早く座つてくんない？ 待ちくたびれたんだけど」

アオイちゃんが二人に座るように促す。かなり怒気を含みながら。意識的か無意識的か、判断しかねるが面白くないと思つているのは分かつた。

「すみません」

「悪かつたわ。ありがとう、待つてくれて」

二人が席に着くと全てを察していたメルちゃんが白々しく起きる。

「よう寝たわ。じゃ、食べようや」

それぞれ挨拶をすると夕食のメニューの麻婆豆腐を取り皿に取り、食べ始めたり、味噌汁をすすつたり。

特に会話はない。しかし、そこにいる女の子達は全員分かつていた。火蓮ちゃんと彼に何かあつた事が。

そして、彼女が現在リードしていることも……

それぞれが状況を分かつていた。彼は特に分かつていないようだが。

まず最初に動いたのはメルちゃんだった。巻き込まれたくないと思つているのかいち早く食べ終え部屋を出て行った。

ダイニングのテーブル席は彼が縦でそこに向かい合うのがメルちゃん。右側の横の辺に火蓮ちゃんとアオイちゃん。左側の辺にコハクちゃんと僕が並ぶ。

まあ、彼を挟むのはいつもの二人と言うわけで……

そこでまず動いたのはコハクちゃんだった。この中で間違いなく独占欲が強いのは誰かと聞かれたら彼女だろう。

「十六夜君、あーん」

レンゲに彼女特製の麻婆豆腐を乗せて彼の口元に運ぶ。コハクちゃんは普段はこんなことはしない。彼女はなにやらよからぬものを感じ、自分に気を向ける為に唐突な行動に出る。

「あ、いや、その」

彼はどうしたらいいか分からないような表情でアタフタし始める。そして、火蓮ちゃんをチラ見した。それにアオイちゃんも気づき目を細め、コハクちゃんは意地でも食べさせようと笑顔を向ける。

その笑顔が何処か闇がある感じ。そして、食べるまで私は引かないという確固たる意志を感じ取れた。

それを彼も感じたようでおどおどしながらも口を開ける。

「あーん」

「あ、あーん」

すると、今度は火蓮ちゃんがレンゲに麻婆豆腐を乗せて彼の口元に運ぶ

「ほら、仕方ないから食べさせてあげる。口開けなさい……」

「いえ、先輩はそんなことしないでいいですよー。私があーんするんですから」

「いや、仕方ないから私がする」

「仕方ないなら、すっこんでいてもらえますか?」

荒れ狂う二人。未だかつてないくらいに大きく、しかし、二人は静かに闘志を燃やしていた。コハクちゃんの後ろには白いトラ、火蓮ちゃんの後ろには朱雀が見える……

彼の後ろには小魚一匹で冷や汗を垂らしながら膝に拳を置き、顔を蒼くしている。

「ほら、十六夜君あーん」

「わ、私のも食べなさいよ……だ、だって、私達は……」

二人してレンゲを向ける。火蓮ちゃんは小さい声で何かを言っていたようだが聞こえない。

彼は両方のマーボーを食べる。

「はい、ご飯と一緒に食べるともっと美味しいですよ。あーん」

「わ、私のもた、食べるわよね?」

次々と彼の口に放り込んでいく。数分経過……

あ、これ、収集付かなくなるやつだ。二人はわんこそばか!? と言う位のペースでどんどん彼に食べさせる。ライバル関係である相手がいることで歯止めが利かなくなってしまうた。

もう、止めて彼の胃袋の残量はゼロだよ!!

「も、もう、そろそろ一旦止まろうか!? 彼もお腹いっぱいだと思うし!」

「そ、そうですね……すみません、十六夜君」

「わ、私もやり過ぎたかも、ごめん」

「いえ、滅茶苦茶美味しいので全然大丈夫です」

彼がそう言うのと二人はほっと一息をつく。

「十六夜君、この麻婆豆腐は私が作ったんです。こーんなに美味しい物を私は作れません。長い目で見て色々判断してくださいね? 例えば料理があんまりできない年上とか……」

「なっ! 十六夜。この意地のわるーい後輩は無視しなさい。最近、太って来てるし」

「た、体重は関係ないじゃないですか!」

「なによ!」

彼は相変わらずさういった場面ではどうしていいか分からない様子。だけど、分かる。彼の視線が前とは違う。

それは僕たち全員に共通するけど、火蓮ちゃんだけ、若干違う。それに気づいたからコハクちゃんも焦ってるんだ……アオイちゃんも……

「あーし、風呂入る……お先に」

アオイちゃんが出て行った。心の中にモヤモヤものが残っているんだ……僕だって……

いや、止めよう。負け戦をするほど僕は馬鹿じゃない……

その後、二人を何とか宥めてこの場は収まった。

◆◆
あーしは一人湯船に浸かる。暖かい湯はあーしの心身に染みわたる。いつもなら疲れが取れてスツキリする。

だけど、今日は……スツキリしない。アイツが……アイツの目が……火蓮だけ違う。何となくだけど……

火蓮は友達、それはゆるぎない事実。なのに、あの一瞬、彼女に向けて黒い感情が芽生えた気がした。

アイツと信頼し合った火蓮を見たくない。あーん、だってイライラした。

コハクにも……黒い感情があった。何かは分からない。気のせいかもしれない。きつとそうだろう。友達にそんな気持ちを向けるはずがない。あーしは湯船に潜る。

頭のとっぺんまで湯船に浸かり全てを落とした気分にした



湯気が立ち上る十六夜の家のお風呂。

湯船に浸かり気持ちを落ち着ける……今日告白された……好きって言われた。ああ、愉悦、最高、幸福。

ありとあらゆる感情。

ただ、付き合うとまでは至らなかった。今現在の私達は簡単に言えばチームで動いている。コハク、萌黄、アオイ、メル。十六夜の事をどう思っているかは大体想像できる。

メルは一切考えなくていい。安全安心。危険度はスライム。

アオイは……駆け出し冒険者位かしら？ なんとなくまだ大丈夫そうね。とんでもない才能を秘めている可能性はあるけど警戒はし

なくていい。

萌黄は……いや、萌黄も微妙ね。中堅冒険者くらい。だけど牙を隠してると感じて……俺駆け出したって言ってるけど、実は!?

見たいな感じね……多分だけど……

それで、英雄クラスのコハク。豊潤な肉体の塊、いつも私は太つてるとか言ってるけど彼女はそんなことは一切ない。若干ひがんでいるんだ

英雄、しかもかなりの肉食系。あざとい事も出来て本当の意味で全部使われたら一溜りもない位危険。びりびりと電撃のように乙女の信号に彼女は引つかかる。

まあ、しかし、今現在、堂々の一位なのがこの私なのだけれど……

私達は世界を背負っている。だからこそ、ここで十六夜と付き合い合ったりすることはできない。一応チームなわけで、その中がギクシヤクするのは良くないだろう。十六夜は私達の仲を気にしているし……

それに彼は私を好きと言ったがどんぐりの背比べ状態。確かに頭一つ抜けた感じはするが逆に言えばそれだけ。これから四つくらい抜けるまではアピールを続けよう。

上手く出来るとは限らないが……

……
色々事情は重なっており、思うように動けない私だが……でもね

私がメインヒロインなのは変わらない。

「好きって言ったんだから、私に言わせたんだから……責任は取ってもらおうわよ……十六夜」



十六夜君と火蓮先輩に何かあった……と私は直ぐに見破った。彼の向ける目がいつもと違う。それにどうしようもない焦りと嫉妬が私を支配した。

今まで十六夜君が私と火蓮先輩に若干意識した視線を向けることは何度かあった。だけど、お互いにそれ以上にはならなかった。だから、余裕を持つてずっと接していたのにその均衡が崩れ始めた。

麻婆豆腐をあーんで食べさせてあげて、本当は凄く恥ずかしかった。だけどこれくらい大胆にしないといけない。

でも、火蓮先輩との差が埋まっただけ……

彼女が食べさせるときだけ、十六夜君の反応は僅かに違う

ずるい、ずるい、ずるい、ずるい、ずるい、ずるい、ずるい。

なんで？ 私の時よりドキドキしてるの？ なんで？ ねえ？

なんでなの？

その時は上手く取り繕って、ただ張り合っただけでも差を埋めたくて、接していた。だけど、その差は埋まらない……二人が特別になりつつあると思えた

火蓮先輩は嫌いじゃない……偶にイライラはするが嫌いではない。彼女に嫉妬したり妬んだりすることは多かった。彼女だけが十六夜君とラノベや漫画の話が楽しそうに出来る。最近、私も読んではいらなくてもその知識は及ばない、天と地の差がある。

だけど、私には彼女にはない勝っている部分もあるから大丈夫だと、それ以外の部分で勝負ができるからと、思っていた安心感が株価が暴落したくらい崩壊した。株なんてやったことないけど、株主って株が暴落するところな気持ちになるんだなって思った。火蓮先輩に今まで感じた事のないくらい大きな渦潮のような感情が生まれた。

妬み、嫉み、羨望、嫉妬をグルグル混ぜて泥にした様な醜いもの。大

きな、大きなものだったがそれ以上に彼への感情が大きかった。

——あの、夏祭りと同じ位の強い感情を……

切望、渴望、彼へ想いが伝わって欲しいと言う熱望、欲しいと言う欲望、何故私を見ないと言う疑問、彼への愛情、異常に大きい彼への慈しみ、彼への愛着、彼が私へ同じ視線を向ける想望。

——そして、何より、異常な独占欲

私だって、私だって……直ぐに貴方と火蓮同じ土俵に上がってやる。

こんなはしたない事はしたくなかったけど、意地でも彼にもつと意識させてやる……

その時の私はお母様の忠告など頭の片隅にもなかった。



俺はお風呂に入っている。肩にシャワーを当てて取りあえず全身を濡らす。お風呂に入っているとつい、一日にあった色々な事を思い出すことは多々ある。

今日何があったかと言えば……告白っぽい事をしてしまったという事だ。恥ずかしい、そして罪悪感が凄い……だけど

——あの告白で彼女への認識が変わったのは確かだ……

勿論、彼女だけじゃない。他の皆の認識も変わった。だけど……愛を伝えた事で……そして想いを確かめ合ったことで益々意識してしまふ。

コハクの気持ちも火蓮の気持ちにも両方の気持ちには気づいてい

た。それに気づかないふりをしているにも今まで不純であり、信義、誠実に反する行為だった。

もしかしたら、萌黄やアオイも……これは何とも言えないが、そんな中で火蓮だけに告白すると言う行為。とんでもないクソ野郎じゃないか。しかも、何だかんだで俺は火蓮とは特別な関係にはなれない……

コハクと彼女の仲が拗れることはできないからだ。もう、ヤバい、正直に真実を話すことがあの時は必要だったけどそれでも……どうしよう……

ああ、どうしよう……

一人風呂で考え込んでいると、お風呂場のドアが開いた。え？ 何で？ 俺最後に入ったんだけど!?

「十六夜君、お背中お流します……」

背中越しに彼女の声が聞こえてくる。いやいや、ど、どういう状況!?

「ええ!? いや、だ、大丈夫です!」

「遠慮しないでください……でも、どうしても嫌で、どうしようもなく嫌なら……出て行きますけど……」

未だ彼女の姿は見えていない。背中越しに彼女の気配を感じる。そして彼女のソプラノ声がお風呂場を反響して耳に届く。

ど、ど、どういう感じなんだろう。目をつむって背を向ける。彼女の声は美しいが物凄い悲壮感を漂わせていた。

「あ、嫌ではないです」

「じゃあ、いいですよね?」

「あ、で、でも」

「嫌……なんですネ? 私みたいな豚は……」

「そんなことないです」

「じゃあ、背中流しますね」

彼女は体の洗うボディタオルに石鹸を付け泡立てる。眼を閉じて

いるので見えているわけではないが泡の音が耳越しに聞こえる。

「まだ、体は洗っていませんよね？」

「ひゃ、ひゃい」

「では、腕から……」

彼女は腕を洗い、その後、背中を洗ってくれた。位置はずつと後ろで洗っていると思う。

「前は、どうしますか？」

「マ、前!？」

「はい、もしよろしければ……優しく洗いますけど……」

そ、そんなことは流石に……いやでも、ちよつといいかも……なんて思う俺はクソだ。

この世界は本来健全な世界なんだ。多少のお色気はあるけど、正当で誰でも見れるような世界なんだ。

ここで前なんて……洗って貰ったら……この世界が『僧侶』になつてしまう。倫理的にも流石にダメだ!!

「自分で洗います!」

「そうですね……流石に踏み込み過ぎました……」

彼女の話の後半は良く聞こえないがここは潔く引いてくれたよかつた。その後、ボディタオルを渡して貰い、体を洗って髪を洗って湯船に浸かる。未だに彼女の姿は見えていない。

大体の場所は分かるので目をつむっているのだが時折聞こえる彼女の息遣いとか、エロいため息が耳から入り頭の中で妄想してしまう。完璧に彼女の姿がイメージできるため目を閉じてても恥ずかしい。

「私もお湯につかっていいですか？ 体が汗で蒸れてしまつて……」

「どどどどど、どう、じょ」

彼女は軽く全身を洗うと俺と同じ湯船に浸かる。彼女が入ること

で湯船と人二人で体積が増えてお湯が僅かに浴槽から出て行く。

「あの、そんなに私と目を合わせるのが嫌なんですか？」

「そ、そんなことありません」

「でしたら、開けてください。眼を瞑られると悲しくなります……」

彼女の悲しそうな声に俺は目を開ける。

「やつと、目が合いましたね」

お団子に長髪の美しい銀髪を纏め、体には白いタオル一枚。胸元は隠しているがお湯で体に張り付いて余計エロい。

そして、鎖骨がどうしてそんなにエロいんだ……

人間じゃない……次元が違う女神とか天使とか、そういった次元の存在と錯覚しそうになる。

思わず生唾を飲んでしまう。男なら意識しないなんて無理だ……彼女の美しさと色気と可愛さと声の艶と、成熟以上の身体…… e t c。

——たじろいでいると彼女はいきなり俺に抱き着いてきた

「あひい、そ、そんなことをしては」

「……違う、その目じゃない。何で？ 何で？ 何が足りないの？ どうしてもつと愛に溢れないの？ 私だけがこんなはずる

る堕ちていくの？ ずるい、ずるい、ずるい、ずるい。もつと意識して、私を意識して、依存する位、好きになって……ねえ、もつともつともつともつともつと好きになってよ、誰よりも、何よりも……」

「あ、え、その……」

なんて反応するのが正解なのか俺には分からなかった。これは本心なのか？

「なーんて、冗談ですよ♪」

唐突に彼女のからかう声が響いた。想像おもおもしい声じゃなく爽やかな声。

「ちよつと、からかいたくなっただけです♪ あー、凄く楽しかったです。十六夜君って初心で可愛いですね？」

「そ、そうですか？」

「そうですね、とつても可愛かったです。そろそろ飽きましたから私は先上がりしますね。失礼します……」

そう言つて彼女は湯船から上がつて行つた。

冗談だったのか……？ まあ、偶に彼女はいたずらごころが芽生えたりする時があるが……

『ストーリー』でも火蓮に円周率が遂に解読されたとか嘘を言つていた時があるから……どうなんだ？

色々考えたが彼女がからかったと言うのが正しいのだろうか？

答えは出なかつた。



「……何ですか？ 誰なんですか？ 貴方は……」

声が聞こえた。本当は十六夜君に意識してもらうために一緒に湯船に浸かり会話をするくらいいいつもりだった。

なのに、彼の目を見た瞬間……

『もっと、大胆にならないと負けますよ？』

『全部、全部、全部使つて、何でも使つて、何でもやつて、彼を手に入れましょう？』

『貴方のポテンシャルはこんなものじゃない。もっと大胆になれば簡単に手に入られますよ？ ほら、もっとくつついて？』

自分を抑えきれなくなり、思わず彼に飛びついてしまった。あんなに重い想いを告げて……

このままじゃ不味いと私が感じたのはお母様の忠告を唐突に思い

出したからだ。後は演技力でなんとか取り繕って誤魔化した……
あの時の私は私であって私じゃない。そう感じたからだ……

あの声はもう聞こえない。

夏なのに何処か寒気がその日は収まらなかった。

八十二話 人生ゲーム

昨日の彼と火蓮ちゃんに何かあった。そのせいで僕たちの仲が何処かたどたどしい感じになった。

僕たちの関係が変わりつつある感じがする……特にコハクちゃんが色々悩んでる感じがする……そう簡単に踏み込んでいいのかわからないけど……

だけど、もつと仲良くなりたいたいも思っている。折角、僕たちは同じ家に住んでいるのだからもつとイチャイチャしたり、ハグとかしたい。女子会だっと思っていたんだ。もつと仲良くなれば気軽に悩み相談でも出来るしね。それに彼もコハクちゃんを気にかけているけど……どうしたらいいのかわからない感じだし。

火蓮ちゃんも彼と一緒に嬉しそうにするときはあるけど時折、無意識だろうけど僕たちを気遣う素振りを見せたりするんだ。このまま全員が互いに変な意識をして仲が拗れたりするのはあまり良い事じゃない。

よーし!! ここは僕が一肌脱いじやうぞおお!!

夜の女子力向上委員会開催だああああ!!

大喜利だけじゃなくて。最近はやりのリアル女子育成人生ゲームのアプリを皆で遊ぼうとか言って。無理やり寝室で大騒ぎで場の空気変えててんやわんやの親睦を深めよう作戦!!

眠いとか言って寝そうだったら無理やりカフェイン摂取させて、くすぐりとかダル絡みして寝かせない。

フッフ、無理やりだ、徹底的に無理やりでいこう。

あれ? でもこのやり方誰かさんにそっくりのよう……気のせいだね、うん。



何というか……最近気まずいわね……いや最近と言いうより昨日と今日なんだけど。

十六夜と想いを伝えあった日から皆の空気がちよつと変わったよ
うな……いや確実に変わってるわね。

我儘かもしれないけど……なんだかんだ皆のこと気に入ってるし、
この変な感じが続くのは嫌ね……。いや、でも私から仲よくしようと
かいうのは……それもそれで変な感じが……

寝室がみんな同じ部屋でしかも、川の字で寝るから距離感が近い。
それでみんな同じ家に暮らしてるから違和感とか直ぐに分かった
ちやうのよね……

アオイと萌黄はあまり気にしてない感じがするけど、コハクの暗い
顔とか正直見てられない。

どうしたものかしら？ このままはダメよね……うーんと……悩
みはすぐに解決したい。解決しないと私もスッキリした気分で十六
夜にアタックできないのよ。寝室で一人布団を敷いて寝っ転がって
いると萌黄が何やらニコニコして入ってきた……

「今夜は寝かさないぜ！ オールで女子力向上委員会だよ！」

いきなり親指を出してサムズアップ。唐突過ぎて私は一瞬フリー
ズした。

「……急ね」

「人生はいつなん時も急なもんだよ」

「キャラ違うくない？」

「フフフ、そんなことないよ、フフフ」

「そ、そう……」

「断つてもいいよ。受理されるまで無限に頼むだけだから。フフフ」

明らかにキャラが違う……：……ような気もするが結構こんな強引な感
じも前からあったし、そうでもないのかしら？ しかし、この強引さ
……誰かさんに似てるような気がする。そう思っているとアオイと
コハクが寝室に入ってきた。

「二人共、今夜は寝かさないぜ」

そのセリフ気に入ったのね……入ってきた二人にいきなり告げる

彼女は表情をキラキラさせていた。二人もキラキラ彼女を見て鳩が豆鉄砲を食らったような表情で呆ける。

「どした？」

「申し訳ないのですが……あまり夜更かしは肌荒れに繋がりますので」

「どうもしないぜ、それとワンナイト位大丈夫。さあさあ、先ずは大喜利から!! ほらフリッップ!!」

無理やりと言った感じで萌黄は私達にフリッップとマジックを配る。萌黄の勢いに押され二人は従う以外道はない。

「それじゃあ、お題いきまーす。『ああ、これあるあるだよね……どんなあるある?』」

「本当に押しが強い……まあ、女子会つぽくて楽しそうだから、あーしはいいけど」

「あまり、そう言った事をする元気はないのですが……まあ、良いです……」

アオイは意外にノリが良いがコハクは元気がないが萌黄の押し押しの顔を確認するとフリッップに文字を書いて行く。

「あーし、出来た」

私も既に思いついてフリッップに書き始めているがアオイは既に出来上がっているようだ。萌黄はアオイにビシツと指を差す。

『『ああ、これあるあるだよね……どんなあるある?』』

「鶏肉料理の時、中まで火が通ってるか心配になってついつい焼きすぎて硬くなっちゃう」

「『ああー、わかるー』」

そ、そうなんだ……そんな料理あるあるなんてあるんだ……

「あ、あー、それな、それな、マジウケル……」

取りあえず、女子高生において万人に通用すると言うパワーワード

を言っておくスタイル。

「……一応、私も出来ました」

「はい、コハクちゃん！」

「鞆に入れておいた飴ちゃんが溶けて鞆から出てくる……」

「ああー、分かる」

これは私にもわかる。良かったあ、2連続料理あるあるじゃなくて……

さて、そろそろ私もボールを脱ぐか……

「はい」

「火蓮ちゃんどうぞ」

「初ギルド訪問はガラの悪い先輩冒険者に絡まれる」

「二んー？」

あれ？ この異世界ファンタジーあるある分からない？

「え、じゃ、じゃあ……」

私は急いで書き直す。

「初クエストは薬草採取」

「二??」

「大したことのないモンスターを討伐したと思ったら、実は高ランクモンスターでギルド職員が腰抜かす。ついでに周りの冒険者も驚いて『アイツ、何者だ!』ってなる」

「二??」

……これが今時の女子高生なのか？ 私のあるあるが通じない……まあ、仕方ないわね。

「でも僕はこのあるある全然ありだと思うよ！ それじゃあ、次のお題!! 写真で一言」

写真に表示されたのは赤ん坊の写真。私は一瞬で答えを導き出す。しかし、恐らく共感されないだろうけど

「はい」

「火蓮ちゃん！」

「あれ？ さつきまで三徹でブラック会社で泊まり込みで働いてたのに!？」

「……あ、うん、百点!! 可愛いから!!」

萌黄って絶対全肯定なのよね……分からないなら分からないって言って、点数下げてもいいのに。気を遣うっていうか、もしかしてこの状況もいち早く若干浮いた仲を取り戻すために？ だとしたら大したものね……

きつとそうね……

だとしたら、私も盛り上げないとね……



あーしはあまり元気が無かったが、女子会と言うリア充イベントを逃すと言う手はなく、参加している。今までかなりのボツチが続いてこういった事はしたことは無かった。

話すとしたら家で育てていたサボテンとか、サクランボとかトマトとか……植物と話す方が人間と話すより多かった。特にサボテンは育てが楽だし、勝手に名前つけてたな……サボさんって……

『トマトって下から読んでも上から読んでもトマトだね……ウケルね……』

『サボさんは好きな食べ物ってナニ？ 水？ そうだよね……』

今考えるとあーしは相当ヤバイやつだったのでは……虚しい日の思い出である。しかし、こうやって今では友達と言える存在と話せる。これほど嬉しいことはない……はずなのに何処か心にサボテンの刺一本程の違和感がある。まあ、気にする程でもない？

「次のお題は!!」

「はい!!」

「まだ、お題言っていないよー!」

萌黄だけでなく火蓮までハイテンションになった……ちよつと無理してる感があると思うのはあーしだけだろうか？

火蓮も萌黄も恥ずかしいのか顔真っ赤にしてるし。

「じゃあ、次は最近はやりのアプリゲーム。『リアル女子育成人生ゲーム』をやろう！ さあ、ダウンロードして!!」

萌黄に促されるままに全員がダウンロードを始める。しかし……

「あれ？ 回線が」

「あ、一回Wi-Fi切ろっか……」

一度、気まづくなってテンションが下がりがけるがダウンロードが完了するとまた、恥ずかしそうにテンションを上げる。コハクは……若干元気がないのが続いている。

「よ、よーし、通信対戦だ!!」

「や、やってやるわあー!」

「お二人共何故にそこまで元気なのですか……」

あーしもアプリを起動して対戦を始める。ルールはコマごとに分けられたマスにランダムに止まり、そのマスに定められているイベントなどで稼いだ『ポイント』が最後に一番高かった人が優勝だと言う割とよくある感じである。

「僕からだね。えっと……数字は三。いち、二ー、サン。アイテム、マスカラをゲット女子力ポイント+5」

「次は私ね……数字は六……アイテム『上げてよせるブラ』……なんか悪意を感じるわね……女子力ポイント+7」

なるほど、アイテムもゲットできるんだ。二人が終わり次はコハクの番。

「数字は4ですね……アイテム『包丁』をゲットです。ポイント+9……」

やっぱりコハクが一番元気ない。何か悩み事でもあんのかな？ ……あーしって一応コハクの先輩なんだよな……コハクの方が大人っぽい感じがするから意識とかしないけど。

でも、ちよつと先輩らしいことしたい時だつてある

あんまりやり方とか分かんないけど褒められると嬉しいよね？

あーしも褒められるの好きだし

「ところでコハクってさ……めっちゃ可愛いよね」

「本当にところでですね……」

「いや、そうだなって思ったからさ。後、目も可愛いよね。鼻も口も
「そ、そうですか……ありがとうございます……先輩の目と鼻と口も
凄く可愛いですよ」

「そ、そう？ あ、あんがと……コハクの声と髪も艶があつて上品だね
……」

「ありがとうございます。先輩の声と髪も奥床しくて、清楚で、言動も
婉容で淑やかさもあつて好印象ですよ」

「あ、あああ、あ、うん……お、お小遣いあげよつか？」

「いえ、両親からしつかり貰っているので大丈夫です」

いや、あーしが嬉しくなつてどうする？ 一応先輩なんだからもつ
としつかりと褒めてあげないと……

「先輩の番ですよ？」

あ、今ゲーム中だった。

「あ、うん。数字は2。アイテム……『パーカー』神アイテムゲット
……女子力＋1だけど……そこはどうでもいい」

「先輩はパーカー好きですね……着やすいですし、私もかなり愛用し
てます」

「だよね、パーカーは最高だよね」

「はい、かなり良い物だと認識しています」

「分かつてるね……」

いや、だからあーしがテンションアゲアゲになつてきてどうする？
コハクを励ましたいって事をしようとしてるのに……

その後も励まそうとしたのだが、それを返されあーしの気分がルン
ルンになるだけであつた。



結局、最下位はコハクちゃんであつた……特別なアイテムを持つて

いるときだけに発動するイベントに、ドンピシャでハマってしまったからだ。

『包丁』を所持しているときだけに発動する『ヤンデレイベント』。問答無用でゲームから除外と言うとんでもないイベントである。包丁を持って気になる彼に迫るが振られて自分に刺して死亡という……イベント

これが起こった瞬間、僕たち先輩組は凍り付いた。僕たちは一切互いに打ち合わせとかしていないが、何だかんだコハクちゃんが一番元気ないから励まそうとしていたのにそれができなかつたからだ。

コハクちゃんはズーンと沈んで『やつぱり負け犬だ』と呟きそれから場の空気が……そのままお開き。皆で川の字で就寝である。

やつぱり、コハクちゃんを元気づけられるのは……彼しかない。彼は人の好意にはかなり敏感な方だ。でも、好意にどう接するかは全く分からない素人。

特に男女の特別な甘酸っぱいに感情にはかなり耐性が無い。だけど、彼の事だからきつと何か考えてはいると思う。多分だけ……



何をどうしたらいいのか……今日、コハクの元気がないように見えた。どうかしたのかと聞いたら笑顔で何でもないと言っていたが実際はどうなんだろう……

それに彼女の好意には何となくだが気付いている。そして、俺はコハクの事も好きだとも思う。だけど、火蓮に告白のようなことをしておいて直ぐにそう言った事を言うのはダメだよな……。火蓮を蔑ろにしている気もする。だけど、コハクには何も言っていない。それもそれでどうなんだろう。

頭が痛くなる。不誠実だと思ってしまおうとそれはしているのか。どうなのか。ドツボにはまっていく。そして、バッドエンドのこともある。一体どうすれば……

この間は性格とかが上手くかみ合って回避できたが他の四天王が来るなら、次はそうはいかない。俺には倒せない領域だ。だからこそ——彼女達の間、パワーアップもしないといけない。

出来るだけ速く……そのためには異界のアルテミスに行かないと……

でも、それに集中して、コハクの好意を後回しにして蔑ろにしているのか……だからといって不誠実に……

火蓮とコハクの違いは想いを伝えあったかどうか、そこが大きいと思う。想いが伝わるとそれがどんなに尊くて、素晴らしくて偉大であると知る。

どうする……どうする……どうする……

夜は更けていく。しかし、答えは出なかった。



「では、ワールド・ボイダー世界の防護壁を開いてくれるのですね」

「うむ。かなり議論に時間がかかったが魔族と戦ってくれるの者たちの頼みなら聞こうと言うことになった」

「分かりました」

「うむ、ではこちら辺で」

「はい、ありがとうございます」

メル通信が切れる。相手はアルテミスのメルの暮らしていた国の王であった。これで十六夜が異世界に行けることになる。

十六夜が行きたい理由は一つ、中間パワーアップがしたいと言う理由一つだけである。

その、中間パワーアップアイテムが神殿に隠されている。難攻不落と言われている。妖精族の誰もが挑んだが失敗した伝説。

本来ならそれを、12月ごろにメルが神殿を攻略し、中間パワーアップを果たすのだが……第二のバッドエンドにより、そんな悠長なことは言っていられないのだ。

何故なら、中間パワーアップアイテムは使いこなすのに時間がかかるので、出来るだけ速くの入手が求められることを十六夜は理解している。

つまり、彼の攻略が始まる

異世界編

八十三話 走者

俺の異世界神殿攻略を始める

本来は中盤、戦いが過酷さを増していくことに危機感を覚えたメルが一人で異世界に戻り神殿を攻略、そしてパワーアップアイテムを奪取すると言うストーリーである。

その後の中ボスが現れて、彼女達が勝つと言う本筋であったがそれが崩れたので早急にアイテムを確保しなくてはいけない。今回は速さが重要であり観光とかが目的ではない為メルと二人で来た。

というわけでまずは異世界に到着。その後は王様に挨拶をすると言うので……

「よくぞ参られた。異世界の勇者よ……」

この世界でメルが住む国の王であるメルフィである。まあ、背中に羽が生えているだけのおっさんという認識であるのは前世でも今でも変わらない。

では、話を聞き流した後は観光がしたいと言って神殿に向かおう。メルに外に案内してもらい神殿に向かう。

「神殿というのがあってやな。でも、そこに行くには迷いの森を抜けないとあかんねん。それは今現在誰一人として攻略できていない未開拓領域なんや」

知ってるよ。

「迷いの森は正しいルートを歩かないと元の場所に戻され、さらにそのルートを知るにはアルテミスにある祠を解読しないといけないんや。さらに、さらにやで、これは星霊が妖精に与えた『星の大試練』ワールド・クエストと呼ばれておるんやけど、妖精の誰も攻略は出来ていないんや」

知ってるよ。

では、迷いの森に到着しました。ここは深い霧が立ち上り深い樹海と言う印象がある。先ほどメルが言っていたように祠に記された道の通りに行かないと神殿にはたどり着けないが……俺は何度もメルが攻略するシーンを読んでいるので道を完璧に暗記している

「ちよ、いきなり走るなや!!!」

魔装を纏って走る。ルートは只管に真つすぐである。只管に。岩の壁があつとしてもそれは幻影であり本物ではないので気にしなくても大丈夫。さらに、この森は一定時間を超えると自動的に入り口に戻されるので注意が必要だ

ここはただ走るだけだから、必死に走る

というわけで神殿に到着。神秘的な柱が多数設置しており、太古の遺物なのでコケなどが生え、蛍のように美しい生物が飛んでいる正に聖域というもの。ここにある神殿は5種類存在する。そして、それぞれに試練が存在する

深淵の神殿 恥ずかしき

稲妻の神殿 クイズ

深海の神殿 ダンジョン

剛炎の神殿 バトル

栄光の神殿 謎解き

では、まずは栄光の神殿から攻略をしよう。コケまみれだけど……神殿は5種類存在してそれぞれ並行して建ててある。そしてその真ん中に栄光の神殿がある

さて、この神殿はこの神殿の周りにある暗号を解読して入り口の多数種類のあるスイッチパネルを正しい順番に押すことが必要だ

ストーリーではメルが攻略に多大な時間を費やしていた。そして、この暗号は時間や気候によって変わる

そして、このパネル横に3種類、縦に3種類ありそれぞれに不思議な暗号が書いてある。これはこの世界の古代言語なのですが俺にも分からない。普通はラノベで異世界の細かい言語の説明はしないしね

しかし、ラノベではメルがスイッチを押す動作が細かく描かれていた。一番左上を仮に一番として、その隣を二番、またその隣を三番、そして下の段の左を四番とする。こう言った感じで書かれていた

なので、読者はメルがスイッチを押すシーンをどのスイッチを今押しているか理解しやすかったのだ。作者さんの手腕に脱帽。

そして、暗号は時間によって変わりますが五種類しか存在しない
先程の仮数字理論で行くと……

5 7 8 5 5 6 8 7

5 7 9 9 6 8 7 5

1 2 6 7 5 9 9 7

4 6 7 6 2 8 5 9

5 9 2 7 9 5 8 8

という番号を順番で押すことで神殿は開ける。よし、開いた。三番目の番号で開いたぜ！

若干、運が無かったのか？ 運はいい方だから一発かと思ったけどまあ、いいか。

さて、神殿内もかなり神秘的な造形。しばらく歩くと台座に聖剣が差し込んである。それを抜こうとすると

「お待ちなさい」

という凜とした声が神殿内に響き渡る。しかし、俺は気にせず聖剣を抜いた。

「ええ!?… ちよ、ちよっと待ってって言ったよね!」

彼女は星霊。しかし、もう力はなくあまり役に立たないので放っておこう。

「ちよ、ちよ待てよ！ 話聞いて!? 私達は星霊で千年前にこの世界を救った偉大なる存在なんだぞ!! 僕たちの話聞きたくない!? 絶対、偉大な発見として後世に語り継がれるって……君妖精じゃないね!? ええええええ!? 誰?!」

簡単に言うとな彼女は幼女。幼稚園生位の幼女。俺は個人的に彼女の事はキャラとして嫌いではないが彼女達ほどではないのでスルーすることにした

「話を聞け!!!」

「その話とは、貴方達星霊は妖精の信仰によって生まれた存在であり、今現在信仰が薄まりつつありさらに千年前に力を使いすぎて役立たずと言う事ですか?」

「な、なんで、そのことを……」

「フッフ、じゃあ、そういうことで……」

俺はその場からダッシュで神殿を出た。

剛炎の神殿は巨大魔法人形との対決だが、実はこれを操っている存在は角の方にいるのは分かっていたのでそれを潰して一瞬でかたを付ける。

深海の神殿はとてつもない広さのダンジョンであり、攻略にはかなりの時間を費やすのだがここにいる星霊は優しいので帰るときは直ぐに帰れるように入り口の部屋の右のタイルと最深部を繋いでくれている。そこを通ってクリア

稲妻の神殿は訳の分からない人形がクイズを出してくるが、来る問題は分かっているので最初の一文字を言った瞬間に正解してクリア

深淵の神殿は自分の頭に手を置きトラウマを星霊が読み取り克服

すると言うものであり、さらにこの星霊は質が悪いのでいつまでもトラウマを読み取る。しかし、俺のトラウマはかなり奇抜な物なので逆にあちらが照れてしまった

嘗て、ワンクリック詐欺に引っかかり家族にそれを真剣に相談したときのあの地獄の空気感。小学性の時、上級生にいたずらされて『コンマ』の反対を大きな声で言ったら飴を上げると言われ実際に言ったら場の空気が死んだこと、などなど。トイレのカギを掛け忘れて……などなど。

異世界の羞恥心と言うのは星霊にとって感じたことないようであちらのリタイアで幕を閉じた

よし、メルの所に戻るか

「なに!? 攻略したやと まだ、七分と十七秒しか、突入してから経ってないで!」

「そうなんですか? まあ、大したことじゃないの?」

「うざ!!! なんや、コイツ、ホンマ」

——五つの中間パワーアップアイテムを持って、直ぐに現代に戻った



黒田十六夜は最速で武器を手に入れた。しかし、問題は山積みである。

◆ ◆
ヒロイン達との関係。

そう、まだ序章に過ぎない。ここから徐々に彼の奇行がどんどんエスカレートしていく。

どんどんファンタジーな出来事が起きる。

まだまだ、序章。この後すぐ、彼とヒロインの関係が大きく変わる
ことなどまだ誰も知る由もない。

ダブルヒロイン編 八十四話 銀と赤

人を好きになると言うのは尊い事だ。その人を考えると心が躍つてドキドキして甘酸っぱくて、でも時折寂しくて、そんな感情が溢れる。

私は同じクラスの黒田十六夜という男子生徒が好きである。最初は何だこいつと言う印象しかなかった。正直、顔も普通、失礼極まらないがそこら辺の雑草にいるような人だなあと思っていた……痴漢もするし、直ぐに私の口に如何わしい物を出す。最低とも思った。ストーカー、痴漢、クズの中のクズ。

でも、違つたんだ。彼はそう言った視線を向けないし、いくら酷い事を言われても私を守ってくれた。その姿に理想を見た。辛い日々を想起して時折折れそうになる私に彼の言葉はどうしようもなく響く。

好き。好き。大好き。

でも、彼は火蓮先輩と良い感じになってしまった。その事実が辛い。私を見て欲しい。もつと愛してほしい。

彼女にしてほしい。

そして、全部したい。料理だって、デートだって、なんだってしたい。大人の階段を登るような事でもする。彼がどんな性癖でも受け入れる。周りからアジフライとか言われても、釣り合わないとか思われても私は彼を支えたい。イチヤイチャとかしたい。好きを言い合つて照れた方が負けとかいうゲームもしたい。

でも、私にはその資格はあるのだろうか。彼が好きな火蓮先輩との仲を邪魔するのはいい事なんだろうか。もう、諦めた方がいいのではないだろうか。次から次へとさまざまな考えが頭の中をよぎる。

勿論、諦めたくなんて無い。将来、彼と火蓮先輩が結婚式なんかするところにお呼ばれなんてされたくない。私がウエディングドレスを着たい。誓いの言葉も言いあいたい。プロポーズだってされたい。

でも……

一人、寝室で体育座りで悩む。答えなんて出るわけない。何が正解なんて分かるわけがない。

不意に寝室の襖が開いた。そこに居たのは……

「入るわよ」

「何の、ようですか……」

「なになって決まってるじゃない。コハクのお悩み相談よ。先輩だしね」

「……貴方に相談することは何もありません」

正直、この人は嫌いじゃないけど、今は一番合いたくない人だった。恐らく、彼女から何を言われても上から目線の同情と思えてしまうから。そうとしか感じないから。

「ふーん。まあ、何に悩んでるかくらいわかるけどね。私に十六夜取られて悔しいんでしょう？」

「っ!!!」

挑発するような物言い。視線が鋭くなるのを感じる。こんな怒りの表情を私にしたことはないだろう。

「それで？ どうするの？ 諦めるの？」

「……」

「前にお風呂で負けないって言ったのは何だったのかしら？」

「……だって……もう、どうしようもないじゃないですか……」

彼女の挑発的な物言いに私は何も言えない。だって、負け戦のような物だから。

「貴方が選ばれたんだから……諦めたくなくても諦めるしかないじゃ

ないですか」

「……言いたくないけど十六夜はコハクの事も好きよ。きつと」

「上から目線の同情ですね」

「そう聞こえるかもね。でも、私はそう思ったの。私と貴方の違いは想いを伝えあつたかどうか。それだけ」

「……」

「あの日、伝えあつた時。胸の高鳴りは尋常じゃなかった。あり得ない位嬉しくて、あり得ない位、尊かった。通じ合うってそれだけ大きな事なのよ……」

なぜ、そんなことを言う？ 上から目線の同情？ そうかもしれない。そうじゃないなら何故？

「今、何でそんなこと言うんだって思ったでしょ？」

「……」

私は何も言わない。でも彼女は全てを察したような表情で続けた。

「私はコハクが嫌いだけど、辛気臭くてウジウジしてるコハクがもつと嫌いだから。そんなのみつともなくて見てられない」

「っ……」

「胸が大きくて、顔も可愛いくて、色気もあつて正直ムカつく。押せ押せヒロインのくせにいつもてる、コハクがムカつく」

彼女の一切の反論の許さない位の強さ。この人は……強い……。

いつもおちやらけてるかんじもしてたけど……強い人なんだ。

「あとコハクのアタックが変な感じだと、私もできないの」

「それが本音ですね……」

「そうよ、これが一番の本音。私は自分主義だから。だから、いつもみたいにアタックしなさいよ。ライバルのコハクに正々堂々と勝って、エピソードを迎える。これが私の結末なの。それが私のメインヒロイン道なのよ」

くわつと目を開き。彼女は私に指を差す。でも、その手が少し震えていた。

そうか……この人は自信に溢れてるように見えるけど……そうじゃないんだ。この励ましで自分が不利になるかもしれない。もしかしたら選ばれなくなるかもしれない。でも、そんな怖い未来があり得てしまうかもしれないけど私の為に？

正々堂々……

「意外と先輩みたいなこと言うんですね……」

「いや、先輩だから！」

「あまり、そのような認識はしてなかったのですが……今日初めて頼りがいのある人だと認識しました」

「はあ!? 折角慰めてあげてるのに!?! 何その言い草!?!」

負けたくない。この人に。

「きつと、後悔しますよ……私を慰めた事」

「あり得ないわよ。だって私がメインヒロインだから。勝つのは私」

「直ぐに追い抜きますから、鼻をかむ塵紙と涙をふくハンカチを用意することをお勧めします」

「クツソ生意気な後輩ね」

私は立ちあがり寝室を出る。もう、迷わない。

「先輩、ありがとうございます」

「か、勘違いしないで! こ、コハクの為じゃない。私の為よ!」

「なに、照れてるんですか」

「照れてない!!」

顔を真っ赤にしてるから直ぐに嘘だと私は分かる。この人と友達に……いや、無理だ。だって、ライバルだもん。

大分差がついてしまった。取り返さないと。だから

——告白しよう



俺は直ぐに異世界から帰還した。中間パワーアップアイテムは一旦メルに預けておいた。メルからはお前ナニモンだよ、という視線を向けられ続けたが適当に流しておいた。

「十六夜君！ ちょっとお時間ください！」

帰還するとすぐにコハクが俺の手を取って二階の自室に上がって行く。

「部屋借りて良いですか？」

「ど、どうぞ」

彼女は最近少し元気が無かった感じがしていたのだが……やっぱり気のせいだったのか？ というか自室で二人きりとは……

「一緒にベットに座りましょう」

「は、はい」

俺がいつも使っているベッドに二人で座る。彼女は俺の隣に座るが殆ど距離はない。

「単刀直入に言います。私、銀堂コハクは黒田十六夜の事が……す、すすすす、好きです!!」

いきなり過ぎないか……彼女が瞳を俺に向けて一切の揺らぎなくそう答える。彼女かの告白を聞くと顔が熱い。動機が……

「デートもしたい、イチヤイチャもしたい、結婚したいです!! だから、私と付き合ってください!!!」

震えるほどの意思の強さ。稲妻に打たれたような衝撃が俺を襲う。

彼女の顔が近い、綺麗な肌が赤く染まり、俺も熱くなる。好きだよ。俺だって。ここで言う事は出来る。

でも、この間、火蓮に……

「火蓮先輩のことは今考えないでください!! 貴方の目の前にいるのは銀堂コハクです!!!」

彼女は俺の顔を掴んで一切よそ見ができないようにする。自身の眼と彼女の眼があう。

「どうなんですか!? 好きなんですか!? 付き合ってくれますか!? はっきりしてください!! ここまで言わせて逃げるなんて許しません!!」

彼女しか見えない。こんなに強引な彼女は初めて見た……でも、凄い魅力的だ……

「好き、です……」

「……!」

「コハクが俺は好きです! 俺だってイチャイチャとかしたい!」

「——んっ」

唐突に彼女の手で唇が吸い寄せられて……

かなり、柔らかかった。そのまま彼女に押し倒された……彼女が俺に馬乗りになって見下ろされる。

「好き。貴方が好き。もつとしたい……もつと、もつと……」

「ええ!? ちよ、ちよつとダメですよ。ここ俺の家で皆住んでるし……」

「音を立てないですれば問題はありません……私も手で口を抑えます……」

この先に何があるか。俺は分かってしまった。彼女の瞳は優しくもあり、吸い寄せられるほどの魅力があった。

というか手で口を抑えながらここでするって

『んっ、んっ、ンんん』

乱れた彼女と俺が。そして彼女はあられもない姿で口を必死に抑えて……想像しただけでヤバい……

「……十六夜君はしたくないんですか？」

「したいかしたく無いかで言えば……したいかもしれません」

「じゃあ、しましよ……ちよつと、恥ずかしいですけど……準備は出来てます……」

「しません！」

彼女の全てが愛おしくてたまらない。でも、これは流石に……ああ、顔可愛い。胸も大きい、前よりでかくね？

「と、とりあえずお茶飲みましょう。落ち着く場を設けましょう！」

「むう、階段上つてもいいのに……」

こんな感じで馬乗りでグイグイ来られたら堕ちる。変な意味で……そこにバンつと扉が開く。

「なにしとるんじゃ!!!」

か、火蓮……!!!

「やり過ぎ!! どんだけ、段階すつ飛ばそうとしてんの!!!」

「いいじゃないですか。好き同士なんですし。十六夜君、私の事好きみたいですし。貴方も背中を押したわけじゃないですか」

「いい訳ないでしょう! 馬鹿か! 私は背中を押したつもりだけど蹴っ飛ばしてないわ!!」

火蓮がどすどすと近寄ると馬乗りのコハクを引つpegがそうとする。しかし、暴れ馬のように抵抗する。

「離れなさい!」

「嫌です!」

「さっきのお礼をしなさい！」

「嫌です！」

俺の上で暴れらると色々不味いんだが……賢者になれ！ 俺。

そして、火蓮がコハクを引つpegがした後、再び三人で向かい合う。

「えっと、」

「十六夜君、私を選んでください。後悔はさせません」

「どうするかは十六夜の勝手だから……好きにすれば」

両方に告白してしまった。でも、どちらを選ぶかは決めていないと言う最悪な状態。一体どうすればいいのだろうか？

「考える時間をください……」



私はきつとどんな結末になっても後悔はしないだろう……いや、後悔はするわね。選ばれなかったら変な意地を張って最高の後輩の背中を押してしまった事に。でも、それでも正々堂々と戦って勝ちたかった。これで魔族との戦いに支障をきたすとか前は考えてたけど今はどうでも良い。

世界の命運より恋よ!!

私は信じてる。彼が私を選ぶと。考える時間が欲しいと彼は言った。それから二日経過する。

きつと彼は私を……選ぶわよね!? 選んでお願い!! この二日間の中に神社にお参りに行ったの!! あまりそう言う所に行かない私が行ったの!!! 恋のおみくじも引いたの!!

結果は『予想もしない結末にびっくり』。振られるかもと思ったがきつとそんなことはないだろう。この思考をずっと繰り返している。

そして、『話があるから来て欲しい』と遂に十六夜から呼び出された。



私は選ばれるか。そんなことは分からない。火蓮先輩に勝てるのか？ 無理ではないか。そういう事を私は考える。

きつと、私は選ばれなくても後悔なんてしないだろう。ここに至るまでの日々が幸せだったのだから……等と言うきれいことは言わない。選ばれなかったら嫌だ。きつと泣く。泣いて、多分引きこもる。

十六夜君。私を選んで!!

裸足で神社の階段何百回も登ったんですから!! 周りから変な目で見られても続けたんですから!!

絶対に私が選ばれる。そして、告白から二日間空いて彼から呼び出された



二人の少女がアジフライに呼び出された。場所は彼の部屋。まだ夕暮れ時。少女たちはドキドキしながら部屋のドアに手をかける。

「どんな、結末になっても恨まないでね」

「当然です」

「今まで、ありがとう。結構楽しかった」

「私こそ、こんな素晴らしい先輩に会えて幸運でした」

八十五話 二人はチョロインではない

「無理」

「無理です」

その日、俺は二人の愛しき女性に告白をした。しかし、あっけなく振られてしまった……俺が何故ハーレムを思いついたかそれは一日前に遡る。

『どうすればいいんだ』

俺は悩んでいたんだ。そんな時、我が母からの一本の電話が……そこで俺は相談したんだ。

二人の女性から好意を向けられ、そして俺も両方死ぬほど好きだと

『二人が好きなら両方付き合えばいいんじゃないかしら？ 家族になりたいなら養子縁組とかあるわけだし。十六夜、愛に溢れなさい』

その時、納得した。一人を選ぶ必要はない。ハーレムエンドでいいじゃないかと、俺がどちらも百パーセント愛せばいいんじゃないかと。

——愛に溢れよう

俺には心理学を使って彼女達を落とすとかできない。本心を言い続けてアタックするしかないんだ。ハーレムを作りたい。それが俺の目標となった。

しかし、彼女達は納得しない。

「どうして!! こんなに好きなんですよ!!」

「いや、普通にダメでしょ」

「私もダメだと思います……社会通念的に」

「そんなもの破りましょう!! 二人が好きなんです! 頼みます!!」
「……………」

床に頭をこすりつける。二人から冷めた視線が降り注ぐ。しかし、諦めきれない。

「火蓮先輩だって、コハクさんは嫌いじゃないですよね!」

「ええ、まあ、コハクは嫌いではないのかしら? 唐突に名前呼びはやめなさいよ…………て、照れちゃうじゃない…………」

「じゃあ、皆で手を取りましょう!!」

「…………十六夜。もし、私が十六夜以外に彼氏がほしいって言ったらどうする?」

「そんな…………そんなの嫌に決まってるじゃないですか!!! 俺を殺す気ですか!」

「そうよね! そういうことよ!」

「確かに言いたいことは分かります!! でも、二人が好きなんです!! 控えめに言って二人ともエッチしたいんです!! デートの時は二人で両側から挟み込んで欲しいんです!!」

「全然控えてないじゃない!!! モロに言ってるじゃない!!! ダメ!!! 断固として嫌!! そもそも私が付き合ってあげるって言ってるような物なんだからそれで我慢しないさいよ!!!」

「我慢できない…………二人共好きなんです!」

「っ! もういい、最低!!」

火蓮は部屋から出て行ってしまった。くっ、ハーレムへの道は険しいか…………

「コハクさんはどうですか!! 俺は君が好きなんです。でも火蓮先輩も好きです。だから二人とも彼女にしたいんです!!」

「そうですね…………まずいきなり下の名前呼びに物凄い感動をしています…………それと個人的に付き合っって欲しいと言われたのは素直に嬉しかったです」

「じゃあ、付き合ってください!」
「嫌です」

彼女は笑顔でバツサリ切った。ああ、その笑顔も好きなんだ。

「だって、あんなにアピールした結果が……二股したいって何か面白くないです……」

少し、ぶくつと頬を含まらせて腕を組んで胸を強調……ではなく不機嫌さを強調する。こ、こうなったら泣いて同情してもらおう。汚い手だが仕方ない……

「ごめん。でも君が好きなんです。心が叫んでいるんだ。二人と付き合いたいって……ううっ、」

「……そんなウソ泣きしてもダメなのはダメです。二股は許しません」

一瞬でばれた。

「そこを頼みます!! 俺は君ともつとイチヤイチャしたいんです。エッチもデートもしたいですよ!!」

「……エッチしたいんですか?」

「どうしようもなくしたいです!!」

「デートは?」

「勿論!」

「イチヤイチャも?」

「愚問です!!」

そういうと彼女は俺のベッドに座って少し色気のある笑顔をする

「えへへ、そうですねか、そうですねか。私としたいと? ほうほう、フム。今、キスしたいですか?」

「していいんですか!」

「貴方が私とだけ付き合うと言ってくれたらしたいこと全部していいです。どんなことでもいいですよ? ここで今すぐ私を押し倒して……一緒にニヤンニヤンしても……」

そういうと彼女は服のボタンを三つほど開けた……前はチキンに

なつてしまつたけど……正直今すぐしたいくらいだ。

「ごめん、俺は二人とも彼女にしたい。でも今ここでエッチもしたいんだ!! だから今すぐ彼女を持つことを認めてくれ! そして愛を深めよう!」

そういうと彼女はパパッとボタンを閉めてベッドを立つ。

「じゃあ、全部お預けです」

「そ、そうですか」

「まあ、デート位ならしてあげてもいいですよ?」

「明日にでも行きましょう!」

「ああ、でも、どうしよっかなあ? 二股したいなんて言う十六夜君はちよつとなあ……」

彼女は弄ぶような視線と仕草をする。彼女にならそう言った視線を向けられるだけで嬉しい。もっと向けて欲しい!! しかし、ここはデートをしたいと言う。

「俺は行きたいです。君が何よりも好きだから。そんな君と行くデートは俺にとって宝物になるに違いないから、行きましょう!!」

「はうっ、そ、そんな真つすぐ言われたら……て、照れちゃいますよ……し、仕方ないですね。で、デートに……」

「あと、君とデートしてハーレムを認めさせる位、好感度を上げたいです!!」

「……何でそういう事言っちゃうんですか……やっぱ行きません」
「そうですか……」

彼女はベッドから立ち上がり部屋のドアに手をかける。

「むう、私だけならすぐにも返却不可で貴方のものなのに……」

去り際に彼女が言った。ハーレムは直ぐには認めてはくれない。しかし、これから必ず認めてもらおう。俺は愛に溢れたから。

改めて誓う、俺は二人を彼女にする

◆◆
何よ……二股？ ハーレム？ 馬鹿じゃないの？ あんなに好きって言ったのにダブルヒロイン路線は無いわよ。本当に馬鹿。バカバカバカバカ!!

ああ、でも素直に好きって言ってくれたのは嬉しかった。あんなに真つすぐな愛を向けてくれる人は一生出会えないだろう。すぐにも私は付き合っても良かったんだ。ハーレムとかふぎけたことを言わないのであれば……

え、エツチだつて……してあげても……つていうか三人でエツチしたいとか普通言う?! デートで両側から挟まれないとかどんな願望?! 嗚呼、もう、どうしてこうなったのよ……

とにかく、絶対にハーレムは認めないんだから!



えへへへ、あんなに愛を囁いてくれた彼を初めて見た。えへへ。ちよつと調子に乗つてからかつてしまったがそれでも彼はあんなにグイグイ来るなんて……なんて嬉しい! 今まで彼はこう言った事に積極的ではなかった。だから、私からグイグイいつていた。でも、正直私からすれば少し不満でもあった。十六夜君から愛を囁いて欲しかったからだ。でも先ほどはあんなに愛を……だが、正直二股とか認める気はない。

確かに愛は伝わってきた。物凄い程に……あそこまで私を愛してくる人は現れないだろう。しかし、彼は火蓮先輩も好きだと言う。それは知っていた。だから、決着を付けようとしたのに……物凄い覚悟を持って決戦に挑んだのに……

『俺、銀堂コハクも火原火蓮も両方好きです
なつてくださあああああああいいいい
二人共俺の彼女に

!!!!!!!
!!!!!!!

——どうしてこうなった……

私が好きならそれでいいじゃん!! そのまま二人で手を取ればいいじゃん!! しかも、あんな堂々と言うなんて……もっと申し訳なき
そうに言つて欲しい物。いや、どちらにしても認めないけど。

はあ、これからどうなるんだろう……でも、彼から来てくれるならこの関係も悪くない……かな?

でも、二股は断固拒否!



何やら、食事の雰囲気がいつもと違う。今晚のディナーは麻婆豆腐。アオイちゃんは麻婆豆腐が好きらしいから食事当番である僕が作った。

コハクちゃんが元気そうな感じがするのは良いんだけど二人が彼の取り合いをしない。いつもなら食べて、食べてと言う感じなのだが……

すると彼が立ち上がりカッツと目を開いた

「どうして、あーんしてくれないんですか!?!」

……どういう状況? 二人に対して言ってるようだけど二人は何とも言えない目を向ける。

「して下さーごよー」

「いやよ」

「嫌です」

逆になっている！ 何がどうなったんだ!? アオイちゃんもどうしたどうしたと視線を向けている。メルちゃんは寝たふりを始める。

「どうして!?!」

「二股撤回したらしてあげてもいいわ」

「そうです。ついでに私を選んでくれたらいくらでもしてあげます」

「なっ！ だ、だったら私を選んだら仕方ないから、いくらでもしてあげる所存であるわよ!!」

二股？ その辺の事情は良く分からないがコハクちゃんに対抗するように火蓮ちゃんは恥ずかしそうに大胆発言。しかも、ちよつと表現がオカシイ。

「二人とも……お願いします！ あーんをしてくださいー！」

「ダメ」

「やりません」

二人共キツチリしてるな……いつものデレデレの感じとは違う。二人は彼にはチョロい感じがしてたがそうではないらしい。

「……火蓮先輩!!」

「しない」

「コハクさん!!」

「しません」

いつの間に名前呼びになっていたんだろうか？ 距離が近いのか遠いのか……良く分からないけど。一つだけわかるのは彼が悪いと言ふ事だ。絶対二人に何か言った。

彼はしてもらえないことが分かると自分で麻婆豆腐を食べる

「美味しい」

ふーん、美味しいんだ。へえー。……作ったのは僕だけだね……

「美味しいよ。でも、やっぱりあーんしてほしいです」

「二股とか言ってるうちはしてあげないわよ」

「そんなに、彼女が複数がダメですか？」

「ダメ、絶対」

「でも、この想いは本物です。二人に恋してしまった。どちらを選べなんてできません」

「……十六夜、社会通念的に考えて。ダメよその考えは」

「そのふざけた社会通念を一緒にぶち壊しましょう!!」

彼と火蓮ちゃんが向かい合って話す。火蓮ちゃんは頭を抱えてどうしてこうなってしまったんだろうと言う感じ。大体、分かった。彼がコハクちゃんと火蓮ちゃん両方に告白したんだ。それでこんな訳の分からない現状に……

そして、彼の言葉に僕とアオイちゃんは突っ込んでしまう

「いや、社会通念は壊しちゃダメツしょ」

「ふざけてるのは君だね」

彼と向かい合う火蓮ちゃんだが一向に二股は認めない。痺れを切らした彼は火蓮ちゃんの肩を掴む。

「ひゃい」

彼に肩を掴まれたことで彼女は顔を赤くして上ずった声を出す。ああ、てつきり二股行動で幻滅したかと思ってたけどしつかりまだ好きなんだ

「俺とデートしてください!」

「な、にやんでしゅって」

「噛みすぎ。可愛い。」

「デートして俺の良さを知って欲しい、そして好感度を上げて二股を認めさせたい!!」

前半は良いけど、後半を言うのは馬鹿なんだよなあ

「くっ、離して。デートなんかしない！」

「ふふふ、すると言うまでこのままですよ！」

「へ、変態。それと痴漢もいいところよ！」

「俺貴方とデートに行きたいんです！ 好きだから！ 絶対に俺の彼女になって欲しい！」

「にや、にやにいつてんの!!」

食卓で何をやっているのかな？ あーあ、コハクちゃんの目つきが……アオイちゃんも……

——いいなあ、あんなに愛を囁いてもらって……

「一回だけ！ 先ずは行って見ましょう！ 好きなんです！ 世界で一番！ そんなあなたとデートに行きたい！ 好感度稼ぎたい！」

「あ、あ、で、でも……しよ、しょうがないわね。そこまで言うなら一回だけよ」

「ありがとうございます！ 明日行きましょう！」

「明後日。いくなら……明後日」

「分かりました！」

食卓で口説かないでくれるかな？ あと、火蓮ちゃん、顔真っ赤でニヤニヤし過ぎ……

「はあ、しょうがないわね。取りあえず私は一旦別室に行ってくるわ」

火蓮ちゃんは食器を片付けるとリビングを出て行った。絶対、美容院の予約と服装選びだね。

あと、コハクちゃんはどうするの？ 不機嫌マックスだけど

「コハクさんもデート行きませんか!?!」

「っーん」

あら、可愛い。コハクちゃんの『っーん』。

「いつ行きますか!?!」

「っーん。私はっーん状態ですから話しかけても無駄です。二股さんとは話しません」

え、このニヤニヤを誰か止めて。コハクちゃんを見てみるとニヤニヤが止まらない。

「可愛い。貴方は可愛い！　こんな人を彼女に出来たら俺はきつと幸せだ！　だから付き合ってください！」

「っーん」

「その、っーんも可愛いです。最高です。もつと見たいです!!」

「っ、っーん。っーん、っーん」

ああ、ダメ！　豆板醤と甜麵醤と唐辛子を入れて辛めに仕上げた麻婆豆腐が甘ったるくて仕方ない!!

なにこの可愛さ!?!　すっかりっーんをやりつつ、何だかんだ彼のりクエストに応える。女神か!?

「ちよつとあざとい感じで」

「っーんう♪」

おい、止める!!

「甘えた感じで!」

「っーん♡」

見てるこつちが辛い。吐血するぞ!!

「ねえ、萌黄」

「どうしたの?」

「この麻婆豆腐めつちや甘いんだけど……何で?」

「仕方ないよ!　こればかりは!」

コハクちゃんも彼に褒められて嬉しそう、二人でイチヤイチヤしないですよ!!

「可愛すぎる!　ヤバイよ。コハクさん!　もっとやってください!」

この後の麻婆豆腐はパフエより甘かった。



どうしましょう!! デートだ!!! 服はどうしよう!? 髪型も整えないと!!!

色々昨日は悩み過ぎたわね……疲れた。しかし、デートはしっかりとした感じで行きたいスタイル。先ず私が来たのは美容室である。

「どんな感じにしますか?」

「えっと、整えてください……」

インドア派の私は美容師さんと目を合わせるのが意外と苦手だったりする。鏡越しで目が合うのも苦手だったりする。

基本的に私は家でアニメとか見るのが主流だし、いつも千円カットだった。そんな私が美容室に通うようになったのは……十六夜のせい。もう、私は千円カットから美容室にクラスチェンジしたのよ!! もっと可愛くなって意識してもらおうと思って……なのに二股つて!!

美容師さんは私の長い髪を少し切り、話しかけてくる。女のイケイケの女の人。コミュ力高そうね。

「お客さん、あんまり切らない方が良いんですか?」

「はい、それだとアニメで一期から二期になるときに作画が急に変わって違和感あるみたいな感じになりますから。素の私でいたいのであまり切り過ぎない感じをお願いします」

「良く分かりませんが、分かりました……」

ツインテールは私のトレードマーク。十六夜もツインテールが好きだと言っていた。これを崩すことはしない。

「それにしてもお客さん可愛いですね。さぞやモテるでしょう?」

「えっと、どうですかね……あんまりそう言った経験は……ないです」「ええ、本当ですかあ?」

ちよ、ちよつとあんまり急に話しかけてこないでよ!! こっちはあんまりこの陽キャラオーラに慣れてないんだから。あ、鏡越しに目が合った……気まずい。

私って本当はあんまり話さない。本の虫って感じなのよね……十六夜と話すときは結構話しちゃうけど……

「お客さん、もしかしてデートですか?」

「っ! ……は、はい」

「やっぱり、彼氏はきつときぞやカッコいいんでしょうね」

「……はい、カッコいいです……」

何よ! だからバンバン話してこないでよ!! こちとら生粋のインドア派なんだって! コミュ力実はそんな高くないんだって!

「どんな人なんですか?」

「え、えっと。一緒にいると楽しくて、動悸が激しくなって……一見普通だけど、どんなときも一生懸命で、何があっても助けてくれて、私の事が大好きで……優しく、ちよつとエッチで、笑ってる顔が良く見るとこっちまで笑いそうで、とても、素敵な人です……」

いや、ハッズ!!! 恥ずかしいいい!!! 馬鹿か!! 恥ずかしすぎる!!

「大好きなんですネ」

「は、はい……」

「そういう人なら貴方を大事にしてくれますよ。私も昔そういう人が居たんですけど二股掛けられて……」

「そ、そうなんですか……」

「絶対に二股彼氏とは付き合っちゃダメですよ!! そういう人は三股、四股、五股するんですから!」

「そ、そうですか」

「この人圧が凄いわね……」

「まあ、そういう経験も大事ですけど。ちなみに私はもう既婚者です」

「へ、へえー、そうなんですか……」

いや、聞いてないわよ!

「絶対に二股したいとかいう彼氏はダメですよ、クズで馬鹿で愚かしい、金魚の糞にすら劣ってるんですから」

ちよつと、ムカムカシテきた。十六夜はそんなんじゃないわよ……。

「下半身で生きてるキノコの親戚何で!!」

十六夜のこと言ってるんじゃないわよね? きつとそうなんだろう。十六夜は絶対違う。

「二股したいとかいう奴は全員クズ! 社会の底辺!!」

「っ! い、十六夜はそんな人じゃないもん!!」

……美容室にいる、美容師さん、カットされてるお客さん、待つているお客さんは全員私を見た。

「すすすす、すいません。ごめんなさい……」

「は、はい。こちらでも色々言い過ぎました」

……この人は悪くないのに大声出して怒鳴ってしまった。申し訳ない……

もう、この美容室にはいけないな……迷惑かけたわけだし……。僅かにため息を吐きながら私は家に帰る。



「お帰り！ 火蓮ちゃん！ 美容室行って来たの？」

「うん、どう？」

「うーん、うーん？ あんまり変わってないね……パツと見じや分からないかも……」

「まあ、スタンスを崩したくなかったからそう見えても仕方ないわね。因みに前髪を三ミリ、このツイントールが五センチ短くなってるわ」

「あー、うん、いつも通り可愛いってことだね」

まあ、あんまり変わってなくて見えても仕方ないか。実際私もあんまりわかんないし、整えたという事実が大事なのよ。

と、そこへ十六夜がやってくる

「火蓮先輩！ 前髪とツイントールがすこし短くなってますね！」

しよ、初見で気付いた………ただ、私が好きなのよ！

「よ、良く分かったわね」

「そりゃ、挿絵で何万回も……いや、愛に溢れてるから気付きました
!!」

「そ、そう」

前半はちよつと何言ってるか分からなかったけど、まあ気付いたのは褒めてあげて良くてよ？

って、何考えてるんだ私は。平常心。

「明日はデート行きましょう！」

「そそそそ、そうね」

……デートか。初めてじゃない？ 十六夜と一緒のデートって。

——楽しみね……

僅かに口角が上がった。

八十六話 デート

その日、私はデート待ち合わせの場所に一時間前に到着した。現在は午前の九時くらいであり人もたくさんいる。そして、チラチラ見られてる。あんまり考えたことなかったけど私って結構モテる？まあ、どうでもいいか……遅れてはいけないと言う理由で来たのだが……

「おはようございます」

既にいるのね。流石は十六夜……

「いつからいるの？」

「ついさつき来たばかりですよ」

絶対、もつと前からいたでしょ。今現在同じ家に住んでるけど待ち合わせがしたいからって言うからこういう形にしたけど。私がかから出かける時には既になかった。もしかして、二時間前とかからいた？ いや流石に無いか。

「先輩、服めっちゃ可愛いです。それよりも可愛い先輩も流石です」
「あ、そ、そう。そういうのいいからとつとと行くわよ。時間は有限なんだから」

……がつがつ来すぎ!!! いや、嬉しいけども、こっちは慣れていないんです!! ちなみに私の服は白を基調としたワンピースに花柄が入っている。普通にネットでイケてる服は何かを調べました……それを急いで昨日購入して身に付けている。

私はインドア派だからあんまり流行りの服をもっていない。

「手つないでいいですか？」

「しよ、しょうがないわね……」

もう、コイツ何!? どんだけガツガツ来るのよ! 今までハーレム展開になつたらおどおどしてたのにこの変化は何!?

『付き合つて!』

『それって荷物持ち?』

とかくらしいの雰囲気だったじゃない!! そのくせにここにきてガツガツ来るとか何なのよ。押ししてもダメなら押せ押せ押せ押せと言う感じで十六夜は来る。

彼の手は少しごつごつして私の手とは違う。この手でいつも守ってくれたんだっけ……途端に顔が熱くなる。こんなに両想いなのに特別な関係にならないっていうのも変な話……

「先ずは、どこ行くの?」

「映画に行きましょう。今、魔術学院の出来損ないの映画やってますし」

「そ、そうね! 行きましょう!」

よっしやあー!! 是非行きたかった!!

『劇場版魔術学院の出来損ない。トラディショナル・エンド・フューチャリングオーバー』く魔術と魔法の真理。魔法とは? 魔術とは? 全てが明かされる? く最終幕であり完結編く

タイトルとサブタイトルが長すぎだけど、全然気にならない!!

「完結編ですよね」

「そうね。まあ、原作ストックがまだあるから完結編ではないわね。恐らく、終わる終わる詐欺ね。その映画会社、前にもそういうキャッチコピーの映画あったから。多分、次の劇場版はく新たな幕開けくとか言うでしょうね」

「なるほど……それにしても……」

「どうしたの?」

十六夜は僅かに足を止める。一体何事かと私も足を止めて十六夜の方を見る。十六夜は繋いでいる手を見てわなわたと震え始めた。

「こんな手を繋いでることが嬉しくて、感動しています！」
「だから、そういう事を言うんじゃない！」

再び、私は歩き出す。手はつないだままで……

一体、どれだけ愛に溢れているのだろう。まるで前とは別人のような十六夜に驚くとともにやはり前と同じで大事にしてくれていることが伝わってくる。それが嬉しいけど同時にもどかしくもある。この関係は彼氏彼女ではないから。

「映画が始まるまで時間ありますから本屋でも行きますか？」

「そうね……」

私じゃ、私だけじゃ、不満？



映画が始まるまでの間、本屋で時間を潰そうと二人で歩いていると訳の分からない不良が私達の行く道を阻んだ。金髪ピアスで鼻にもピアス。キャップを逆さに被ったりしている、ザ・不良という感じである。ガラの悪そうな不良の五人セット。

「可愛い姉ちゃん連れてるじゃん」

「そんな雑草みたいな男といたいで……」

才能ある新人冒険者に絡む嫌味ベテラン冒険者の如く、十六夜と私に絡む。しかし、十六夜は涼しい顔で彼らを手で制す。

「悪いがそんな時間は無いんだ。異世界で才能ある新人冒険者に絡む嫌味ベテラン冒険者の如く、俺と彼女に絡むのは止めてくれ」

あ、十六夜も同じことを考えてたんだ。ちょっと嬉しい。正直言うところこんな不良何て赤子の手をひねるようなものだが無闇に力を使うのは良くない。それは十六夜も分かっているだろう。

「んだよ、彼女の前だからってカッコつけてるのか？」

「違う……彼女は特別な意味の彼女じゃない」

その言葉にどうしようもない寂しさを覚えた。彼女じゃない……二股とか言わなければ直ぐにでも特別な関係になっても良かったんだ。本当なら彼女って言って欲しかった。

——この人は俺の彼女だからあっちいけ

これくらい、言って欲しかった……。やっぱり二股やだ。二股さえなければこんなことにはこんな気持ちにはならなかった。ちゃんと私を選べば文句なしの百点なんだから……

「だけど、彼女じゃないけど。彼女にして絶対幸せにするって決めるから。あっちいってくれ。俺は彼女と二人きりの時間を楽しんでいるんだ」

何よ……カッコいいじゃない……百点じゃないけど……求めている最高の結果じゃないけどやっぱりカッコいいじゃない……。引いて押して、押しては引いて、何か、私が振り回されてるような感じがしてモヤモヤはするけど

「お前、そんなこと言って恥ずかしくないのか……」

不良達もいくら何でもそんなことを言われると思っていないようにで一步引く。

「恥ずかしいに決まってるだろう。でも、俺は自分の気持ちに正直になろうって決めてるんだ。彼女の前では愛に溢れて、嘘もつかないって決めた。だからついでにちよつとカッコいい事言って火蓮先輩の好感度稼ぎたいって思ってるから多少の恥ずかしさには目をつむる」

それ、言っちゃダメなやつ！ カッコいいのにもったいない！

「こいつヤバイやつじゃないか？」

「帰ろう……」

「そうだな……」

……不良が退散した。十六夜の雰囲気やヤバいやつだったからかしら……

「では、行きましょう……」

ちよつと、いや、大分恥ずかしそうだった。そう言えば手を繋いでほしいって言った時も顔が赤かったわね。本当は恥ずかしいのね……だけど、アピールしてるんだ。私が好きだから。

手を繋いで、一緒に歩く。

特別な関係じゃない。二股したいとか訳の分からない事を言う。それが少し引つかかるけど……でも、私にはこの人しかない……
そう思う



本屋に到着すると早速ラノベコーナーに行く。

ああ、魔術学院の出来損ないが売ってる!! いや、全部ネット予約で買ってるから持つてはいるんだけどこうやって並んでると滅茶苦茶嬉しい!!

私達以外のお客さんも沢山いるのだが男女で居るのは私たち位かしら? 何か、私に凄い視線を向けられる。

まあ、顔は可愛いって自覚はあるけど……

「先輩は何かお勧めはありますか?」

「え? ああ、そうね……『転生して、数年したら中二病から卒業しました』とか面白いと思うわよ……」

「それは読んだことないやつです。先輩がおススメするなら何としても買わないといけません」

「そ、そう。勝手にしたら……」

手を繋いだまま、店内を歩き続ける。男女で居る人たちも何組かいる。カップルに見えているけど私達もカップルに見えるのだろうか？

十六夜は私のおすすめをかうとそろそろ映画の時間なので店外に出る。すると……

「雨……振って来ちゃった……」

空模様はいつの間にか雨雲に変わり、かなりの雨がザーザー降り注いでいた。急な雨なのだろう。傘を持っていない人が頭に手をやり雨宿りが出来るところまで走っている。

もしかしてこれは相合傘イベントのフラグではないか？ しかし、私達はどちらも傘を持っていない。

そ、その辺で買って……そんな事を考えていると十六夜が私の手を離した。

「少し、待っててください。すぐ戻ります」

「あ、うん」

さつきまでずっと繋いでくれていたのに離されてしまった。恐らく傘でも買いに行っただろうけど……一緒にいけばいいじゃない。手を繋ぎっぱなしでいいじゃない。

そんな事を考えていると……雨雲溢れる空に極大の魔力レーザーがいくつも放たれた。その余波で雨雲は吹っ飛び綺麗な空になり虹がかかる。つまり、

雨が止んだ……

「お待たせしました」

その後、直ぐにずぶ濡れの十六夜が私の元に帰ってきた。

「あの、あれって……」

私は空に向けて指を差す。十中八九そうだろうけど一応聞いておいた。

「はい、先輩の綺麗な服が汚れるとあれなので吹っ飛ばしました」

「や、やつぱり」

いや、分かってたけどどんだけよ！　どんだけ、私が好きなのよ！

滅茶苦茶嬉しいわよ！　ありがとう!!

「それじゃあ、映画行きましょう」

「そ、そうね」



映画が見終わって食事もした後、毎度おなじみのあの公園のベンチに十六夜が行きたいと言うので向かった。正直言うと今日のデートは無茶苦茶楽しかった。好感度爆上がりである。この流れで二股告白するつもりだろうけどそれとこれとは話が違うので断る。

「先輩、ここでもう一度告白させてください!」

「何度言っても答えは変わらないわよ」

「うっ、そ、そんなこと言わずに……き、聞くだけ聞いてください」

「はあ、聞いてあげる……」

正直、答えは決まっているが聞くだけ聞く。

「俺は貴方が好きです。死んでも好きです。だから付き合ってください」
「い」

「ごめんなさい。二股とか言ってるうちは無理」

両膝をまだ、雨で湿っている地面につけて、ズーンと頭を下に下げてる。分かりやすい。私だけじゃダメ?

——コハクがそんなにいいの?

こんな事を言うつもりはなかった。でも、思わず口からこぼれてしまった。彼はコハク、コハク、コハク。最近、コハクにも特別な視線を向ける。私もその覚悟があった。だから、背中を押した。でも、でも、私も嫌なんだ。怖いんだ。

いつかコハクに全部持っていかれるかもしれないのが。付き合えたら幸せだ。二股でも彼は大事にしてくれるのは分かる。でも、いつか全部持つてかれて、その時にどうしよもない辛さを味わうなら付き合いたくない。付き合ったらもつと好きになって、もつと尊い気持ちになつて依存もするかもしれない。

異常に気持ちが高まりきつた時に捨てられるのが、どうしようもなく怖い。私は壊れる。それが私は嫌なんだ。一番嫌なんだ。一番怖いんだ。

「……コハクがそんなにいいの？」

「コハクさんも凄く好きです。でも、火蓮先輩も好きなんです」

「……私が二股が嫌な理由の一つにコハクが魅力的過ぎて、もし、二股を受け入れたら……いつか、その、十六夜がわ、私を捨てるんじゃないかって……お、思うのよ……コハクの方が胸も大きいし、可愛げがあるし……」

不安を出した。出すつもりはなかった。このまま楽しい明るい感じで終わらせようと思っていたからだ。告白も軽く流してギャグみたいな感じで。だけど難しい問いを十六夜に投げかけて雰囲気は暗くしてしまった。

「俺が貴方を捨てるなんてありえない！俺は絶対、貴方を好きでい続ける。トラックにひかれて転生しても、通り魔に刺されて転生しても、病死して神様にチートを授かって異世界に転生しても、神様の手違いで転生しても!!」

「ほ、本当に？」

「それだけじゃない、貴方を置いて何処かに行ったりしない！いきなり異世界に繋がる扉を見つけてもそれを閉じて貴方の元に帰る。勇者召喚されそうになったら魔法陣を避けて異世界には行かない！

貴方を一人にしない！ずっと一緒に居る！」

「あ、あうつ、そんなに熱烈に……」

彼は私の肩をがっつと掴むとあの時のように強い瞳を向けた。彼のその瞳に私しか映していなかった。私はもう茹でだこ状態だ。

ずつとこうだ。ムードとか考えない。でも、最高にカッコいい。ずつと、私を大事にしてくれるんだ。

もう、不安の余地はなかった……二股……認めてあげよっかな……

「だから、付き合ってください！」

「あ、あうあうっ」

顔が近い。頭が沸騰して思考が思うようにできない！ 不味い。冷静に考えないと……

「え、えつと……」

「……ダメですか？」

認めてあげてもいい。でも、やっぱり……

「ダ、ダメ……」

「ガーン……」

再び、彼は膝から崩れ落ちた。うん、ダメなのはダメね。……危なく認めるどころだった……。

「がーん……」

……まあ、でも、ちよつとくらいなら色々してあげても……いいかな？ こんなに私が好きなわけだし、そこは評価しないと……

「で、でも、アーンはしてあげる。仕方ないから。後、デートも、手を繋ぐのも、膝枕も、それは付き合ってなくても認めてあげる!! 仕方ないからね!!」

「マジですか！ やった！ このままいけばいつかは！」

「二股は絶対認めないから！ それだけは絶対の絶対！」

まあ、これくらいは……あれ？　ちよつと不味くない？　確かに今の所は二股はしないって考えだ。これは絶対だ。でも、この間もアーンはしないと私の中で決めたのに規制を緩めてしまった。さらに、それ以外のことも認めてしまった……膝枕とかどっから出てきた？

だ、大丈夫……二股だけは認めない。ここだけはしつかりしよう。うん。でも、今言った以外のことも、もう少し色々認めてあげてもいいかな？　手作りとか。

「あの、エッチはダメでしょうか!？」
「調子乗んなー!」

◆◆
「くうう、恥ずかしい……あんな臭いセリフ言いまくって、あんな訳の分からない告白をして……俺は一体何をやってるんだ……」

十六夜は今日一日の愛に溢れた自分の奇行を振り返っていた。正直、彼的に恥ずかしさマックスであった。しかし、どうしても付き合いたい為に過剰な押し寄せアピールをしたのであった。

家に帰って自室でアピールと等価交換した精神ダメージを回復している。

「しかし、火蓮と色々出来る。くう、これは最高だ……でも、恥ずかしい」

彼の精神へのダメージの回復にはもうちよつと時間がかかる。



「ねえ、コハクちゃん。やめたほうがいいよ」

「何がですか？　私はただお出かけをするだけです」

「コハク……マスクとサングラスをして建物の陰に隠れてよくそんな事言えるね……」

コハクちゃんが二人のデートを尾行するらしいので僕とアオイちゃんが、暴走しない様に見張っている。

コハクちゃん……こんなストーカー行為とかするんだ……

「ただ、行先が同じなだけです。決してストーカーとか尾行とかではありません」

「あ、そうなんだ」

「……」

「何手を繋いでるんですか!? ムカつく。雨でも降っちゃえ」

……苦汁をなめるような声で彼女は毒を吐く。これをストーカーと言わずに何というのだろうか……

「ああ、不良から守ってもらってなんて羨ましい、あんな言葉までかけてもらってなんて妬ましい。雨でも降っちゃえ」

……怨念が凄い。アオイちゃんは……アオイちゃんもちよつと羨ましそうに見ているように見えるのは気のせいかな？

その後、本屋の角で偵察していると彼女の祈りが通じたのか本当に雨がかなり降ってくる。しかし、一瞬で止む……彼がやったんだな……

「流星です。十六夜君！」

キラキラした目線を彼に向ける。その後、ハンバーガーを立ち食いしながら三人で尾行である。公園で彼がかなり奇抜な告白を彼女にする。

「いいなあ、いいなあ。私だってあれくらいいされるんですからね！」

……二人が帰ると先回りして自宅に帰る。そして、夕食の準備を始めるとアオイちゃんが眩いた。

「あーし、一日なにやってんだよ……」

Me, Too……

八十七話 お熱ボンボン

夏休みの終わりが近づいている。学校に通う者達はカレンダーと睨めっこして休みがあと何日か数えたため息を吐く事だろう。夏休み中に出来ただらけ癖から抜け出すのは誰であっても難しい。そして、再び自堕落生活から模範的な生活に戻るの嫌で仕方ないだろう。だからこそ残りの夏休みは後腐れを残さない様に思いつきり遊ぼうとか、自堕落に体内時間を狂わせて遊ぼうと考える学生が多い。

しかし、夏休み中にもかかわらず自身を律し規則正しい生活を送るモノも居る。例えば……

「んっ、……」

スマホのアラームが鳴る前に目覚め、自身の体を起こす。銀色の少女が一番に起きた。彼女の横にはパーカーのフードを被ったアオイに、背中越しに抱き着く萌黄が気持ちよさそうに寝ている。もう片方の隣にはお腹を出して幸せそうに寝息を立てている火蓮が居た。

コハクは仕方ないと服を下ろして掛布団をかけてお腹を隠す。その後、朝ごはんの準備の為に寝室を出ようとするが僅かに自身の頭がくらくらすることに気づく。

「あ、れ？ 何か、変な感じがする……」

しかし、首を振ってキッチンへと向かう。歯磨きや洗顔、軽く髪を整えてキッチンへ。この家に住むことになってから彼女は料理をたくさんこなしてきた。これも良妻アピールが出来る為彼女は喜んでいつも行うのだが今日はどこか気だるさを覚えていた。自分の体に鞭打ってなんとかキッチンへとたどり着き料理を始めて朝食を作り上げるがやはりどこか気だるい。

朝食を作り上げると彼女はソファアにダイブ。そして、そのタイミングで萌黄が起きてくる。

「おはよう。ごめんね。朝食一人で作らせて」

「いえ、これくらい」

「……何か、顔赤くない？」

「……そうでしょうか？」

「うん、ちよつと熱測ってみようか」

体温計を渡して熱を測定し始める。そして、測定終了の機械音が鳴り響き萌黄が確認する。

「微熱あるね……病院行こう……」

「いえ、それほどでは……」

「ダメだよ。こういうのは後から熱が上がることもあるんだから」

「……分かりました」

「うん。早速着替えて向かおうね」

「はい……ありがとうございます……」

そして、このタイミングでリビングのドアが開き、十六夜が入ってくる。

「おはようございます……コハクさ……なんか顔赤くないですか？」

「ちよつと微熱があるみたいです」

「そ、そんな……今すぐ病院に行きましょう！」

十六夜もすぐに異変に気付き病院に行こうと促す。かなり慌てている感じであり、早速準備を始める。

「そんな、慌てなくても大丈夫ですよ」

「そうは言っていられないですよ。早く着替えていきましょう！」

「は、はい……では、着替えてきます」

コハクが出て行くと萌黄と十六夜が取り残される。十六夜は萌黄に向き合いとある頼みごとをする。

「おかゆとか作ってもらっても大丈夫ですか？」

「うん、作っておくね。あと、リンゴのすりおろしとか、野菜たっぷり鍋とか、生姜スープとか、シチューとか」

「お願いします。俺はスポーツドリンクとか、ゼリーとか、ヨーグルトとか買ってきます」

確かにコハクは体調を少し崩したが実はそこまでではないのだが、かなり過保護な二人であった。

◆◆ 私 は 現 在、 十 六 夜 君 に お 姫 様 抱 つ こ さ れ な が ら 病 院 に 向 か っ て い る。 す ぐ に で も 病 院 に つ く よ う に 彼 は 魔 装 を 纏 っ て 雷 神 の よ う に 飛 ぶ。 正 直 に 言 お う、 か な り 愉 悦 で あ る と。

確かに具合が悪いがそんなにじゃない。しかし、ここまで心配してくれてお姫様抱つことか、風邪ひいてよかったと少しだけだが思う。ただ、萌黄先輩にもだが心配をかけてしまった事は悔やまれるのも事実だが。ほぼ一瞬で病院に到着してお姫様抱つこは終わりになってしまう。ううっ、もつと病院が遠くあつて欲しかった……と願ってしまい少しいたたまれない。

受付を済ませて、待合室で二人で並んで待つ。

「これどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

彼はスポーツドリンクを差し出してくれる。滅茶苦茶気づかいしてくれる。これじゃあ、余計に熱が出そう……

「気分はどうですか？」

「あ、えっと、だ、大丈夫です」

「何でも言ってください」

「は、はい」

彼から手渡されたスポーツドリンクを両手で包む。冷えていて手の温度が少し下がるが色々な所で温度が上がりそうである。

「銀堂コハクさーん、三番室へどうぞ」

◆◆ その後は、診察を受けた後、薬を貰い自宅に再びお姫様抱つこで帰った。毎日熱出ないかな……

家に帰るといつもの寝室に布団が一枚と机が一つ置いてあった。私は促されるままに寝転がり体を休める。おでこに冷えているシートを張ってただぼーつとする時間が続いた。

十六夜君は私を布団に寝かせてくれた後、色々買い出しに行ってくれるように家を大急ぎで出て行った。

やっぱり、物凄く優しい。知ってはいたが……しかもそんな彼と両思いとは幸せが過ぎる。もしや、今日はこのまま一日中尽くしてくれたりなんかするのかな？　だとしたら最高にも程がある。お嬢様と執事みたいな？　感じ？

『お嬢さまー。』

何気に好き……いや、かなり好き。そんな妄想をしていると寝室のドアが開く。そこにはトレイにおかゆとコップ一杯の水と薬を乗せて火蓮先輩が入ってくる。私の先輩であり、最恐なライバル……

「どう？　調子は？」

「大丈夫です……そこまで酷くないので」

「ふーん、そう……」

彼女は机にトレイを置きスプーンでおかゆを掬うと……

「ふー、ふー。はい」

熱々のおかゆを私が食べられるくらいに覚まして私に差し出す。

「……自分で食べられますよ？」

「今日位いいわよ。私が尽くしてあげる。悪役令嬢に転生したと思っ
て思う存分に自堕落になりなさい」

「そ、そうですか？　では、お言葉に甘えて……ちよつと待ってください
い、何故私が悪役令嬢なのですか？」

「そういういやらしい顔してるからよ。はい、あーん」

「では、あーん！　……じゃなくて、いやらしい顔って何ですか!？」

思わずノリツツコミのような感じになる。この人は優しいのに一言余計な事を言うから素直に感謝できない。まあ、感謝はしてもいい

けど……

その後は、食べさせてもらい薬も飲んでひと段落付ける。

「ふう、ありがとうございます。先輩」

「別にいいわよ。で？ この後どうするの？」

「あまり、決めてはいませんが……少し、動画サイトでホラーゲームのプレイ動画を見ようと思っっています」

「ふーん、コハクってそういうの好きだっけ？」

「夏子さんが好きなんです。話題を増やすために見ています」

「一緒に見てあげよっか？」

「いえ、そこまで怖いわけではないので大丈夫です」

「遠慮なくていいわよ。ほらほら再生、再生」

まあ、別にそこまで怖くはないがせっかく一緒に見てくれると言っ
てくれているわけだし見てもらおうかな……

「あ、でも風邪をうつしたら悪いですよ」

「ダイジョブ、ダイジョブ。私今まで風邪も病気も一回もかかったこ
とないし。健康体そのものだから」

「そうですか？」

「それに何かあるとしても。もうこんなに話してるんだから手遅れ
よ」

だから、気にするなと彼女は言う。意外に気を遣える人である……
嫌いではない……むしろ好ましい。この人と一緒になら十六夜君の
彼女になっても。そんな事を考えながら動画を再生する。

古びた屋敷の探索をする女の子のゲームだ。

「先輩は怖くないのですか？」

「うーん、そんなに怖くは無いわね。全く怖くないと言えば嘘だけど、
そこまでじゃないわよ。ただ、一人は流石にきついだろうし、いきな
り怖いのが出てきたら多少驚くと思うけど」

「私と同じですね……」

「そうなの？」

「ええ、ただ、このゲームは世界でトップクラスに入るものらしいので
覚悟はした方が良いかと」

「ふーん」

プレイ動画を二人で見ている。古びた屋敷が不気味さを見事に醸し出し、作り物であるはずだが多少の恐怖を覚えた。彼女も同じよう
で少し、びくびくしている

「な、なかなかのゲームね……」

「そう、ですね……」

基本的に大丈夫のはずなのにこのゲームは別格だ。

そして……いきなり後ろから黒い影が追ってくる。それに彼女は
ビククリした様で

「きゃ」

「可愛い声ですね」

私は不覚にも可愛いと思ってしまった。

「こ、これ怖すぎ……」

「あの、でしたら無理に見なくても」

「いいわよ、コハクも怖いんでしょ？ だったら一緒に見てあげるわ
よ……」

その後もなかなかのホラー展開が続く

「ひゅえ」

「きゃ」

互いに高い声を出しながら何とか見ていく。私も何度か高い声で
驚きを隠せない事もあったが無事、エンディングが近づく。

「そ、そろそろ終わりかしら？」

「そ、そそうですね……」

「なかなかの怖いやつだったわね……」

「は、はい、ちよつと今日の夜は心配です……」

彼女も私もエンディングが近づいた事にホッとす。そして、ついに『fin』の字が!! やった、終わった! 後で夏子さんには文句を言ってやろうと心に決めた!!

「お、終わった?」

「そうみたいです」

と、終わったと油断してしまった。さらに私達はずっと怖がり、耐性が一時的にかなり低くなっていた。そして、次の瞬間、画面が切り替わる。

『どうてんカードマン!!!』

動画サイトの広告がかなりの音量でいきなり飛びこんできた。

「きゃああああ!!!」

私達は互いに肩を抱き寄せてしまった。

「な、なによ、びびらせるんじゃないわよ!」

「こんなホラーゲームと相性最悪の広告がいきなり来るとは……」

「全く……とんでもなく怖かったわ。じゃ、私は食器を片付けるから下がるわね」

「はい、ありがとうございました」

動画が終わり、彼女はトレイをもって部屋を去って行った。



特に体調が悪くなるわけでも無く、むしろ良くなっていると感じながら布団に横になってしていると再び襖が開いた。

「アオイ先輩……」

「調子は？」

「いい感じです」

「そう、暇だと思ったから絵本読んであげる……」

「絵本ですか？ でも、風邪を移したら悪いです……」

「ダイジョブ、もしなってもあーしを看病してくれればいい」

「そ、そうですか」

中々の男気溢れる事を言ってくれるカッコよい先輩である。

そして、今時、童話の絵本を持っている人はどのくらいいるだろうか？ アオイ先輩は物持ちが良いようだ。

「じゃあ、ロミオとジュリエット、シンデレラ、かちかち山、赤ずきん、どれがいい？」

「では、シンデレラを……」

「センスいいね」

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ……」

彼女はシンデレラを読み聞かせ始めた。どこか童心に帰ったような、昔お母様に看病してもらった時のことを思い出し心が暖かくなった。

「……めでたしめでたし」

「シンデレラっていいお話ですね。改めて思いました……せ、先輩なんで泣いてるんですか？」

「感動した……」

彼女は瞳をウルウルさせていた。しかし、その後すぐに涙をふいて無表情に戻る。

「ゴハク、お熱ボンボン早く良くなるといいね」

「はい、ありがとうございます……お熱ボンボン……ですか。言い方が可愛いですよ。私も偶に使います」

読み聞かせて私を楽しませてくれた後は今度は私を心配してくれる。お熱ボンボンという独独のあざとさ表現で。私もこういった表現は可愛いから使う。おもに、十六夜君の前でだが。

「そう？　可愛いかな？　この表現？　『かんかんのおばあちゃん』がこの表現を使ってたからあーしも使っただけなんだけど……」

彼女は少し嬉しそうだ。前から思っていたがアオイ先輩は褒められるのが物凄い嬉しいようで無表情ながらすぐに分かる。微笑ましがそれより気になることがある

『かんかんのおばあちゃん』とは？

「あの、かんかんのおばあちゃんとは？」

「母方の祖母」

「えっと、カンカンと言う名前なんですか？」

「違う。祖母の家の近くに踏切があつてそれがカンカン鳴るから、かんかんのおばあちゃんって名前昔から呼んでる。変？」

「い、いえ、可愛いと思います」

「そ……りんごのすりおろし持つてこようか？」

「大丈夫です……」

「それじゃあ、今度は子守唄でも……」

なんか……あやし方がおばあちゃんみたい、古典的な感じになっているような気がするの、は気のせいだろうか？　物凄くありがたいのだが。

この後、物凄い上手な子守唄を聞かせてもらい私は見事に眠りにつ

いた。

八十八話 中学時代あるある

私は至れり尽くせりの一日を送っていた。食べ物に勝手に運ばれて片付けもしてくれてまさに悪役令嬢……ではないお姫様のような待遇。

火蓮先輩はいつもの百倍優しく、アオイ先輩の美声の読み聞かせと子守唄で童心に帰り気持ちよいお昼寝タイム。正直に言うとなんて既に大分よくなっていると言ったのだがそれでも尽くしてくれる。申し訳ないと思う反面、ちょっとリッチな気分でお嬢様の気分で楽しい……

そんな事を考えてると襖が開く。こんどは萌黄先輩であった。

「やつほー、体調はどう？」

「大分、良くなりました。熱も下がりましたし」

「なら、良かった。はい、すりおろしりんご」

彼女は座りすりおろしりんごをスプーンですくって私の口元へ運ぶ。

「本当に色々ありがとうございます」

「いいのいいの、ほれほれ、あーん」

「あーん」

「ゴ、コハクちゃんが頬張って僕のすりおろしりんごを食べてる……」

「ゴクリ……」

「何を言ってるんですか!？」

「ジョークだよ、ジョーク。萌黄ジョーク」

「意味わかりません!」

偶にこの人は変態のような気がする。まあ、分かってはいたんだけど普段がしっかりしてる割にギャップがある。

「何か、可愛い子が美味しそうに食べるシーンって一生見ても飽きないよね」

「共感できません」

「あ！ 汗かかないといけなから僕が抱き枕になろっか？」

「急にボケ連発しないでください。それよりリンゴください」

「いいいいいよ、どんどん頬張って！」

「その言い方はやめてください」

まあ、リンゴは美味しい。リンゴが無くなると彼女と一緒に持つてきた、少し甘い匂いのするジュースを彼女は私に差し出す。

「後これも飲んで。手作りはちみつレモンジュース、生姜入り」

「ありがとうございます……美味しい。ありがとうございます」

「よかった」

体が芯から温まるジュースでポツカポカである。彼女からはか나의良妻臭が漂っている……ふと気になった。この人は十六夜君の事をどう思っているのか

「先輩は十六夜君の事好きですか？」

「ええええ!! 急!! どうしたの!!」

何ですか? この慌てようは……

「気になっただけです。で? どうなんですか?」

「あ、えっと、普通です……好ましいとは思うけど火蓮ちゃんとかコハクちゃんみたいな感情は無いです……」

「急に敬語ですね……」

「あ、いや、急に変な事言うからミスっちゃっただけだし！」

「急に大声上げますね……」

「つ……まあ、とにかく特に僕は彼のことなんて、何とも思ってたなんか無いんだからね！」

「急に火蓮先輩みたいになりましたね……」

「っ!? ……アハハ、じゃあ、僕はこの辺で失礼しまーす。ごゆっくりおやすみくださいませ〜」

「ありがとうございます……」

逃げるように彼女は部屋から去って行った。まさか……萌黄先輩も……いや、今は考える必要はない。

その後、夏子さんから連絡が来たのでしばらく話して時間を潰した



再び、襖が開く。今度は……十六夜君でした！ スポーツドリンクとエネルギーゼリーとかいろいろ持つてきて入ってくる。私は体を起こして彼と目を合わせる。

「体調は大丈夫と皆さんから聞いたのですが、一応聞きます。大丈夫ですか!？」

「大丈夫ですから、そんなに不安そうにならないでください」

十六夜君は心配そうに私を見る。彼に氣遣ってもらえると言う事が嬉しくてたまらない。

「すいません、心配をおかけして」

「これくらい大丈夫です！ 全く気にしないでください！ それより早く横になって寝てください！」

彼は私に寝るように言うがすでに今日はお昼寝をしてしまったので中々寝れそうにない。

「寝れる、BGM流しますから！」

「あのお気持ちは嬉しいですが既に今日お昼寝をしているので、これ以上は夜に寝れなくなってしまうです……」

「そうですね……じゃあ、何か出来る事はありませんか？」

「そうですね……じゃあ……あつ！ あの、移したら悪いですから大丈夫です」

「いえ、寧ろ移してもらうためにここに居るくらいですから大丈夫です！」

どういうこと!? 彼の言った言葉を私は直ぐには理解できなかった。

「ど、どういうことですか!？」

「風邪って人に移したら治るって言うじゃないですか。だから、移して貰って元気になってもらおうと思つて」

「ああ、そういうことですか……」

「ですからお気になさらず。なんなりと言つてください!」

では、頼もう! 何がいいか……添い寝? 膝枕とか、でも、普通に手を握ってもらつたりなんかして!

よし、ハグにしよう!

「で、では……っ!」

し、しまった! 熱があつた状態でお昼寝したから寝汗をかいてしまった……こ、こんな状態では……蒸れたにおいを嗅がせることに……お手手にしておこう。うん。

「手、手を握ってもらえますか?」

「そんな、寧ろ俺にとつてのご褒美です! 逆にいいんですか!？」

「いいんです! お願いします!」

最近思うが十六夜君からグイグイ来てくれるのがたまんない。そして、手が良い感じに硬い。微熱つてこんながいいことだったなんて……ありがとう、微熱。めちゃんこ幸せ。

こんな優しい人と両想いなら……それだけでいい。例え、二股でも……私は唐突にそう思った。手を握りながら私は話した

「二股でいいですよ……」

「え?」

「こんな優しく素敵な人なら一緒に居るだけで私はいいです。ですから、私は認めます」

本当にそう思った。そして、彼も笑顔にそれを肯定すると思った。だけど……

「いや、今はその話はやめときましょう」

彼は私の話を断った。もしかして、私を嫌いになってしまったのかと一瞬恐怖したがそれはないだろう。では、なぜ断るのだろうか？

「コハクさん、俺はクズです。どうしようもないです。こんな美人が告白してきたのに二股がしたいと言う。コハクさんも俺をクズだと思いませんか？」

「い、いえ、そんなことは……」

「正直で大丈夫です」

「……そうですね……クズだと思いました。でも、それ以上に私は貴方が好きですよ？」

確かに最初はクズだとも思った。でも、今ではそこまで……そこまです……いや、ほんのちよつとだけ思う位だ。

「ありがとうございます。でも、俺は貴方が少し遠慮してる気がするんです」

「……そうでしょうか？」

「貴方が遠慮する必要はないんです。俺が馬鹿でとんでもない事を言ってるだけだから、貴方は何も譲らないでください。俺は後腐れを残したくない。心の底から言える時に言って欲しい……です」

「……」

「それに今日は熱が出て少し、冷静な判断ができていないかもしれない。だから……今日は一旦おいておきましょう！　そして、ゆっくり休んでください！」

この人、損な性格をしていると私は思った。言い方を変えると物凄くメンドクサイともいえる。少しくらい曲げても良いと思う。少しくらい曖昧でも良いと思う。でもそんなことはしない。愛が物凄く強くて暖かい。

ああ、ここが好きなんだ……どうしようもなく……

「そうですね……先ほどの発言はなかったことにしてください。後、今日は一旦休ませてもらいます」

「そうしてください」

「……しばらくこのまま手を握ってもらってもいいですか？」

「お願いします」

互いの手を握ったまま私達は一言も発さない。普通なら気まずいと思うかもしれないけど、そんなことはなく寧ろずっとこのままで居たいと思う。永遠に続いて欲しいと思う。

しかし、唐突に私のお腹が鳴ってしまった。

『ぐうう』

現在の時刻はお昼過ぎ。おかゆとすりおろしりんごだけでは足りなかったのだ……途端にこの部屋の雰囲気気ままずいものとなる。再び風邪がぶり返したように体中が熱い。恥ずかしい……

「お腹空きましたよね……」

「い、いえ、べ、別に……」

「萌黄先輩のクラムチャウダーでも持つてきますか？」

ク、クラムチャウダー!? あさりの風味が効いたクリーミーで無限に食べられるのではないかと錯覚するあの!?! しかも、萌黄先輩が作ったのであるなら絶対美味しい。食べなくても分かる。一緒に暮らしていくうちに萌黄先輩の料理の腕は把握している。絶対美味しい。

しかし、ここで肯定したら……まるで私が食いしん坊みたいな感じに……前に鼻水を流し、こんどは空腹でお腹を鳴らし、最悪だ……わ、私の積み上げてきた、気品のある、清楚で、麗しく、礼儀正しく、愛も重くなく、手頃でおっとり天然感があつて、非の打ち所がないお嬢様感が、く、崩れてしまう……でも、お腹は空いてきたし。おかゆと

すりおろしリンゴだけで朝昼両方を乗り切るのはきついし……

「持つてきます！ 俺もお腹空いたので！ 一緒に食べましょう！」

「あ、あう……お、お願いします……」

「分かりました！」

空腹には勝てず、さらに同調圧力で思わず頼んでしまった。彼は私がお腹を鳴らしたことなくなんて気にせず、いつも通り部屋から出て行った。

「あ、あ、ああああああああああああああああああ!!! や、やってしまったああああああ!!!」

その後、最高の雰囲気から最悪になってしまった後悔と、自身の空腹の胃を恨み、大声を出した。



そこには、天使が居た。阿修羅と堕天使も。そして彼らは一角であるライオンの敗北を知ったが特に驚きはしなかった。

「ふん、やつは四天王の中でも最弱。負けても仕方あるまい」

堕天使が言う。そして、次なる刺客は……

「……」

「阿修羅、貴方が行くのですね？」

無言で阿修羅が四つあるうちの一つの手を上げる。阿修羅は命を九十九持つている奇怪な生物。戦闘能力も高い。

「では、いつでも行ってください」

「……」

阿修羅は無言でその場を去っていった。すぐにはいかないが準備を整え次第向かうつもりだろう。

「お前が行かないのか？」

「私はいいです。私の力は人の精神に入り込み内側から破壊する強力
で唯一無二ですが相手の力量がまだ知れていませんから」

墮天使の疑問に天使は華やかに答える。天使が語る能力、それは、
かつて十六夜が倒した夢喰いに近い能力だ。

もし、知らずに十六夜に入り込めば……結果は言うまでも無いだろ
う。両者共に治癒不可のダメージで痛み分けである。

「そうか……もし、阿修羅がやられたら俺が出よう」

「ええ、そうしてください」

彼らはどこか舐めている。自分たちが優れていると勝手に思い込
んでいる。だからこそ、彼らの足元に大きなアジフライが……いや、
一皮むけて十六夜はその領域ではない。キスの天ぷらだ。そのキス
の天ぷらが転がってる事には気づかない。だからこそ、きっと彼らは
それを踏みつけ滑り盛大に転ぶだろう。

◆ その時は近い。

コハクの調子が良くなって二日たった。彼女は微熱で風邪の引き
始めに直ぐに対処できたのが功を成したようだ。そして、リビングで
俺は再び……彼女に二股について告白してみようと思った。一昨日
はなんとなく彼女が遠慮して折れた感じがしたからやめた。そして、
熱で心が弱っている可能性もあった。大分、熱も下がり冷静になっ
ているからしつかりとした判断ができそうだし、この間、取り消しとは
言え二股を認めるといったから真っすぐ告白したらもしかしたら
心変わりがあった、完全に認めるかもしれないと思ったのだ。

——というわけで

「コハクさん付き合ってください」

「ごめんなさい」

まあ、こうなるのは分かっていた。何回振られるんだ俺は……

「……正直、私は認めてよかったです。でも、貴方があまりに素敵だから二股するには惜し過ぎます。独占したいんです。だから、今の所は私は二股を認めません」

「そ、そうですか……」

くっ……滅茶苦茶可愛い笑顔で言ってくれるじゃないか……俺は推しの押しには滅茶苦茶弱いと言う事を改めて知った。

その日の、夕方。俺は自宅のベランダで夕日を眺めていた。黄昏ているわけではない。色々考えているだけだ。

そして、ふうーとため息を吐き……

「いや、恥つずいわあああつああ!!」

俺は大声を上げる。それも仕方ないのだ。夕日が俺を照らす。ハードボイルドではない、ただのキスの天ぷらである俺を。

「あんなイケイケでアタックとか恥ずかしい!! そして、言葉選びのセンスよ! 中学生か!! もっとカッコいい言い回しあるだろう! 火蓮への告白とか訳分らん感じになってたし! 異世界あるあるで告白とか意味わからないし!!」

最近の自身の奇行について振り返り、そして、恥じる。最近の自分は可笑しいと分かっており、行動も奇抜さが目立ち、挙げればきりが無い。

「つて言うか、あんなにガンガン行こうぜじゃないんだよ。ハズカシイにもほどがある、しかも、何回振られてるんだ!? デート中に雨を魔装技でぶっ飛ばすとか発想が中学生か!」

そして、ここで思い出したくもない前世を思い出す!!

「ああああああ、中学の授業中にテロリストが攻めてきたらどうしようとか考えたの思い出したああああ!!」

負の連鎖である。恥ずかしい記憶が芋づる式にどんどん出てくる出てくる。

「銃口さえ見れば避けられる!! 机を盾にしよう!!! 手の甲で銃弾を弾こうとか考えてたああああああ!! なんで今思い出すんだあああつあ!!!」

頭を抱えて恥ずかしさで全てが真っ赤になる。しかし、吐き出せば何気に清々しささえ覚えるのは不思議である。

「ふう、明日からも二股を目指そう……」

一度、気持ちをリセットして俺は再び歩き出す。これから先に何があろうと、止まらない。恥ずかしくても真っすぐアピールすることはやめない。不器用な俺に出来る事を精一杯やるだけだ。

八十九話 元ゲーマー

夏休みの終わりが見えてきて二学期が始まる予兆を感じる今日この頃。僕たちは彼の家でのんびりと過ごす。魔族に対する訓練とかはあるが全部をその時間に費やすわけではないのでダイニングテーブルに座り紅茶でティータイム。この家に住んで大分時間が経ちかなり慣れてきた。大体の家具の場所も日用品の場所も把握してる。一人暮らしだったところに比べて毎日が楽しくこんな毎日を送れていることに感謝である。因みにこの家主の彼は日用品とかを買いに行ってくれている。皆で行くと言ったのだが普段支えてもらってるからこれくらいは俺がやると言った。

……嬉しい事言ってくれるじゃん。と思つたのは秘密である。彼が居なくなつてこの家で僕たちは思い思いに過ごすのだが……

火蓮ちゃんはラフな格好でソファに寝転がり占領しながらスマホでアニメを見ている。

「あの、邪魔なんですけど」

そんな彼女に不機嫌そうな顔でソファアの退去を告げるコハクちゃん。

「今、使ってるからどけませーん」

「貴方が横にならず座れば私が座れるんですけど」

「あ、そー、」

「アニメ見ないで退いてくれますか？」

「今、追放もの見てるからー、無理」

火蓮ちゃんは足をバタ足のようにバタバタさせてのんびりタイム。火蓮ちゃんはかなりだらしない一面も持ち合わせて居る。彼の前では結構気を遣う感じがするがいなくなるとこんなダラダラ状態である。コハクちゃんは彼が居る時も居ない時もしっかりタイプの為、火蓮ちゃんとは正反対。だから、よく対立する……

「退いてください」

「前は追放されてから覚醒するパターンだったけど、今回は仲間が主人公の力を見抜けなかったパターンね」
「カッチーン」

無視されてコハクちゃんは青筋を一旦浮かべるとそのまま火蓮ちゃんの背中に座った。

「ぐえ、お、重いんだけど!？」

「あ、ごめんなさい……テレビ、テレビ」

形だけの謝罪を終えるとそのままリモコンでテレビをつけて見始めるコハクちゃん。中々に黒い一面も持ち合わせて居る。

「重い、重い! また、体重増えたでしょ!」

「カッチーン」

コハクちゃんは今度は自分も寝転がり火蓮ちゃんの体に全身のつけた。お寿司のようだ。

「ああ!? 何してんのよ!？」

「すいません。つい」

「ついてナニ!？」

二人の何気ないイチャイチャに心が洗浄されていく。さて、僕はダイニングの方のテーブルに座っているのだが目の前にはアオイちゃん。彼女は紅茶を口に含みながら……あれ? 彼女は紅茶じゃない……何飲んでるんだろう?

「アオイちゃん何飲んでんの?」

「白湯」

「これまた、渋いね」

「カンカンのおばあちゃんが白湯が体液に最も近くて健康に良いって
いうから毎日飲んでる」

「へ、へえ」

カンカンのおばあちゃんって誰!? 変わった名前って事なのかな

? 彼女はそう言いながら煎餅のような魚の骨を食べる。

「アオイちゃん、何食べてんの?」

「さんまの骨の煎餅」

「これまた、渋いね」

「カンカンのおばあちゃんが骨はカルシウム沢山あるから、工夫して摂取した方がいいって言うから、骨煎餅にした」

「美味しい?」

「深い味わい」

カンカンのおばあちゃんとは一体……そんな彼女はパリパリゴクゴク飲み食いしながらサボテンを眺めている。彼女が家から持ってきたサボテンだ。

「アオイちゃんって植物好きなの?」

「いや、好きって訳じゃないけど……なんとなく昔から一緒に相棒って感じだから……サボテンは……」

「そうなんだ。昔から育ててるんだね」

「まあね」

「他に何か育てたことある?」

「……モンスターと2足歩行の動物」

「ええええ!!? どういうこと!?!」

「ゲームの話」

「ああ、そういうこと……」

ビックリした。常識では考えられないとんでもないことを言うから……

「どんなゲームなの?」

「……ええつと、ちよつと待ってて……」

アオイちゃんは部屋から出て行く。どうやらゲームを持ってきてくれるようだ。

「暑っ苦しい！ べたべたすんな！ 先輩の言うこと聞きなさい！」
「ええ、私達仲良しこよしだからいいじゃないですか」
「そうやって私の至福のアニメタイムの邪魔してやろうって魂胆がス
ケスケなのよ!!」

未だに二人がべたべたしてる。全く、クーラーが効いているとはい
え、こんな暑い日にあんなものを見せられるなんて……いいぞお、
もつとやれ！

「お待た」

アオイちゃんがかなり大きめの機材を持ってきた。これはテレビ
ゲーム用なのかな？

「それって結構古いやつだよね？」

「イエス。その通り。昔やってた……とある理由で引退しちやったん
だけど……」

「あ、そうなんだ」

なにやら複雑な事情がありそうな感じがする。あんまり聞かない
ほうがよろしいのかもしれない。

アオイちゃんはテレビの方に向かうとセッティングを始める。

「使っていい？」

「どうぞどうぞ」

「いい加減どけ！」

火蓮ちゃんの上に乗りながらもコハクちゃんが答える。そして、数
分後……

「じゃ、実際にやってみよ」

「うん……」

なんか、アオイちゃんちよつとワクワクしてない？ 無表情なのは
変わりないけど口角が少し3ミリほど上がっているような感じがす
る。どんなゲームをやったか口で話せばいいのに何で実際にやる
んだろうと思ったけど水を差す感じになるので言いません。

「これは何のゲームなんですか？」

「アオイがゲームとは意外ね」

先ほどまでのイチヤイチャが終わり今度は二人してソファアに並んで座り合う。そこにちよこんとアオイちゃんも座る。流れて僕も座ります。コントローラーをアオイちゃんが握り操作してテレビの画面を変えていく。

最初に映し出されたのは……卓球ゲームだった。

「やってみる？」

「僕？」

「そう」

「じゃあ、お試しで……」

king・of・table

というタイトルの卓球ゲームだ。全国優勝を目指す卓球部が主体のストーリー見たい。説明書を見て基本操作を頭に入れる。そして、プレイ開始。

『俺の勝ち。ドンマイ、どんまい』

ま、負けた……しかも、めっちゃ煽ってくる……このゲーム激ムズなんだけど……卓球ゲームなのに必殺技みたいな飛んでくるし……敵の難易度が高すぎる。

「これ、勝てるの？」

「勝てるよ。貸して」

アオイちゃんにコントローラーを渡すと、動きが染みついていながらごとくあっさりと敵を倒した。

「? O勝ちで……卓球のゲームなのに……相手の顔面にピンポン玉当てて? O勝ち。」

「あの、これ卓球ゲームなんだよね?」

「そう。ただ、相手の体力がゼロの時に必殺技で相手に玉をぶつけると勝てるっていう要素はあるけど」

「変わったゲームだね……他にはどんなゲームがあるの?」

「この箱の中に色々ある」

彼女の思い出の品が入っているような箱には他にもゲームディスクが沢山。火蓮ちゃんもコハクちゃんも興味あるようで中身をあまりながら観察。

「こんなゲームがあったんですね……私、ゲームは余りやらないので新鮮です」

「私も基本的にアニメしか見ないからゲームはやらないのよね……」

「僕もあんまりやらないな……あ、でもこれは知ってる『アニマルの森』でしょ?」

「それなら私も知ってます。当時、興味がありました」

「私もそのゲームなら知ってる」

僕は有名どころのゲームディスクを取り出して話題を一つ提示する。これは知らない人が居ない位有名なので会話が弾むはずだ。

「ああ、それは……」

と思っていたらアオイちゃんが暗い顔で溺れそうなくらい沈む感じがする。

「それは……データが残ってない……しかも、バグでぶっ壊れちゃった……」

「ど、どうしてそんなことになってしまったんですか?」

コハクちゃんが気を遣いながら質問をする。

「アイテム無限増殖の裏技って言うのワザット投稿サイトで見つけて……やったら……データが吹っ飛んだ……友達も……色々コンプリートしてたのに……情報デマだった……」

ワザット投稿サイト!!! 何てことをしてるんだ! 僕たち3人は顔を見合わせアオイちゃんがこの世の終わりのような空気を出すので、新たな話題を出してこの空気を霧散させるべく再びゲームディスクが入っている箱を探す。そして、コハクちゃんが違うゲームを話をする。

「こ、これ、ウルトラモンスターってゲームですよ? 当時、わ、私気になってたんです」

「ああ……それは……」

再び、アオイちゃんが暗い顔。このゲームも訳アリのようだ

「それは、ウルトラ級の裏モンスターが手に入るってワザット投稿サイトに載ってて、やったら初期化の方法で……凶鑑埋まったのに……アニマルの森、ウルトラモンスター。この2つのゲームデータが吹っ飛んだせいでゲーム引退した……」

ワザット投稿サイト……デマしかないじゃん! アオイちゃん可哀そう!!

「ちよつと、なにトラウマ再発させてんの?」

「し、知らなかったんです」

ゲームを持ちだしたコハクちゃんに火蓮ちゃんが小声で文句を言う。

この後、アオイちゃんを励ますのにかかなりの時間がかかった。そして、無難にカーレースのゲームを皆でやる。遊んでいるうちに彼女は楽しそうにプレイしていたが途中で止めるとポツリとつぶやいた。

「あのさ、色々気を遣わせてごめん……」

「「え？」」

「ほら、皆があーしを気にかけてくれたから……あーしはずっと一人だったから友達とゲームとかやるのが夢で……それで……昔やってたゲームを持ち出してきた……それで、皆に負担かけちゃった。だから、ごめん」

「何言ってるのよ。こんなの負担でも何でもない。友達なんだから遊ぶのは当たり前じゃない」

「そうですよ。それに私も楽しいです。もつとやりましょう先輩」

「僕だって楽しいよ」

彼女は薄く笑った。

「そっか……」

初めて彼女の笑顔と言えるものを見たかもしれない。ぎこちなく堅苦しい笑顔、だけど確かに彼女は笑っていた。



九十話 転校生

二学期が始まった。誰もが夏休みが終わった事に絶望をしながら学校へと重い脚を向けるところである。勿論、俺だって何となくではあるが名残がある。まあ、しかしそんなことを気にする暇はない。まだ先とは言えバッドエンドもまだあるらしいし……俺の二股恋愛事情もある。未だに認めては貰えていないがなんとなく道は進んでる気がする。

まあ、色々考え事はある中で俺は僅かに懐かしき教室の席に到着である。前には佐々本が。

「おっす」

「おはよう」

「早速で悪いんだが宿題見せてくれるか？」

「そう言われると思つて手に持っているぞ」

「おお、あざまる」

大体予測できていたので彼に宿題を渡す。あとで、宿題料として健全な全く規制とか、かからない本を頂こう。がやがやと久しぶりだとかみんな言い合ってるな。あと、コハクを見て相変わらず可愛いとか、ちよつと焼けたとか言ってる奴もいる。確かに彼女は少し日焼けした感じがあるが……どちらにしても可愛いので特に関係はない。

この世の真理であり、会社の一般教養の採用試験に出題されても可笑しくないのが銀堂コハク可愛い過ぎるという概念。それ故に彼女は色んな男性の視線を持っていき、さらには恋に落ちさせてしまう。まさに俺の話。

だが、しかし……恋に落ちるのが俺だけとは限らない。

今日、この学園に転校生がやってくる。新キャラと言う奴だ。片海アオイも転校生という扱いになるがそれとは別にもう一人。二学期

に突入したときにこの一年Aクラスに転校してくる男子生徒。

黒鯖クロマグロタケシ。金親に匹敵するほどのスペック。イケメン、高身長、スポーツ万能。そして熱血で……銀堂コハクに一目ぼれするという男だ。

ま、まあ、俺にはどうでもいいし、彼女もそんな男に流されないことは分かっている。しかし、イケメンとは恐ろしい物である……フツメンで敵うだろうか……

そこまで考えて先生が教室のドアを開ける。そこには滅茶苦茶イケメンが居た、女子たちはキヤーキヤー騒ぎ出して、男たちは中指を立てる。クツソイケメンじゃないか。金親と並んだら薄い本ができるな……。黒髪に熱血感あふれる黒い目。異世界に転生した勝ち組、日本人という印象だ。

そう言えば……前世で金親×黒鯖とか黒鯖×金親とかあった気がする……ネットで二人の同人の薄い本が話題になっていた時期があったような……考えない様にしよう。

「ええ、おはよう。夏休みの感覚が未だに抜けきらないと思うが二期も頑張って行こう。色々と伝えることがあるがその前に転校生を紹介しなければならぬ。では、頼む」

六道先生に促されると黒鯖はチョークで黒板に文字をかき始めた。字が丁寧である。どうでもいいがそれもムカつく。

「俺は黒鯖タケシ。よろしく！」

「キヤー」

「金親君に匹敵するイケメン！」

「これはとんでもないカップリングが出来そう！」

「紙を！」

人差し指と中指を合わせて頭の上でピツとはじくようにしてカツコつける。女の子達から絶大な支持を得ているな。男子達は

「そういえば、二学期と言えば文化祭と球技大会だよな。ハハハ」

「楽しみだなハハハ」

「夏休みにワンクリック詐欺、五十七回も引つかかたよ。ハハハ」

「俺なんかウイルスがパソコンに入って、羞恥に悶えながら父親に土下座したよ。ハハハ」

「ソシヤゲのガチャに五万使ったよ。ハハハ」

「俺も天井だよハハハ」

男子達は全くと言っていい程、声が鼓膜に響いていない。いや、届いているのだろうが無視して夏休みの思い出話に花を咲かせている。多少は話を聞いてやってもいいんじゃないだろうか？ まあ、いきなり指をピツってやるのはちよつとキザな感じはしたが……黒鮪である彼は自己紹介の後にクラスをぐるりと見渡して廊下側の一番前の席に座っている少女に釘付けになった。



私の名前は野口夏子。花の女子高生である。夏休みが終わり久しぶりの学校登校で私の友達である銀堂さんに会う。夏休み中も多少は連絡を取っていたが面と向かって話すのは久しぶりなので楽しんだ。

彼女は私の前の席に座る。制服がこんなに似合う人っているだろうか。久しぶりに会うとこんな女神と友達とは自分という存在の格が上がるような気がする。後……なんかバストが前より大きくなった様な……この短期間で……気のせいだよな？

「おはようございます。夏子さん。夏休みはどうでした？」

「うん、私はほちほちの感じだけど……それより、魔装少女のニュース見た？」

「え!? あ、はい、きよ、興味深いですよね!」

「あんなことが起こるなんて人生って分からないよね。ネットで物凄い反響なんだって、しかも、何故か顔が上手く見えなくて、摩訶不思議だよね」

「あ、あー、そそそ、そうですね……魔装少女とか、不思議ですね」

なぜ、銀堂さんが慌てふためく感じになるんだろう? 怪しさしかないんだけど……まあ、今は置いておこう。それより、最近の恋愛事情を聴かないといけない。

「そう言えば、夏休みで黒田君との仲はどうなったの?」

私が協力すると決めた以上、最後まで気にしないといけない。しかし、夏休み中は彼女はぼちぼちと言っていたのであんまり詳しくは教えてくれなかった。

「ふふふ、かなり進展しました。少々勢いが余ってしまいましたけど……」

「ほう? どういう感じになったの?」

「その、告白をされました」

物凄い進んどるやないかい。物語が結末を迎えてしまっている。告白をされたのであれば彼女は了解を出し今頃ラブラブカップルになっっているだろう。しかし、彼女は歯切れの悪い言い方をして嬉しそうであるが少々の戸惑いも感じる。でも、まあ、先ずは祝福をしようじゃないか。

「おめでとう。よかったじゃん」

「ええ、それに関しては幸せでした……」

その後の彼女の表情は若干の苦笑いだ。

「でした? 過去形だね」

「ええ……その後、二股したいと土下座されました」

「I can't understand what you are saying」

訳、貴方が何を言っているか理解できません。思わず意味が分からず英語で聞き返すという奇行をしてしまった私。

「確かに理解できないかもしれませんが……その、事実です。火蓮先輩も私も両方好きで決められない。だから、両方付き合いたいって」「えつと……ごめん……何を言っているか分からない」

私の英語を瞬時に理解して何事も無いように会話を続ける彼女はやっぱりすごいと思いつつ、黒田君は何を考えているのか理解しよう頑張っているところだ。しかし、どこか理解ができない。私の常識を軽く超えてきた。

「それは……その通りだと思います」

「えつと、銀堂さんてきにはどう思ってるの?」

「私は……二股を許そうかなって……一時期は思ったんですけど……」

「え? マジ?」

「でも、やっぱり独占したいという気持ちもあり、断りました」

「あ、そうなんだ。随分濃い夏休みだったみたいだね……」

「はい。十六夜君は物凄い濃い人ですから。必然的に毎日が濃い毎日になって楽しいんですね」

「何か卑猥……」

そこまで話して教室に六道先生が入ってきたため会話は中断になる。私達以外の生徒も皆先生が入ってくることで口を閉じる。毎回思うけど六道先生って顔が怖いな。だから、皆静かになるんだろう。

そして、二学期の始め先生自身も気を入れているんだろうから余計に怖い。そんな強面の先生の後ろには金親君に匹敵する、ザ・イケメ

ン。あらら、これは男子達が仲良く出来ない感が出てるな。既に中指を立ててるし……これだからモテないんだよな。うちの男子は。

まあ、女子も皆目をハートにしてるから男子だけを攻めるようなことも出来ないけど。私的には彼は確かにイケメンだが特に何とも思わない。銀堂さんも特に何とも感じていないよう。で何となく窓の外を見て……黄昏た感じを出していた。

いや、滅茶苦茶絵になる……

転校生は黒鮪クロマグロタケシロタケシという名前のイケメンであり、軽く自己紹介を終えた後、彼は銀堂さんに目をくぎ付けにした……おおっとこれは一波乱の予感が……

銀堂さんは窓の外を見ているため、彼の視線には気づかない。銀堂さん、確かに美しい姿だけど頭の中ではかなり庶民的なことを考えてそう。

——今日の献立どうしようかなあ

みたいな……さて、黒鮪タケシ君、略してマグロ君としておこう。彼は銀堂さんの席の前に来ると彼女に話しかける。そして、彼女も彼に気づいた。え？ 何？ 見たいな感じで彼に銀堂さんは顔を向ける。

「君の名前を教えてください」

「銀堂コハクですが……」

「俺の名前は黒鮪タケシだ」

「はい、聞いてました」

「そうか……俺と……いや、後で話をさせてくれ」

「はあ……」

彼女は首をかしげて若干困ったような顔を向ける。彼は一旦、話を切り上げて再び前に行くと先生の指示で自身の席に向かっていった。まさかの黒田君の後ろが彼の席……おいおい、ちよつと面白くなつて

来たんじゃない……いや、いけない、こんな事を考えてはいけない。確かに面白そうな展開だがそう思っではいけないのだ。何故なら人のこういった事を面白がるのは良くないからだ。

うんうん、ダメだよ。と考えていると銀堂さんは私に話しかけてくる。

「夏子さん」

「ん？ どうしたの？」

もしや、先ほどの人とは元許嫁の関係とか、親の知り合いとかそんな関係なのでは!? いや、ワクワクとかしてない。決して。

一体、彼女は どう思っているんだろう？ まあ、黒田君一筋だろうけど、何かを感じたりはしたのだろうか？

「今日の晩御飯、カレーとから揚げどちらがいいでしょうか？」

「ああー、カレーって金曜日って感じがするから、今日はから揚げでいいんじゃない」

「なるほど、そうしますー。」

マグロ君のことはどうとも思っていない、頭の中は献立でいっぱいのようなのだ



さてさて、久しぶりの二年Aクラスで僕はワクワクしている今日この頃。夏休みは魔族とか魔装とか……同居とか、色々あってどたばたパーティーをずっと繰り広げていた。楽しかったけど、たまにはこのクラスの空気を吸いたいんだよねえ。さらにー、アオイちゃんが転校してくる！ ひやつほう！

前の席の火蓮ちゃんは朝から読書である。もう、話しかけて欲しいんだけどな！

「火蓮ちゃん」

「んー？」

彼女は本の方に視線を向けっぱなしでこちらに一切視線を向けない。

「何読んでんの？」

「人生Fランク社会人が異世界でSランク冒険者になりました。この世界では俺の固有スキルは優秀過ぎて、強敵とか国も楽勝過ぎてS級美女もよってきますよ」

「長い！ タイトルが長い！ サブタイトルがメインより長い！」

「そうねー、でも最近はこのまんよー」

あんまり話聞いてないね、これは……火蓮ちゃんは本の虫だからなあ。そんな寂しげな僕の背中をトントンと叩く誰かが。振り向くとほっぺに人差し指が刺さった。何という古典的ないたずら。こんなことをするのは……

「おっはー、萌黄」

「冬美ちゃん。おっはー！」

冬美ちゃんだ。僕の親友である彼女、夏休み中になんとしても彼氏が欲しいと言っていたが……

「ねえ、聞いてよ。彼氏できなかつた」

「それは残念だね」

「もお、本当にクソだよ。うちを彼女にしないとかセンス無すぎすぎ！」

「まあ、そういうときもあるよ」

「うちの体が貧相だから？ どいつもこいつも男つてのは脳にチンポでも生やしてんのかつて！ 死ぬ、巨乳！」

「あの、視線下げて僕の胸に言わないでくれる？」

彼女って物凄い良い子で好きなんだけど……結構下ネタとか言う

のが偶に傷なんだよね……しかも、結構堂々と……

「はあく、ガチ萎え。まあ、いいけど。あ、そう言えば聞いてるよね？」

魔装少女」

「あ、うん。不思議な人達でしょ？」

「そうそう、あんなことが起こるとか人生何があるか分かんないよね。うちにも飛び切りの彼氏とかできるかも」

「あはは、できたらいいね」

「何か……おどおどしてない？」

「ギクツ！ そ、そんなことないよお」

あ、危ない。魔装少女関連は秘密だから何としてもバレない様にしてないといけない。慌てながら誤魔化しているとそこで先生が教室に入ってくる。久しぶりだ

「ええ、お久しぶりです。早速ですが転校生を紹介します。入ってきてください」

アオイちゃんだな、きつと。彼女が来ると僕も待つて居たら……来ない……入って来ない。

「あの、どうぞ。入ってください」

先生が再びそういうと

ド緊張の表情でアオイちゃんが入ってきた。足と腕の出す方が同じで、最早関節の動きがロボット。顔は無表情だが滅茶苦茶緊張してる!!

そんな彼女はみんなの前に立つ。

「あ、えと。えつと、私、じゃなかった……あ、ああ、あーしゅ……あーしは、な、名前は、かた、カタカタ、かた、かた……」

もう、目がぐるぐるしてる……火蓮ちゃんも心配してる感じになっているなか、僕は手を挙げた。

「彼女は片海かたうみアオイさんです。少し、シャイですが物凄くいい人なので皆仲良くしてあげてください」

「パアアア！」

彼女の顔がめっちゃくちや明るい感じになる。ふう、上手くフオローができた。



「さつきはありがとう」

「いいよ、あれくらい」

「心配したわ……アオイってあがり症だったのね」

朝のホームルームが終わった後、アオイちゃんが僕たちの元にわざわざ来てお礼を言ってくれた。

「一定以上の視線を向けられると……あーしは固まっちゃう」

「そんな特性を持ってたのね。言ってくれば私が先生に言ってあげたのに」

「ありがとう、でも克服もしたかったから」

「アオイちゃん頑張り屋さん！　そういうのカッコいいと思うよ！」

「……そう……」

彼女は褒められると伸びるタイプ。僕たちが話しているとそこに冬美ちゃんも混ざってくる。彼女も僕と同じで結構グイグイ来る。

「おっす、うち冬美。よろしく」

「お、おっす、あーしアオイ……よ、ヨロ、しく……」

冬美ちゃんのいきなりの挨拶にちゃんと乗ってくれるアオイちゃん可愛い。さらにちよつとおどおどして恥ずかしがるアオイちゃん可愛い！

「アオイは、二人と知り合い？」

「あ、うん。と、友達……だよね？」

訴えかけるような視線を僕たちに向けるアオイちゃん。そんな、心

配そうな視線を向けなくても大丈夫だよ

「もちろん」

「友達よ」

「っ……」

ちよつと小さくガッツポーズするアオイちゃん。

「へえ、じゃ、うちとも友達になろうよ。連絡先とか交換しよ!」

「ええ!?! い、いいの、あ、あーみたいな鷹の親戚みたいな奴と!?!」

「いいよ、うち、鷹、家で飼ってるから。むしろ好き」

「あ、じゃ、じゃあ、よろしくお願いいたしまする」

言葉の語尾が変な感じになってる! っっていうか冬美ちゃん、家で鷹飼ってるの!?!

「オツケー、登録完了。ところでアオイは彼氏いる?」

冬美ちゃんお得意のいきなり、話を持っていくスタイル。携帯をしまつてちよつと圧力をかける感じで彼女に聞いた。

「いない」

「そっかー。マイベストフレンドアオイ、これからよろしく!」

「あう、は、はい」

がっちりと握手を交わす、二人。冬美ちゃん、アオイちゃんはピュアだからあんまりからかわないようにね。火蓮ちゃんも若干そこを心配しているようだ。

「アオイは彼氏欲しいって思う?」

「あんまり」

「萌黄と同じじゃん。火蓮は?」

「……欲しい」

「うちと同じ、テンション上がるわ!」

「何でその程度で上がるのよ」

「だって、上がるもんは上がるんだもん。あれ? でも、前、火蓮っ

「てどうでも良いって言ってなかった?」

「しようがないじゃない……欲しいって思っちゃったんだから……」

あら、照れてる火蓮ちゃんも可愛い! 冬美ちゃんと火蓮ちゃんはあんまり話さなかつたけど僕を挟んで偶に少し、話してたんだよね。

「あ! アジフライ君か! ガチ惚れで草!」

「っ! あ、あっちが私に惚れてんのよ! ってかアジフライ言うなのよ! 十六夜ちよつとセンチメンタルになるときがあつて気にしてんとか! ダブルデイストラクション・オーバレイとか! アジフライとか! 気にするからやめて!」

「おけおけ。とりま火蓮はガチ惚れと」

「だ、だから、違う!」

「セックスはした?」

「っ!!! す、するかあ!!!」

教室で大声出しちやいけない。冬美ちゃん、しよっぱなから飛ばすな。しかし、そこでアオイちゃんが首をかしげて質問をする。

「セックスってなに?」

「え? ガチ? そういうピュアっぽさ装うのはあざといから嫌われるよ」

「ええ!? それはやだ。でも……本当に知らない……嫌われたくないから教えて、ほしい」

「え? ガチで知らない? ……そういう子いるんだ……じゃあ、教えてあげ、ムゴツ!」

冬美ちゃんが言いかけたので僕と火蓮ちゃんに彼女の口を封じる。

「アオイちゃん心配しないで。こんなの知らなくても嫌いになつたりしない! 冬美ちゃんもちよつと教室で話すことじゃないでしょ!

いい加減にして!」

「そうよ、知らなくてもずっとよ。だから、この変態は無視していいわ! 教室でこれ以上の下ネタはマナー違反よ!」

「むご、むご」

冬美ちゃんは何も言えないが途中で僕たちの手を振り払って、アオ
イちゃんに話を続けた。

「駅弁って知ってる？」

「うん、あーし、結構好き」

「やめろおおお
!!!!」

九十一話 マグロ対アジフライ兼キスの天ぷら 前編

朝のホームルームが終わり、私は次の時間の準備を始めつつ前の席にいる銀堂さんの観察をする。彼女は鞆の中からイチゴ味の飴を出す口に入れて、少し頬を緩ませる。

「あ、夏子さんもどうぞ」

「ありがとう」

彼女は後ろを振り向いて、お菓子袋から飴玉を一つ私に差し出してくれる。一学期の時も思ったが彼女は必ずと言っていい程、お菓子袋の中にお菓子を所持している。体重気にしてるんじゃないや……いや、何も言うまい。多分このことを彼女に告げたら不機嫌さマックスでチョップ連打をしてくることだろう。

そんな彼女の前に転校生のマグロ君が……女子たちが目をハートにしているよ。ん？ 何やら視線を感じる。黒田君……へえ、本当に両想いって感じがする。前から何となく分かってたけど

「俺の話聞いてくれ！」

「どうぞ」

彼女は特に表情を変化させることなく、体を殆ど動かす事もなく、返事を返す。

なんか、冷たくない？ いや、初対面だから仕方ないんだろうけどさ……なんか冷たくない？ きつと黒田君なら……

『コハクさん、ちよつと良いですか？』

『はあ、いいなあんですかあ？』

まったくとした話し方で首なんか傾げちゃって可愛いさをアピールしつつ、女神のほほえみをするんだろうな……やっぱ、黒田君限

定であざとい！ いや、そういう部分があるって言うのが可愛いんだけどね。

さて、思考を戻そう。マグロ君は……彼女の前でいきなり

「改めて自己紹介させてくれ、俺は黒鮪タケシ！ よろしく！」

「よろしくお願いします。タケシ君」

「それで、俺この学校にまだ慣れていないんだ！ だから、昼休みに学校を案内してくれな……」

「ごめんなさい。お昼は予定があるので」

いや、返信が速過ぎ！ 最後まで言っていない！！

「あ、あのマグロ君、いきなり銀堂さんに」

「もしかして、乙女漫画みたいなの！」

「キヤーキヤー」

女子たちは騒いでいるが……当の本人は何とも思っていない。銀堂さんってギャルゲーとかに出てきたら滅茶苦茶難易度高そうな気がする。黒田君が特別なだけで、一般的な男性からの難易度はベリーハード越え、だ。

「昼休みは先約がありますから。申し訳ないのですが他の人に頼んでください。それが難しいのでしたら六道先生に私から頼みましょうか？」

「え、いや」

鈍感系か!? イケメンが一步引いた!! 彼女は恐らく好意にはなんとなくだけど感づいているような気がする。しかし、ここで鈍感系を装ってイベントを回避しようとしている。

「ごほん、だったら放課後はどうだ？」

「放課後は先約がありますから、すみません」

「くっ、君は多忙なんだな」

「はい、そうです」

「出直してくる……」

す、すごい。ガツガツ系男子を清流のように綺麗にかわしていく彼女。と、とんでもない。彼女を攻略した黒田君ってやっぱりすごい。まあ、黒田君だったらあそこで引かないしね、背後霊かよっていうくらい付きまとうのが目に見えている。

『付いてこないでください!』

『偶々行先が同じなんです!!』

もう、グイグイ来るからな……。最初の彼女はあれくらい冷たい感じがしたけど、今回は無理に殻にこもった印象を受けた。ちよつと聞いてみよう。

「銀堂さん、ちよつと冷たいんじゃない?」

「ええ、私もそう思いました。そこに関しては申し訳ないです」

「だったら何であんな対応を?」

「……普通の男子生徒ならあそこまでの対応はしません。しかし、あの転校生、タケシ君は私の自惚れでは無ければ……私に好意を持っていると予想できます」

「おお、ぶつちやけたね」

それ普通言うかな……。まあ、その通りなんだけど。しかし、やっぱり気付いてたんだね。

「はい、私は鈍くは無いので」

「おお、なんか出来る女って感じがする。黒田君の時はどうしようもないポンコツだったのに」

「そ、そんなことないですよ! あれは、十六夜君がテクニシャンだっただけです! 釣った瞬間に餌を上げないんですよ!」

「あ、そう」

「そうですとも! さらに言うなら十六夜君は今まであって来たどの人とも違うタイプなのでどうしていいか分からなかったんです! ご、強引で、優しく……でも、偶におどおどするところも可愛くて

……」

「あ、そう。それでなんで冷たくしたの？」

これ以上の話は胸焼けするので早々に話題を変えて、マグロ君への塩対応の理由を聞くことにした。

「そうでした。話を戻します。あんないきなり好意を向けられても困るだけなので、気づかないふりして引いた方が勝手に諦めてくれるかなって思いました。それと変に仲良くして十六夜君との時間が減るのは絶対に避けなければならぬ事ですから。」

「ああ、結構私的で黒い理由……」

「十六夜君なら、いきなり、貴方とは付き合えませんかと言う所なんです。しょうけど、私にはその度胸は無く……お恥ずかしい限りです。結論は十六夜君は凄いつてことです！ ああ、あんな人に告白されてしまった。両想いになってしまった……」

「あの、無理やり胸焼け展開に入らないで。話が九十度くらい変わってるから」

彼女は結局、マグロ君に構っている時間は無いと言う事を言いたいんだろう。彼女は今現在、二股事情とかで色々考えないといけない事もあるだろうし、大変だな。人を惹きつける人は。



昼休みになった。コハクがマグロを全く何とも思っていない事が分かったので安心して俺は彼女を食事に誘うことが出来る。本来もマグロ君が彼女に一目ぼれして告白までするが冷たく振られて、その後も何度もアピールするが彼女には響かなかったよう。特に進展もなかった。魔装少女をやっていたり、女の友情とかを第一に優先したからという理由もあるけど。兎にも角にも彼女に何も変化が無く安心して。日常回で特になにか大きな事が起きるわけでも無いので特に介入とかはするつもりはなかったが彼女があっさりして彼を退けてくれてよかった。俺はコハク達と食事をなるべく彼女を食事に

誘う。

「コハクさん」

「はぁ〜い、何ででしょうか？」

くっ、可愛い。なんで、首をかしげて甘ったるい声で答えるんだよ。骨抜きにされそう、あ、もうされてるか。

「食事行きましょう」

「はい！」

彼女は満面の笑みで了承してくれた。他にも二年生組を誘うつもりだが、先に彼女達が俺達の教室に足を運んでくれた。

「十六夜、いくわよ」

「アオイちゃんも一緒です」

「ども」

紅蓮と大海と稲妻と。三者三様の魅力的少女たちが誘ってくれるなんてなんて幸せなんだ。

「おいおい、女の子が一人増えてないか？」

「とんでもねえ、アイツは……ガチハーレム系主人公かよ」

「一体いつからアイツはキスの天ぷらになっていたんだ……」

「しかし、未だにアジフライ感はぬぐえず」

男子達からはあんまり好ましい視線はないが、かと言ってマグロのような負の視線は無いな。一方女子からは疑惑の目線と考察が行われている。

「黒田君ってモテるの？」

「いや、そんなはず……しかし、モテるのか？ もしかして、髪切ったらいケメ……いや、髪短いから顔ガツツリ見える……結局アジ……」

「うーん？ 性格が良いのかな？」

「確かにそう見えるけど。内心イケメンってやつなのかな？」

「見た目はアジフライ、心はキスの天ぷらみたいな感じ？」

「両方、リーズナブル」

ふっ、どうやら俺の株が上がっているようだな

さて、食堂へ向かおうとした時、彼が俺達の前に立ちはだかった。「待ってくれ！ 君の予定って言うのはその彼と食堂に行くことなのか？」

「はい、申し訳ありません」

彼女は軽く頭を下げて、謝罪をしつつ距離を取る。するとマグロは今度は俺の顔を見た……。

「そうか……君が……？ なるほど？ よろしい……ならば決闘だ！！」

マグロがコハクに一目ぼれしたのは分かっていたし、彼女の方に何か言っても無駄だと言う事が分ければ、もしかしたら俺の方に何か来るんじゃないかと予想はしていたがまさかの王道的な展開に驚きを隠せない。っていうか俺と彼女を見比べて何か言いたいことがあるようだな……

「俺は銀堂コハクに一目ぼれしてしまった。だから、お前が気に喰わない。だから彼女をかけて勝負しろ！」

彼の一言に教室の女子たちは歓声を上げて、男子達はうわぁー、と引いていた。

「でたよ、女賭けて勝負。いやだね、いやだね」

「でも、女子たちからは人気だぞ」

「俺もやったら言われるか？」

「別の意味の悲鳴じゃないか？」

「歓声はイケメンに限るって事か」

一方、魔装少女組は

「なんか、乙女漫画みたいな展開ね。テンプレって奴ね」

「コハクちゃんはやっぱりモテるね」

「コハク……凄い」

「ノーコメントでお願いします」

コハクはどうしていいか分からないと言った感じで、火蓮は二次元にあてはめ、アオイと萌黄はコハクを褒める。そして、俺に勝負をしかけてきたマグロはずっと俺に指をビシッと向け続けている。

この彼の勝負への解答は決まっている。

「断る」

「なに!?! どうしてだ!?!」

「コハクさんをかけて勝負と言っても、俺が勝っても君が勝っても彼女をどうこうする権利は俺達にはない。だから意味がない。結論、やらない。そもそも、銀堂コハク、一人の少女を賭け事に使うなんて言語道断! 彼女の人生は彼女だけのものだ!」

「くっ、確かに……」

こんどは俺が彼に指を差した。

「そんな思考になるなんて、恥を知れ! 馬鹿者!」

「ぐっ、出直してくる……」

そういうと彼は去って行った。

「流石です。十六夜君! さすいぎです! 私、感動しました!」

「良いこと言うじゃない……さすいぎ」

「ほえ、意外と心に響いたよ、さすいぎ」

「あーしも意外とカッコいいと思った……さ、さすいぎっ!」

アオイだけはノリで言っただけのようだが、さすいぎ……何気に嬉しい。あと、普通に褒めてくれるのも嬉しくてたまらない。ニヤニヤ

してしまうとダサイので草食系のような感じで食堂に向かう。



いやー、まさか彼があんな素敵なおセリフをいきなり言ってくるよ、関係ない僕がちよつとドキドキして……さて、食堂に到着。受付の所で僕たちは食堂のメニューを選択するために並ぶ。そして、僕たちの番になり先ずはアオイちゃんの番になる。

「どれがいいかな……」

「エビフライ美味しいよ」

「肉じゃがも絶品ですよ」

「オムライスもいい味出してるわよ」

ここの食堂のメニューは豊富でどれも美味しそうだから、初見だと迷ってしまうのは分かる。だからこそコハクちゃん、僕、火蓮ちゃんの順番で彼女におススメを言うがそのせいで余計に迷ってしまう。

「う、うーん……エビフライ、肉じゃが、オムライス……どれも美味しそうで迷う……サバの味噌煮もあるんだ……え、ええつと……アンタは何かおすすめるはない?」

「そうですね。カレーです」

「じゃ、カレーで」

速い、決断が速い。彼におススメを聞いた瞬間、すぐに決定。その行動に二人の眼が少し鋭くなる。なにやら乙女の勘に引っかかるよ
うだ。

「……」

「なに?」

「いや、別に」

その後、僕たちも頼んで彼の番になる。彼は少しカッコつけて……
「いつも……」

「カレーだね」

『いつもの』と言うセリフを言う前に言葉を遮ぎられて注文を終えた。食堂のおばちゃんに完全に覚えられている。その後、皆で席に着くと周りからの視線をくぎ付けだった。一学期の時もそうだったけど、今回は転校生のアオイちゃんが居ると言う理由もあるだろう。するとアオイちゃんが両手で顔を覆った。

「アオイちゃんどうしたの？」

「視線やだ……もぞもぞする。あと、緊張と焦り」

「すいません。俺が悪目立ちするから……何だったら魔装技で全員に幻術を掛けましょうか？」

「いや、そこまではいい。周りをジャガイモとカボチャだと思って頑張る」

「くっ、アオイ先輩、なんて健気なんだ……」

くっ、アオイちゃんなんて健気なんだ……僕も全く同じ感想を抱いている。その後、食事をしてコハクちゃんと彼とは別れて教室に戻った。



放課後、私達が下校した後、十六夜の家で料理を始める。今日は私の食事当番だからである。さて、料理をしながら今日一日を振り返って行こう。

まさかのコハクに一目ぼれする、テンプレ主人公のような転校生が登場。そして、十六夜に勝負を挑むが『テンプレ殺し』の十六夜はそれを受けずしつかりとカッコいいことを言っつてその場を凌ぐ。流石十六夜と言ったところである。振り返りながらトントンとニンジンと切っていく。最初に比べたら大分上達している。流石天才の私。

転校生のマグロがコハクとくっついてくれればそれでいいんだけど、そんな都合のいいことは起こらないのであまり考えず、私の

ちよつとした不満事を思い浮かべる。十六夜がコハクを取られたくないのか、ライバル登場で焦っている。そのせいでチラチラコハクを見ているのだ。詰まんない事この上ない。

包丁で野菜に怒りをぶつけるがごとく、バンバン切って、肉を炒めて、野菜を炒めて、大体火が通ったら煮込みを始める。

「肉じゃが、肉じゃが、今夜は肉じゃが〜」

自己構築した音楽を発しながら、煮込みを始めてその間にアニメを見る。ここが注意だ。前回はつい、アニメを見すぎて焦がしてしまったので今回はほんのちよつとだけ、見るだけだ。本当にちよつとだけ、五分から七分だけ……それだけしか見ないんだから！

……

……

「うんうん、このシーンは何回みてもいいわよね……」

「ああ、この詠唱がいいのよ」

「ここ作画良すぎ！」

「このシーン、さいこ……ん？ 焦げ臭い……ああ!!!」

その後、私は食卓に料理を運んだ。皆が座っているなかにおかずを複数置いた。レンコンのはさみ揚げ、から揚げ、ソースとんかつ。色々、沢山の料理である。

「………今晚は冷凍食品のフルコースです……」

私は目を逸らしながらエプロンを外した。

九十二話 マグロ対アジフライ兼キスの天ぷら 脱線

私は料理を盛大に失敗して冷凍食品を皆に振る舞ってしまうと言う女子力が皆無な事をしてしまった。皆、仕方ないと言う表情で何事も無いように食べてはくれたんだけどこちらとしては顔から火が出そうだった。どう考えてもコハクに嫁力が劣っている。自覚はあった。だからこそ埋めようと日々努力をしているのだが中々思ったような、異世界小説のように上手くは行かない。とんとん拍子に物事は進んでは行かないのだ。

くつそ、あそこでアニメさえ見なければ……後悔しても仕方ない。前が向きにくい状況でも前は向くしかない。コハクとの差が出来てしまう。あのあざと後輩最近、妙にボディタッチが多いのよ。名前呼ぶときに肩をトントン叩いたり、手を軽くメガホンのようにして囁くように耳元で要件を話したり、十六夜の目の前で髪を耳にかけて艶やかな自分をアピールしたり、十六夜と話するときだけ声を2トーン位高くして、さらには家の私服がボディラインが強調しているのを着る確率が高い!! どんだけアピールをすれば気が済むのよ!? 天使みたいな顔して頭の中は小悪魔な事を恐らく考えている、行動全部に意味があり、無意味な事をしない、着実に一手を打っていく。

お互いに二股を断った仲であり、恋愛勝負は無意識のうちに休戦だと思っていた。私は。そう、ここがポイントなのである。あまり最近はギスギスはしていなかったし、寧ろ看病をしたりしたから仲良しな固定概念が頭の中ですつと植え付けられており、互いに表立って対決するような感じではなかったから油断していた。

ここで何かしらのアクションを起こさないといけない。十六夜が私を嫌いになったり好きでなくなったりすることは無いと思うが、ア

ピールをし続けた者とそうでない者の差は何処かで出てくるかもしれない。

ならばアピールするしかない。十六夜は鈍感ではないのでこちらの意図が伝わりやすいと言うのが素晴らしい点だがそれはコハクにも適用される。生半可なアピールは五十歩百歩。

かと言って私はあまりに積極的な言動はツンデレ体質上、超ハズカシイそして発言がかなり奇抜になるため、出来れば控えたい。

と言う事は、え？ 詰んでない？ まさかのサブヒロイン？ メイン降板？ そ、そんなのはダメ、絶対ダメ。

死ぬほど恥ずかしいけど……何かやらないと……



俺は最後にお風呂に入って寝室に向かっていた。お風呂に入るのは絶対に最後と俺は決めている、男が入った後の湯船に彼女達を入れるわけには行かないからだ。他に私的な理由などあるはずがない。さて、ここからは孤高の時間。二階の自室で一人で就寝するので彼女達とは別の部屋で一人夜を過ごすのだ。偶に下の和室から楽しそうな声が聞こえるので余計に孤高の感じが高まる。

一人月に照らされ、就寝……と思っていたらベッドに掛布団が一枚乗っており、その中に誰かが入っている。

——大事の予感、良い意味で

俺はその掛布団を取ると、中には絶世の美女。ツンデレオブツンデレの彼女が。

「あ、えっと、ね？ これは、その、ち、地球温暖化対策って言うか、あんまり人がいっぱいいると温暖化が地球になるって言うか！ あ

れがあればだから、こ、ここに来たわけで、決して私的な理由じゃなくて!!」

おいおい、可愛すぎだろ。髪を結んでいないからいつもと違う可愛さがある。詰まるところ可愛いのだが、ギャップ萌えと言う加点もしなくてはいけないので、満点を超えて可愛いと言う事であり、俺も情緒不安定になりそうではあるがここは大人な対応で行くとするか。

「あ、そ、そうですか」

「そ、そうよ、だから一緒に……か、勘違いしないでよね! こ、これは地球の為なんだから!」

「そうですか。地球の為なら仕方ないですね……」

「そうよ、仕方ないのよ……」

というわけで同じベッドに彼女が寝るのだが……お互いに背を向けて特に会話はない。ど、どうすればいいんだ? なんて言えばいいんだ? 彼女も話が出来ずにいることで空気感が微妙になってしまった事を気にした様で俺に話しかけてきた

「な、なんか話しなさいよ」

「あ、えつと朝ごはん何食べました?」

「……一緒に食べたじゃない」

「あ、そうだった……」

くっそ、ここでチキンになつてしまう自分が情けない。

「……ねえ」

「は、はい」

「背中越しじゃ、十六夜が話しづらいでしょ? 私は別に話したいとかはないけど、き、気を遣ってあげる……だから、向かいあいなさい……」

「そ、そうですね」

彼女の細い声が背中越しから聞こえてくる。見えなくても恥ずか

しがっているのは分かっているが彼女にここまでセリフを言わせてしまうのは、情けない。と思いながら反転する。

眼が合った……

月の明かりに照らされた彼女はまさに、世界という概念。彼女の為に世界があるようなくらいに彼女の存在感が大きかった。

炎の瞳に長いまつげ、魅力的過ぎて呼吸を忘れてしまいそうになる。

「……」

「もつと、何か話してよ……」

「ひゃい、えつと今期のアニメはお勧めは？」

「そうね……今期はあれね、あれよ、ほら」

彼女は度忘れしてしまったのか、余計に気まずい展開なってしまった。なにか気の利いたことを言わないと……ここは押せ押せな感じで俺が話を盛り上げないと……よし、心を入れ替えて

「火蓮先輩、可愛いですね！」

「なっ！ さっきのまでの話と全く関係ないじゃない！ か、会話のキャッチボールしなさいよ！ それじゃドッジボールじゃない！」

「俺と付き合ってください！」

「どうして急にそういう話になるの!?! もう、無理してテンション上げなくていいから！」

「そ、そうですか？」

「そうよ、今は……こうして、いるだけで……私は……」

その言葉の続きを俺は予想できてしまった。外れだったらとてつもなくキモイ奴だが

「だから、気まずくても、それでいい……無理しないで、このままでもいいから」

「そうします」

そこからたどたどしいが会話を続けた。完璧な返しとか、気の利いた言葉とかお互いに言えないがそれでも楽しいと言う事には変わり

なかった。昔、一度でいいから彼女達と話をしたかった。こ
うやって話せるだけで俺は幸せ者なんだな。

そして、大分時間が経って

「そろそろ寝ない？ 明日も学校だし」

「そうですね……」

確かに余りの夜更かしは彼女の肌に関わる。人間の最も成長する
と言うゴールデンタイムも過ぎていることだし、名残惜しいがここで
寝るとしよう。かと言って興奮して寝れないんだろうけど……

「おやすみ」

「おやすみなさい」

目を閉じたが全く眠れない。火蓮が隣に居るって相当ヤバくない
か？ 絶対眠れない、色んな意味で。眼を閉じてしばらくたつた。す
ると彼女の声が聞こえてきた。てっきり寝たと思っていたのだが
「ねえ、起きてる？ って寝てるわよね……あの、急に押しかけてごめ
ん」

し、しまった。つい、返事をするタイミングを逃してしまった。だ
けど、彼女は俺が寝てると思って話してるわけだし寝たふりをしよう
……

「なんかさ、コハクに負けていられないって思ったらこんなことし
ちゃった、私ってあんまり恋愛事とか上手く出来なくて、でも、これ
くらいはしないとって、だけど訳分らない行動しちやって……本
当にダメよね……ごめん。寝てる十六夜にも簡潔にまとめて話すこ
とすらできない……」

……彼女は悪くない。

「本当にごめ……」

「火蓮先輩は悪くないです!!!」

「きゃああああ!! お、起きてたの!?!」

謝る彼女の話が無理やりに止めさせて、カツと目を開いて俺は心境
を発した。彼女は寝ていると思って気持ちと言っているわけだから

あまり聞いてはいけない事だと思った。だけど、彼女の気持ちを見て見ぬふりは出来なかった。

「ど、どこから聞いて……」

「すみません、全部聞いてました！　ねえ、って話しかけるところから全部！」

「にや、にやんですって！」

「すみません。貴方に謝らせてしまつて……」

「あ、別に……」

彼女が謝る必要はない。

「俺、滅茶苦茶幸せでした。好きな人が隣に居てくれる、それだけで俺は幸せです。本当に俺には得しかない、だから謝る必要とか無くて、あのじれつたいモドカシイ時間も火蓮先輩の萌えが感じられる何物にも代えられない俺にとって宝物になりました！」

「——あ、あ、そそ、そんなこと言われたらっ、恥ず、か」

「もう、マジで火蓮先輩が萌えです！　貴方がツンツンしたり、遠回りしたり、優しかったり、オタクだったり全部好きです！」

「あ、あう、あう……」

ヤバい、流石に引かれたか……セリフがださいんだよな……俺は。

彼女は顔を赤くしながらゆっくり俺に抱き着いた

「っ!!」

「今日だけ……特別だから。十六夜が大好きな私が今日だけ特別に、抱き枕になってあげる……感謝して……」

「はい、ありがとうございます。本当に俺は幸せです！」

「っ!!　あ、っそ。それは良かったわね。自分の幸運に感謝しなさい……」

「ありがとう。俺の幸運！」

彼女に言われた通りに感謝を告げると彼女はクスッと笑みをこぼした。

「もう、バカ、でも、私の幸運もありがと……」

彼女は小声で聞こえない様に言ったつもりなんだろうが、ガツツリ聞こえてた。なんて尊いんだ。



問、私はこの人が好きなのだろうか？ 回答、はい。好きです。

十六夜と一緒に居ると、声を聴くと幸福感で体中が包まれる。愛を向けられて、伝えてもらおうとその幸福感が異常に強くなり、それがどうしようもなく心地よくてもっと、その愛を向けて欲しい、注いでほしいと心が叫びだす。

こんなに自分が特定の異性を好きになるなんて思ってもみななかった。興味なんてなかった。見る気もわからない。どうでもいい。そんな感情が全て消し飛んで私は、恋をしてしまった。

もっと、十六夜からの愛が欲しい。注いでほしい。隣に居る十六夜にくつつきながら私はそう思った。

「ねえ」

「なんですか？」

「眠れないでしょ？」

「はい、先輩もですか？」

「うん」

「動画サイトのよく眠れる音楽流しましょうか？」

「いや、いい」

もう、いい。全部がどうでもいい。ツンデレとか二股とか、そう言った事は全部どうでも良い。ただ、私を愛してくれれば。この時の私はいつも以上に頭の中が冷静じゃなかった。自覚はしている。

急に恥ずかしさとかさういったものがそぎ落とされて、ただ、愛が

欲しくなった。注いでもらいたくなくなった。

「十六夜……したい事あるでしょ？」
「え？」

「言つてたじゃない。エッチがしたいって」

「そう言えば言いましたね……」

「いいよ、しても……」

「ええ!? きゅ、急にどうしたんです!？」

十六夜が慌てふためいて急に子供みたいになった。普通なら、普段ならこんなこと死んでも言えない。ただ、今は私の中のボルテージがフルスロットル状態。覚醒火蓮状態の為、言いたいことが全部言える気がする。お酒に酔うってこんな感じになるのかしら? 飲んだことないから分からないけど。現状を表現するなら一番これが近い。

十六夜に酔ってしまったっていると言うことなんだろう。

「何ですか!?! 二股だから……ダメって……」

「もう、どうでもいい。愛が欲しいの、十六夜の愛が。私に注いで」

「あ、いや、でも……」

「なによ、急に怖じ気づいて」

「ど、どうしたらいいのか、ちよつと分からなくなってきました……」

急にチキンになる。グイグイ来たりチキンになったりそこが可愛いけど。私は姿勢を変えて一旦ベッドの上に座って彼を見下ろす。暗いけど赤くなっている十六夜の顔が見えた。

「どうしたらいいかじゃなくて、どうしたいかじゃダメ?」

「……そうになったら……したいって言うか……」

「じゃあ、そうしましょう」

「きゅ、急に熱烈すぎませんか!?!」

「覚醒モード入ったのよ」

十六夜も一旦、起き上がって二人してベッドの上で座りながら向かい合う。

「あの、本気なんですか?」

「私はね」

「なんで、急にオツケーに……」

「もつと、愛してほしいから。それだけよ」

「そ、そうですか……ど、どうしよう……」

やっぱりチキン。私にここまで言わせて手を出してこないとかあり得ない。まあ、多分安易に手を出していいかという、優しい悩みなんだろうけど。このままじゃ、じり貧ね。

「しようがないわね」

私は彼の首に腕を回して、自身と彼の身体を密着させる。彼の体が緊張で硬直しているのが良く分かる。私は彼の耳で囁く。

「力抜いて」

「は、はい」

「先輩がリードしてあげる」

「あ、え、え?!」

体をビクツと動かして十六夜は変な声を出した。彼の飛び切り大きくなった心臓の音を感じる。しばらく、抱き合っているとドンドン心臓の鼓動が互いに大きくなっていった。

そして、私は少し顔を離し彼と視線を合わせる。彼の眼はまだ、どこか戸惑っている感じだ。だから、薄く笑って唇を近づけた。多分、これで決着がつく。私は直観的にそう感じた。このままキスしたら彼は私に手を出す。私は狼に襲われることになるだろう。

唇がドンドン近づいく。十六夜も抵抗はしなく、私も止める気はない。こういう時って妙にスローに見えるから不思議だ。

そして、あと一センチ……ぜ、

——バン!

ゼロになるところで部屋のドアが勢いよく開いた。私と十六夜は

とんでもない近い距離でそこからは近づかずドアの方を向いた。

「やっぱり、そういう事でしたか……」

冬、夏なのに冬。それほど部屋の温度が冷えた。そこには後輩の銀堂コハクが居た。なぜこんな深夜に……

「何故って顔してますね。虫の知らせです」

「……どうということ？」

「嫌な予感がしたので目が覚めましたと言う事です。隣には貴方がいない。これはもしかしてと思いつつ十六夜君の部屋に来たら……案の定と言った感じですよ」

「へえ」

「へえ、じゃないですよ!!! 何か可笑しいなとは思ってたんです!! いつもなら夜遅くまでバカ騒ぎして、聞いてもないのに勝手にアニメレビューを始める貴方が今日は早めに寝ようとか言うはずありませんものね!!」

「コハク、やっぱり邪魔な後輩ね」

「お褒めに預かり光栄ですよ」

コハクはどしどしと怒りの足を私に向けると私と十六夜の間を割って入り、強制的に場の雰囲気を変えた。その後、十六夜に顔を近づけて心配そうに問いかけを始めた

「十六夜君。まさか、火蓮先輩とエッチな事はしてないですよね？」

「……はい、してないですよ……」

「嘘は言っていないようですね……よかったです」

十六夜はちよつと放心状態であった。コハクは嬉しそうに十六夜に抱き着いた。

「ねえ、抱き着くのやめなさいよ」

「は？ 何言ってるんですか？ ビッチ先輩」

「誰がビッチよ」

「あなた以外に誰が居るんですか？ もう今日は私は十六夜君と一緒に寝ます。ビッチがいるみたいですから、守ってあげないと」

「私も寝るから」

「はあ？ こんだけ好き勝手やってよくそんな事言えますね」

「ふんっ、それより十六夜大丈夫？」

十六夜が未だに放心状態で心ここにあらず。ぼうっとしているのだ。コハクに抱かれているのにあんまり反応が無い。

「っは!! なんとか精神が回復しました！ 二人共喧嘩はダメですよ!!」

良かった。戻ったようだ。そして、一番最初に言う言葉が喧嘩はダメって……

「三人で一緒に寝ましょう！ 二人が俺を挟む感じで！」

「……」

というわけで私が右隣り、左隣にコハクが寝ることになった。暗くても彼女の動きは確認できる。彼女は豊潤な体を彼に密着させる。それに十六夜があたふたすると言ういつもパターンだ。私も負けじと密着させて十六夜はサンドイッチ状態だ。

「あぐっ……あ、えっと……俺って幸せ……」

「それならよかったです。えへへ、私も幸せです」

彼女はちよっと恥ずかしそうだがグイグイ彼に寄って行く。従来
の私なら歯軋りで激おこぶんぶん丸状態だが今は大分大胆に行ける。

「私も幸せよ」

「あ、ありがとうございます」

「十六夜君、そのビッチから離れてください」

「あんたのほうがビッチでしょ」

夜なのであまり大きな声をあげずに小さな声でのいざこざである。しかし、その内にお互いに得に何も言わず黙って十六夜にくっついて固まった。

私達は幸福感に満たされているから、別にこのままでいいが十六夜

はそう言った以外の感情もあるのだろう。ずっとあたふたである

「十六夜君、大丈夫ですか？ なかなか寝付けないようですが……」
「すみません。お気になさらず、お先に寝てください……俺はほとぼりが冷めたら寝ます……」

「十六夜君が眠れないなら私も寝ません！ 一緒にくつつきながらおしゃべりしましょう！」

偶にコハクは妙な天然を發揮させる。私達がくつついているから眠れないんだろうに……離れた方が良いかしら？ でも、離れたくないし……

「くつ、幸せが逆に狂気になるなんて……」

「?? 良く分かりませんが……幸せなら良かったです」

二股したいと言ったのだから、安易には手は出せない。不完全な関係で曖昧な関係で手を出すことが彼は嫌なのだろう。彼はずっと真つすぐだから、完璧に二股になった状態で愛し合いたいんだろう。それを私は感じ取った。だから、こんな絶好の状態でも特に変な事はしない。

この想いと姿にトキメキを何度させられた事か。その度に好きになつて愛が深まつて……

「ちよ、ちよつと喉乾いたから水飲んできます！」

十六夜は部屋から飛び出して下の階に降りて行った。台所でのどを潤すつもりなんだろう。

彼女と二人きりになる。

「貴方、意外となりふり構わずなんですね……ちよつと油断してました」

「今日だけ、酔ってるだけだから明日になったらいつもの奥手な感じに戻るわよ」

「どこが奥手なのか詳しく説明を求めたい所ですが……」

彼女と話して暫くすると、十六夜が戻ってきた。菩薩のような顔で
「十六夜君、お帰りなさい。さあ、一緒のベッドで寝ましょう！」
「ハハハ、そうですね」

彼は急に爽やかなハーレム主人公のような風貌に早変わりした。
先ほどのように私達に挟まれても一切照れることなく……いや、滅茶
苦茶緊張してるわね。体、ガチガチだし、たまに声が上ずったりする
し。でも、さつきより落ち着いていた。

「十六夜君、何か、落ち着いてますね？ 何かありましたか？」

「まさか、俺はいつだってこんな感じですよ」

「……そうですか………変なモードみたいなのに入っているような
気がします。気のせいですね！」

「はい！ 三人でくつついて健全に一夜を明かしましょう！」

「むう、そこは二人でって言わないとだめですよ」

なにやら十六夜は爽やか系の遺伝子でも手に入れたのだろうか？

「火蓮先輩ももつとくつつきましよう！ そして、もう寝ましよう！」

先輩の綺麗な肌が荒れます！」

「そうね……お休み……」

「はい、おやすみなさい」

その後、彼も私も眠りの中へ落ちて行った。

九十三話 マグロ対アジフライ兼キスの天ぷら 中編

その日、僕は目覚ましで目覚めた。最近のコハクちゃんが朝一で起床して朝ごはんを作ってくれるのだが、偶に僕も作らないといけないと思ひ、いつもより早めに目覚ましを設定したのだが既に隣にはコハクちゃんがいなかった。彼女だけでなく火蓮ちゃんも居なかった。

コハクちゃんなら未だしも、あの寝坊助さんで有名な火蓮ちゃんが布団で気持ちよく寝ていないなんてあり得ない。いつもとは違う現状に違和感を抱きながら体を起こす。コハクちゃんと火蓮ちゃんはいないがアオイちゃんはすやすやと寝ていた。

いつ見てもいい寝顔だなあ。ちよつかいを出したいが二人が気になるのでその場を後にする。リビングには居ない、お風呂、トイレ、家の中に靴もあるし……まさかとは思うけど……

直感を信じるままに二階に上がって行く。そして、とある部屋の前で足を止めた。この部屋にはあまり立ち入らないようしていたのだが……こつそり覗くように扉を少しだけ開けて、目をキョロキョロ動かす。

そこで彼のベッドに目が止まった。そこには二人の美女に挟まれた彼が。完全に両腕をロックされた状態で彼を逃がさないと言う心境がそのまま寝相に現れているようだ。しかし、そんなことはどうてもよくて、一つ気になることがある。事後？ 事後？ 全て済んでしまったのか？ さ、三人で!? 嘘でしょ!? 流星に無い気がするけど……どうなんだろう……

三人……俗に言う3Pってこと？ あの二人がそんなこと許すわけ無いし、きつと取り合いしながら寝たとか、添い寝したとかそんな感じだろう。そう感じたところで何となく心が軽くなったので一階におりて朝ごはんの準備を始めることにした。

◆ ◆

朝ごはんを作ったのだが……未だに誰も起きてこない。コハクちゃんも朝から家事をしなくてもこの時間には起きてくるんだけど……疲れてるのかな？ 寝た時間が遅かったのかと考えると変な方向にイメージが走ってしまうので深くは考えずにテキパキご飯を並べていく。そこまでしてようやく部屋のドアが開いた。

「おはよ」

「おはようー！」

「三人は？」

少し、眠そうで言葉遣いが少しまったりしている彼女は部屋の中を見渡して皆が居ない事に気づく。メルちゃんはかなり不規則な生活だからお昼ごろに起きるのが普通になっているからこの時間に起きていない事は特に意識しない。だけど、三人は今日は学校なのにまだ起きていない。更に言うなら二人は布団にいなかったのにここにいない事が彼女には疑問で仕方ないのだろう。

「ああー、一緒に寝てる……」

「え？ なんで？」

「さ、さあ？」

「……ふーん、あーしからしたら、ワリガチのマジでどうでもいいけど」

「どうでもいいんだ……」

「どうでもいい。でも、そろそろ起きないと朝ごはんがゆっくり食べれなくて三人が困るだろうから起こしてくる」

「あ、そう。お願いね」

「おけ」

彼女はスタスタ歩いていった。相変わらず無表情なのに大体考えてることが分かってしまうから不思議だ。そこが可愛いし、友達として付き合いやすいって事もあるんだけど、他にも彼女と仲良くしやすい理由がある。それはアオイちゃんって冬美ちゃんと似たところがあ

るんだよね。若干のギャルっぽさって言うかなんて言うか、彼女も冬美ちゃんもだけど時々言葉遣いが荒くなることがあってだけどちゃんど芯を通してる。

アオイちゃんが来て益々学校が楽しくなった。修学旅行も楽しみだなど先のイベント考えながら心を躍らせた。



三人が気まずそうな顔で下に降りてきた。こちらもそんな顔を見せられると気まずいよ。

「あ、朝ごはんありがとうございます」

「い、いいよ。大丈夫」

「お、美味しそう、流石もえき……」

二人共やってしまったと言う感じである。ここで気にしなくてもいいよ、事後じゃない事なんて分かっているよ、なんて言うのも、何か変な含みがある言い方になるし……

アオイちゃんはあるんまり反応はせずに、席に着いた。彼女につられるように皆して席に着いてブレックファーストタイムに入る。互いによそよそしい中、彼女が疑問を提示する。

「なんで、そんなにきよどってんの？」

「え、いや、そんなことないですよ!!」

「そ、そうよ!」

す、すごい。ピユアだからこそ聞けるド根性ストレート!! 女二人は挙動不審で下手に出れない感じ。アオイちゃんには弁解はしなくても大丈夫そうだけど、僕に二人は弁解したそうさ。そして、コハクちゃんと火蓮ちゃんの当人同士もムズムズ状態。そこで彼がバンッ

と立ち上がった！

「俺達、添い寝してただけで変な事はしてませんから！ 変なことしてないですからいつも通り行きましょう！ だって、健全な一夜で何もなかったんですから！ いつもみたいにジャム取ってとか、醤油取ってとか言いあいましょう！」

それを言ってしまう君がナンバーワンだよ。年頃の男の子が言いづらいことランキング一位くらいのことを息を吐くように言うなんて、凄いを通り越して、一周して結局凄いや。

「そ、そうよね！ 何もなかったんだから！ 何もなかったんだから！ 萌黄、醤油とって！」
「うん」

「萌黄先輩この卵焼き美味しいです！ 原点回帰の料理って感じがします！」

「ありがとう」

火蓮ちゃんは何も無いと言う事を入念に主張して、コハクちゃんは卵焼きを一口で食べる。どうやら彼が場を支配したようだ。

食べ進める中で僕は飲み物の準備を忘れていることに気づく。席を立てて冷蔵庫の中を開けると……一本の水が入ったペットボトルがあった。これは……水だね？ これしかないので五人分に均等に分けて持つていく。

「ありがとうございます」

「ありがとう。萌黄」

「サンキュー……」

「萌黄先輩ありがとうございます」

コハクちゃん、火蓮ちゃん、アオイちゃん、彼の順番でそれぞれお礼を言ってくれた。彼らに配って回ったあと再び食事に戻る。最初にその水に手を付けたのは彼だった。彼が一口飲むと……倒れた

……

「ええ!? 大丈夫!?!」

「十六夜!」

「十六夜君!」

「どったの!」

皆が心配の声をかける。数秒後、彼がいきなり再起動を開始する。皆、無事でよかったと安心したのだが彼の瞳を見て違和感を全員が覚えた。その瞳はまるで視ている世界が違うんじゃないか。と思わせるほどだ。

すると直ぐに右手を抑えた。震える右手に何か膨大で忌まわしき伝説的力を宿し、それを抑え込むように。さらについてと言わんばかりで右手をさらに右目に当てて眩いた。

「おさまれ、俺の悪式掌握と神の魔眼……ダメだ……封印が……」

「……」

「大丈夫ですか!? 十六夜君!」

僕たち二年生組は彼を冷ややかな目で見てしまったがコハクちゃんには彼が心配の様で背中をさすってあげる。何故ここで天然ピュアを発動するんだろう? そして、彼は水を飲んだら変になった……これ、僕のせいなのかな……

「ああ、まさか、轟雷主神オーバーゼウスが未来に仕掛けた、未来の自動攻撃が俺に精神攻撃メンタルプレスしてくるとは……背信行為エンゲイジがバレたようだ。咄嗟にレンドルト・アクティラ・ロザリオウーズの最大の防御を使用したリバウンドが……クソ、その代償で封印が緩んだかッ……」

「……」

「ええ!? それは一体、どのような事態なのですか!? 大丈夫なんで

すか!？」

痛い、痛い、痛い。見ているこっちが痛い。僕は中二病とは無縁だけどこれは流石に見ていて辛い事この上ない。余波がこっちにも来るなんて……

「十六夜……大丈夫かしら……流石にこれは……ね？」

「この水、メルが何かしたんじゃない？ それしかありえない。あーしただたき起こして聞いてくる」

「お願い、アオイちゃん……」

これは……放って置いたら不味いやつだ……

「十六夜君、大丈夫ですか!? 病院! 病院にいきましょう!」

「フツ、そこじゃ何も変わらない……マリ聖母神からのミア聖樹の枝ユグドラシルの枝が必要なんだ……」

「それは、どこで手に入るんですか!？」

「別次元に広がる宇宙に近い場所だ……」

「何処ですか!？」

火蓮ちゃんが胸を抑えている。ああ、彼女も被害者か……

「なんか、こっちが痛いわね……」

「そうだね……」



「連れてきた」

アオイちゃんがメルちゃんを連れてきた。メルちゃんは寝起きの様で髪がぼさぼさ。メルちゃんは事情が大体分かっているようで、食卓の水を眺めた後、説明を始めた。

「これはあれやな。ワイの研究中の水を飲んだからこうなったんや」

「なんで、そんなの冷蔵庫に入れてたのよ? おかげで十六夜が変な時空に飛ばされたじゃない」

「あれは学界の研究材料だったんや。冷やして保存しようと思ってたら、良い容器を見つけたんでそれにいれて冷蔵庫に入れといたつてこ
とやな」

「こことやなじやなくね？ どしたら治んの？ はよ、説明プリーズ」

火蓮ちゃんとアオイちゃんがメルちゃんに詰め寄って行く。彼女は冷や汗を垂らしながら説明した。

「……表裏一体って言った方が分かりやすいかもしれへん。アイツのもう一つの側面やで……ただ、側面を過剰に押し出してしまう、本当に馬鹿になってしまうんや。一日位で治るで……」

「何てこと……このまま一日中……暴れ続けるなんて……十六夜が治った後、絶対悶え死ぬじゃない!!」

「……あーし達でフォロワーしてあげるしかない……」

中二病が彼の裏の顔って事なのかな？ 裏って言うか表にも偶に現れるけど。しかし、いまだに彼の言葉を真に受けてコハクちゃんは彼の背中をさすっている。

「すまないな。コハク」

「いえ、これくらい……今……呼び捨てに……み、皆さん聞きました!？」

今、十六夜君が私を呼び捨てにしましたよ!!」

「コハクはいつまでバカやってんの！ こっちにきて、傷跡を軟膏を塗った絆創膏で治療作戦の計画を建てるからこっち来なさい!」

「嫉妬ですか?」

「違うわ!!」

二人がギクシヤクすると彼が彼女達の間に入る。

「コハクも火蓮も、落ち着いてくれ。俺なら大丈夫だ」

「そんなわけないからこっちは気を遣って……今、火蓮って呼んだ!

ねえ、萌黄、アオイ、私今呼び捨てにされたああ!」

「……」

火蓮ちゃん、も……目をキラキラさせて……満面の笑みでこちらに

笑いかけてくる。それに僕もアオイちゃんもため息を吐く。でも、これって僕の責任でもあるから……

「ごめんね……変なの飲ましちゃって」

「萌黄、気にするな。この程度で死ぬなら、ドラグレス王国で俺はどうに死んでいる」

「何処の国なの？ それは……でも、ありがと……え？ 僕も呼び捨て？」

途端に顔が熱い。いきなり距離詰めるとか反則じゃん……僕が少し、モヤモヤしているとアオイちゃんが頬を膨らませていた。

「……何それ？ なんで、急にそんなことしてんの？ 意味わからんずで草なんだけど、寧ろ森なんだけど」

……小声で無意識なのかどうなのか分からないけどぼそぼそ話す彼女。その後、彼女は彼の近くに寄った。

「どうした？」

「……クイズやんない？」

「ほお、俺にクイズとは……いいだろう」

「じゃ、イオアの反対って何か分かる？」

「……アオイか？」

「……正解……じゃ、そういうことで……」

そのまま彼の近くから離れる彼女は無意識なのかどうなのか分からないが、足取りが少し軽いように見えた。

「なあ、そろそろ学校の時間やないんか？」

「「あ」「」」

急いで準備をして学校に向かった。

◆
私の名前は野口夏子。ただの女子高生である。さてさて、最近恋のバトルが白熱して楽しみであるんだけど……なにやら黒田君の様子が可笑しい。腕を机に組んでそこに頭を乗せてずっと黙っている。そして、それを心配そうに見ている銀堂さん。

「おい、黒田」

「悪いな、今はそういう気分じゃない……」

「おい、十六夜」

「……後にしてくれ」

「おい、黒田」

「すまない。今は並行世界の波紋現象について考えているから後にしてくれ」

いや、何があった!? 彼はまるで孤高のような振る舞いをしている。いつもなら誰に対してもしつかり接するのに。

周りでざわざわ騒ぎが起こり始める。そこで転校生で恋のライブであるマグロ君が黒田君の前に立ち話しかける。

「おい、俺と勝負しろ」

「……」

「俺は昨日とは違うぞ。お前に勝って、俺の方がカッコよく、おまえより優れていて彼女にふさわしいと証明する」

彼の正々堂々の発言に周りの女子たちがキヤーキヤー騒ぎ始める。男子はブーイングである。

「きやー」

「カッコいい!」

「つち、クソが」

「落ち着け、何言っても無駄なのは金親で良く分かっているだろう」

周りが騒ぐ中、黒田君は未だに沈黙。痺れを切らしたマグロ君が大きな声でもう一度話しかける。

「おい、聞いているのか!？」

「……ああ、すまない。ブラックホールと超新星爆発の話だったか?」
「全然違う! 何を聞いていたんだお前は!? 俺と勝負すると言う話だ! 勿論昨日のように彼女は賭けの商品にはしない! 俺がお前に勝ちたいから勝負すると言うだけだ! 話を聞け!」

「すまん。昔から……集中しすぎると周りが見えなくなるんだ。以前、朝から剣の素振りをしていたらうっかり一年経過していたくらいでな……それで、パラドックスと相対性理論の話だったか?」

「馬鹿にしてんのか!？」

いや、中二病ならぬ高二病なの!? しかも、うっかり一年素振りなんてするわけないじゃん!! 周りでも厨二の再来ではないかと議論が始まった

「い、十六夜君。あの水のせいで……」

不穏な言葉が聞こえたんだけど、そして、再び男二人に戻る。

「とにかく、勝負だけはしてもらおう!」

「無意味だな。そうやって人は争いを繰り返してきた……貴様……」

そこまで言うとは彼は視線をさらに鋭くして彼に向けた。

「成長しろ」

「お前がな!!」

マグロ君の強烈なツッコミが入る。その後、マグロ君は黒田君に指を差して宣言した。

「だったら勝手に勝負させて貰う! いいな!」

「今日の空は何処か歪んでいるな」

全然話を聞いてない。窓の外の晴天を眺めて彼は呟く。マグロ君はその後、席に戻った。まあ、黒田君の真後ろなんだけど……

そして、ここから勝手に勝負が始まった。数学の時間の出来事だ。

「ええ、この問題が分かる人はいるか？」

「はい！」

殆どの男子が手をあげずに黙りこくりに、銀堂さんや私、金親君、女子たちが黙って手を挙げるなかマグロ君は大きな声で返事をして自分が問題を解くというアピールをする。

「ええ、では黒鮪、解いてみる」

「はい！」

彼は席を立つ。黒田君の隣を通り過ぎる時にフツと挑発するように笑った。しかし、黒田君は逆にフツと彼を馬鹿にするように笑った。そう、まるでお前の答えなど分かっている。そして、それは間違いだと言わんばかりで

マグロ君が前で黒板に問題の解答を丁寧に書くと先生が正解の丸をつける。

「正解だ」

「さすがね」

「すごいわね！」

黒板の前で女子たちに褒められ、銀堂さんも拍手した。チラチラ黒田君の方を見ながらであるが……

マグロ君はそれが面白くなく、苦渋の顔つきで席に戻り黒田君を挑発した。

「これで俺の勝ちだな」

勝手に勝負とはこのことだろう。そして、こうしていれば黒田君がいつか土俵に上がってくると言う算段なのだろう。なるほど、よく考

えられている。マグロ君も凄い、だが、忘れてはいけない。

黒田君は難攻不落の鉄壁最強女子である銀堂さんを、落としており普通とはかけ離れた存在と言う事に……

彼の勝利宣言に黒田君は笑った。彼を、いや、世界をも笑うように「まさに井の中の蛙、天を知らないちりめんじゃこ言ったところか」「なんだと!？」 俺の答えが間違っていると言うのか!？」

「そうじゃない。この授業俺とお前では見ている視点が違うと言うことだ。この授業は全てが罠だ」

「なんだと!？」

マグロ君の声に数学の先生が反応する。

「どうした?」

「いえ、大したことではないのですが彼がこの授業が全て罠だと訳の分からない事を言うので……」

「黒田、何か不満があるのか?」

先生がそう言うのと黒田君は再び笑った。

「不満ではない。ただ、いつまで大根芝居をするのか気になったただけだ」

「保健室行くか?」

「俺は気付いているぞ。お前の正体にはな」

「……どうやら、やる気満々のようだ。この問題お前が解いてみる」

そう言われると黒田君は席をたち、前に向かって行く。そして一言

「FF外から失礼する」

「何を言っているんだ。お前は」

「なに、気にするな」

「そうか、ではその問題を解いてくれ」

「その前にお前の正体について言及しようか」

「問題について言及してくれないか?」

先生に向かって大口をたたく彼。そして彼は黒板のとある数字に○をつけ始めた。黒板には色々な数字があるが彼が○をつけたのは

6.

「この6という数字全部で黒板に三つ。この授業中に必ず存在していた。つまり、666、これはお前の正体が世界的秘密結社であると言
う事を示唆している」

「そうか。それで、この問題は解けたのか？」

「 $a \parallel \sqrt{3}$ 」

「普通に正解するんかい」

先生がとうとうツッコミ役に回った。というか黒田君解けたんだ。
さては、何だかんだ真面目に授業は受けてたな……

「しかし、これも実は全く違う言語で構成されている問題の可能性もある。そうなると先ほどの解答を撤回しなければならない。フィジカル先生、ラプラスの悪魔を召喚して回答を確かめての良いか？」

「先生は三井という名だ。そして、私はお前が召喚した場合、お前の親を召喚しないといけない」

「では、こちらはカードを一枚伏せてターンエンドと行こうか」
「熱でもあるんじゃないか？」

ヤバい、黒田君絶対可笑しい。銀堂さんも心配そうに見ているがそこで彼女は何かがはちぎれたようで手を挙げた。

「先生、十六夜君は実はかなりの高熱なので保健室に連れて行ってもいいですか？」

「そうだな。そうした方が良い」

「行きましょう。十六夜君」

彼女は彼の手を取って教室を出ていった。一体、何だったんだろう。あれは……黒田君のいつもの様子と違い過ぎた。

「何か、大分可笑しかったな」

「熱があるんだ」

「多分、大分高熱だね……」

その日、黒田君と銀堂さんは早退した。

九十四話 マグロ対アジフライ兼キスの天ぷら 後編

十六夜君と私は一緒に早退して家に帰ってきた。いくら何でもあのままの彼を学校に置いておくのは不味いと判断したからである。現在の覚醒は大体、一日位で治るらしいので本日はゆっくり家で休んでもらい、明日から学校へ行くと言う形にする。

「十六夜君、今日はお家で勉強しましょう」

「ふっ、いいだろう」

「制服ではあれなので着替えますね。十六夜君も着替えて、しわにしない様にハンガーとかにかけてくださいね」

「ああ」

彼は一旦自室に戻り、私も服が置いてある部屋に向かって着替えを開始する。セーターを着て、下には長めのズボン。上着はちよつとボデイラインが出すぎかと思うがこれで取りあえずいいであろう。

そして、この後は偶にはリラックスの時間を二人で送ろう。十六夜君は走りっぱなしであるし、メルさんともこそそ話をしているとこゝろもよく見ている。今日はゆっくりタイム。

映画見て、宿題を二人でのんびりやって、テレビ見て、おやつ食べて、あわよくばイチヤイチャしよう。クフフ……おおつといけない、表情筋よ、仕事をしておくれ。

等と考えながらリビングに向かって椅子に座る。十六夜君もパーカーをきてラフな感じを滲み出しながら、何故か眼帯を付けている

「十六夜君、なぜ眼帯を……」

「全てに意味を求めないほうがいい」

「おお、何か深いですね……でも、片目だけに負担をかけるのは良くないので外しましょう」

「あっ……」

私は彼の眼帯を無理やり外す。名残惜しそうに見えるが関係ない。

その後、ソファで二人して隣に座る。

私はテレビでロマンチックな映画をつけた。かなり感動する素晴らしい物なので彼にも知っておいて欲しいのだが。しかし、彼は映画ではなく私の方をチラチラ見ていた。

「どうかしましたか?」

「いや、何でもない……………童貞を殺すセーター……………」

前半は聞こえたが後半は何と言ったか聞こえなかった。きっと可愛いとか美しいとかと言ったんだろうなあ、うん。ラブラブカップル一歩手前くらいだね。ほくそ笑みながら映画を見る。

最後は結婚のシーン。ジーンと来るな……………画面の中には教会で愛を誓いあう二人の口づけで幕を閉じる。色々な困難があった、ドラマがあつた、障害も、互いに嫌いあう時もあった、だけど最後には結ばれる二人。

こんな風にいつか……………私も、私達も……………流石に気が早すぎたかもしれない。あまり、考え過ぎると愛が重いと取られかねない。ここら辺にしておこう。

「良い映画でしたね」

「そうだな」

彼も感慨深い表情で画面の二人を祝福しているように見えた。一緒に居て彼は何時もと変わった態度だが心までは変わっていないことが分かる。映画が終わり余韻に浸っていると彼が私に言いずらそうに話し始めた。

「そう言えば、マグロのことはどう思ってるんだ?」

「特に何とも思っていないですよ」

「そうか」

もしかして、独占欲? 取られたらどうしようって思ってる? 彼は意味もなくこういう事を聞かない。それは知っている。それに異性にそう言う事を聞くつもり、語っているようなものだ。だけど、つつい、それを言葉にしてほしいから私は聞いてしまう。

「どうしてそんなこと？」

「全てに意味を求めない方が良い」

「今は求めたいです」

「……」

「ふふ、やっぱり聞かないでおきます。だって、そんな質問をする理由が分からない程、私は鈍くないですから」

彼はギョツとして目を逸らす。恥ずかしいのか何も言わずに黙りこくってしまった。私も自分でそんなことを言ってしまったって少々恥ずかしいので彼の肩に頭を預けて寄りかかった。



さて、僕たち二年生組が家に帰ってきた。彼とコハクちゃんが早退したと聞いたのだが、まあ、こうなっても仕方ないと感じた。

玄関のドアを開けて僕たち三人は靴を脱ぐ。

「今日、宿題多くね……」

「仕方ないわよ。答え見てパパッと終わらせましょう。今期のアニメが溜まってるし、予定が詰まってるわ」

「火蓮ちゃん、答えは見ちゃダメだよ」

「いいのよ。テストは毎回満点だし」

「でも、ダメだよ」

「そだね。あーしも同感」

僕たちは廊下を歩いてリビングのドアを開ける。前に一旦、僕たちは停止した。リビングの中から声が聞こえてきた。

「ふふ、十六夜君、カチカチですね」

「くっ、もういい」

「ダメですよ、しっかりこれはほぐさないで。大丈夫です。きつと、気持ちいいですから。ほら、力を抜いてください」

……ちよつと待つてえ。部屋の中でナニしてるの？ 火蓮ちゃんも固まった。え？ みたいな顔をしている。ちよつと落ち着こう
「ねえ、これって別に変なことしてないよね？」

「……そうに決まつてるわ。私達が年頃だから汚れた聞こえ方するだけよ……でも、もし変な事してたら……一生、口聞いてやんない」

彼女は冷やややかな声でそう言った。いつもの真っ赤で情熱的な彼女からは想像もできない機械的な声。

「ほ、本当に？」

「……やっぱり、一か月にする」

空気が霧散した。僕たち二人が対応に追われる中アオイちゃんが堂々と部屋のドアに手を掛けて開けようとする。それを僕が止めた。

「ちよ、ちよつと待とうか」

「なんで？」

「いや、ほら、中でナニしてるか分からないし」

「いや、別にいいじゃん。いつも堂々と入ってるし」

「でも、ヤバいことしてるかもよ!？」

「やばたにえん？」

「そう、やばたにえん！」

彼女にグイって近づいて彼女の動きを僅かに制限。ふふふ、彼の模倣^{トレス}。強気で言つてドンドン自分のペースに持つていき相手の動きを封じると言う御業である。

……いけない。厨二的な思考が蔓延している。しかし、僅かに迷った事で隙が生まれてしまい彼女の反論を許してしまった。

「ヤバい事つてどんな？」

「え？」

ピュアの一点集中。

「そ、そうだね……えつと。その、変な意味のコリをほぐすって言うか……」

「ちよいと意味わかんない。もつと具体的に言ってくんない?」

「あ、そんなことよりアオイちゃん肌キレイだね。やっぱり白湯が効いてるのかな?」

露骨に話を逸らしていく。

「そう? まあ、そう言われて悪い気しないって言うか……白湯は良いよ」

「僕も最近、飲んでるんだあ。そう言えば豆乳も飲んでるよね?」
「豆乳も飲んでる。好きだから」

チヨロい……そこが可愛さでもあるんだけどちよつと悪いことをしている気分になる。この後、どうしようか、部屋の中に行くのもいいけど。もし、変なことしたら。このままアオイちゃんをずっと足止めと言うわけにも、かと言って開けて中で行きだしたら……

僕が迷っていると火蓮ちゃんは覚悟を決めたのか、バンつとドアを開けた。

そこには、彼の肩を揉んでいるコハクちゃんの姿が。

「おかえりなさい……ドアはもつと優しく開けるべきだと思うのですが」

そんな、こつちの気遣いなど知らんと言った彼女のほんわかかな言葉に火蓮ちゃんが若干怒った。

「紛らわしい言い方するんじゃないわよ!」

「何がですか!?!」

「コリほぐすとかカチカチとか、気持ちいいとか! 変な言い回しのことよ!」

「っ! 貴方の頭の中が淫乱なんですよ! 勝手に何想像してるんですか!?!」

「普段のコハクの行いのせいよ!」

火蓮ちゃんは若干の八つ当たり感があるが……怒っていた。若干、

安どの表情も出していたが。この後、アオイちゃんに何故二人が喧嘩しているのかと聞かれたが、髪がふさふさだねという話をしてごまかした……



次の日、僕たちはいつものように朝食を食べるのだが、彼の表情が死んでいたため何とも言えない空気になっていた。

「十六夜君……その、何でもありません……」

コハクちゃんもこちらの世界に帰って来て元に戻った彼の絶望の表情に何も言えない様であった。どうやら昨日の記憶は健在のようだ。火蓮ちゃんも言葉詰まって何も言わない。

「……学校行きたくねえ」

ポツリと彼からこぼれたひと言。いつも敬語の彼には非常に珍しい。自分で自分を保てない程、心が折れているんだろう。

その後、家を出て学校に向かって皆で歩く。学校へ向かう途中周りからのひそひそ話、様々な視線が降り注いだ。

「おい、もしかしてあれは」

「良く分かったな。奴が……令和のブラックバスだ」

「なん……だと……」

「令和のブラックバスだって？」

「俺は、余波のピラニアって話も聞いたぜ」

「確かに話を聞いただけで俺の精神を食ったが……」

だ、大丈夫だろうか……彼の表情が……僕たち全員が心配するような視線を向ける。そこでコハクちゃんが *airPods* を出して彼の耳につける。

「コハクさん……」

彼の感動の声が聞こえる。コハクちゃんはニツコリ笑って、口パクで『私は、どんな貴方も好き』と言った。それに釣られるように火蓮ちゃんも口パクで『私も、それなりに……好き』と真つ赤な顔で言った。それで彼は少し、元気が出たのか airPods をコハクちゃんに返した。いつもの堂々とした感じに戻った。

「十六夜君、良いんですか？」

こうなると周りの声が聞こえてしまう事を彼女は心配するが彼はフツと笑ってこう言った。

「まあ、俺は皆さんが入れば正直大丈夫です」

「キュン……」

そこにキュンとするのはどうしてか分からないが彼は元気を出したようになにより。火蓮ちゃんもちよつとキュンとなっている……

「きゅん……」

え？ 今の誰？ なにやら美しいマーメイドのような声が聞こえたのだが気のせいだろうか。

その後、皆で学校へ向かって歩き出した。そこでアオイちゃんがコハクちゃんに聞いた。

「さっきのしめじイヤホン何流してたの？」

airPods をしめじイヤホンって言う彼女のセンス……素晴らしい。

「ああ、あれは火蓮先輩お勧めのアニソンである、『トラディショナル・サイン』です」

「へえ、やっぱり火蓮はアニソンが好きなんだ？」

「まあ、好きね。勉強するときBGMとしても使ってるわ。何ていうかテンポが良いって言うか、だけどそのテンポ一つ一つ、そこに重み

があるって言うか。アニメだと大体一分半版なんだけど、毎回見返してもオープニングはしつかりと聞いているわ。あとね……」

そこから彼女のアニソン語りが始まった。彼以外彼女の話について行けるものはいなかった……

そのまま彼女のアニソン節を聞き流しながら歩いて、学校の校門へと近づくとそこには最近話題のマグロ……だっけ？　なんだっけ？　とにかくコハクちゃんに好意を抱いている彼が居た。

マグロはコハクちゃんを見つけると彼女の元に歩み寄ってきた。それは覚悟を決めた者の眼だった。だが、僕の隣に居る彼には劣る。彼はずっとマグロより強い覚悟があつて慈愛溢れる眼だった。一瞬じゃない、ずっとなんだ。真の意味で彼はコハクちゃんが好きであり、それに彼女が気付いたからこそ彼女は彼に惹かれて焦がれた。マグロの行動力は少し彼に似ているところはある……がそれだけ。

そして、そこがマグロと彼の最大の違いなんだ。それは。きつとマグロはコハクちゃんに告白するだろう。彼との関係を見て彼女と特別な関係になるのは不可能だと誰でもわかる。だから実らないだろう。

「このまま何もできないままじゃ、終われない。昨日の君たちの姿を見て俺は思った。無理だろうって。すぐにでもこの気持ちを伝えたかった。こんなところで申し訳ないと思うが、俺と付き合ってくれ」
「……ごめんなさい」

コハクちゃんはあっさりりと彼の告白を断った。マグロも分かっていただろう。あっさり身を引いた。

「そうか。まあ、分かっていた。だが、このままじゃスッキリしない。だから、黒田十六夜、いや、令和のブラックバスこと、余波のピラニア。俺はお前を超えてやる。ありとあらゆる面だな」

クルッと踵を返して彼は学校へ向かって行った。朝から凄いイベントが目白押しだった。何というか、中々気まずい感じになってしまった。特に彼がホツと一息入れている。

「安心してください。私は、十六夜君一筋ですから。誰のものでもない、貴方のものです」

「ありがとうございます」

彼は照れ臭そうに笑っていた。周りでは女子たちがきやきやしている声が聞こえる。

「やつぱり、黒鮪君ってイケメンだよな」

「振られてもイケメンって凄いな」

「ああ、これで金親×黒鮪が出せる」

「コハクさんは面食いじゃないんだな」

やはり、イケメンと言うのは需要があるらしい。それはクラスの女子を見ても分かることである。周りの声が二人にも聞こえたように彼はちよつと陰になった。それをみたコハクちゃんは彼に声をかける。

「……私は顔って言うより心が好きです。一目ぼれを否定するつもりはありませんが、やつぱり花がいつか散るように人は老います。その時に、嘗てのように、それ以上に愛せるかというのが大事です」

「確かにそうですね……」

「十六夜君はいつも優しくて大事にしてくれると心から感じます。そんな人がこんなに愛してくれる人が存在すると言う事に嬉しくて、ずっと一緒に一生生きたいって思いました」

「あ、ありがとうございます」

「心はいつまでも色褪せることはないものだと思っています。そして、貴方の心はどんな人よりもイケメンです。私はそこに惚れました。ふふ、この理論で行くと意外と私も面食いなのかもしれませんね？」

「っー」

彼女は彼の顔を下から覗き込むようにして、かなり恥ずかしい事を堂々と言った。だけど、この瞬間、この二人にはどうでもよかつたんだろう。互いに互いしか見えていない絶対領域。踏み込めないと自

覺させられる防壁。

しかし、それを破る者がいた。

「なに朝からお熱してんのよ!」

二人の間に割ってはいる火蓮ちゃん。コハクちゃんは折角のいい秀囲気がぶち壊されたとちよつと怒りの顔。

「貴方は毎度毎度……邪魔しなければ気が済まないんですか!」

「ふん、知らないわ。後輩の事情なんか」

公衆の面前で朝からキャットファイトが始まった。

大海の自覚編

九十五話 元ボツチ

昔から、あーしはただただボツチ道をひた走っていた。女の子なのに目つきが悪くて、オッドアイが原因で小さいころからずっと人がさざ波のように引いて行く。幼稚園ではボツチで一人か先生と一緒に遊ぶかの二択だった。しかし、先生も他の園児を見ないといけなから……砂場でプリンを一人で作る毎日。それが大きな砂の山に一本の木の枝を立ててそれを倒さない様に砂を減らしていくことで遊んだりした。

室内では一人で神経衰弱、塗り絵。友達ができない……

でも、そんな日々の中でも全部が寂しかったり、楽しくなかったりするわけではなかった。家に帰るといつもおばあちゃんが居たからだ。両親は仕事が忙しい中、おばあちゃんがいつも面倒を見てくれた。

おばあちゃんはいつも膝の上にあーしを乗せて頭を撫でて、褒めて、色々知識を教えて、本も読んでくれた。

『アオイはこんなに可愛いのに、どうして男の子も女の子も寄ってこないのかねえ』

『……可愛い?』

『そうだよ、世界で一番かわいい』

『母さんと父さんとおばあちゃんしかそう言ってくれない……』

『顔立ちも整って、髪も綺麗、目も透き通って……お姫様みたいなんだけどねえ……』

『……そうかな?』

『そうだよ……』

『……』

この時のあーしは全然おばあちゃんの言っている事を信じていたけど。どこか疑ってもいたんだ。お姫様みたいなのに何故誰も友達

がないんだと言う疑問が残っていたからだ。

おばあちゃんはその不安という疑問を分かっていたのだろう。私の頭をまた撫でた。

『アオイの魅力は分かりにくいのかもれないね。でも、いつか、きつとアオイの魅力を分かかって一緒に歩いてくれる人が現れるよ』

『本当？ 嘘ついたら泥棒だよ……おばあちゃん』

『ああ、嘘じゃないよ』

『はりせんぼんもだよ』

『ああ、勿論だよ』

『一緒に歩いてくれる人って王子様みたいな人かな？』

『どうだろうね……そこまでは分からないけど、きつとアオイを大事にしてくれる人は家族以外にも現れるよ』

その言葉をずっと信じていた。いつか、友達とか、王子様とか……

だけど、現れなくて、おばあちゃんも病気で死んでしまった……両親は優しいけど仕事が忙しくて……孤独な時間が多くなった気がした。

でも、それでもおばあちゃんの言葉は信じた。

中学になったら心機一転、色々な話題のニュースとか新聞とか毎日チェックして、何時話しかけられてもいいように準備をばっちりにして学校に行っていた。

でも、皆怖いとかいつも怒ってるとか言うんだ……だから、ちよつとセンチになって……そんな時に一人の女子が話しかけてきて……うっかり油断してたからしどろもどろに話しちゃって……変な空気になって……

浮いた。

ただ、浮いた……

周りは気を遣ってあーしがいつも不機嫌だからそっとしておく。

この時、おばあちゃんの言葉をあーしは疑ってしまった。友達なんて出来ない。王子様なんていない。私は可愛くないし、お姫様みたいでもない。誰も一緒に歩いてくれない。

一人ぼっち

高校に入って周りはきやぴきやぴ女子。心の何処かで期待はしたけど、結局なんも変わらない。あーしの眼が悪いのか、行動力の無さが悪いのか、話がうまくできないのが悪いのか。

全部悪いのか。そんな悶々とする考えの日々を送っていた……時だった。

アイツが現れたのは

まさに、台風の日という印象がホットケーキにマーガリンとはちみつがびったり合うが如くと言う位ドンピシャ。アイツとの出会いはあーしを変えた。いきなり、近所で有名な犬に吠えられているところに緊急事態発生と言う位大急ぎであーしの前に割って入る。たかが、犬にだ。

なにがなんだか分からない中、目まぐるしい日々が始まった。いきなり、町案内をさせられて、その道中は前後左右を警戒。ただただ変な奴。こんな人は未だかつて会った事が無い。変人……

でも、あーしも変と言う自覚はあったから奇妙な縁を感じた……。不思議と充実していて、久しぶりに心が躍った。誰かと一緒に何かをするってこんなに楽しくてワクワクして全身が高揚するなんて知らなかった。

だけど、それでもあーしは人から避けられると知った。善意が善意で返ってこないことなんて当然だが改めて知ると何処か虚しさが心

に残った。自分はやはり避けられる存在なのだ。虚無感が支配したのだ。

だけど、そこで彼はあーしを褒めてくれた。あーしは凄いと、カッコいいと、曇りなき眼でジツとただあーしの眼を一点集中。

——ドキツとした……

こんな風に真つすぐ見てくれる人は家族以来だったから緊張したんだろう。その後もアイツのおかげで友達ができた。安い芝居で……

なぜ、こんなに私に尽くすのか関わるのか分からないがアイツとの時間は、冷えていたあーしの心をドンドン暖めてくれた。孤独も消して、虚無感を吹っ飛ばして、この人は……まるで……何だろう？

ここだけはどうしても答えが出ない。まるで……海から来た優しいアジフライ？　まるで……馬に乗っているアジ??

良く分からないが……何かな気がする。

そして、一つ後悔しているのが『あーしのこと口説いてる?』と聞いたことだ。あの時、自分に今までありえない位の自信が付いていた。自身が無いあーしがあんなことを言うことは未来永劫無いと思っていた。だからあんなこと聞いた自分に驚いた。そして……あとになって悶えた。そんなとんでもないセリフをアイツはあーしから引き出したんだ。

自分に自信が無かったけど、アイツと出会って自信が少しついて、何かが変わった。それだけはわかる。けど、何が変わったかは分からない。

何だろう。心にアジの小骨が引つかかったこの感じ……答えは出ないまま。だけど、それでもいい。毎日が楽しいから……

なりたくてポツチになったわけではない。友達が欲しくて色々な事をした。それが報われた今はどうしようもなく充実しているのだから、それでいい。

……それでいいよね？

どうしてだろう。それでいいはずなのに

満足が出来ないのは……



この世界『魔装少女〜シークレットファイブ〜』には、中間パワーアップと言うものが存在する。しかし、これは中盤のかなり後に行われる。具体的に言えば十一月。だが、俺はそれを早めようとしている。

今、訓練室に俺達五人が集まっている。俺がゆっくり取ってきた『中間パワーアップアイテム』を彼女達に取りあえず渡すためだ。俺が取ってきた後、色々整備が必要なのでメルに無理やりずっとやらせていたが、ようやく仕上がったようだ。ずっと、封印されていたから錆びとか汚れとか、色々戦うには不都合がある。

俺達の前には今、五色の武器が並んでいる。純白と漆黒の聖剣が一本ずつ。紅蓮刀が二本、黄色のグローブ、青い短剣。

今も使っている魔装と同じ武器に見えるが、ぱっと見では今使っている武器より劣ると言う感じにも捉えられる。特に凄いやオーラも出ていないし、魔力を放つてもいない。外観だけの張りぼて……と思つたら大間違い。

この武器は魔力を使わない。嘗て、星霊が祈りの塊で生まれたようにこの武器は星霊の力の破片で生まれた。星霊が力を失ってその中で未来に託すために生み出したこの武器は魔力を使わない武器。

大きな覚悟と思念、それが使用者にあればあるほど力が扱える。使用者には適正も必要……それを満たしているのが彼女たちなのである。

ヘンズブレイブ 栄光純白剣。適用するには美女で純真無垢でないといけない。使用には他者への愛。

デュアルトミック 煉獄双刀。適用には美女で揺らぎない信念をもっていないといけない。使用には燃え続ける愛。

ドンナークロス 轟雷豪打。適用には美女で何者にも勝る優しさをもっていないといけない。

ドラゴンアクア 清龍水剣。適用には美女で純粋な心の持ち主でないといけない。

ドラゴンアクア 清龍水剣。適用には美女で純粋な心の持ち主でないといけない。使用には曲がらない愛。

ダークブレイブ 闇夜剣。使用には美女で影と闇を持つものでないといけない。使用には全てを払う愛。

中々の条件があるが使用できれば単純な力だけでなく、加護もえられる。という説明をメルが四人にしている。説明と言っても伝説上の仮説を語っているだけだが、様々な異世界の文献から彼女はこの武器の特性を見極めているから仮説がほぼ真実であるという驚くべき彼女の分析力。ただ、一つダメ出しをするなら五つの武器の使用者が心を通わせるとラスボスを倒す最終兵器になると言う説明が抜けていることだが、まあ、これは知らなくても仕方ないな。

物語のラストで起きる現象だしな。

さて、説明が終わり四人それぞれが武器を手取る。コハクがメルに剣を見まわしながら聞いた。

「これで、パワーアップするのでしょうか？」

「条件が合えばの話や。取りあえず誰かへの愛を思い浮かべてその剣を振ってみるんや」

「そんな、殿方の前で剣をぶん回すなんてはしたないです」

彼女は俺の方を見てちよつと抵抗をしめす。可愛さをアピールしているんだろう。しかし、彼女の剣をぶん回す姿は沢山見ているので今更だ。

「いや、急にそんな乙女感だされてもな……ワイも困るで」

「コハクさん、俺剣をふるうあなたも好きなので問題なく振ってください」

俺がそういうと彼女はそれならと軽めに剣を振った

「十六夜君がそういうなら……エイ、」

その瞬間、剣からソニックブームが放たれ訓練室の一部を崩壊させた。皆、驚きの視線を彼女に向ける。流石です。コハクさん。

「コハクさん、流石の脳筋っぷり流石です！」

「ええ……褒められて嬉しいのですが……なんか乙女感が……私の積み上げてきた……乙女感が……」

彼女はちよつと、か弱い女子を演じたいようなのでここまでのとんでもない威力だと、色々気にするようだ。

それは一旦置いておいて、本来なら彼女が中間パワーアップアイテムを使えるのは新年を迎える前なのだ。彼女は徐々に周りを仲間として認識して、天使イベントを通して真の絆を彼女達に感じる。だが、今は既に『ストーリー』とはだいぶ違う流れになって、彼女自身も本来より変わっているから直ぐにでもパワーアップができるかもしれないと思っただが本当に出来るとは……

本来の使用には仲間達への愛情を使っていたが……今もそうなのだろうか？

俺が考えていると、火蓮、萌黄、アオイ。それぞれが武器をふるう。火蓮の武器からだけコハクと同等のソニックブーム。火蓮も使えるのか。

彼女は一番最初に中間パワーアップをする魔装少女。彼女は両親が離婚して自分自身が強くなるという信念と慰めた仲間への愛があるからこそ使えるが……これでライオンをボコボコにして俺強ええする。

今回は……どうなんだろう？

「二人共凄いやん。どんな、想いを武器に込めたんや？」

メルが彼女達に聞いた。愛が強いほど、この武器は強くなる。ならば今見せた彼女達の攻撃にどんな、そしてどれほどの愛か気になったのだろう。それを聞かれると二人して俺をチラチラ見てきた。

……突然だが俺は鈍くない。彼女達の想いに今回も直ぐに気付いた。しかし、万が一外れていたらキモいどころの話ではないので口を閉じる。

「それは、好きな人への愛って言うか……そんな感じですよ」

「わ、私は、べつに、特にないけど……それとなく誰かさんを思い浮かべただけよ……」

「あ、もうええで。分かった」

アオイと萌黄の武器からは何も出ず。彼女達はまだ親密度とかいろいろ足りないだけだ。焦る事もないだろう。

「僕は出ないみたい……ごめんね?」

「あーしも……」

「気にしないでください。私がたまたま使えただけでしょうから」

「そうよ、焦る必要はないわ」

コハクと火蓮が二人を慰めている。二人に言われると萌黄とアオイもすぐに心理的に良くなったようで落ち着いた表情を取り戻す。俺もフォローしよう。

「そうですね。俺なんて男だからそもそも適合以前の問題です。お二人のほうが俺より全然立場が上ですから、不安になったら是非俺を心の中で見下して安心してください!」

「どんな安心のさせ方? 君は……全く」

「ちよつと、言葉選びにセンスを感じる」

萌黄もアオイもちよつとクスリと笑った。どうやら、冗談と捉えたようだ。俺からしたら本心だ。何故なら別に二人なら心の中で、又は外で見下されてもご褒美になるかも……等と思っではない。決して。

笑いあう彼女達を見ながら何があっても俺は彼女達を悲しませるようなことはしないと心に決めた。

九十六話 美女は幼女になっても可愛い

朝ベッドで寝ていると腹部に強烈な痛みが走り、ぐえつと言う下水道な声を発して目覚めたら……目の前にツインテールな火蓮の幼女バージョンが……メルの変な薬を飲んだと言う事をすぐに悟った。こういう事はよくあるのだ。ストーリーでも誰かが研究品を飲んでしまったりとかでドタバタする日常回は多数存在する。その中の一つである幼児化というやつだろう。しかし、幼児化にはかなり、悲しい描写も……と考えていると彼女は俺の肩を両手で掴んで揺らす。

「遊ぼ!! ねえねえ、遊ぼ遊ぼ!!」

幼い顔つきだがこの時点で相当な可愛さを持っている。大体、幼稚園児くらいだろうか? 将来がルビーレベルになるだろうと言う片鱗がこの時点で分かってしまう。

いつもはツンツンとして振る舞いなのだが、今は活発で元気いっばいと印象を受ける。彼女は元は子供のころはヤンチャでいたずら好きで我儘。精神も若返っているようだ。普通の主人公ならこういったファンタジー的な状況になると混乱して、もう一回寝たりとか貴方は誰とか聞いたりするんだろうが……俺は違う。

「火蓮先輩、おはようございます。何して遊びますか?」

直ぐに適応をしていく。彼女にそう言うと言目をキラキラさせてせわしなく口を開いた。

「えつとね、えつとね! おままごとしたい!」

何気に古典的だが王道な遊びである。おままごととは可愛いじゃないか。

「やりましょう。俺は何の役をやればいいんですか?」

「えつとね、えつとね。十六夜は勇者で私は魔王で。十六夜は魔王である私を倒したんだけど、帰りでパーティーメンバーに裏切られて手柄とられて、途方に暮れたところで元魔王の私に会って、人間に復讐したいって言う理由で私の使い魔になるってところからね」

「分かりました。ですが、その前に着替えとか歯磨きとかしてきくるのでリビングで待ってもらっていいですか？」

「うん！ 待ってる！」

タタタタつと彼女は俺の上から降りて下の階に走って行った。それっておままごとか？ という疑問は何処かに置いておこう。さて、俺も気合を入れて彼女と遊ぶ準備をしよう。



ある程度身支度を整えてリビングに行くとき火蓮が俺の元に寄ってきた。彼女に視線を落として膝を落とすと抱き着いた。

「いざよい、えへへ。頭撫でて」

思わず可愛すぎて、瞬きを忘れてしまった。その後、彼女の頭を撫でていると今度は他の方向からトタトタと走り声が聞こえて見るとそこには小さくなって銀色の妖精が。彼女も俺にタツクルするように抱き着く。

「おはようございいます！ いじやよいくん！」

噛み噛みだが、可愛さと気品は損なわれていない。髪も艶があつてちよつと天真爛漫だがそこが可愛い。ボキヤブラリーが低いのが可愛いとしか言いようがない。因みにだが昔の彼女はちよつと舌足らずの時があり、興奮して早口になったりすることがある。

彼女も幼児化していると言うことは、他の二人も思つてソファアに目を向けると、幼女化した二人が仲良く座つてテレビでシンデレラを見ていた。ソファアの前の机にはサボテンを置いている。台所には飲みっぱなしの水が入ったコップが四つ。これで幼女化したようだ……恐らく、一日位で元に戻るからそれまで俺がしっかりと見守ろう。

「いじやよいくん。ままごとしましょう！」

「ちよつと、いざよいはわたしの使い魔よ!!」

「知らないもん。ベえー」

「カッチーン」

いつの間にか俺は使い魔になっていたようだ。コハクはあつかんベニーをして火蓮を煽り彼女も怒り心頭。二人を抱えているがジタバタ動くのでしつかりと支えないといけない。

二人を宥めながらもソファに座る。するといきなりままごとが始まる。俺の腕のなかでコハクが話し始めた。

「おかえりなさい、貴方！ あつ、私といじやよいくんは結婚を前提に付き合っていて、一戸建ての家をどうするかと相談する中で今は同棲中と言う設定です」

「あ、分かりました」

「ちよつと、待って！ 私はいじよいを拾ってあげて使い魔にしてこれから、ざまあして、いじよいが私に惚れて使い魔と禁断の恋になるの!!」

「両方、兼任でいきますー！」

二股を決めたんだ。おままごとくらい両方両立させてやろうじゃないか。それにしても萌黄とアオイは二人で遊んで静かだ。危険な事もしないし、シンデレラを見たり、サボテンを二人で眺めたり……「この子、サボさんって言うの?」

「そう。あーしはサボさんとは十年の付き合いで旧知の仲」

「ええ!? そんなに!? すごーい！」

小さい頃の萌黄は今と同じで遠慮な感じで世話焼きな性格になる。アオイは素直で運動やゲームが好き。二人共今とそこまで変わらな

い。「こつちみてください！ いじやよいくん！」

「すいません」

「もう、続きいきますよ」

「はい」

「では……ねえ、ダーリン?」

「だ、ダーリン??」

「もう、ちゃんとハニーって言うてください!!」

彼女の中では色々設定があるようだが流石に……恥ずかしい……ハニーはちよつとな……幼女な彼女にハニー呼びは後で悶える。

「あの、もつと軽い感じのおままごとにしませんか？ 付き合つて一か月で初々しいカップルを俺はやってみたいです」

「いざよいくんがそういうなら……」

彼女は元気よく俺の考えを肯定してくれた。コハクに構っている
と火蓮がほっぺを膨らませるので今度は彼女の方を向く。

「私と使い魔契約をするんでしょ！ 感謝してよね。魔王にキスして
もらえるなんて前代未聞なんだから……、やっぱ無理……」

彼女は唇を俺に近づけようとするが、恥ずかしくなりやっぱりやめて顔を手で覆った。使い魔契約にキスはつきものだがそれはやったという事にすればいいよな。幼女の火蓮とキスは警察のお世話になりたいと自分から言うようなものだ。

しばらく、復讐に燃える勇者を演じつつ、初々しいカップルの二足の草鞋をして二人と遊んだ。すると火蓮は飽きっぽいのでままごと
はもうやめて、別の遊びがしたいようだ。コハクはこのまま、ままごとを続けたいようで幼女同士の可愛い喧嘩が始まる。

「鬼ごっこしたい！ 鬼ごっこー」

「私はままごととしてたいです!!」

「じゃあ、両方やりましょう!」

「どうやって?」

「コハクさんを俺が抱っこしてままごとしながら、火蓮先輩を追いかけて鬼ごっこをするという方向で行きましょう」

「うん」

先ずは火蓮が逃げる役なのでソファから飛び降りて走り出す。しかし、すぐに足を絡ませて転んでしまった。すると直ぐに声が上がらず顔を赤くして泣き出してしまった。

「いたああい、びええええん！ いたあい!」

「大丈夫ですか!？」

彼女をあやすように抱っこして頭を撫でたり、ゆすつたりして彼女

の感情を宥める。体だけでなく精神も幼くなってしまっているため
普段泣かない様なことでも泣いてしまったり感情が不安定になる。

「……………」

泣きじやくる火蓮を抱っこしていると、他の三人と目が合った。コ
ハクと萌黄とアオイ、偶然なのかどうなのか分からないが取りあえず
火蓮を優しく抱っこを続ける。すると、コハクがソファから降りて急
に走り出す。その一秒後わざとらしく転んだ。

「えーん、えーん。いたいです。えーんえーん」

棒読み……だが、こちらを放置するわけにもいかない。もしかした
ら、本当に泣いていると言う可能性も無きにしても非ず。二人共、再び
抱えてしばらくこのまま。火蓮は泣き止み、コハクは嬉しそうにほっ
ぺをスリスリしていたから所を見計らって、ソファに二人共座らせ
た。



二人はかなりハードに遊んだので疲れて眠ってしまった。犬猿の
仲のように見えて心配になった時もあったが眠るときは互いに互い
の手を握って気持ちよさそうに寝ている。パワフルな時間だったが
俺自身も楽しかったので全く疲れていない。『魔装少女』と接するこ
とが出来るのであれば幼女化なんて寧ろ光栄。幼女最高である。

ぜひとも写真に収めたいがそれは流石に不味いのでやめておく。
小さくなった萌黄とアオイはここまで何も言わずに静かに遊んでい
たがここにきてアオイが俺の服の裾を引っ張った。

「どうかしましたか?」

「ゲームしたいんだけど……………」

「じゃあ、俺の部屋から最新のゲーム機持ってきますね。萌黄先輩も
やりますか?」

「う、うん」

萌黄とアオイは幼くなったとしても、特に現在と変わらない。アオ
イは大人しくて友達を求める。だからこそ、先ほどまで萌黄と一緒に

満足げにずっと遊んでいた。萌黄の場合は周りの視野が広くて優しいから多分俺に何かを求めたりはしない。だけど、寂しがり屋なのは変わっていない。

そして、この二人はきつと幼かったコハクと火蓮に遠慮していたんだろう。だから、二人が寝た後に遊びたいと言って来た。よし、しっかりと一緒に遊ぼう。俺だって楽しいだろうし。

「よし、俺と一緒に遊びましょう」

「わかった」

「うん」

テレビ画面でゲームができるように設定をしてコントローラーを渡す。ソファにはコハクと火蓮が寝ているので少し音量を下げたプレイを開始する。ゲームをする前にアオイが俺の膝の上に座った。

「座っていい？ もう、座ってるけど」

「どうぞ。萌黄先輩も座りますか？」

「ええ!? いや、別に大丈夫……」

「そうですか？」

「うん、それよりゲーム初めようよ」

彼女の促されたのでゲームを始めた。内容は画面外にキャラクターを吹っ飛ばす格闘ゲームである。ちよつと、良いところを見せたいと思っていたのだが……アオイが強すぎる。萌黄も学習能力が高すぎる為、俺がボコボコにされた。

嵌め技からのコンボ、上投げからの吹っ飛ばし、上投げからの場外吹っ飛ばし。ちよつとセンチになった。

でも、楽しそうに遊んでいるから全然大丈夫。そして、遊び終わった後に

「あんがと……」

「僕も楽しかった」

って笑顔で言ってくれたから結果的にプラスである。自然と俺も笑顔になってしまう二人の不思議な魅力。そこで寝ていた二人が唐突に起きた。

「私もゲームやりたい!」

「私もです！」

コハクと火蓮も目をパツチリにして体力を全回復。このゲームは五人でも出来るから問題ない。今度こそ良いところを見せてやろうと年上の威厳という物を見せてやろうと、心に決めたのだが……まあ、スペックが高い五人には勝てず。ボコボコにされた。



初めてだ。四人と一緒に寝るのは。前世ではこんな『魔装少女』を読みながらこんな女の子達が添い寝してくれたらどれだけ幸せかと考えていたことがある。流石に幼女な彼女達なら不純な気持ちでなく、清廉潔白な心境で一緒に寝れるので安心だ。逆に言えば普段の彼女達なら危ないと言う事でもある。この間、コハクと火蓮と寝た時は賢者モードで乗り切ったがああときなんてマジで手を出しそうになっっていたからな。

夕食とかお風呂は彼女達が全部自分自身でやった。危ないんじゃないかと心配になったが『ストーリー』でも小さくなっても頭脳や経験は衰えないという描写があつたので心配で気が気じゃなかったが彼女達に任せた。その後、寝る時間になるとコハクに怖いから一緒に寝て欲しいと上目づかいで言われたのでこうやって、全員で川の字でになって寝ている。

彼女達は皆、気持ちい寝息をたてている。コハクと火蓮は俺の腕に引っ付いて、アオイは火蓮の後ろに引っ付いている。ただ、萌黄だけはなかなか寝付けないようで天井を見上げている。

「寝れないんですか？」

「うん……」

「トイレですか？」

「違うよ。失礼だね。君は」

「すみません……」

「謝らなくてもいいけど……」

「寝れないなら、暖かい飲み物でも飲みますか？」

「いいの？」

「いいですよ。一緒にリビングに行きましょう」

「それならお言葉に甘えて……」

彼女を連れてダイニングテーブルの椅子に座らせて、彼女に白湯を差し出す。彼女は息で少し冷ましながら、少量ずつ飲み始めた。黙ってただ、彼女は飲み続ける。どこか、寂しげな表情で……その理由は何となくだが分かっている。

黄川萌黄という人物は非常に愛に飢えている人物である。それは、普段の彼女の行動を見ていれば誰でも分かるだろう。だが、その気持ちの根源にあるのは母への愛と寂しさ。だが、成長した彼女はそう言った思いを無意識のうちに友達への愛、仲間への愛に転換していた。だからこそ、母が居ない事への寂しさや会いたいと言う気持ちがあったとしても他で埋めることが出来る。

しかし、今の彼女はそれが出来ていない。多少は三人が居ることで緩和で来ているがそれでも寂しさの方が勝っている。三人が寝てしまった今この状況は彼女にとってもっとも厳しい状況とも言えるだろう。

ストーリーでも彼女は幼女化したとき一人で夜泣いていた。皆と楽しく過ごしているときは彼女自身も楽しんで、だけど、夜になり一人寝れず昔の母親との思い出を想起していくと寂しさで泣いてしまう。

彼女はただ黙っていた。だんだんと昔を思い出しているんだろう。特に夜は彼女の中で一番思い出に残っている。怖くても母親がいたから怖くなくて、暖かい、黄金の記憶。

俺は彼女を抱っこして頭を撫でた。代わりに成るはずはない。それは分かっているが彼女の寂しさとかそう言った事がミジンコほど

でもいいから無くなればいいなっと思う。

「……急に何?」

「いえ、特に理由は無いですけど」

こうやって、彼女の母親は彼女を抱っこして左右に揺らして続けた。寝るまで、彼女が寝るまで。すすり泣くように彼女から声が溢れる。

「っ……うう、」

「……」

ストーリーでは彼女は一人寝れずにそのまま一夜明けて元に戻るんだ。元に戻った彼女の記憶には残らない。だけど、僅かに心残りがあがるがいつか風化するから言う必要もないと……彼女の不思議な経験になる。

俺が思うにこの状況の彼女は一人にしないことが大事だと思う。本当なら三人に任せるのが一番なんだろうけど流石に疲れて寝ている三人を叩き起こして一日中起きていると言うのは身体的負担もかかってしまう。ならば、かなり劣るが俺が一日中でも、一週間でも起きて一緒に居ようという考えだ。

俺だって多少は萌黄から信用されている。偶に彼女の足をチラチラ見すぎてジト目が飛んでくるときもあるが基本的に俺は紳士なので大丈夫。

「ううっ……」

「……」

俺は黙って彼女を抱き続けた。その内に彼女も俺の首に手を回して本格的に泣き始めた。

背中をさすったり、彼女の母親がやったように昔話をしたりする中で彼女は目元が少し腫れているが寝てしまっていた。俺は彼女を布団に寝かしてお腹を優しくポンポン叩き続けた。



僕は目覚めた。昨日のことを思い出そうとすると頭が少し、ぼうつとする。何も思い出せない……しかし、自身の体を見ると……裸だった……隣には彼が居て……ええ!? こ、これ!? 事後!?

慌てて周りの見ると皆も裸である。よく見ると服の切れ端みたいなのがそこら中に散らばっている。これはどういうこと!? と、特殊なプレイを5P!? まさかの5P!?

いや、そうではないだろう。これは……そこまで考えて僅かに頭に何かフラッシュバックする。曖昧な記憶。眼を薄く開いた状態で汚れたレンズ越しに映像を見ているような記憶が頭に中に流れた。彼が……泣いている僕を……これ以上は何もわからない……

これは……。そこまで考えて思いだせる範囲で思い出す。昨日の朝に、アオイちゃんが白湯は体に良いって皆に話して、その健康法を皆でやろうって話して、冷蔵庫の中から水を出して沸騰させて飲んだら……そこからあんまり思い出せない。きつとメルちゃんの仕業だろう。あれほど、冷蔵庫の中に研究私物を入れると言ったのに……そこまで考えて僕は魔装を纏って、皆に慌てて服を着せる。これで寝ている彼が起きても大丈夫だ。僕の隣で寝ている彼の顔を見る。

………思い出せない。思い出せないけど、君が何かしてくれただよね? 記憶には残っていないけど、心には残っている。暖かい何か。

………なんで? 君はいつも僕を大事にするの? どうして? 嬉しいよ、尊いよ、感動もする。だけど、……これじゃあ、もう……自分で自分を誤魔化せなくなっちゃおうよ……

僕は想いを言い切れない歯がゆさを覚えた。

九十七話 ライフはゼロよ

その日、俺の携帯に一本の電話が掛かってきた。タップして通話を開始する。

「おう、わしじゃ」

「どうも」

我らが占い師さんだ。彼女とは定期的に連絡を取っている。この後に起こる災厄を占つてもらっているからだ。中々、詳しい内容の占いの結果が出ないが彼女から連絡が来たと言う事はそう言う事だろう。

「占いの結果がでたぞ。数多の命を持つ修羅が青き光を打ち砕く……らしい」

「なるほど……大体わかりました」

「ほう、わかったのか？ 因みにその災厄が来るのは三日後じゃ」

「分かりました。ありがとうございます」

数多の命を持つと言えば四天王の阿修羅だろうな。無口で腕が四つあって十一月の後半に登場する強敵。中間パワーアップ後に出てきてアオイとガチバトルを繰り広げる。周りもサポートをするがアオイが一番活躍するのだ。しかし、現時点ではアオイは覚醒していない。

彼女が覚醒できないのは未だに親密度が足りないからだろうな。曲がらない愛。簡単そうに見えて簡単ではない。

今は八月。『ストーリー』で彼女が覚醒するのは『文化祭』で彼女がある失敗をしてそれを魔装少女メンバーによって慰められる十月。そこで親密度がググつと上がるのだ。だが、俺としてはこの失敗はさせたくない。純粋に彼女達との時間を増やして親密度を上げて欲しい。

そして、『ストーリー』で阿修羅はライオンの次に出てきているので火蓮とアオイが覚醒状態だが、今は大分本来のストーリーからそれて、火蓮とコハクが覚醒している。この二人が居るならたやすく対処

できるので今回は問題ないと思っっている。

中盤の四天王つて、本来なら基本的にパワーアップした彼女達の見せ場の為に出てくるキャラみたいなものだ。火蓮にライオンがぼこられ、アオイに阿修羅がぼこられ、萌黄に墮天使がぼこぼこにされ……その場その場で覚醒した彼女達に一对一で倒される。だとするならコハクと火蓮が覚醒しているなら何も問題ない。ただ、天使だけは強さのベクトルが違うキャラだが……

俺が居ても正直足手まといも良いところだ。出来る限りサポートはするが火蓮とコハクに任せるのが無難だろうな。……忍びない。俺がもつと強ければ……

そして、三日後。



その日、大きな黒い穴が現れた。あーし達はアイツが嫌な予感があると聞いていたので魔装を纏ってビルの屋上に来ていた。

大きな穴からは腕が四本ある化け物。強さがこちらにヒシヒシと伝わってくる。瞼を閉じているが、その目が開かれた。ゾクつと背筋に悪寒が走る……

と、思ったらいきなり光の斬撃と炎の台風がその化け物を包み込む……コハクと火蓮、二人共異常に動きが早い……そして、二人共物凄い顔に希望が溢れている。先ほど、アイツに頑張っしてほしいとか、期待していると言われていたからだ。メルが言っていたが魔力も新しい武器も感情が大きく左右するらしい。

テンションがマックスの二人の超高火力。ビルの上であーしと萌黄、アイツは目の前に光景に目が離せない。

怪獣大戦争……二人からあふれる攻撃と光、激音、爆音、炎と光のストリーム。これによって化け物の姿はまるで見えなくなってしまう。

「ふ、二人共凄すぎ……」

「すげえ……」

「ヤバすぎでしょ……」

萌黄とアイツ、あーし、異次元の迫力と攻撃に今までの固定概念が崩れそう。それからさらに彼女達の攻撃は続いた。

もう、ライフはゼロでしょ……と思うが一時間、二時間、三時間……そしてようやく空が晴れる。

化け物は粉々になっており、二人が笑顔で戻ってきた。

「二人とも凄すぎです！」

「えへへ、そうですか？」

「まあ、これくらい当然よね」

アイツが二人を褒めた。当り前だ、あんなに凄い戦いを繰り広げたのだから。あーしにはあの武器は使えない。でも、使えれば二人みたくに褒められるのだろうか。心のざわざわが強くなる。最近、あーしの何かがおかしい。

となりでは萌黄が少し、羨ましそうに三人を眺めていた。だけど、アイツがこちらを向くと萌黄は顔をいつもの明るい雰囲気に戻す。何か無理でもしているようだ。

あーしは何かが嫌だった。

その光景の何かがダメなんだ。許容ができないんだ。化け物を倒して誰も怪我をしなくて、最善のはずなのに……どうして、心がこんなにもざわつくんだらう……



「それで、災厄を回避したと」

「はい。彼女達に任せるのが一番だと思いましたので……」

「ふむ、偶には誰かを頼ることもしたほうがいいじやろうな」

「まあ、それは置いておいて。この後の災厄はどうですか？」

「次は稲妻じやがしばらくは大丈夫じや」

「それなら、良かったです」

「ただ……」

「何かあるんですか？」

「いや、これはどうでもいいことじやった。ではの……女難の相がそろそろ増える頃じやな……」

彼女はそう言うと言話を切った。最後の方に何か言っていたが気のせいだろうな。今回は彼女達に任せて災厄を回避した。これでも良かった。流石は彼女達だ。今回が一番スムーズに敵を倒せたからだ。

この後は萌黄の災厄……今回みたいな感じでもいいのか？ だけど、今回のように彼女達に任せて俺の出番は殆どないくらいがちょうどいいのかもしれないな。

……しかし……うーむ。次にあるのは文化祭。これは……アオイが一番悲しんで、離婚したばかりで火蓮もあまり盛り上がれなくて、萌黄もそこそこ傷つくと言う『ストーリー』の中でかなりの炎上してネットが荒れた記憶がある。『ifストーリー』が最も荒れたが、『ストーリー』の文化祭編もヤバいのだ。

しかし、これは絆を育むと言うイベントも併用していた。手を出さない方が良くとも考えない俺ではないが手を出す。現時点で彼女達の絆は育まれている、ならば手を出しても問題ないだろう。かなり、真っ黒な感じで終わる文化祭編を俺の手でハッピーエンドにしてやろうじやないか。

だとするのであれば、校内の噂が今以上にとんでもない事になる可

能力が……フツ、俺のメンタルは既にオリハルコン、どうと言う事はない。

クククク、俺はこれからの事を考えてほくそ笑んだ。



あーしは一人で訓練室に来て新しい武器である青の短剣を振っていた。何故かはわからない。勝手に体がこの場所に私を運んで動かしていた。何か起きて欲しいと思いつつながら短剣を振る。

もし、あの時、褒められたのがあーしだったら……僅かにそんな考えが浮かんだ。一人で訓練していると扉が開いて萌黄が中に入ってきた。彼女の両腕には新しい武器。

「アオイちゃんも訓練？」

「そう」

何気に萌黄と二人きりは珍しい。皆で一緒の時はあるけど二人きりと言うのはあまりない。

「萌黄も訓練？」

「うん、二人にだいたい先越されちゃったし。僕も頑張らないとね。置いて行かれるのは嫌なんだ……」

「そうなんだ……」

彼女の表情は笑顔だけど何処か曇っているようだった。無理やり自分を抑えこんで、気持ちの糸が絡まって上手く動けない感じがした。

「アオイちゃんは どうして訓練を？」

「えっと、あーしも新しい武器を使えるようになりたくて」

「……それだけ？」

萌黄らしくもない切り返しだと思った。彼女ならこのあーしの答えに相槌を打って抱き着くぐらいするから。こんな複雑そうな顔なんてしない。

その、言いようのない彼女になんて答えていいか分からず沈黙をしてしまう。

「ごめん、今のは忘れて！ それより、一緒に訓練しよう！」
「そだね……」

彼女は顔の前で手を合わせて謝るといつものように笑顔になった。その後は二人で只管に新しい武器をふるったが特に変化は起きずに空を切る音が訓練室に鳴り響くだけだった。

九十八話 焼肉は悪い文明

焼肉食べ放題。その言葉を聞くと自然と人は食欲がわいてくる。焼肉が食べ放題なのだ。それは当然。一般的に男性ならば2000?、女性なら1800?を焼肉食べ放題で欲望を尽くすと摂取してしまう。カルビ、ロース、ハラミと言った様々な部位のほかに、ウインナーやハムといった加工肉も置いてある。

さて、ここで問題。誰でも分かる簡単な問題だ。食べ過ぎるとどうなる? 答え。後で悲鳴を上げる。

「ひええええええ!!」

私の後輩であるコハクと一緒に風呂に入る前に体重計に乗った彼女は、両手を顔に当ててガタガタ体を震わせている。

「そりゃ、焼肉あれだけ食べればそうなるわよ」

「で、でも、かなり抑えたのですが……」

「でも、いつもよりは食べてたでしょ」

「それは……はい……」

今日は十六夜のお母さんが焼肉店の割引券を送ってくれたので六人で焼肉屋に行ったのだ。そこでコハクは微笑まし気にパクパク口に運んでいた。最初に野菜を食べて体重荷重対策をしていたが功を奏することはなかったようだ。

「くっ……焼肉食べ放題は人類にとって悪い文明です……消さなければ……」

「何言ってるのよ。食べてるときは最高の文明って言ったじゃない」

「くっ……そのときは誘惑されて思考力が落ちていました。やはり、悪い文明……」

実際はそこまで増えた訳じゃないだろうに。過剰に見た目とか気にするのよね。私は彼女の顔から僅かに視線を落とす。そこにはマスクメロ……スイカ……全体をとおしてみるとボンキュッボン。私とは対照的と言える。私はキュッキュッキュ。

なぜ、私はこんなに小さいんだろう……

「先輩も測ってくださいよ。増えてる人が多ければ安心感を得られませう」

「理由が思ったよりクズでビツクリよ」

「と言いつつも私は体重計に乗った。フム……」

「むしろ減ってるわね」

「ガーン……」

自分だけ体重増加はかなりつらいようだ。うわああんと彼女は頭に手をあててどうしてこうなったという表情をしながら体を震わせる。すると彼女のバストが揺れる。前より大きくなってる様……

「コハク、何カップだったけ？」

「今はGカップです」

前は確かFだった。つまりこの短期間で成長したと言う事だ。それが体重が増加している原因な気がするがそれを口にして慰めると私が悔しいので黙っておこう。彼女はしばらく悩み、明日からランニングを増やすという決意を固めた。

スタイル全然良いと思うけど……どこまでストイックなのだろうか？ 肩甲骨トレーニング、股関節を柔らかくするストレッチ、かなりきつくて変な踊りを半時間位毎日やって、健康にいいからって水がぶ飲み。

努力の塊。元の素材が良いことは明白だがそこから自分で更に追い込む凄いやつ。私だって最近、美容とかにはちよつとだけ気を遣ってはいるけど……コハク程ではない気がする……

はあ、あんまり考えると自信が無くなりそうだからお風呂入る。

「それじゃ、お先に」

「あ、そうだ。火蓮先輩、一緒に一万秒まで湯船に浸かって体重落としませんか!？」

「いやよ。メンドクサイ」

「ええ!?! 一人で一万秒はきついんですよ! お願いします、頼りになる先輩!」

「こんなときだけ、敬われてもね」

あざとい……まあ、それも長所なんだろうけど。一人で湯船に長く浸かるのは嫌なのか、おだてて私を巻き込もうとする彼女を無視して私はいつも通りお風呂に入る、つもりだったのだが……

結局、根負けして彼女の体重を落とす長風呂に付き合わされた。



コハクちゃんは努力家である。焼肉食べ放題に行った次の日は髪を結んでポニーテールにすると朝から変な踊りを踊り始めた。

何故か火蓮ちゃんも付き合っただけで踊っているが……まあ、一人でやるより二人の方が精神的に楽だろうから彼女を誘ったんだろうけど。火蓮ちゃんも付き合いが良いなあ。

「はあはあはあ」

「いつまでこれやればいいのかよ!?!」

「まだです! まだまだ!!」

「いつまでやるのよ!!」

「魔法訓練室ならご近所さんにも迷惑は掛かりません! あと、一時間付き合っただけです! 最高ですね! 魔法訓練室!」

「未だかつてない程に、魔法訓練室を憎んでるわ!」

体にフィットするランニングウェア、レディースパンツを着て踊り

続ける。コハクちゃんって……エッチだね……。ぽよぽよ揺れて……。……火蓮ちゃんも揺れてる。ツインテールが。

「萌黄も踊んなさいよ!!」

「僕はこの席ではあはあ言う二人を脳裏に焼き付けるので忙しいからダメだよ!」

二人を眺めてしばらく経つと訓練室にアオイちゃんが入ってきた。彼女の格好はいつも通りのパーカー姿だけどお風呂上りのようにさっぱりして、石鹸の優しい香りが漂った。

「まだ、やってたんだ」

「そうなんだよ。二人共頑張ってるんだ。アオイちゃんはお風呂上り?」

「うん、ちよつと軽く走ってきて汗かいたから」

アオイちゃんって走ったり運動が好きなんだよね。アスリート体質で健康体質という無敵具合。長寿絶対するだろうね。

と考えていると音楽がようやく止まって二人共尻餅をつく。

「ふう、いい汗かきました」

「やり過ぎよ……」

二人共疲労困憊で肩で息をしている。

「ありがとうございますね、先輩がいたおかげで楽しく運動できました」

「まあ、私も楽しくなくなかったから……別にいいわよ」

「そうですか? それならまたやりましょうね! 痩せますし!」

「やらない」

ツンデレらしい火蓮ちゃん可愛い。コハクちゃんのグイグイ感も非常によろしい。

「コハクは痩せたいの?」

「ええ、まあ」

「太ってないし、寧ろ痩せてると思うけど」

「確かに、今の所は理想の体型ですが油断は禁物。体重に常に余裕を持っておきたいのです」

「なるほど、だったら、あーしと走る？　そこそこの運動にはなると思っうけど」

「ええ、いいんですか!?　是非！　お願いします！」

「じゃあ、今からいける？」

「え、でもシャワー浴びたばかりじゃ……」

「もう一回浴びれば問題ない」

「せ、先輩！」

アオイちゃん、可愛カッコいい。というわけでコハクちゃんが一旦着替えて、二人が一緒に行っている間に火蓮ちゃんはシャワーと着替えを済まして、僕と一緒にソファアに座ってテレビを見始めた。

そして、一時間後……

二人が帰ってきた……

「こ、この先輩、鬼……」

「そんなに……きつかった？　かなりペース落としたんだけど……」

コハクちゃんはフラフラで疲労でどうにかかなりそうな顔であったが、アオイちゃんはケロッツとしながらコハクちゃんを心配していた……

一体、アオイちゃんはどれほど足が速いんだ……

この日から、コハクちゃん健康気遣いトレーニングからランニングの項目は消えた。



九月と言うのは未だに暑さはぬぐえないと思つたら、急に肌寒くなったたり体調を管理するのが難しい時期だ。俺はクラスの自分の席

に座りながら何とも言えない季節の変化を肌で感じる。

来月には文化祭。と言う事はそろそろクラスごとに出し物の話し合いとか色々始まる事だろう。だとするなら、俺も色々動き始めないといけない。まずは、萌黄とある男子生徒二人のいざこざである。

二年Aクラスでは男子がふざけていることではなかなか出し物が決まらない。そこで萌黄が男子に注意をして会議をスムーズに進ませるのがそのせいで反感を買ってしまう。その後もヘイトが溜まり、男子達は文化祭当日に悪口を言っただけを萌黄が聞いて、彼女が思わず一人で泣いてしまうと言う内容だ。『ストーリー』では彼女は誰にも相談をしないで自分自身に喝を入れて文化祭を楽しむがどこか表情が儂げであったのを覚えている。

だとするなら、まずやるべきことは二年生の会議が始まる前にその男子生徒にはしっかりと話をしておかないといけない。今日の午後後の授業が全学年、全クラス共通で話し合いがある。

だから、俺が釘を刺す。話し合いの前の時間に言えば抑止力は高いだろうしな。確か、悪口を言う二人は坊主と目つきが悪い奴だったな。



そろそろ、文化祭がある、ふふふ、楽しみだ。皆で一緒に食べモノ食べたり写真撮ったり、撮った写真を加工したり……等と考えながら僕は自販機に飲み物を買に行く。

どの飲み物を買おうか悩む。数種類の飲み物が並ぶ中、一つの飲みものに目が留まった。ブラックコーヒーである。そう言えば彼がよく飲んでいるのもこれだ。

『十六夜君はブラックコーヒーが好きだなんて、大人ですね！』

『ええ、まあこの深みがたまりません……大人ですから……』

どやあと言う顔をしながらコーヒを一口。そして、複雑そうな顔。絶対あんまり味分かってないでしょ？

僕はあんまり飲まないけど……買ってみようかな……

ボタンを押してそれを買って教室に戻る。もう少しで授業が始まるからだ。一人歩いて曲がり角前で話し声が聞こえてきた。どっかで聞いたことがある声と、明らかに聞き覚えのある声。

「おい、なんだ……一年坊主……」

「そ、そうだ、俺らに何の用だ」

どっかで聞いたことのある声の二人は明らかに仰天の声。当然だ。相手は校内、いや、今や町外まで噂が轟いていると言われているのだから。

『死神』、『アジフライ』、『令和のブラックバス』etc。既に、二つ名が三ヶ々に登るらしい。

頭だけ、覗くように見るとやはり彼が居た。あの二人は……ああ、居たなクラスに。話したことないから良く分からないけどいつも、ゲラゲラ笑って授業中もうるさくてよく先生に注意されている。そして、詰まらないギャグでいつも教室を凍らせる二人。

なぜにこの組み合わせ？　もしかして知り合いとか？　いや、そんな感じでもない。取りあえず話を聞いてみる。

「次の時間、真面目に文化祭の話し合いに参加してください」

「な、なんだよ、それだけか？」

「そ、それならまあ」

ええ？　彼って一年生だよ？　なんで、そんなこと君が注意するの？　二人組は直ぐにでもここから離れたいのか彼の頼みを承諾す

る。

「あと、萌黄先輩の悪口とか絶対言わないでください。もし言ったら……」

「わかった、わかった……」

「おい、もう行こうぜ」

何故に僕の名前を……そう思っていると彼と同じクラスの男子生徒がひよつこり後ろから現れた。

「いやいやお前上級生によく言えたな」

「正直少し怖かった……」

「そのわりにはかなりいい感じだった気がするが」

「心の中では学園の強キャラを演じているからな。なんとか強者感が出せた。相手も俺の迫力にビビったようだな」

「いや、他の意味でビビっていたと思うが。それより、なんで一年のお前が二年の事に首突っ込んだんだ？」

あ、思い出した。彼の隣に居る男子生徒って前に僕が食堂で注意した生徒だ。そして、その生徒の疑問は僕も気になる。それと彼って言葉もあんな風に崩すんだ。以外だ。

「あの二人はギャグはつまらなくて五月蠅いと有名だからな。火蓮先輩と萌黄先輩とアオイ先輩のクラスで好き勝手やられるのは非常に不本意だと思っただけだ」

「ふーん。それにしても萌黄先輩の悪口言うなって……お前、まさか萌黄先輩にも手を出すつもりか？」

「そんなんじゃない。あの二人はそう言った事を言いそうだから釘を刺しただけだ」

「でも、あの先輩、背高くて強そうだし、そういうの気にする感じじゃないと思うけどな」

……強そうか。背高くて……まあ、強くあろうとはしてるけど……さ。何か複雑でメンドクサイ僕の性格。背であんまり僕の尺度を測らないで欲しい……と思った。

「あの人は凄く気にするんだよ。あの人は強いけど、弱いところもある。でも、やっぱり強い人でカッコよくて可愛い人なんだ」

「え？ 何お前？ 萌黄先輩も好きなの？」

「それはちよつと難しいな。ただ、あの人には憧れとか色々抱いてるものがあるから……萌黄先輩は自分じゃなくて誰かを優先する人で結構ポーカーフエイスもうまいから一人で色々貯め込んで周りに気遣いをさせない真の意味で優しい人なんだよ。そんな人嫌いになる要素があるか？」

……

「あの人は泣いたり、悲しんだりせず、笑って喜んで欲しい。もし、何かを背負うつもりなら一緒に背負いたいだけだ」

……

「お前、いつから週刊少年系主人公になったんだ……」

「なったつもりは無いけどな」



はあ、眠い……昨日はあまり眠れなかった。急に動画サイトで期間限定のアニメ公開という奇行を運営側がやってきたからだ。一度見たことがあったけれども期間限定公開と言われるとついつい見てしまった。

お腹がそこそこ満たされて、寝不足。まさに狂気。狂おしい程に眠い。次の時間は文化祭の話し合いらしいから通常授業に比べたら耐

えられるかしら？

文化祭と言えばラノベや漫画ではビックイイベント。ここで恋が成就したり、進展したり、はたまた新たな恋が生まれたり目まぐるしい。まあ、二次元を現実を重ねても意味ないが一般的にも文化祭は高校生にとって大きなイベントである事には変わりない。もしかしたら、私と十六夜の仲がかなり良い具合になるかもしれない。よし、目を開いて頑張ろう。

と考えていると教室のドアが開く。片手にブラックコーヒーを持った萌黄。彼女が授業ギリギリとは珍しい。

「萌黄、顔真つ赤だけど大丈夫？」

「え、あ、うん……だ、大丈夫……」

「そう……」

風邪でも引いたのかな？ 彼女の顔は未だかつてない程に何かを抱いてしまったように見えた。彼女はブラックコーヒーを一口飲んだ。

「苦い……」

何があったのよ……。ぼおっつとして、心ここにあらずの彼女を見ながら私は謎の予兆を感じ取った。

九十九話 卵は何個あってもいい

私の名前は野口夏子。普通の女子高生だ。特に変わった特徴はない。そんな私のクラスでは現在文化祭の出し物を何にするか決めている最中だ。文化祭ではクラス事にお店を一つ出店させるなど出し物を一つ決めないといけないらしい。

前には一人の男子生徒と女子生徒が挙手性でまずはやりたい出店や劇のアイデアを出した後に全員に多数決を採って文化祭の内容を決めると言う方針らしい。

「メイド喫茶だろう!」

「金親君とマグロ君限定の執事喫茶!!」

「漫画でよくあるロミジュいくか?」

男子と女子がそれぞれ意見を出し合い、多数決になって行くのだが、結局アイデアの中間をとって、メイド喫茶+執事喫茶と言う事になった。私としては少し恥ずかしい……から遠慮したかったんだけど……

「ねえ、銀堂さん。メイド喫茶どう思う?」

「少し恥ずかしいですが文化祭ですし、頑張ります」

「文化祭……だから頑張るか……私も想い出にするために頑張ろ」

「是非メイド服姿と一緒に写真撮りましょう」

「そうだね。その後に肌が白くなる加工もしようね」

「夏子さんは必要ないと思いますが……」

「一応、だよ」

その後は店の内装や出費の話などが議題に上がり、それぞれ話し合いながらスムーズな流れで会議は終了。先生が教室から出て行き、私は携帯をいじる。

「夏子さん何を見ているんですか?」

「ん? 魔装少女の記事」

「あつ、そそそそそそ、そうですね!？」

「急にどうしたの?」

「い、いえ、別に……えつと、夏子さん的には誰が良いと思います?」

「魔装少女の中で」

「うーん、この黒い子なんていいんじゃないかな? 一人だけ男だけ

ど……こう、一生懸命って感じが」

「同感です! いいですよ。この人!」

慌てたり、喜んだり忙しい。どうしたんだろうか……あ、そうだ。

彼女に渡したいものがあつたんだ。

「そう言えば、銀堂さんにこれあげる」

私は彼女に5枚のとあるケーキ屋さんのケーキ無料券を渡す。こ

このケーキ屋さんには最近女子高生に人気でSNSで写真拡散、今一番

注目されているケーキ屋さんである。彼女は知っていたよう目で

丸くした

「いいんですか!？」

「うん、懸賞で当てただけ。最近私はダイエット中だし。上手く

使って」

「じゅるり……い、いただきます!」

美味しそうにゴクリとしている彼女。あ、そう言えば彼女は体重気

にしていたんだっけ……まあ、いいや。

喜びでぼわぼわしている彼女を見ながら私は深くは考えないよう

した。



私達のクラスでは現在、文化祭の出し物を決めている。何か、いつもよりスムーズに物事が進む気がする。二年Aクラスでは一部の男子がふざけたりするんだけど。それに後ろの席の萌黄が……

「……ぽけえー」

ずっと、心ここにあらずなんだけど……どうしたのよ……会議は淡々と続いて行き、私達のクラスでは演劇のシンデレラにするらし

い。

「ちよいー、萌黄どつたの？」

萌黄の後ろの席の冬美が話しかける。彼女も萌黄も変化に気づいていたようだ。

「あ、え？」

「ずつと、ぼけつとしてるから気になったんだけど」

「ご、ごめん」

「別に謝らなくてもいいけどさ。演劇の配役どうするの？」

シンデレラの配役はメイドとか一般兵、悪役令嬢、王子、e t c。様々あるが基本的にやりたい役に拳手被ったらじゃんけんである。

前の委員長がクラスに意見を取る。

「それじゃあ、シンデレラ役、やりたい人ー」

うーん。特にやりたい役は無いけど……シンデレラは主役だし、大変そうだからなあ。私はパスかなと思っていると後ろから勢いよく手が上がる。

「……」

アオイが手をビシツと挙げた。……彼女は転校生なので端っこの一番後ろ。私の席とは対極である。しかし、ここまで空を切る音が聞こえるなんて。

彼女が手を挙げた事で周りは驚いた。アオイは大人しいイメージが定着していたのでまさか主役をしたいとは誰も思わなかったのだろう。私はそこまで驚くことは無かった。彼女はシンデレラが好きと言っていたので配役として所望すると思っていたからだ。

「ええつと、じゃあ、アオイさんで……それじゃあ、今度は王子役を……」

アオイは私と萌黄、冬美くらいしか話す人がまだいない。だからこそ、王子役は中々ためらわれるのだろう。アオイが心細い感じになら

ない様に私が立候補しようかな……手を上げる寸前で……今度は後ろから手が上がった。

「えっと、僕がやるよ」

先ほどまで魂が何処かにいつていた萌黄が手を挙げていた。萌黄も私と同じ気持ちだったのだろう。相変わらざるの優しさである。

その後、私の配役も決まり、私は王子のメイド役になった。



僕達は帰りにコハクちゃんに呼ばれて集められた。内容は皆でケーキを食べに行こうと言うものだった。五人でその店に向かうと……今、流行りで更に言うならとんでもないイケてる女子の雰囲気か漂っている。店に入ると周りからの視線が凄……コハクちゃんと火蓮ちゃんとアオイちゃんが可愛いからだろうか？ いや、普通に彼一人だけ男だからこの組み合わせは珍しいのかもしれない。

店内に入って席に着く……僕は彼の斜め前に座る。周りには・リア充・陽キャ・スクールカーストスーパークラス。携帯で写真を撮っている女子高生も多い。

五人で座ったのだが……彼とアオイちゃんと火蓮ちゃんが……緊張しているのか顔が硬い。一方、コハクちゃんはワクワク顔である。「皆さん、どうしたんですか？ 顔が硬いように見えるのですが……」

彼女も三人の表情が硬い事に気づいたようだ。

「此処の奴らと目合わせらんない……スクールカースト、リア充、陽キャ。うう、頭が……あーしと全然違う……」

「だ、大丈夫ですか？」

アオイちゃんは俯き手で顔を隠す。

「何か……ムズムズすんのよ。私は基本的にインドア派だから……家でパソコンとかと向き合ってアニメ見て、外に出る時なんて漫画とか

ラノベ買いに行くときだから……」

「ムズムズですか？」

「そうよ。例えるなら漫画とかラノベを大人買いした時に間違っただけ巻を二つ買っちゃた時くらいムズムズして、こう、その……落ち着かない」

火蓮ちゃんもこういった場所には慣れていないらしい。

「俺は普通に場違い感が凄いですね……ただ、それだけです」

「十六夜君……皆さん、申し訳ありません……私が我儘を言っただけです……」

彼女の言葉に三人ともハツとする。特に彼は彼女の悲しげな声を聴くと決意の表情に変わり彼はそのまま彼女と顔を合わせた。

「こちらこそ気を遣わせてしまってすいません。皆で美味しいケーキを食べたいと言うコハクさんの気持ちは凄く嬉しかったです！場違い感なんて多少の勘違いでした!! 火蓮先輩もムズムズしてるだけで嫌がつてるわけじゃないですし、アオイ先輩もちよつと緊張してるだけで本当は皆でここに来れるのもワクワクしてるはずですよ!!

萌黄先輩も楽しくてたまらないはずですよ!! ね!? そうですよね!! だから、皆でありがとうって言いましょう!! 誘ってくれてありがとうって!!」

彼は彼女の為なら自分の気持ちを強引に変えられる。勿論、嘘は言っていないが途端に自分の利己的感情を排除して、相手のことを自分中心のように考えて喜ぶことができる。強い。真の意味で、彼は強い。そして、簡単に分かる。そこに愛があると。何者にも負けない尊くて輝かしくて暖かな愛が。

それが彼女にとって希望。絶対的な光。

「そうね……ムズムズするだけだから全然平気よ。そもそも、間違っただけ巻を二つ買っても保存用にするって手もあるしね」

「あーしも実を言うとなんか楽しい。けど……リア充が周りにいると……でもあーし、ワクワクすっから問題ない」

「僕も楽しいから。ノープロブレム」

彼が起こした風で一気に流れが変わった。彼女も愛を感じ取って微笑みを抑えられずに笑う。

「そうですか？ えへへ、それならよかったです。ありがとうございます」

と若干感動的な展開になっていると、ケーキが到着する。コハクちゃんはモンブラン、火蓮ちゃんがショートケーキ、アオイちゃんが抹茶ロールケーキ、僕はチーズケーキ、彼はチョコレートケーキ。ここちよい雰囲気のまま、皆がケーキを食べ始める。

「美味しいですね！」

「確かに、美味しいわね」

「美味……」

「チーズケーキのコクが凄いね」

それぞれ食べ進めていく。まさに至福の時。特にコハクちゃんの表情が一番、幸せそうに見えた。

ほんのわずかに食べた後に彼女はちよつとあざとくなり、彼と目を合わせた。

「十六夜君のチョコケーキ美味しそうだなあ……」

「食べますか？」

「え？ いいんですか？」

「いいですよ」

「では、あーん」

彼女は口を開いた。あざとい……そして可愛い。私達だけでなく、周りのお客さんたちも可愛い、可愛いと口をそろえている。

「ど、どうぞ」

「あーん♪ ふふ、甘くて美味しいです。では、私もあーん」

「あ、ありがとうございます」

甘い。互いにあーんだと……

「すいません。ブラックコーヒー四つ」

「こっちは八つ」

「こっちは十六頂戴」

どんどん倍になって行く、ブラックコーヒーの注文。しかし、ここで怒りに目覚めた火蓮ちゃん。凜とした強い眼差しを恥ずかしがりながらも彼に向ける。

「なあ!? わ、私もショートケーキのイチゴあげるわよ!!」

「そんな!? メインの上に乗っているイチゴを!!?!」

「いいわよ! ほら、あーん!!」

「ありがとうございます。あーん。じゃあ、俺はチョコレートケーキの上に乗っている、この訳分らないけどオシャレな音符みたいなチョコを!」

「ぎ、ギブアンドテイクなんだから、と、当然よね! あ、あーん。ん、あ、甘いわね」

強い言葉で喜びを素直に表さない彼女だが口元が不安定。表情筋を彼女自身は律しようとするがびくびくと喜びのあまり吊り上がってしまう。

「ブラックコーヒー豆単体で注文いいですか?」

「ブラックコーヒー水とかミルクで割らずに、貰えます?」

「ブラックコーヒー豆をストレートで」

周りは苦みを求めたくて仕方ないようだ。そして、火蓮ちゃんが自身のケーキのメインであるイチゴを上げた事でコハクちゃんも闘争心に火が付く。コハクちゃんはモンブランの栗の部分を上げていないからだ。

「十六夜君。私のクリを食べてください!」

何か卑猥……いや、そう感じてしまう僕が変態なだけだ。

「さあ、どうぞ私のクリを味わってください！」

「しかし、俺にはもう対価が……」

「いいんです！ どうぞ！」

「わ、私の方のクリームたっぷりな所も上げるわよ！」

「……」

バチバチと二人のしのぎを削るあーん合戦。二人は今現在、彼とライバルしか見えていない。仲が悪そうにも見えるがそうでないことは分かっている。そんな二人をアオイちゃんは羨ましそうに見ていた。彼女は一口分、フオークに乗せて……一呼吸おいて、自分で食べた。

そのまま、皆で楽しみながら食べた。この時、僕とアオイちゃんがギリギリまでケーキを一口分残しながら食べていた。だけど、それ以上は何もしなかった。

………何かしたかったな。と僅かに後悔が生まれた。彼と真つすぐ顔を合わせられる気がしない。ケーキを食べてる時も目を絶対に合わせないようにしようとした。合つてもさり気なく逸らしたり、そうじゃないと温度が急上昇するから。

そこまで考えて、自分らしくもない、思考を取っ払った。



ケーキを食べ終えた後、あーし達は帰る。しかし、今日はあーしは買い物係なのでこの後、スーパーに行かないといけない。

「え？ アオイちゃん一人で良いの？」

「うん。買い物くらい一人で行ける」

「私ついて行くわよ？ 荷物一人じゃ大変でしょ？」

「大丈夫」

「私がついて行きましたよか？」

「うんうん。ダイジョブ。三人は家事があるでしょ？」

三人が親切にしてくれるが今日はあーしが食事当番であり、さらに一人で行けるので問題は無い。それに皆もそれぞれのすべき家事がある。

「あ、でもそう言えば今日は卵がお買い得だった……一パック九十八円、おひとり様二パックまで。ごめん、やっぱり誰か来て欲しい」

「俺、今日何もすることが無いので荷物持ち行きます！」

「……いいの？」

「勿論です」

「じゃあ、お願いしようかな……」

「はい！」

というわけで三人は先に帰り、あーしは彼とスーパーに向かった。彼がカートを押し、あーしがその横を歩きながら野菜を最初は選ぶ。野菜のヘタとか色とかしつかりと見て選んでいく。

「好きな野菜ってある？」

「そうですね……基本的にどれも好きです」

「そう……」

その後は、お肉コーナー。特に意味はないがもも肉を多めに買って、ひき肉も買う。

「から揚げ……今度作ろっか……？」

「是非、お願いします」

「うん……」

カート内のカゴに卵を入れて特に面白い事も言えずに、スラスラと買い物が進んでいく。劇的な何かも起こらず、ただ買い物が進む。それだけで不思議と気分が良い。だけど、物足りない。

——二人みたいな、何かが欲しい

買い物が終わって、店内を出る。掴みとれなかった何かを掴みとりたくてあーしは思わず口に出した。

「ねえ、バッティングセンター行こ。体動かしたいから」

「え、でも……」

「大丈夫、まだ明るい。でも、嫌なら……無理しなくても……」

「い、行きましよう!!」

「うん……」

家に帰らないといけない。だけど、少し、悪いことをしたくなった。バッティングセンターにつくとあーしが早速コインを入れてボールを打つ。

「頑張ってください」

「うん」

120キロをしっかりとミーティングしてセンター前ヒット位のライナー性の打球を放つ。

「す、すげえ」

「これくらいまだ軽い……」

最高で140打った事があるから少し物足りない。最初は肩慣らしだ。と思うが、褒められるとほわほわする。

フルスイングで金属音がセンター内に響く。何かを掴みたくてここにいるが、あーしがボールを打つことでそれが手に入るのか疑問。そもそも、欲しいものが分からない。

「そう言えば、シンデレラ役になったんですよね?」

「そう、んっ」

ボールを打ちながら会話を続ける。カキーンと球が飛んでいく。

「じゃあ……滅茶苦茶練習しましょうね!! 俺も手伝います! 絶対に、大成功にしましょう!!」

「うん……」

あーしより気合が入っているような気がする。勿論、あーしも気合が入っている。皆あーしがシンデレラ役をやるうなんて思わなかっただろう。だけど、あーしはやりたかった。やりたい理由はたった一つだけ。

お姫様になってみたかったと言う理由。本当の王子様なんていないと思うけど、本当のお姫様になんてなれない事も分かっているけど。それでもなってみたかった。役という肩書でも、言い方が悪いかもしれないけど偽物でも。

今、考える事じゃなかった。まあ、今何を考えればいいのか自身でも良く分かっていないけど……

「きゃー、全然打てない」

「しゃあないな、俺が教えてやるよ」

隣からの男女の声の方向に僅かに目を向ける。男の人と女の人が一緒にバットを持ち、ボールを打ってイチヤイチャしている。二人して同じバッターボックスに入るのは危ないと思うけど……

「きゃー当たった!」

「だろ?」

……

——あーしのバットが初めて空を切った。

「あ……」

無意識である。多分だけど、次のボールもカラぶってしまおう。更に言うならその後も、その後もからぶってしまいかもしれない。しかし、そこで一回分の全球が終了した。

メットを外して外に出る。

「滅茶苦茶凄いですね!」

「……まあ、普通。アンタもやったら?」

「そうですね」

かなり、消化不良だが一旦置いておこう。彼に付き合っただけで貰っているから、あーしだけ楽しむのはダメだ。彼はあーしが120を選んだからか、140を選んだ。

「ふふ、これくらい魔力を遣わずとも打ってやるさ」

メットを被りバットを掲げ謎の自信からホームラン予告。しかし……バットが空を切る

「まさか……バットに穴が……」

「開いてない」

その後、一球もバットに当てる事が出来ずに戻ってくる。

「難しいですね」

「何か、アンタはフォームが悪い」

「そうですね?」

「もつと、こう、脇を閉めて、あと、いちいち足を大きくあげすぎ、タイミングが全然あってない。寧ろ、上げないくらいでも良い。バット後ろに引き過ぎ、取りあえず素直にコンパクトに当てる感じにした方が当たる」

「あ、ちよつと待ってください。スマホのメモ機能に書きますから」

彼はスマホを出そうとするがこういうのは……体で覚えた方が良い。多分、絶対。あーしは彼の後ろに回って彼の手を掴みコンパクトなスイングを直接教えることにした。

「え、あええええ!!」

「体で覚えさせる」

「卑猥!」

「何が?」

「あ、いや、なんでもないです」

「もつと、リラックスして、カチカチになっている」

「いえ、その、当たってるからその……リラックスはできません」

「何が?」

「……胸が……」

「どうでもいい」

「いや、よくないですよ!」

「今は体で覚える方が大事」

「明らかに、貴方の体の方が大事ですよ!」

彼が色々言うので結局口頭の指示にした。そう言えば母さんが女性の肌をむやみに見せたり、堪能させたりしちゃいけないって言った……。前者は分かるが後者の堪能って何だろうって思ってたけど……こういうこと? 良く分かんない。

その後は彼のフォーム改善で暗くなって来たので家に帰ることにした。帰路の中であーしは今日の謝罪をする。

「その、ごめん……熱くなり過ぎた。あーしが無理言ったのに結局、偉そうなこと言っちゃった……」

「いえ、楽しかったですし、全然偉そうな感じなんてなかったですよ。大丈夫です」

「そう、ありがと……また、その、一緒にどう?」

「そうですね。行きましょう!」

「うん……」

何もつかめなかった。けど、小さなその何かの欠片は掴めた気がした。

百話 それが運命

文化祭は、魔装少女にとってかなりつらいイベントになるものである。始まる前に火蓮の両親が離婚し、萌黄が男子二人から悪口を言われ、始まった後もアオイが文化祭である失敗をする。

火蓮と萌黄に関しては既に解決してはいるが、問題はアオイ。彼女はシンデレラ役を自ら志願する。それは彼女自身がシンデレラ、お姫様になってみたいと言う願望から。そして、少し内気で視線が苦手という特質を克服したいから。彼女のクラスの演劇は体育館のステージを使い行われる。会場には観客が沢山。

数多の視線、彼女が今まで晒された事のない視線の数、会場の独特な空気と主役というプレッシャー。特に何百という視線に緊張……セリフが吹き飛んで劇が……

彼女は只管に泣いた。自分の不甲斐なさ。クラスへの申し訳なさ。自分のお姫様になりたいと言う感情と短所を克服したいという感情を優先させて劇を台無しにしてしまった。ポタポタと落ちる涙を止めることが出来ず、彼女の文化祭は幕を閉じた。その後、萌黄と火蓮、コハクにも慰められる。

『あーし、バカだッ、自分を変えるためにこの劇利用してつ……お姫様になりたいって馬鹿な理由で……全部、滅茶苦茶にしちゃった、ごめんなさいっ、ごめんなさいッ』

人は失敗もする。上手くいかない時もある。作者の伝えたい内容がヒシヒシと伝わってきた。彼女が泣きじやくる姿も悲壮に溢れていた。

アオイが転校して少し経ち、皆ノ色高校に転校してきて、少し友達ができ仲間ができての文化祭。火蓮の両親が離婚して落ち込み、萌黄が傷つき、アオイが無力を噛みしめる。

当然だがこの話、文化祭編はかなりネットもあれた。勿論『i f ストーリー』ほどではないが。しかし、それでも立ち上がる彼女達に読者は希望を覚えただろう。俺だってその一人だ。

だけど、変えられるのなら変えたい。ただ、そう思った。



まだ先だが文化祭でシンデレラを演劇として行うことになった僕たちは、今日から早速練習しようと言う話になった。彼が今すぐにも始めるべきだともう、鼻息荒くしてグイグイ来たからだ。

ソファに皆揃って座り、セリフの暗記からまずは始める。アオイちゃんは主役と言う事もあり、セリフが多いだろうなあ。でも、彼女ならすぐにも覚えられるだろう。

火蓮ちゃんも暗記力が物凄い高いから一分二分で覚えられるだろうなあ。もしかしたら、数秒かも。火蓮ちゃんはパラパラと台本をめぐりながら早口でブツブツ独り言を呟いて集中力を高めている。

「おかえりなさいませご主人様今日もお疲れ様です本日はこの後王族主催のパーティーがありますのですぐに着替えて……」

速い……一度も噛まずに早口言葉のように全てのセリフを発していく。

「チラチラ、チラチラ」

その横で台本が気になり覗くようにチラチラ見ているコハクちゃん。ざっと目を通して火蓮ちゃんは台本を閉じた。もう、覚えたようだ。もちろん、僕もすでに覚えている。

「台本見せてもらっていいですか？」

「いいわよ。ほい」

火蓮ちゃんがコハクちゃんに台本を手渡す。毎度思うけど、中が二人は良い。この間の休みも……

『嗚呼あああああ!! 私のケーキが無い!!』

とある休日のおやつ時間。コハクちゃんが冷蔵庫を開けると悲鳴を上げた。それを聞いてダイニングにテーブルで火蓮ちゃんが顔を読んでいたマンガ本で隠す。その時、リビングには僕たちも居た。コ

ハクちゃんも火蓮ちゃんに向かって歩いていく。

「私のケーキがない……誰ですか!? って分かってますけど!」

彼女はケーキを楽しみに取っていたらしく、それがなくて子供のようにならなかつた。勿論、僕やアオイちゃん、彼ではない。と彼女も分かっていたように真つ先に火蓮ちゃんの所に向かった。

「火蓮先輩、私がケーキを買ってきたのはいつですか?」

「二日前ね……」

「その通りです。因みに私が買ってきたケーキは数個限定でした。数はいくつか分かりますか?」

「二つね……」

「ええ、そうです。では、最後にもう一つ……私のショートケーキをどこにやったんですか?」

「ふう……コハクみたいな勘のいいJKは嫌いよ」

その言葉にコハクちゃんにブチ切れて彼女に顔を近づける。

「なんで、貴方はポンポン人のものを食べるんですか!? っていうか、二つも食べたんですか!」

「ああ、それは……その、メルが最初に食べてたのよ、それで美味しそうだから私も食べて……後でコハクの買ってきた奴だつて気付いたのよ……」

「なんで、その時に言わないんですか!」

「それは、怒られると思つて……」

「子供か!」

まあ、その後、火蓮ちゃんがちゃんとケーキを買つてきて謝罪をしたから事なきを言えた。メルちゃんもかなり申し訳なきように謝つてたな。

コハクちゃんも怒つてはいたけどケーキとプリンを買つてきてもらえるところかなりあっさり機嫌が良くなり一緒にティータイムもしてたつて。

「ごめん……」

「もういいですよ。一緒におやつ食べましょう」

僕はアオイちゃんテレビゲームで盛り上がり上がっていたからあとで食べることにして、ソファの方に座ってゲームしてたんだけど……

隣からの声は聞こえてたんだ。

「このケーキ美味しいですう」

「確かに美味しいわね」

「このプリンもとっても美味しい」

「……ダイエツトは……なんでもないわ」

「火蓮先輩も食べますか？ このプリン」

「じゃあ、貰おうかしら」

隣から、仲のいい二人の声が聞こえていたのだが……

「ああ！　なんで、勝手に下のカラメルまでプリン貫通させるんですか!?!」

「え？　カラメルの部分が食べたかったから……それくらい別によくない？」

「いきなりスプーンで直貫通って、こっちは食べプラン立ててるのに！　不躰です！」

「不躰って……」

急に喧嘩したり。

「……ねえ、どうしたらそんなに大きくなんのよ」

「どうしたらって……さあ？　私のお母様も大きいですし……遺伝なのでしょうか？」

「遺伝か……ママ、素敵な女性だけ……」

「バストアップ方法とかネットに……」

「色々実はやってんのよ……」

「あ、そ、そうなんですか？」

「そうよ。結構ガチ目にやってんのよ」

「ひ、一人ではきついかもしれないね。私も一緒にやりましょうか？」

「これ以上、コハク大きくしてどうすんのよ」

火蓮ちゃんが胸の悩みを打ち明け、コハクちゃんがちよつと気を遣ったりしたり。

「私の方が好かれてます！」

「私よ！ デートも行っただから！ はい、これで百ポイント！」

「私はキスしました！ はい、二百ポイント！」

「ぐぬぬぬ」

急に喧嘩始まつたり、本当に忙しい。しかし、最後には二人は仲良し。この日は火蓮ちゃんが料理担当だったのだがコハクちゃんが手伝っていた。

「これ、この切り方で良いのよね？」

「そうです。とつても上手ですね」

「そ、そう？」

「最初に比べたらずっと上達してますよ」

これは、僕の勘だが二人はそろそろ二股を認めるんじゃないだろうか？ と思ってしまうほど、喧嘩もあるがそれ以上に二人の距離も近い気がする。女の子って急に仲良くなることがあるからなあ……

と考えると二年生組は全員セリフを覚えたようだ。というわけで早速練習が始まった。



魔法訓練室。最近是我的運動の為に主に利用していたが今回は先輩たちの文化祭の出し物である演劇の練習に使うようだ。内容はシ

ンデレラ。アオイ先輩がシンデレラ役。萌黄先輩が王子。火蓮先輩がメイド。彼女達は魔装を応用してこの時点で既に完璧な衣服を着ることが出来ている。十六夜君がメルが一晩で準備してくれたと言っていた。メルさんも凄いです、何事も全力の十六夜君……好きです

私も現時点ではまだ来ていないが火蓮先輩と同じメイドの格好をするので親近感を覚える。アオイ先輩はお姫様衣装にワクワクしている表情。萌黄先輩はくるくる回って自身の王子様衣装を観察。

さて、メイド服の火蓮先輩は今まで自分が着たことのない服装に少し、戸惑っているようだ。彼女は基本的にラフな格好を好んで着る傾向がある。シャツ一枚、短パン。

夏場はよくその格好で練乳の棒アイスを口にくわえたり、舌でぺろぺろしてエッチな感じになったりもする。毎回思うが火蓮先輩下着が派手だったり、急に色気が出たりと言う謎の特徴がある。それはさておき、

「メイド服ってこんな感じなのね……」

「超似合ってますよ！ 最高ですよ！」

「そ、そう？ ど、どこら辺が？」

「こう、強気な感じだけど、恥じらってる感じで……こう、ギャップで萌えがあつて可愛いくて。強気なツンデレメイドって需要が高すぎて供給が間に合わないって言うか」

「そ、そっかあ……えへへ、可愛いって言うてくれたあ……」

カチン……急にデレデレな彼女。いつもの強気な目がトロツと半熟卵の黄身のように溶けて、口角ももカルビと食べた時の幸福感のようにならなくなっている。

「あ、あのね、私、また、美容院に行こうと思つて……その、どんな感じの髪型が良いと思う？ あ、あくまで一般論として聞いているだけ

だからね！」

「そんなの全部良いに決まっていますよ。ただ、俺の我儘を言うなら今のままのツイントールでお願いします」

「そ、そうなんだ……一般論として、さ、参考にするわ」

「ありがとうございます！」

と言っているが彼女は絶対に長髪のツイントールだろう。私は最近、マンガとかを見るようにしているが普通の主人公だと何でそんなことを聞くんだとか、なんでもいいのか、好意に気づかずにはただ只管に惚けたり……etc。

いや、明らかに好意丸出しではと思ってしまうがラブコメ漫画にそれを言ってしまうと物語が成り立たなくなり、すぐさま、完結を迎えてしまう。だが、それでも流石に可哀そう、じれったいと感じることも多々ある。この間読んだ、『モブと令嬢』という学園ハーレムラブコメ漫画。

主人公は何の特徴もないモブのような人。ヒロインは同じクラスで銀髪で碧眼で超美人で過去に色々トラウマがある。序盤はヒロインはトラウマがあり、色々友達を突っぱねて一人で行動することが多い、誰もが遠ざける中でヒロインが帰り道で不良の毒牙にかかるうとしたところで颯爽と現れた主人公がヒロインを傷つきながらも助けるという何処かで見たような展開。

私個人の感想だが滅茶苦茶面白いと思った

このヒロインへの感情移入が物凄く出来たからだ。ヒロインはその後、主人公へ好意を持つのだが主人公が全く気付かない。可愛そうなくらい気付かない。読んでる私としては早くくっ付けと何度も思った。

歯がゆい心境で読み続けていたが、直ぐにくっつかなかったのはヒロインも悪い。なにが、『私はあの人の事が好きじゃない』、『何とも思っていない』だ!! どう考えても好きじゃないか!! メンドクサイ事この上ない

そんな風にもたもたしているから今度は主人公がツンデレヒロイ

ンを連れてくる。それでストーカーするとか、何だこのヒロインは？
メンドクサイ事この上ない

ツンデレヒロインに関しては令嬢ヒロインより、主人公に惚けられ
て本当に可哀そうだった……

まあ、そんな感じでラブコメ漫画とかだと主人公が気持ちに気づか
ない作品が多いのだ。しかし、そんな漫画と似たような展開になつて
も十六夜君は違う。しっかり察する。火蓮先輩もそれに関して言っ
ていた。

『十六夜は、私に変な事言ってもちゃんと気持ちを汲み取ってくれる
から、好きなのよ……』

私もそこには同感する。ちゃんと色々察する十六夜君は素敵であ
る

火蓮先輩が反対のことを言っても表の気持ちを考える。受け止め
られる。本当に好きだ、そう言う所は。

つまり、何が言いたいかというと……十六夜君は察せるのだから、
今すぐにでも私に可愛いと言って欲しいと言う事だ。

火蓮先輩だけ褒めないで欲しい。確かに私は今私服だ。見慣れて
いるかもしれない。でも、ちゃんと素敵とか可愛いとか、ハグしたい
とか、デートしたいとか、言って欲しい。じゃないと、つい、私はフ
グになってしまう。頬を膨らませてしまう。

だから、速く、もっと速く、私を褒めて……と頬を膨らませて、褒
め待ちの顔をして十六夜君にジーッと視線を向ける。その視線に
ハッと彼は気付いた。

「コハクさんも私服が可愛いですね」

「えへへ、ありがとうございますっ！」

私はチヨロくない、ただ、ちよつとメンドクサイ女の子なのかもしれない。それでも、私を好きでいてくれて側にいてくれて、いつも私に心を寄せてくれるこの人が好き。

火蓮先輩と視線が交差する。彼女は何も言わないが何を思っているかは直ぐに分かる。私も同じ気持ちだから

——絶対、私が一番

負けないし、引かない。互いに畏怖するほど、気持ちが強い。ここからキャットファイトか？

と思い、互いにシュツシュとシャドーボクシング開始する。

まあ、そんなことはなく時間も時間なので先輩たちは劇の練習を始めた。

百一話 ヒロインは突然に

あーし達が演劇の練習を始める。セリフは直ぐに覚えることができ順調なスタートを切れたように見えたが……

始めは普通にセリフを言い合って場の流れを掴む。クラスの人たちそれぞれに配役があるので全部は出来ないが出来る部分だけやっていく。やっていて気付いたが中々に難しい。

表情の変化が難しい。マジで一人だけ浮いている。どうにかして、笑ったり、気難しい顔をしたりしたかったのだが全くできず……そんな微妙な感じで今日の練習は終わった。まだ、時間はある、焦らずいこう、だが油断はしない。

皆が寝静まった後に一人でリビングの電気をつけて台本を読む。頭の中でイメージだ。

十二時になり、魔法が解けてしまう事に焦ったシンデレラ。ガラスの靴が舞踏会場で脱げしまい、しまったと言う顔……

を一応したつもりで鏡で自分の現在の顔を確認する。うん、無理。これはしようがない。今度は笑顔を試みよう。

無理やり、笑顔をするが……鏡を見ると不格好な自分の顔。笑顔って難しい。

そもそも笑顔と言うものが難しい。よく、写真で1+1は？ と聞かれるがそこで笑顔を出せる人をあーしは尊敬している。以前にクラスで集合写真を撮った事がある。一人だけ陰謀を企てる悪のカリスマのような表情であった。

笑顔、笑顔……夏祭りで大笑いしたっけ。彼と共に時間を過ごしたあの時。心の底から十年分は笑ったと思う位笑った。あの時の感じをやってみよう。しかし、思い出すと何故か、頬が赤くなり笑顔どころではなくなってしまった。

ダメだ、この記憶は使えない。何か、メツチャ恥ズイ。四苦八苦し

ながら自身で表情改善方法を考える。あーしの演技力は低い。火蓮や萌黄よりだいたい遅れている。どうにかしないといけない。ただ、これはあーしの問題だから皆を巻き込むのはナシだ。

一人でやろうと考えているとリビングのドアが開いた。そこには……

「もう、なんで一人でやろうとするのよ」

パジャマ姿でいつものように髪は縛っていない火蓮。同じようにコハクも萌黄も居た。

「えっと、迷惑かけちゃダメだと思って」

「そんなの気にしないでいいよ。僕たち友達でしょ？」

「そうですよ。先輩。私は出来る事が少ないと思いますが……色々手伝います！」

「ありがとう……」

嬉しい。こんな人たちが側に居てくれるって事が。最近、思う、あーしはどうしようもない未熟者だったと。友達ができない、ほしい、そう思っていたけどあーしは何もなかった。眼が怖いとかコミュニケーションが不足とかそういうのを言い訳にして全部から逃げていた。

眼が怖くても会話を上手く繋げられなくてもこうやって誰かが居てくれるんだ。自分の踏み出す勇気がずっと足りなかっただけだ。

彼との出会いで全部が変わった。だけど、この幸福も何もかもあーしは何一つ頑張っていない。流しそうめんのように流れて来たものをあーしは子供のようによくって喜んでるだけ。彼から接待されるだけ。これではダメだ。

もつと、強くなりたい。劇の本番は、絶対成功させたい。真の意味であーしは成長したい。頑張ろう

「皆、ありがとう」

「まあ、これくらいね。でも、私達に言うよりあっちでこっそり見てる人に言った方が良いわよ」

彼女は指でドアの方角を指さす。ドアが若干開いていて、その隙間から誰かがこっそりとこちらを覗いていた。

「十六夜君がアオイ先輩が困ってるだろうから、手伝ってあげて欲しいと」

「なるほど……」

彼は暖かく私たちを見守っていた。お礼を言うためにドアを開ける。パジャマ姿の彼がそこにいた。

「ありがとう……」

「支えになればよかったです！」

「そう……」

「じゃあ、俺は扉越しに見守っていますから。続きをどうぞ！」

「見守ってくれるの？」

「勿論ですとも」

「嬉しい」

「あ、そ、そうすか？」

「うん。でも、眠くないの？」

「お気になさらず。全く眠くないです」

その日はかなり夜まで暖かい視線を受けながら演技に没頭した。まあ、直ぐに上手くは行かなくて皆には申し訳ないがやり続ける。

次の日も朝早く起きて演技の練習を始める。昨日遅くまで付き合ってた貰った皆にはこれ以上の負担はかけられない。

一人、再びリビング。白湯を飲みながら表情筋を動かしていく。僅かに眠気が残るがそれを振り払って目をパツチリ開ける。

自分でシンデレラがやりたいと選んだ。いろんな理由があるが責任という大きなものもある。お姫様になりたい、自分を成長させるため、その為に選んだシンデレラという役にある責任。背中にどしりと大きな何かが乗る。重い、とんでもなく重い。

でも、頑張らないといけない。これが成長に必要な、責任。休む暇なんて無い。気合を注入して試しに笑顔。何度も口角を上げる。頑張らないと、何度でも挑戦。

「一人で悩むことないですよ！」

いきなりリビングのドアが開く。キキーツと車が急ブレーキを踏んで止まるように彼が現れた。こんな早朝に、しかも彼も昨日は遅くまで起きていたはずで睡眠時間は大分少ないはず。彼は右目に右手を添えて若干ポージングをしていた。

「……」

「？ あ、一人で悩むことないですよ！」

いきなり、来たのであーしは思わず何と言っていないか分からず黙りこくってしまった。それを聞こえていないと勘違いしたのかも一度言葉を発する。ちよつと可愛い……

なんて思ったりする。それは置いておいて彼は悩むと言ったがあーしは悩んでいない。

「悩んでないよ。やることも目標もある、それにあとは向かうだけ」

「か、かつけえ……」

「別に、普通だけど」

思わず髪の毛を触ってそつと目を逸らす。彼は目をキラキラさせて本心から思っているのだと分かる。

「これから演劇の練習なんですよね？」

「まあ、イメージだけど……そう」

「俺、手伝っていいですか？」

「悪いよ。昨日も遅くまで見守って……」

「そこら辺は大丈夫です。俺の体って、1000年前の魔王から転生

したので、魔力で出来た転生体なんです！ だから睡眠を必要としない体なのです！」

「え!? ホント!?!」

それはビックリ。何を言っているか分からず、人体の構造とか機能とか考えるとあり得ないと思うが……彼ならもしや……

「すいません。嘘です……」

「コラ」

こつんと軽めの拳でげんこつあたつく。年上先輩をからかうとは何事か?、である。

「つ、つい、嘘をついしてしまいました。でも、お願いです！ 手伝わせてくださいー!」

「なぜ、アンタがそんなに頼む……まあ、そこまで言うならお願いしてもいい?」

「はい!!」

彼が手伝ってくれると言うのでお願いすることにした。

「ああ、貴方があの時の美しい姫なのですね!」

「つ……えつと、セリフ忘れた……ごめん……」

「じゃあ、もう一回行きましょう!」

何度も何度もチャレンジ。なぜか、ロマンチックなセリフを言われるとセリフが飛んでしまう。だが、彼は一切面倒くさいような雰囲気も出さず、真摯に何度も付き合ってくれた。どくどくと……いや、ドキドキ、いや、バクバク、うーん、どつくん、どつくんと心臓が高鳴る。

何故か前より強く、血流が良くなりこんなことに付き合わせて申し訳ないと言う感情に支配されないといけないのに、幸福感が溢れてくる。このまま、このまま、時間が止まってしまえばいいと感じる。

「よし、これで取りあえず劇の内容は5周しましたね!」

「うん、ありがと……」

彼は私のシンデレラ役以外を全て演じてくれた。彼も疲れている

だろう。ここら辺で休憩を……

「じゃあ、あと5周いきましようか！」

「え？」

「継続は力なりと昔から言いますからね。シンデレラがもう息を吐くように出来れば絶対に本番で緊張せず大成功を収められるはずですよ！」

「確かに……」

「さらに、今後、本番まで百人一首かるたのように、上の句がでたら下の句。俺が生活中の至る所でシンデレラの前のセリフを言います！」

それにいち早く答えると言う事もやりましよう！」

「う、うん。心強い。で、でも」

「気にしないでくださいね！ さあ、俺達のシンデレラ残り5周をはじめましよう！」

速い。まさに閃光のような一手。こちらが申し訳ないと言う感情すら置き去りにして彼は台本を手にとって再び、悪役令嬢を演じ始めた。そして、5周が終わりこれで10周をしたことになる。

「じゃあ、15周目に行けるまで頑張りましよう。でも、ちよつと息抜きした方がいいかもしれませんね。反復は大事ですがだからと言って馬鹿みたいになるのもダメ。人間の集中力は限られていますし、ただやるより意識を持ってやる方が絶対にためになる……ちよつと、休みましよう」

「うん。じゃあ、白湯持ってくる」

彼の分も白湯を作りソファの前のテーブルに持っていく。それをテーブルに置きソファに座る。

「白湯体にいいから飲んで」

「はい。いただきます」

熱々なのでふーふーしながら少しづつ飲んでいく。あれだけ、練習をしたからもうすぐコハク辺りが起きてくるはず。火蓮は朝が弱い

から暫く起きないはず。火蓮はかなり寝坊助で寝起きはかなりボケボケ。

この間も……

『火蓮、朝、起きて』

『ん、？ ママ？ 抱っこして……』

と言つて私に抱き着いてきた。いつも強気な感じだが実は甘えん坊なのかもしれない。その後、気づいて顔を真っ赤にしながら誰にも言わないでと何度も頼まれた。火蓮とは毎日教室でも一緒。話すのも楽しいし、ゲームを一緒にしても楽しい。ごくまれに何を言っているのか分からないときもあるが楽しい物は楽しい。

『暴力系ツンデレヒロインは嫌われる可能性があるから気を付けないと……』

どういう意味か見当もつかないがきつと彼女にとっては大事な事だろう。今分らなくてもいつかきつと理解して見せる、彼女は大事な友達、今後彼女の色々な事を知りたい。

白湯を飲みながらそんなことをわずかに考えたり、彼と話したりする。彼と一緒に居ると重い責任とかを感じない。あーしを感じないといけない物を彼と一緒に背負ってくれているから。

それを申し訳ないと言うと彼はそんなことは無いと言う。自分がやりたいから、そうしたいから、そう言つて一緒に歩いてくれる。あーしは成長できているのか、彼ばかりに負担をかけてないかと強く感じてしまう。

「あのさ、あーしは成長してるかな？ アンタばかりに負担をかけて……なんか……」

「俺だつてご飯作ってもらったりして、負担かけてますよ。お互い様です。成長に関してはすいません、俺にも何と云つていいか……ただ、こうやって頑張ったり、悩んだりすることがこう、何と言うか、経験値と言うか養分と言うか、アオイ先輩のものになっていると思えます！」

「そうかな……」

「そうですね！ でも、頑張っても全部報われるわけじゃないとも思います。でも無駄じゃないと思います！ あと、責任とか一人で抱え込まないでくださいね。えー、人と人が支え合って人と言う字になるわけありますから……互いに支え合って、迷惑をかけあつていきましようー！」

「今、良いこと言つたつて思つたでしょ？」

「あ、バレましたか」

「しかも、ちよつと古い言い回しだね」

「ええ、まあ……」

「でも、ありがと。凄く、響いた……」

この時、顔には出さなかつたがあーしの胸は異常なほどに高鳴つていた。もう、後戻りはできないほどに……



高鳴る胸をなんとか制御しながら彼と会話をする。

「そう言えば、貸したゲームどうですか？」

「面白い。ありがと。貸してくれて」

彼が少し古いが携帯用のゲーム機を貸してくれたのだ。それでウルトラモンスター、通称ウルモンをやっている。以前もやっていたのだがワザットのせいでデータが消えた為、ずっと手を出さず家に置いてきたのだが、皆とゲームをすることであーしのゲーム魂が再び目覚めた。

「ウルモンですよ？ やってるのは？」

「うん。やつぱりウルモンはいい。最近はちよつと劇の練習とかでやってないけど……劇が決まる前にボスは倒しておいた」

「おお、凄いですね」

「うんうん、そんなことない。ウルモンはエンディングが始まり。ここから厳選とかやって裏ボスあるし」

「廃人思考ですね。それも良いと思います！」

「うん、自分で言うのあれだけどウルモンに関してはあーしは廃人だ

と思う。でも、これはウルモンが悪い。特に今やってる3世代のこのタイトルは最高。時間を忘れちゃう」

「そうですね。俺も神げーだと思えます!」

ウルモンの話で盛り上がりつつ他のゲームの話もする。僅かではあるがその時間は何よりも大事な時間だった。その後はまた、劇の練習して……

「やっぱり表情が……」

「俺は良いと思うんですけどね……」

「そう?」

「はい。良いと思います」

と表情の相談をしているとリビングのドアが開いて、あくびしながら眠そうなコハクが入ってきた。彼女の朝のルーティンは先ず歯磨きをして顔を洗い、その後白湯を飲んで、身だしなみを整えるらしい。その後で日の光を浴びて、朝ごはんを作ったり、予習したり……

最早、完璧超人のようなモーニングルーティーン。本日も昨日あーしが付き合わせてしまったにも関わらずいつもと同じように起きてきた。

「おはよう、ごじゃいます、ふあく」

完全に気の緩んだ、フニャフニャなあくびコハク。そんな彼女を見れるのは早朝だけだろう。そして、彼女は同じ部屋で寝ているあーしが居ない事であーしが起きているのは見当がついていたのだろう。だが、流石に彼が居る事には気づかなかったようで……

「い、い、いいいいい、いじゃよい君!! な、なんで!?!」

「朝からアオイ先輩と演劇のけいこを……」

「そ、そうですか! それは素敵ですね! でも、居るなら言ってくださいよ! ああ、もう、髪に枝毛が……ぼさぼさだし、メイクも出来てないし……しかも、あくびしちやっしたし! 髪ぼさぼさだし、メイク出てないし、あくびしちやっしたし! うう、私の最高に可愛い貴族

令嬢のようなイメージが……」

彼女はあくびと完璧でない身だしなみを見られたことで恥ずかしいようだ。いつもの白い肌を真っ赤にしながら手を床について顔を下に向けている。

「くっ、朝からこんなコハクさんの可愛いシーンが見れるなんて……俺はなんて幸福なんだ」

彼の言葉を彼女の耳はしっかりと聞いていたようだ。顔を上げて彼に聞く。

「え？ か、可愛いですか？」

「勿論です」

「ど、どれくらいですか？」

「言葉に表せない程です。普段もいいですがちよつと気の抜けた素の感じがたまりません！」

「えへへ、そうですかあ？ なら、良かったです。白湯飲みまーす」

一瞬で彼女は立ち直り、キッチンへ向かう。なんでか分からないけど非常に面白くなく……あーしの頬が膨らんでいた。

百二話 あざとい対天然

私の名前は野口夏子。どこにでもいるモブのような女子高生である。さて、そんな私が現在、授業中にもかかわらず携帯をいじっている。もし、これを何も知らない第三者が見た時には恐らく私を不良だと思っただろう。しかし、そうではない。

私達のクラスでは授業時間の一部を使って文化祭の準備が認められている。その過程でスマホを使う事は認められており、今私はメイド喫茶の相場を調べて自分たちのクラスではどのようなにするか考えているのだ。先生は私達に全部任せる方針らしく、何か困った事があれば報告するようにと言って教室を出て行った。自主性を重視するらしい。

さて、先生が居なくなると自然と生徒達はふざけてしまったり、ダラダラしたりしてしまう。それは私達のクラスも同じである。

「おい、勝負だ！」

「今は勝負する時間じゃない、文化祭の準備の時間だ」

「確かに。じゃあ、俺達の仕事が終わったら勝負だ」

何やら、マグロ対アジフライが行われようとしているがアジフライこと黒田君がそれを拒み二人して紙で輪を作り鎖のようにしている。

一方我らが銀堂さんは……

「流石十六夜君！ ちゃんとしてます！」

「相変わらず、黒田君押しが凄いね」

「私は十六夜ファーストですから！」

この子は本当に好感度がどんどん上がって行く。その内、上がり過ぎて包丁で刺したりしないよね？ かーなーしーみーの……みたいなの？

まあ、そんな事を考えながらもサクサクと作業を進めていく。このクラスは金親君、マグロ君、銀堂さんなどの高スペックの人たちが多いからいや、もう、速すぎる。衣装は金親君が用意、代金もほぼ数分

で決まり、ポジションも秒で決まる。いやいや、このクラスヤバすぎ。ただ、黒田君が『コハクさんがメイドなのにこの代金は安すぎ、ゼロが7個足りないきがしますが』とぼやいていたがそこは文化祭として納得しようだ。まあ、そうなると時間が余るわけで……

「さあ、勝負だ。このカードゲームでな！」

「はあ、わかった」

黒田君がため息を吐きながらマグロ君と机を合わせてまさかのカードゲーム。学校で何をやっているんだ……

勝負が始まった。いや、二人してデッキ持ってくるって仲良しか？プレイマットまで持ってくるなんて……

「神龍・ボルガを召喚」

マグロ君がなにやらキラキラしたカードを出す。良く分からないが男子達が二人の勝負を熱い視線で見ている。話を聞くにあのカードゲームはアニメ化もして子供から、大きいお友達まで大人気らしい。クラスの男子たちも好きな人が多いらしい。

「ほう、ここでボルガか……」

「教えて、このタイミングで出すか……」

「さて、奴はどう凌ぐ？」

うーん、なにこの雰囲気？男子達がそれっぽい言葉を言っているんだが、全然分からない。

「ここはアタックせずターンエンド」

「教えて、アタックせずに残すか……」

「先を見越しての判断か、悪くないだろう」

「しかし、ここはアタックしても良かったタイミング。アジの野郎は今頃、混乱しているだろうな」

いや、だからその訳の分からない説明は何なの？ 普通にブロック要因として残しただけじゃないの？ いや、ルール知らないけど

「あの男子さんたちの雰囲気……」

「銀堂さん何か分かるの？」

「よく、十六夜君と火蓮先輩が見ているアニメで出てくるバトルの解説キャラににっていますね」

「皆、ふざけてただけなのね……」

この男子の偶にある悪ふざけだけではどうしても分からない。そんな事を考えていると黒田君のターンになる。彼はカードを振り上げてパフォーマンスをやった後に召喚する

「体育ある日の天敵、カレーある日の天敵の概念の巨竜。炎症龍・風邪ドラゴンを召喚」

ダンツとプレイマットにメンコかよって言う位の勢いで叩きつける。なぜ、召喚前にあんな言い方を？

「まさか、あの男の切り札……だと」

「お前も隠し持っていたか……しかし、あの龍を呼ぶには召喚時にモンスターを一体破壊しなくてはならない」

「しかし、あの召喚パフォーマンス……共感性羞恥……」

男子達も驚く中、黒田君は先ほど召喚したモンスターではない元々召還していたカードを墓地に送った。

「召喚条件はミニドラゴンより確保」

あ、なんか、あの小さいドラゴンなんか可哀そう。

「くっ、ここで炎症龍・風邪ドラゴンか……」

「さらに炎症龍・風邪ドラゴンの召喚された時、無条件で特殊専用カードを使用できる。エクストラマジックカード『龍より放たれた鼻垂れたブレス』を無条件で発動。これにより、お前の神龍を破壊。さらに、

特殊専用エクストラマジックカード『何故かいつもより優しいママが買ってきてくれるプリン』を発動。これにより、風邪ドラゴンのアタック値を+3000……そのまま、攻撃……合計アタックポイント7000のアタックだ……」

「負けた……」

何やってんの。君たちは……と呆れてしまう。しかし、どうやら黒田君の勝ちのようでその日はマグロ君が項垂れ、デツキを変えてくると言っていた。いや、黒田君のドヤ顔。

このクラス、私以外に普通の人がいないな……まあ、楽しいからいいけど



僕の名前は黄川萌黄。今、僕は夕飯の準備をしている。彼の家のだいニングテーブルに箸や取り皿を並べる。僕だけでなく皆も手伝ってくれている。

今日の夕飯を作ったのはアオイちゃんである。肉じゃがとロールキャベツというちよつとあざとい感じもあるがアオイちゃんにはそんな意図は無いだろう。

その日、僕は食事のポジションに違和感を覚えた。いつもなら彼を挟むように火蓮ちゃんとコハクちゃんが座るのだが……何故か今日はアオイちゃんが彼の隣で、その他の全員がいつもと違う場所で座ったからだ。別に座る場所を固定はしてない。だが、これは……因みにメルちゃんは何かを察してあとで食べるらしく研究室に戻って行った。

「あの、アオイ先輩……どうして私がここなのでしょう？」

「どういふこと？」

「え？ あ、いや、いつもなら私が十六夜君の隣なのに、その、今日は違うじゃないですか？」

「そうだね……」

「それがなぜなのかなと……」

「なんでだろう……特に意識はしてないけど……自然とこうなつた……」

「ええ？ そ、そんなこと……」

コハクちゃんがちよつと困つたような顔つきになる。場所が変わり、コハクちゃんと火蓮ちゃんが今日は隣である。火蓮ちゃんもちよつと首をかしげている。

「そんなことより、もう食べよう。冷めちゃうから……」

「うーん……まあ、そうですね。今日の所はこのまま食べましょう……今日の所は」

「いや、まさか、そんなことないわよね？ フラグ立ってないわよね？」

コハクちゃんは今日の所を強調する、遠回しに明日は私と言っているのだ。一方で火蓮ちゃんは怪しげな視線をアオイちゃんに送る。これ、まさかとは思うけど、新たな修羅場の幕開けでは……そして、その中心の彼は……

「……………」
これは、確実にアオイちゃんの変化に気づいてるね。ええつと、どうすれば……みたいな感じかな？ 彼は二股宣言をしているんだ。ここでアオイちゃんがこんな行動をしたらそれはまさに、四面楚歌になるだろう。

しかし、ご飯が冷めてしまうという事でパクパクと皆で食べ始める。アオイちゃんは彼の隣でしつかりと目を見つめて話す。

「どう？ 美味しい？」

「え？ あ、も、勿論ですともー」

「アンタのために作ったから、満足してくれてよかった……本当はカレーとかから揚げにしたかったんだけど、最近作つたばかりだからこ

のメニューにした」

「そ、そうなんですネ！」

「うん。どんどん食べておかわりもしてほしい……」

「し、しますとも！」

ええ？　こ、こんな露骨に攻める？　いや、これで攻めとるのは早計過ぎるのではないか。僕以外も未だにアオイちゃんが彼にアピールしているかどうか判断を下せないらしい。

「モグモグ、ごつくん……」

怪しむ二人の視線が彼とアオイちゃんにつき刺さる。彼は気付いたようだがアオイちゃんは気付かない。そして、彼の取り皿にロールキャベツが無くなると彼女はそれを受け取って掬う。

「はい。ドンドン食べて……」

「あ、ありがとうございます」

彼がおかわりを受け取り、それをじつと見つめるアオイちゃん。彼女は彼を見て、自分は一切食べない。

「あの、食べないんですか？」

「アンタが食べるの見てたいから……」

これは天然なのか、確信犯なのか僕には判断がつかない。しかし、この彼女の言動に遂にコハクちゃんと火蓮ちゃんが動く。火蓮ちゃんはアオイちゃんも怪しむ視線だが彼にも不機嫌な視線を送った。

「……十六夜のハーレム主人公」

火蓮ちゃんの皮肉たつぷりの発言。そして、コハクちゃんがレフエリーの如くアオイちゃんを止める。

「ちよ、ちよつと待っててくださいー！」

「なに？」

「あの、アオイ先輩……それは……あざとくないですか!!」

まさか、コハクちゃんがそれを言うとは……火蓮ちゃんもいや、アンタが言うんかい。と言う視線も若干送るが気持ちは同じらしく黙っている。

「どこらへんが？」

「先ずこのメニニュー、何ですか。ロールキャベツと肉じゃがって良妻アピールも大概にしてください！」

「特に意識はしてないけど……」

「あと、その私がおかわりとしてあげますよー、とか、おかわりしてとか、ちよつとあざとくてイケナイと思います！ それ、私の十八番ですー！」

「コハクが言っている事良く分からないんだけど……」

十八番とかそういうの言っているの？ コハクちゃん？ 一応だけど、あざといのは秘密にしてるんでしょ？ 焦って彼の前で彼女は言っただけじゃない事を言ってしまう。

しかし、アオイちゃんのこの反応。まさか、本当に天然？ 天然であざといことができるの？ だとしたら……とんでもない爆弾が投下されようとしているのかもしれない……

「コハク、食事中だから落ち着こう？」

「わ、私は落ち着いてますよ！ ただ、これだとキャラが被って私の影が薄くなるじゃないですか！ アイデンティティを奪わないでくださいー！」

「良く分からないけど……あざとい行動はコハクの十八番だからそれをやったらダメって事？」

「そうです。あざといは私の十八番……ち、違います！ 十六夜君、私計算してあざといとかやってませんから！ 純粹に良妻で性格が良いからいつも行動してるだけですからね！」

あ、墓穴を掘ったのに気付いた。コハクちゃんの焦りの表情。そして、火蓮ちゃんも何かに焦っている。

「無自覚系主人公ならぬ、無自覚系ヒロイン？ そんなのあり？ つつていうか、皆ずるいのよ。私は素直になれなくて、十六夜とイチヤイチャできないのに……もつと私と十六夜をイチヤイチャさせなさいよっ」

彼女の怒りの方向がそれで何処かに行っている。そして、この後、

仁義なきあざといバトルが開催されることになる。

百三話 開幕

アオイちゃんは天然で無自覚系な少女である。普段は表情に変化はなく、おとなしいクールなイメージがある可愛い少女。

そんな彼女が最近、変化を見せている。端的に言うとなんと距離が近い。肩と肩が触れ合う位の距離なのだ。彼女自身は意識はしていないけど本能的にそれが彼女の行動に現れる。

それに彼も気づいてアタフタし、それを見てコハクちゃんと火蓮ちゃんがやりきれない歯がゆさを噛みしめる。やりきれない理由はたった一つ。彼女が劇の練習を頑張っているからであり、下手に突っかかるわけにもいかず、さらに彼女は本番が近づくにつれて緊張してたまらなそうになり、それを彼が支える為に距離が近いと言う理由だからだ。端的に言うとなんと手出しがしづらいのだ。

『これが無自覚クーデレの恐ろしさか……くっ、あんなに一生懸命練習されたら手出しできないじゃない……私ももつと濃いキャラにならないと』

『私だって、私だって……』

大丈夫だろうか。二人共……

まあ、そんなこんなで文化祭に向って行く。その間にアオイちゃんの緊張を抑える為に色々彼は検討していた。

「水を飲むと緊張がほぐれると聞いたことがある……アオイ先輩には少しでもいい水を飲んでもらいたい、水道水より天然水、天然水より異世界の清流の水となるのは至極真つ当な発想……そうだ、異世界に行こう……」

と呟きいきなりメルちゃんを連れて異世界に行ったり、ツボが良いと聞けばそれを押し、ヨーグルト、チョコレートが良いと聞けば乱獲。緊張を抑える為の手段と言う手段をネットで検索。

あらゆる手を出し尽くし、ついに明日、本番を迎える。



がやがやと人の賑わう音やらで、いつもより騒がしい。理由は簡単。一般客も文化祭と言う事で入場を許されている。さて、そんな中、我らが銀堂さんが宣伝のプラカードを持って入り口付近を私と一緒にウロウロして客を呼ぶ。

いやいやいやモテるね。通り過ぎた人も過ぎない人も皆、見ている。

「この格好で見られると恥ずかしいですね……」

「まあ、仕方ないよ」

メイド服である。私も銀堂さんも。

「いや、可愛い！」

「モデルかな？」

「おいおい、そんな可愛いわけ……可愛い」

「おいおい、そんな言いすぎ……可愛い」

「隣の子もそこそこ可愛いね」

「……カレーの福神漬の感じだな」

「福神メイドかあ。結構好き」

おい、誰が福神漬か？ 戦争か？ まあ、福神漬好きだけれども。とそんなことを思いながらウロウロしていると見覚えのある赤い髪にカチューシャ。今日はツイントールではないらしい。

「あ、どうも先輩、こんにちは」

「えっと、夏子だったけ？ どうも……」

この人、意外と対人能力が低いんだよね。多分、時間をかければ軽めに話せると思うんだけどそんなに接する機会もないしな……

「火蓮先輩似合ってますね」

「まあ、当然よね」

「謙遜って言葉知ってますか?」

「コハクと程遠い言葉よね?」

「おほほ、言ってくれますね」

まあ、憎まれ口をおふぎけで言えるほどまで親しくなれたのは時間だけじゃなく、相性の問題もあるだろうね。

火原先輩は強気な顔つきをしているが本当はかなり弱い精神の持ち主。天邪鬼というわけではないけど、本当の事は言いづらいと。ただ、それを黒田君が上手く察せるから両想いと。

ああ、この人は本当はもつと甘えたいんだろうな。出来るようになるのはいつかな……

と話していると入口の方から一人の女性が歩いて来た。いや、他にも歩いてるんだけどその人に何処か誰かの面影があったからだ。真っ黒髪と瞳。

「あらあ? 紅蓮の赤ちゃんね?」

「あ! お、お久しぶりです! 十六夜君のママさん!」

「ええ!? 十六夜君のお母様ですか!」

「貴方は至高の銀白ちゃんね。えつと貴方は……」

「至高の銀白ちゃんの友達で黒田君の友達です」

「あらあら、こんな可愛い子と友達なんて……幸運が限界突破して神ね」

なんか、感想が独特の人だな。でも、黒田君ほどのオーラと言うか、風貌を感じない。黒田君の場合、一般人の皮を被ったアジツて言う感じだけど……この人は何というか普通。でも、私の勘が言っている。この人もヤバいと……

「それにしても文化祭なんて久しぶりね……十年ぶりかしら?」

「そうなんですか？ お母様？」

「お母様なんて……言われる日が来るとは……至高の銀白ちゃんは上流階級の人なのかしら？」

「えっと……まあ、その普通のご家庭よりは裕福かもしれませんが」

「ああ、分かるわあ。もう、滲み出てるのよ。高貴な伯爵感と言うか皇帝と書いてエンペラー感と言うか……」

「そ、そうですかね？」

「そうよ」

いや、濃いなこの人……

「文化祭ね……色々思い出すわ……」

そういう黒田君のお母さんの顔は哀愁漂っていた。もしかして、何か過去にあったのか……気になった銀堂さんがお母さんに聞いた。

「あの、何かあったんですか？」

「ええ、まあ、特にないわ……」

「ど、どっちなんですか？」

「あると言えばそうだけど、話すような事でも無いわね。ごめんなさいね、折角の楽しい雰囲気壊してしまつて」

「い、いえ、そんなことは……」

お母さんは雰囲気を変えて笑顔で話しかけてきた。

「十六夜は皆さんにご迷惑をかけていないかしら？」

「そんなことはありません！」

「十六夜は、あ、十六夜君は物凄い良い後輩です」

銀堂さんはもう十六夜ファーストで肯定、火原先輩はお母さんの前では君付けをしながら良い後輩であることをアピール。

「なら、よかったわ。それじゃあ……これからも宜しくお願いしてもいいかしら？」

「勿論ですとも！」

「わ、私としましては……これからずっとでも良いというか、ゴニョゴニョ……」

「いいともです」

いや、火原先輩の恥ずかしがって言えない感じがくあいんだが？
銀堂さんも負けてないけど。

「それじゃあ、私はあれこれ見て回るわね。失礼……」

「あ、一ついいですか？」

黒田君のお母さんが私達の邪魔をしない為に去ろうとするのを私は止めてしまった。何とか彼女の過去を聞きたいと思ったからだ。

「文化祭で昔何かあったんですか？」

「気になるのかしら？」

「えっと、まあ……」

「そう……実はこの話、私と夫の出会いの話なの」

「あ、そうなんですか？」

「でも、話し過ぎて夫が呆れてしまって、しかも結構な内容だから二度と人に言うなって言われてるのよ」

「ああ、それなら仕方ないですね……」

「まあ、どうしてもと言うなら語ろうかしら？」

「お願いしても？」

「ふふふ、では語りましょう」

この感じ……この人も一般人の皮をかぶっていたな……

「これは私が高校生の時の話。当時私は……ちよつと荒れていたわ。いわゆる中二病って奴なのかしら？ 文化祭でスクールカーストトップの苛めっ子に真つすぐ喧嘩を売ってしまったの」

「そ、そんなことが……」

銀堂さんが何かに共感するように、かみしめるように話を聞いていた。

「そうなのよ。もう、苛めっ子がムカついて、ムカついてしょうがなくて……ちよつと顔が可愛いからつてもう、やりたい放題。悪口、蹴りや殴り、給食をわざと気に入らない奴に溢す。色んな子が迷惑してたの、言わなかったただけでね」

「それで、どう、したんですか？」

「だから、文化祭の日にイキリ散らかしてから、言ってやったの。お前の息は排気ガスか？ 皆がその有害ガスで迷惑してたんだよ。お前の取り巻き男の腐ったチ○ポでその口閉じてやろうかって」

「そ、そんなにハッキリ……」

「まあ、次の日から浮くわよね、それは。今思うとちよつとやり過ぎたかなと思うわ。浮いた次の日にその苛めっ子と取り巻きに体育の時間にボールをぶつけられて、それで睨んだらぶりっこしながら怖い怖い言うから、本当の怖さを教えてやろうとして顔面にボールをぶつけたり……ちよつとやり過ぎたわね……私のせいでもあるんだけど、皆離れちゃって……でも、一人だけ手を取ってくれて……」

「そ、それで？」

「溜めるな、この人。何だろう……何があるんだろう？」

「その人が今の夫で私を守ってくれたって言う、惚気話なのよね！

これが。いや、私達の武勇伝と言うか何というか、人間、一人でも分かってくれる人がいるだけで救われるのねと言う話なの。夫の凄さを知ってもらいたくて近所でこの話をしまくったら夫が怒る怒る。もう二度とするなよって釘を刺されたけど定期的に何処かしらで話してるのよ」

「二人でも分かってくくれる人が居るだけで救われる……そうかもしれませぬ……」

「あ、でもこの話、参考にしちやダメよ！ 私はもつといい手があったはずだから！ 盗聴器とかカメラとか。穏便に済ませるに越したことは無いわ！」

「はい、そうですね……でも、話を聞けて良かったです。ありがとうございます……」

銀堂さんにとってその人が黒田君って事だよね。きっと、彼女は救われたんだ。それは彼女だけではないようで火原先輩もだった。

「あ、わ、私も十六夜、君に家族のこと色々お世話になって、その、私も同じです！ 救って貰いました！」

「そうだったの？」

「はい、十六夜は私のヒーローです！」

「えへへ、照れちゃうわね！ 息子を褒められると！」

「私にとっても十六夜君はヒーローです……」

「照れるわく。息子がそう言われると！」

笑う感じが黒田君そっくりなこの人も皮の中は相当であった。この親あつてこの子有りとはまさにこのことと思う私であった。

百四話 え？　そこで言う？

緊張する。異常に喉が渴き、呼吸が何もしていないのに荒くなる。いつもなら軽く十キ口を走らないと息切れなんてしないのに……

『アオイちゃん頑張ろうね！』

『なんかあつたら言いなさい』

『楽しみにしてますね！』

皆、期待している。頑張らないといけないと思うが本番が近づくとつれて焦りがドンドン湧いてくる。表情だって多少は改善できた。ここまで頑張ってきた。なのに、上手くいかなかったらどうしようという焦りがここにきてピークに達する。

人が沢山いる。変な風に見られたらどうしよう。また、怖いってひそひそ言われたら……どうしよう……

チクタク、チクタク。時間が速く感じる。焦り、焦り、焦り、焦り。どこまでも焦りが強くなっていく。視線が怖くて仕方ない。

「出番ですよ」

「あ、はい……」

出番がきた。最初は虐められているところから。出来るか？　視線が怖くて、人の眼が怖くて、評価が怖くて何もできないのではないだろうか。そう思いながらステージの近くまで来てしまった。今は幕で見えないがこれが上がれば……

まだ、少しだけ時間がある。観客席には生徒、教師、一般の人。百単位で人が居る。落ち着こう。ここは彼が異世界からとってきた清流水を飲んで……うん、美味しい。

おばあちゃんが言っていた。『人前で緊張したらジャガイモかかぼちやか山芋辺りに思え』

ひよっこり頭を出して観客を見る……ええつと……無理かも、おば

あちゃん……

「本番まで五分前でーっす」

五分、300秒ということ……あと298、297……ああ、どうしよう。どうしよう。

「大丈夫、ですか？」

そこに大きな石が投げられたように不安と言う波紋をその大きな石の波紋が打ち消す。何度も聞いたその声。

「どうして？　ここは二年生の……待機場所……」

「その、心配になってしまって……つい……」

「そう……ありがと」

「あの、やっぱり緊張してますよね？」

「まあ、それなりに……」

それなりどころではない。足ががくがく震えるほど緊張している。

「……人からどう見られるかってやっぱり気になっちゃいますよね。

これだけ居ると独特な空気感もありますし……失敗したらどうしようって思ってしまうますよね……」

「……」

黙って、彼の話を聞いた。彼はあーしのことなんて全部分かっていくのかもしれない。

「えっと、その、……すいません……あんまり大した事言えなくて……」

「あ、その、それだけでもありがたいよ……？」

「……」

彼は少し、悩んでいるようだった。悩んで、悩んで、悩んで……そして、彼はポケットから何かを出した。それは容器の中に液が入っているコンタクトのような物であった。

「これ……使ってください……」

「これは？」

「つけて見ればわかります……」

言われるがままにつける。時間が無いため、急いでツケタ。そして、彼を見ると……彼の顔がジャガイモだった……ええ？ どういうこと？

そのまま観客の方をひよっこり顔を出して見ると最早そこは芋畑だった。里芋、長芋、じゃがいも、カボチャ。わんさか置いてある。

ふふ、なんかツボに入る。

「これって、何かのマジックアイテム？」

「はい……そう、ですね……使ってください。メルさんに人の顔が芋に見えるコンタクトを作ってもらいました」

「そう、なんだ……ありがと……」

「いえ……」

何か、彼の顔が曇っているように見えた。だけど、もう本番が始まる。彼を後にしてあーしは舞台上上がった。

幕が上がるとそこには芋だけなので視線も感じない。ちよつとツボであった為、心の余裕ができた。そして、ずっと練習してきたから不格好でもそれなりにまとまっていたと思う。自分の中ではよくできたとも思う。

これが出来たのはあーしだけの力じゃない。皆のおかげだから、終わった後はあいさつ回りをした。コンタクトを付けたままだから芋に全員見えたけどそれでも誰かはわかる。

だけど、彼は何処にもいなくて……何処に……校内を歩き回っている

「アオイ先輩ですよね？」

「え、あ、うん」

えっと、知らない芋の子だ。声も聞いたことない。

「私、劇見たんです。すっごいかっこよかったです。可愛いカッコいいというか、笑顔の鋭さがとても良かったです」

「そう?」

「はい。ばっちりです!」

「どうも……」

あ、ヤバい、コミュ障感が出てる。話す前に、あ、とか入れてしま
うのはどうしても治らない。

「あの、アイツ……黒田十六夜ってどこにいるかわかる?」

「ああー、二つ名が沢山ある人ですよね?」

「そう……」

「屋上で体育座りしましたよ」

「あ、そうなんだ」

「そうですよ」

「あんがと……」

言われるがままに階段を上がっていく。校内はまだ、賑わい続けている。人と人の間を抜けて屋上に行くと、青い空が広がる空。そこで彼は体育座りしながら全部見下ろしている。

「何してんの?」

「えっと……人を見ました」

「そう……劇、成功したよ。あんがと……アンタと皆のおかげ……」

「そうですか……」

歯切れが悪い感じがした、悩んで心がここに非ずの状態の彼。

「どうかしたの? 話してほしい」

「えっと……特に……」

「話して……」

「ええ、その……」

「話して……」

「あ、はい……今日は成功してそれは滅茶苦茶良かったと思うんですけど……あの時、コンタクトを渡さなくても成功してたら、それはアオイ先輩にとつてもっと良い経験になってて、そっちの方が貴方の先の人生に大きなプラスになったんじゃないかって思うんです。魔族を倒してハイ終わりじゃない、これからずっとこの世界で生きていくから、その場の誤魔化しじゃダメだなんて。もっと上手い支え方があって……だから本当にあれが貴方にとっての最善だったのかと……俺ダメだなと……」

「あーしの為にそれを悩んでくれてたの？」

「えっと、まあ、そうとも言いますかね？」

「そうとしか言えない……」

彼はぎこちなさそうに笑った。でも、心からではなくあーしを心配させない気遣いを感じる。ずっと、あーしを支えてくれた。ずっと、あーしのことだけを考えてくれた。それで今も悩んでる……

「……あーしは凄く嬉しくて楽しくて最高だった。毎日一緒に練習して、毎日笑顔の訓練してくれて……これは、誤魔化しでもない、あの時コンタクトが無かったら失敗をしたと思う……上手く言えないけど、全部繋がって成功したから、全部が、アンタも含めて、かけがえのない宝物だから、えっと、その、ダメとか最善じゃないとか言つて落ち込まないでほしい……」

「……うう、何ていい子なんだ……卒業式の感動の言葉みたいなことを素で言えるなんて……うう、涙が……」

「あ、あ、えっと、な、泣かないで？ あの、ティツシュ……」

彼は感動の涙を流す……そんな良いこと言ったかな？ 良く分からないけど取りあえず、ティツシュを渡しておく。

「何か、元気出ました」

「そう……なら、よかった」

「全部繋がって、それが宝物……いや、これは、名言ですね……」

「ちよつと、恥ずかしい……」

「スマホの着メロにしたい……」

「それはやめて……」

ちよつと、笑顔を見せていつもの雰囲気に戻り僅かに嬉しさが湧いてくる。

「それじゃあ、俺は自分の学級で仕事がありますので俺も先輩のように、頑張ってください！」

「うん……いつてらっしやい……」

タタタタと走って彼が行ってしまふ。一人になった屋上で太陽があーしを照らして風が吹きぬける。その風が吹き抜けると彼との記憶を呼び覚ます。

記憶を辿って、辿って、繋いで、繋いで……その最初から最後までが

宝物……。出会いは急で、唐突で……暖かくて、カツコよくて……

颯爽と現れた……まるで、まるで、まるで……王子様

それを自覚したとき、胸が跳ねた。でも、不思議と驚きはなかった。ずっと、その気持ちを感じていたから、分かっていなかっただけで、ずっと、ずっと、好きだった。

あの、祭りの日から今日まで色あせることなく、寧ろずっと膨大になり続けるほどに好きであった。

こういう時はどうするのが正解なのだろうか。普通に告白をすればいいのだろうか？ あーしには分からない。だからといって。この気持ちは諦めたくはない。だとするなら、普通に付き合う……あ、そもそも、火蓮とコハクが居た……

……あーしが付き合いたって言ったら二人は何て言うかな……

彼の事でいつもいがみ合ってる二人だ。そこにあーしが入ったら……三つ巴の大決戦……

それは避けたい。

だとするなら……



「打ち上げ、打ち上げ、楽しみだな♪ ピザにから揚げ、モンブラン♪」
「コハクちゃん楽しそうだね」

「ええ、こう見えて私はパーティーとか好きなんです。美味しいもの食べて、トランプとかして、お菓子食べて……」

「えっと、体重気にしてたんじゃ……」

「今日は一週間に一度のチートデイですから♪」

「あ、そっかあ！ あれ？ 一昨日も確か……」

……この辺で何も言わないであげよう。今日は劇も成功したし、喜びを分かち合って楽しければそれでいい。チートデイが一昨日あったなんて些細な事だ。

そう言えば、彼のお母さんと彼女は話して、連絡先を交換したって言うってたな。僕もあつたけど……

『あ、稲妻の少女ちゃんよね？ もう、初見で看破よ！』

いきなりでビックリしたなー。まあ、その後に僕も連絡先は交換したけど……何というか、いや、ホントにビックリだ。こんなにビックリしたのは久しぶり……いや、結構毎日ビックリしてるからそうでもないかも。

と考えながらダイニングテーブルに料理を並べる。火蓮ちゃんもアオイちゃんも彼も。

「文化祭って結構あっさり終わるもんね……何にも進展がないなん

て、やっぱり現実とは違うものね……はあく。何か、最近、私のキャラが薄い気がするし……眼鏡でもかけてみようかしら？ いや、安直すぎるキャラ付けね……いやでも、十六夜が眼鏡フェチの可能性も……」

悩んでるなあ……とそこで準備が終わり皆が席につく。メルちゃん……起こさないでと部屋に張り紙を張って寝ていた。

「「「いただき……」」」

「待つて……」

豪華な食事がテーブルに並び自然とよだれが出そうになる。そして、食べ始めようとするアオイちゃんがそれをとめた。

「ご飯食べる前に、火蓮とコハクに言いたいことがある」

「え？」

「なによ」

何だろう。と疑問に思う皆。彼女は一息を入れて声を発して、爆弾を落とす。

「あーし、クロの事が好き。だから二人にはクロを諦めて欲しい」

クロとは？ 誰だろう……いや、大体察しはついているけど……文化祭が平穩に終わったが僕たちの関係は平穩ではなく、劇的な変化を迎えたのだ。

稲妻の想い

百五話 三つ巴

ドーンと爆弾が投下された。平穩に文化祭が終わったと思ったらこんなことになるなんて。

「……………」

「？ ……あ！ クロのことが……………」

「いえ、聞こえてました」

「私も」

二人は予想外過ぎて固まってしまったようで、それを聞こえていないと勘違いしたアオイちゃんがもう一度言おうとしたのを二人が止めた。

「そう……………だったら、諦めて欲しい」

「アオイ先輩、その前にクロとは？」

「クロはクロだよ。黒田十六夜の頭を取ってクロ、親しみを込めてクロ」

「唐突すぎませんか？ それと諦めて欲しいと言われましても……………」

「あーし。火蓮とコハクが好きだから争いたくない。冬美が言っていた……………女の人間関係は複雑だから、お昼のドロドロしたドラマみたいになるって。お昼のドラマ、見たことないけど相当ヤバいらしい。あーし、二人共ずつと仲良くなっていきたい。わがままを言えば結婚式の友情スピーチをしてほしいくらい」

「本当にわがままですわね……………」

「うん、分かっている」

「ドロドロしたくないならアオイが引けばいいんじゃないの？」

「それはもつと嫌……………」

あれ？ 食事の時間だよね？ 微妙な雰囲気になっているのは気のせいだと思いたい。

アオイちゃん……グイグイ行き過ぎじゃ……よく考えたら彼を端っこにして自分だけがちゃっかり隣に居るし……席替えをコントロールしてる……

「と、取りあえず食べようよ！ さ、冷めちやうよ！」

「そうですね……あと、アオイ先輩席変わってください」

「断固拒否する」

ここにきてこの感じか……えっと、渦の中心である彼はと言うと、もう、どうしていいのか分からず程よく宥めるだけであった

「クロ、あーん」

いきなりのあーんだと……？

「あ、その。俺は」

「二人とはしてたのに……あーしのは嫌って事なの……？」

露骨に顔に影が差す。シンデレラの演劇の練習が功を成しているようで余計に悲壮感が漂っている。

「そんなことは無いです！」

悲しみの顔を見てしまったらどうしても笑顔でいて欲しいという彼の性格と恐らく彼自身の本音もあるだろう。まあ、嘘を付けないという事もあるんだろうけど

「じゃあ、あーん……」

「あ、どうも」

急にしおらしくなるのも彼らしい。

「美味しい？」

「と、とっても美味しいです……」

「そう……でも勘違いしないでクロの為にアーンしたわけじゃないん

だからね……」

「それ、私の!？」

アオイちゃんが火蓮ちゃんの物まねを唐突に始めた事に全員が驚きを隠せない。彼も気になったようで彼女に聞いた

「アオイ先輩はどうして、火蓮先輩の真似を？」

「クロが火蓮の事好きだから。真似したらあーしも好きになってくれるかなって思った……あ、クロじゃなくて、クロ君って呼んだ方が良いかな？ コハク感も出るし……」

「いえ、そのままですよ」

「そう？ クロの好みになりたいからしてほしいことが言ったら何でも言つて……あーし、頑張るよ。あと、火蓮とコハクのモノマネだつてする」

「……っ！」

「!!??」

ああ、二人が驚いてるよ。彼が照れちゃったよ。

僕なりに分析すると二人は何処か先ほどまでは驚きもあつたけど、余裕もあつた。今までずっと献身的にここまで来て告白までされて来たのだから。控えめに言つて負けることは無いだろうと何処かで思っていたはずだ。

でも、この少女、驚異的なスピードで駆け上がってきた。彼女は天然だから余計な事を殆ど考えていない。二人はずっと蛇行しながら切磋琢磨してきた。互いへの牽制とか素直になれない気持ちとかそう言つた事で偶にわき道にそれた事もあつただろう。

だが、彼女は違う。蛇行の山道をまっすぐ。蛇行せずに頂上を目指すそんな子なんだ。

さらに、驚異的なスピード、二人の良さを吸収しようとしている。

これは、このスピードは現代の一夜城の如く速い、しかも天然だから牽制とかが効かない。

この子……強い……と二人は思っている事だろう。

「クロ、顔赤くない？ どうしたの？」

「いえ、なんなん、何でも……」

「お熱ボンボンじゃ……」

「いい、いえ、そんなことは……」

「一応、熱測る……」

「——っ！」

彼女はオデコとオデコを合わせた。彼の顔がドンドン赤くなり、アオイちゃんも若干赤くなる。一歩間違えばキス位できてしまう距離。

「ちよ、ちよつとアオイ先輩!？」

「そそそそそそ、そんな測り方は現代ではしないわよ!!!」

二人が慌てて彼女の腕を掴み引き離す。アオイちゃんは、ふむふむと考えると二人に腕を拘束されながら呟いた。

「熱あるね……」

「いや、貴方のせい!」

「オデコ合わせの測り方なんて二次元限定よ!」

彼の方が目をグルグルさせてるぞ……その後、彼女は今度はちゃんと体温計で測った。ピピピと測定完了の音が鳴りそれを確認する。

「熱ないね……良かった」

「ありがとうございます」

「良かった。良かった……」

「くっ。アオイ先輩にナデポとニコポをされるなんて……」

ここで彼女はまさかの頭をなでなでした。いや、積み込み過ぎじゃ

ないか彼女!? 確かに無意識の感じで作っているけど……恋を自覚したら、人ってここまでなる物なの? 無意識に触れ合いたい、話したい、アピールしたい、それが彼女の場合は顕著に出ているだけ?

「ニコポとナデポだと!? うう、なんなのよ……私は古参ヒロインなのに……」

火蓮ちゃんは驚きと歯がゆさを隠せずにいる。ツインテールがふるふると揺れている。それはそうとニコポとナデポってナニ? 彼と火蓮ちゃんは分かっているみたいだけど……

「あざとすぎる……私の、私の、個性なのに、私も何かしないと……それはそうとあのオデオ熱測りは何処かで使えますね……」

三つ巴はどうやらここから始まるらしい。



俺はどうすればいいんだろう。いや、アオイと言う少女の事は嫌いではない。嫌いになる要素が無いし、元々好きだし、前世から好きだし。猛烈に好きだし。眼とか、スタイルのスマートの中にも色気と言うか何というかあるのも好きだし、素直な所も好きだし。

いや、だからと言って三股をお願いするには……確かに俺にとっては理想だけど……

「打ち上げにはカラオケはつきものです! と言うわけで私が歌います!」

食事が終わったあとはカラオケをするようでコハクがマイクを持って曲をかける。綺麗な声、セイレーンと錯覚するほどの歌声だ。ま、セイレーンの声なんて聞いたことないんですけどね……

それほど綺麗だという話だ。

『貴方と愛をく、囁きたいよねくイエス♪』

彼女はサビの所でこちらを向いてウインクをしてきた。そのハートの矢で俺の心は打ち抜かれて思わず心臓を抱えてしまう。

「あざといよ、コハクちゃん……」

「どうしよう……私アニソン歌おうとした。ヒロイン格差が広がりそう……」

「アニソン俺好きですよ！」

「なら、アニソンそのまま歌うわ……」

火蓮はアニソンを歌った。カラオケはやっぱ好きな歌を歌うに限るものだ。

「ふう、久しぶりに歌うと気持ちいわね」

「最高でした！」

「ふふ、当然よ！」

彼女は嬉しそうに笑った。こんなに献身的で可愛い子が好きでいてくれるのに……俺は未だにその想いに応えられていない。それって最悪なのでは無いだろうか

「次、はあーし……」

そんな事を考えているとこんどはアオイが歌いだす。彼女の声はまさに美声だった。

「うまつー！」

「アオイ先輩、こんな特技を……」

「わぁお……」

おいおい、アーティストかよって言う位に上手である。そう言えば彼女の喉は七色だったな。歌が滅茶苦茶うまい。

萌黄もかなり上手い。と言うかこの美女たちに下手な人はいないのだ。合いの手をしつつ彼女達のカラオケは続いて行った。三周位したら少し歌い疲れたようで皆ソファに腰を下ろす。

「十六夜君、隣良いですか？」

「寧ろ、お願いしたいです」

「座るわよ」

「お願いします！」

火蓮とコハクが隣に座る。萌黄は苦笑いしながら火蓮の隣に座って、アオイは……

「クロの膝に座っていい？」

俺の膝に座った。彼女はそのまま背中を俺に預ける。柔らかくもハリのある肉質が膝と胸板に当たり、彼女のさわやかなにおいも……強制的にドキドキさせられてしまう。

「……」

彼女は無言だが僅かに薄くだけ微笑んでいた。

「むぐぐぐ、そういうのイケナイと思います！」

天然だからだとしても無防備すぎる。体をこんなに密着させてくるなんて俺の心が無闇に荒らされていく気分だ。

心が荒々しくなったまま、時間は過ぎて行った。

◆◆
私は最近影が薄いような気がしている。文化祭でもドキドキするような展開にはならず、何をするにも二番煎じ感が否めない。私だつて十六夜が好きだ。この気持ちだけは誰にも負けない……いや、恥ずかしいわね。こんな事を考えるなんて。

でも、本当だし、真実だし、真理だし。両想いだし。だから、最近はやりのニヤニヤ系のあまあまラブコメみたいなことが始まると思っていた。しかし、実際は違う、ライバルがいる恋愛頭脳系みたいなのが始まった。今日はライバルが増えた。相手は天然、結構スタイル良さげの無自覚系ヒロインでキャラが濃い。

私は正直に言うとおハーレムになってもいい、二股だろうが、三だろうが、四だろうが五だろうが別にいい。彼はきつと愛してくれるから、私が転んだら手を差し伸べてくれて、足幅だつて合わせてくれる。私がおか言ったら出来る限り、いやそれ以上に何でもしてくれる。

——そんな人と一緒にいれるなら何でもいい……

手を繋いで笑いあうだけで幸せになれる。いつでも、いつまでも幸せ。そんな日々を送って行きたい。コハクもアオイも萌黄も好きだ。皆でいつまでも一緒に悪くない。

だけど、だけど……

——私と言う存在をもっと見て欲しい。

◆◆
その為には、もつと私からも愛を囁かないと、ツンデレ体質で言いづらいけど言ってる。

お風呂の中で人は何を考えるだろうか。まあ、大体は一日の振り返りとかをする人が多いだろう。俺もその一人だ。全身を洗い湯船に浸かる。湯船に浸かるとき、人はどのように浸かるだろうか？

一度潜って海坊主の気分になるだろうか？ 将又、水の支配者、ウンディーネになった気分でぐるぐる水槽に只管に水の渦を作ったり、スプラッシュのように水滴を飛ばしたり、アヒルを浮かせてそれを船に見立て自分は海の神になった気分で大嵐ごっこでもするだろうか。俺は、ただ只管に地獄の窯に浸かる気分で入るというのを昔よくやっていたなと思ひ出す。

するとドアが開く。ピタピタと水の床を歩く音が聞こえる。そこには銀色の髪。彼女はバスタオルで隠してはいるが隠せない可愛さ。

「コハクさん、どうして、ここに!？」

「背中を流そうと思って……でも、もう洗ってしまったみたいですね」「は、はい」

彼女は全身を洗うと同じ浴槽に浸かった。体積が増え、水面が上昇する。息を飲むほどの美貌を持つ人が近くに居るとオドオドしてしまう。こういう事をするとかツコ悪くなってしまうのでピリツと大人な感じで行きたい。

と考えると彼女は首に手を回して抱き着いてきた。彼女の凶器が当たりグラグラと理性の棒が倒れそうになる。取りあえず彼女を宥めようとした。しかし、彼女は抱き着いたまま不安そうな声を上げた。

「……私の十六夜君……。十六夜君、私を見捨てないですよね?……ずっと一緒ですよね? 貴方は私から離れたりしませんよね? 私を置いて他の人の所になんか行かないですよね?」

「勿論です!」

「本当ですか?」

「はい」

「本当にそうなんですか？ 怖いんです。貴方が誰かの所に行くのが私じゃない誰かを選ぶのが。怖くて怖くて仕方ないんです。また一人にはなりたくないっ……」

彼女の締め付ける腕が強くなる。恐怖を抑えるように俺を逃がさない様に彼女はずっと抱き着いて顔をうずめていた。

「絶対に一人にはしません」

「良かった。そう言ってくれて……暫くこうしてていいですか？」

「勿論です！」

彼女はようやく落ち着きを取り戻してずっと抱き着いたままだった。その後すぐに言葉を発した。

「声が……聞こえたんです……また、声が……アオイ先輩に鼻の下を伸ばしている十六夜君の気を惹こうと無理やりこうやってお風呂に行こうとした時に……唐突に鮮明に聞こえたんです……『また、裏切られるかも』って」

「……そんなことあり得ないですよ。俺も皆も絶対に裏切ったりしない。手を繋ぎます」

「……そうですね……ごめんなさい、疑ったりして……」

「謝ることないですよ！ 俺がハッキリしないからいけないんですから……」

俺が悪いんだよ……その通りなんだよ……ハッキリせずに中途半端で行動してるから……彼女を不安にさせてしまった

「そ、そんなことないですよ！ 元気出してください！」

「そうですね……コハクさんを不安にさせてしまうようなことになっごめんなさい……」

「いえ、私の方が……あれ？ 何か逆になってますね？ 私が慰められてたのに……えっと、とにかく気にしないでください。いつも元気な十六夜君が私は好きです！」

「……そうですね……じゃあ、そうします！」

「あ、でも、無理に元気にするのも辛いと思いますし……ええっと、ど

うするのがいいのでしょうか？」

「うーん、難しいですね。笑うから楽しいと聞いたことがありますから……取りあえず笑います！」

「無理しないでくださいいね。でも、やっぱり十六夜君はニコニコの方が素敵です！」

……彼女の為にも不安定な関係は続けたくはないな。でも……俺は、このことには直ぐには答えが出せない。だったら、少しでも何か彼女の為に、負担を減らさないと……笑顔ももつと見せないと……「そう言えば、コハクさん……あの、声ってかなり鮮明に聞こえたんですか？」

「え？ あ、はい……その胸のあたりから」

「胸からですか……」

「聞いてみますか？」

「え？」

「ここに顔を近づけたら聞こえるかもしれませんよ？」

「確かに……」

意外とやってみたら会話できるかもしれない。鮮明に聞こえるほどに声が聞こえるなら彼女の中には既に完全に人格がもう一つ形成されたのかもしれない。

魔力とは神秘の力で未だに全ての力は解明されていない。だからこそ、イレギュラーだってある。トラウマ、人の心の闇の部分に自身の魔力が流れ込んでそれが形となってあらたな精神、人格が生まれる事だってある。

そのせいで魔力が半分になるということもある。魔力によって生まれた人格。これは彼女の闇。

それを無理に引き出すのはずっと、ためらわれることだった。だから、放置せざるを得ない訳だったのだが、既に大分、人格が形成されているなら彼女の中に居る彼女に話しかけて、不安そうなことを言わない様に頼む……いや、でもそれを彼女の闇に言うのも、彼女の闇が可哀そうかも……

彼女のトラウマとか闇とかが固まった存在に……安易に言葉を掛けるのも……傷ついたりするかもしれない。人を疑って、信じない、でも優しいから……傷つけたくはない……でも……取りあえず話しかけるだけ……

「あ、あれ？ からかおうとしたのに……結構マジな反応が……」

「ちよつと、話しかけて良いですかね？」

「ええ!? あの、いつもみたいに照れないんですか？」

「いえ、恥ずかしいですけど。今はそんなこと言ってる場合でもないですし」

「きゅ、急にそんな反応されると……こっちが恥ずかしく……あと、胸見すぎです!!」

「すいません。それより、耳当てて良いですかね？ ちよつと軽く話して見たくて……」

「耳!? ええええええ!!」

「失礼していいですか？」

「ええええ!! あ、うう、ど、どうぞ……」

彼女の胸に耳を寄せる……そして、くつつく。布越しだがやわつこい。しかし、そういったよこしまな感情を後にしよう。

「えつと、俺の名前は黒田十六夜と言います。初めまして」
「……」

「えつと、もし、よろしければ俺と話してください!」

「んっ、……」

「あ!!! 今何か聞こえました!!!」

「それ、多分、私の心臓の鼓動です……」

「え? あ、確かに……」

確かに彼女の心臓の鼓動が聞こえる。やはり、精神がつながっている彼女しか話せないのか……

「えっと、俺はカレーが好きなんですけど……何か好きな物ってますか？」

「……ふえっ、あ、あの、擦れて……くすぐったいです……」

「すいません。あと、もうちよつとだけ、やっていいですか!？」

「ううう、私達は何をしてるんですか……」

「……えっと」

彼女の食事の好みはコハクと同じ……そう思っただけで色々聞いたがなにも返事はなかった。

「どうやら、俺には聞こえないみたいですね」

「はい、そのようですね。ただ、もっと早く気付くべきかと……私結構、変な声出してたんですが……」

「いや、すいません……今思うと相当ヤバいことしてましたね……」

「そうですね……」

彼女の不安は出来る限り取り除いてあげたいけど……

「いつでも、24時間対応で俺はコハクさんの悩みを聞きます!」

「わお、頼もしい! なーんて、ふふ、ありがとうございます……」

『ダーリン流石です』……あれ? コホン、流石です、十六夜君!

「今、もしかして……」

「なんか、心の底から言葉が出ました……」

「もう少し、あの呼びかけをやってみましょう!!」

「ええ!? あれ、は、その、変な声と気分になっちゃって……その、今日

日の所は……」

その後、もう少しチャレンジしたが彼女の心の底の住人が出ることは無かった。



十六夜君と話していると、不安とか全部なくなつて幸福感に包まれる。もしかしたら、と考えていた自分が馬鹿らしい。そんなことは絶対ない。

『本当なのですか?』

そうだと

『前もそう思つて裏切られたのに……証拠も無いのに……』

それは……

『でも、ダーリンが絶対に裏切らないというのだけは同意なのです。あの人は自分の命を顧みずに私を助けたのですから。周りから何を言われても、愚直に私を、いや、私たちを助け続けた。それは絶対の光なのです。でも、いつ、あの人が離れるかは誰にも分からない。裏切りはしないけどずっと隣なんて証拠はない。他の人に取られることもあるはずなのです。あーあ、私ならダーリンに女の武器を最大限使つて、逃げられない証拠を掴んで幸せになるのに……あの人は私の希望なのです。絶対なのです。何故、不安定なままでキープするのか私には意味が分からないのです』

でも……

『私に変わつて欲しいのです。そうすれば……私のものなのです……まあ、そんなことなんてできませんが……速めに鎖で縛ることをお勧めするので……それじゃあ、今日はこの辺で……さようなら……』

声が聞こえなくなった。その後には何かが私の心に強く根付いてしまったように思えたのだ。どんな手でも使って……だけど、その思考を私は払った。

『P.S. ご飯の食べ過ぎには気を付けてくださいね？　ダーリンにちやんといい女と思われるスタイルを維持するのです』

その思考も取っ払った。それから声がスツと止とまって全く出てこなかった。

百六話 それぞれの変化

世界に大穴が開いた。何度も開きその度に僕たちが対処してきた。世界の平和は僕たちに託されている。

そう、託されているんだ。

大きな黒の翼と白の翼。異形と言う存在がヒシヒシと伝わってくる。悪意に満ちている目……そこに、いきなり彼女達の攻撃が放たれた。光と火と水それぞれの攻撃によって墮天使に大きなダメージが入る。

こういうのって普通相手の自己紹介とか待つものでないかと思うが最近の、彼女達は彼の影響を受けているのか行動が速過ぎる。

彼が居なかつたらお前一体何者だ。とか、一体なの目的で？ とか絶対に聞いたであろう。

あの墮天使は大きなダメージに苦痛の表情をする。特に目が物凄い狂気が宿っていた。

あの目……似ている……アイツに……思い出したくもない。辛い日々。今でも時折、頭をよぎるほどの恐怖。今の僕の力があればアイツなんて相手にもならない。小指一本で倒せる。

だけど……あの恐怖だけは薄れてはいるけど残っている。僅かに足がすくんでしまった。人間や普通の怪人程度ならこの程度の間なんて意味もない。だけど、今回は今までの上位存在ともいえる。

その為、その墮天使から放たれた七筋の光線。細い光の筋が一瞬で広がり、こちらに向かってくる。

それに反応できたのは……コハクちゃんと火蓮ちゃんとアオイちゃんだけだった。

アオイちゃんが短剣を振ると水の十四筋の流水を放つ。それで光

を相殺し、さらに残りの七筋で相手の羽に風穴を開けた。

ドラゴン・アーク 清水水剣……彼女の新しい力。彼女は彼との愛を自覚してそれを曲げずに伝えたことが使用のトリガーになったのだとメルちゃんが分析していた。

短剣の名前のセンスはどうかしていると思わなくもないが、そんなことはどうでもいい。彼女はとんでもなく強くなってしまった。

水を操る。水を生み出す。防御、攻撃が変幻自在。滑らかで速く鋭く、攻撃の予見もしにくい。

「水は友達……あーしにはアンタじゃ勝てないよ……」

格好が和服と洋風の複合系の巫女と言うか、肩が出てちよつと色気のある格好で水を操る彼女は湖の妖精のようだ。

恐らく、トレンドには湖の妖精が入ること間違いないし。

その後は火蓮ちゃんとコハクちゃんの爆発力で吹っ飛ばす。

僕はいるのかな？ 別にいらんのではないかという心境を思わざるを得ない。あの堕天使は絶対に強敵のはずだ。

今日の前であっさり倒されたけど、それは彼女達が力があつたから。なかつたら絶対に死んでいたと思う。彼がこれまで繋いできた絆とか愛があるから。乗り越えられたのだ。あっさりしてるけどその裏には彼の今までの想いとか、努力とか苦悩とかが絶対にある。

それを彼女達も分かっている。そして、そんな一生懸命な彼が好きだから彼女達も隣に立とうと頑張っている。

それ故の衝突もある。それでも確実に距離は縮まって行くだろう。きつと、今まで以上に……僕だって……このまま置いて行かれたくない。あの、感覚が戻ってくる。自分と言う存在の疎外感。背だつてまだ、コンプレックスだ……。

少しづつ、離されている……嫌だ……ようやく掴んだこの居場所を失いたくない。顔には出さないが心がざわつき始めた。



目のまえで絶大な光景で魅せられるとどうにも興奮する。特に大好きな彼女達の絶対的な姿。

昔の血が騒ぐ……

等と言うわけがない。そんなことは置いておいて……

墮天使をあつさり倒すなんて……本当なら萌黄が覚醒して、クリスマス 次の日に活躍して倒すはずなんだ。前回もそうだが……本来活躍するメインキャラが中間パワーアップをしてから現れる敵が、その前に現れる。全部逆で出てきているな。

まあ、銀堂コハクに関してはあつさり中間パワーアップしてるけど……彼女って一番最後にパワーアップするはず……順序がドンドン変わっているような気がする。

このまま行ったら四天王最強の天使もあつさり終わるのか……？

あとは萌黄のパワーアップはどうなるんだろう。クリスマスの日 に皆と過ごすことで仲間との愛が強くなるわけなんだが。うーん、本来通りに行くのか？ 不安だ、だとするならクリスマスは盛大に行うに限るな。

異世界から美味しい物でも取り寄せるか。

最終的に彼女全員が覚醒してパワーアップを遂げれば何とかなるはず。だとするなら俺はクリスマスパーティーを成功させると決めた。

◆◆
私の名前は銀堂コハク。普通の女子高生である。顔は良い方だろう、家事万能、スタイル抜群と言った結構高スペックである。自分で言うのもどうかと思うが……火蓮先輩的に言うのと良妻系ヒロインと言ったところである。

なので、毎日身だしなみに気を付けて、料理担当の日は気合を入れる。アピールは欠かさない。好感度はいくらあってもいい。100? 200? いやいや、1000は欲しい

彼から私は抱き着いて欲しいのだ。彼は遠慮癖があるのか、嫌われたらと思うのか自分からは接触はしない。好意は感じるがだからと言つて安易にはこない。そこが紳士的である……端的に言うとは好感度が上がる。だけど、もつと、こう、料理作つてるときに後ろから抱き着くあるあるのシチュが私は欲しいのだ。

まあ、現実はその上手くないかない。十六夜君と付き合えるんじゃないかと言う淡い期待が中々かなわず今居るわけである。しかも、二股したいということで難易度が爆上がり状態。

そんな中に聞こえる謎の声。色々展開が加速しすぎではと思うがそんなの関係なしに私はアピールを頑張り続けたいいけない。

「にやにや……お前を猫にしてやろうか……」
「え?」

また、不思議な声が聞こえる。最近、こういうのが多すぎるような気がしてならない。しかし、次の瞬間には私は猫になっていた。

「EEEEEE!?!」

「にやにや」

人為的な猫の声が鳴り響く。声の方向を向くと猫、変わった風貌の猫。それが浮いていてクスクス笑っている。

「偶にやりたくなる、人間をネコに変えるあの遊び……アタフタするのが見えて楽しいかな……」

「ちよつと、!?! 直してくださいよ！ 私、夕食の準備が！」
「じゃ、暫く位したら治るからにや……」

そう言つて猫は消えていった。あれ、明らかに普通じやにやい。魔族とかそういうたぐいの連中かにや？ あ、そう言えば十六夜君が以前、猫になった時に言つていたやつなのかもしれないにや。メルさんに詳しく聞いてみようかにや。

あ、語尾が変な風になっている。気を付けないと……

どうしよう。家の中で服がそのまま猫になるってとんでもないことじゃないだろうか……。

「お風呂掃除終わったわよー」

『火蓮先輩！』

リビングに入ってきた火蓮先輩、きつと気付いてくれるはずだ。散らばった服と下着、そこにいる猫。きつと気付いてくれる。

「あれ？ 誰も居ない……コハクが夕食の準備してたんじゃないかなかったつけ？ ん？ 下着と服……コハクもだらしない面があるのね」

『いや、無いですよ！』

「んん？ 猫ちゃん、どうしたのかにや？ 迷い込んだんじゃないの？ どうしたのかにや？ あーやつぱり猫は良いわね……パパが猫アレルギーじゃなかったら絶対に一緒に居るのに……」

『ちよ、くすぐったいっ』

『ほれほれ、ここがいいのかにやー』

彼女は私の耳と尻尾あらゆるところをさわさわして頬を緩める。
この人、上手……んんっ、あ、んッ……

彼女が全身をいじくりまわしている。彼女は語尾ににやをつけているけど誰にも見られてないと思つてるからこんな語尾を付けてい

るに違いない。私だってこの間、あくびをしたら十六夜君が居て恥ずかしかった。誰にも見られていないと思うと人はつい、気が緩んでしまう。彼女もそんな感じだろう。

だって、こんなになんて……

「にやにやは何処から来たんですかにや？」

フニャフニャしてるんだもの。猫の真似して自分の手を猫の手のようにして自分は同類と言うことと、敵ではないとアピールしているんだらうけど、これを見せられても私はどんな反応をすればいいんだらう

と、そこで部屋のドアが開いた。誰かが入ってきたのだが彼女は閃光のような速さで顔をきりっつとして何事も無いように顔を戻した。

「あ、十六夜、猫が家に入って来てるわよ」

いや、切り替えが速すぎる。さつきまでにやんにやん言ってたくせにキヤリヤウーマンのようにするのだから彼女は面白い。

「え？ 猫ですか？」

「そうよ、この子よ」

「へえー……この猫、もしかして……」

『流石十六夜君。即座に気づいてくれたのですね！』

十六夜君、まさかの一秒で看破。十六夜君が何かを言おうとした時、火蓮先輩が十六夜君をソファに座るように促した。

「十六夜、ここに座って貰っていい？ あの、ちょっと話したいことがあるから……」

「え、あ、はい……この猫……」

十六夜君は火蓮先輩の雰囲気を押されてソファに座る。私の事は言い出せないようだ。

「せ、折角、二人きりになったわけだし……ちよつと、話そうかなつて……」

『シャー！』

「え!? なにこの猫!? 急に怖い!」

『抜け駆けはさせません!』

「ええ? 何なのこの猫……」

「あの、多分、この猫は……」

十六夜君が色々説明をしてくれた。火蓮先輩は驚嘆して先ほどの自分の行動を思い出し、猫の私に何も言わない様に釘を何度も刺した。そして、準備が良い十六夜君は偽体が戻っても良いように布で私を包んでくれた。だから、特に何事もなかったわけだけど……火蓮先輩はあの時何を話そうとしたんだろう……

二人だけで……一体何を……疑ってしまう。何も無いと分かっているけど変に勘ぐってしまう。

私が居ない時に二人で何をやる気だったんだろう。不安と言う感情が渦巻いている。火蓮先輩が抜け駆けして、十六夜君を持っていったら……どうなるの? 私はどうなるの?

そこまで考えて私はそれ以上考えないようにした。何だか、思考がマインナスに向かう事が最近多いような……

速く、速く、あの人が欲しい……不安と言う感情が押し寄せるたびにそう思う。手に入れば不安がる必要はない。私だつて二股でも何でも特別な関係なら何でもいい。でも、それで誰かに取られたと思つてしまう。そんなはずないと頭では分かっている。でも、心が止まらない。

——無理やりにも……

最近の私はオカシイ……。ゆっくり、迷惑を掛けずに……行くつて決めた。でも、そのせいで彼を逃したら……

パチンを両頬を叩いて切り替えである！ 十六夜君を見習って元
気よくタフに行こう！ 私は大急ぎで夕食の準備を始めた。



その日の夜、私は十六夜の元に行った。私をもっと見て欲しいか
ら。ノックして部屋に入る。お風呂上りに男の人の部屋に行くつて
ちよつとためらわれることかもしれないけど……

「ご、ごめんください……」

「そ、そんな、畏まらなくてもだ、大丈夫ですよ」

「そ、そう？」

「は、はい」

想いと伝えようとするや急に顔が強張って、頭が上手い事回らない
から不思議だ。十六夜も何か私の変化を感じ取って、意識してしま
互いに緊張している状況になってしまう。

「あ、あのさ……電気消していい？」

「ええ!? あ、はい……」

ぱちんと部屋の電気が消える。目が慣れていないからか不思議と
緊張感が薄れる。暗いとちよつと大胆になれるという事が最近に
なつて分かった。

月の明かりが部屋を照らす。

「こ、今夜は月が綺麗ね！」

「ありがとうございますー！」

彼は腰を九十に曲げてお礼を言う。流石、十六夜。こちらの意図を

分かってくれる。普通の漫画とかだところこういう事をヒロインが言う
とただ同意する人たちとは一味も二味も違う。

「火蓮先輩！」

「な、なに？」

「月より貴方が綺麗です！」

「——ッ」

もう、バカあツ。ベラボウに嬉しいわよ、この大バカものおツ。

「あ、あつそ……」

つい、あつそで済ませてしまった!! ダメよ。素直になるの。た
だ、ツンツンするツンデレじゃなくて、素直に気持ちを伝えられるツ
ンデレになるの!! あれ? ツンデレって何だっけ?

「わ、私は……その……」

「は、はい……」

「す、すす」

「……」

「好きよ!! 十六夜のこと!!」

「倒置法の告白!! 凄く、嬉しい!!」

ゾーンに入れ、私。どんなことでも出来るのよ、私。もつとするの
よ、告白を。ああ、きたこの感覚、偶にある何でも言えそうなゾー
ンが。

「あの、知つてると思うけど好きなの、十六夜が」

「ありがとうございます！」

「多分、十六夜が思つてるよりずっと好き!! 世界で一番貴方が好き
なのは私って自信を持って言えるわよ!!」

「……」

あれ？ 流石に言ったことが重かったのかな？
と思ったら彼は土下座をした。

「ありがとうございますー！」

私は腰を下ろして彼と向かい合う。彼は意図をすぐに把握してくれる。分かっているけど全部じゃない。だから、言ってもっと私を知ってもらいたい。

「私はね……十六夜が思っている以上に十六夜が好きよ」

「そうなんですか？」

「そうよ、多分、一歩間違えたら私、ヤンデレになるわ……」

「ええ!？」

「言っておくけど冗談じゃないわよ。本当にその片鱗を偶に自分に感じるから」

「そ、そうなんですか」

「知らなかったでしょ？」

「知りませんでした。前に冗談でやってたのは覚えてますが、本当にヤンデレの片鱗があるとは……」

「そうなのよ。私、ヤンデレ候補なのよ。あの、だから、もっと私を知って欲しいの。火原火蓮と言う私をもっと知って求めて欲しい……わがままで思うけど……」

「そんなことないですよ。俺だってもっと知りたいです！」

私は嬉しくてたまらない。話しの内容が合うし、結構コアな事でも彼とは話ができる。この前も……

『十六夜のラノベ読んであるあるってある?』

『人外転生が結構あつさり人型になるとかですかね』

『分かる』

そして、彼は時折家族の話を聞いてくる。本当なら私のことなんて、私の家族のことなんてどうでもいいのに誰よりも気にしてる。仲が良くてメールもして、この間の休日に三人で出かけた事を話したら自分のこと以上に喜んでくれた。

その笑顔も心も何もかもが好きでドンドン好きになってしまって、留まらない。これからもきつと……

「そうか……俺の知識が全部なわけないよな……」

「どうかしたの？」

「いえ、やっぱり大事な事を気付かせてくれるのは貴方だなって！」

「ど、どういたしまして……」

なんか、良く分からないけどよかったのよね？ 感謝してるから、良く分からないけど。

「もつと知りたい。しかし、どうすれば……」

「で、デートじゃない？」

「からの飛び越えて旅行とかどうですか？」

「い、行きたい！ 聖地巡礼とかしたいし！」

「ようし、いつか纏まった休みがあるときに行きましょう！」

「約束よ！ 絶対だからね！」

なんか良く分からないけど旅行の約束が決まった!!!!!! わーい!!
まあ、行くのは先になるだろうけど……でも、これづて私が初めて
じゃない！ メインヒロイン√の予兆!!

「じゃ、じゃあ、今日はお休み。ぜ、絶対の絶対だからね！ 旅行！
楽しみにしてるからね！」

「はー」

私はそれで満足して部屋を出て行った。

百七話 サンタさんは居るって言うけど其れは心の中に限る

とある日の彼の自宅でアオイちゃんがソファに座りながらゲームをしている。僕と火蓮ちゃんとコハクちゃんがそれをのぞき込むように観察。何やら銃を使ったスマホでするゲームなんだけど……

「あの、アオイ先輩凄すぎませんか？」

「そう？ えっへん……」

指の動きの滑らかさと言うか……銃で何百メートル先から狙撃する彼女はまさに審判の神。

「エイム、ガバッタ……」

「英無ガバッタ？ それはどういう意味ですか？」

「照準がズレた的な感じ……」

「アオイ、最近ゲームよくやってるわね」

「うん、無課金だけどソシヤゲも始めた」

「課金はするんですか？」

「うーん……ソシヤゲは沼だから……考え中かな……」

「確かに沼と聞きますね」

「うん、でもそういう人たちがいてくれるからあーしが無課金でプレイできる。感謝感激、を忘れずにプレイしていこうと思ってるくらいではある」

コハクちゃんと火蓮ちゃんがアオイちゃんに質問しあいながら彼女の裁きを見ていく。

「す、っごいんだけどアオイ……」

「ただの伏せキャン」

彼女はそのまま一位になった。いや、凄すぎるんだけどと皆で話し

ていると彼女が今度は皆でゲームしたいと言いだめた。

「皆でゲームしたい……」

「いいですね。やりましょう。実は私テレビゲームの浦島太郎電鉄に興味あつたんです」

「浦鉄ね」

「そうです。是非、皆でやりましょう！」

と言うわけでテレビゲームの皆でやる奴（四人）をやることになった。彼は買物で居ない、また、メルちゃんは研究室に引きこもりの為にこのメンツ勝負である。楽しくできるかと思っていたのだが……

「ちよつと!! ボンビー様を私にばつかり押し付けるのやめてくれません!?!」

「たまたまよー嘘じゃないわよー」

「嘘つかないでください! 今の距離ならどう考えても萌黄先輩に押し付けるべきでした!」

「あ、なんかごめん……」

総資産がアオイちゃんが100億越え、コハクちゃんと火蓮ちゃんがボンビー様の擦り付け合いで底辺争いになりごちゃごちゃ展開になったのでゲームを変えることに。

「やっぱり、皆で協力するゲームにすべきだった……」

「ヘリオですね」

「コハク、今回は喧嘩なしよ」

「わかってますよ。一緒に頑張りましょう」

うんうん、やっぱり皆でゴールを目指す系の奴の方が良いよね!

と思ってコントローラーを持ってテレビ画面に映るステージをクリアしていくはずだった。

コハクちゃんの操るキャラが穴を飛び越えようとした時、たまたま

火蓮ちゃんのキャラも飛び越えようとしており……火蓮ちゃんがコハクちゃんを踏んでしまい……コハクちゃんのキャラが落ちてコハクちゃんがゲームオーバー。」

「あ、ごめん……今のはわざとじゃないのよ……」

「今のは？　と言う事は先ほどのわざとなんですかね？」

「いや、本当にごめん……その、次から気を付ける……」

「いいですとも」

彼女は笑顔でそう言ったのだが次の場面で彼女は亀の敵を踏んづけてそれを纏めて火蓮ちゃんに投げた。

「ああ!？」

「あ、すいません。手が滑りました」

「いや、明らかにロックオンしてなかった!？」

「たまたまですよー嘘じゃないですよー」

「いや、棒読みが過ぎる!!」

まあ、そんなこんなで一応一区切りはついたのでゲームは終了した。

「ごめんね……なんか、変な感じにしちゃって……あーしが皆でやりたいって言ったから」

「そんなことないわよ。なんだかんだで楽しかったからまたやりましょ。今度は十六夜とメルも呼んで」

「そう？　楽しかった？」

「愚問ね。コハクも萌黄もそうでしょ？」

「はい！　とつても楽しかったです！」

「オフコース！」

「なら、よかった」

と、良い感じにまとまったところでアオイちゃんがそう言えばと話を切り出す。

「そう言えば、もうすぐクリスマスだね」

「そうですね。クリスマス……デート、プレゼント交換、パーティー、わくわくしますね」

「魔術学院の出来損ない、第23巻でドラマCD特別版発売だから楽しみね」

「クリスマスになるとケーキの予約をしなくちゃね!」

確かにもうすぐクリスマス。学校でもクリスマスに近づくとつれて話題がチラホラと上がり始めている。この話し合い、ちよつと女子会つぽいとテンションが上がっていると……アオイちゃんが爆弾をまた落とした。

「今年はサンタさんに何をお願いしようかな……」

「「ん?」」

え? ちよつと待つて、と三人で顔を見合わせてしまった。いや、ピユアなのはもちろん知っている。いや、女子高生だよ。しかも二年生で今年……17歳……だよね?

「えつと、アオイ先輩……その、サンタさんとはどういう意味で使っているのですか?」

「え? そのまんまだけど……毎年、世界に子供たちにプレゼントを届けてくれる。サンタさんって意味」

「えつと、サンタさんって……その……」

「んっ?」

「あ、いやなんでもないです」

「そう? あ、手紙出さないといけないから便箋探してくる」

アオイちゃんが部屋から出て行く……三人で審議に入る。

「これは……どうしましょうか?」

「うーん、こういった事も友達として言ってあげるべきじゃないかな?」

「そうね。偶にはビシツと言う事も必要かもしれないわ」

「そうですね……ここは、三人で……」

「いや、それは後輩の仕事」

「えええ!? 急に!」

どうやら火蓮ちゃんも僕と同じ意見のようだ。これには理由がある。それはアオイちゃんがピュアすぎて言いづらいのだ。

家でもそうなのだが、教室で特にそう感じる事があった。この間の休み時間、僕と火蓮ちゃんの席の方にアオイちゃんが心配そうな顔でやってきた。

『ねえ……』

『どうしたの?』

『火蓮もいい? 今までで一番とんでもない悩み相談がある……』

『ん? どうしたの?』

『あの……その……ううツ、ウツ……』

『えツ!? ちよ、ちよつと何で泣くのよ!』

『アオイちゃん!』

彼女が急に涙を流すから何事かと思つて背中をさすりながらゆっくり話を聞くと

『さつき、変なメールが来て、このメールを十人以上に広げないと、あーしをツ呪うって、ヒック、でも、皆に広めたくなくて、グスンツ……どうすればいいかな?』

『ダイジョブよ。私も同じ経験があるから』

『え? ホント?』

『そうよ。それでも怖いならそのメール私に送つて。二人ならなんか心の負担が減るでしょ?』

『ありがと。でも、こんなメール送りたくないから……』

チェーンメールが怖いと言う理由で悩んで泣いてしまったらしい。しかも、皆に広めたくはないという善意と板挟みで。これだけじゃない。次の日には……

『コメント欄の続きを読むって押ししたら、チャンネル登録しないと今日の夜にあーしを呪うって……グスンッ……』

『ダイジョブよ。ただの嘘、何ともないから。私もそういうの何回も来たけど全部無視したわ』

『え？ ホント？』

『僕もそう言うの偶にあるけど何もしなくても何ともないよ』

『良かった……チャンネル登録はしたくなかったから……』

もう、本当にピユアで汚れを知らない。眼の奥がキラキラして澄んでるんだ。もし、もしだ彼女にそんなこと言って悲しい顔されたらと考えたら何も言えない。だけど、アオイちゃんのこととも考えるところっかり知って欲しい。だから、どうしてもコハクちゃんに白羽の矢が立つことになってしまう。

「あの、これは私達三人で……その……」

「いや、これはコハクに任せたいのよ。うん」

「そうなんだよね。うん」

「え、あ、その、一人はそのお、気まずいと言いますか……ここは三人で協力して！」

「応援するわ。頑張つて！ 頼りになる後輩のコハク！」

「僕も背中を温かく見守るよ！ 頼りになる後輩のコハクちゃん！」
「……………」

あ、こいつらどうやっても私に押し付ける気だ。という目を彼女は僕たちに向ける。すると彼女はちよつと頬を膨らませた後に髪を耳に掛けて雰囲気を変えた。一気に雰囲気が変わってかなり驚いた。可愛さがあるいつもの彼女から大人で色気のある女性に。

「コホン、えつとお、私だけだと不安だなあ、先輩達も一緒にしてほし

いなあ……」

「くツ……可愛い……」

そうやって、両手の指を組んで胸元に置いて首をかしげる。眼をいつも以上に見開いて、声のトーンを変えて甘えた声。耳の奥から神経全体に響いて、背筋が逆立つように思えた。

「コホンって咳払い辺りから雰囲気作ったわね……言いたくないけど、可愛い……ずるいわね後輩って……」

「ずるいよね。後輩って……」

「……後輩一人に押し付けようとする先輩お二人もずるいと思います
が……」

と言うわけでアオイちゃんがサンタさんに送る便箋を取ってリビングに戻ってくる。ただただ、純粹に彼女は

「皆も一緒に書こう」

「あ、そ、そうですね。その……何と言いますか……ねえ!?

火蓮先輩!？」

「え、私!? ……あのさ、サンタさんってどうやって私達にその、プレゼントを持ってくるのかな?」

火蓮ちゃんが遠回しに穏便に済ませる方向で行くようだ。

「手紙北極に送って、そしたらサンタさんは分身して全部の手紙チェックして、火星にあるおもちゃ工場に発注して、それを届けてもらった後に分身体と一緒に世界に配って回る……」

「あ、そんなアグレッシブな感じなのね」

「っておばあちゃんが言った」

「そ、そうなのね……あのね、その、サンタさんはねッ!」

「火蓮も手紙書くでしょ?」

彼女は無垢な瞳で火蓮ちゃんを見る。僕にはわかる、きっと火蓮

ちゃんは今、悩んでいる。言うべきか言わざるべきか。今時、サンタを信じる女子高生なんていないだろう。正直、これがバレたら、バカにされることだってあるかもしれない。そこを僕たちは危惧している。

でも、言えない、言っていないのか分からない。こんな無垢な子に……そう悩んでいると、リビングのドアが開いた。

「あ、ただいまです。買い物から戻りました……」

「おかえり、クロもサンタさんに手紙書く？」

彼女が彼にそう聞いた。僕たち三人もそこからどうなるのか分からず意識を集中させる。彼は言うのか、合わせるのか、答えが僕たちにも分からない。彼はどうするんだ

彼はちよつと考える顔になって……

「書きますー！」

元気よく彼は返事をしてかき始めた。買い物物の荷物を置いて彼女と一緒に書いた。これが正解なのかどうなのか僕にはわからない。でも、きつと言った方が良いんじゃないかと思う。彼女が周りから馬鹿にされることがあったらと思う。

「あーし、お風呂入ってくる」

「お先にどうぞー！」

アオイちゃんがお風呂に向かった時にコハクちゃんが彼に聞いた。火蓮ちゃんも気になって、僕も気になって四人でダイニングの席につく。

「あの、十六夜君……サンタさんのことあれで良かったのでしょうか？」

「……正直言うと俺、サンタさん居ないって言おうかと思ったんです」

「そうなんですか？」

「はい。だって、多分世界中で本気で信じてるってアオイ先輩だけだから。高校生でサンタ信じてるって馬鹿にされると考えたら言ってしまった方がいいかなって。でも……夢って見ている時が一番楽しいんですよ。それがどんな夢でも見ている時が一番楽しい。きつと、いつか覚めてしまうけど、その時までには夢を信じて欲しいなって思っ……もし、それを馬鹿にする奴が居たらぶっ飛ばせばいいだけの話で、絶対に馬鹿にさせなければいいなって……」

「……」

「でも、多分言った方がいいとも思うから。本当なら言つてたと思います。でもあのアオイ先輩の眼を見たら、昔を思い出して、キラキラした夢を見てほしいって思ったんです。いつか、覚めるその日まで」

——超、カツケエ……

「なんて、ちよつとカツコよく決め過ぎましたかね!? ああ、恥ずかしい!! こう、やっぱり俺みたいだな未だに夢から覚めても覚めきれない奴を厨二つて言うんでしょかね!? いや、ハズズいな、俺……」

「とても良いと思います。十六夜君らしいその考え方……」

「あ、ありがとうございます。でも、俺のが正解って訳じゃないので……言った方が良くって言うのも間違いじゃないと思います……から、うん、まあ、難しいですね。何と言えればいいのか……」

「そうですね。両方正解なんでしょうね……だから、難しいんですね……」

「深いわね……なんか、自分の中に新たな価値観が生まれた気がするわ」

「そうだね……」

何というか、ちゃんとフォローされた気がする。彼は僕たちの話でも聞いたのかな、いや、どう考えてもさつき帰ってきたし……偶然か

な？

「十六夜って本当に根っからの馬鹿真つすぐね。まあ、嫌いじゃないけど……」

「あ、ありがとうございます」

「むう、私だってそう言う所が好きなんですからね！」

「ありがとうございますー！」

僕も……そういうところが……いや、何を考えているんだろう。僕は皆が幸せになればそれでいい。僕は二の次で良いんだ。ここにこうやって居れるだけで満足でここに居られて楽しいのも皆のおかげだから。

僕はもう、沢山貰ってる。だから、遠慮しないと……皆を優先しない……

百八話 眠れない夜

目が覚めてしまう。どうしても何かのスッキリしなくて布団から起きてリビングに向かった。別にこの生活が気に喰わない訳じゃない、誰かが嫌いなわけでも無い。最高の要素しかないのに何か引かかる。

理由は分かっている。自覚してる。だけど、それをどうすることもしないと決めたのは自分なのにスッキリしない。

と考えながらリビングに向かうと電気がついていて。ドアを開けると彼がソファに座って携帯ゲームをしていた。

「こんな時間にゲームとはダメだぞ。ちゃんと寝ないと……」

「あ、すいません……」

しっかりと先輩として後輩の健康管理を気遣って注意をする。僕はそのまま彼の元に近づいてソファに座った。ちよつとゲームが気になったからである。

「まあ、君も高校生だから強制はしないけどさ。今、何のゲームやってんの？」

「モンスターをバトルさせるゲームです」

「へえ、そう言えばアオイちゃんもやってたなあ」

「実を言うと明後日対戦するんです」

「そうなの？」

「はい、だからこういった時間で差をつけておこうと思って。コマンド制の育成ゲームなら俺にも勝てる可能性があるかなって」

「アオイちゃん強すぎて誰も勝てないからね」

何気に二人きりで会話って初めてかな？ うう、ちよつとドキドキ

してきた……

「ええ、だから、ここで一発勝ってちよつと良い顔したいんです。そして、やるじゃんって言われたいんです」

「正直だね……」

多分だけど、アオイちゃんは負けたら悔しがって再戦を申し込むだろうね。

彼はゲームをしていたのだがそれを止めて、テーブルに置く。

ゲームがしたいんじゃないかって？　もう寝るのかな？

「萌黄先輩はどうしてここに？」

「眠れなくてさ……暖かい飲み物でも飲もうかなって……」

「でしたら、俺とおしゃべりしませんか？」

「そう、だね……僕も目が冴えてるから……折角だし……」

「お願いします。実は最近、皆さんの事をもう一回知りたいと思っただんです」

「そうなんだ……」

どどどど、どうしよう!?　急にこんな話しましょうって言われたら……と言うかし、知りたい!?　あれ、つまり、その、僕も含まれてるよね?!　知りたいってどうして知りたい!?　も、もしかして、僕の事も、き、気になっている?　しかも、結構マジな顔でそんなこと言う!?

顔には絶対出さないけど、内心結構焦りである。落ち着きなさい、萌黄。そ、素数!　素数を数えよう。

0, 1, 2, 3……ち、違う!　0と1は素数じゃなかった!

「じゃあ、話そうかな……」

「是非」

「えつと、折角だし、クイズ形式にしようかな？ 僕の好きな食べ物はなーんだ」

うん、実を言うとお子様ランチなんだけど……分かるわけないよね……恥ずかしいから絶対に言わないし。

「お子様ランチですか？」

「正解……」

一発目!?! なんで、分かったの!?! あれ？ 言ったことあつたけ!?!

「良く分かったね……」

「……勘です」

「普段の僕が子供っぽいからそう思ったとかじゃないよね？」

「そんなことないですよ。普段は大人な感じが出ていても良きです。でも、偶にあるトイレに一人で行けない感じもギャップがあつて良いと思いますー！」

「うん。そういう事は言わなくていいかな？」

「あ、すいません」

トイレに行けなかったのは一時期だもん。今は一人で行けるもん。

「俺の直してほしい所ってありますか？」

「うーん……特にはないかな……」

「遠慮なくどうぞ！ 足とか見すぎとか！」

「自覚あつたんだ……でも、気遣つてる視線だし、それくらいは特に何とも思わないかな」

「そうですか……」

「逆に僕の直してほしい所ってある？」

「無いです」

「即答……なんだ」

「だって、無いですから。料理出来て気遣いできて、洗濯、整理整頓。

文句のつけようが無いですね」

「そ、そう……」

そんなハツキリ言わなくてもいいんじゃないかな？ もっと、オブラートに言ってくればこちらとしても心に波風が立たないのに。

その後は、なんてことのない会話をした。別に凄い特別な内容じゃない。

「最近、僕は動画サイトの to be continued にはまってるんだ」

「俺もそれは好きですね」

平凡な会話。

「あの、タレントさんのリアクションがね……僕的には最高なんだ！」「面白いですよね！」

本当に平凡で何てことのないただの会話。彼も物凄い面白い事なんて言わない。僕も凄く変わった事も言わない。でも、ただ目を合わせて会話を交わすだけ。それがどうしようもなく楽しくて、楽しくて仕方なくて……

「あ、もう、こんな時間。流石に寝ないとね……」

「そうですね。気付いたらこんなに経っているとは……」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

おやすみを笑って言う。心からそう言ったのか分からなかった。本当はもっと……

それが終わったら急に寂しくなって、本当に寂しくてすぐに眠れるわけがなくて。彼が自分にとってどれほど愛おしいか分かって。

でも、隣で寝てる大好きな皆が好きな彼だから……手なんか出せなくて、出しているのか分からなくて……それで、また、寂しくなって……

でも、皆が幸せなら、それで……それで……それで……



「流石ですね。萌黄さん」

「いえ、これくらいは……」

「このプロジェクトが成功したのは貴方のおかげですよ」

「ありがとうございます」

一人の女性がとある会社のデスクの前に立っていた。その女性に彼女の上司と思える男性が喜びの笑顔を向ける。女性はただ、そつと笑ってそのままそこから去ると自分の席に戻って再びパソコンに向かった。

「萌黄さんってすげえな」

「優秀で仕事一筋らしいよ」

「俺達新入りの面倒もよく見てくれるし」

「しかも、可愛いしな。背はちよつと高すぎだけど……」

自身の後輩の話し声を女性は聞いた。男性と女性、それぞれの後輩が彼女を評価する。ただ、羨望の眼差し。それは彼女にとって嬉しくないわけではないはずなのに彼女は心から笑う事はない。

時計が時を刻んで、只管に針が動く。女性はただ只管にキーボードにタイピングをして、後輩の資料をチェックして、仕事をこなす。五時を回って、六時を回って、彼女の周りの席から徐々に人が消えていく。

でも、彼女はただ仕事をして、九時を過ぎたところで彼女は退社した。彼女が会社から出ると外は

「雪……か……」

周りの装飾はすっかりクリスマスでサンタさんの大きい人形や、赤い靴下、おもちゃの大安売り。すれ違う人は自分のように疲れた仕事人が多い。彼らや彼女らも自分と同じ独り身なのだろうかと彼女は思いながら帰路を歩く。

電車に揺られて、雪が降り積もって行く景色を眺める。自宅の最寄り駅につくと彼女は降りて、今日は疲れたから自炊なんて止めて、簡単に済ませようと思い、コンビニに寄ってレモンサワーと適当な弁当を買ってレジ袋をぶら下げて歩いて行く。

雪が降って彼女の頭に軽く積もった。それを彼女は払ってアパートに帰る。

レモンサワーを開けると炭酸の音が聞こえて、それを飲むと苦みのあるうまみが広がる。彼女は弁当を温めてコタツを付けて一人で弁当を食べる。特に見たい番組は無いけどテレビをつけて何となく部

屋の中に音を流す。

弁当を食べて、それが入った容器を捨てて。彼女は思う。

ずっと、同じことをしている。毎日、仕事して、食べて、寝て、人間の三大欲求のうち二つを満たしているけど全く満たされない。

彼女のスマホの画面にはとある思い出があった。毎日が奇跡に満ち溢れた日常。あれほどの日常は二度とない。欲しいと思っても手に入る物でもない。そう彼女が思った時に彼女のスマホが振動する。誰かが彼女に電話を掛けてきたようだ。

誰かと彼女が確認すると……彼女は薄く笑った。

「もしもし？ アオイちゃん？」

「うん……そう。今、大丈夫？ こんな時間だけ……」

「大丈夫だよ。どうしたの？」

「えっと、その、あーし達さ……その、異世界に住もうって話してるんだ……」

「そう、なんだ……」

「あの、だから、萌黄に会うのが難しくなる……」

「ツ……気にしないでいいよ。こっちの世界じゃ、一夫多妻は認められないしね……」

「うん、それで……あのさ……萌黄も一緒に来ない？ あーしも、皆もその方が……」

「アハハ！ 気にしないでいいよ！ 僕が入ったらまた、ややこしくなるでしょ!？」

女性は相手を気遣って遠慮して……空元気で対応する。それが僅かに崩れた。

「……皆の時間も減っちゃやし。新婚同士の時間を減らすのはちよつとぼくてきにもむり、かな……」

相手もそれを分かった。

「でも……その……」

「大丈夫だって！ 偶に、お歳暮とか送ってくればそれでいいからさー！」

「う、ん……分かった……」

「それじゃあ、またねー。お幸せに！」

女性の瞳からは涙がポロポロと落ち始めた。後悔がただ彼女にあつた。

「なんでッ……君は僕も好きって言うてくれなかったの……？」

「どうして、僕はその時、好きって言えなかったの？」

「なんで、遠慮なんかしちゃったんだろう……僕はッ、僕だって君のこととが皆に負けないくらい、好きだったのに……」

「僕も連れてってよ……君に連れてって欲しいんだよ、手を握って欲しいんだよ……」

「抱きしめて欲しいんだよ、愛を囁いて欲しいんだよ、頭を撫でて欲しいんだよ、何でもない会話で笑いあいたいんだよ、下らない事言っつて、喧嘩だって、そこからの仲直りだって……したいんだよ……」

「寒いよ、暖めてよ……」

「十六夜……」

彼女はただ、一人で泣いた。きつとこれから続く孤独と後悔と彼らの愛を求めて……

雪が積もるように彼女の心には悲しさが積もっていった。



僕は目を覚ました。体には汗を沢山かいて、瞳から涙が落ちた。寝ながら泣いていたんだと僕は気付いた。

隣にはアオイちゃんとコハクちゃんと火蓮ちゃんが寝ていた。酷い夢だった。自分に起こりうる最悪の結末と言っても良いかもしれない。

でも、きつと、そういう日がいつか来るんだろう。あんな悲しみが自身に降りかかることがあるんだろう。きつと。夢でも辛いなら現実でも辛いはずだ。現実ならきつともっと長いあの孤独が続く。耐えられないだろう。何度でも泣いてしまうだろう。

でも、きつと僕はその道を選ぶだろう。選んでしまうだろう。そう思った時、どうしようもなく涙があふれて、あふれて、あふれて、あふれて止まらない。

皆を起こすわけにいかないからすすり泣くように声を押し殺して涙を流す。きつと枯れはてるほど、僕は泣いた。

百九話 ともだち

がやがやとクラスメイト達の声が聞こえる。クリスマスが近づいてどうするか予定をたてたり、関係なくバイトだと嘆いたり、色んな声が聞こえてくる。だけど、僕にはどうしても何かが引つかかかってしまった。

どうしても、昨日の夢が心に重くのしかかっている。でも、それはきっと起こりうることだと思う。クリスマス……今年は何で過ごすかと思っていた。でも、皆を優先するべきだろうか。皆の恋路を一番に考えたら居ない方がいいんだろうか。

普段、ここまで悩むことなんて無い。なのに、昨日の夢からどつぼにはまったようにただ、その先を考えてしまう。

魔族を倒したら？ 世界を救ったら？ この関係は終わってしまったのか？ もし、終わったとしたら僕は一人の道を歩き始める。

昨日の夢のように。ただ、一人で……寒くて、寂しい。周りのみんなはクリスマスとかで盛り上がっているけど。

「萌黄どうしたの？」

「え？ あ、なんでもないよ……」

「何か、元気が無いように見えるけど……」

「うん、実は……肌荒れが気になってね！」

「いや、十分綺麗だけど？」

「あ、そう？ 元気出た！」

「……本当にどうしたの？」

「何にもないけど？」

「……なら、いいんだけど」

火蓮ちゃんが僕を気遣ってくれた。顔に出ていたのかももしれない。気を付けないと。学校は充実してて、家に帰っても楽しくて仕方ない。この想い出があれば十分だ。それ以上なんていらぬ。

「ほら、席に着けー」

女の先生が教室に入ってきた。授業開始の挨拶をして、教科書を開いてノートに板書を開始する。軽く聞き流しながらただ、なんてことの無い授業を受ける。

一年の終わりが近づいているから、教室の温度がいつもより低い。暖房が暖かい風を送っているがそれでも冷える感じは消えない。だからだろうか。周りの一部の生徒が毛布を膝に掛けてるのは。特に意識もせず外を眺めていると曇りの空から白い結晶が降ってきた

先生がそれに気づいて……

「うわあ、降ってきたよ。寒いし、明日の朝、車の運転が怖くなっちゃまうよ」

その先生の言葉に一部の生徒が反応する。

「寒いのはひとり身だからっすか?」

「ああ? 成績墮とすぞ?」

「今年は彼氏できたんですか?」

「できんな」

「一人ってどんな感じですか?」

「そうだな……一言でいうと寂しいに尽きる。だから、音が欲しくてテレビを意味もなくつける」

……なんだか、夢の内容と似てる。多分、僕も一人の孤独を紛らわすためにテレビはつけるだろうな。

「ちよいちよい、萌黄」

後ろから冬美ちゃんの声が聞こえてくる。

「どうしたの?」

「放課後ちよつと空いてる?」

「あ、うん」

「映画見に行かない?」

「……いいね。僕も行きたいな」

何だか、気持ちを切り替えたい気がする。変に顔に気持ちを出してしまうと皆に気を遣わせてしまう。

「じゃ、そういうことで」

彼女はそう言うとき普通に授業に戻った。あつという間に時間は過ぎて放課後になった。

「ごめん、僕ちよつと冬美ちゃんと映画行ってくる」

「分かったわ」

「うん。それじゃあ、あとでね」

火蓮ちゃんに一言告げて僕は彼女と映画館に向かった。雪が降りつもって、靴下が少し濡れる。肌寒い。

「いや、寒いね。うちは結構耐性有る方なんだけど。今年は格別かも」
「そうだね。今年は寒いような気がする」

映画館につくと意外にも人が多くいて、制服デートをしている何人かが見えた。

「リア充消えろ……」

「ちよつと、聞こえてるって!?!」

「けっ」

彼女のリア充嫌いは本当に凄いと毎回思う。

「何見る？」

「うちはね、最近の流行りのラブコメ映画を推す」

「じゃあ、それにしよっか」

映画一覧のパネルを見ながらチケットを買おうと列に並んで購入し、ポップコーンを買って飲み物を買ってラブコメ映画のやるシアターに入っていく。周りにはカップルだらけ……

「これって、僕たち場違いなんじゃ……」

「いや、ダイジョブ、寧ろ邪魔する位の気で行かないと」

「ええ……」

まあ、席が端っこなだけ良いかもしれないけど。因みにこの映画は話題も話題。すれ違い系最終的ハッピーエンド作品らしい。

映画では盗撮などは禁止と言う広告が出る。

「うちこれが何気に好きなんだ」

「僕も好きだよ」

始まった。

ああ、テレビでよく見る人だー。

等と言う軽い想いは映像が流れると吹っ飛んだ。素直になれない女性はすれ違いの果てに諦めて、そこで恋が終わると思った時に男性が来て添い遂げた。正直に言う面白いと思った。これは所詮創作だとそう思っても感情移入をってしまった。

シアターから出る。と彼女が歩きながら話しかけてきた。

「いやー、結構面白かったー」

「そうだね」

「……気分転換できた？」

「え？」

「いや、何かちよつとだけ顔が変な感じがしたからさ。女の勘ってやつだけど。まあ、うち以外も何となく程度には感じてると思うけどさ」

「……」

「萌黄はさ、もつと素直になった方が良いと思うよ」

「別に……僕は」

「男が嫌いだった？」

「ツ、う、うん」

「関係ないと思うけどな。性別とか。萌黄が好きになったのがアジフライ君で性別がたまたま男だった位だと思うよ」

「……」

「分かっているとと思うけどね……あっ」

「??」

彼女は話してる途中で何かに気づいて足を止めた。

「じゃ、うちはこの辺で」

「え？　ここです？」

「うん、バイビーバイビーまた明日」

彼女は走って帰ってしまった。彼女を見届けていると外の景色も目に入る。僕はそれを見て驚いた。外はもう、大雪と言ってもいいくらいだったからだ。雪の一つ一つの大きさが映画を見る前とは段違いでそれが深々と降り積もって行く。

「大雪だ……」

これは帰るのが大変だと思う。絶対靴下びちよびちよは確定だし、頭もびちよびちよ。きつと体温も低くなって凍えてしまうだろう。帰ったら頭から雪を払って……夢の景色と今日の前の景色が重なる。

映画館から出ると真っ白で人が歩いてく。自分の前を通り過ぎて僕と同じように一人で頭を濡れないように手で覆う人も見えた。

「萌黄先輩」

「——ッ」

その名前を呼ばれた時、胸が跳ねた。そこには傘を持っている彼だった。

「さあ、この傘をどうぞ！」

「どうして、ここに？」

「映画館に行ったと火蓮先輩から聞いて、雪が降ってきたので傘を届けに来たからですかね？」

「そう……なんだ……ありがと……」

彼から傘を受け取ると一緒に帰路を歩く。愛おしくて、夢と重なって、これが現実でもいつか幻想になってしまおうと思うと悲しくてどうしようもなくなってしまう。目尻に涙が僅かに溜まっていく気がする。

「何か、ありましたか？」

「どうして？」

「いや、何となくです……何となく、貴方がいつもと違う気がして……」

「そんなことないよ」

彼は僕に足幅と歩くスピードを合わせた。それすらも嬉しくて悲しくなってしまう。これが幻想になってしまおう……

いやだよ、そんなのいやだよ……気付いてよ。君から言つて。無理にでも手を引いて。

「俺は萌黄先輩の事は全部分かつてるつもりでした……でも、きっとそんなことないって最近気づいて、だから、話してくれませんか？ 貴方が悲しい顔をしてるのを見るのは何より耐えられないんです」

「……なんでも……」

「聞かせてください。どんなことでもいいです。些細な事でも大それたことでも、俺に出来る事でも出来ない事でも、言つてください」
「……」

「貴方が心配なんです。一人で抱えてしまうあなたがどうしても放つておけない。俺の我儘ですけど、笑つてずつといて欲しい、魔族を倒した後でも、十年先でも、百年先でも。聞かせて欲しいです」

「——ッ。ぼ、僕は……」

雪が積もつていく真っ白な世界で彼と僕は向き合っていた。ただ、何もない真っ白で二人の世界。彼が真っすぐ見てくれた。それは幻想では無くて現実で。その先を考えてくれていたことが嬉しくて。瞳から涙が落ちてしまった。隠そうとしていたけど無理だった。

——抑えられない、もう後戻りも誤魔化すことも出来ない

複雑でバラバラだった感情が一つとなつて、彼に向いた。傘をそこに投げるように置いて彼を抱き寄せてしまった。

「——好きだよッ、君がッ、黒田十六夜が好きなんだ」

彼は傘から手を離してしまった。強くなつていく雪の中で僕達の頭に雪が溜まつて行く。彼の体をこれでもかと抱きしめて彼の次の言葉を待った。

「ッ！ あ、え……俺も好きです」

彼は驚いたようで言葉に詰まったが僕の目を見ると、何かに気づいたのか、直ぐに真つすぐにそう言った。

「それは、どういう意味で？」

「異性として一人の女性として、友達としても、尊敬できる人としても……好きです」

「本当に？」

「はい……」

涙が溢れて止まらない。不思議と大雪で気温も低いのに暖かい。僕は彼に抱き着いたまましばらく動かなかった。このままがいい。時間の感覚が分からなくなるくらいにぬくもりに浸っている。

こんな場所で何をやっていると思われるのかもしれない。だけど、どうでもいい。この時間だけは、この時だけはこうしていたい。

「君は、ずっと僕の側にいてくれる？」

「俺は居たいと思っています」

「そっか……」

「俺だけじゃなくて、コハクさんも、火蓮先輩も、アオイ先輩もそう思っています」

「そうだよね……」

「一人にはしませんよ。彼女達も俺も」

「ありがと……」



帰り際の小学生に指を差されてごちやごちや言われたので流石に抱き合うのはやめた。

「君は……その、自分でこういう事を言うのも、恥ずかしさの極みなんだけど……僕のことを好き、なんだよね？」

「はい」

「えっと、でも、多分、皆も好きだよね？」

「はい。ですから、その、全員と付き合えないかなって、その、思ってます……」

「だよね……」

僕のことやっぱり好きなんだ。ど、どこが好きなんだろう？

「つ、つかぬこと、お伺いしますが、僕のどこら辺が好きなのでしょうか？」

しまった。突然敬語を使ってしまった……

「ぜ、全部ですかね」

「あ、そうなんだ……いつから、その……」

「……それは難しいですね……でも、多分、最初からですね、あの、言いくいんですけど、ずっと好きでした……あの、それで最近、アオイ先輩からも好意を向けられて……それで、その、理想を考えるようになって……」

「理想？」

「あの、全員と付き合えたりしないかなって……こっさり思ってた……すいません……」

「あ、そうなんだ……」

じゃ、じゃあ、僕の事を狙っていたって事!? う、嬉しいけど……恥ずかしい。

それと好きな所って全部って言ってたけど……心も体もってこと？

心を好きになってもらったのは嬉しいけど身体的に好意を持ったとか……僕であり得るのかな？

身長は彼より高いし……胸部は、その、結構、彼好み？　とか、そんなことがあるのかな？

それとも足？　生足がエロいってよく、火蓮ちゃんに言われるし。あれ？　ちよつと待って!?

もし、身体的にも好意を持ったのだとして、その先はどうなんだ!？　お、男の子ってそ、そういうことをしたいって聞くし、特に彼なんて毎日、超絶素敵な女の子達と過ごして、ぜぜぜ、絶対に、た、溜まってるだろうし……

彼女になったらそういうことも!？　足で、エッチなこと!？　あ、いやでも、まだ一応付き合っていないし……

そもそも、四股!？　この問題はどうするの!？　現代だともういった事は認められてないし。重婚なんてもつての外。

そもそもそもそも、コハクちゃんたちが四股を認める!？　いや、絶対に認めないよね!?

僕、個人としては……彼と一緒になら何番でもいいし、皆と一緒にだと楽しいし賛成と言う立場なのかもしれないけど。表立っていきなりハーレムを作ろうなんて言えるはずないし。

「あの、萌黄先輩大丈夫ですか？　百面相してますけど」

「ダイジョブー!」

「そう、ですか……あの、全員と付き合うって事に関しては何とも思わないんですか?」

「僕は良いと思う。賛成かな?」

「え?　マジですか!？」

「あ、うん」

「ありがとうございますー！」

「ちよ、こんなところで土下座しないで!!! ほら、ご近所の人達が凄く見
てるんだよ!!」

「もう、本当にありがとうございます。おでこの骨が砕けるくらいの
土下座をします!!」

「そんな、雪に顔を打ち付けないでよ!!」

僕は急いで彼を起こして土下座を止めさせた。

「フフツ」

思わず、幸せの笑みを抑えきれず笑ってしまった。これから先にど
んなことがあるのか分からないけど、それでも、僕はこの人と歩んで
いいんだと思うとどうしても嬉しくてたまらなかった。

百十話 幸せ

昔から、なぜ自分がこれほど不幸なのか分からなかった。頭に激痛が走って、腕にも足にも腹部にも。痛くて痛くてたまらない。

『——痛いよッ、やめてッ』

こんな事を言ってもやむ事なんて無い。口の中に血の味が広がって、また涙が止まらず、声を抑えられず、只管に怖くて怖くて痛くて。

『貴方っ、もうやめてあげて!』

『黙れッ! クソがッ、誰のせいでプロジェクトが失敗したと……』

お母さんが止めるけど、それでも父親である男は仕事の失敗のストレスを私達を殴ることで発散する。お母さんも僕も心身ともに限界だった。本当に限界だった。

僕がここまでされても生きていられたのはお母さんのおかげだ。庇って、慰めて、ずっと面倒を見てくれた。怖くてトイレに行けない時も一緒について来てくれて、怖くない様に桃太郎を話してくれた。

お母さんは悪くないのに何度も僕に謝った。痛い思いをさせてごめんねと。

『ごめんねッ、ごめんねッ、萌黄。お母さんがしつかりしないから、お母さんの役目を果たせないから』

そんなことはない。お母さんは誰よりもお母さんだった。そして、家の中に隠しカメラと盗聴器を隠して、あの男の悪行をとらえて警察に突き出した。この時も、お母さんは恐怖で震えていた。

バレたら暴力どころじゃすまないかもしれない。きつと、そう考えていた。お母さんは体が弱いから、死の意識が常に頭にまとわりつい

ていたはずだ。それでも僕を守ってくれた。

愛を感じた、ぬくもりを感じてようやく訪れた平穩に人並みの二人の幸せに感動した。

でも、それも長くは続かなかった。

お母さんが入院したんだ。ずっと、体調は悪かったから心配した。だけど、お母さんはきつと良くなるって信じていた。

お母さんが入院したのは小学三年生の時だった。

この頃から、僕は身長が周りの女の子より大きくて、男子からバカにされたり、からかわれることも多かった。

『ちよつと、そんなこと言わないでよ!』

『そうよ、そうよ』

『な、なんだよ』

『つち、巨人の味方しやがって』

女の子が庇ってくれたんだ。教室の中でも外でも守ってくれたんだ。幸せだった。不幸だと思っていた、ずっと自分にとって最悪しか来ないと思っていたから。

そして、小学四年生の冬。

『お母さん! 縄跳び大会が今度の冬休み中にあるんだ!』

『そう……頑張ってね……』

『うん。僕が頑張ったらお母さんも元気になるよね?』

『……そう、ね』

お母さんの歯切れの悪い返事に違和感を持っていた。前より細い腕に違和感を持っていた。肌が異常に白い事に違和感を持っていた。弱弱しいお母さんが息を吹けば居なくなってしまう違和感を持っていた。

でも、自分自身で気付かないふりをした。怖いから、それを認めるのがただ、怖いから。

本当は分かっていた。お母さんがもう長くない事くらい。だけど、信じたかった。お母さんはずっと一緒に居るって。

縄跳びの練習を頑張って、クリスマスも近いからプレゼントで手編みでお揃いのマフラーを作って、ケーキだって頑張って試作して。そうすれば……

本当はクリスマスに祝いたかったけど、縄跳びの大会は12月26日で……その日に全部祝えばいいと思っていた。

そして、町内の縄跳び大会で一番を取った。賞状とケーキとマフラーを持ってお母さんの元に向かった。

喜んでくれる、もしかしたら、元気になるかもしれないと淡い期待を持っていた。

『ありがとう……萌黄……頑張ったね』

『うん』

お母さんは僕の頭を撫でた。その手はやっぱり暖かくて安心して、しわが沢山あって、苦労人の手で、その手のぬくもりが好きだった。

お母さんは笑って、僕も笑って。その日は沢山話した。どうでもいいことも、大事な事も、プレゼントも渡してこれを持って一緒に何処かに行こうと話した。

その日は、沢山話して最後にお母さんが言った。

『幸せになつてね……』

そのお母さんの言葉にうなずいて、その日は帰って……次の日になって急な知らせを聞いて急いで病院に向かったら……お母さんはもう話せなくなっていた。

でも、不思議と悲しくなかった。お母さんの顔を見て、お医者さんから説明を受けたけど、何とも思わなかったんだ。

そのお母さんの死んだ日は普通にご飯を食べて、普通にテレビを見て、普通に寝た。

何とも思わなかった。ずっと、何日も。普通にただ過ごした。

そして、お葬式の日になった。その日も何とも思わなかった。けど……最後に家族の方は面会を許されて、最後に触れ合う機会が与えられた。後は燃やして終わりだから最後に触って良いと言われたんだ。

何気なくお母さんの頬に触れた。真っ白な顔のお母さん、唇は青くただけど、そこにいるのは間違いなくお母さんで……でも、そのお母さんは冷たかった。

この時、初めてお母さんが死んだと分かった。もう、目の前にはいないと分かった時、ダムが崩壊したように涙があふれたんだ。

ただ、事実を受け入れられなかっただけだった。感覚がマヒして、感情がどうにかなくなってしまつて、誤魔化していた、勝手に思っていた。お母さんはずっと居るって。

でも、どうしようもなく冷たいお母さんにもう……誤魔化せなくなっていた。

寒くなった。寂しくて、たまらない。お母さんにはもう会えない。お墓参りに行っても会えるはずもない。だけど、足繁く通った。その度に思い出すんだ。

『幸せになつてね……』

お母さんの言葉、最後の言葉。学校では男子に馬鹿にされるけど、それでも幸せだから、友達がいるから、庇ってくれる友達が居るから。

中学になつて、一目ぼれして、告白して付き合えることになつて、お母さんに言われたように幸せになれると思つていた。中学になつても男子には身長の方は馬鹿にされるけど、それでも幸せに……

『身長高すぎてちよつとキモいけど顔とかはいいから。取りあえず付き合うだけ良いかなつて』

そんな事は無かつた。悲しくてたまらない。その時に男と言う存在は悪だと知つた。

高校生になつて、色んな人と関わつて幸せになつた気がした。でも、心には埋まらない周りのずれがあつて、それはいつまでも消えなくて。

そんなとき、火蓮ちゃんと会つて、仲良くなつて。
少し、心が埋まつて。

でも、二年生になつて後輩に変な一年生が現れて。火蓮ちゃんを取つて行つた、それが嫌で、でも彼女が幸せならそれでいいと思つて。

そしたら、自分のように騙されたと知つて彼に喧嘩を売つて。

そしたら、僕の勘違いで。最初は変な奴だと思つた、怒らない、いつもニコニコして行動は意味不明。

それでも、どこか暖かさがあつて。それに何か覚えがあつて。

皆と仲良くなつていくうちに、不思議と彼に惹かれることに気づいた。普段の何気ない行動にも愛を感じた。異常な行動にも愛を感じた。全部に愛を感じた。

もう、好きになつていた。彼が。

でも、皆だつて好きだから。言わない方が良いかなと思つて。でも、抑えられなくて。

告白した。

彼も好きだと言つてくれて嬉しかった。



久しぶりに自分自身の夢を見た。不幸から始まつて、愛を感じて、必死になつて生きた夢を。

『新郎新婦入場です』

僕はウエディングドレスを纏つて、彼と歩く。僕の方が身長が高いけどそんなことはどうでもよくて。教会で少人数で行う。

結婚式の規模なんて大々的でなくていい。小さくてもいい。そんなことは些細な問題だから。式が進んでいく。

『新郎新婦誓いのキスを……』

『は、恥ずかしいから……オデコでいいよ……』

『は、はい……』

お母さん、産んでくれてありがとう、育ててくれてありがとう。守ってくれて、愛をくれて、トイレについてきてくれてありがとう。きつと、上手く全部が良くなつてない。喧嘩だつてするだろうし、

すれ違いだつてする。正当な道ばかりなわけがない。厳しい道も歩くだろう。だけど、きつとその度に彼が手を取ってくれる。歩幅を合わせてくれる。一緒に泣いてくれる。笑ってくれる。暖かくて、優しく、不器用だけど馬鹿みたいに真つすぐで、誰よりもカッコいい。

だから、この人を選んだ。僕は少し、彼に顔を近づけて、互いに顔を赤くしながらよそよそしくもしながら。そして、彼は僕のオデコに……まあ、式で唇は恥ずかしいから仕方ないよね。

『——お母さん、僕はこの人と幸せになるよ』



「はッ!!!」

そこで、僕は目を覚ました。ううう、なんと言う夢を僕は見ているんだ。恥ずかしくて顔が熱い。

隣には皆が寝ている。

今は幸せだ。皆が居るから。でも、これからもつと幸せになる。夢のように。きつと

そう思つて再び布団をかぶつて幸せな夢に落ちて行つた。

百十一話 天使が来る

とある、クリスマスの数日前の日。夕食の時間、彼が覚悟を決めたように床に手と膝をついた。それぞれが一体どうしたんだという表情を向ける。

「あの、その……皆さんに言わなければならない事があります」

「どうしたんですか？」

「まっつて、嫌な予感がするわ……」

「クロ？」

僕には彼が何を言おうとしているかなんてわかっている。彼は……全員と付き合いたいと言いたいのだ。

流石の彼もこういった事を言う事はためらわれたのか、僕にと愛の告白しあつた日から、少し時間が経っている。

「俺と全員、付き合ってください!!」

オデコを勢いよく床にたたきつけた。コハクちゃんは驚き過ぎて箸を落とし、火蓮ちゃんはやりと頭を抱えて、アオイちゃんは無表情ながら驚いているので口を開けていた。



「どうしましょう、どうしましょう、どうしましょう……」

「……四股と来たか……まあ、予想はしてたけど……」

「……四股……シンキングせざるを得ない」

まあ、あの場では普通に断られたというのは言うまでも無く、取りあえず保留にしたいというのが三人の意見だ。僕は別に構わないけど、今の所は四股でも良いとか、何も言わずに傍観に徹している。

「萌黄は四股についてはどう思うのよ」

「えっと、どうだろね……」

「そう簡単に承諾は出来ないわよね……」

「萌黄もクロ好きだったんだね……」

「あ、うん、実は……」

「そう……皆お揃いだね」

「そうだね……」

火蓮ちゃんは四股について頭を悩ませ、アオイちゃんは急な天然発言をする。そして、コハクちゃんは……

「ううう、どうしてこうなったんですかっ?」

計画が破綻して絶望するラスボスのように彼女頭を抱えていた。それぞれ、彼女になるか、否か、保留にするか、何かお揃いで嬉しいか、悩んでいるようだ。

この状況で僕はハーレム肯定なんて言えない……

ハーレムを肯定して、しかも何番目でもいいなんて……皆は順番を凄く意識するけど、そんなが一番とかいいのかな?

やっぱり何番でも彼と皆と一緒にそれでもいいと考える。そう、何番でも良いのだ、順番なんて、順番なんて……

あれ? という事は……今の所唯一の彼女ポジ?!

つまりは一番!? いやいやいやいや、一番とかパンの耳位にどうでもいいことであって! いやでも、ラスクにしたら美味しいけど!? いやでも、い、一番かあ……

今の所、だけど……それでも一番。何というか、心が躍ってしまおう。それが顔に伝わって表情筋が……

「……萌黄？　なんか、顔変だよ……ダイジヨブ？」

「あ、うん。大丈夫だよ！」

「そう……？」

アオイちゃんに気づかれた。危ない危ない、ここで自分だけ彼女がバレたら物凄く嫌味になってしまう。今の所は、バレない様に皆と歩幅を合わせる感じで行こう。



いつからだろう。彼をどうしようもなく想ってしまうのは。ずっと、ずっと、ずっとと想っている。誰よりも私が想っていると自信を持って言える。独占したくて仕方がない、愛し合いたくて仕方がない。

私は彼がいてくれればそれでいい。それだけで何もいらぬと時折考えてしまう。その考えはしてはいけないものだろうけどそう考える。でも、彼がみんなと一緒に居たいと言うならそれでもいい。

皆の事も好きだからと言う理由も勿論あるけど。それでも、何よりも彼が優先される。

だから、皆で……と私も思う。彼が皆が良い想うなら、それでも良いと思う。きつとそれも楽しいから。

——でも、もし、皆が私を拒んだら、彼も私を拒むのだろうか。

言いようのない恐怖が私を襲う。彼が居なくなったら私は本当の意味で壊れてしまうと分かっている。危うい存在だと自分で分かっている。紙一重で私は普通を保っているだけ。

これがいつまで続くのか私は、怖くて仕方なかった。



占い師から連絡があった。銀堂コハクに向かって何か近づいて

いると。

本来のストーリーなら銀堂コハクは覚醒する前に天使が現れて、天使によって心の中に入られて精神の中で戦うというのがストーリー。

だが、人間の精神は弱くてもろいから彼女は自らに自己暗示をかけて強いと錯覚させて攻撃を凌ぐ。魔力ではなく精神の戦い。しかし、彼女は何かしのぐが防戦一方で死を意識する。

そこで、他の魔装少女達も彼女の精神の中に来て一緒に戦って、精神の中から追い出す。これで銀堂コハクは仲間の大切を感じ、覚醒する。そして倒す。これによって絆と言うのが生まれるのだ。

だが、既に彼女はパワーアップしているし、絆だって本来より生まれている気がする。それに中間パワーアップをすると精神の中に入られるという能力を無効化に出来る。既に強化されていることはあっさり終わってしまうのだろうか？ 天使は精神に入るといったのが強いが直接的な戦闘能力は強くない。

つまり、実質彼女達四人でボコボコに出来ると言う事を予想している。



世界に大穴が開いて、そこから天使が舞い降りる。それはただ、輝き町を照らしていく。町の人々はその光に魅せられるが次の瞬間には光が矢のように降り注いだ。百、いや千程の矢。

流星群のように降り注いでいく。だが、光の矢は大きな水と光の壁に寄って阻まれた。町への被害はゼロになる。

その次の瞬間には稲妻が登って行き、天使の翼を討つ。羽の穴が開き、天使が痛みに顔を歪めるが直ぐに翼を再生させる。大穴が塞がれ空中を飛行し、銀堂コハクに近づく。

怪しげな光と共に彼女に近づき彼女に触れるが……合わない磁石を近づけたように弾かれ、光も砕かれるように霧散した。

本来ならここで天使は彼女に入るはずだった。だが、既に彼女には

十六夜と言う心の支えと愛があり覚醒もしており、精神への侵入が出来なかった……

「これはッ！ 星霊のッ!？」

自身に刻まれた魔王の片鱗の記憶が星霊の力を観測する。彼女だけではない。自分が相手にしている四人全員から観測されているのだ。

天使はこのままで死ぬと想像が出来た。だからこそ、一旦逃げた。

僅かなズレ。十六夜が歩んできた道のずれがここに来て、ピークに達してただ最悪を回避するだけでなく、回避したがそれが飛び火のよう……近くで見ている十六夜へと向かう。

天使は十六夜からは星霊の力を感じない。と分かり、隠れて見ている十六夜の元に向かって、十六夜の精神の中へと退避することを判断する。

天使は彼女達は十六夜の方を庇いながら戦っていると気づいた為、彼女達の芯だと気づいた。ついでにコイツを消せば戦況がひっくり返る可能性に天使は賭けたのだ。

——怪しげな光と共に天使は十六夜の中へと入った。



そこは、黒の世界だった。人間の精神とはその人の思想や深層心理が深く影響する場所であり、精神の本人の特徴が強く現れる場所である。

そこに天使が居た。彼の前には精神体の十六夜が居た。ここで彼を殺せば現実でも殺すことが出来る。

天使の剣を持ち、十六夜の胸を貫こうとしたが……次の瞬間にははじかれた。否、手その物が切れていたのだ。

「ッ?!」

彼の手には剣が握られていた。黒い剣が。彼は剣をふるい天使の翼を落としにかかる。

「ッ、剣だと?! ただの精神の世界ではないのか?!」

天使は手を再生させて、剣を顕現しそれをガードする。両者の剣が擦れ、火花が散る。黒い剣と白い剣が交差する。

「この世界で剣を作り出すなどあり得ない?! お前は一体何者だ?!」

「……何者でもない」

「ただの凡人がここで剣を使う等と……ここは精神しか意味をなさない世界。私はこの世界でも力を使えるが……何故ッ?! まさか、精神を構成するものに剣と言う概念が一つにあるのか?!」

外から飛来した天使はともかく、精神内では本人の精神だけが力を成す。正史は銀堂コハクは自分自身に無理やり暗示をかけて攻撃を躲し、耐え、仲間が来るまでの時間を稼いだ。

彼女は仲間が来ることを前提にしていたのだ、だからこそ彼女はその時、仲間を信頼していることに気づく。

ここで大事なのはあくまで彼女の精神を構成するものは、あくまでも人並みの概念や女の子の概念。

だが、ここに彼は違う。

——いや、もしかしたら、全種族の男と言う存在は違うのかもしれない。

剣はロマン、魔法はロマン、必殺技やスキル。そう言ったもので、頭に、心に、精神に刻まれて、それが現在の自分と言う存在の一つになっている。

今までの経験や夢が力となるのだ。授業中の妄想、三角定規の穴にペンのフックを掛けて戦闘機のようにして空に飛ばせる妄想。そういったものが精神の力になる。

だからこそ、精神の剣を振るうことが出来る。

ここは精神の世界。外から飛来した天使はここに入った時に、自らの直接的な肉体を精神に合わせた肉体に変更して入り込むため力は使えるがダメージを負う。

普通ならそんなことに気を配る必要がない天使。だが、目の前には不条理の存在。死と言う意識が彼に駆け巡った。

「デュクシー」

彼が剣を振り叫んだ。その瞬間、天使の手が飛ぶ。まさに閃光に一撃。幼い時にスーパールの無料段ボール置き場から拝借し、それを素材に作り上げた、魔剣カスターネット。そして、それを振るときに自身で効果音を言うという昔の彼の癖がそうさせている。

これをするので彼は良い波に乗る。精神が加速する。

自信の常識を超えた一撃に呆然とする天使。手を再生させるがだとしても驚きを隠せない。

「現実であったならば絶対に出せない至高の剣……これは、精神が肉体や常識を超越している……クソがッ！」

天使が剣をとり十六夜へと振りかぶる。剣と剣が何度も交差して火花が散る。天使には追いつくだけで精一杯。

天使は飛び、羽をはばたかせ光の矢を千放つ。黒騎士の剣が光を放ち、腕を振り剣に矢をあてて全てを消し去って行く。彼の精神が加速

して、剣も加速していく。

「……デユクシ、デユクシ！」

其れは精神体にも影響し、天使には全く入り込む余地のない異次元の極致へと

未だ進化は止まらず、ドンドン良い波に乗り、精神が加速する。だが、黒騎士はこう思う。

速さが足りない。

『——速く、もツと速く……』

剣で翼に穴をあけてぶった切って再生速度を大幅に上回る。

「ツ!!!」

剣を両手に顕現する。

「デュアルストームダブルクロス・オーバーレイ・ブラックシユバルツ
ブラック・ごぎょう、はこべら、ほとけのぎ・モード」

大袈裟に言うが端的に言うのと両手剣である。それで天使をバラバラにした。嘗ての何となくで作った、カッコいいと思った言葉の羅列。その時は意味なんて無かった。だが、ここでは意味を成す。何故なら、それは彼の構成する精神の一つであるのだから。

黒騎士は両手を掲げて力を高める。

「ドラゴニックストリーム・ジ・アブソリユート・オーバードライブ・スピリチュアル・ヘカトンケイルダイナミック・オーバレイ・フューチャリング・カオスイニティ・コスモスタナティス・オブ・エクスカリバー・ビーフ・オア・チキン・エレメンタリースクール・ジュニアハイスクール・オルタナティブ・ストライク……」

台風でもあり雷でもあり、小学校であり、中学校であり、牛であったり鳥であったりそう言ったものが群れとなって天使に向かった。

精神に入り込んだ天使が完全に吹っ飛んだ。黒騎士はフツと笑った……

「俺のドラゴニックストリーム・ジ・アブソリュート・オーバードライブ・スピリチュアル・ヘカトンケイルダイナミック・オーバードレイ・フューチャリング・カオスインフィニティ・コスモスタナティス・オブ・エクスカリバー・ビーフ・オア・チキン・エレメンタリースクール・ジュニアハイスクール・オルタナティブ・ストライクに抱かれて消えろ」

「十六夜君?」

「え?」

そこには十六夜のピンチと思って彼の精神内に駆け付けた。魔装少女達が見てはいけないものと見た顔をしていた。



「どうすんのよ?」

「そんなの僕に言われても分からないよ」
「重症……」

僕達は全てが終わったと後に家に帰った。天使は彼が倒したようでそれは良かったのだが……僕たちは見てはいけない物を見てしまったのだ。

「十六夜君！ 元気を出してください！ ドラゴニックストリーム・ジ・アブソリユート・オーバードライブ・スピリチュアル・ヘカトンケイルダイナミック・オーバレイ・フューチャリング・カオスインフィニティ・コスモスタナティス・オブ・エクスカリバー・ビーフ・オア・チキン・エレメンタリースクール・ジュニアハイスクール・オルタナティブ・ストライク。とつてもカツコよかったです！ それとユアルストームダブルクロス・オーバレイ・ブラックシユバルツブラック・ごぎよう、はこべら、ほとけのぎ・モードもとつてもかっこよかったです!! 私感激しました！ あれは、春の七草を取り入れてオシャレでした！」

「あ、あ……あ」

彼は目のハイライトを無くして椅子に座り、『あ』しか言わない。相当メンタルに来ているようだ

「このまま、ワンクールくらいあのままじゃないでしょうね……」

「どういう意味……?」

「ごめん、こつちの話……」

コハクちゃんの急な天然により益々メンタルが削れる。

「こうなったら、あーし達で癒してあげよう」

「そうね。いつも助けてもらってるし」

「でも、何すればいいかな?」

「うーん……尽くしてあげればいいんじゃないかしら? 十六夜、メイド好きそうだからメイドの格好してお世話するてきな?」

「おお、いいアイデア……」

と言うわけで彼を励ますことになった。

百十二話 癒し

ソファに力なく座り、虚空を見つめ何も話さない彼。最早、いつも
の勢いも優しい雰囲気もなくなった、抜け殻のようだ。

「もしもーし？ 十六夜君？ 貴方のコハクですよ〜」

コハクちゃんが耳元で囁くが彼は目のハイライトを消して無言
だった。いつもなら顔をニヤニヤさせるのだが無言。圧倒的な無
……あ、ちよつと意識してる

「十六夜君……」

彼女は彼の隣から一旦離れて、僕たちの方に寄って来る

「十六夜君、相当萎えているようです」

「クロは傷口に柚子胡椒を塗ったくらい酷いはず。しょうがない」

「ううう、十六夜君いつもならデレデレしてくれるのに……」

コハクちゃんが悔しがるとような声を上げる。だが仕方ない、今の彼
は相当病んでいるのだから正攻法では立ち直らないだろう。

だからこそ火蓮ちゃんが立ち上がった。彼女はもう、沸騰したタコ
のように顔を赤くしてメイド服を着て彼の元に近づく。カチュー
シャを頭につけて黒を基調としたミニスカート。

この間も劇で同じような格好をしていたが、この間より数段恥ずか
しいようだ。

「きよ、今日だけ、十六夜はゴゴゴ、ご、ごしゅ主人さまっ！ だあか
ら！ 何でも、め、命令して頂いて構わない所存であるのよー！」

語尾!! 語尾が滅茶苦茶!! 目が！ 目がぐるぐるして錯乱して
るよ！ まあ、恥ずかしいというのは分かるけど……

「……可愛い」

あ！ 彼がちよつと反応した！ 目のハイライトに少し光が戻り絶望の繭から僅かに羽化する可能性がある気がする。

「でも、その、あんまり過激なのは特別な関係になってからだけ……まあ、でも、ひ、膝枕くらいならしてあげるわよ。ほら、ここに頭乗せて……」

彼女はソファに座り、自分の膝を指さす。柔らかそうで美しい彼女の太もも。細身に見えるけどそこが良い。

「いいんですか？」

「いい、わよ」

彼は良いと言われても判断しかねるようで頭がフラフラしている。変な所でチキンな彼である。彼女もそれは分かっているようで彼の頭を掴んで自分の太ももに落とす。

「こ、これは……」

「耳かきもしてあげてもいいけど……」

「マジですか？」

「マジよ」

「なん……だと……お願いします！」

元気になるの速過ぎるんだけど!? 恐るべし、火蓮ちゃんのメイド姿。そして、彼女は元々準備していたのであろう、耳かき棒で彼の耳の掃除を始める。

「何て、ずるい人……」

「あーしがしてあげたかった」

二人が嫉妬の視線を向ける。アオイちゃんは彼限定で世話好きの所があるから、コハクちゃんは真つすぐな視線。

しかし、今は火蓮ちゃんのターン。

「どう?」

「幸せです!」

「元気出た?」

「出ました!」

「そう……もう、ホントにしようがないんだから……」

仕方ないと言いつつそれも悪くないと思っっている彼女。表情は薄く微笑んで今までとは少し違う感じがする。彼女にカキカキされながら彼は至福の表情でデレデレである

「癖になりそうです……」

彼がそう言うとな彼女は薄く微笑んだ。

「そう……癖にしているのよっ」

そのセリフは何か分からないけど凄く良い!!

艶があつて母性のある感じて童心に帰ってしまいそうなこの……何と表現すればよいやら。バブみを感じると言う事だろうか!? 何だろうこの感じ!?! いつもメインヒロインと言っている彼女だけども間違いなくそう感じてしまう。

彼も彼女に完全に身を預けて、脱力して時間が過ぎていく。

「じゃあ、今度は反対側……」

「それは私がやります」

火蓮ちゃんが片耳の掃除をやり終わると、いつの間にかメイド服に着替えたコハクちゃんが彼を挟んで火蓮ちゃんと対立するように座っていた。隠密で速すぎて見逃してしまった。

「二番煎じかしら?」

「ただ、十六夜君に喜んで欲しいという純粋な気持ちですっ」

「あざとい……」

彼女は短いスカートなのにそれをさらに少し、めくって白い太ももを大いに彼の元に晒す。うわああああああ。太ももが肉付きが凄く良いと声を出して言いたい！ 僕を寝かしてくれないだろうか？

「私の方が、柔らかくて寝心地が良いと思いますよ？」

まるで蜘蛛。糸を吐き罫を作った蜘蛛！ しかし、先ずは獲物が引つかからないと意味がな……ああ、うん引つかかるよね。

「くつ、見えそうで見えない感じがたまらない……」

「ちよつと！ そういうのはダメじゃないの!？」

ちよつとエツチな彼女の誘惑的な誘い。絡まった糸はもがこうとすればするほど、絡まって行く。彼も彼女を意識することしかできない。

「さっ、どうぞぞ？」

彼女は自分の太ももに誘うように指を差す。彼もフラフラとそこに誘われていき……

「ちよつと、私が居るのよ！」

「はッー！」

彼は火蓮ちゃん言葉に覚醒する。すると、コハクちゃんが追い打ちにとそつと両手で包んで上目遣いで甘える猫のような声で言った。

「十六夜君っ？ 私の耳かきは嫌ですか？」

「あ、い、その……」

負けじともう片方の手を火蓮ちゃんが掴んだ。強気で負けないという意思をひしひしと感じさせるいつも通りの彼女。凜とした目で僅かに上目遣い。

「私じゃ、満足できない？」

「え、そ、そんなこと……」

「でも、コハクのところに行こうとしてるじゃない……私より、コハク？」

「あ、そんなこと……皆、いちば……」

「そうですね……頼りがいのある年上の方が甘えられた十六夜君の好みですよね……」

「あ、いえ、おれは、み……」

なにこの新手の修羅場……悲壮感を互いに纏うってどうなんだろう……効果的な手であることは今日の前で行われていることで分かるけど。

と思っているとアオイちゃんが二人を止めた。

「それ以上はダメ……クロが困ってる」

「そうね……」

「そうですね」

彼女が間に入った事で修羅場は事なきを得た。

「クロ」

「はい」

「元気になった？」

「はい。おかげさまで」

「そう……なら、よかった」

でた！アオイちゃんの『無自覚』頭ナデナデと微笑み。何て屈託のない笑顔なんだろう。打算とかあざとさとか無いからこそその最強の一手。

「ど、どうも……」

「ナデポとニコポを無自覚にこれでもかと思われたら……何も言えないじゃない」

「私だって！十六夜君が無事でよかったです！」

今度はコハクちゃんが頭をなでなでしてウインクをする。ウインクから星が飛び出してきそうな勢いがあり素晴らしいんだけど、アオイちゃんとかちよつと違うような気がするの僕だけだろうか。

「ニコポとナデポは無自覚だから効くのよ。コハクと私じゃこの領域には敵わないわ」

「無自覚ですか?」

「嘘つけ! いい加減天然と無垢なヒロインを装うのはやめなさい!」

「ん? 私、よく分かりませくん?」

「あっそ」

「急に冷たくないですか?」

「いや、言うだけ無駄かなって……」

二人が話す中、アオイちゃんが大きなゴーグルを持ってきた。

「これやってみて、もっと元気になって欲しいから。きつと楽しい」

「VRですか?」

「何かで当選した」

「俺がやって良いんですか?」

「うん。剣のゲームだよ」

彼はゴーグルを掛けてゲームを始める。

「お、おとおお、これすげええええ! あ、あぶねえ!」

これ、外から見ると結構シニールだし家の中だから危ないんじゃないや

……

「いってえー!」

あ、テーブルに弁慶の泣き所をぶつけた。痛い痛いと言っただけで立ち、

ゴグルで視覚は違う景色を見ているから混乱したのだろう、そのままバランスを崩した。彼はフラフラして……何かにつかまってバランスを保った。

「あ、え、？ いぎ、よい、くん？ あ、ああの……これは……」
「すいませえええんんんんんん！！！！！！」

コハクちゃんの胸に右手が埋まって、掴まれた彼女の顔が赤くなる。彼は視覚がないけど、感触で察した様で勢いよくそこから手を離す。しかし、ビツクリしたのか勢いが良すぎて……右手が……

「い、いぎよいッ！ こ、これはいくら、なんでもッ！」
「す、すいませえええんん！！」

今度は程よい胸部をタッチしてしまい、ビツクリして勢いよく彼手を離れた。火蓮ちゃんは控えめの胸に触られ、ビツクリして、流石にこれは彼女の的にはまだ、ダメなようだ。

さて、そのまま彼の勢いは止まらず、神速の右手はアオイちゃんの方に向かって、言うまでも無く胸部に掴まってしまった。

なんなの、この謎の軌跡は？

「クロ？」
「まじで、すんませえええんん！！！！！！」

彼はそこから離れるのだが足が絡まってバランスを崩し、僕の方に倒れてきた。危ないから支えてあげようとしたら……彼はバランスを整えようとして、逆に変な速さになり、彼の両手が僕の両胸を思いつきり掴んだ。

僕はFくらいの大きさはあるからコハクちゃんの次に大きい。

まあ、どうでもいいけど。

これは……わざとやってるとしか思えないんだけど。いやでも、VR中だし……奇跡が起きたの？

彼は勢いよく離して、VRのゴーグルを置いて土下座をした

「本当に申し訳ございません!!! いや、でも本当にワザとじゃなくて、真摯な軌跡と言うか!! あり得ない偶然が固まってと言うか、でも、ワザとじゃなくて!!」

「分かってますよ……まあ、出来過ぎな軌跡だと思いますが……それに、前にもゴニョニョ……」

「まあ、そんなに謝るなら……許してあげても、マンガみたいに触った事すら分かんないとかじゃないみたいだし、悪いと思ってるみたいだし……でも、何なのかしら? この奇跡の怒涛の4連続のラツキースケベは?」

「本当にすみません! こんな事が起こるなんて! いや、マジですいません! 変な事でいじけてすみません! 厨二ですいません!」

コハクちゃん的には前にも同じことがあったんだっけ。思い出して恥ずかしさが倍増、火蓮ちゃんは胸元を手で隠しているが許す方向らしい。彼は土下座。頭を下げたままで一切上げようとしな

「あーし、許すよ。ワザとじゃないって分かるし」

「ありがとうございます」

「うん。いいよ。おばあちゃんも無闇に人に体を触らせてはいけな

いって言ってたけど、大切な人なら良いって言ってたから、そんなに謝らないで?」

「アオイ様……」

彼女は微笑みながら再び頭を撫でた。彼の中では神格化になつて

る。

「萌黄先輩もすみません!」

「いいよ、別に……ワザとじゃないなら」

「ありがとうございます!」

彼の土下座はそのまま数分間続いた。



彼は先ほどのことを反省しているのか。2階の自室のベランダで風にあたっていた。

「どうしたの？」

「あ、いえ……」

再び、目からハイライトが消えて絶望の表情している。

「話してほしいな？」

「……皆が実は嫌がってたらって思うと……」

「皆許すって言ってたよ。勿論僕もだけど」

「本当は心では嫌がってたらどうしようって」

「……大丈夫だよ、僕が保証する」

「こういうところが皆好きなんだよって言った方が良いのかな？」

「萌黄先輩は本当に嫌じゃなかったですか？」

「ビツクリはしたかな……でも、本当に気にしないでいいよ」

「本当の本当ですか？」

「本当の本当」

「……」

変な所で悩んじゃうのも彼らしい。自分の事は直ぐに立ち直ったり思考を放棄したりするのに僕たちのことになると何処までも考える。でも、もうちょっと楽に気軽に考えても良いと思うけど……

「君は、その、何と言うか、自分の彼女の言う事が信用できない？」

「あ、か、彼女!？」

「な、何驚いてるの？ えっと、ハーレムを僕は認めて告白しあったん

だから……僕は今の所、唯一の君の彼女じゃないの？」

「そ、そうでした！」

「う、うん。それで、君の彼女が気にしなくて良いつて言ってるのにまだ気にするのかな……？」

「それじゃあ、一応……」

「一応？」

「あんまり……」

「あんまり？」

「ま、全く気にしません……」

「よろしい、それでいいんだよ」

自分で自分の事を彼女と言うのは恥ずかしさの極みだね……今後は控えて言うことにしよう。

夕日が僕たちを照らして、風が透き通るように僕たちを駆け抜ける。この時、一緒に居るこの時間を共有しているという事実が嬉しいのは秘密だ。

「皆には、このこと言った方がいいんでしょうか？」

『このこと』とは現在の恋人関係のことだろう。秘密にするのもどうかと思うが言わない方が僕は良いと思っている。

「言わなくて良いと思うよ。言ったら皆慌てるから。判断を焦って出させるのは君の求めるものじゃないでしょ？」

「そうですね。じゃあ、秘密と言う事で行きましょう」

「そうだね……」

秘密の恋人関係とは……何というか、こう、心がもぞもぞするといふか何というか。皆に申し訳ないという気持ち等が混ざり合って複雑だけど、嬉しいという感情もある。

「恋人か……萌黄先輩が俺の恋人で彼女……くっ、最高かよ」

「そういう事言われると恥ずかしいんだけど……」

「すいません。ただ、もう、嬉しくて！　こんな素敵な人が恋人なんて俺って、幸せ者だなんてッ！」

彼は、笑った。心の底から嬉しそうに。その笑顔を見た時に僕はこの人がやっぱり好きだと気づいて、自然と自身も心からの笑顔を増かべていた。

「僕も幸せ者だよ」

彼と心の底から笑いあって、恋人になったと僕は改めて感じた。

異世界旅行編

百十三話 再び異世界へ

「へえー、じゃあ、付き合ってたんだ」

「う、うん……」

教室で冬美ちゃんがニヤニヤしながら僕をからかうように話しかける。

「セックスは？」

「してないよ!! 何ですぐにそっちに行くの!？」

「いや、普通でしょ」

「普通!？」

「うちがあれだけしてあげたんだから、行くところまでいってくれないと」

「それは、まあ、感謝は凄くしてるよ？ 冬美ちゃんのあの励ましは最高だったけど……」

「じゃあ、何処までなら行けるの？」

「……手をつなぐくらいなら……」

「ピュアか……まあ、明日から冬休みだし距離なんて近づくか……はあ、早く面白い感じにならないかな」

「何を期待してるの？」

「極上の修羅場」

「ええ……」

「アジフライ君ならなりそうな気がするからさ」

「アジフライ禁止って前にも言ったよね？」

良い人なんだけど……偶にこういうところがあるからな……

しかし、明日から冬休みか……季節の巡りは早いというか何というか、もう一年も終わり。

激動の一年だった気がするな。魔装、仲間との出会い、彼との出会い、こんなイベントが多いのは初めてな年だったなあ……

「冬休みは寒いからコタツで一日中過ごしそう」

「それは……やめた方が良いんじゃないかな？」

「でも、実際そんな感じじゃないの？」

「一日中は無いと思うけど……」

「しっかりしてるね」

僕は流石に一日中コタツに居るといふのは無いけど……火蓮ちゃんならもしかしたら、そういうこともありそう……。

そこまで話していると教室のドアが開いた。

「ほら、席に着け。今年最後のホームルームだ」

先生が入ってきた。まあ、宿題の配布とかそんなものなんだろうけど……彼女との話を中断して先生の話に耳を傾けた。



「明日から冬休みですね」

「そうね……まあ、コタツで過ごすことが多いだろうけど」

僕達はお風呂に入った後に寝室で会話をする。コハクちゃんが過ぎ去る時間を噛みしめるように冬休みが始まることを口にした。火蓮ちゃんはなんてことないようにコタツで猫のように過ごすことを話す。

「あの、そういった過ごし方はいかがな物でしょうか？」

「いいじゃない。冬はラベマTVでアニメ一気見って相場は決まって

るのよ。今、大決算だから」

「何言ってるんですか？ 生活習慣は崩したらいけません」

「固いわね。冬休みってそういうものじゃない」

案の定と言うか火蓮ちゃんの冬休みの過ごし方は思った通りだ。二人がそのことで議論していく中、アオイちゃんと僕は二人で話した。

「……今年は皆のおかげで凄く楽しく終われそう」

「そうだね」

「あーしは……ずっとボツチだったから」

「そ、そうなんだ」

彼女はトラウマを思い出すように死んだ目になり、過去を話し始めた。

「……クラスのグループ連絡先にあーしだけ誘われなくてさ、連絡なんて親位しか来なくて、友達から来たと思ったら知らない訳の分からない公式サイトで……ムカついてブロックしても定期的にくるからさ、その度に友達から来たと思って……落胆して」

「あ、今年は僕たちが居るから！」

「だよね」

急にトラウマに入ってしまう彼女を上手い事救っていく。すると彼女が何かを思い出したように話し出した。

「そう言えば……メルが異世界の旅館に招待したいって言った」

「そうなの？」

「うん、魔族倒してくれてるお礼だって。あと、メルの家は異世界で旅館やってるらしい」

「へえ、いつ行くの？」

「明日」

「え？」

「明日」

「ええ!？」



と言うわけで異世界アルテミスに降り立った僕達である。海の見える自然あふれる場所であった。

「ここが異世界なのね……ステータスオープン……」

「何言ってるんですか？ 貴方は？」

「もしかしたら、って思っただけよ。それにしてもこっちは熱いのね」
「そうですね。大分、現代と気温と景色も違いますね」

「あーし、何かワクワクしてきた……剣とか魔法とか、装備とか、厳選とかできそう……特に厳選したい……」

「アオイちゃん、それは無理じゃないかな？」

「分かんない。王様のお使いから、流れで船をてにに入れて幻の宝を見つけた……たぎってきた……」

「多分、今回はそんなイベントは無いと思うよ」

メルちゃんが先頭に立ち僕たちはそれについて行く。暑いな……汗が首筋を辿って垂れて、肌がべたつく。

「暑いね」

「暑い……」

「暑いですね」

「暑いわね」

本当に気温が高い、さらに冬服で来たから汗がべたべた。皆、通気性を上げる為に服を掴んでパタパタして風を通す。上着を脱いだりもしたりする。

「っ……」

それを見たいけど紳士のように我慢して前だけを見る彼。さて、そんな炎天下の中少し進むと大きな旅館のような物が出現した。何と
いうか、この旅館だけ異世界に似合わない現代の普通の旅館に見え
た。

「何か、現代の高級旅館に見えますね」

「そうだね……ここでMPとHPを回復……」

「アオイ、ゲームの世界から帰って来て。テンションが上がるのは分
かるけど」

「凄い、高級感があるけど人はいないみたいだね」

確かに現代の高級旅館に見えるんだけど、人の気配があまりない。

「メルちゃん、ここなの？」

「せやで、ただ、毎年この時期は大盛況なんやけどな」

何か訳ありなのかもしれない。メルちゃんは扉を開けて旅館の中
に入って行った。僕たちは彼女が帰ってくるまで待つことにした。

「何か、あんまり異世界って感じがしませんね」

「そうね、いきなり王様の前でもなかったしね」

「?? 良く分からないけどこの世界、あーしは気に入った」

火蓮ちゃんの発言は良く分からないけど。皆、この世界が気に喰わ
ないとかそういういった負の感情は無かったようだ。

「十六夜君はこの世界どう思いますか？」

「あ、そうですね、こう、良い感じですかね？」

「あの、どこ見てるんですか？」

彼は僕たちの姿を見ない様にそっぽを向いた、変な視線を向け
ないという配慮なのだろう。話しているとメルちゃんが戻ってきた。

「すまんなあ。さ、入ってええで」

『それじゃあ、その黒髪坊主から、お前はそうだな、『ホワイトルーム』!!!』

『いえええええええええ!!!』

帽子が叫んでおもちやの兵隊が祝福の挨拶を送る。その後に帽子はコハクちゃんの頭の上に乗った。

「おお、これは珍しい、純粋な愛に満ちている？」

「なぜ、ハテナを付けるのですか？」

「いや、これは……うーん、どちらの部屋にしたものか？」

『ブラックルームは嫌です』、『ブラックルームは嫌です』……

「ほう、ブラックルームは嫌か？ いいのかい？ とつても広くて悠々と使える部屋だぞ？」

「想い人と一緒に部屋が良いんです……」

「その想い人とは……君が頭の中で偶に新婚ごっこをしているあそこの彼だね？」

「何でそういう事言うんですか!? 重い女って思われたらどうするんですか!? 言わないでください!」

「あーはいはい。うーん、どちらの部屋にしたものか……」

彼女は怒ったようだが帽子はあっさり流す。それとあの帽子は人の記憶でも読める能力でもあるんだらうか？

「ホワイトルームでお願いします」

「よーし、『ブラックルーム!!』」

『いえええええええええ!!!』

あの帽子、滅茶苦茶性格悪いな……コハクちゃんも青筋を浮かべて聖剣を抜いてしまう位怒っている。

僕たち先輩三人で彼女を止めた

「乙女の純情を弄びやがって!!!」

「落ち着きなさい、コハク」

「落ち着いて……」

「そうだよ、コハクちゃん」

「コハクちゃんはガツクリ肩を落としてしまった、それを見た彼は。部屋なんてどちらで過ごすなんて自由ですから、一緒に夜トランプでもやりましょう!」

「い、十六夜君ツ! 流石です! プラマイゼロです!」

見事にフォローをしてくれた。次に火蓮ちゃんの頭の上に帽子が乗った。

「ほお、これはこれは中々の想いがあるな」

「ふん、どうでもいいから。ホワイトルームで頼むわよ」

「では、寝る時に寝るだけでバストが上がるブラを付けているお前は……ブラックルーム!!!」

「いええええええええええええ!!!」

「殺す!! そいつ、殺す!!!」

「落ち着いてください!! 火蓮先輩、気持ちは痛い程分かります!」

「火蓮、落ち着いて……」

「火蓮ちゃんの努力を僕たちは笑ったりしないよ!!」

彼女は刀を二本ぬいて大暴れを開始する。あと、あのおもちやの兵隊なんか腹立つ。

「俺は火蓮先輩の可愛い所知れてよかったです!」

「えっ? か、可愛いのか?」

「はい!」

「そ、そっか。まあ、それなら……プラマイゼロ?」

火蓮ちゃんを何とか宥めた後に、次に帽子はアオイちゃんの頭の上に乗った。

「おお、これは……」

「ホワイトルームを所望する……」

「なら、最近可愛くなりたくて鏡の前でやっている『アレ』をやって貰

「いや、なに、別に。で？ どっちがいい？」

クソムカつくこの帽子!! ニヤニヤゲスな声できつと僕だけが彼女であると言う事も気づいているだろう。クソ!! ムカつく!!

絶対に彼女の事をいじつてくる……

「どっちでも……」

「ほほう、一人だけかの……」

「うわあああつああああ!!! ブラツクルーム!! ブラツクルームだね!!!」

僕は帽子を無理やり掴んでぎゅうぎゅうに握った。

「わ、わかった。わかったから離せ!!!」

僕の部屋はブラツクルームだそうです。

百十四話 冬だけど水着

俺達は荷物を置いて近くに海があるので、そこに向かう。このストーリーは箸休め的な感じで行われた物語である。海にクラークンが発生してそのせいで客が来なくて貸し切りの異世界旅館を楽しむという内容だ。

さて、俺達は砂浜に到着したのだが人が全くいない。貸し切り状態である。

「人いないですね……人と言うより妖精ですけど……」

「クラークンってありがちね……今は居ないみたいだけど」

「それより、早く泳ぎたい……」

「水着は流石に持ってきてないよ」

貸し切り状態のビーチ。そして、水着がない俺達だがそこはメルがちゃんとフォローしてくれて魔装で水着を作ってくれている。

「ほな、これ使ってえな」

と言うわけで全員魔装起動する。コハクは白のビキニで胸元の谷間の線が長い。えげつないです、コハクさん……

萌黄もビキニで谷間が見える、足が何よりエロい。もっと隠してほしいと思う。

アオイはフィットネスな感じの水着で隠している面積が多いけどそれが爽やかで素晴らしい。楽しく純粹に過ごすことが出来そうな感じがする。

そして……

「ちよつと
!!!!???
!!!!!!
なんで、私だけスク水なのよ!!!!」

火蓮だけスクール水着で胸元に『かれん』と名前がゼツケンのようにつけられていた。

「え？ それが人間界の水着なんやろ？」

「そうだけど!! なんで私だけこんななのよ!! 絶対悪意あるでしょ!!」

「ほんま、すまん!」

「ううう、まあ、いいけどさ……ロリ粹じゃないのよ、私は……」

彼女は何というか、逆に良い感じがする。因みに俺は火蓮のスク水姿は好きである。

「俺は好きですよ! スク水!」

「うん、まあ、それなら、この格好もやぶさかではないけど……さ」

「ええ!? だったら、私もスク水に!!」

「あーしもスク水」

「じゃあ、ついでに僕もスク水で……」

「え？ 悪いんやけど、それしかないで」

と言うわけで取りあえず皆で海で過ごすことになるのだが……

「ううう……」

「火蓮先輩泳がないんですか？」

「気持ちいいよ」

「あ、そう言えば火蓮ちゃんって……」

何でも出来る火原火蓮。運動神経抜群でテストなんて教科書サラツと一周したら余裕で満点、どんなことでも大体できる。成長速度がチート。欠点なんてほとんどない程の彼女は……火原火蓮は泳げないのだ。

「泳げないのよ……私は……」

「そうなんですか……」

「じゃあ、皆で砂場で……」

「気にしなくていいわよ」

彼女はそう言った。海水浴を自分のせいで盛り下げない様にするための彼女の配慮。

「気にしますよ。一人だけ砂場から見られても辛気臭いですから」

コハクはそう言うとしようがないという雰囲気を出しながら水から上がろうとする。

「仕方ないから、ビーチボールでもしましょう。それでいいですよね？」

「うん……」

「そうだね……」

「皆……」

感動した……涙が出てきやがる……。彼女達の絆に感動してなんも言えねえ……ぜ

「もう、貴方のせいで十六夜君が泣いちゃったじゃないですか!!」

「わ、私のせいとは限らないでしょ!」

「火蓮のせいだと思う」

「えええ!」

「僕もそう思う」

「うう、ゴ、ごめんね? 十六夜、泣かしちゃって」

「気にしないでください!!!」

さて、このまま彼女達とビーチボールと洒落込むか。やはり、皆で色々やった方が楽しいことは間違いない。

彼女達は砂場に上がってビーチボールを始める為にチーム分けをして、メルがビーチボールを持ってきてくれた。

メルは実家の親と色々話すことがあるらしいため、一旦旅館に戻つ

た。そう言えばメルは旅館の娘だったな。そこから学院に進学して……天才と言う二つ名をほしいままにした天才。だけど、魔族に勝てずに人間に力を借りてるから今回俺達をここに招いたという設定。

今頃はクラークの調査をしつつ、夕飯でも作っているんだろ。色々迷惑かけているからな。全部が終わったらちゃんとお礼を言っって現代の食糧色々渡さないとな。

「十六夜くん。ビーチバレーしましょう！」

まあ、五人いるわけで二対二の対戦と言うことで俺は審判である。因みにこの世界にはビーチバレーと似たような競技があるのでネットも審判台もある。

コハク&萌黄VSアオイ&火蓮で対決である。

「ふふふ、ここで私の力を見せてあげますよ」

「まあ、ほどほどにしようね」

「メインヒロインはこういう事にも手は抜かないのよ」

「負けるより勝つ方がいい」

……
コハクのサーブから試合が始まる。こ、コハクの胸が……萌黄も

「クロ？」

「あ、はい!？」

「今、アウトじゃなかった？」

「え？ えっと」

「どうせ、胸見てたんでしょ？ フンツ」

アオイが審議をしてくるがコハクと萌黄側の方しか見てなかった……火蓮もそれに気付いたようでそっぽを向いてぶんぶんモードに入ってしまう。いけない、いけない、ちゃんと審判をしよう。

コハクのゴムを啜えて髪を纏めて縛る仕草も可愛い……と言うか皆可愛い。

そこからは厳正なる審判をした。魔装少女達の対戦のビーチバ

レーの試合のレベルは物凄く高い物だった。

コハクの一人時間差……揺れて……じゃなかったナイスフェイント。萌黄の腰を低くしてレシーブの動きが……揺れて、じゃかなった次の動きがしつかりできる良い、レシーブ。

アオイの予想もしない最高の動き。本当に爽やかでだけど、目が引き付けられる。トスはしつかり指の腹で上げて、レシーブも火蓮の場所に上げる。やましいことなんて何一つない。

しかし、ビキニの下着のゴムをパチンとやるのは何か、つい見てしまう。

火蓮はスク水だからそれだけでなんか、可愛い。単純に純粋な可愛さがあるから何の文句もつけようがない。それと、砂で足場が悪くて転ぶときに声が高くなるのが何か、可愛い。

と言うわけで、ちゃんと審判できました。

因みにだがクラーケンは現れたのだがアオイが水を操って撃退した。これは確か本来のストーリーでもあったな。

恐らくけど夕飯はそれが刺身で出てくるはずだ。色々遊び過ぎた俺達は思い出を胸に抱きながらお風呂に入ることになる。

しかし、ここで問題となるのはこの旅館……現在人が来ないから女風呂しか動かしていないのだ。つまり……混浴になる可能性が……いや、後に入ればいいだけか。



僕たちは遊びに遊んでくたした。お腹もすいたので旅館へと

戻った。そして、お風呂に入ることにしたいのだが

「女風呂しか機能していないんですか!？」

「すまへんなあ。客が来ないから女風呂しかお湯は無いんや。まあ、別に一緒でもええやろ?」

コハクちゃんは驚いた声を上げて、メルちゃんが色々説明する。アオイちゃんが倒したクラーケンのせいで客足が伸びず、休業のような形をとっていたらしいのだ。その為、お風呂は片方しか使えないらしい

「じゃあ、俺は後で……」

「いえ、一緒に入りましょう」

「え、でも……」

「十六夜君も、もう汗とかでべとべとですよね?」

「ええ、まあ」

「だったら、直ぐにでも綺麗にしないと」

「うん、クロも一緒に入ろう」

「えええ!？」

コハクちゃんだけでなくアオイちゃんも肯定の意思を示す。

「まあ、私も一人だけ海に入れない時に色々あったから、十六夜も、その、入ればいいんじゃない?」

火蓮ちゃんは恥ずかしそうにしながら入ることを肯定する。僕だって恥ずかしいけど彼だけ一人ぼっちは嫌だから肯定である。

「だ、ダメじゃ……」

「良いと思うよ。君も遠慮しすぎない。はい、行くよ」

僕は彼の背中を押して女風呂の方に運ぶ。

「萌黄ってあんな強引だったっけ?」

「私も思いました……」

「何か、あつたのかもね……」

不味い、バレない様にこれからはこう言った事は控えよう。恋人関係は秘密にしないと……

百十五話 火蓮ちゃんやらかす

僕たちはバスタオル一枚体に巻いて、混浴と言えるお風呂に入る。露天風呂と言った感じなのだろうか。やっぱり現代と似ているような気がする。

大石で作られた床と浴槽、良い雰囲気で景色もいい。現代であるのであればこの旅館かなりの値段がするんじゃないだろうか。

「ほ、本当に俺入っていいんですか？」

「いいんですよ。因みに私が背中を流しますから、ほら、座ってください」

コハクちゃんが彼の手を引いて椅子に座らせる。彼は膝の上に手を置いて背筋を伸ばし、緊張感を露わにする。

火蓮ちゃんもアオイちゃんも洗うつもりらしくて、泡立ててボディタオルを彼の体に当てる。

「くすぐったくないですか？」

「大丈夫です……」

「クロ、痒い所は？」

「大丈夫です……」

「こんな感じがいい？」

「良い感じですよ」

それぞれが洗う中、彼は目を閉じてなるべく変な反応をしない様我心掛けていたようであった。僕はあんまり派手な事をしない隣で見ているだけだ。

皆の気持ちはわかる。尽くしたいし好感だって稼ぎたい。ドキドキさせたい。でも、そんな皆でベタベタしなくても……

僕の彼氏なんだけど……

いや、いずれ皆の彼氏だけどき。この時点では僕の、僕だけの彼氏なのにな。皆の事は好きだけどき……何だろう、許容し難いこの感情は。

そうか、これが嫉妬か……こんな明確な感情を大好きな皆に抱いてしまうなんて。

ここは抑えて、抑えて頑張ろう。

「クロ、前も洗っていい?」

「いえ、前は自分で!」

アオイちゃんの天然発言には毎度彼は慌て状態になる。コハクちゃんと違うきれいさっぱり爽やかなの感情。

「私が前を綺麗にしましょうか?」

「いえ!」

毎度、色々狙っている彼女。声と表情全てを計算している彼女の反純粋な彼女の言動。更に彼女はここで止まらない。

「今度は、私を洗ってくれませんか?」

「はい、そこまでー」

「ちよつと!」

コハクちゃんの一手を何とか阻止する火蓮ちゃん。しっかりと彼女は彼と間に入ってこれ以上の狼藉を阻止する。これにより、コハクちゃんは強制的にターンが終了する。

さて、皆体を洗って湯船に入ろうをする。

なんか、僕もやらないと、スッキリしない。どうしたものか。あざとい巨乳の後輩、少し、気難しいけど誰よりも好き好きな同級生、天然の成長が異常の同級生。

皆魅力的なのは分かる。だからといって、嫉妬が消えるわけじゃない。

こんなことをしているのかは分からないけど……

そう思いながら僕は足が絡まったふりをして彼の方に倒れ込んだ。背中越しに体を預けて彼の背中と僕の体が薄皮一枚バスタオルと言う最早、直接的な感触を彼に与える。

「あ、ご、ごめん……」

「だ、大丈夫です」

こんなことを普通ならしないだろう。と言うか、コハクちゃんの十八番を勝手に使ってしまった。それは簡単に言うとな人の土俵で相撲を取ろうとしているような物。そうなるかどうかなるだろうか。

「ジーン」

コハクちゃんのジト目の視線が凄い。あざとセンサーに引つかかってしまったかもしれない。いや、あざとセンサーってナニ!?

流星に派手に動きすぎたかな!?

コハクちゃんはそちらがその気ならこっちだって相撲を取ってやろうじゃないかと足が絡まったふりをした。そのまま転んで彼に抱き着くつもりだろう。

そんなのダメだ!!

「あー、いけないー、私ったらー、足がー絡まってー」

「ッ、転ばない様に僕が支えるよ」

あ、し、しまったああああ。つい、彼女の動きを制限するように止めてしまった!!!

「ありがとうございます、萌黄先輩」

言葉の裏に彼女の意図をな感じる。表ではニコニコしているけど裏ではお前、何やってくれてんの？ みたいなこと思っているような気がする……

「あ、うん。どういたしまして……」

「いやー、ホントに助かりました《むう、自分はヤツておいて他の人は拒むのはずるくないですか?》」

笑顔の後ろに膨れ顔で文句を言っている彼女が見える。気付かないふりをしよう。

そのまま湯につかってコハクちゃんと目を合わせない様に星空を眺める。この世界は星座とかあるのかな?

「クロは星座好きだよね?」

「まあ、嫌いじゃないですね」

「サジタリアスとか好きそうだもんね……」

「あ、はい」

彼は星座が好きのようだ。きっと北極星とか十二宮とか、オリオンとか好きなんだろうね。

「因みにあーしも星座は好き」

「そうでしたね」

「うん……うん? あれ? 言っただけ? まあ、いや。だから今度一緒に……プラネタリウムでも」

自分で落としてから自分で上げた!? ちょっと厨二に触れて彼の気分を下げてから、実は自分も星座が好きと言う事で共有感を高めている。さらに、そこから流れるようにプラネタデートに持ち込んだ

余りにスムーズで清流が流れるのを思わず眺めてしまった。誰も止めることが出来ず。これは天然なのか、どうなのか。恐らく前者なんだろうけど、どちらにしても恐ろしい。

「アオイ先輩……私なんて一度もデート行ったことないのに……」

「……アオイ t u e e e e ね」

サラツと何事も無いようなアオイちゃんの行動で彼女の一人勝ち。それで露天風呂イベントは幕を閉じた。



湯上りにイチゴ牛乳みたいなものを飲んで口を潤す。何故か分からないがこの世界には浴衣みたいなものがあるのでそれを着て夕食までの時間、旅館の中を回って見る。

誰かと一緒と言うわけじゃない。十六夜と一緒にでも良かったんだけど、偶にはこうやって一人で考えたり何かをするのも大事な気がする。

異世界の旅館は変わったものと言うのは特に無くて、クソ帽子とおもちやの兵隊くらいしか変わったものがないくらい和風な感じ。足つぼのシートやマツサージマシンのような物もあり親近感しか湧かない。

まあ、ラノベとかでも異世界に現代機器を持ち出して驚かれるという何度も見ている私だから、異世界と現代が似ているというこの現状に突っ込まないけれども。

さて、そんなことを一旦考えるのを止めて私はただ、四股事情の事について考える。いや、ホント、どうしてこうなったと声を大にしたい。正直な所、ヒロインがここまえ増えるなんて思わなかった。コハクと私のダブルヒロイン構図で、行く感じだと思っていた。

私達の物語が書籍化したら表紙に十六夜が控えめに書いてあって、私達の絵が堂々と書いてあるという構造だって頭の中にあつたほどだ。にもかかわらず、四人もヒロインが居る。アオイがまさかあんなに強引だと思わなかった。しかも、成り上がり感が半端ない。萌黄だって隠してるつもりなんだろうけど、どう考えても十六夜が好きだし。さつきほお風呂の転んだのだって絶対ワザとだし。まさかとは思うけど更にここから増えたりしないわよね？

ハーレム、認めてもいい。何度も思っている。だけどそれで私と言う存在が薄くなるならそれは許容できない。ヤンデレを一途を私は辿るだろう。

もしかしたら、ナイフで……いや、それはない。そんなことは流石にしない。そんな心配は意味もない。十六夜だって蔑ろにしたりしたりすることはしない。

だって、彼だから。きっとそんなことはしない。皆だって信用できる。だから、そろそろこの中途半端な関係には終止符を打たなければならない。いや、私が打ちたいのだ。

今日の夜、彼と話して彼の彼女になろう。そう決めて私が旅館を見学しながら歩いていると……目の前から彼が歩いてきた。彼も単体で見学しているようであった。

「あ、先輩、この旅館、和風で、最早現代かよってツツコミをいれたくなりませすよね？」

「そうね」

丁度いい。善は急げと言う。更に言うなら今は互いにフリー。この機会を逃すという手は無いだろう。しかも、もう日は暮れてきている。私がゾーンに入れる時間帯。今私はロイヤルストレートフラッシュを出す手札を持っている。

「ちよつと来て」

「え？ あ、はい」

旅館を出て海の見える外に行く。星が輝いて美しい空。人なんて、妖精なんていなくて、ただ二人だけ。足並みなんて勝手に互いに合わせるくらいの関係になっっていることを認識する。

暗いからあんまり見えないけど私の顔は赤くなっている。きつと彼も。何も会話をせずに気まずい感じで、何かあるその辺のソファに座る。彼は取りあえず何らかの会話が無いと気まずくなってしまったか空を見上げた。

「星が綺麗ですね……」

「そうね」

「今日は……」

「あのさ」

私は彼にかぶせるように話した。

「何ですか？」

「話していい？」

「どうぞ」

「本当は、もっとムード高めてから言おうと思ったんだけど、その、やっぱり、善は急げの精神で言ってしまうおうと思って!!」

「そ、そうですか」

ちよつと、恥ずかしくなって来た。ちよつと先送りしたとしても問題ないし。いや、いい訳なんてしなくていい。ここで言わずにいついうんだ。こんなに場が整っているんだから。

『——私、私を十六夜の彼女にしてくださいッ』

目を合わせて一切逃げずに言っただけ、言っただけだよ!! どううよ?! これがメインヒロインの力よ?! 死ぬほど恥ずかしいけど、ゾーンに入っている私は言えたわ!!

「あ、ええ!?!」

「ど、どうなのよ」

「俺としてはまさに幸せ以外の何物でもないですが……いいんですか?」

「うん……その、十六夜はちゃんと私を見てくれるし、皆も嫌いじゃないし、常識的に考えてハーレムってどうかなって思うけど……納得したの」

「本当にいいんですか？」

「うん……」

「や、やった! よろしくお願いします!」

月の明かりが彼を照らして不器用ながら喜びを最大限アピールす

る笑顔を見ることが出来る。

私は変わった。彼と出会ってから。でもそれは彼も同じ。変わってここまでできた。変わらないものもあるけど私達の関係は大きく変わった。

ただの他人から始まって、いきなり来てビックリはしたがまさか恋心を抱くなんて思わなかった。正直、そんなに顔はカッコよくない、フツメン。アジフライ。

だけど、彼を好きになった。その笑顔も心も全部好きになった。ここまで大分長い事かかった気がするけど、もう、私達は恋人。色々、するんだろう……色々……ただ、最初はちゃんと挨拶しないといけない。

「こちらこそ、よろしくお願いします……」

月明かりが私達を照らす。不思議と異世界の月が私達を祝福するようだった。異世界で告白とは何か風情がある。

彼はここからどうすればいいのか分からない。恋人関係になった方がいいがそこでどのような言動をすればいいのか、何処までが許されるのか。嫌われたくないからここで下手に動けないという感情を感じる。

多分だけど、私もそうだし……

「……」

いや、どうするのよ!? キス位したら!? この恋人になった瞬間に互いに特別な関係を意識して何もできない感じはなんなのよ!?

いや、それも嫌いじゃないけど!!! 何か、心地いいけど!!!

「あ、……」

「……なによっ」

「あ、いえ、その」

「な、なによ」

うん……この恋人しか味わえない煮え切らないやり取りいいじゃない。嫌いじゃない。

「じゃ、じゃあ、そろそろ皆の所戻りましょうか？」

その選択は違う!! 確かにもうすぐ異世界の美味しい旅館の料理が食事の時間だけれども、もうちよつと居てもいいじゃない!

この世界は電波がない。携帯が使えず誰かに連絡をされて場の空気がシラケる、もしくは中途半端な所で中途半端になる漫画のようなことはあり得ない。このタイミングは完璧でどうしようもない最高の展開。

ここで、直ぐに帰るわけには……私は脳をフルスロットルにした。



おおおおおおお、ほっしやー! よっしやあああああああああ
あああああああああ
!!!!!!!

しかし、このロマンチックすぎる異世界の雰囲気はどうしたらいいのか、良く分からない。本当にロマンチックすぎる。畜生、こんな展開になるなんてもっと漫画とかで予習と復習しておくべきだった……

何で、こんなに今日は火蓮いつも以上に素晴らしく見える。これが恋人補正とロマン補正なのだろうか。これ以上いると気ますぐくなる。皆の所に一旦戻ろう。そろそろ、夕飯の時間でもあるしな。

「じゃ、じゃあ、そろそろ皆の所戻りましょうか？」

ツインテールじゃないお風呂上がりの彼女。今の髪型だけならコハクと若干似ている要素もある感じがする。

何というか今日の彼女は色気がある気がする。いや、普段もあるけど。普段以上にあるというか。髪型のせい？ いや、違う。雰囲気が違う。この感じ……何処かで見覚えが……

火蓮ママだ……あの、ちよつと大人な色香を漂わせる美人ママ。結構、奇抜な面も見せてくれることもあるけど、本当なら大人な色気を持つてるママ。

血統なのか？ ツンデレ体質もあるし、今まで知らない、全く知りもしない彼女に最早、どうしていいのか分からない。これは念入りに計画を建てて、頭で妄想シミュレーションをしないといけない。

一旦、皆の元に戻ろうとしてベンチを立ち上がろうとした時、彼女は俺の手を握った。

「——ねえ、もつと一緒にいたいのか？ ダメ？」

時が止まった。世界の色が彼女以外から抜け落ちて彼女以外を見るなんてあり得ない。

あれ？ いつの間に時空魔法を覚えたんだ？ 彼女の眼はルビーのように輝いていた。あれ？ いつの間にそんな綺麗な魔眼を手に入れたの？

いけない、考えろ。紳士的で良い感じの行動を……ダメだ。思いつかない！

彼女は俺に身を預けるように抱き着いて顔を近づける。石鹸のいい匂いが風に乗って俺を刺激する。彼女の小さくて柔らかい肉体が甘えるように密着している。思考が出来ない程に混乱した

「え、あえつと」

『え』とか『あ』しか言えねえよ!! どうすればいいんだよ。可愛すぎるだろこの子!!

「もつと、くつつこう?」

「ツ……」

「なんで、何も言ってくれないの? いやなの?」

「いや、そ、そんなこと……」

「なら、十六夜からも抱いて?」

か、かわいい!!! 可愛い!! 抱いてってなに? そんな言い方止めてくれない!? こつちが困り過ぎてオーバーワークだわ!!!!

「ねえ、はやく、抱いて? 恋人なんでしょ?」

「——ツ……」

落ち着け。落ち着いてゆつくり彼女に手を回して、手が震えながらも何とか抱き着けた。しかし、緊張とか色々で腕からの震えが全身に伝わった。変な風に思われたらどうしよう……

「大丈夫? 体、震えてるわよ?」

「あ、いや、き、緊張して……」

くそ、やつぱり指摘された。どう思ってるんだ? 彼女と目が合った。眼は慈愛でしようがない子供をあやすように、完全に俺より上の次元の人を感じた。彼女はそつと俺の頬に触れた。

「ふふ、可愛い所もあるのね。十六夜?」

「——ツ……」

満点だよ!!! 五億点、いや、五兆!! 君の瞳は五兆ボルトだよ!!! こつちの心境も考えてくれよ!! 困ってんだよ!!! 畜生、完全におれがからかわれてる……

百十六話 ヤンデレ

私達が抱き合いを開始してから、五分ほど経過した。もうすぐ、お料理の時間って自分で言ってたのに。もしかして、十六夜も何も考えてない？ だとしたらちよつとまづくない？ このまま、このまま一夜越す!?

そんな馬鹿な事を考えている場合じゃない。

取りあえず、何かしら言葉を交わしましょう。

「その……」

「お先にどうぞ……」

こんな時に限って被ってしまふ。抱き着きながらこの気まずい感じはキツイ。と言うか恥ずかしい。

だが、何故か彼の浴衣をギュツと掴んでしまっている私。矛盾した心と身体に戸惑っていると彼は遂に勇気を出して話しかけてきた。

「あ、流石にそろそろ戻りましょうか？」

その言葉を待っていたような、待っていないなかったような複雑な感情ではあるけどその言葉をきっかけに取りあえず互いに手を遠ざけた。真っ暗で月の明かりだけの異世界のベンチで一体何分抱き合っていたのか。分からないけど。ただ、皆に怪しまれている事だけは分かる。

折角、十六夜の今の所、唯一の彼女になったわけだし……。だけど皆にバレたら色々問題も起こるし、それで焦らせるわけにもいかないし。

「そうね……」

私達はベンチから立ち上がる。

そこで、私は特に意識なんてしてないがふと思った事を口に出してしまった。今の所、彼女は私だけなんだから……普通とは違う特別な事をあと少しだけ、しても問題は無い。だから最後にキス、くらい……

「今の所、十六夜の彼女は私だけよね……だから、その……」

「あ、そのことなんですけど……」

「なに？」

「えっと、その……もう、萌黄先輩とは付き合ってた……」

「はああああっあああ!?! いつから!?!」

「三日前くらいです……」

「……」

初耳なんですけど!?! だけど、同時に納得した。

そうか。だから、あんな急に距離が近くて異様にボディタッチの回数も増えていたのか。萌黄の奴、いつの間そこにいたのよ。アサシンか!?!

これはあとで話しておかないと……

畜生、二番煎じ。負けヒロインな立ち位置。私と十六夜が幼馴染でないのが最後の救いと思った。

そう思うと先ほどの幸せ感が吹っ飛んでしまい、途端に対抗心とか嫉妬とかそういったものでいっぱいになった。

彼の顔をグイッと引き寄せて唇を重ねた。深い愛を刻むように。

「……じゃ、先、戻ってるから」

唇を離すと私はその場から逃げるようにその場から立ち去った。

彼から離れながら私はついしてしまった自分の行動に恥ずかしさしか残していなかった。

もう、私の馬鹿かかああああアア!

この後、皆で食事じゃないの! 絶対に顔合わせるじゃない! こういうのって寝る前の時にサラッとやるのが定石なのに! この後、食事!

絶対にあのキスがよぎって悶えるパターンじゃない! いい女演じて、感情抑えられずキス、実はこの後、皆で楽しくお食事つて恥ずかしさマックスじゃないの!?

色々失敗した。もっと、素晴らしく魅せることもできたのに、出来なかった。

萌黄も実は裏で動いていたなんて事実も発覚。もう、なんなのよ! まあ、いいわ。それなりの結果だもの、特別な関係になったわけだし。ここからさらにグイグイ好感度を上げてやるわ!



皆で食事やトランプなどをして色々過ごした後に僕は火蓮ちゃんに呼び出された。しかも、ただ、呼び出されるだけでなくコツソリとだ。

旅館のちよつとしたお茶とか飲めたりする休憩スペース。そこに呼び出されたのでそこに行くとな既に彼女は居た。

「どうしたの?」

「……取りあえず、座って貰っていい?」

「うん……」

彼女に言われるがままにそこにあるソファのような物に座った。そのまま気難しい趣で話してきた

「萌黄……十六夜と付き合ってたのね」

「え!?!」

「ば、バレてた!? いや、ハツタリの可能性もある……彼との秘密でもあるし、一応誤魔化しておこう。」

「そ、そんなことないよ」

「いや、知ってるから。私も付き合ってるし」

「ええ!?!」

「つい、さつき恋人になった」

「ええ!?!」

知らない間に増えてた。まあ、こうなることは予想と言うか覚悟はしていたけど、僕だけ彼女期間は終了かー。指のささくれ位に気持ちいながらもどかしいけど仕方ない。

「そうなんだ……えっと、おめでどう? でいいのかな?」

「良いと思うわよ」

「あ、そっかあ」

「……一つ聞くけど萌黄は十六夜が好き?」

「……まあ、そうなのかな、あ、でも、僕は何番でもいいからね? 火蓮ちゃんと彼の時間をなるべく優先……」

彼女にそう言うのと腕を組んで語り始めた。

「そう、話は変わるけど。萌黄はラブコメアニメとか見る?」

「えっと、あんまり見ないかな?」

「まあ、ラブコメアニメにも色々あるんだけど大抵最後になるとヒロイン一人に絞って終わってそれが以外のヒロインは脱落するのよ」

「そうなんだ……」

「そして、推しのヒロインが脱落したり、脱落が示唆されたりするとネットが荒れるものなの」

「そうだろうね……推しだから……幸せになって欲しいだろうし」

彼女は何か言いたいのだろう。火蓮ちゃんの言う事は偶に理解できない時があるけど……

「そして、ヒロインレースから脱落したヒロインって結構、どんな人でも大体、主人公とヒロインの幸せを願うものなの。メインヒロインのサポートしたり、最後まで遠慮して想いを秘めたまま学校を卒業したり」

「へ、へえ……」

「自分より、誰かの幸せを願うって本当に凄いと思う。だけど、物凄辛いとも思う。萌黄もそうなんじゃない？」

「……そうかもしれないね」

彼女の言っている事の半分は分からないけど、もう半分は分かった気がする。

「だったら、何番でも良いとか言わない方が良いわ。きつと、十六夜は萌黄が辛くなったり我慢したりすることを望んではいけないから。十六夜は皆が最高で納得するルートを選んだんだから」

「うん……ありがとう。火蓮ちゃん」

「……別にいいわよ。言いたいことを言っただけだから」

彼女は少し照れながらそう言った。だけど、その後少し、好戦的な表情になった。こんな表情を向けられるなんて今まで一度もなかった。だから、息を飲んでしまった。

「——それに、何番でも良いとか思ってる奴に十六夜との時間を取られるのは癪だから」

そう言っただけで彼女は部屋に戻って行った。

彼女はこれから彼との時間が僕が居ることでも減ることも分かっている。僕以外でもコハクちゃんやアオイちゃんも居ると二人きりの時間だつて削られる。それを彼女は全部納得したんだ。それでも、彼の道を選んで想いを誓った。

完全に抜かれた。僅かに優越感に浸っていた自分が恥ずかしい。火原火蓮と言う少女は油断していい相手なんかじゃなかった

僅かな一番と言う称号、それは無意識で嬉しく感じていた。取られたくないが無意識で思っていた。

だけど、遠慮なんかしてたから刹那に並ばれ、置いてかれた。

完全に、僕は火原火蓮という女性に敗北感を抱いてしまった。

——悔しい

僕だつて……彼女に直ぐに追いついてやる……ッ

どうすればいいのか、まだ分からないけど。新たな決意を胸に僕は彼女の後を追った。



私はその近くで息を殺して二人の話を聞いていた。そして、絶句した。

私が知らないうちに二人が彼女になっていたなんて知らなかった。そんな先に行かれたなんて知らなかった。

覚悟はしていたつもりだ。火蓮先輩は物凄い人だし、萌黄先輩も途轍もない人。だけど、いざ自分より上をいかれると不安が津波のよう

に押し寄せる。

火蓮先輩の覚悟を決めた風貌、あの顔を見て分かってしまった。彼女の意思の強さと想いの強さ。

火蓮先輩が今、一番彼に近いと……感じてしまった。

私の知らないところで、全部が進んでいた。十六夜君の事なら何でも分かっているつもりだったのに、全然分かっていなかった。皆の事も分かっていたいなかった。

一番が良い。一番が……彼の一番じゃないと納得できない。

焦りがドンドン強くなり、私は完全に自分を見失ってしまった。



私は皆が寝静まった深夜に彼の部屋に行った。皆でトランプをして楽しんで、沢山お話して楽しくはあった。ただ、どこか今までの楽しさではなかった。アオイ先輩は純粹に楽しんでたけど、萌黄先輩と火蓮先輩が互いに負けないと意識していた気がする。

私だってこのままではいられない。もっと、もっと彼との距離を縮めたい。誰よりも。

異世界なのに和風の襖。そこから入る。

彼には相談事があるから深夜に二人きりで話したいと言ってある。

部屋に入ると若干薄暗いオレンジの光。

「十六夜君……すいません。こんな夜更けに」

「大丈夫です！ 夜には慣れているので」

「そうなんですか」

「はい。」

深夜に相談だというのに一切の不快感を出さず、お茶を沸かしてくれるなんて流石です。

しかも、テーブルに柿ピー。相談しやすい感じが出てる！

座布団も互いに向き合うようにしてある。しかも、何かアロマみたいなのも焚いてある。気遣いの塊か!?

流石、私の十六夜君。

彼は私に座るように促す。部屋には彼が寝る布団も敷いてあり、広さが際立つ部屋である。

色々考えることはあるが、ようやく二人きり。この機会をどれだけ待ったか。ようやく、ようやく、私のターン。

際どいアピールは皆が居るとやりにくい。私は出遅れている。強引でもここで彼の一番になる。

彼は机の前の座布団に腰を下ろした。そして、客をもてなすようにどうぞどうぞと向かいの座布団に手を向ける。

しかし、私は座布団には座らずに敢えて布団に座った。

「えっと、そっちではなく……」

「ここが良いです。ダメですか？」

ちよつと、あざとく言う。十六夜君に効果的なのでよく使う。すると彼は顔を赤くしながら親指を立てて、それ以外の指は握りグツジョブの手を繰り出す。

「十六夜君もこっちに来てくれませんか？」

「えっと……同じ布団は」

彼は私が布団に座ることを了承したが彼自身は座布団に座ったままなのでこちらに呼ぶ。

「少し、ここは寒いので……」

「えっと、こっちの世界は今夏で……」

「ううう、凍えてしまいそう……」

「行きましょう」

何というか、私があざとくして彼を無理に動かしているのだが……彼は女性にとことん弱い気がする……特に私のようにあざとい女性なんかに手のひらの上で転がされそうというか……

まあ、私くらいしかあざとくはないから大丈夫だろうけど。アオイ先輩にも火蓮先輩にも萌黄先輩にもあざとさなら私は負けない。

布団の上で男女で向かい合うなんて自分で招いておいてなんだけど、恥ずかしい。

「その、相談事とは？」

「また、声が聞こえるんです。頻度が前より増えているというか」

彼との二人きりの空間を作る為に相談と言う手段を用いたがこれは嘘ではない。本当に相談することがあったのだ。頻度が本当に増えてるのだ。

「うーん、そうなんですか……」

「もしよければ、また、私の中の誰かに話しかけてくれませんか？」

「……分かりました」

「ちよ!? 浴衣はそのままで!!」

私は彼の前で浴衣を胸元が見えるように開いた。前のお風呂では予想外の動きに翻弄されたが予想さえできていれば恥ずかしいだけで済む。

「より、内側に近い方が聞きやすいと思いますが？」

「いや、それは、まあ、そうですね?! 浴衣越しでいきましよう！」

彼は恥ずかしがる表情から私を心配する表情に変わった。この眼が一番好きだ。誰よりもまつすぐ奥まで見てくれるこの眼が。

彼は一通り以前のように話しかけると、やはりと言ったように溜息を吐き自分の無力さを噛みしめるように私に謝った。

「すいません……何も起こりませんでした」

「いえ、十六夜君が謝る事では……私が無理に相談したわけですし」

「……何というか、中途半端ですいません」

「十六夜君はいつでも一生懸命じゃないですか。中途半端では絶対ありません！」

「こ、コハクさん！ 流石です！」

「十六夜君の方が流石です！」

「いえいえ、コハクさんの方が……」

「いえいえ、十六夜君の方が……」

等と、互いに謙遜をしているうちに本格的に夜が更けてきてしまった。

「そろそろ、寝た方がいいかと……明日に響くと思いますし……」

「そうですね。では、そろそろ就寝することにしましょう」

彼が私を気遣い寝ようと言ってくるので私は布団に横になり掛布団を自分に掛けた。

「えつと、それは流石に……」

「いや、なんですかあ……?」

「うう、そのキラキラした眼と甘える声は……でも、……」

彼は色々、悩んで踏ん切りがつかないようなので私は彼の手を引いて胴体を寝かせた。そして、彼にくっついて彼の腕を枕にして掛布団を掛ける。

「これで、良いじゃないですか？ 何もしません。ただ、添い寝するだけですよ。」

「添い寝……」

「それすら、ダメなんですか？」

「ううう、添い寝だけなら……いいんでしょうか？」

「私はいと思います」

「そうですか……」

彼は戸惑いながらも添い寝だけだと心に決めたようでそれ以降は何も言わなかった。

……なぜ、手を出してこない……と私は不満になった。

私だって顔は悪くない、スタイルもいい、声も艶があるって言われる、色気も色香もある。そして、二人きりで寝ているこの状況なのに何で手を出してこない？

火蓮先輩には手を出しかけた癖に……

不満と焦りで突き動かされた私は、彼の太ももに触れた。

「あ、え!？」

「太ももに触れただけです。何もやましいことなんてありませんよ？」

「そ、そうですよね……」

彼の余裕はなくなっているようで私とは違う方向を向いて、理性を保とうとしている

「ごっち、見てくれませんか？」

「ええつと……」

「私の顔なんて見たくないですか？」

「そんなこと!」

「じゃあ、見てください」

「は、はい……」

彼と視線が合う。彼の眼が徐々に理性を失った獣のように見えてきた。あと少しで私が彼の一番になれる。火蓮先輩よりも萌黄先輩よりもアオイ先輩よりも、誰よりも一番に……

一番が良い、でも、それだけじゃない。証が欲しいのだ。私を捨てない、捨てられない絶対の証。

黒田十六夜と言う人物は責任感の塊であると私は感じている。特に私達の事に関しては。

きつと、ここで手を出せば彼はいくらでも、いつまでも私の側で愛をくれる。それがどうしても欲しい。欲しくて欲しくて、欲しくて欲しくてたまらない。

あの夏祭りの日からずっとこの日までその思いが消えなかった。

だけど、抑え込んできた。それは彼を私に縛り付けることになって、窮屈になってしまふから。

皆との時間も楽しい物だから。

でも、火蓮先輩も萌黄先輩もアオイ先輩もどんどん十六夜君に惹かれてしまった。そして、彼はハーレムの選択をした。

不満が無いと言えば嘘になる、だけど彼の側に居られる。なら、それでも良いと思っていた。皆も嫌いじゃない。

……でも、皆、私達。彼はこういったものを重視している。だから、つい考えてしまうのだ。思ってしまうのだ。皆が私を嫌ってしまった時は彼の好意関係なく彼が私から離れてしまうのではないかと。

また、あの暗闇には戻りたくない。

お願い、証を私に……不安を無くす、貴方の愛を……歪な感情だと思つた、でもきつと彼なら受け入れてくれると思つていた。

「こ、コハクさん……俺その、中途半端でこういった事はしたくなくて、皆が、全員が俺とその、何と言うか……」

そう、思つて。きっと彼はそれに答えるつて思つていた。だって、私がより深い関係になることを望んでいると彼も分かっているから。そして、この想いが抑えられない物だと彼も分かっていると思つていたから。

でも、彼は皆を理由に私を拒んだ。

その、瞬間、彼に僅かに拒まれた瞬間。もう、何もかもどうでもよくなった。常識とか、あざとさとか、可愛さとか相互な愛情とか。

全部どうでも良い。

彼がいてくれれば、側にいてくれれば、他に何もいらぬ。

「あの、俺……その、なんていうか……あれ？、急に……」

彼は言葉の途中で倒れた。いや、私が眠らせたのだ。魔装にはこういった力もあると知っているから使つた。

自分が歪だと感じる。彼の側に居たいなら居ればいい。彼と言う存在を私は絶対に信じている。

だけど、皆と言うものが付いた瞬間に私は彼を信じられなくなる。それは、つまり、私が先輩たちを信じていないと言う事になる。

そのことに、情けなさ自分の歪さ、そう言つたものがごちゃ混ぜになつて瞳から涙が落ちた。

「情けない、こんなツ、私でごめんなさい……ツ。信じられない、私でごめんなさい……」

自分の弱さに打ち抜かれながら私は彼を背負つて荷物を一部持つて、旅館から消えた。

百十七話 十六夜君消失

その日、僕は欠伸をしながらいつものように目覚めた。隣ではいつものように寝ている火蓮ちゃんとアオイちゃん。だけど、コハクちゃんが居なかった。それはいつものことで彼女は朝食を作ったりするために早起するけど……

なんだか、得も言えない違和感のような物があつた。布団から起きて、彼の部屋に向かう。襖を開けて中を見ると彼も居なかった。

これは偶然？ 二人が朝の散歩をしている可能性、デートしている可能性色々考えることが出来る。だけど、それは違うと勘が言っていた。

火蓮ちゃんとアオイちゃんを起こして皆で二人を探したけど、二人は何処にもいなかった……



俺は目を覚ました。そこは何やらベッドの上。周りは一階建ての木造建築。

えつと……ここは何処？ 旅館に居たはずだったのに……いつの間にか、知らない場所に俺は居た。

ベッドから取りあえず起きると、キッチンの方で料理をしている彼女の背中が見えた。彼女は俺が起きたのが分かったと手を止めてこちらに寄ってきた。

そうだ、昨日、彼女と話している途中で寝てしまつて……

「おはようございます、十六夜君」

「おはようございます……えつと、ここは何処なんですか？」

「私にも良く分からないのですが大都市のはずれあたりらしいです」

「へ、へえ……えつと、その……皆は……」

それを聞いた瞬間、彼女の雰囲気が変わった。

「また、皆……大丈夫、ここには私達しかいないんだから……」

自分自身を納得させるように呟くと彼女は華のような笑顔を向ける。

「もう、私達だけですよ。皆は居ません」

「ええ!?! ど、どういうことですか!?!」

「ですから、言葉通りの意味です。十六夜君、私とここで一生暮らしませんか?」

「あの、段階を数段どころか数十段とばしてるきが……」

彼女は自分のものだと主張するように逃がさないという意味表示を俺に知らしめるためなのか俺に抱き着いてきた。

「あ、あの……」

「ここで、一生暮らしてくださいませよね?」

彼女の眼は悲壮や焦り、不安をぐちゃぐちゃに混ぜたような物だった。俺の答えを待たずに彼女はより一層ハグを強める、体の柔らかさが只管に感じる。

「貴方を逃がさない、ここで二人で暮らして、子供も産んで、家族になって幸せになるってきめたんです。この世界って冒険者制度があるらしくて魔力がある人はモンスターとか適当にたおすだけでお金が入って来るらしいので財産なんてすぐできます」

「急に、それは……」

「……ごめんなさい……これ以外の選択肢は認めません」

そういうと彼女は複雑な顔でキッチンに戻って料理を再開し始めた。まさかとは思っていたけど……これはヤンデレの監禁みたいな感じなのか？ 彼女の母親にもそういういった傾向があると聞いてはいたが娘の彼女にまでそう言った……ヤンデレ遺伝子が……

そもそも、この場所はどうやって手に入れたんだ？ 異世界なんて彼女にコネの一つもないはず……

色々考えていると彼女はパンとかエッグなどを皿にのせてテーブルに置いた。

「朝食、出来ました。一緒にどうですか？」
「頂きます」

木造の味のある椅子に座って朝食を食べ始める。色々彼女には聞きたいことがある。

「あの、ここってどうやって……」

「この家は貰いました」

「誰からですか？」

「妖精貴族さんから」

「ええ!？」

「十六夜君を背負ってこの辺りをうろろしていたら、ドラゴンに襲われている妖精さんがいたので助けたら、実はその妖精が貴族さんだったらしくて、お礼がしたいという話になり、この家を貰うという流れに」

「そ、そうなんですか」

何という、最近の異世界主人公のような流れイベント。しかし、どうやらこれで終わりと言うわけではないらしく彼女は話を進めた。

「さらに、ドラゴンの買取金額をかなり貰うことが出来ました。金貨500枚？ まあ、詳しい価値は分からないのですが周りの反応を見るにかなりの額かと」

「俺が寝ている間に……そんなに」

「あと、冒険者登録もしました」

「流れが速い」

「あと、Sランク昇格だそうです」

「展開が凄い」

このことから察するにギルド職員はさぞ驚いただろう。異世界のギルド職員は大抵大声を上げて周りの冒険者を驚かせると相場は決まっている。

彼女から他にもいろいろ話を聞いて朝食を終えた。

ある程度話を聞いたがどうするべきかは俺には分からなかった。今の彼女は俺のせいで不安定な状態になっている。

それを俺はどうするべきか。彼女の不安を取り除くためには、彼女と一緒にここで住むのが正解なのか。しかし、そしたら、火蓮や萌黄、アオイはどうするべきなのか。

俺は今まで思考がここまで止まることは無かった。だけど、初めて本当の意味でどうしたらいいのか、どうするべきなのか。分からなくなってしまうた。



「十六夜君、お買い物に行きませんか？」

「お買い物ですか……」

「はい、私一人でも良いのですが貴方が居ないと不安になってしまいますから……」

「行きます……」

私は彼と一緒にまだ見ぬ都市へと繰り出す。都市のはずれから二

人で歩いて、賑やかな場所へ出る。

一度、もう見ている。ついさつきは掠るようにしか見なかったが今一度見ると、驚きや新鮮味が湧いてくる。

今までにない賑やかさ、現代人と同じような顔つきが並んでいるけど背中には羽。大きさはさまざままで隠している者も居る。

似ているようで全くにいていない新たな新天地。これが、異世界なんだと分かる。

出店のように並んだ様々な店舗。教科書に載っている中世のような建物。吹く風も何処か違う気がする。

そんな風景を眺めながら彼の腕に自分の身を預けるようにして、同時に逃がさない様に腕で固定して一緒に歩いて行く。ここで、彼と一緒に暮らすことは間違いなのかもしれない。

正解なんかじゃなくて、不正解。そんなことは分かっている。無理やり彼を眠らせてこんな場所まで来て、家まで既に手に入れて、彼の選択肢を極限まで無くして……こんなの正しいわけがない。

一方通行の愛。

『貴方は欲張りなのです。私もそれでいいと思うのです……もう、私も暗闇なんて、一人なんてなるのは嫌なのです……』

声が聞こえる。声の主も怯えている。

もしかしたら、この声は……いや、そんなことはどうでもいい。彼女の言う通り私は我儘だ。きつと、誰よりも我儘で子供なのだろう。

「今日の夕食は何がいいですか？」

「えつと、何でも……」

「何でもが一番困るんです」

「あ、いや、その……」

分かる、彼は迷っているんだ。皆の所に戻ろうと私に本当は言いた

いんだ。だけど、私が皆と言う言葉を聞くと不安定になって、皆と言う場所に戻りたくない先ほどの家でのやり取りですでに彼は感じている。だから、何も言えない。私がかこまでしたことに彼は責任を感じている。どうすればいいのか分からない。でも、皆と言う選択を彼は捨てている。

安心してしまっている自分がいる。自分だけの自己満足だけど、それに幸せを感じてしまっている。

自分がもう、どうしようもない存在だと自覚しながらも、そんなものはどうでもいいと捨てた。

歩いて行くと一つのお店にたどり着いた。お肉屋さんの様で見たことのない骨付き肉、似てるようで違う数々の肉。そうだ、今日の夕食はから揚げにしようと思は心に決めた

「お、見ない顔だね、新婚さんかい？」

「いえ、今は違います」

「そうかい、それじゃあ、これからと言うわけだ」

「そうですね……これからです……えっと、美味しいお肉、えっと、グラム……は通じないだろうから……これで買えるだけ」

私は何百枚ある金貨を一枚出した。すると店主は驚いた顔をする

「おいおい、良いのかい？　かなりの量になってまってどう考えても食べきれないと思うが……」

「え？」

「箱入り娘か何かなのか？　これは金貨だからかなりの価値があるんだが……まあ、二人で今晚食べるくらい見繕っておくよ」

「あ、ありがとうございます？」

良く分からないけど、この世界でこの金貨はかなりの価値のようだ。現代での一万円感覚が良いのかな？

お肉を貰って、それを彼が持ってくれた。その後も調味料とかを感覚で色々買った。それで何となくだが金銭の感覚が分かった気がする。それに十六夜君も何となくだが金銭の測りが出来たのでそれも助かった。

服も色々買った。十六夜君に選んでもらったり、自分で選んだり、デートのようにながら買い物をした。荷物が多くなったら一旦、家に戻って、それから又行って、それを繰り返しているうちに日は暮れた。



「居た!？」

「居ない……」

火蓮ちゃんとアオイちゃんが近辺を探し回り、戻ってきた。彼とコハクちゃんが居なくなってから僕たちは大慌てで探し回った。近くの村や都市。知らない所だけど聞きまわった。

「何処に行ったのよ……」

「そもそも、何で二人は居なくなっただらう……」

二人は心配で焦りが生まれる。勿論、僕だって心配だ。メルちゃんだって探してくれているが何も知らないし分からないらしい。

「コハクが……前に凄い不安定だったのが関係あるのかな……」

アオイちゃんがぼそりと一言言った。それは僕も火蓮ちゃんも気にしていたこと。この前、彼が天使に心の中に入られた時。僕たちも不安や心配もした。

だけど、コハクちゃんは……

『はやくツ、はやくツ、何とかしないと!!! 十六夜君が、十六夜君が!!!!
ねえ、どうすればいいんですか、皆さんなら分かりますよね、それ
ともメルさんなら、はやく、はやく、はやく、何とかしないと、何と
かしないとツ……』

僕達の不安とかそれ以上に、彼女はどうかになってしまっただった。彼を失う恐怖だけで全てが支配されて、もし、彼にあの時何かあつたら彼女も……

彼が無事で直ぐに元気になったから何かをしたわけじゃなかったけど……アオイちゃんの言う通りそれが関係している気がする……

「……取りあえず、見つけないと」

「うん」

「そうだね……」

その日は頑張ったけど、二人は見つからなかった。僕たち三人は一度旅館に戻り明日何としても見つける為に作戦を立てたり、僅かな情報でも、関係ないかもしれない情報でも話し合った。



俺は彼女との生活を迷いながらも続けていた。

「あーんっ」

「あ、あーん……」

火蓮も萌黄もアオイも心配しているだろう。だけど、コハクにそれを言う事は出来なかった。

なし崩しのように続けていい訳がないことは分かっている。

だけど、それを言いだすことだけは出来なかった。彼女に不安がる顔をさせられない。彼女は本当に俺に尽くしてくれるから。

今だって、美味しい料理を作ってくれて、食べさせてくれる。笑顔をずっと向けてくれる。

でも、これはずっと彼女がしてくれただけの事。当たり前になりつつあったこと。簡単じゃないこと。

俺は彼女が前世から好きだった。今を彼女と過ごしているうちに一人の女性としても好きになった。でも、それは彼女だけじゃなくて皆で。皆も好意を向けてくれたからハーレムと言う選択肢を俺は選んでしまった。

それが彼女を銀堂コハクを苦しめていた……

「十六夜君？」

「すみません……俺は、ずっとあなたを……」

謝りかけたら彼女は俺を抱き寄せた、彼女の心臓の鼓動を感じる。

「私もごめんない……無理にこんなことをして、でも、もう、自分でも自分を抑えられなくて……」

「貴方が謝る必要はないですよ……俺が」

「十六夜君……皆が心配ですか？」
「……」

なんと云えばいいのか微塵も分からなかった。でも、彼女はそれすら分かっているようだ。

「私も、皆さんには申し訳ないと思っています……本当に……でも、もう、捨てることにしました……」

「……」

「十六夜君、全部捨てて、私と一緒にこれからの道を歩んでくれませんか……？」

「っ……」

「後悔はさせないつもりです、貴方に全部捧げて、尽くします」

こんな人が側にいてくれたのに、そのありがたさを俺は当たり前前だと感じていたんだ。だから、彼女の気持ちの変化に気づけなかった。

彼女は並々ならぬ思いでずっと俺を想ってくれていたのに……自分が恥ずかしい。何でも、自分の思った通りにしようとしていたことが愚かしい。

「ごめんなさい。十六夜君……こんなことを提案しておきながら私は貴方を無理にでも縛るつもりです。今の私は……それが簡単にできるから……」

彼女はギュツと少し痛みが走るほど抱き寄せる。俺は……彼女の想いに答えるべきなんだろう。

でも……やっぱり……

「俺、は……」

「そこから先は聞きたくありません……言わないでもらっていいですか?」

「っ………すい、ません……」

言い出せない。これを彼女に言う事だけは、今の俺には出来なかった。

百十八話 正解か不正解か

誰かの為にする事は何の意味もない。それが私の考えだった。

私には友達がいた。いや、勝手にそう思っていただけだろう。でも、その時は友達だと本気で心から思っていた。だから、その人が座ろうとしたら椅子を引かれてわざと転んだり、給食をわざと溢されて制服を汚したりするのを黙って見ていられなかった。

『そんなことは何も意味がありません。やめてください』

そう言つて現場を見たら無理に止めて、そうならないように釘を刺して、私はただ、頑張つたのだ。一生懸命に守つたのだ。欲しいのは感謝でも無いし、物でもない。ただ、大事な友達なだけだったのだ。だけど、そのせいで矛先が私に向いてそれで虐められて、友達と思つていた人は虐める側に回つて……辛かった。自分のしたことは意味のないことで、友達なんてただの他人。

誰かの為にする事なんて全部が間違つていると思つた。

あの勇気も、自己犠牲も何もかも無駄。意味のないごみのような物。友達も全部信じるべきでない。全てを否定された気分で彼と出会つた。

彼と会つて話して、背中を見て、全部が報われた気がした、凍つた心が溶けていった。自分のしたことは無駄なんかじゃなくて、ごみでもなくて、私が一番欲しかったことを言ってくれた。

嬉しかった。途轍もなく嬉しかった。

それで、私は済まなかった。彼が欲しくなつてしまった。ハーレムでも良いと思つた時期もあった。だけど、彼が皆に取られて自分から離れる可能性を感じた瞬間に私は恐怖した。

そして、私は今、彼と二人になった。

同じベッドで彼と寝ている。昨日の夜はずっと彼と抱き合つた。

変な意味ではなく、そのまんまの意味だ。甘えるようにずっと一緒にそのまま眠りについた。

彼は皆という言葉を一言も発しなかった。いや、私が言わせなかったのだ。

皆……アオイ先輩と萌黄先輩、火蓮先輩。三人には本当に申し訳ないと思っている。恨んでいるだろう。彼と両想いだったのに私がそれを崩したのだから。

あの人たちを私は信頼しきれなかった。信じる心の強さが私に無かった。あんなに一緒に楽しい時を過ごして、後輩としてお世話になって、互いに背中を預けて一緒に戦ったのに、信じられなかった。また、裏切られる可能性を捨てきれなかった。

私の醜さを強く感じる。信じることを何処かで拒絶している。私は拒絶して、恐怖して、それを未だに克服できずにいる。

でも、もし、克服できたなら……

……いや、もう遅い。何もかも捨てた私にそんな事を考える理由も権利も意味も、何もない。

私はベッドから起きて朝食を作り始めた。



俺はずっと考えていた。どうしたらいいのか。どうするべきなのか。

彼女もきつとみんなの事を考えていて、きつと彼女にとっても三人は大切な存在なのは間違いない。だから、説得しよう……と簡単に考えるわけには行かない。

彼女は捨てると言った。それが本心から言っているのか、それとも嘘なのか、無意識で言っただけは違うのか。

だけど、本当は捨てられないと思っていると、俺は考えている。でも、それは結局、俺がそう考えただけなのかもしれない。俺が彼女をここまで追い込んでしまった。これ以上、彼女に負担を掛けるべきでないのか。

このまま、二人か、それとも皆か。

でも、どちらにしても……きつと、今のままではいけない。彼女の事をもっと知らない。何を想って、何を考えて、どれだけ不安で仕方なかったか知らない。心から語り合っただけなら進まない。

いつまでも、このままではいけない。

初めてだ、ここまで自分の行動に自信が無くなったのは、正しいのか、正しくないのか、彼女の為になっているのか、自己満足でしかないのか。

不安で仕方ない。仕方ないけど……俺はきつと……皆を捨てられない……



私は朝食を作っていた。すると、十六夜君が意を決した……いや、違う。不安を宿した眼で私に話しかける。

少し、話しがしたいというのでベッドに互いに腰かける。

「あの、朝からいきなり、申し訳ないんですけど……」

また、皆なのかと私は思った。どこまでいっても彼は皆を忘れることが出来ないのは分かっている。だから、言えない様にしてしまった、促していた。彼にはこれ以上自分の醜い部分を見せたくはなかった。

もう、手遅れかも知れないけど、それでも見せたくはない。でも、抑えきれずに負の感情が顔や雰囲気に見れる。

彼は敏感だからそれに気づいたはずだ。でも、止まらなかった。

「貴方の事を教えてください」

彼は私の眼を見て言った。皆でない事に安心をした。

「私のこと、ですか？」

「はい」

「……えっと、銀堂コハクです。年は十六……好きな食べ物はパフェで、でも基本的に嫌いなものは無くて……」

彼に聞かれるがままに私は自分の事を話した。知っているであろうことから順々に。ある程度話していくと彼が聞いた。

「俺に対する、不満を教えてください。気を遣わず、心の底から言ってください」

「……心の底からですか？」

「はい……皆のことでも……」

「っ……」

不安定な私にとって、その言葉は禁句だった。言わない方が良くと思ったけど言ってしまう

「私は、ずっと不安でした……十六夜君は私より、皆を優先するから、私を大事にしてくれるのは嬉しいですけど、いつかあなたは皆を理由に私を捨ててしまうんじゃないかって」

「……」

「皆のこと、先輩たちの事は私も好きです……でも、多分、私は信用が出来ないんです。先輩達も裏切ってしまうという考えが頭にこびりついて、いつか、ハーレムになって三人が私を裏切ったら、嫌いになって、貴方は私から去ってしまう。それが怖くて、怖くて、たまりませんでした……」

「……」

「それが暴走して、歯止めがきかなくなつて……貴方が居ない生活も

人生ももう考えられないんです。自分が異常で馬鹿で臆病なのが原因だと分かっています。でも、貴方がずっとずっと居ないと側にいてくれないと、私は生きられないんです……」

……言ってしまった。自分が異常であることを言ってしまった。行動で彼は既に分かっているはずだ。でも、自分でそれを自覚しながら言ってしまった。

違った恐怖が湧いてくる。もう、彼に嫌われてしまったのではないか。重すぎる女と一緒に居るのも苦痛で二度と顔も見たくない女と思われていないか。怖くて、怖くて、すぎるように彼に抱き着いてしまった。

「お願いッ、私から、私から、離れないでッ……何でもしますからッ。何でも、何でも、エッチな事でもします、働かなくてもいいです、ご飯だって毎日美味しい物を作ります、不味かったら作り直します、だから、嫌いにならないでッ、お願い、お願いッ……」

自分でも自分が分からない。何が何だか分からない。ただ、私は子供のように言いたいことを言って、したいようにしている。自分勝手が過ぎると分かっている。でも、恐怖には勝てない……

私は彼の胸に体をうずめていた。彼からの反応がなく、気になって彼を見た。恐怖か、嫌悪か、嘲笑か、憎悪か、軽蔑か、彼の顔は絶対どれかだと思っていた。それほどの事をしてしまった、言ってしまった自覚があるから。

でも……違った。彼は、どの表情でもなく、ただ泣いていた。これはきつと彼の悔しさや弱さだった。彼の瞳からぼろぼろと涙が溢れていた。

初めて見た。彼の弱さを。泣いているところを見た事はあった、だけど、弱さを見たのはこれが初めてだった。

「ごめんなさいっ……俺が貴方を追い込んでしまった、みんな幸せって考えて、自分の都合で動いてしまった。それで、中途半端で貴方を

傷つけた……」

「……っ」

彼は私より強く私を抱きしめた。私を逃がさないと彼が想っていると感じた。

「これ以上、傷つけるわけにはいかないのに、今すぐにでもあなたを幸せにして、安心させてあげないといけないのに……でもッ、俺はッ、皆を捨てきれない。こんなに貴方が俺を想ってくれて、追い込んでるのに……俺はクズでどうしようもない、バカでどうしようもない……」

「……」

彼は泣いていた。手が震えていた。体が震えていた。弱さに打ち抜かれて、自分を自虐して。それでも、彼は私を抱き続けた。

「本当に、ごめん……でも、俺も貴方が居ないと生きられない。皆も貴方も秤になんて掛けられない程に俺の中で大事なんだ。絶対に離せないし、離したくないんだッ」

「っ……」

痛いくらいに抱きしめられた。彼も私と同じなんだと感じた。彼も弱さを見せたくない部分を見せてくれた。彼は皆が忘れられない。でも、私も離したくない。全部が彼は欲しくて、どれか一つかけても彼は満足できない。

欲張りな人だ。我儘な人だ。私と同じ人だ。

「絶対に後悔させない、年老いて、死ぬときになっても満足して死ぬくらい、幸せにするから、貴方の、銀堂コハクの人生を、俺にくださいッ……」

そして、ズルい人だ。それを言われたらもう、私には何も言えない……彼の愛は知っていたつもりだった。

だけど、ここまでとは思わなかった。自分の方が強いと思っていた。でも、彼の愛の強さは……私以上なのだと分かってしまった。

言葉に、その重みが、乗っていた。まるで何年も私に想いをよせていたように。大きな感情を抱き続けたように、その大きな彼の愛に私は包まれた。

彼は私から離れない。私も彼から離れない。

異常な関係だと思った。それでも、これでいいと思ってしまうた。

「はい……貴方に私の人生を捧げます……」

正解なのか不正解なのか、私には分からないけど。それでいいと私は思った。

百十九話 黒い彼女

私達は暫く抱き合った後に、そつと離れた。互いに全部をさらけ出してしまつて何と言うか、恥ずかしさや色々感じてなにも言えない。本当に全部を出してしまつた。全裸をさらす以上の事をしてしまったと思う。

互いにベッドに座りながら話を切り出せず、時間だけが過ぎていく。

「取りあえず、その……ここから出ないといけないのかなと思うのですが……」

「そ、そうですね」

彼が何とか切り出す。眼を合わせるのも困難でそつぽを向きながらの会話。そこで家のドアがノックされる音が響く。

私も彼もそれに気づいて、私がドアの方に向かって、開ける。

「あ!! 居たあ!!」

「っ……先輩……」

火蓮先輩や萌黄先輩、アオイ先輩がそこには居たのだ。どんな顔を向けて良いのか分からなくて、目を逸らしてしまつた。三人に何を言われるのか、怖くなつてしまつた。

「バカあ! 心配したのよ!」

火蓮先輩が私を抱きしめた。アオイ先輩も萌黄先輩も目に涙を浮かべていた。

「急にいなくなるんじゃないわよ! もう、本当にばか!!」

二人も私を抱きしめてくれた。不思議と私も涙が溢れて、十六夜君

も私達の抱き合う姿に泣いていた。



僕たちは彼女を見つけて現代の世界へと戻った。どうして、彼女を見つけれられたのかと言うと噂を聞いたからだ。新人冒険者がいきなりSランク昇格、僕からしたら何が何だか分からなかったが凄いい事らしい。

そして、その新人の特徴が銀髪碧眼の美女で背中に男を背負っている。それはきつと彼女であろうという事でその場所に向かい、聞き込みをして彼女を見つけたんだ。見つけた僕たちは心配や色んな感情で泣いてしまった。

コハクちゃんは泣きながら全部を話した。彼を取られたくない、自分が裏切られるかもしれない。色んな感情が暴走してしまった。自分が弱かったとボロボロに泣き崩れた。

コハクちゃんも彼も自分勝手だったと謝った。コハクちゃんはこんな身勝手な行動をしてすいませんと、彼はハーレムとか気軽に言うてすいませんと、二人して、土下座をしながら何度も額を打ち付けた。火蓮ちゃんもアオイちゃんも激おこぶんぶん丸状態だった。まあ、僕もちよつと怒った。どれだけ心配したのか、悩んでいるならどうして言わなかったのか、彼にも原因が無いとは言えないから少し、お灸を据えた。

でも、彼女の変化に気づけなかった、何もしなかった僕達にも責任があると火蓮ちゃんは言った。信じられないならこれからもつと互いを知って行こうとアオイちゃんは言った。僕は慰めながらいつまでも一緒に居るつもりだと言った。

すると、コハクちゃんはもう、赤ん坊のようにギャンギャン泣いてしまった。収集付くのかと思う位、泣いて、泣いて、泣いた。最後には仲直りと言うか、慰めて彼女を落ち着かせて……もう一度、帰るところにした。

そんなこんなで眼が真っ赤に腫れた彼女と火蓮ちゃんを先頭に帰りの帰路を歩く。異世界の景色とか色々見ながら、普段味わえない雰囲気を感じながら。

「冒険者ライセンススって言うのがあるんでしょ？ 見せてよ」

「あ、はい、どうぞ」

「ふうーん、親の顔より見た異世界ライセンススって感じね……」

コハクちゃんと火蓮ちゃんがカードのような物を見ながら話している。コハクちゃんを真ん中にしてもう片方の隣にはアオイちゃんが居て彼女も興味深そうにカードを見ている。

僕は三人の後ろで彼と一緒に歩いている。今回の事できつと彼も色々考えているだろう。

今回は無事に着地出来た感じだけど、これで終わりなのだろうか。このまま皆、仲良く彼の彼女になって終わりなのだろうか。嵐の後の嵐が来るんじゃないか。僕にはそう感じられてならなかった。



黒い暗い暗闇の中で私は誰かと向き合っていた。影のような物でよく見えないけどそこに誰かが、私と似ている誰かが居ることは分かった。

「なぜ、信じたのですか？……？ 彼は信じられるのはわかります。でも、それが皆を信じる理由にはならないのです」

「皆さんはあれほど信頼して心配もしてくれました。それが分かったから、信じられないにしても、信じようとすることが大事でそれが誠意だと思いました」

「なんつ、ですか？……それは……」

「貴方もきつと、分かっているのではないですか？」

その影に話しかけると、苛立ちや不安を隠せない表情を向ける。そ

ここで薄暗いが初めて彼女の顔が見えた。

黒と紫が混ざったような魅惑的な髪の毛。瞳の色はピンクと紫が入り混じった綺麗な瞳。だけど、彼女の風貌は私にそっくりだった。正確に言うとも目が若干垂れて、少し幼い、中学二年生位の私の姿。

「やっぱり……あなたは私だったんですね……」

「……」

「私は我儘です。だから、一方通行では満足できない。真の意味で彼と愛し合いたいから、それに皆も好きだから。私は……」

「イライラするのです……そんな綺麗なような答えを出されて、皆がそれに満足したら、まるで、……この感情は、私は醜い、汚い、不必要で、不純なものになるじゃないですか……私はどうなるのですか……このまま何処かでヒッソリと見ていればいいのですか？」

「……それは」

そこで、ドンドン彼女との距離が離れて行った。まるで、私と彼女は同じであったのに離れた存在になったように、決別したように私達はドンドン離れて、そこで、もう、私は彼女を見ることは無かった。



僕たちは何時もの彼の家でいつもの寝間着、いつもの寝室で布団を敷いて、そこに四人で座っていた。コハクちゃんは改めて僕達への謝罪をした。

「ご心配をおかけして、本当に」

「もう、謝罪はいらないわ」

それを火蓮ちゃんが遮って止めた。

「いつまでもそんな辛気臭い顔されても困るのよ。主に、私の十六夜

がコハクがしよぼくれていると連鎖的に元氣なくすの。いい？ もし、迷惑をかけたと今でも思っているとしても、コハクは謝って私達はそれを許したの。何度も謝り続けるのはそれは美德でも何でもないと思うわ。だから、いつも通りにして」

「……火蓮先輩」

「だから、しよぼくれないで！ いつもみたいに胸をワザと揺らして、マウント取るのがコハクの持ち味でしょ!？」

「私にそんな持ち味はありません……」

未だに、彼女は引きずっている。そう簡単にいつも通りにはならな
いだらう。彼女も戻って良いのか、反省して暫くおとなしくしよう
と考えていたのだらう。でも、火蓮ちゃんのおかげで少し、笑みが
戻った気がする。

少しずつ、いつもの雰囲気に戻り始めて、他愛もない話をしながら
眠りについた……

はずだったのだが……僕は夜にふと目が覚めてしまった。どうし
てかなんて分からない。多分だけど、誰かが夜中なのに立っている気
がしたからだ。眠くて、でも、うつすらと瞳を開ける。

暗くてよく見えないけど

「こ、はく、ちゃん？ ……こんな、遅くに……」

本当によく見えないけどその人は……全裸だった……と思う。そ
して、すぐに部屋から出て行った。コハクちゃん、何をやっているん
だろうと思っただけで隣を見ると彼女が火蓮ちゃんの隣で寝てい
る。

え？ じゃあ、今の誰？ 寒い季節で全裸ってあり得る？ そもそも
も、何で女の子がいるの？ おかしくない？

ゆゆゆゆゆつゆ、幽霊が、ワンチャンあり!?

あれ？ 途端に怖くなって来た……どないしましょう？ 隣には

アオイちゃんが寝てい……できれば彼女の布団に……でも、起こしてしまうだろうし

「ガタガタガタガタ……」

アオイちゃんも驚いてるう!?

彼女は僕が起きていることに気づいて、閃光の如く共有してすぐにも恐怖を緩和させたい感情がまるわかりだった。

「カモン、マイ、フトン!」

「お邪魔します!」

同じ布団で僕たちは抱き合って、恐怖で震える体を互いに慰め合った。

「あれ、ヤバない?」

「いや、僕たちは何も見てないだよ。幻覚だよ」

「そだよね、偶々二人同時に全裸の女の幻を見ただけだよね?」

「うん、そうともさ。あれ? そんなことってあるのかな?」

「あるんだよ。もう、寝よう」



俺は目覚めた。コハクの事が色々あったが彼女だけでなく、昨日のことは全員と付き合ったりするのであれば全員気にしないといけない。もっと、これまで以上に愛を伝えて、不安などを軽減していかないといけない。

真摯に想いを伝えて、最高で愛に溢れて……

今日から、また始めようと思いを固めていると自身の布団が盛り上がっていることに気づいた。もしかしたら、誰かが寝ている俺の布団に潜り込むというラブコメのありがちの展開なのかもしれない。

ここで、照れるのは簡単だ。いや、多分照れるだろう。しかし、ここは滅茶苦茶に愛を伝えていくべきだ。

取りあえず布団をめくって、些細な事でも愛を伝えるくらいしかできない。俺に出来る事はきつと、話して伝えることしかできないんだ

と今回の事で分かった。俺は鈍感ではないと思うけど、だからと言って全部が分かるわけではない。

もっと、知って伝えて、それをドンドン積み重ねて本当の意味で幸せになって見せる。掴みとって見せるんだ。ハーレムって奴を……

そして、布団をめくると……同時に部屋のドアも開いた。布団の中には全裸の美女、ドアの先には美女。顔立ちが似ている二人。

「おはようなのです、ダーリン……」

「おはようございます、十六夜君、そろそろ朝ごはん……」

俺は、ここから幸せを掴みとる……

クロの銀編

百二十話 ハーレム

私は朝食を作り、十六夜君を起こすために部屋に向かった。扉を開けると昨日の夢に出てきた私にそっくり、いや、私が居た。

「もう、二人の愛の巢に無断で入るなんて……」

「貴方は……と言うか、何故全裸!？」

「気付いたら全裸だったのです」

「とんでもないパワーワードです!？」

私は彼女と話す。取りあえず服を着て欲しいと思ってしまった。しかも、今は冬。それなのによく全裸で居られるなと思いつながら、常識を超えた状況に何が何だか分からないが取りあえず服を着て欲しい。

「わあ、寒いのですう」

と言いつつ彼に全裸で抱き着く彼女。もう、全部見えてしまっているだろうと思ってしまう。こちらも恥ずかしくなるのでやめて欲しい。更に言うなら面白くない。

「ああああ!?!」

「ちよ、ちよっとクロコさん!?!」

「まあ、私の名前を既に付けてくれるなんて流石なのです。ダーリン。略してサスダンなのです」

ぐりぐりと全部を押し付ける彼女。十六夜君の顔が赤くなり、あたふたしてしまう。と思っただけだ。

「クロコさん、取りあえず落ち着いて話をしましょう」

完璧な大人な対応をする十六夜君。顔は上を向いて彼女を見ない様にして変な事をしないようにする彼は、まずは彼女と向き合う事を

していいこうという意思を感じさせる。

「服を着ましょう。コハクさん、服をお願いします」

「は、はい」

私は、一旦、彼の部屋から出て急いで服を取りに行った。不思議と焦りとかそういったものは感じなくて、かなり頬を膨らませたがそれにとどまった。



「これは……驚いたで」

メルちゃんがソファに座るコハクちゃんと、急に現れてた謎の美少女。クロコちゃんを見比べて驚嘆の声を上げる。当り前であるが僕たちも驚いているのだ。顔立ちそっくり、色気も何もかもそっくり。胸の大きさと行って身体的特徴に違うところはあるが姉妹のように見える。

「魔力がある者に偶に起こる現象。精神の深い部分に魔力が流れ込んで、それが実体化するという超、超、稀なケースや、へえ、これは、ほうほう、実に面白いやで」

メルちゃんは興味深そうにクロコちゃんを観察、何やらレポートにまとめたり忙しそうである。

「貧乳、私だけ……」

火蓮ちゃんがクロコちゃんの胸部を見た後にショックを受けて何ならショックを受けている。すると。

「俺は貧乳大好きです！」

「ぎゅ、急!?!」

彼が彼女の肩を掴んで爆速ド直球ストレートで感想を述べる。火

蓮ちゃんが顔を赤くしてツインテールが僅かに揺れる。その褒め方はどうなんだと一瞬思ったが気を遣ってるわけとかでも無いし、本心だからいいのかな？

「魔力がコハクは半分になってるみたいやな……二人で等分という事に成つとるんか。おもしろいわあ」

メルちゃんの研究魂が燃えている。実に面白いとか言っただけで紙に書きなぐりである。

「クロコは……あーし達の味方なの？ もしそうなら、これから一緒に暮らして、戦ってくれたりするのかな？」

「クロコはダーリンの味方なのです。ですから、まあ、協力してあげてもいいのです」

「そうなんだ……よろしく」

「……よろしくなのです」

クロコちゃんは一瞬、戸惑ったがアオイちゃんから差し伸べられた手を握った。少しの不安を感じさせる彼女の表情だった。その後は、メルちゃんが色々綿密な検査がしたいと言っただけでメルちゃんと彼女は一緒だった。



私は十六夜に呼び出された。まあ、昨日、今日のこともあって色々話があったというのわかる。何というか、十六夜と出会ってから、ずっとアタフタする人生を送っている気がする。日常が非日常になって、その非日常が日常になっている。それは私にとっても楽しい事で、素晴らしい毎日。それがこれからも続いて行くと思うと私は楽しくて仕方ない。

ただ、十六夜が気を遣いすぎているという現状はあまり好ましくな

い。十六夜はコハクの事件の事を気にしている。自分のせいだと、自分だけの責任と感じている。それは違うが彼はそう感じ続けている。何とかしないと……と思っていると十六夜から話したいと言われた。まさに絶好の機会。しかも、呼びだれた時間が夜。日が暮れたこの時間なら言いたいことが言える。

彼の部屋に入ってベランダに向かう、そこには彼が居て、少し、いや、大分寒い中、外で話す。

「火蓮先輩、何か不安とか、相談してほしい事ってないですか？」
「特に無いわよ」

ほら、やっぱりコハクの事があったから私の事も心配してるんだ。なんで、自分で背負うかな。支え合わないの？ 私は貴方の彼女なのよ？

「そうですか……」

悩ましい表情をしている彼に私はため息を吐いた。

「あのね、変に悩みすぎるのは十六夜の良さが消えるわ」

「俺の良さ？」

「十六夜は思った事を言ってしまうがままに正直に愛を持って行動するのが、十六夜らしいのよ。最近の十六夜は気を遣いすぎて、それで本当の自分が出せてない。例えば今の十六夜なら萌黄に愛を囁くとして、隣にアオイが居たら気を遣って、二人きりの時に後回しにするでしょ？」

「そう、かもしれないです……」

「まあ、それは十六夜なりの優しさとか気遣いでそれも良さよ？ だけどね、もう、十六夜、貴方は開き直りなさい」

「え？」

私がそう言うと彼はどういう事なんだと言う顔をする。

「どういう意味か分からない表情しているけど、安心して、ちゃんと説明するわ。先ずね、前提として十六夜はクスよ」

「そ、そうですね……」

十六夜は肩を落としてショックの顔をする。

「当たり前よ、ハーレムなんて言うんだもの。クズ以外の何者でもないわ。萌黄、アオイ、コハク、そして、クロコもハーレムに加えたいでしょ？」

「あ、その、はい……」

私はやれやれと言った感じで彼に言った。十六夜の事だからと頭の中ではクロコを見た瞬間にそうなるんだろうと思っていた。

「ハーレムって言うけどさ。本当はダメなんて分かってるでしょ？」

「はい……」

「しかも、メンバーがメンバーよ。萌黄なんて、生涯で一度でも付き合えたら運を全部使う位の女性よ」

「わ、分かっています」

「アオイは凄い献身的で母性もあってスポーツできる、凄い素直でそこに付け込もうとしてるなんて最低よ？」

「う、うう」

「コハクはもう、凄いメイドかよって言う位尽くしてくれるわ。いつでも、なんでも、望むままに色々してくれるでしょうね。あんな、S級美女がよ？」

「あ、そうですね……」

「クロコはまだ良く分かんないけど、きつとコハクと同じ位色々してくれるわ。ちよつと病んでるけど。そんなの大した問題じゃないわ」「その通りです……」

なんか、どんどん十六夜小さくなっていくような気がする。まあ、少しくらい追い込んでもばちなんて当たらないからいいけど……

「十六夜は、五人も彼女を作ろうとしてるの。もうね、超最低馬鹿」
「グハッ……」

「本当にどうしようもない馬鹿だけど……でも、もう決めたんでしょ？」

「……はい」

「だったら、もう、開き直りなさい！ 馬鹿みたいに愛を叫ぶ。家の真ん中でも、学校でも。もう、十六夜はどうしようもない我儘野郎なんだから！ もっと、我儘になっても大した問題じゃない！ 今更何で、チキンになつてんの!? アジフライになりなさいよ!! 本当に今更馬鹿みたいに気を遣つてもしようがないじゃない!!」

「……確かに」

「分かったら、愛と勢いと持ち前の猪突猛進で、そこに我儘を加えて、自分の思うがままに走る事！ いい!?!」

「はい」

「大丈夫よ、きつと、ここまで馬鹿みたいに走り続けてきた十六夜が皆好きだから、もつと馬鹿やつても好感度が上がるだけよ……」

「か、火蓮先輩……」

ああ、我ながら恥ずかしい。こんな少年週間系のセリフを言ってしまうなんて、こんな馬鹿みたいなことを本気で言ってしまうなんてこれはきつと十六夜のせいね。

「じゃあ、とつとと、クロコをハーレムメンバーに入れる為に口説いて

……きやッ!」

いきなり十六夜に抱き着かれた。ちよ、ちよつとお、きゅ、急すぎ

……

「ありがとうございます！ 俺は、火原火蓮が大好きです!!」

「前半と後半の分が全く合っていないんだけど!?!」

何というか、偶に十六夜は覚醒するのよね。私がそれを促しているんだけど。彼はどうやら開き直ったようでも雰囲気はいつもと違う。

きっと、私と同じようにずっとこの状態が保たれることは無いだろう。あくまで一時的な開き直り、彼の性格からしていつまでもはきつと無理だろう。でも、この状態の彼は無敵だ。

「俺は、開き直って口説いてきますー!」

「そう、頑張りなさいっ……その、抱き着かれると、恥ずかしいんだけど」

「照れる火蓮先輩も可愛いです!」

「や、やめて……」

いや、本当に恥ずかしい。真面目にドストレートにこんなに言われるとマジで恥ずかしい。夜だから多少は緩和されてるけど、これが昼間だったら

『ば、バカああああ!! アンタ、ばかあああつああ!!』

って大声で言ってるはずだ。いや、夜で良かった、近所迷惑も良いところだった。彼はカッコつけたのか急に訳分らない事を言います。覚醒状態の彼は最早、止められない。

「折角だから、火蓮先輩の好感度をさらに上げたい!」

「それ、言ったらイケナイやつ!」

「ちよつと、カッコいい事いますね……えつと、俺達の関係はまるで恋の時差式信号ですね……」

「カッコつけが絶妙にダサイ!!! しかも、意味わからないわよ!! 会話のキャッチボールして!!」

ヤバい、何だかんだで抱き合って幸せ。きっと、今の私、メス顔になってる……目の奥がハートで口元が緩みまくってる。夜だからあんまり見えない。本当に良かった。

「じゃ、ちよつと俺はクロコと話してきますー!」

「あっ……そ、そう、とつととハムスターみたいに行きなさいよ」

彼が離れて少し、名残惜しくなってしまった。彼もきっとそれを感じたのだろう。

「あう！」

再び、勢いよく彼に抱き着かれる。驚いて変な声出ちやった。

「その声も可愛すぎて、ヤバいです!!」

「うろう、聞かないふりしてもいいじゃない……」

「可愛いから、聞こえないふり出来ませんでした!!」

馬鹿みたいに行けって言ったけど、何でもかんでも、可愛いとか言うんじゃないわよ!! もおおお!! こういう所が好き!!!

その後、五分くらいはこのままで私はその間、恐らくずっとメス顔だった。

そして、十六夜はクロコの元に向かう。気になった私はこっそり家の中ではあるが尾行を開始する。下の階に降りると萌黄がたまたま廊下に居た。

「あ、君、ちょうど良かった。今日の夕食は何が……あう!!」

十六夜が萌黄にいきなり抱き着いて、彼女が変な声を上げる。いや、場の流れを考えなさいよ!! どう考えても夕食何がいいかリクエスト取ろうとしただけなのに、抱き着く!?

「ちよ、ちよっと、こんな場所で……こういうのは、もっと絶対に皆にバレない場所で……」

なんか、萌黄もしつかり色々狙ってるのね。私は彼女のとんでもないカミングアウトに気を引き締める。しかし、十六夜にはそう言った彼女の考えは通用しない。

「俺、萌黄先輩の事が好きです!!」

「えええ!!? きゅ、急すぎない!!」

「可愛いし、スタイルもいい。身長の方がコンプレックスって思ってると思いますけど、俺はそこが好きです! 大きい萌黄先輩マジで可愛い!! 誰が何と言おうと可愛い!!! 胸部や綺麗な脚、文句のつけどころがない!! 料理も出来るとか、最高です!!」

「ッ、あ、そ、そんなこといわれへも……」

萌黄の口がニヤけすぎておかしいことになっている。しかも、メス顔になってやがる……

「じゃ、俺は言いたいことが言えたので」

十六夜は萌黄に全部言いたいことは言ったようで、彼女から離れようとする。いや、もう、滅茶苦茶過ぎない!!??

「あ、その、……もうちょっと、ハグしたいよ……」
「いくらでもします!!」

この後、彼女のメス顔を五分くらい見せられた。萌黄は顔の熱が冷めないように冬廊下で暫く体育座りで座って時間を潰した。

そして、今度はお風呂掃除が終わったアオイが……

「クロ、お風呂もう沸かす!!? あ、ええ?」

お風呂の時間を聞いたただけなのに十六夜に抱き着かれた。愛情表現がとんでもない。私のせいだけど!!

「アオイ先輩、可愛いですね」

「あ、きゅ、急に……そんなのダメ……」

「俺の彼女になってください!」

「あ、えっと、そのつもりだった……」

「ありがとうございます! アオイ先輩みたいな綺麗な瞳がチャームで声も可愛い、ちよつと天然でクールで全部が可愛い!!」

「デレ……不可避……クロ、い、一回離れて……恥ずかしすぎる……」
「分かりました」

「あっ……やっぱり、もう一回来て?」

「はい!」

「んんっ、もっと、強く抱いて……?」

アオイのメス顔初めて見た……なんかエロいし。その後十六夜はクロコを探し回る、その途中でコハクとバツタリ遭遇。

「あ、十六夜君、一緒に冬休みのしゆく……ふええ!？」

安定のいきなりのハグ。コハクはビックリしたようだがすんなりとメス顔になる。

「もう、ビックリしましたよ」

「すみません、好きと言うのを表したくて……」

「えへへ、それは凄く嬉しいです。めっちゃ伝わります」

「それはよかったです!」

「……あの、怒ってないんですか？ 私がしたこと……」

「全く、怒ってないです。俺にも原因があったし、それにあれだけしたってことはそれだけ愛してくれてるってことだから。俺は怒ってないです! 約束した通り、絶対に幸せにしますから!」

「い、十六夜君……もう、私、とことん貴方に惚れてしまいます……」

「俺もです」

「えへへ、じゃあ、もっと、惚れてくださいね?」

「はい!」

「十六夜君、もっと強く……」

「はい……」

十六夜は彼女を強く抱きしめる。

その後、五分くらいコハクのメス顔を見せられました。いや、十六夜が十六夜し過ぎなんですけど!?

これって、私が言ったから!?! 確かに、十六夜は私の事を結構頼りにしてるけど……だとしても流石に背中押しすぎたかも……

そんな事を考えているとクロコと十六夜がバツタリ。クロコは十六夜を見ると勢いよく抱き着く。

「ダーリン!!」

何というか、本当にコハクそっくりね。髪の色は違うけど、ちよつと幼い病んだコハクみたい。

彼女はあざとく十六夜に抱き着く。胸押し付けやがって……

「クロコさん、聞いてください」

「何なのですか？」

「俺の彼女になって欲しいんです」

「それは……ハーレムの一員に成れと言う事ですか？」

「はい！」

「……開き直ったのですね、ダーリン……」

若干の呆れた表情を十六夜に向けるクロコ。しかし、十六夜はお構いなしにクロコを強く抱きしめる。

「だ、ダーリン？ こ、こんな積極的ではなかったと思うのです……っ」

クロコはきつとコハクと同じで自分の予想外の展開に凄く弱いんだろう。きつとクロコの中では十六夜が体を密着したことでアタフタするのを想像していたはずだ。だが、覚醒の十六夜はそんな程度じゃ揺らがない。

「俺はクロコさんをハーレムに加えたいです」

「……クロコは……嫌なのです……」

クロコがハーレムを否定した。でも、十六夜はその理由を既に分析していたのか、分かっていたのか、知っていたのか直ぐに切り替えます「……クロコとコハクは比べられるものじゃない。きつと、あなたは信じることを選んだコハクと信じられない自分を見て嫌になつてると思う」

「ッ……なんで、いつもあなたは知っているのですか？」

「それはいつか……俺は比べる必要なんて無いと思う。クロコもコハ

クも両方、可愛くて、最高だから、俺は両方彼女にしたい、クロコの人生も欲しい」

「嫌なのです……きつと、コハクとクロコを貴方は比べるのです。そして、クロコを下に見る日が来るのです。宝石と石ころがあったら誰もが宝石を欲しがるように、クロコを見ない日が来るのです……」

「両方、宝石にしか俺には見えない」

「所詮劣化品……」

「そんなことない。貴方は誰よりも人の痛みを知ってる、自分を誰よりも見ている。それが貴方の長所。他にも挙げれきりが無い。黒っぽい髪の毛なんて俺のドストライクですよ、目の怪しい感じもたまりません。貴方は誰よりも自分を知って変わろうとしている。口調だってわざとちよつと変えてるんだよね？ 新しいさいこうのじぶんでありたいから……クロコにはクロコの良さが合って、だから、貴方の人生が欲しい」

「ッ……」

クロコが十六夜をギュツと抱きしめた。

「人は変わって行きます。本当に些細な事や大きな事、その環境とか、なんてことない会話、そう言ったものの積み重ねで変わって行く。もう、すでにコハクとクロコは似ているだけの姉妹みたいなものですよ。そして、これからもクロコはクロコの良さがどんどん出てくる。コハクもコハクの良さが出てくる。どっちも宝石で俺は欲張りだから両方欲しい。だから、」

「もう、いいのです……」

クロコは十六夜の言葉にかぶせた、これ以上聞く必要はないと彼女も分かったのだろう。

「ダーリンの彼女になるのです。なりたいのです……ハーレムでもいいのです……」

「きつと、クロコも皆が信じれる。俺もサポートするよ」

「私の不安を全部、貴方は潰すのですね……」
「好きな人の為だから、当たり前だ。それにそうでもしなきゃ、ハーレムを作る資格なんてない」

なんか、急に口調もため口になんかしちゃって……面白くないんだけど……私は、先輩だけどき……今度、ため口で話してもらおう。

え？　ちよつと待って？　確かに感動的な感じだけどき！　私と話してから三十分くらいしか経ってないんだけど！

はああああああああいや、私が背中押したけどさ!?　この時間に萌黄とコハクと私をメス顔にして、アオイもちやつかり彼女にして、クロコも彼女にして、全員の好感度上げて……はああああ!?

魔装少女攻略RTAでもやってんの!!??　もう、全員、完全にメス堕ちだし！　クロコ即落ちニコマ状態だし!!　ネットだったら絶対クロコチョロインって言われるし!!

十六夜のハーレム……完成しちやつた……

百二十一話 ハーレムになっても

その日、俺は遂に全員と付き合うことになった。前世から好きだった魔装少女達。正直に言うとは嬉し過ぎる。

火蓮から言われたことで一時的に覚醒モードに入ってしまった。冷静に考えると俺ってヤバいと思うが今更だな。

「えへへ、ダーリン……」

ソファに座っているとクロコが右手に絡みつくようにくつついて顔をほころばせている。

銀堂クロコとは銀堂コハクのトラウマなどに魔力が流れ込んできた人格。体格は中学生くらいの銀堂コハクでたれ眼で、髪が紫がかつた黒のような色、瞳はピンクと黒が混じった魅惑的な色。若干のロリ感があり、大変人気のキャラクターだった。本来のストーリーでは仲間になるのに大分時間がかかる。

コハクと自分をどうしても比べてしまい、さらに信じられない自分が嫌でしようがないのだ。でも、彼女は信じたいと思っているし、新しい自分で居たいと思っている。俺は銀堂コハクと銀堂クロコ。

同じ存在だとは思わない、似ているだけだから。そう知っているから。それと伝えた。本来なら、四人と関わって行くうちに少しづつ仲間意識が芽生えてその間は冷酷な感じなんだが……まあ、そんなこと気にしても今更しようがないよね！

クロコはコハクと似てしまう部分があるが、クロコだけの良さも沢山ある。さつき彼女に言った事もあるが、それ以外だと甘えん坊だと言う事、一人だけ中学生と言う事。甘えん坊と言うだけで可愛いと前世のネットでは評判。

中学生と言うだけで、なんかいいとネットでも評判だった。他の四人が高校生だからと言うのもあるんだが中学生と言う属性が際立つのだ。まあ、クロコは高校生としてこれから生活するのだが、一応、中学生くらい精神と身体という設定なので……

何か良くね？ という意見が殺到。後半出て来たにも関わらず一気に人気急上昇。SNSでもしばらくは彼女一択だった。

さらに、これは利点かどうか分からないのだが、いや俺にとってはいいのだが……クロコは魔装少女五人の中だとダントツで性欲が強いらしい……勿論、本来のストーリーで彼女の変なシーンとかは一切なかった。ただ、ファンブックに彼女の彼氏になった人は大変……？と書いてあったのは覚えている。

甘えん坊、中学生、性欲強い、垂れ眼がエロい……属性が多すぎる……と俺は、いや全国の魔装少女ファンは思った。だが、それがしっかりと纏まっているのだ。魅力的に見えて仕方がないのだ。

「ダーリン」

「どうしました？」

「今日、一緒にお風呂入りたいのです……」

眼をウルウルさせているが瞳の奥が獲物を逃がさない肉食動物のようになっていた。お風呂に一緒に入ったら一体全体、どんなことになるのか……

以前の俺ならここでアタフタして、拒んだかもしれない。しかし、開き直った俺は

「俺も入りたいです！」

「じゃあ……そのまま互いに洗いっこして……しちゃいけないこと一緒に……」

ああ、可愛い、艶がある可愛さ、心がぴよんぴよんするんじゃあー。このまま18禁のような展開になるかもしれないと心の中で準備と期待とか色々していると

「あーしも一緒に入りたい」

「入りましょう！」

「僕、も……」

「もう、全員で入りましょう！」

何という勢い任せと思うが俺は行き当たりばったりで行くと決めた。だから、少し残念そうな顔をしているクロコにハグをする。

「うぴっ！」

「クロコさんを蔑ろになんて俺は思っていないです」

「わ、分かっているのです……」

「それならよかったです」

「ううう、急に来られると恥ずかしいのです……ねえ、ダーリン」

彼女は皆に聞こえない様に耳元で囁くように話しかけてきた。

「クロコはもっと特別な事したいのです……」

「よし、やりましょう！」

「声が大きいのです!!」

しまった、可愛くてつい声を荒げてしまった。そこで、さらに俺は周りからの視線に気づく。皆ジト目を向けたり、頬を膨らませたりしていた。

「もう、全員一緒にハグしましょう！」

いや、言ってることがクズ過ぎるな、俺は……



「私もなのですがクロコがもっと皆と仲良くなりたいみたいなのでどうしたらいいでしょうか？」

コハクちゃんの声が寝室に響いた。彼女はクロコちゃんの腕を引いている。そして、二人を見守るように寝室のドアを少し開けて彼が暖かい目を向けているという訳の分からない展開。

「呼び方を親しみのある感じにしたら？」

火蓮ちゃんがとんでもない適応力で何事も無いように提案をする。

「……どうすればいいのですか？」

クロコちゃんが恐る恐る聞く。未だに僕たちを接するのは慣れていないようだ。

「取りあえず、私達をお姉さま呼びにするってのはどう？」

「……火蓮お姉さま？」

「これ、いいわ、これ！」

「あーしもお願い」

「アオイお姉さま?」

「ほああ! 最高、あーし妹欲しかったから……グツジョブ」

「僕もお願いしてもいいかな?」

「萌黄お姉さま?」

うん、凄く可愛い! 最高。この部屋をのぞいている彼も心がびよんぴよんしている表情。

彼女の首をかしげながらのお姉さまは心に凄く来る。実は妹が欲しいなと思っていた時期がある為、さらにドストライクである。火蓮ちゃんもアオイちゃんも満足そうである。

「この感じだと十六夜はお兄様って呼ぶ感じになるのかしら?」

「いえ、ダーリンはダーリンで行きます」

「そう……流石なのです。お兄様聞いてみたかったです……まあ、仕方ないわね」

火蓮ちゃんが彼がお兄様と呼ばれない事に残念そうな顔をしている中、コハクちゃんがクロココちゃんに私もお姉さまと呼んでアピールをする

「あの、私、私もお願ひします」

「……コハクお姉さま?」

「おおおお、こ、これはいいですね……妹ですか……そう言えば、クロコのことってお母様とお父様に報告した方が良いでしょうか?」

「それは……分からないのです……そもそも、クロコが二人の子供だとは……」

少し、複雑そうな雰囲気になりそうになったとき、襖の外から此方を覗く存在である彼がいきなり介入してくる!!

「二人の子供です! クロコも銀堂家ですよ! 俺が保証します!」

「だ、ダーリン、カッコいい!」

「い、十六夜君、カッコいい!」

眼がハートで恍惚な表情の二人。チヨロイン……ではきつとない
んだらう。それに確かに見れば見るほど姉妹のように見えてくる。

「では、クロコ今度の休みに報告に行きましょう」

「はいなのです」

なんて説明するんだらう……妹ができましたって？ それをいき
なり言われる親ってどういう心境なんだらう……。まあ、嬉しい事に
は変わりないのかな？

その後少し話をした後、彼の方を向いてクロコちゃんが笑顔で
言った。

「ダーリン、もう私は大丈夫ですから、自室で今日は休んでほしいので
す。寒いのに見守ってくれてありがとうございます」

「いえ、まだまだ見守って」

「クロコはもう、大丈夫なのです」

「そうですか？ 困ったらいつでもスマホで呼んでください！」

「はい！」

いつまでも彼に見守っては居られないという彼女の意思が感じ取
れる。彼もそれを感じたのだから、彼女がここから頑張ろうとする、
自分から、自分だけで信じようとする意志を。

だから、彼は自室に戻って行った。

「えつと……こんなことを言うのはあれだけど……私達全員十六夜に
誑し込まれたのよね？」

火蓮ちゃんがいきなり、とんでもない事を言う。

「火蓮、その言い方はどうかと思う……」

「だって、そうじゃない。誑し込まれてハーレムになってるんだもん」

「……否定できない」

「これから、私達は恋人仲間って奴になるかしら？ だとするなら、何
かルールとかつけるべき？」

「……」

それは僕だけでなく皆が気にしていたはずだ。恋人になったけどそれは自分だけではない。皆仲良く、五分分にでもしてルールを設けるのか、無法地帯にするのか、僕としてはルールを設けたい……

「えっと、僕としては……エッチな事はき、禁止にしたいかな？ 性に乱れた生活ってあんまりよくない気がするし……」

「？ 具体的にどんなこと？」

「キスとか」

「そうだね……キスは結婚式までしちゃいけないもんね」

あ、僕キスしてる……アオイちゃんはそのう言った知識がないから大丈夫だと思うけど、残り三人はちよつと心配。

「……そうね……肌にも悪いって効くし、やり過ぎはダメよね。癖になってもあれだし、十六夜も全員相手にしたらとんでもないことになっちゃうし……」

「……そうですね。私も禁止で良いと思います。健全な生活が一番です」

「……お姉さまたちに同意なのです」

こいつら……全員ルールなんて気にするつもり無い!! 抜け駆けしようとしてる!! 僕がしようとしてたのに!! ルールを設けて、見えないところでポイント稼ぎまくってやろうという僕の作戦が……見えない所なら皆からの嫉妬とかもないし、秘密ってなんかいいからそうしようと思ってたのに……

そ、そつちがその気なら僕だって容赦しない。どこかしらでさえつたい抜け駆けしてやる……今度、三学期は球技大会とかあるし、何が何でも……おおっと、こんな暴力的思考はいけない……

「萌黄、他には？」

「そうだね……抜け駆け禁止とかかな？ ほら、もう僕たちは彼女で争う必要とか無いわけだし」

「……………分かった、あーし、ヌケガケシナイ……………」

うううう、アオイちゃんも抜け駆けしようとしてる。眉間にしわがめつちや寄ってるんだよ……………嘘つくなんて今までしてこなかったんだろな……………

彼女になってもバチバチな牽制が止むなんてことは無かった。絶対、誰かしら抜け駆けするという意識を互いに持ちながらその日は張り付けた笑顔で眠りにつく。

まあ、これが僕たちの日常だから……………仕方ないか……………



「付きましたよ。十六夜君」

「やっぱり立派ですね」

「やっぱり?」

「あ、何でも無いです」

ダーリンとコハクお姉さまと一緒にお母様とお父様に挨拶に来た。クロコは銀堂家だから産んでいないとはいえ妹だと言う理由。さらに、ダーリンはクロコとコハクお姉さまを嫁に欲しいから挨拶に来たらしい。

流石です。ダーリン。と言うしかない言動。この人のおかげで最近自分のことが誇らしく、銀堂クロコに慣れている気がする。

劣化ではなく、個としての成長。ダーリンがそう接してくれるから周りも私をそうやって見てくれる。きつと、ダーリンがいなかったら暫くは銀堂コハクと銀堂クロコは同じ存在として見られていたかもしれない。

この人にどんどん惹かれているのが分かる、コハクお姉さまの記憶があるからと思ってしまう瞬間もあった。だから、この想いが偽物

なのではないかと感じた時もあった。だけど、それは違うと断言できる。

だから、こうやって彼の腕に絡みついて少しでも意識してほしいから女を凄じい意識させる。コハクお姉さまの反対の腕に絡みついていく。ここまで来るのに周りからの嫉妬の視線が強かった。

ダーリンが嫌な思いをしてしまうかと思つてやめようかと思つたがそれすらも、嬉しいらしい。開き直りが凄じいと感心する。

さて、暫くすると大きな白い家からお母様が出てくる。

「久しぶりですね。十六夜さん、コハクさん……えっと、そちらの方は……」

「お母様、それは家の中で……」

「分かりました。それとそれとして、人前でそのようなはしたない真似は慎んだ方が良いと思いますよ」

「す、すいません……」

クロコとコハクお姉さまがお母様の雰囲気には圧倒され、ダーリンから離れる。そのまま家の中に入って行き、リビングに入る。ソファにはお父様が座っていて、クロコに視線を向ける。

ドキツとして、ダーリンの後ろに隠れるようにしてしまう。ダーリンは私を宥めるように頭を撫でた。子猫のようにそれに浸つてしまふ。

「じー」

それを羨ましそうに見る。コハクお姉さまも頭もしつかり撫でる、彼女も雌猫のように嬉しがっているのだが、よくよく考えたら両親を前にしてとんでもないメンタルだなと思う、そしてダーリンは銀堂姉妹の扱い方が日に日に上手くなっているように気がする。ダーリンを真ん中にしてソファに座り、向かい合うようにお父様とお母様が座る。

「これ、つまらないものですが……」

「わざわざすみませんね」

「ありがたく頂こう」

いきなり、お土産を渡すダーリン。流石と言うか何というか。流石の域を超えている気がする。

「それで、コハクさん……そちらの方は」

「私の妹です！　つまりお母様とお父様の実の娘です！」

「……はい？」

「コハク、どういうことなんだ？」

こんなお父様とお母様は初めて見た。何言ってるんだコイツ見たいな目を向ける。

「えっと、元は一つだったのですが、魔力がそこに流れ込んでクロコが生まれて、私の妹になったという感じですよ」

「貴方、分かりましたか？」

「いや、全然分かんらん」

案の定、どういうことなんだと言う二人、全く理解できないらしい。そこでダーリンが始めから分かりやすく説明をする。

「えっと、先ずコハクさんは最近巷で噂の魔装少女なんです」

「……はい？」

「あの、ニュースでよく訳のわからん銃火器を放つ魔装少女なのか？」

「そうです。それで彼女は魔力が合ってそれが精神の……カクカクシカジーカー」

「なるほど、そういう事なんですな」

「分かりやすい」

ダーリンの素晴らしい説明で二人は一瞬で全てを理解する。

「クロコさん、少しこちらに来て貰えますか？」

「は、はい」

クロコは緊張して足と腕が同時に出てしまう。だが、お母様の元に向かうと彼女は優しく抱きしめて頭を撫でてくれた。

「コハクさんに似ていますが……少し違いますね……不思議な事です
が貴方も私の娘なのですね」

「お母様と呼んでもいいのですか？」

「ええ、勿論です。こんな可愛い娘なら大歓迎です」

「お、お母様……」

「俺撫でていいか？」

「も、勿論です。お、とうさま？」

「素直に読んで構わんぞ」

お父様も私の頭を撫でる。私は二人に子供のように甘えてしまった。私は私。コハクはコハク。二人にも認められてそれが嬉しくてたまらない。ふと、コハクお姉さまとダーリンが気になったので目を向ける。

「私も甘えたくくなりましたー。十六夜君、ぎゅー」

「あ、ありがとうございます」

二人が何かイチャイチャしているのが気に喰わない。

「お母様、コハクお姉さまはダーリンを監禁しようとしていましたと
妹の私は報告するのです」

「ほう？ それはそれは……コハクさん？」

「あ、そろそろそれは……でも、クロコも監禁を助長しようとしていた
と姉の私は報告します」

「クロコさん？」

「ひいい、そ、それは……」

互いに足を引っ張り合いをしてしまった、人を呪わば穴二つと言う
言葉が頭に浮かぶ。

「血は争えんか……これからも頼む」

「はい！ それでも二人を俺は愛します！ だから娘さんたちを俺に
ください！」

隣ではいきなりダーリンが土下座をしてお父様に懇願する。

「ふむ……娘二人が良いなら俺は……」

「あと、このことも考慮に入れ欲しいです！ 俺にはあと嫁が三人い
ます！」

「少し、考えさせてくれ。それとそのことを詳しく聞きたいんだが
……」

「はい！ もう全部言います！」

潔過ぎなのです。ダーリン。この後お母様には物凄い怒られました。
た。お尻ペンペン姉妹揃てされました。ダーリンはめちやくちや懇
願して私達を嫁にする権利を貰いました。

めでたしめでたし……？

終幕編

百二十二話 とある作者との邂逅

私はその日、全てを思い出した。自分の事を前世の事を……私は自分の作品のキャラクターの一人である占い師に転生していたのだ……

だとするなら、不味い。この世界は私の少女たちのバッドエンドの世界線かもしれない……と思ったのだがよく考えたら、黒田十六夜と言う者がいた事を思い出す。彼が居ることで全てが救われていることを思い出した。じゃあ、安心だ……しかし……

黒田十六夜……私が作り上げた救済の主人公……だが、彼は設定なんて殆ど考えられていなかった。いわば空っぽの器。だと言うのに、何故あんなに動けたんだ？

彼と海原町に行ったことを思い出す。電話したことも思い出す。空っぽの器と言う感じはしなかった。だとするなら彼は一体……確かめる必要がある。だから、私は彼を呼び出した。



俺は占い師に呼び出された。久しぶりに会うなと思いつつ、いきなりで驚きと言う感情もある。皆からは浮気では？ と一瞬疑われたが直ぐに誤解は解けた。

まあ、そんなこんなで久しぶりの喫茶店である。火蓮とここで色々あったなとかちよっと思ひ出す。しかし、今はもう彼女である。

「いらっしやませー。あ、久しぶりですね」

「どうも、えっと待ち合わせなんですけど」

「もしかして、あそこにいる人ですか？」

「あ、そうです」

俺は既にコーヒを飲んでいる彼女の元に向かった。何というか彼女の雰囲気以前と違う気がするんだが気のせいだろうか？

「やあ、よく来てくれたね。さあ、座ってくれ」

「語尾のじやはどうしたんですか？」

「ふふ、もう使わないさ」

「キャラ変ですか？」

「違うと言っておこう」

どうしたんだろうこの人、本当にちよつと変な感じがする。落ち着きすぎじゃないか。前の自信ありありの感じは何処にいったんだ？

「何か御用なんですか？ その、彼女がいるのであんまり女性と二人きりとかで不安をかけたくないんですが……」

「彼女とは……銀堂コハクとかかい？」

「そうですね……」

銀堂コハクの名前ってこの人に言ったことあったか？ まあ、占い師だからこれくらい普通か。

彼女は少し、咳払いをして場を整えると意を決したように俺に聞いてきた。

「君は……前世があるって私が言ったら信じるかい？」

「不思議ちゃん設定な感じですか？」

「違う」

「あ、なんかすいません」

結構真面目に聞いていたらしい。真面目な声のトーンで怒られた。中二病とかでも無い感じだな。

「えっと、一応信じますかね？ 色々不思議な事がこの世界にはあるのぞ」

「そうかい……実は私に前世の記憶があるんだ」

「そ、そうですか……」

「そして、この世界は私が描いた本の中の世界なんだ」

「うええええ!?!」

「その反応……私を知っているね?」

え? この人、『魔装少女×シークレットファイブ』の作者さんだったの!?! いや、素直に驚きだ。

「えっと、俺ファンでした」

「それはどうも」

「それはそうと何でバッドエンドなんて描いたんですか? それだけは理解できません」

「……そうだね。編集社の中に凄いお世話になった人が居てね……断り切れなかった……」

バッドエンドなんて絶対に許せない。それはファンとして、だけど彼女も後悔していることは汲み取れた。さらに、彼女を攻めるのもお門違いな気も少しだがした。だから、これ以上は言わないことにした。

「君には感謝しているよ。彼女達を救ってくれて」

「好きな人の為ですから当然です」

「そうかい……君だから黒田十六夜に成れたのかもしれないね」

「黒田十六夜と言うキャラが居たんですか?」

彼女の言い方からもしかしたら、黒田十六夜と言うキャラの存在を感じ取った。

「空っぽの器だけ設定であった。ただ、彼女達を愛するものであつてほしいと私が想っていたからね。もしかしたら、それに一番適応したのが君だったのかもしれない」

「そうなんですかね?」

「……あんまり驚かないんだね」

「いえ、驚いてます」

「あんまりそんな感じには見えないんだが……正直、こういう時って色々悩んだり考えたりすると思うんだが」
「アジの開きのように開き直ってますから」

俺は決められたレールの上を走っていたのか!? とか、俺と彼女の絆は偽物なのかとか普通なら悩むかもしれないが俺はそんなことはない、と断言できるし、俺が生きているこの世界も想いも本物だ。

「そうかい、存分に開き直って彼女達を愛してくれ。本当にありがとう。君には感謝してもしきれない」

「俺も感謝しています。貴方の作品を読めたこと」

「ふふ、意外と誑しの部分があるのかもしれないね……本当に良かった彼女達が救われて……彼女達は私の理想だったから」
「理想?」

「彼女達の出来事は全てじゃないけど、私の実体験が入っている。離婚とか虐めとかね。だから、最後には幸せになれるって自分の願望とか色々つき込んだのさ。だから、今の彼女達が幸せならそれは私の幸せ。最高だよ……君は。本当にありがとう」

「……よければ会って行きませんか?」

「それは、また今度にするよ……」

この人も色々あった人生だったんだろうなと思った。彼女はそう言えばと何かを思い出して話題を切り替える。

「そうだ、これを忘れてはいけない。この世界を私なりに考えたんだけど……」

「はい?」

「この世界は私の理想の世界でもあり後悔の世界なのかもしれない」
「詳しくお願いします」

「バッドエンド、それが二つもこの世界にはあった。まあ、あっさり君が回避したのは流石としか言いようがないが……これは私の勘なんだけど、もしかしたら、君の知らないもう一つの物語が始まるかもし

れない」

「それって?」

「劇場版だよ」

「聞いたことないんですが……」

魔装少女の劇場版なんて聞いたことがない。あれば絶対に何回も見に行っているはずだし。

「この作品は本編が完結した後で考えられていた作品だからね。でも、完結直後は体調を崩してしまつて何年も放つて置いたら時代の波が変わっていた」

「そうなんですか……」

「まあ、時代の波だからしようがないんだが……一応プロットだけはあつたから劇場版したかつたなと後悔が残っているんだ……」

「その、内容はどんな感じなんですか?」

「四人目の魔の三銃士トライ・リベリオンが次元のはざまに封印されていてね。そいつの能力は空間を操るといふ能力なんだ」

「チートじゃないですか!」

「いや、結構あつさり倒す」

「ええ!? そうなんですか!」

どう考えてもチートにしか聞こえない能力だがそれをあつさり倒す魔装少女は流石としか言いようがないな。

「実はね、この世界には鏡写しのようにもう一つの世界があるという設定があるんだ。その世界はこちらとは少し時間軸が違う。その世界に五人が飛ばされて未来の自分と邂逅するというストーリーなんだ。あくまでメインは未来の自分との対話。そのまま一緒に変身して、もう、ギッタンバッコン敵を倒す。一緒に変身しなくても倒せるのにギッタンバッコン倒す」

「流石、究極のかませの魔の三銃士……劇場版の四人目でもそれは変わらないんですね……本編でも結構扱い酷くなかつたですか?」

「そうだね。魔王が復活したら真っ先に喰われて一度も魔装少女と戦うことなく退場したからね」

「巷では凄いあつさりやられたから、お茶漬け先輩トリオって有名でしたよ」

「ああ、そんなのもあつたね……」

しかし、そんな劇場版の話があるのか。ちよつと気になるな。未来の彼女達だから俺と結婚して子供とか出来てたりして……いや、流石に速すぎか？

「この劇場版は時間軸ではちようど、五人が出揃った所を主軸にしているからね。そろそろ……来るかもしれない。でも、あくまでも可能性だからね」

「大事な事を教えてくれてありがとうございます」

「その言葉そっくりそのまま返すよ……さて、私はそろそろ帰る。また会おう」

彼女は言いたいことは言ったとばかりに席から立つ。

「お勘定は私に任せたまえ」

「いいんですか？」

「ああ、いいとも……今度、彼女達に合わせてくれ」

「はいー」

そう言つて彼女は喫茶店から出て行った。



言いたいことは言えた。一度彼女達に会つて見たかったが……それは私には資格がないだろう。

そう思いながら喫茶店を出て駅の方に向かう。すると、誰かから声をかけられた。

「あの……」

「……………」

振り向くとそこには五人の少女が居た。銀髪の子が代表して私に話しかけたようだ

「十六夜君とはどういう関係何ですか!？」

「…………ふふ、君たちの思っている関係ではないよ」

私がそういうと彼女達は安堵したように一息をつく。

「そ、そうですか…………本当にそうなんですか？」

「疑り深いね君は…………本当だとも…………私は彼の母親の同級生でちよつと縁があつただけさ」

一息ついたと見せかけて銀の子は私に再度質問する。確か、彼女の母親はヤンデレだから…………病みの部分があるからかな? 恋になると疑り深いのかもしいれない…………私の知らない一面だ

「な、なんだあ、よ、よかつたです」

「ほーら、私の言った通りじゃない。疑い過ぎなのよ」

「火蓮も結構疑つてたけど…………」

「アオイでたらめ言わないで!?! そ、そんなことないわよ!」

「確かに火蓮ちゃんも意外と疑り深いからね」

「そういう萌黄お姉さまが真っ先に一応尾行しようと言つたのです」

「そ、それは…………でも、皆も乗り気だつたじゃん!!」

知っているようで知らない。きつと、彼と出会って彼女達も変わったんだろう。でも、きつと彼女達の絆とかそういう大事な部分は変わっていないと感じた。自然と自分の頬が緩むのを感じる。

「私は失礼するよ…………幸せになりたまえ」

去り際に彼女達に言った。背を向けて歩き出す。後ろから感謝の言葉や疑つた謝罪の言葉、五人も居るからガチャガチャして聞こえ

る。

結婚式くらいには呼んでもらおうと私は思い、その場を後にする。

冬の風は冷たいが自然と心は温かった。

百二十三話 君が居ない未来

クリスマスが過ぎて、お正月。新たなる年を皆で迎える。そして、それらのイベントを通してハーレムとはすばらしいと実感する。いや、魔装少女達のハーレムだから素晴らしいに訂正である。

ケーキなんて、甘いのにあーんとかされたら最早砂糖食ってるみたいなものだ。そんな、微笑ましい毎日を送っているのだが、一つ気になることは劇場版……作者曰く、楽に倒せると言っていた。作者が大丈夫だと言っているなら大丈夫なんだろうけど……

そんな感じで日々を過ごしていると、とある日、世界に大穴が開く。彼女達は世界を守る為に戦いに行く、中間パワーアップをして、絆も深まっている彼女達の敵なんてほとんどいない。

大きな穴から出てきたのは見た事のない化け物。俺の知識でも見た事なんてなくて、明らかに強そうな感じがする。パンダのような白黒の怪人。そんな怪人を彼女達は一切容赦なくそいつをボコボコにしていく。

パンダから歪んだ変な発光をしている光があふれる。それをあつさり彼女達は避けていく。そして、最後の最後に五人の魔装技でパンダは貫かれて絶命する。だが、最後の最後の抵抗で劇場版パンダは歪んだ魔力を放出、その数およそ、千。それを全て彼女達はさばくのだが一つだけさばききれずにそれが逃げ遅れた一般人に向かう。ヤバいと思つて俺が咄嗟に庇つた。トラックにひかれそうになった子供を庇うように一般人を押し代わりに攻撃をくらう。

すると、とんでもない船酔いになつた気分で見界が歪んで、頭が痛い。そして、何もかもが歪んでいく。そのまま、意識が……

微かに彼女達の声が聞こえた気がする……



気が付くと、俺は……皆ノ色高校の校門の前に倒れていた。これは、あれか。本来なら彼女達が飛ばされるはずだったのに俺が飛ばされたみたいな感じか……。作者から聞いていた話とだいぶ違うぞ。本来ならもう少し、バトルが拮抗してそれでパンダの攻撃を彼女達がくらい、鏡写しの世界に飛ばされる。

しかし、彼女達の強さは本来以上で絆も本来以上だった理由だと思うが、色々ズレてしまったから俺だけ飛ばされたと推測する……。早く、戻りたいけど……。作者が言うには本来の世界の住人では無いものは自然と修正力で戻るらしい。

どうしよう……。彼女達も心配しているだろうし。でも、直ぐには戻れない。歯がゆい思いを感じていると男らしい声が後ろから聞こえる。

「お前……十六夜っ……か？」

「お前は……」

後ろに居たのは佐々本だった。教師のような恰好で年齢は三十ほど。作者が言っていたな。色々なキャラのその後が見えると……。へえー、教師になったんだ……。意外だな。

これ、逃げた方が良いのか？ どうなんだろう……。そんな事を考えていると佐々本は信じられないような顔をしてこちらを見る。何だ？ その幽霊でも見るような顔は……

「なんで……居るんだよ……お前は……死んだはずなのに」

……どういふこと？

「え？ どういふことなんだそれは……？」

「幻覚、いや、そっくりさんとかドツペルゲンガー!? いや、いや、そ

んなはず……」

「どうやら、俺の話は聞こえていないようだ。この世界の事がいまいちわからないが……コイツ以外から話を聞くほかないだろう。無理やり肩を掴んで目をしつかり合わせてそこそこの声で話した。」

「いきなりで悪いが俺はもう一つの世界から来たんだ。魔族のせいだな……だから、この世界については知らない。だから、早く教えてくれ」

「……そんなことありえるのか」

「ありえる。お前の目の前にある現実が全てだ。それより、詳しく……」

「ああ……まあ、この町魔装少女とか居たからな……でも、かなり聞くのに厳しい話になるぞ……?」

「頼む」

「渋々と言った感じで彼は語りだした。重々しく口を開いて。彼自身もあまり思い出したくないことだと感じ取る。」

「十年以上前、俺達が……高校二年生に上がるころだ……この世界にとんでもない魔族の侵攻があった。今までの比じゃないとんでもない魔族だ。機械的で大きな魔王のような……」

「それって、魔装少女のラストシーンじゃないのか。魔王の船が意識を持ち、それが変形して現実世界に攻めてくる。それを倒してハッピーエンド……死者、負傷者共にゼロ。最善最高の終焉なんだが……」

「まあ、倒されたんだよ。その化け物は……でもな、その戦いで……一人の死者が出た」

「……それが」

「そう……お前だ……」

一気に、温度が低くなった気がした。彼の雰囲気と表情、声のトーンなどで全くの嘘でないことは分かった。

「それで……コハクさんとかは……」

「酷いもんだったよ……その日からもぬけの殻みたいになって……五人共、仲良かったのに……一言も会話をしなくなって、バラバラに行動するようになった」

「……今、五人は何処にいる？」

「分からない……けど……火蓮先輩はこの辺で一人で住んでるって聞いたぜ」

「そうかッ、それじゃあ、またなッ。ありがとう！」

俺はその場から走った。ただ、彼女達に会いたくて。

「またな……か……だといいな」

後ろから声が聞こえる。佐々本は何だかんだでキャラだと思っていた時はあるけど友達だと親友だとも思っていた、一人の人として。俺は軽く手を後ろにやってその場を後にした。



私はただ、いつも通りの帰り道を歩いていた。夕暮れの中、私は沢山の人々達とすれ違う。泥だらけになって遊んで家に帰る小学生や部活帰りの中学生、恋人とイチヤイチャしている高校生。

帰りにスーパーによって肉とかビールとか、野菜とか適当に購入。周りでは子供持ちの主婦や肩車して買い物する親子が見える。三十代のOLか……

レジにお金を払って、エコバッグ忘れたから3円で買って、カゴの中の商品を袋に移す。移していると前の店のガラスに自分の顔が写った……大分、老いてきたなと感じる。最近、両親と会ってその事

を話したら、そんなことは無いと両親には言われた。肌は若いし、張りもあつて三十代に見えないと……

でも……どこか、あの時ほどの輝きが自分から失われた気がしてならない。

そう考えた瞬間に私は自分で自分の頭を軽く振って思考を中断した。レジ袋を手にかけてアパートに向って行く。

また、色々な人が通り過ぎる。男の子と女の子。カップルで高校生。皆ノ色高校の制服を着ている。

その姿が自分と彼に重なった。驚嘆して私は振り返る。勿論、私でも彼でもない。

何度も忘れようとした。忘れたくてたまらなかった。一瞬だけ、忘れたことなら何度もあつた。でも、直ぐに思い出した。彼が居ないという事実だけで私の人生はこんなにも色を失って、辛くて、辛くてたまらない。

はやく、わすれたい……

その為に、私はツイントールを止めた。彼が好きだと言ったから。髪をバツサリ切つてショートにした。いつまでもツイントールだと彼を忘れられないと思つたから。

アニメ関連は全て物置にしまった。彼と見て、話したことを思い出すから。

それでも、忘れられない。いつまでも魂に焼き付いた呪いのように彼は離れない。両親はそんな私を見かねて、お見合いを進めることもあつた。忘れられるなら何でもいいと思ひ、何度か受けた事もあつたけどすべて断つた。

そうする度に彼を忘れようとしているための行動だと分かつて、余計に思い出すから……

だから、ただ、なんてことのない日常を過ごしている。これが……一番、マシ。

そう思いながらただ、歩く。その、時……前に男の子が見えた。黒いパーカーを着て、行く人行く人に何かを聞いている。首を振られて、残念がりまた他の人に聞いている。遠くからだから良く見えないけど……今度はお年寄りのおじさんに聞いている。

「あの、この辺に赤髪で女の綺麗な人っていないんですか!?!」
「うーむ」

「ちよつと、小振りな胸で、お尻も小振りなんですけど!!」
「うーむ」

男の人は背中しか見えない。でも、何処かで……近づいたたびに……私は……幻想を見ているのかと驚嘆が大きくなる。

そう、この背中、この声……この熱い感じ……

「い、ぎ、よい……?」

「っ……! 火蓮先輩!?!」

私は恐る恐る彼に近づく。レジ袋を道に落として、ゆっくり両手で頬に触れる……幻覚じゃない、幻想じゃない、本物……

「なんで、どうして? 死んだんじゃないの?」

「その、俺はもう一つの世界から魔族に飛ばされて……」

「……そうなんだ……ねえ、ちよつと体貸して」

私は彼の背中に手を回して頭を胸板に預ける。何度も味わって来た。あの感触で暖かいもの。人目なんて気にならなかった。私の中で彼との思い出がフラッシュバックする。

ポタポタと涙があふれた。忘れられる訳なんてなかった。ずっと、バカみたいに誤魔化して生きてた。十年以上も頑張ってたのに……今になって現れた……私は彼から離れられないと再認識した。

十分ほど、その場で泣いて。流石に視線が多くなって来たので一旦離れて二人で歩き出す。何年も会ってないのに歩幅が自然とあう。

「えっと、取りあえず家に来ない？ 色々話したいし、十六夜も聞きたい事あるんでしょ？」

「はい……」

「じゃあ、その、手、繋がらない？」

「手ですか？」

「もう、おばちゃんになっちゃったけどさ……でも、それほどしわくちゃってわけでもないのよ？ もしかして、おばちゃんの私はいや？」

「そんなことないです！ それに全然、おばあちゃんには見えないですよ！ 寧ろ、JK！」

「それは……褒め過ぎと思うけど」

「そんなことないです！」

そんなことを言いながら手を繋ぐ。ずっと、こうしてたかったよ……うっすらと再び涙が瞼に溜まる。でも、これ以上見せるのはみっともないから軽く繋いでいない方の手で拭いた。

いつもと同じはずの道が楽しいと感じた。



「十六夜君、十六夜君、十六夜君、十六夜君、十六夜君……」
「ダーリン、ダーリン、ダーリン、ダーリン、ダーリン、ダーリン……」

壊れたレコードのように二人は彼を呼ぶ。火蓮ちゃんとアオイちゃんがそれぞれ慰めているが彼女達は直らない。

彼がパンダの時空攻撃によってどこかに消えてしまった。勿論、僕

たち全員が心配している。火蓮ちゃんとかアオイちゃんも慰めながら目尻に涙を浮かべている。大丈夫と言いつつも二人も不安がぬぐえない。

メルちゃんも色々調べてくれているけど、よく分からないようだ。全員が不安でいっぱいになっていると彼の家のインターホンが鳴る。皆、出る気力なんて無い。僕だってソファに座ってずっと頭を抱えているから。彼が居ないだけで自分たちはこんなにも可笑しくなってしまう。このまま、全員の絆もなくなってしまうと感じた。いつの間にか、彼が自分たちの中心だったから。

彼の大事さを再認識しているとインターホンが何度も鳴る、何度も何度も。あり得ない位、馬鹿みたいに……なんだかだんだんとイライラしてきた。

五月蠅いと叫びだしたい。でも、それは出来ない。自分だけが辛い訳じゃないから。僕は取りあえず玄関に行きドアを開ける。そこには……

「やあ、すまないね。少し上がったもいいかな？」
「貴方は……」

この間、彼と一緒に喫茶店に居た女の人。彼女はドシドシと部屋の中に上がってきた。拒むべきだったのだろうが拒めなかった。そんなことを直ぐに出来ない程、混乱と疲弊をしていた。

彼女はリビングに入る。火蓮ちゃんとアオイちゃんが彼女を見て何で彼女を家に上げたのかと僕に視線を向ける。

その視線は僅かに怒りと悲しみと八つ当たりだった。それが分かったのに僕は自然と怒りが湧く。僕だって辛いのに……

思わず、また叫びそうになる……だけど、そこで家にいきなり上

がった彼女は手を大きくパンツつと叩いた。全員の視線が彼女に釘付けになる。

「一回、落ち着こう」

「……落ち着けるわけない」

「……そうよ……何も知らない癖に……」

アオイちゃんと火蓮ちゃんが怒りの声を上げる。するとそんな反応を分かり切っていたのか彼女はスルーして話を続ける。

「色々、想定外の事に驚いているだろうけど……まあ、私も驚いているのだが……単刀直入に言おう……黒田十六夜、彼は生きているよ」
「……」
「……」
「……」
「……」

全員が彼女に視線を向ける。誰かがそう言ってくれるのを僕たちは待っていたから。僕たち同士だとただの傷の舐めあいになってしまふから。僕たち以外からそう言って欲しかったのだ。

でも、なぜ彼女がそれを知っているのか。嘘ではないのかと疑問が強くなる

「安心していい、嘘ではないさ。彼は鏡のような世界に飛ばされているだけだ」

「本当なのですか？ ダーリンは生きているのですか？」

「本当だとも。ただ……彼が居なくなってから既に五時間……少々、長いな……」

「何か貴方は知っているんですか？ はやく、はやく、十六夜君に会わせてくださいッ!!」

クロコちゃんとコハクちゃんからようやくくっきりとした言葉が出る。しかし、それは不安や焦りが強く出ている。今にもまた壊れそうだ。

二人を落ち着けるように彼女は話す

「ちよつと、待ってくれ。その前に君たちに分かりやすく現状を説明しよう。そもそも、彼が飛ばされた世界はことほとんど同じ世界で少し違う時間軸の世界なんだ。それでね、彼をこちらに戻す方法は二つある」

方法があると聞こえた瞬間に全員がどうしたらと聞きたくてたまらなかった。だけど、彼女はそれが分かっていたように話を聞けと手で制す。

「一つ、パンダに無理やり戻させる。これは君たちが既に倒しちやつたから無理だね。もう一つは自然と戻るのを待つだ」

「……自然とは具体的にどのくらいですか？」

コハクちゃんが冷静に聞いた。震えを抑えて。

「そうだね……本当ならもう戻ってきてもいいんだけど……何か、あちらの世界でもイレギュラーが起こっているんだろうね」

「イレギュラー……」

「元々、黒田十六夜と言う存在はこちらの世界のものだから、放つておいても自然と彼は戻ってくる。世界の修正力的な奴だね。ただ……そう言った概念を超えるものはいつの時代も愛や渴望だから……あちらの世界の何か大きなものが彼を縛つてると私は結論付けた」

彼女は自信満々にそう言った。何か根拠でもあるのかと思ひ、コハクちゃんが再び聞く

「何故、言い切れるのですか？」

「私は……占い師だからね。色々、分かるのさ」

「そうですか……信じてもいいんですね？」

「おうともさ。占いの結果彼は死んでいないと出ている」

「分かりました……」

疑いが僅かに残るけど一応僕たちは納得した。彼女が嘘を言っているようには見えなかったからだ。

そう、思っていたけどいつまでたつても彼は帰ってこなかった。

百二十四話 三十路

取りあえず、火蓮……さん？ のアパートの一室に上げてもらった。無駄な物は置いていないシンプルな部屋。

適当に座っててと言われたので席につく。俺が居ない世界……想像できないけど……それが現実なんだと思うと驚きやら色々感じる。彼女達はどうしているのか、悲しんでいるんじゃないか……取りあえず彼女に聞くしかない。と言う思いでここに来ている。

「夕食作るからそれまで待ってて」

「あ、はい」

彼女はショートヘアで大人な感じが凄く強くなっている。彼女は手際よくスラスラと料理を進めていく。俺が見てきた彼女とは違って、本当に料理が出来ると言った感じだ。

数十分ほどでいい匂いが漂って、その後すぐにテーブルの上には料理が並んだ。豚肉の生姜焼きやみそ汁、白米。一番うまい奴だ……

「食べたら色々話しましょう」

「分かりました。じゃあ、いただきます……」

彼女の料理は凄く美味しかった。味の安定感、ずっと作り込んできたと言う事が分かった。火蓮は俺の食べる姿をずっと見ている微笑んで、目尻に涙を少し浮かべていた。俺は沢山おかわりをしてしばらく食事を楽しんだ。その後、食器などを全て片付け、互いにソファに座り合った。彼女は中々話さなかった。それが数分続いて、彼女は一息ついて重々しく告げた……

「それじゃ、話すわね……十六夜は十四年前、一般人を庇って心臓を魔王に貫かれて死亡したわ……魔王の最後のあがきが……十六夜を……殺したのッ、誰も貴方を守れなかった……一瞬で私達は全部を失ったの」

「その、他の皆は……」

「……皆、バラバラになっちゃった……互いに互いを責めたりもしてさ、コハクとクロコは高校時代から不登校になって、アオイと萌黄は学校には来てたけど話さなくなったわ……」

「そうですか……」

全員がバラバラになったと言う事なんだと認識して、大きな喪失感を覚えた。そして、自分のせいだと感じると自分自身にも怒りが湧いてくる……

「十六夜のせいではないわよ？ 変に考えないでね？」

「あ、はい……」

「って言っても考えちゃうと思うけど……」

「そうかもしれないです……」

自信の感情や表情の変化をすぐに彼女は見抜いた。こんなことを話してしまったからと彼女が心配そうな表情を向ける。彼女に変な気遣いをさせるのは止めよう。気持ちを切り替えたつもりでいつもの感じに戻ろう。

「それで、その、年齢って……その、三十路を超えていらっしやるんですよね？」

「なによ？ おばさんに見える？」

「いえ、年齢より二回り位若々しくて綺麗だなんて！」

「あ、そう……ふふん、そうでしょ？ 両親にもそう言われてるからね！」

毎度の事だがしつかりと本心を伝える。彼女は少しビックリしたようだったが、直ぐに自信あふれる反応をする。

久しぶりに褒められるのが慣れていなかったように感じた……

「本当にきれいです！」

「ふふ、変わらないのね……そりゃ、そうよね……」

「火蓮先輩も変わらず綺麗です!」

「うん、凄く褒めてくれてありがとう。怒涛の褒めラツシユ十六夜らしいわ……でも、私は変わったわよ。髪型とか趣味とかもね」

「そんなあなたも素敵です!!」

「あらま……おばちゃんにそんなこと言ってくれるなんて……ッ、あれ?」

彼女の瞳から涙が取り止めもなくあふれ出す。

「おかしいなっ、こんな、年になつてっ、涙が止まらないなんて……」
思わず俺は彼女を抱きしめてしまった。彼女も強く強く俺を抱きしめる。

「——ごめんねッ、ごめんッ、守つてあげられなくてッ。十六夜ッ、なんで、なんで死んじやったのッ、幸せにするって言ったじゃないッ、」

彼女の十年の全てが、苦しみ、自身への怒り、俺への不満と愛情。それらがごちゃ混ぜになつて心からあふれ出た。

言っている事のバランスが不安定で、それは彼女の葛藤そのものだと思つた。

何を言つていいのか分からなくて、俺は……俺は彼女を黙つて抱き続けて頭を撫でるしかできなかった。



「ごほん、えっと、見苦しい所を見せたわね」

「いえ、そんなことないです」

「そう……えっと、もういい時間だしお風呂、湧いてるから入って?」

「あ、はい」

流石に泣き過ぎた。十年以上離れていた大切な人に会って、褒められたりしたらそりや嬉しくもなるけど。まさかあんなに馬鹿みたいに泣いてしまうとは……恥ずかしいから十六夜をとつとお風呂に入れてしましましょう。

十六夜がお風呂に行つたので一息つく。ああ、本当に恥ずかしい。頬が紅潮している。こんなに感情が高ぶったりするのは本当に久しぶりだ。

年齢だつて今現在凄く自分は気にしている。もう、おばちゃんだけで十六夜は高校生くらいだし……だけど、ちよつと女出したいし……

なんか……楽しいな……でも、十六夜は帰っちゃうのよね……

ここに居てと言つてしまえばどれだけ良い事だろう。でも、それは……彼に枷となつてしまう。だから、言わない。

嗚呼、なんだか……途端に寂しくなつて来たな……別れの時は直ぐに来てしまうと分かっている。だから、今を楽しまないと……

久しぶりに一緒にお風呂でも入ろうかしら？　そして、ちよつとからかつてやろうと私は決めた。



お風呂に入つてぼーっとこれからを考える。一体、俺に出来る事は何だろうか、何が出来るのだろうか。真剣に考えないといけない。

……いや、どうするべきなんだ？　全然思いつかない……あつちの世界の彼女達だつて放つておくわけには行かないから帰らないと言ふ選択肢はない。

どうするべきか……うーん、思いつかない……悪魔的な発想が……

すると、いきなりお風呂のドアが開く。

「背中、流してあげる……」

「ええ!？」

「なによ? いやなの?」

「いや、そんなわけないですけど……」

「じゃあ、いいじゃない」

火蓮がいきなりお風呂に突撃してきた。バスタオルを体に巻いているけどそれが逆に良い感じに見えてしまう。いつもの見ている彼女とは少し違って、慣れていないと言う理由もあるんだろうけど、反応に困る。

彼女は俺の後ろに来て、ボディタオルを泡立てる

「体洗った?」

「いえ……」

「じゃあ、洗ってあげるわ」

「ど、どうも……」

なんか、声も違う感じがする。大人な彼女。やべえ、緊張が止まらない……。

彼女は背中から腕、前、いろいろ洗ってくれる。緊張で俺は体が硬直状態。

「そんなに緊張しなくても……」

「いや、しますよ! 緊張!」

「へえー、私は十六夜ともう行くところまで行ったからそんなにだけど……向こうの私とは何処までしたの?」

「キスまで……」

「ふーん、そうなんだ」

彼女は何事も無いように下半身を洗おうと手を前に持ってくる。

「いやいやいやいや！ それはアウト!!」

「はあ、相変わらず変な所でチキンなのね……」

「すいません！ 変な所でチキンで！」

「変な所で潔いのも相変わらずね……まあ、いやらしいことをするわけじゃないんだし、いいじゃん」

「いや、こればかりは……」

「いいから、いいから……」

その後、滅茶苦茶争って結局、自分で洗った。彼女にはチキン、チキンと小馬鹿にされて、軽くデコピンも喰らった。うん、全部可愛い……



チキンの十六夜が隣で寝ている。ベッドで二人きりなのに手を出さない。そう言えば、十六夜も何だかんだ私達に中々手を出さなかったなと思いついた。ハーレムになって、暫くしても手は出さず、結局手を出したのは……いつだったかしら？

ああー、二人で旅館行ったときだったわね……結構、恥ずかしかった。声とか結構出しちゃったし……そこから十六夜もダムが崩壊したみたいに我慢できなくなって……これは考えるのはやめましょう。寝ている彼の頬を手で触る。懐かしい、いつまでも触っていたいと思つた。そして言うつもりなんてなかったのに思わず出してしまった。

「——ここに居てよ……」

おばあさんになってしまったのか、涙腺が脆くなっている。何度泣けばいいのよ、何度私を泣かせれば気が済むのよ……馬鹿……



「皆と連絡取れませんか？」

「そういうと思っただけであるわ。ただ、会えるのは萌黄だけね、他は知らないのよ」

「そうですか……でも速いですね！」

「十六夜には劣るわよ」

連絡先なんて残っていても殆ど変わってしまった。変わっていないのは萌黄だけだったから彼女とだけ連絡が取れた。

「さあ、行きましよう？」

「はい！」

萌黄と会うのは本当に久しぶり……どんな顔して会えばいいんだろう。



と言うわけで待ち合わせ場所に到着した。まあ、三十分ほど早い到着なんだけど……変に緊張してる自分が居る。隣ではキョロキョロと東西南北、見回す十六夜。なんか懐かしい。

「あ、居た！」

「え？」

十六夜が声を上げるからそちらの方向を向く。確かに彼女がそこに居た。黄色の髪。黄金の眼。髪が学生の時はショートだったけど少しだけ前より長くなっている。

彼女はこちらに気づくと信じられない物でも見るように目を見開く。十六夜は大きく手を振って、ダッシュで萌黄に近づく。私は遅れ

てあるいて萌黄に近づく。

「萌黄先輩!! あぐっ!!」

十六夜が萌黄に抱きしめられて変な声を上げる。

「十六夜っ、僕の十六夜だ……会いたかったッ」

「私のだけどね」

「感動の再会に水を差さないで欲しいな……」

「本当の事だもの……」

うう、何か気まずい……萌黄も少し気まずそうにするがそんなことはどうでもいいように十六夜を抱きしめる。公衆の視線が私達に注がれる。

「取りあえず、その辺にしておきなさい」

「嫌だよ。周りの視線なんて知るもんか」

「十六夜の顔が青くなってる」

「え? あ! ご、ごめん……強く抱き過ぎた」

「これくらい、寧ろいいです!」

十六夜が満面の笑みで自身の平気さをアピール。

「そう……えつと、なんで君が……」

「萌黄先輩、それは……実は……カクカクシカジカ」

「ええ!? そんなことが!? あり得るんだ……まあ、僕達魔装少女だったからそれくらいあり得るよね……」

十六夜が非常に分かりやすい説明を萌黄にする。萌黄は軽めにだがいっまでも抱きしめる。いや、公衆の視線……まあ、良いわ……

「それで、そのアオイ先輩とコハクさんとクロコさんの連絡先って

知ってますかね?」

「……アオイちゃんなら知ってるけど……すぐに他の女の子の名前だすのは感心しないな……むう」

「むう、はやめときなさい萌黄。もう……三十路なんだから」

「そういうの言わないでもらっていい!? 僕これでも結構若く見られるから!! 大学生くらいに見えるってよく言われるから!」

「ああ、はいはい……」

萌黄が怒りをあらわにするのでそれ以上の追求はやめておいた。気にしてるのね、年齢。

「はあ、アオイちゃんの連絡先だけど……ちよつと待って……」

彼女は携帯にカタカタと文字を打って連絡したようだ。

「はい、できた」

「ありがとうございます!」

「これくらいいいよ。それよりさ、連絡が帰ってくるまでちよつとこのデパート行かない?」

「はい! 行きます!」

「ああ、良い返事、懐かしい……」

「ちよつと待ってよ。私もデートしたいんだけど?」

「火蓮ちゃんはもうたくさん良い想いましたんでしょ? 僕に譲ってよ」

「無理」

互いにメンチを切ってしまう。何か、凄く久しぶりな感じがする。

「ああーその、二人共一緒に行きたいです!」

「この素直な感じ……ううう、懐かしいよお」

「そうね……懐かしいわ」

本当に懐かしいと私は思った。と言うわけで連絡が帰ってくるまで三人でデートをすることになる。



奇跡は起こるなんて思っていなかった。この十年間、毎日がつまらなかつた。

皆とは喧嘩別れするように別れてしまった。互いに彼が死んだのはお前のせいだと醜い争いをした。誰もが自分のせいだと認めたくなくて、でも悔しくて、悲しくて、心がぐちゃぐちゃになってバラバラになった。

彼が居ないだけで世界から色が消えた。ただ、食べて寝て働く生活。思い出して泣く日もあつた。

身長のことを好きだと真つすぐ言ってくれる人は死んだ。僕のことが好きだと真つすぐ言ってくれる人はもういない。

何度も後悔を繰り返した。そんなとき、火蓮ちゃんから連絡があつた。

会いたいと言われた。今更何だと思つたが僕も会いたいと思つていた、一人が辛くて仕方なかつたから。

久しぶりに他愛もない話でもしようかと思つていたら……そこには彼女と彼が居た。

理由なんてどうでもいい。彼が来てくれただけで、居るだけでそれでいい。火蓮ちゃんとちよつとだけ彼の取り合いをした。三十路だけけれども……

何年もあつていないのに彼が居るだけで自然とあの頃に戻つたよ
うな気がしたんだ。

それが嬉しかつた。起こるはずのない奇跡が起こつたんだ。

でも、それと同時に分かつてしまった。彼が帰つてしまう可能性

に。

それは火蓮ちゃんだつて分かっている。だから、少しでも想い出が欲しいんだ。でも、それは僕も同じ……

三十路にもなつて恥ずかしいけど……高校生の彼を取り合う……ことにした。彼女には負けたくないと言う嘗ての気持ちが湧いてきた。

三十路かあ……今だけ高校生になりたいと思つて仕方なかった……

百二十五話 今と未来

僕たちが彼とデートをして、数時間たった。そこでアオイちゃんからの連絡が入る。

「アオイちゃん……から返信来た」

「よし、早速行きましょう！」

「そうだね……」

デートが終わってしまった。あと、五時間くらいメールの返信遅れて欲しかった。まあ、仕方ないよね

「じゃあ、ついて来て……仕事は休んでくれたらいいから」

「はいー」

あんまり膨れ顔をしなくても痛々しいし、ここは大人顔でアオイちゃんの所に向かおう。彼と一緒に選んだ服を袋に沢山入れて手に下げる。袋の中を見て一瞬後悔した。若々しい服を見栄を張って沢山選んだから。どうしても三十路がネツクなんだよなあ……

◆◆
「クロツ、本当に居る……」

「実は……カクカクシカジカで」

「そうなんだ……抱き着いて良い？」

「はいー」

待ち合わせ場所につくと早速アオイちゃんが泣きながら彼に抱き着いた。彼女の姿はこの十年ほどできほど変わっていないように感じた。片眼が隠れて、スタイルは前より良くなっているようで彼にそれが押し付けられる。

「嬉しいよ。また会えて……」

「あ、ありがとうございます」

「理由はどうであれ、こんなことが起こるなんて……えつと……萌黄から聞いたんだけどクロはコハクとクロコにも会いたいんだよね？」

「はい」

「連絡先……二人の知ってるよ……？」

「じゃあ、連絡お願いします!!」

「うん……実はもうしてある」

「速い!!」

「クロには及ばない……二人の場所に案内するから……手、繋いでいこう?」

「是非繋ぎましょう」

恋人つなぎをするアオイちゃん。涙がわずかに目尻に浮かんでいる。彼女はそのまま昔を懐かしむように彼を感じて歩き出す。

僕と火蓮ちゃんはここは譲ろうとアイコンタクトをして後ろをただ歩くだけに徹した。

二人は歩きながら会話をする。その姿が何度も見た気がして微笑ましく思う。

「今、高校一年?」

「そうです……アオイ先輩は……」

「三十路」

「いやお若いですね」

「お世辞言ってもあーしがニヤニヤするだけだよ」

「じゃあ、もつと褒めます!」

「……変わらないね」

「アオイ先輩はちよつと変わりましたが、それも好きです!」

彼が変わっているのは当然。でも、自分たちは変わったと彼女は遠回しに言っている。けど、彼はそんな変わった自分達でも好きだと

言ってくれる人。三十路のアオイちゃんの頬に赤みがかかる。

誑しも良いところだと思っただが彼は正直者なだけだ。だから、彼女も純粹に嬉しくて頬を緩んでしまう。結局、コハクちゃんとクロコちゃんの居る場所に着くまでにアオイちゃんが赤面した回数が二ケタほどであった。



「十六夜君はいつになったら帰ってくるんですか？ 本当に帰ってくるんですか？」

「そうと云っているだろう……ちよつと待つてば……」

「そう貴方が言つてから既に丸一日たつてます!!」

「落ち着きたまえ……私の占いでは彼は死んではない」

「でも……」

銀堂コハクとはこんな情緒不安定なキャラではないんだが……。

それに他のキャラもこんなに異性に入れ込むことは設定ではない。

彼が歩んだ道、それがここまで深い物だったとはね……

「……あの、私達に出来る事は本当にないんですか？」

「かなり、無理やりになるが……無くはない」

銀堂コハクがしつこいと思う位私に聞いてくる。勘が働いたのかどうなのかは分からないがもう一つだけ彼女達に離していかない方法がある。パンダに戻させるか自然に戻るか。どちらかできしか出来ないと思っていたし、それ以外はする必要も無いと思っていたが……

占いで彼を占うと中々めんどくさい状況になっているようだ……

「五人の気持ちを一つにする……さすれば、星王の剣が君たちの元に

現れる……」

「はい？」

「っ……こういう事を言うのは苦手なんだ……そんな反応はしないでくれ」

そう言えば、一時期自分が特別な存在だとか勘違いしてた時があったな。変な言い回しをして嘗てを思い出してしまった。

「取りあえず私達の気持ちの一つにすればいいんですか？」

「そうだとも……五人で輪のように手を繋いで彼に会いたいと想ってみればもしかしたら……私に言えるのはここまでだね」

「やってみます、ありがとうございます」

「そうかい」

彼女達は五人で手を輪のように手を繋いで彼への想いを一つにする。これは私が描いたラスボスとの戦闘シーンに似ている。

ラストでの魔王との戦闘シーン。中間パワーアップアイテムを彼女たち全員の心を合わせることで合体させる。

それによつて、星王の剣が顕現するんだ。この剣は文字通り最強の剣で奇跡を起こすことが出来る。文字通りなんでも奇跡を起こせる。

ただ、心が一つになっているときだけだ。簡単なようで難しい事件。だからこそラストで一度だけ、超絶感動的なシーンとして描いたんだが……

「あ、なんか変な剣が出てきました」

光が五重に螺旋状に大きく膨らんでいく。夜空に星が輝くように神秘的な大きな光。輝きが増していく……私の描いた感動のシーンがこんな一般民家のリビングで再現されるなんてね

「それで彼に会いたいと思って適当に時空を切ってみるといい」

「十六夜君、貴方の所まで行きます。えい」

銀堂コハクが代表して剣を握って空間を切る。パツクリと時空が割れて彼へと奇跡の道が形成される。

さて、彼はどうするのか。私は五人が奇跡の道を走って行くのを見ながら彼女達が救われる未来を願った。



あーし達はコハクとクロコの実家に足を運んだ。クロと十四年ぶりに再会して心が躍った。本当ならバッテリーセンターとか、ボーリング場とか久しぶりに二人で行きたかったけど……仕方ない。

インターホンを鳴らすとドアが開いてコハクとクロコが彼の胸板に飛び込んだ。

「い、十六夜君ッ」

「ダーリンッ」

彼の名前を呼び、胸板にぐりぐりと頭を押し付ける。三十路なのに昔の雰囲気は素直に凄いなど感じる。

「二会えてうれしいッ」

胸が凄い大きくなっている。大体、Iカップ、三十路なのに凄い若いし高校時代から変わっていないくらい肌のハリと艶、目の下のクマが若干あるくらいで他に変な所はない。……そして、二人の勢いが凄い。このままクロは二人に喰われてしまうような勢いだ。

「さあ、十六夜君、中に入ってください！」

「そうなのです！」

二人はいつきに彼を家へと引き入れる。本当にあの時と変わっていない気がする……いや、もしかしたら……その通りなのかもしれない

い。彼が死んでしまってから彼女達の時間は止まってしまったのかも知れない。

噂だと、二人はずっと実家に引きこもっていると聞いた。

二人は子供のようにながれれたとことを喜ぶ。あーしも喜んだ。だけど、それと同時に別れの悲しさを考えた。二人も分かっているはずだけど気付いていないふりをしているはずだ。

……彼が帰ってしまうと言う事に



「ふふ、このクッキーとても美味しいんです。はい、あーんっ」

「あ、あーん」

「こっちのスイートポテトも美味しいですよ？　ダーリン？　はい、あーんなのですっ」

「あ、あーん」

未来のコハクとクロコに俺は挟まれていた。二人はさらにグラウンドなボディになっており、色気が前より数段凄い。それなのに見た目は若いまま。

そんな二人がビシバシと体を当ててきている。顔も凄く近い。それを膨れ顔で火蓮とアオイと萌黄が見ている。

「あ、あの一旦その落ち着いて……」

「嫌なのですッ！　また、また暗い場所に置いてけぼりはいやなのです……」

「……」

軽く落ち着かせるつもりだった。それがクロコとコハクの感情を大きく揺さぶってしまった事に気づいた。コハクは何も言わずに

ギョツと腕の力を強くした。クロコがいきなり声を荒げて、すぐに悲しみに支配される。

彼女達全員の悲しみが感じられた。痛いくらいに腕を彼女達は握る、瞳はハイライトが消えて光を求めているようだった。

俺はでも、帰らないといけない……そう、僅かに思ってしまった。それが直ぐに二人にもいや、彼女たち全員に伝わってしまった。

クロコがさらに腕の力を強くする。

「返さないので……これから、これから、また、楽しい日常が……」
「そ、それは……」

俺は言葉に詰まってしまった。言葉出てこない。この場の雰囲気
が重々しくなり、全員の顔色が暗くなる。

「皆だって、ダーリンを返したくないはずなのです……このままずっと一緒、一緒……」

「……っ」

「一緒に、これからも、ずっと、永遠に、いてほしいのです」

「……それは……」

「なんで、なんで、一緒に居てくれるって、幸せにしてくれるって約束したのです！　ダーリンが、約束したのです!!」

彼女の激昂が俺の感情を揺さぶる。クロコが一人で全ての感情と飛ばすがそれは全員の気持ちに代弁していると分かった。

俺がここに居れば彼女達は幸せ……

「貴方が消えてから、生きた心地がしなかったのです。ずっと、引きこもって、ずっと、貴方のことを思っていたのです……もういないと会えないと分かっていたのに、それでも……それはきつとクロコだけじゃない。皆も……そのはずなのです……ダーリンは、貴方は……こんな私達を置いて帰ってしまうのですか？」

「——ッ」

動けない。鎖で繋がれたように雁字搦めに俺はなつてしまった。言葉一つさえ発することが出来ない。

目のまえに五人が居る。全員が視線で俺に訴える。ここに居て欲しいと。

どう、すれば……



彼がいなくなったこの未来は私にとって何の意味もなかった。時間が止まったような日々。引きこもって無気力になって、もう、このまま居ないはずの彼を想って死んでしまうのだと思っていた。

でも、彼が現れた。奇跡だった。

この奇跡を再び日常にしたいと思った。私は今彼の腕を逃がさない様に掴んでいる。横では妹のクロゴが彼に感情を飛ばしている。

それは、きつと皆が想っている事。言い出さなかったこと。それを彼女は言ってくれている。

彼の性格を考えて、無理やり答えを一つに縛る問。それはきつと甘美なのだろう。これから彼がここに居てくれることは本当に幸せだ。そうなるなら私は何をしてもいい。

本当に幸せなんだろう……でも……彼には帰る場所がある……

帰りたい場所がある。

だから……

「十六夜君、私達を置いて元の世界に帰ってください……」

「「「ツ!!」「」」」

「貴方を待つて居る人が居るはずです……本来なら会えない貴方に会えただけでも私はツ、嬉しかったツ。貴方との思い出が再び蘇って、思い出しました、貴方の暖かさも優しさも何もかも……だから、私は、私達はそれだけで生きていきますツ、それだけで幸せです」

私は彼の腕から手を離した。涙をこらえて、でもこらえられなくて、滴り落ちる涙。嘘だ。全部嘘だ。幸せなんて嘘だ。でも、彼をそのまま引き留めるわけには行かない。彼から私は貰ってばかりだ。もう、十分貰った。全然足りないけど。彼もこつちに居たら絶対に心残りが残ってしまう。幸せになれない……

「——だから……さようなら。十六夜君」

「なんで？ 意味が分からないのですッ！ これから、これからののにッ」

「クロコ、十六夜君には帰らないといけない場所があるんです。それは分かっているはずですよ」

「でもッ!!」

「最後まで……良い女で終わりましたよ、ね？ クロコ……」
「ッ……」

その時、時空から裂け目が出る。そこには……私達が居た。彼女は未来の私達を見て驚く。

そして、彼に帰って来て欲しいと言う。

「行って！ 十六夜君！」

「ダーリン……皆を幸せにしてあげて欲しいのですっ……」

「クロ……ありがとう」

「十六夜、開き直って頑張りなさい」

「君に会えた日々、僕は幸せだったよ」

私達は彼に帰ってと背中を押す。

彼は瞳から滝のように涙を流して、鼻水を垂らしてゆっくり背を向ける。そのまま裂け目の方に歩いて行く。あの道にあの空間に入れば本当にさようならだ……

彼がそこに足を踏み入れる。その瞬間に私達は涙が比ではない位、

あふれ出す。

さようなら……十六夜君……

ありがとう……



これでいいのか……これで……俺の後ろには彼女達が居る。前にも彼女達が居る。俺は元の世界に帰らないといけない。だけど、こっちの皆も放っておけるわけがないじゃないか
!!!!!!

俺は帰り道に足を踏み入れて……戻った

後先なんて、考えない。これから、俺が幸せの未来を何として作る。約束したんだ、誓ったんだ、幸せにすると。

未来でも今でもそんなことは関係ない

「――未来だろうと関係ない!! 幸せにするって誓ったんだ!!」

彼女達五人を無理やり今の五人の手を引く。今の彼女達は驚き過ぎて何が何だか分かっていない。それは未来の彼女達も同じだ。そして、取りあえず今の彼女達と未来の彼女達を並べる。そして、土下座をした。頭を痛いくらい打ち付けて

「――全員、嫁になってください!!!!!!」

次の瞬間、物凄い大きな驚嘆の声が上がった。

でも、俺はこの道を選ぶと決めた。未来も今も両方幸せにすると言
う道を。